主要地方道成田松尾線Ⅴ

中　台　貝　塚
松　尾　東　雲　遺　跡
八　田　太　田　台　遺　跡

昭和62年3月

千　葉　県　土　木　部
財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線Ⅴ

中　台　貝　塚
松　尾　東　雲　遺　跡
八　田　太　田　台　遺　跡

昭和62年3月

千　葉　県　土　木　部
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

千葉県の北半分を占める下総台地は，豊かな自然環境に恵まれており，古来より人々の生活が営まれ，先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が知られています。

北総中央部から九十九里方面を，ほぼ南北に縦断する主要地方道成田松尾線事業地内についても，多くの遺跡が確認され，昭和53年度より千葉県教育庁文化課の指導のもとに発掘調査を実施してきました。その成果の一部は「主要地方道成田松尾線Ⅰ」から「同Ⅳ」までの計４冊として，既に発表されております。

今回，昭和54年度に調査を実施した横芝町中台貝塚，昭和59年度の松尾町松尾東雲（№０）遺跡，八田太田台（№１）遺跡についての成果がまとまり，本報告書として刊行する運びとなりました。

特に，八田太田台遺跡においては奈良・平安時代の集落が，斜面にテラス状に造営され注目されるところであります。また，中台貝塚でも，貝層にみられる魚骨の組成に特色がみられ，九十九里浜における漁撈活動を知る意味で興味深いものがあります。

この報告書が学術資料としてはもとより，教育資料や郷土の文化を知る資料として，大いに活用されることを願ってやみません。

最後に，調査から整理・刊行に至るまで多大なる御協力，御指導をいただいた千葉県土木部，山武土木事務所，千葉県教育庁文化課を始めとする関連諸機関に謝意を表するとともに，酷暑，厳寒の中，作業に携っていただいた調査補助員の方々にも併せてお礼を申し上げます。

昭和62年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　　山　本　孝　也

例　　言

1．本書は，千葉県土木部による主要地方道成田松尾線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に収載された遺跡は，横芝町中台貝塚，松尾町松尾東雲（No.0）遺跡，同八田太田台（No.1）遺跡である。

センターコードでは中台貝塚（408－003），松尾東雲遺跡（407－001），八田太田台遺跡（407－002）である。

3．発掘作業は中台貝塚が昭和54年度，松尾東雲遺跡・八田太田台遺跡が昭和59年度，整理作業は昭和54（中台貝塚の基礎整理のみ）・60・61年度に行なわれた。

4．調査は千葉県教育委員会の指導のもと，千葉県土木部との委託契約に基づき，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

5．発掘調査は中台貝塚が部長西野　元，班長杉山晋作の指導のもと，調査研究員折原　繁・萬崎博昭が行なった。松尾東雲遺跡・八田太田台遺跡については部長鈴木道之助，部長補佐根本　弘の指導のもと，前者は班長高橋賢一が，後者は班長高橋賢一・調査研究員柴田龍司・高橋博文が担当した。

6．整理作業の担当は以下のとおりである。

中台貝塚は主任調査研究員宮　重行・調査研究員伊藤智樹・横山　仁・田島　新が行なった。松尾東雲遺跡は高橋賢一が調査研究員海老原充の助力を得て行なった。八田太田台遺跡については小高春雄・柴田龍司を中心に田島　新の助力を得て行なった。

7．原稿の執筆担当は下記のとおりである。

宮　重行：II章2節，3節2・4，4節，IV章2節2－1・2・3，3節2

小高春雄：IV章2節3－1・2（遺物），3節3（遺物）

柴田龍司：IV章1節，2節1－2，3－1（遺構）3節1・3（遺構）

横山　仁：II章3節1

田島　新：II章3節－3，IV章2節1－1・3，2節2－3

海老原充：I章，III章

なお主任調査研究員小宮　孟には中台貝塚の自然遺物の分析・原稿を依頼した。また石器類の石質鑑定は高橋賢一と主任調査研究員沢野　弘が行なった。

8．本書の編集は宮　重行・柴田龍司が共同で行なった。

9．方位は中台貝塚では原則として磁北を用い，松尾東雲遺跡・八田太田台遺跡では座標北を使用した

また中台貝塚では原則的に水糸高を42,000mで統一している。なお例外については別に表示した。

10. 中台貝塚では便宜上調査時に命名した遺構番号を，本書では遺構種別毎にふり替えて記載した。新旧番号の関係については第3表に示している。八田太田台遺跡では024号址と026号址とを交換，049・050号址を第1・2礫群，020・030・035・038号址を欠番とした以外は旧番号を踏襲している。

11. 発掘調査から本書の刊行に至るまで，下記の諸機関・諸氏の御協力を頂いた。ここに感謝の意を表します。

千葉県土木部道路建設課，山武土木事務所，千葉県教育委員会文化課，横芝町教育委員会，松尾町教育委員会，金子博英氏，新田浩三氏。

目　　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
第Ⅱ章　中台貝塚……5
　第1節　調査の方法と経過……5
　第2節　層序……7
　第3節　遺構・遺物……11
　　1．遺構とその出土遺物……11
　　2．グリッド出土の土器……104
　　3．石器・石製品……144
　　4．土偶・土製品……174
　　5．自然遺物……187
　第4節　小括……228
第Ⅲ章　松尾東雲遺跡……229
　第1節　調査の概要……229
　第2節　層序……229
第Ⅳ章　八田太田台遺跡……233
　第1節　調査の方法と経過……233
　第2節　遺構・遺物……234
　　第1項　旧石器時代……234
　　1．礫……234
　　2．石器……234
　　3．グリッド出土の石器……248
　　第2項　縄文時代……250
　　1．グリッド出土の土器……250
　　2．グリッド出土の土製品……258
　　3．グリッド出土の石器……258
　　第3項　古墳時代・歴史時代……262
　　1．遺構とその遺物……262
　　2．グリッド出土の遺物……345

第３節　まとめ……353
第１項　旧石器時代……353
第２項　縄文時代……353
第３項　古墳時代・歴史時代……354
第Ⅴ章　結語……361

挿図目次

第１図　周辺遺跡地形図……2

中台貝塚

第２図　中台貝塚周辺地形図……6
第３図　調査区……7
第４図　標準土層……7
第５図　遺構配置図……9
第６図　１号住居址実測図……11
第７図　１号住居址出土土器実測図……12
第８図　１号住居址出土土器拓影図（１）……13
第９図　１号住居址出土土器拓影図（２）……14
第10図　１～４号炉跡，38号土坑実測図……16
第11図　５～７号炉跡実測図……18
第12図　２・３号炉跡出土土器拓影図……19
第13図　１・２・３・５・６・７号埋甕炉跡実測図……20
第14図　１・２号埋甕炉跡出土土器実測図……23
第15図　３・４号埋甕炉跡出土土器実測図……24
第16図　５・６号埋甕炉跡出土土器実測図……25
第17図　７号埋甕炉跡出土土器実測図……26
第18図　１～15号土坑実測図……28
第19図　16～31号土坑実測図……32
第20図　32～37・39～44号土坑実測図……35
第21図　45～55号土坑実測図……37
第22図　56～69号土坑実測図……40
第23図　70～82号土坑実測図……43
第24図　４号埋甕炉跡，83～92号土坑実測図……45
第25図　93～100号土坑実測図……48
第26図　101～109号土坑実測図……51
第27図　土坑出土土器実測図（１）……56
第28図　土坑出土土器実測図（２）……57
第29図　土坑出土土器実測図（３）……58

第30図　土坑出土土器実測図（４）……59
第31図　土坑出土土器実測図（５）……60
第32図　土坑出土土器拓影図（１）……62
第33図　土坑出土土器拓影図（２）……63
第34図　土坑出土土器拓影図（３）……65
第35図　土坑出土土器拓影図（４）……67
第36図　土坑出土土器拓影図（５）……69
第37図　土坑出土土器拓影図（６）……71
第38図　土坑出土土器拓影図（７）……73
第39図　土坑出土土器拓影図（８）……75
第40図　土坑出土土器拓影図（９）……77
第41図　土坑出土土器拓影図（10）……80
第42図　土坑出土土器拓影図（11）……81
第43図　土坑出土土器拓影図（12）……83
第44図　土坑出土土器拓影図（13）……84
第45図　土坑出土土器拓影図（14）……86
第46図　土坑出土土器拓影図（15）……87
第47図　土坑出土土器拓影図（16）……89
第48図　土坑出土土器拓影図（17）……91
第49図　土坑出土土器拓影図（18）……92
第50図　土坑出土土器拓影図（19）……93
第51図　時期別遺構配置図（１）……97
第52図　時期別遺構配置図（２）……99
第53図　グリッド出土土器実測図（１）……105
第54図　グリッド出土土器実測図（２）……106
第55図　グリッド出土土器実測図（３）……107
第56図　グリッド出土土器拓影図（１）……108
第57図　グリッド出土土器拓影図（２）……109
第58図　グリッド出土土器拓影図（３）……111
第59図　グリッド出土土器拓影図（４）……112
第60図　グリッド出土土器拓影図（５）……114
第61図　グリッド出土土器拓影図（６）……116
第62図　グリッド出土土器拓影図（７）……117

第63図　グリッド出土土器拓影図（８）……119
第64図　グリッド出土土器拓影図（９）……120
第65図　グリッド出土土器拓影図（10）……122
第66図　グリッド出土土器拓影図（11）……123
第67図　グリッド出土土器拓影図（12）……125
第68図　グリッド出土土器拓影図（13）……127
第69図　グリッド出土土器拓影図（14）……129
第70図　グリッド出土土器拓影図（15）……131
第71図　グリッド出土土器拓影図（16）……132
第72図　グリッド出土土器実測図（４）……134
第73図　グリッド出土土器実測図（５）……136
第74図　グリッド出土土器実測図（６）……138
第75図　グリッド出土土器実測図（７）……140
第76図　旧石器時代石器実測図……145
第77図　縄文時代石器実測図（１）……147
第78図　縄文時代石器実測図（２）……149
第79図　縄文時代石器実測図（３）……151
第80図　縄文時代石器実測図（４）……153
第81図　縄文時代石器実測図（５）……155
第82図　縄文時代石器実測図（６）……157
第83図　縄文時代石器実測図（７）……160
第84図　縄文時代石器実測図（８）……161
第85図　縄文時代石器実測図（９）……162
第86図　縄文時代石器実測図（10）……163
第87図　縄文時代石器実測図（11）……165
第88図　縄文時代石器実測図（12）……166
第89図　縄文時代石器実測図（13）……168
第90図　土偶実測図（１）……175
第91図　土偶実測図（２）……176
第92図　土製品実測図……178
第93図　土製円板実測図……180
第94図　土器片錘，板状土製品実測図……181
第95図　魚類遺骸計測部位……188

第96図　コラムサンプル出土のチョウセンハマグリ殻長分布……206
第97図　サメ目遊離歯……207
第98図　タナゴ亜科咽頭骨長計測値分布……209
第99図　同定未了の真骨類資料……213
第100図　中台貝塚周辺と貝層分布図……216
第101図　九十九里浜北部の地形区分と主要縄文遺跡分布……220
第102図　107号土坑サンプル出土の主要魚類の最小個体数と推定漁期（A）ならびに計測結果（B～E）……224

松尾東雲遺跡

第103図　松尾東雲遺跡周辺地形図……230
第104図　調査区……231
第105図　土層図……231

八田太田台遺跡

第106図　調査区地形測量・旧石器時代グリッド配置図……235
第107図　八田太田台遺跡遺構分布図……237
第108図　第１礫群平面・断面出土分布図……238
第109図　第１礫群出土石器（１）……240
第110図　第１礫群出土石器（２）……241
第111図　第１礫群出土石器（３）……242
第112図　第１礫群出土石器（４）……243
第113図　第１礫群出土石器（５）……244
第114図　第１礫群出土石器（６）……245
第115図　第１礫群出土石器（７）……246
第116図　第２礫群平面出土分布図……249
第117図　グリッド出土縄文土器（１）……251
第118図　グリッド出土縄文土器（２）……252
第119図　グリッド出土縄文土器（３）……253
第120図　グリッド出土縄文土器（４）……254
第121図　グリッド出土縄文土器（５）……256
第122図　グリッド出土縄文土器（６）……257
第123図　グリッド出土土製品……258
第124図　グリッド出土旧石器時代及び縄文時代石器……259
第125図　グリッド出土縄文時代石器……260

第126図　001号址実測図……263
第127図　001号址カマド実測図……264
第128図　001号址遺物実測図……265
第129図　002号址実測図……266
第130図　002号址カマド実測図……267
第131図　002号址遺物実測図……267
第132図　003号址実測図……268
第133図　003号址カマド実測図……269
第134図　003号址遺物実測図……270
第135図　004号址実測図……271
第136図　004号址カマド実測図……272
第137図　004号址遺物実測図……272
第138図　005号址実測図……273
第139図　005号址カマド実測図……273
第140図　006号址実測図……275
第141図　006号址カマド実測図……276
第142図　006号址遺物実測図……276
第143図　008号址実測図……277
第144図　008号址カマド実測図……278
第145図　008号址遺物実測図……278
第146図　009号址実測図……280
第147図　009号址カマド実測図……281
第148図　009号址遺物実測図……281
第149図　010号址実測図……282
第150図　010号址遺物実測図……283
第151図　011号址実測図……284
第152図　011号址カマド実測図……285
第153図　011号址遺物実測図……285
第154図　012号址実測図……287
第155図　012号址カマド実測図……288
第156図　012号址遺物実測図……288
第157図　013号址実測図……289
第158図　013号址遺物実測図……289

第159図　014号址実測図……291
第160図　014号址カマド実測図……292
第161図　014号址遺物実測図……293
第162図　015号址実測図……294
第163図　015号址カマド実測図……295
第164図　015号址遺物実測図……296
第165図　016号址実測図……298
第166図　016号址遺物実測図……299
第167図　017号址実測図……300
第168図　018号址実測図……301
第169図　018号址カマド実測図……302
第170図　018号址遺物実測図……303
第171図　019号址実測図……305
第172図　019号址カマド実測図……306
第173図(a)　019号址遺物実測図……306
第173図(b)　021号址実測図……307
第174図　021号址カマド実測図……308
第175図　021号址遺物実測図……309
第176図　022号址実測図……310
第177図　022号址カマド実測図……311
第178図　022号址遺物実測図……312
第179図　023・024号址実測図……313
第180図　023号址遺物実測図……315
第181図　024号址カマド実測図……316
第182図　024号址遺物実測図……317
第183図　025号址実測図……318
第184図　025号址カマド実測図……319
第185図　025号址遺物実測図……319
第186図　026号址実測図……321
第187図　026号址遺物実測図……321
第188図　027号址実測図……323
第189図　027号址カマド実測図……324
第190図　027号址遺物実測図……324

第191図　028号址実測図…… 325
第192図　028号址カマド実測図…… 326
第193図　028号址遺物実測図…… 326
第194図　029号址実測図…… 327
第195図　029号址遺物実測図…… 328
第196図　031号址実測図…… 329
第197図　031号址カマド実測図…… 330
第198図　031号址遺物実測図…… 331
第199図　032号址実測図…… 332
第200図　032号址遺物実測図…… 332
第201図　033号址実測図…… 333
第202図　033号址遺物実測図…… 334
第203図　034号址実測図…… 335
第204図　034号址カマド実測図…… 336
第205図　034号址遺物実測図…… 336
第206図　037号址実測図…… 337
第207図　037号址カマド実測図…… 338
第208図　037号址遺物実測図…… 338
第209図　039号址実測図…… 339
第210図　039号址カマド実測図…… 340
第211図　039号址遺物実測図…… 340
第212図　047号址実測図…… 341
第213図　048号址実測図…… 342
第214図　007・036・040・041・046・051号址実測図 …… 343
第215図　051号址遺物実測図 …… 344
第216図　第２テラス出土遺物実測図（１） …… 346
第217図　第２テラス出土遺物実測図（２） …… 348
第218図　第２テラス・グリッド出土遺物実測図 …… 349
第219図　グリッド出土遺物実測図（１） …… 351
第220図　グリッド出土遺物実測図（２） …… 352
第221図　時期別住居跡分布図 …… 355

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧…… 3
第２表　土坑一覧…… 52
第３表　新旧番号対照…… 94
第４表　土坑の開口径と深さの関係…… 101
第５表　磨痕・敲打痕を有する石器の属性…… 159
第６表　旧石器時代石器計測表…… 169
第７表　縄文時代石器計測表…… 169
第８表　縄文時代石器出土量一覧…… 172
第９表　土偶・土製品出土地点…… 184
第10表　土製円板計測表…… 185
第11表　土器片錘計測表…… 186
第12表　中台貝塚産出動物一覧…… 188
第13表　95号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果…… 190
第14表　95号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果…… 191
第15表　105号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果 …… 192
第16表　105号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果 …… 193
第17表　107号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果 …… 195
第18表　107号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果 …… 197
第19表　109号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果 …… 200
第20表　109号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果 …… 201
第21表　チョウセンハマグリ左殻殻長計測結果（左殻）…… 205
第22表　107号土坑出土マイワシ第１・第２脊椎椎体幅計測結果 …… 208
第23表　カタクチイワシ第１脊椎椎体長計測結果…… 208
第24表　タナゴ亜科咽頭骨長計測結果…… 209
第25表　107号土坑出土ギンブナ咽頭骨長計測結果 …… 210
第26表　ウナギ主上顎骨長計測結果…… 211
第27表　マハゼ属前上顎骨関節突起高計測結果…… 212
第28表　遺構別産出魚貝類の最小個体数分布…… 217
第29表　生態別魚貝類最小個体数分布…… 218
第30表　旧石器時代石器計測表…… 247

第31表　グリッド出土旧石器時代及び縄文時代石器計測表 ……249
第32表　001号址出土土器……262
第33表　002号址出土土器……267
第34表　003号址出土土器……270
第35表　004号址出土土器……272
第36表　006号址出土土器……276
第37表　008号址出土土器……278
第38表　009号址出土土器……281
第39表　010号址出土土器……283
第40表　011号址出土土器……286
第41表　012号址出土土器……287
第42表　013号址出土土器……290
第43表　014号址出土土器……292
第44表　015号址出土土器……296
第45表　016号址出土土器……298
第46表　018号址出土土器……304
第47表　019号址出土土器……306
第48表　021号址出土土器……309
第49表　022号址出土土器……311
第50表　023号址出土土器……314
第51表　024号址出土土器……318
第52表　025号址出土土器……320
第53表　026号址出土土器……322
第54表　027号址出土土器……322
第55表　028号址出土土器……327
第56表　029号址出土土器……328
第57表　031号址出土土器……331
第58表　032号址出土土器……332
第59表　033号址出土土器……335
第60表　037号址出土土器……338
第61表　第２テラス(1)出土土器 ……347
第62表　第２テラス(2)出土土器 ……348
第63表　Ｂ－３グリッド出土土器 ……350
第64表　Ｃ－５グリッド出土土器 ……350
第65表　Ｃ－６グリッド出土土器 ……350
第66表　Ｃ－７グリッド出土土器 ……352
第67表　須恵器タイプ別分類表 ……359

図版目次

中台貝塚

図版 1 遺跡全景

図版 2 遺跡近景（1）遺跡近景（2）

図版 3 遺構群（A2区西半部，南から），遺構群（A1・A2区東半部，南から）

図版 4 遺構群（A2・A3区東半部，南から），調査風景（A2・A3区，北から）

図版 5 1号住居跡全景，1号住居跡出土状況

図版 6 2号炉跡，3号炉跡，38号土坑，6号炉跡，7号炉跡，1号埋甕炉跡，2号埋甕炉跡，3号埋甕炉跡，4号埋甕炉跡

図版 7 5号埋甕炉跡，6号埋甕炉跡，7号埋甕炉跡，2号土坑，3号土坑，4号土坑，5号土坑，7～11号土坑

図版 8 12号土坑，13号土坑，15号土坑，18号土坑，19号土坑，20～26号土坑，27号土坑，28号土坑

図版 9 29号土坑，30～31号土坑，32号土坑，33・43土坑，34～35号土坑，36～37号土坑，39号土坑，41～42号土坑

図版 10 45号土坑，48～49・63号土坑，51～52号土坑，53号土坑，54号土坑，56～58号土坑，59号土坑，60～62・64号土坑

図版 11 67号土坑，68～69号土坑，70号土坑，71号土坑，72号土坑，74号土坑，75号土坑，76号土坑

図版 12 77号土坑，78号土坑，79号土坑，80～81号土坑，4号埋甕炉跡・83号土坑，84号土坑，85号土坑，86号土坑

図版 13 87号土坑，89～91号土坑，92号土坑，95～96号土坑，97号土坑，98号土坑，99～100号土坑，101号土坑

図版 14 102号土坑，103号土坑，105号土坑，106号土坑，107号～108号土坑，108号土坑，109号土坑

図版 15 95号土坑内貝層，105号土坑内貝層，109号土坑内貝層，95号土坑内獣骨出土状況，1号住居跡出土土器

図版 16 埋甕炉跡出土土器

図版 17 土坑内出土土器（1）

図版 18 土坑内出土土器（2）

図版 19 土坑内出土土器（3），土坑内遺物出土状況

図版 20 グリッド出土土器（1）

図版 21 グリッド出土土器（2）

図版 22 グリッド出土土器（3）

図版 23 グリッド出土土器（4）

図版 24 グリッド出土土器（5）

図版 25 グリッド出土土器（6）

図版 26 グリッド出土土器（7）

図版 27 グリッド出土土器（8）

図版 28 グリッド出土土器（9），ドングリの圧痕のある土器

図版 29 グリッド出土土器（10）

図版 30 グリッド出土土器（11）

図版 31 グリッド出土土器（12）

図版 32　グリッド出土土器（13）
図版 33　グリッド出土土器（14）
図版 34　グリッド出土土器（15）
図版 35　グリッド出土土器（16）
図版 36　グリッド出土土器（17）
図版 37　グリッド出土土器（18）
図版 38　グリッド出土土器（19）
図版 39　グリッド出土土器（20）
図版 40　旧石器時代の石器（1）
図版 41　旧石器時代の石器（2）縄文時代石器（1）
図版 42　縄文時代石器（2）
図版 43　縄文時代石器（3）
図版 44　縄文時代石器（4）
図版 45　縄文時代石器（5）
図版 46　縄文時代石器（6）
図版 47　縄文時代石器（7）
図版 48　縄文時代石器（8）
図版 49　縄文時代石器（9）
図版 50　土偶（1）
図版 51　土偶（2）
図版 52　土製品
図版 53　土製円版
図版 54　土器片錘・板状土製品
図版 55　出土獣骨
図版 56　出土貝類

松尾東雲遺跡

図版 57　松尾東雲・八田太田台遺跡航空写真
図版 58　遺跡全景（1），遺跡全景（2）

八田太田台遺跡

図版 59　調査前全景（北から），検出遺構全景（北から）
図版 60　調査前全景（南から），検出遺構全景（南から）
図版 61　遺跡遠景，遺跡南東部支谷
図版 62　旧石器時代礫群出土状況
図版 63　旧石器時代礫群出土状況
図版 64　礫群出土石器（1）
図版 65　礫群出土石器（2）
図版 66　礫群出土石器（3）
図版 67　礫群出土石器（4），グリッド出土土製品
図版 68　グリッド出土縄文土器（1）
図版 69　グリッド出土縄文土器（2）
図版 70　グリッド出土縄文土器（3）
図版 71　グリッド出土縄文土器（4）
図版 72　グリッド出土石器
図版 73　第1テラス全景（北から）
図版 74　第1テラス南ピット群，第1テラス全景（南から）
図版 75　001号址，002号址
図版 76　001号址カマド，001号址，002号址カマド，002号址
図版 77　003号址，004号址
図版 78　003号址カマド，004号址カマド，005号址カマド，005号址
図版 79　006，012号址，008号址
図版 80　006号址カマド，008号址カマド，012号址カマド
図版 81　009号址，010，011，017号址
図版 82　010号址カマド，011号址カマド，013号址
図版 83　014号址，015号址
図版 84　014号址遺物出土状況，014号址カマド，015号址カマド
図版 85　016，021号址，018，019号址

図版 86　018号址カマド，019号址カマド，021号址カマド
図版 87　022，023，024，026，037号址，024号址カマド，026号址
図版 88　022，023，037号址，023，024，026，037号址
図版 89　025，031号址，027号址
図版 90　025号址カマド，027号址カマド，031号址カマド
図版 91　008，028，029号址
図版 92　032号址
図版 93　028号址カマド，029号址カマド，032号址遺物出土状況
図版 94　033号址，034号址カマド，035号址遺物出土状況
図版 95　023，024，037号址，039号址
図版 96　037号址カマド，039号址カマド，第2テラス調査風景
図版 97　047号址，048号址
図版 98　007号址，040号址，041号址，046号址，051号址
図版 99　遺構出土遺物（001号址）
図版100　遺構出土遺物(003，004，006，008号址)
図版101　遺構出土遺物(009，011，012，013号址)
図版102　遺構出土遺物（014号址）
図版103　遺構出土遺物(015，016，018，019号址)
図版104　遺構出土遺物（021，022号址）
図版105　遺構出土遺物(023，026，027号址)
図版106　遺構出土遺物（028，029，032，033，034，039号址）
図版107　グリッド出土遺物(Ｂ２，Ｃ６，Ｄ６，Ｄ７グリッド)
図版108　第２テラス出土遺物
図版109　遺構出土鉄器

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

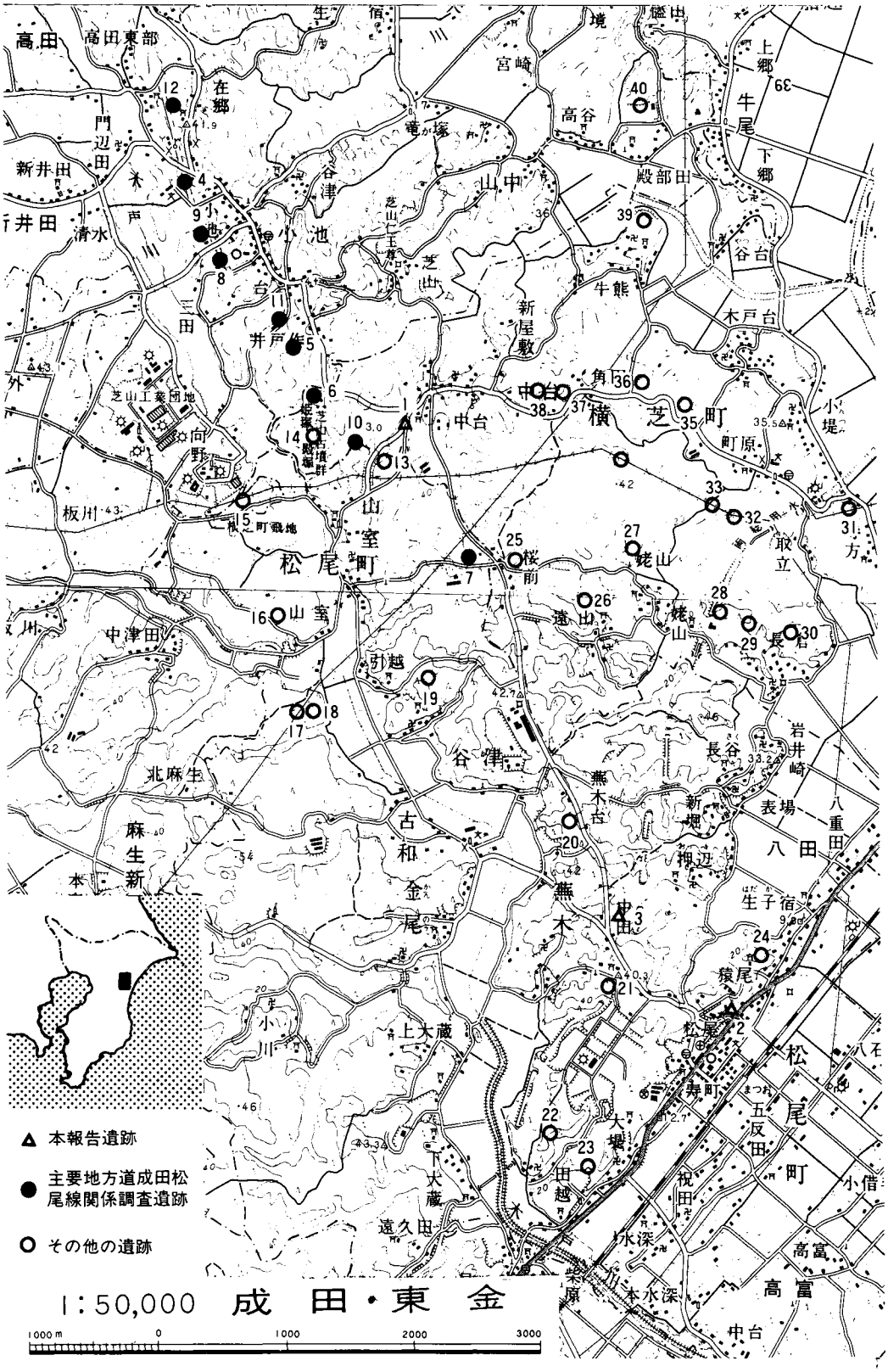
遺跡の地理的・歴史的環境

千葉県は，日本のほぼ中央に位置し，列島が東北から西南へ大きく屈曲する所に大きく突き出た房総半島の全域を占めている。その周囲は水によって囲まれ，東から南にかけて太平洋，西を東京湾が，更にはその付け根を利根川，江戸川の大河川が流れる。その地形は大きく南から北へ，丘陵，台地，低地と続き，一見して平坦地の占める割合の大きいことがわかる。[(1)]県北地域を大きく占める緩やかに北西に傾斜する下総台地は，主に江戸川，利根川，東京湾，そして九十九里平野の四方へ流れる中小河川の分水界となっている。そしてこれらの中小河川は，洪積世の成田層と呼ばれる砂層の上に降り積もった粘性の関東ローム層によって形成された台地を，樹枝状に複雑に開析し，谷底平野を展開させている。[(2)]

今回報告する八田太田台遺跡，中台貝塚及び松尾東雲遺跡は，太平洋に流下する栗山川，木戸川の両河川に挟まれた尾根状の台地上及びその縁辺に位置する。以下，各遺跡の地形，立地の説明をしたい。

八田太田台遺跡は，松尾町八田字太田台に所在する。南西には水量のやや乏しい，浅い開析谷を形成しつつ太平洋へ注ぐ木戸川の沖積地を，南東は，はるか九十九里平野を望む標高37～43mの舌状台地の端部に位置する。中台貝塚は，横芝町中台に所在する。北東を流れる栗山川の支流である高谷川は，その豊富な湧水により，台地深く小支谷を幾つも発達させているが，その一つである芝山町東風山付近で分岐した小支谷の奥部に北面する台地上に位置する。標高は，約42mで，現水田面との比高差は約30m程である。一方，松尾東雲遺跡は，松尾町松尾字東雲に所在する。下総台地の縁辺部で，九十九里平野との接点に当る標高約15mの成田層の段丘上に位置する。

これらの遺跡の周辺は，台地から低地に至るまで，各時代によって様々な遺跡の分布状況を示すが，縄文時代から中近世に至るまで，木戸川と高谷川（栗山川）に面した台地上には多くの遺跡が存在する。縄文時代には，慶応大学の調査で広く知られる山武姥山貝塚（中～晩期），牛熊貝塚（後～晩期）鴻巣貝塚（中～後期）木戸台貝塚（中～後期）[(3)]や，猿尾貝塚（後～晩期）といった著名な貝塚を始めとして栗山川流域南部に，特に遺跡が濃密に分布しており，[(4)]中台貝塚もその一角を形成している。古墳時代においては，多量の形象埴輪の出土で有名な殿塚，姫塚の２大古墳を有する芝山古墳群を筆頭に古墳群が多く存在する。[(5)]一方，古墳時代から奈良，平安時代にかけての集落址も，近年の調査及び五郎谷遺跡，[(6)]向野遺跡（松尾町）東長山野Ⅲ遺跡，振子上遺跡（横芝町）[(7)]及び小池元高田遺跡，[(8)]小池麻生遺跡[(9)]（芝山町）等の報告によりその内容が序々に明らかになりつつある。八田太田台遺跡もその一端である。又，周辺域を見ても，



本報告遺跡
主要地方道成田松尾線関係調査遺跡
その他の遺跡
1:50,000 成田・東金
1000 m
0
1000
2000
3000
高田
高田東部
在郷
門辺田
新井田
清水
小池
芝山
芝山工業団地
向野
板川
山室
松尾町
中津田
引越
谷津
北麻生
麻生新
古和金尾
小川
上大蔵
下大蔵
遠久田
宮崎
竜塚
高谷
山中
殿部田
牛尾
下郷
谷台
木戸台
牛熊
新屋敷
中台
横芝町
町原
小堤
取立
方
桜前
姥山
遠山
長谷
岩井崎
表場
八重田
八田
新堀
押辺
生子宿
猿尾
松尾
寿町
五反田
大堤
田越
祝田
水深
本水深
高富
中台

第1図　周辺遺跡地形図

第１表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	備考（調査成果等）	No.	遺跡名	備考（調査成果等）
1	中台貝塚	本書。	22	田越台	古墳，奈良，平安時代。散布地。
2	松尾東雲	本書。	23	大堤古墳群	前方後円墳２基。円墳４基。
3	八田太田台	本書。	24	猿尾貝塚	縄文時代（後期～晩期）。
4	小池麻生	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡32軒。	25	上仁羅台	縄文土器散布地（堀之内，称名寺Ⅰ，姥山Ⅰ）。
5	小池向台	古墳，奈良時代。住居跡７軒。	26	山武姥山貝塚	縄文時代（中期～晩期）。阿玉台，加曽利Ｅ，加曽利Ｂ，堀之内，安行，姥山，千網。
6	鯉ヶ窪	縄文，古墳時代。古墳３基。			
7	遠山天の作	先土器，縄文時代。	27	大山	縄文土器散布地。
8	小池新林	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡11軒。	28	長倉宮脇	古墳，奈良，平安時代。住居跡。土坑。
9	小池地蔵	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡23軒。溝１条。	29	長倉	縄文，古墳時代。散布地（加曽利Ｂ，掘之内Ⅰ，鬼高，真間，国分）。
10	中台柿谷	古墳時代。			
11	小池元高田	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡11軒，掘立柱建物跡１棟。	30	荒久台	奈良，平安時代。散布地。
12	宮門	縄文，古墳，奈良，平安時代。住居跡35軒，土坑，炉穴。	31	振子上	古墳時代。住居跡４軒，土壙６基。
13	五郎谷	古墳，奈良，平安時代。住居跡１軒。	32	中洞	縄文，奈良，平安時代。土壙２期。
14	芝山古墳群	前方後円墳（殿塚，姫塚）２基。円墳12基，形象埴輪	33	野中台	奈良，平安時代。散布地。
15	向野	古墳，奈良，平安時代。散布地。（鬼高，国分）	34	東山中野Ⅲ	縄文，平安時代。住居跡５軒，土壙４基。
16	岡見	縄文土器散布地。	35	木戸台第１貝塚	縄文時代（中期～後期）。阿玉台，加曽利Ｅ，掘之内。
17	大塚	古墳，奈良，平安時代。散布地。（鬼高，国分，須恵器）	36	木戸台第２貝塚	縄文時代（中期～後期）。阿玉台，加曽利Ｅ，掘之内。
18	大塚古墳群	円墳17基。	37	角田貝塚	縄文時代（中期～後期）。加曽利Ｅ，掘之内。
19	谷津	古墳，奈良，平安時代。散布地。	38	鴻巣貝塚	縄文時代（中期～後期）。阿玉台，加曽利Ｅ，加曽利Ｂ，称名寺。
20	蕪木台	古墳，奈良，平安時代。散布地。	39	牛熊貝塚	縄文時代（後期～晩期）。加曽利Ｂ，安行Ⅰ，Ⅱ，姥山Ⅱ，千網。
21	蕪木古墳群	円墳３基。方形塚１基。	40	殿部田古墳群	前方後円墳４基。円墳13基。円筒・形象埴輪。

木戸川東岸を始めに，散布地が一様に認められ，集落が台地上に広範囲に展開していたことが予想される[10]。

註

(1) 『角川日本地名大辞典12　千葉県』 角川書店　1984年

(2) 『千葉県　地学のガイド』 コロナ社　1974年

(3) 昭和29年　慶応義塾大学考古学研究室調査

(4) 『松尾町の歴史』上巻　松尾町教育委員会　1984年

(5) 滝口宏「千葉県芝山古墳調査速報」『古代』第19・20号　早稲田大学考古学会　1956年

(6) 『東京電力送電鉄塔建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 芝山線遺跡調査会　1981年

(7) 『東京電力送電線鉄塔建設事業地内　八日市場線発掘調査報告書』 山武考古学研究所　1983年

(8) 奥田正彦他『主要地方道　成田松尾線III』 (財)千葉県文化財センター　1986年

(9) 萬崎博昭他『主要地方道　成田松尾線Ⅰ』 (財)千葉県文化財センター　1983年

(10) (4)文献

第II章　中台貝塚

第１節　調査の方法と経過

中台貝塚は山武郡横芝町中台字宮台に所在する。北側には栗山川の支流，高谷川の支流に面しており，さらに南側には木戸川より連なる浅い小支谷が南北に貫入している，標高40～42mの平坦部な台地上にある。周辺には５ケ所の地点貝塚があり，縄文中期末加曽利ＥIV式から後期後半の堀之内式にかけての遺物の散布がみられる。最も遺物の集中がみられるのは神社裏の貝層部分である。

調査対象となったのは，成田松尾線が中台貝塚の大宮神社前で，横芝方向からの道路と十字形交差し，南側に折れて松尾方面へ向う部分で，新たにバイパス道路に通じる進入路の用地内1,700㎡であり，調査範囲の地番は1,362－１他である。

調査区は南北に細長い撥形をした延長400mにわたる範囲で，東半部は県道として使用されているので調査はまず第１次分として拡張部について行い，その部分を付け替え道路とし，次いで残りの県道～舗装部分について第２次分を実施した。また南北にやや細長くのびる発掘区を道路中心杭№５を結ぶ延長線上を基本軸として，発掘区域を収めるようグリッドを設定した。グリッドは20m×20mの方形を大グリッドとし，その中に２m×２mの小グリッドを設定した。大グリッドは第３図に示したように調査区北東から南西にＡ１～Ａ４，加えてＢ１・Ｂ２まで発掘区全域を収めた形で配し，更にその中を，北西隅から東へ00～09とし，北西隅より南へ00～90として00～99まで100個に分割し，それを小グリッドとしている。

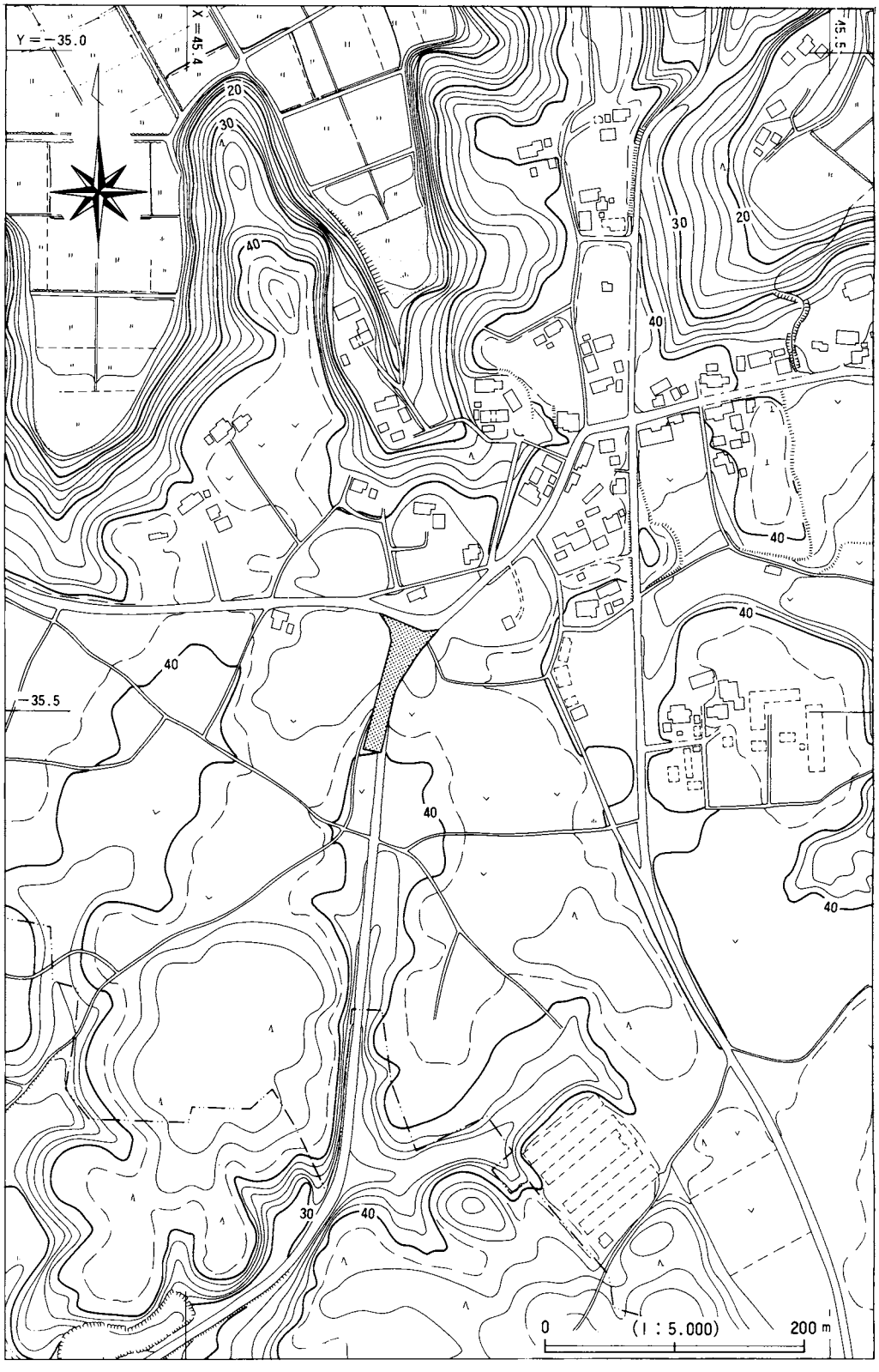
第１次調査は昭和54年11月６日～同年12月17日に行われた。

まず，11月６日調査区西半部について，南北に横切る幅２mのトレンチ２本を遺構検出面であるソフトローム面まで掘り下げ，遺構確認を行った。中旬頃には，土坑を主体に，かなり遺構のあることが判明した。そこで全面にわたり重機で表土除去を行い，同時に遺跡内東側を走る県道部の舗装除去も実施した。表土下の第II層は縄文遺物の包含層であるので，手掘りで除去を行い，検出面の第III層（ソフトローム）まで掘り下げた。12月上旬に全体の遺構検出を終了した。

遺構の調査は，検出作業の先に終了した北側地区より順次実施し，12月17日には第１次調査分を完了した。また縄文時代の調査に併行し，11月末より適宜，先土器時代の試掘を実施した。

第２次調査は翌55年１月19日～同年２月16日まで東側の旧道舗道部分について行った。

第２次では舗装を除去し遺構検出後ただちに精査を開始し，２月上旬にほぼ遺構の調査を終了した。先土器の試掘は，適宜行っていたが２月からは，Ａ３・Ａ４グリッドの先土器石器出土地点を中心に拡張調査を行った。２月中旬に作業は収束に向い，同月20日全体測量・器材等



第２図　中台貝塚周辺地形図

の撤収をし，現地作業を終了した。

第2節　層　序

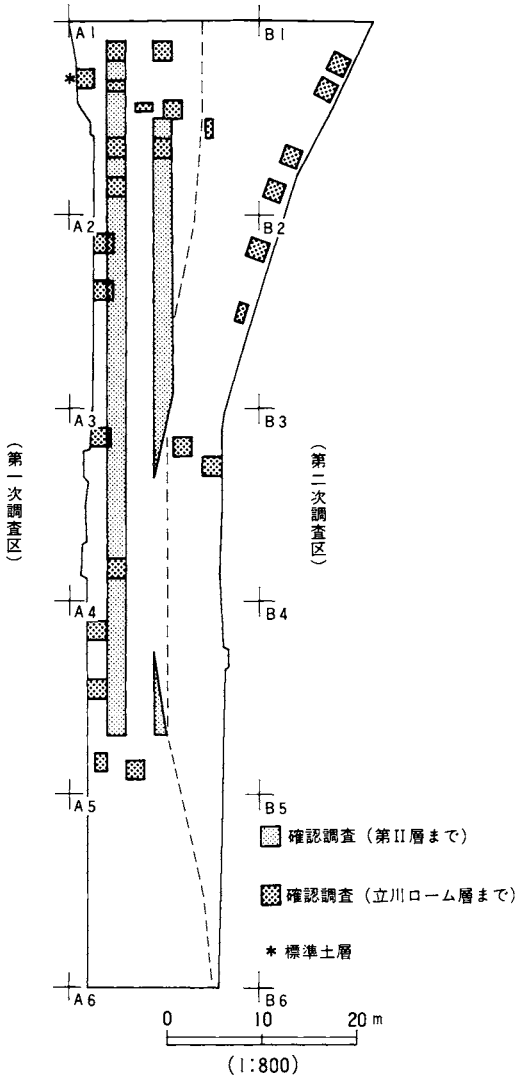
中台貝塚における標準的な土層堆積状況は以下のとおりである。(第4図)

まず，最上層の第Ⅰ層は耕作土である。20cm～35cmほどの厚さ，漆黒色を呈する。

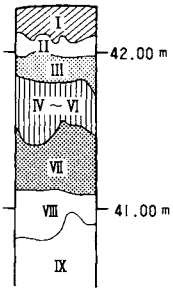
直下の第Ⅱ層は茶褐色となり，15cm～20cmの厚みをもつ，縄文時代遺物包含層である。少量のローム粒子，炭化粒を含む，チョコレート色の強い土層である。傾斜地になるＡ４区では，下部のソフトローム層と混じり合い判別し難くなっている。

第Ⅲ層はソフトローム層で明茶褐色を呈している。20cmほどの厚さを有する。

第Ⅳ層以下第Ⅷ層まではハードローム（立川ローム硬質部）である。第Ⅳ～Ⅵ層は厚さ20cm



第3図　調査区



第4図　標準土層

ほど。ＡＴ（丹沢パミス）を多量に含む層で乾くと白っぽくなり，クラックを生ずる。当遺跡では分層が不可能であり一括してとらえた。

第Ⅶ層は第２黒色帯に相当するもので20cmほどの厚みがある。ただしあまり明確には分離できない。

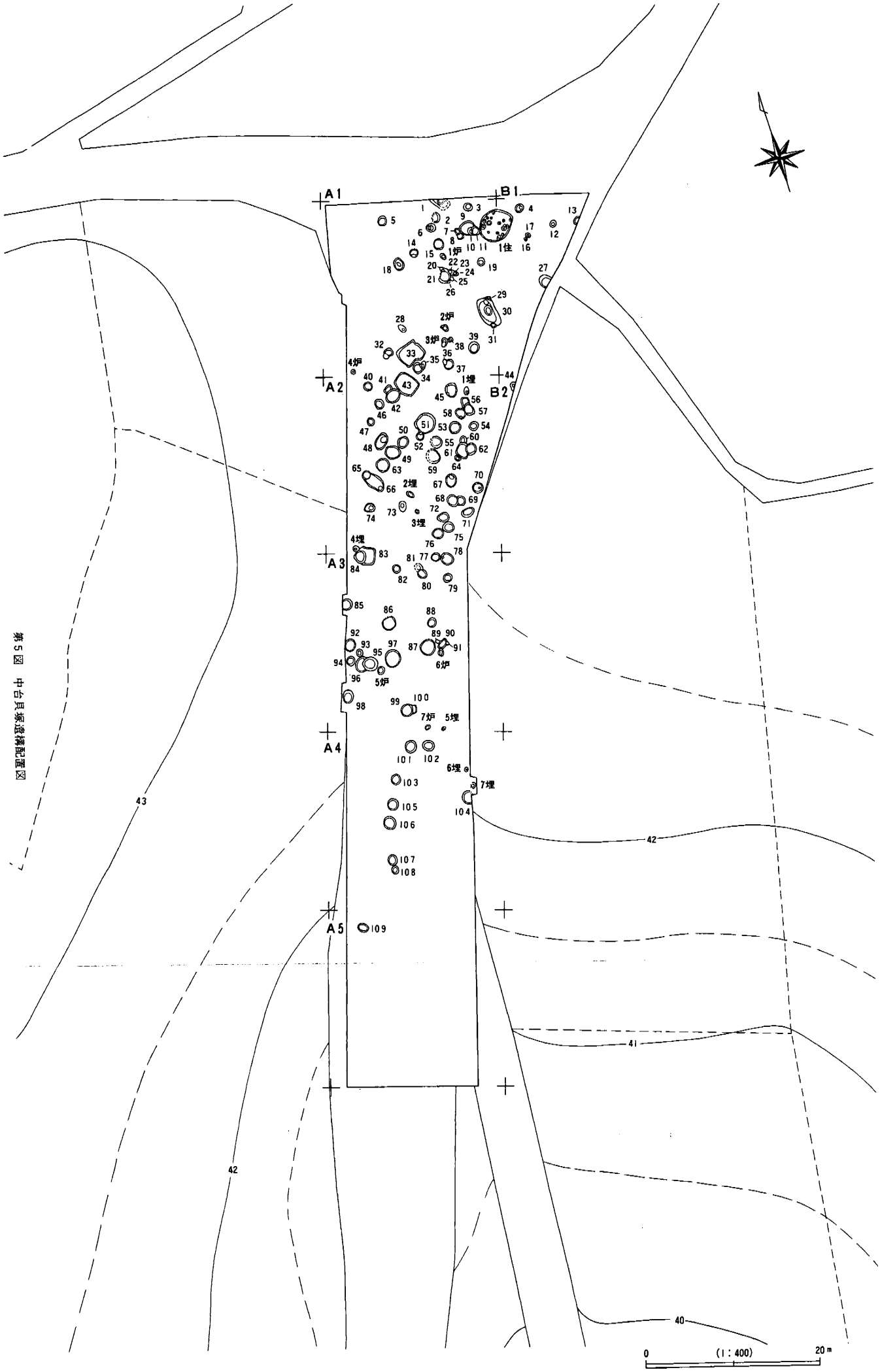
立川ロームの最下層は第Ⅷ層で20cm強の厚さをもつ，非常にしまり硬質でスコリヤを含む，第Ⅷ層までの深さは地表から120cm～140cmである。

第Ⅷ層の下位は，茶褐色を呈する武蔵野ローム層であり，これを第Ⅸ層とした。やや軟質で粗粒状である。

参考文献

大原正義他 『佐倉市星谷津遺跡』 千葉県文化財センター 1978年

田村 隆，橋本勝雄 『房総考古学ライブラリー１ 先土器時代』 千葉県文化財センター 1984年



第5図　中台貝塚遺構配置図

第３節　遺構・遺物

１．遺構とその出土遺物

本貝塚の調査において検出した遺構は，住居跡１軒，炉跡７基，埋甕炉跡７基，土坑109基である(第５図)。

住居跡

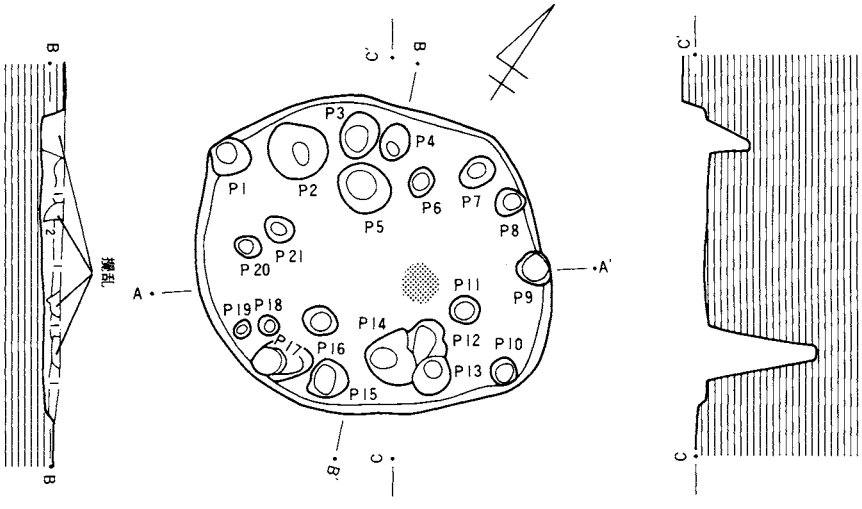
１号住居跡（第６図，図版５）

遺構

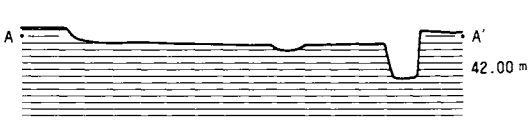
本住居跡は調査区の北側Ａ１－09・19・29，Ｂ１－00・10・20の各グリッドにまたがり，主軸方向をＮ－60°－Ｅに指す。平面形は長径4.12m，短径3.24mを測る楕円形で，確認面からの深さは16～26cmである。覆土は暗褐色土を主とし，自然堆積である。

柱穴は壁沿いに21ケ所P_1～P_{21}を検出する。規模は直径20～61cm，深さ14cm～117cmを測る。P_2とP_{14}の深さは112cm，117cmと極めて深く主柱穴を呈するものと思われる。

炉は本住居跡の中央よりやや東側に位置し，径42cm，深さ６cmの円形で，断面が鍋底状を呈する地床炉である。



１．暗褐色土
　ローム粒を含む。
２．暗茶褐色土
　焼土粒、ローム粒を
　多量に含む。



第６図　１号住居跡実測図　　0　(1：80)　4 m

床面直上から出土した鉢形土器(第７図１)から判断すれば，使用時期は加曽利Ｂ１式期である。

出土遺物

土器　(第７図１・２，第８・９図１～32，図版15)

本住居跡から出土した土器は加曽利Ｂ式土器が主体であり，少量の安行Ⅰ・Ⅱ式土器も見られた。しかし，後者の土器が本住居跡に混入していたのは後世の攪乱によるものであろう。

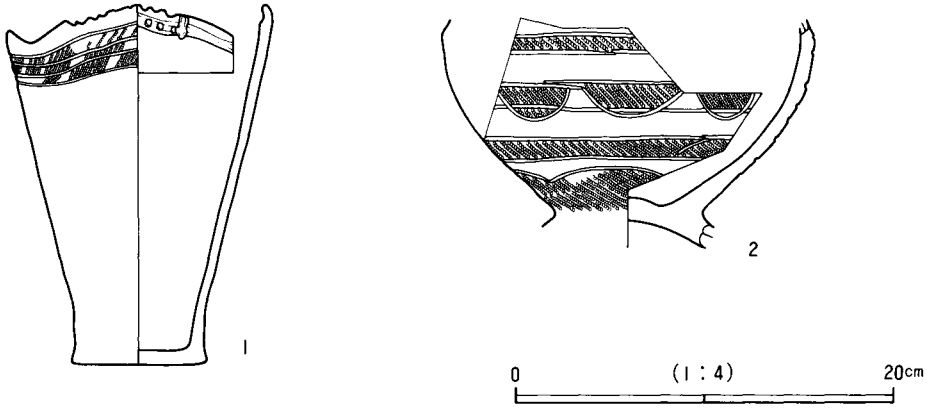
第７図１は口径13.5cm，底径7.0cm，器高18.4cmを測り，傾きが底部から口縁に向って徐々に外反する精製の鉢形土器である。３単位の波状口縁を呈し，波頂部には刻み目が施されている。口縁部文様は，外面が４条の平行沈線文内に単節ＬＲの斜縄文が施されている。内面は口唇に沿って１条の沈線がめぐる。また，３単位の波頂部のところには沈線の中に円形刺突文が７～８個施され，それを小さな隆帯で区画している。胴部は無文で，黒光りしている。底部は平底である。加曽利Ｂ１式に比定される。完形である。

第７図２は最大径19.7cm，現存高11.8cmを測り，高台を有する精製の椀形土器である。文様は２条の平行沈線区画による充塡縄文(単節ＲＬ)が２列，平行沈線と円孤文をミックスし，その円孤文の中に単節ＲＬの斜縄文が施されている文様が１列，下部には円孤の沈線区画による充塡縄文（単節ＲＬ）がある。口縁部および高台部が破損している。加曽利Ｂ式に比定される。遺存度1/2。

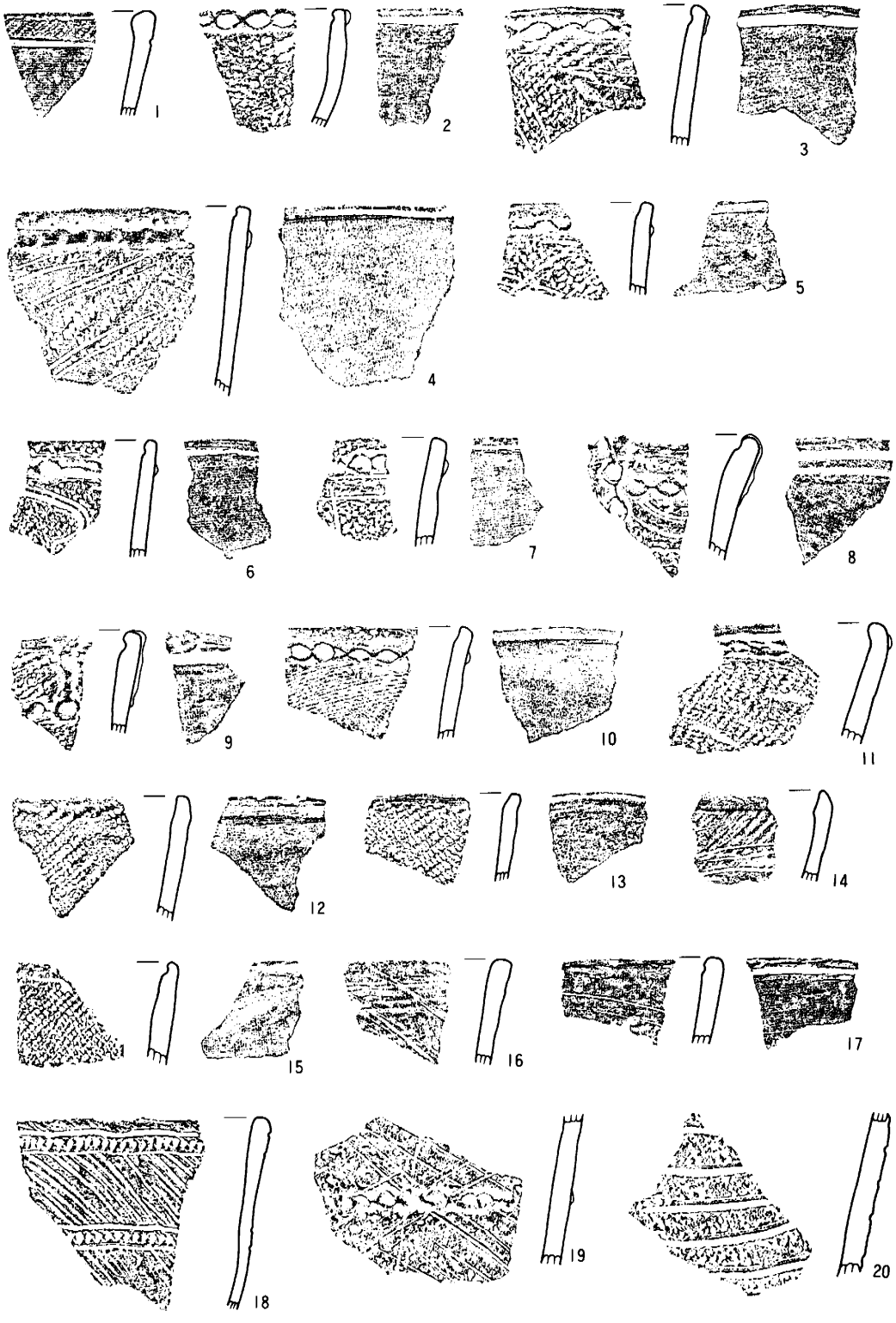
第８・９図１～32は破片のものである。

１は口縁部文様が２条の平行沈線内に単節ＬＲの斜縄文を呈する口縁部片である。

２～10は口縁部に指頭圧痕を有する隆帯文が貼付されている口縁部片である。胴部以下の文様は粗雑な縄文もしくは，縄文上に斜行ないし曲線の沈線文が施されている。10は櫛目文が格子状に施されている。すべての内面には口唇に沿って１条ないし２条の沈線がめぐらされている。

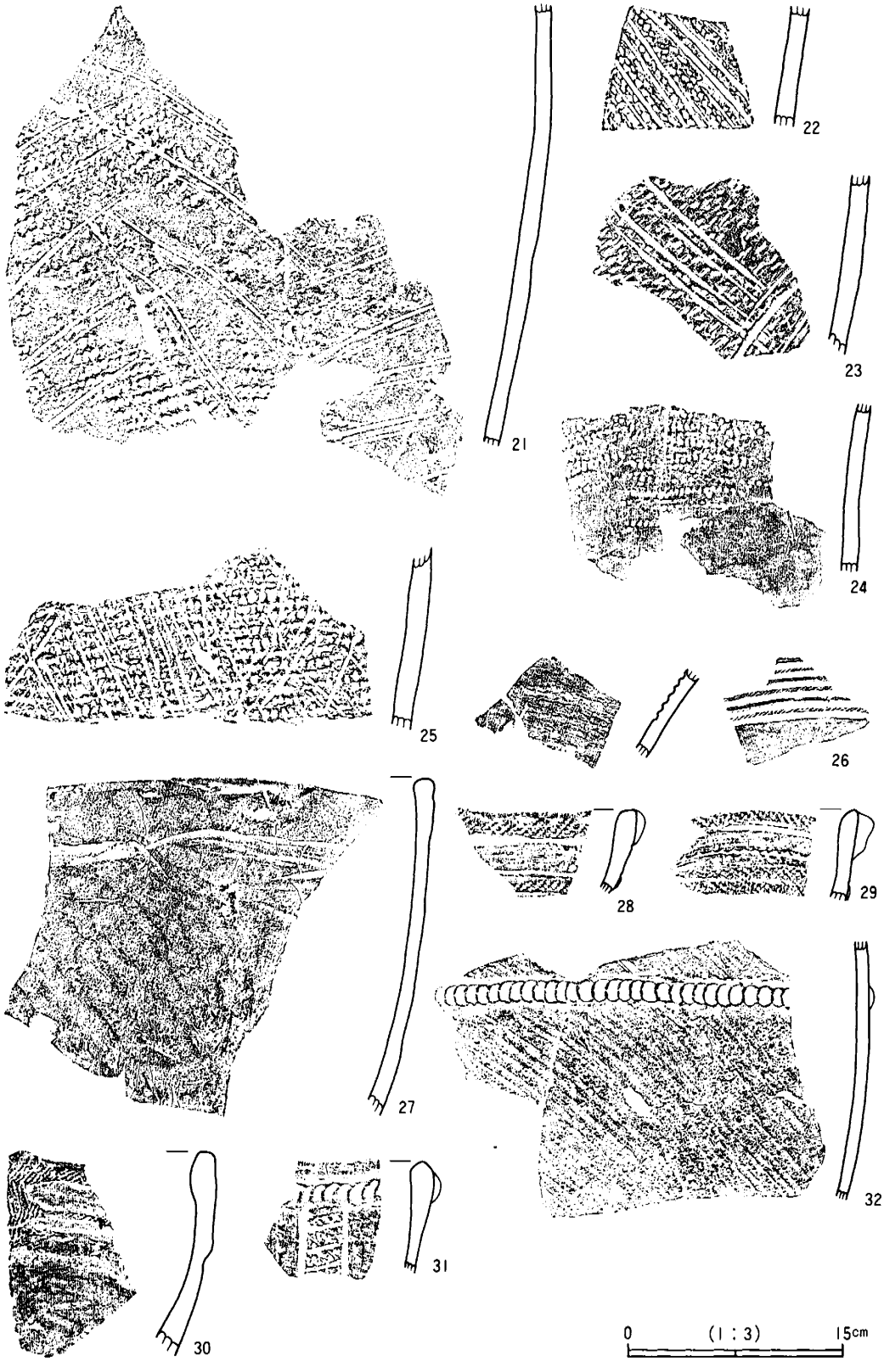


第７図　１号住居跡出土土器実測図



第８図　１号住居跡出土土器拓影図(1)

0　(1：3)　10cm



第９図　１号住居跡出土土器拓影図(2)

11は２と同様の文様が施されているが，内面には沈線文を施さない。

12～13・15は全面に斜縄文が施されている口縁部片である。内面は浅い沈線が口唇に沿ってめぐらされている。

14は口唇が鋭角で，斜縄文上に斜行の沈線が施文されている口縁部片である。

16～17は斜行の沈線文が施されている口縁部片である。17の内面には口唇に沿って１条の沈線がめぐらされている。

18は斜行の沈線文を地文と１，２条の平行沈線の中に三角形の連続刺突文を有する文様が２条施されている口縁部片である。

19～24は粗雑な縄文上に斜行もしくは格子状に沈線が施されている胴部片である。19には指頭圧痕を有する隆帯文が１本貼り付けられている。

25は粗雑な縄文だけが施されている胴部片である。

26は内面に数状の平行沈線文が施され，その中に刻み目を有する浅鉢の胴部片である。

27は無文の口縁部片である。

28～30は隆帯上に縄文が施されて，帯縄文を呈している口縁部片である。28～29は，その帯縄文に沿って沈線が施されている。

31は口唇に沿って指頭圧痕を有する薄い隆帯が貼付されている口縁部片である。口縁部文様は梯子状の沈線文が施されている。口唇部は厚みがあり，胴部へ行くに従って薄手になる。

32はヘラ描きによる斜行の沈線文上に指頭圧痕を有する薄い隆帯が貼付されている胴部片である。

１～17・19～27は加曽利Ｂ１・Ｂ２式に，18・28～30は安行Ｉ式に，31～32は安行II式にそれぞれ比定される。

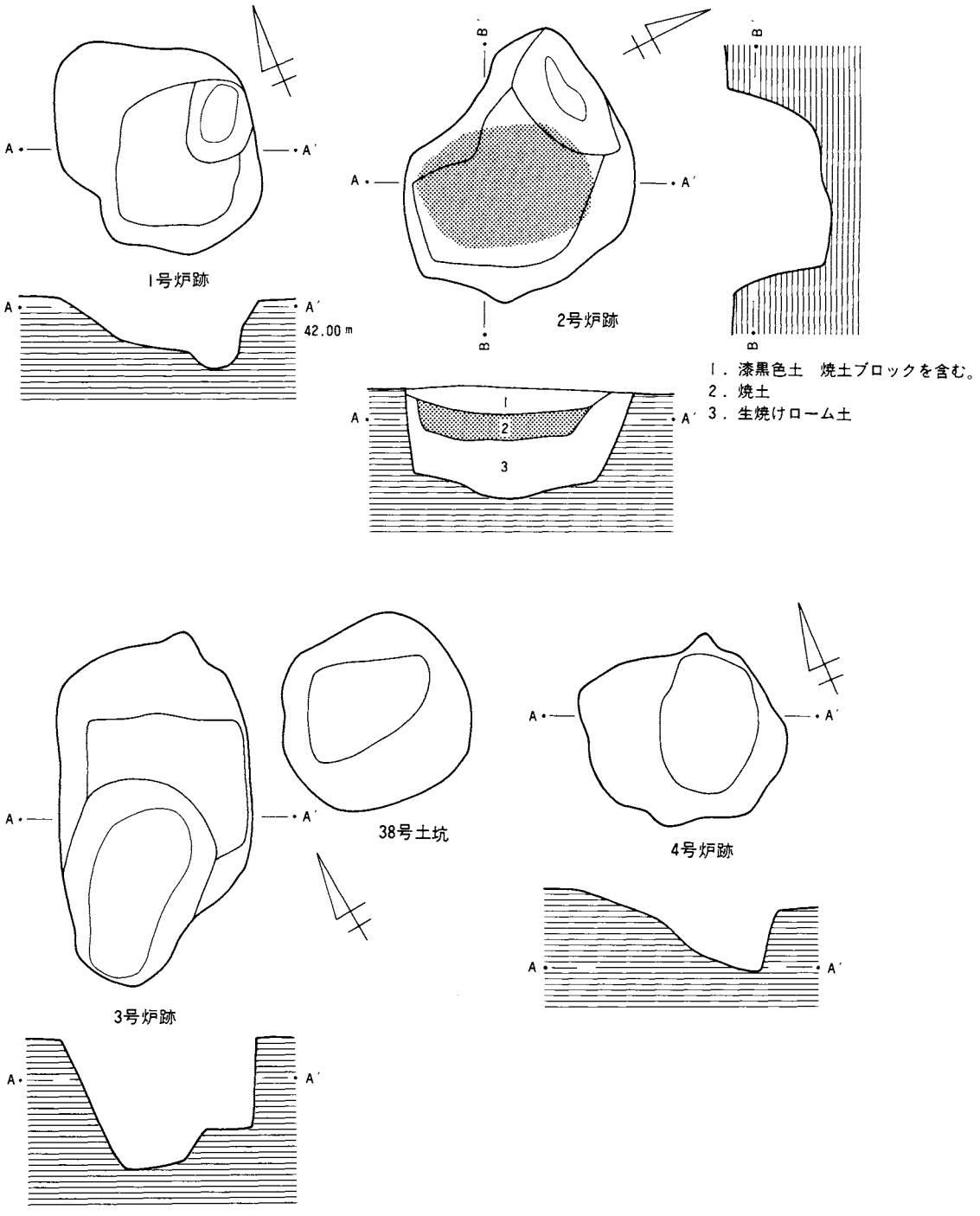
炉　跡

１号炉跡（第10図）

本炉跡はＡ１－36･37の各グリッドにまたがり，１号住居跡の西4.6mに位置する。開口部が0.74×0.55m，底部が0.46×0.43mの不整円形を呈する。しかし，北壁は若干掘りすぎの感がある。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは17cmである。断面形は鍋底状を呈し，東壁寄りの底面には26×20cm，深さ６cmの小ピットが付随する。覆土は焼土が充満しており，底部においては加熱による生焼けのローム土となっている。遺物は出土しなかったが縄文時代のものであろう。

２号炉跡（第10図，図版６）

本炉跡はＡ１－76･77の各グリッドにまたがり，１号炉跡の南7.4mに位置する。開口部が0.74×0.59m，底部が0.62×0.43mの不整楕円形を呈する。北壁寄りに小ピットがあるが，これは



第10図　1～4号炉跡，38号土坑実測図　0　(1：20)　1m

後世に掘られたものである。茶褐色土層面で確認され，その面からの深さは16cmである。断面形は鍋底状を呈する。覆土は２層に区分できる。下層に焼土が堆積し，下部には加熱により，厚さ17cmの生焼けのローム土となっている。覆土中から出土した土器片から判断すれば，加曽利Ｂ式期以降のものである。

３号炉跡（第10図，図版６）

本炉跡はＡ１－76・77・86・87の各グリッドにまたがり，２号炉跡の南0.8mに位置する。開口部が0.61×0.40m，底部が0.53×0.24mの不整楕円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは45cmである。断面形はタライ状を呈し，南西壁寄りの底面には61×43cm，深さ27cmの楕円形のピットがある。そのため底面は段になっている。覆土は薄く焼土を帯びる。流れ込みによる堆積である。覆土中から出土した土器片から判断すれば，加曽利Ｂ式期以降のものである。

４号炉跡（第10図）

本炉跡はＡ１－91グリッド内に位置し，３号炉跡から西へ10.2m行ったところにある。開口部が0.61×0.50m，底部が0.40×0.30mの不整円形を呈する。茶褐色土層面で確認され，その面からの深さは26cmである。断面形は「く」の字状を呈し，西壁はなだらかで東壁において急激に立ちあがる。覆土は２層に区分でき，下層において焼土塊が堆積している。遺物は出土しなかったが，縄文時代のものであろう。

５号炉跡（第11図）

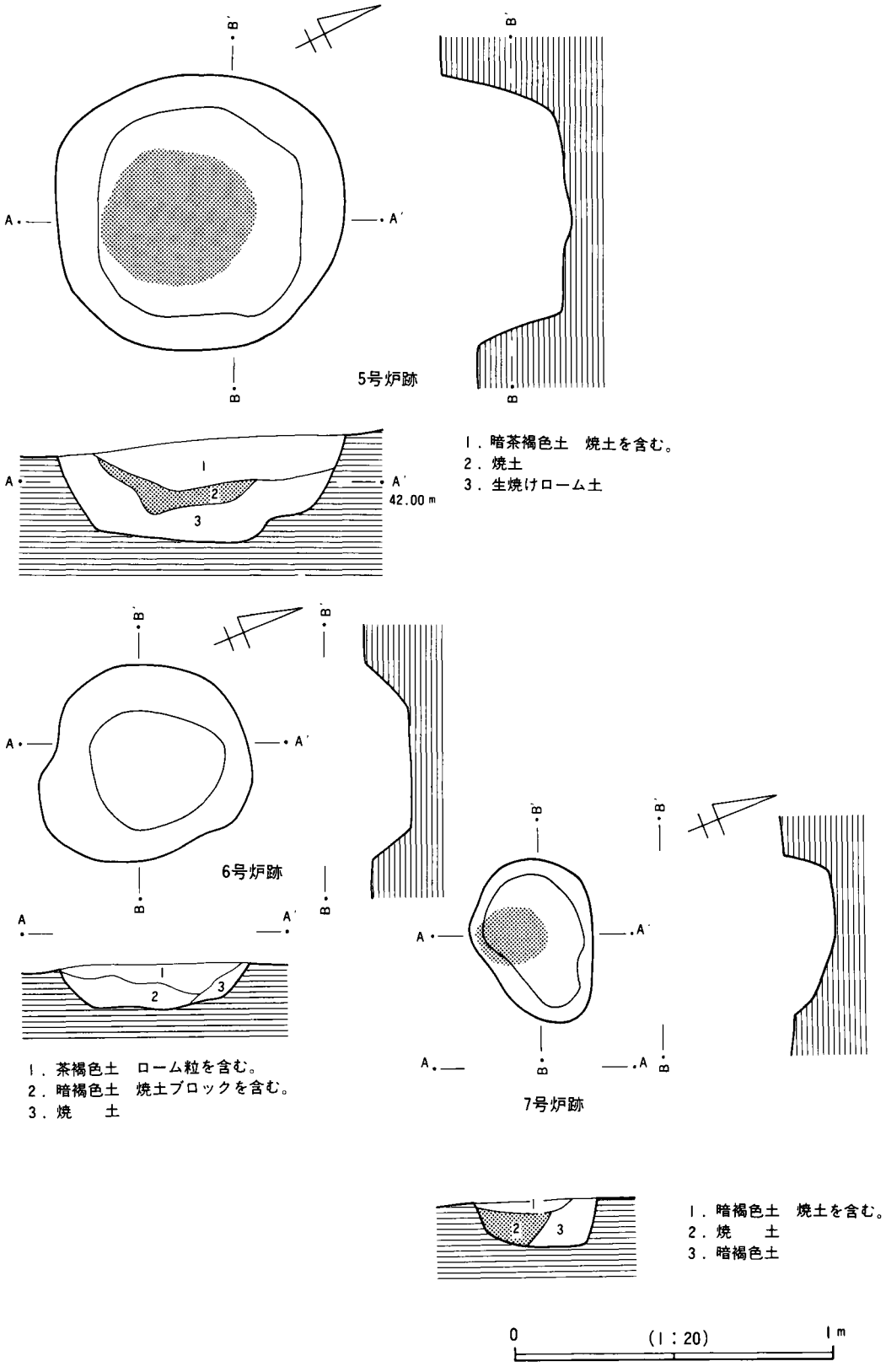
本炉跡はＡ３－62・63の各グリッドにまたがり，４号炉跡の南32mに位置する。開口部が径0.90m，底部が径0.63mの円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは20cmである。断面形は鍋底状を呈する。覆土は２層に区分できる。南壁寄りの底面上に焼土が堆積している。下部において加熱により厚さ10cmの生焼けのローム土となっている。遺物は出土しなかったが，縄文時代のものであろう。

６号炉跡（第11図，図版６）

本炉跡はＡ３－56グリッド内に位置し，５号炉跡の東6.4mのところにある。開口部が0.67×0.59m，底部が0.42×0.36mの不整円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは15cmである。断面形は鍋底状を呈する。覆土は３層に区分できる。北壁寄りに焼土塊が堆積している。遺物は出土しなかったが，縄文時代のものであろう。

７号炉跡（第11図，図版６）

本炉跡はＡ３－95グリッド内に位置し，５号炉跡の南7.6mのところにある。開口部が0.52×0.35m，底部が0.42×0.26mの卵形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは20cmである。断面形は鍋底状を呈する。覆土は３層に区分できる。南壁寄りに焼土が堆積している。遺物は出土しなかったが，縄文時代のものであろう。



第11図　5～7号炉跡実測図

出土遺物

土器　(第12図)

1は2号炉跡の覆土内から出土した口縁部片である。文様は沈線区画による充塡縄文である。傾きは胴部で膨らみをもち，口縁部においてやや外反する。

2～5は3号炉跡の覆土内から出土した土器片である。2は微隆起線文の区画により，口縁部の無文帯と胴部の斜縄文になっている口縁部片である。3は半截竹管による2条の平行沈線が蛇行状に懸垂している胴部片である。4・5は粗雑な斜縄文が施されている胴部片である。2は加曽利EⅣ式に，3は堀之内Ⅰ式に，1・4・5は加曽利B式にそれぞれ比定される。

埋甕炉跡

1号埋甕炉跡（第13図，図版6）

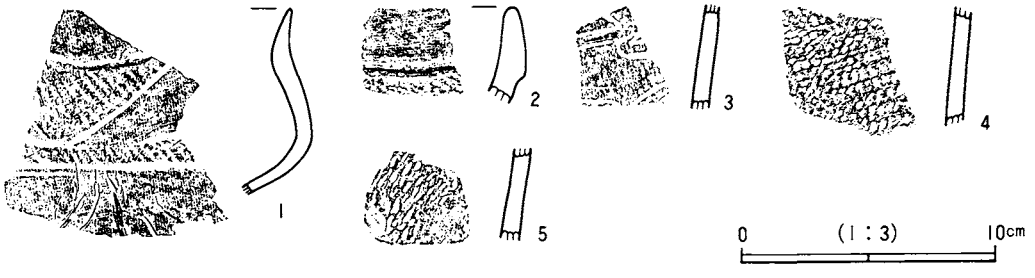
本埋甕炉跡はA2－07・08・17・18の各グリッドにまたがり，3号炉跡の南5.2mに位置する。開口部が0.81×0.50m，底部が0.64×0.35mの不整楕円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは29cmである。北東壁寄りに埋甕が設置されている。断面形は鍋底状を呈する。覆土は3層に区分できる。上層において焼土粒を伴う。埋甕から判断すれば，加曽利EⅣ式期のものである。

2号埋甕炉跡（第13図，図版6）

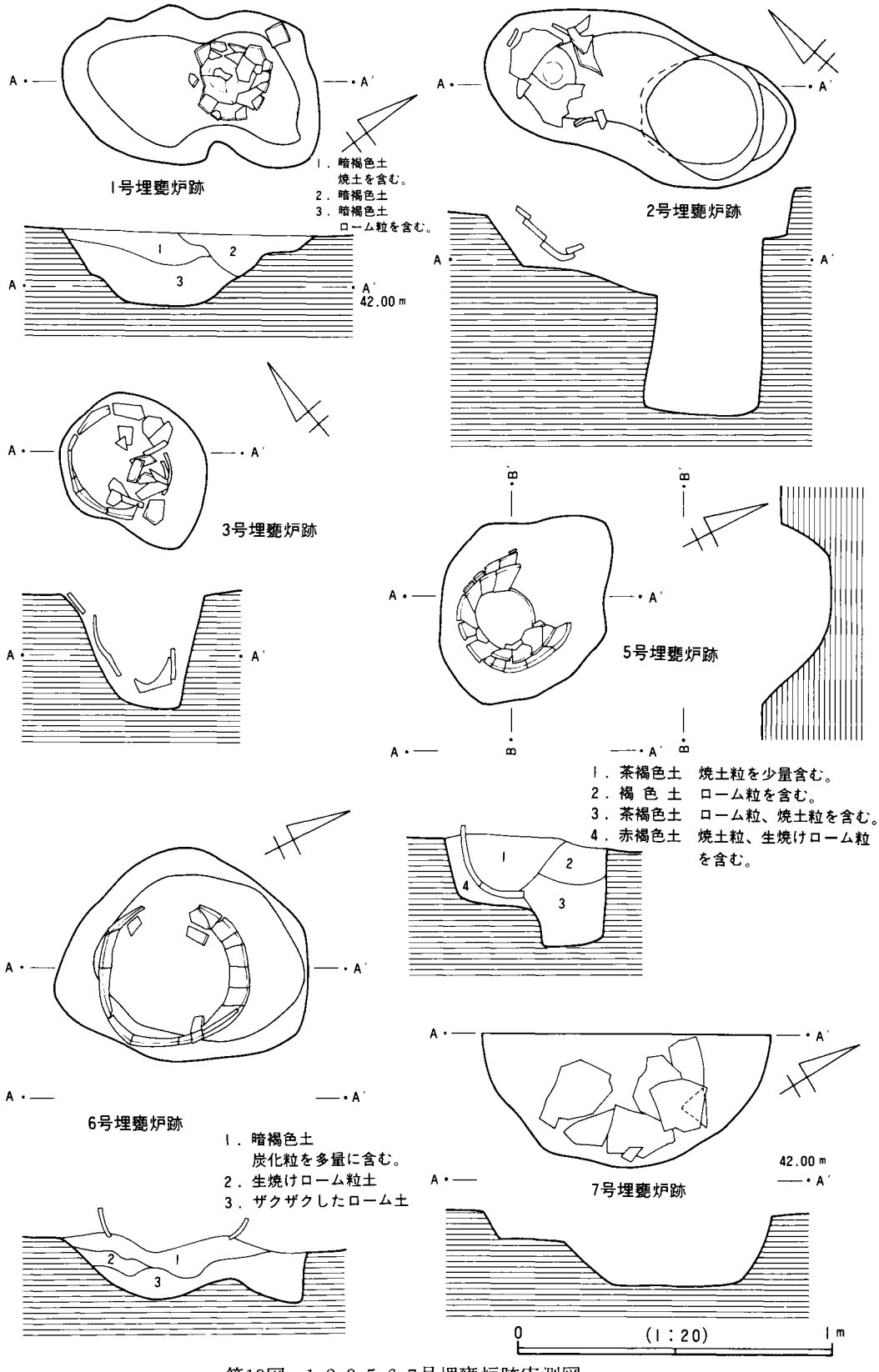
本埋甕炉跡はA2－64・65の各グリッドにまたがり，1号埋甕炉跡の南西12.4mに位置する。開口部が1.0×0.45m，底部が0.84×0.30mの長楕円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは27cmである。北壁寄りに埋甕が設置され，反対側の底面に径37cm，深さ37cmの小ピットが付随する。断面形は横「ブーツ」状を呈する。埋甕から判断すれば，称名寺式期のものである。

3号埋甕炉跡（第13図，図版6）

本埋甕炉跡はA2－75グリッド内に位置し，2号埋甕炉跡の南1.4mのところにある。開口部が径0.45m，底部が径0.2mの円形を呈する。南壁は掘りすぎである。ソフトローム層の上面で



第12図　2・3号炉跡出土土器拓影図
（1．2号炉跡，2～5．3号炉跡）



第13図　1.2.3.5.6.7号埋甕炉跡実測図

確認され，その面からの深さは37cmである。埋甕がすっぽり入る大きさに掘られ，口縁部が確認面から突出した状態で埋設されている。断面形は「バケツ」状を呈する。埋甕から判断すれば，加曽利EⅣ式期のものである。

4号埋甕炉跡（第24図，図版6・12）

本埋甕炉跡はA2－91グリッド内に位置し，3号埋甕炉跡の西7.6mのところにある。開口部が径0.59m，底部が径0.18mの円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは40cmである。口縁部と底部が破損されている埋甕が設置されており，西側は現存していない。断面形は「バケツ」状を呈する。覆土は3層に区分でき，上層において焼土粒を含んでいる。埋甕から判断すれば，加曽利EⅣ式期のものである。

5号埋甕炉跡（第13図，図版7）

本埋甕炉跡はA3－96グリッド内に位置し，7号炉跡の東1.4mのところにある。開口部が0.67×0.52m，底部が径0.45mの不整楕円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは22cmである。北壁寄りは底面から13cm程下がって段状になっており，断面形は横「ブーツ」状を呈する。口縁部と底部が破損されている埋甕が設置されており，北側は現存していない。覆土は3層に区分できる。覆土の断面から判断すると，2回構築されており，北側の深い落ち込みのところが古く，埋甕が現存しているところが新しい。新しいほうは埋甕から判断すれば，加曽利EⅣ式期のものである。

6号埋甕炉跡（第13図，図版7）

本埋甕炉跡はA4－27グリッド内に位置し，5号埋甕炉跡の南4.8mのところにある。開口部が0.83×0.66m，底部が0.67×0.49mの不整円形を呈する。ソフトローム層の上面で確認され，その面からの深さは13cmである。頸部のみの埋甕が設置されており，西側は現存していない。断面形は鍋底状を呈する。覆土は上層において炭化粒を多く含む。底部は加熱によりローム土がザクザクしている。埋甕から判断すれば，堀之内Ⅰ式期のものである。

7号埋甕炉跡（第13図，図版7）

本埋甕炉跡はA4－28・38の各グリッド内にまたがり，6号埋甕炉跡の南1.4mに位置する。東側を半截してしまったので，形態は，はっきりしないが，埋甕炉ということから推測すると径0.92mの円形を呈するものであろう。漆黒色土層中から埋甕を検出した。その検出面からの深さは21cmである。2個体の埋甕が検出され，花ビラ状になっていた。断面形は底面が段になっているが，ほぼ鍋底状を呈する。覆土は全体に焼土粒を含み，下層において灰が堆積している。埋甕から判断すれば，堀之内Ⅰ式期のものである。

出土遺物

土器　（第14～17図，図版16）

1は1号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。底部付近しか現存していない。現在最大径31.8cm，底径11.0cm，現在高19.5cmを測り，底部から胴部に向って外反する深鉢形土器である。胴部文様は単節ＲＬの斜縄文が施されている。底部付近はヘラケズリが行なわれており，平底である。内面は長期間，加熱されていたと思われ，もろく，ススが付着している。加曽利ＥⅣ式に比定される。遺存度1/3。

2は2号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。口縁部は欠損している。最大径30.1cm，底径10.0cm，現在高35.6cmを測り，傾きは底部から胴部に向って外反しながら，やや膨らみ，頸部においてすぼまる深鉢形土器である。胴部文様は沈線区画による「Ｕ」字状の充塡縄文が施されている。縄文の原体は単節ＬＲである。また，何ケ所かの「Ｕ」字状の充塡縄文の下に渦巻状の充塡縄文が懸垂している。底部はやや上げ底を呈する。称名寺式に比定される。遺存度2/3。

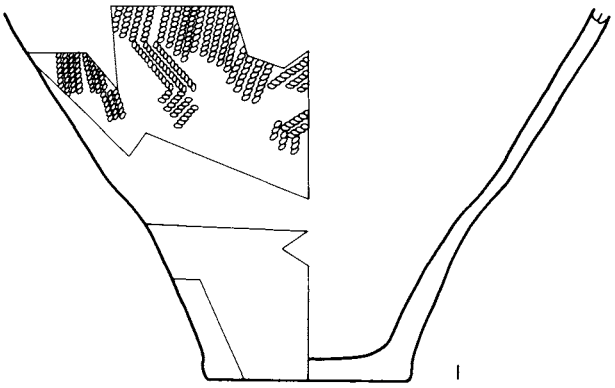
3は3号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。ほぼ完形である。口径36.0cm，底径9.4cm，器高47.3cmを測り，傾きは胴部においてやや膨らみをもち，頸部から口縁にむかってやや外湾する深鉢形土器である。4単位の舌状突起を有し，突起間を微隆起線でつないで無文の口縁部を区画している。胴部文様は単節ＬＲの斜縄文を地文とし，沈線区画による4単位の連結した逆「Ｕ」字状の磨消懸垂文が施されている。底部は平底である。加曽利ＥⅣ式に比定される。

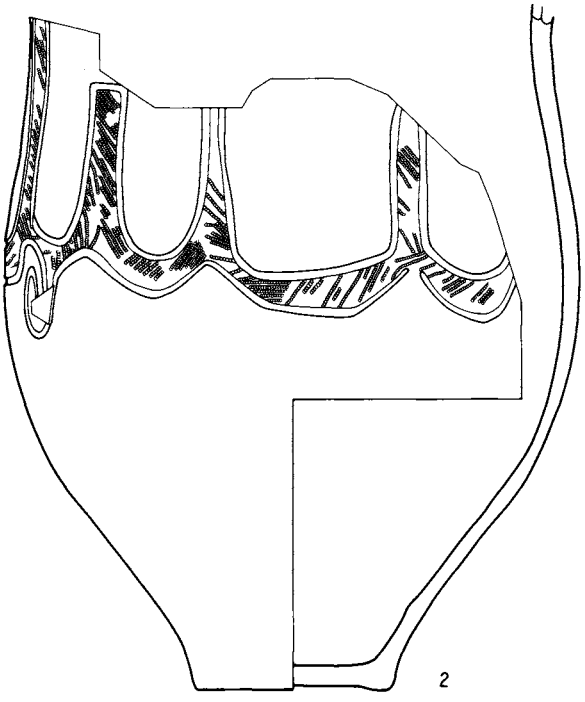
4は4号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。胴部のみが現存している。最大径34.2cm，現在高19.6cmを測り，傾きは胴部から口縁部に向って緩やかに外反する深鉢形土器である。胴部文様は無節Ｌの斜縄文を地文とし，沈線区画による磨消縄文が施され，斜縄文部が楕円形になっている。加曽利ＥⅣ式に比定される。遺存度1/3。

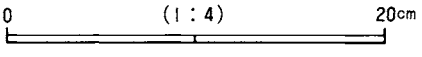
5は5号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。胴部のみが現存している。最大径33.6cm現在高29.4cmを測り，傾きは胴下部においてやや下膨れであり，胴上部はやや外反しながら口縁部に向ってたちあがっている深鉢形土器である。胴部文様は単節ＲＬの斜縄文のみである。加曽利ＥⅣ式に比定される。遺存度2/3。

6は6号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。口縁部付近のみが現存している。最大径46.4cm，現在高13.5cmを測り，傾きはキャリパー状に湾曲している深鉢形土器である。文様は全体に単節ＲＬの斜縄文が施され，下部に6～9条の櫛目文が蛇行状に懸垂されている。堀之内Ⅰ式に比定される。遺存度1/4。

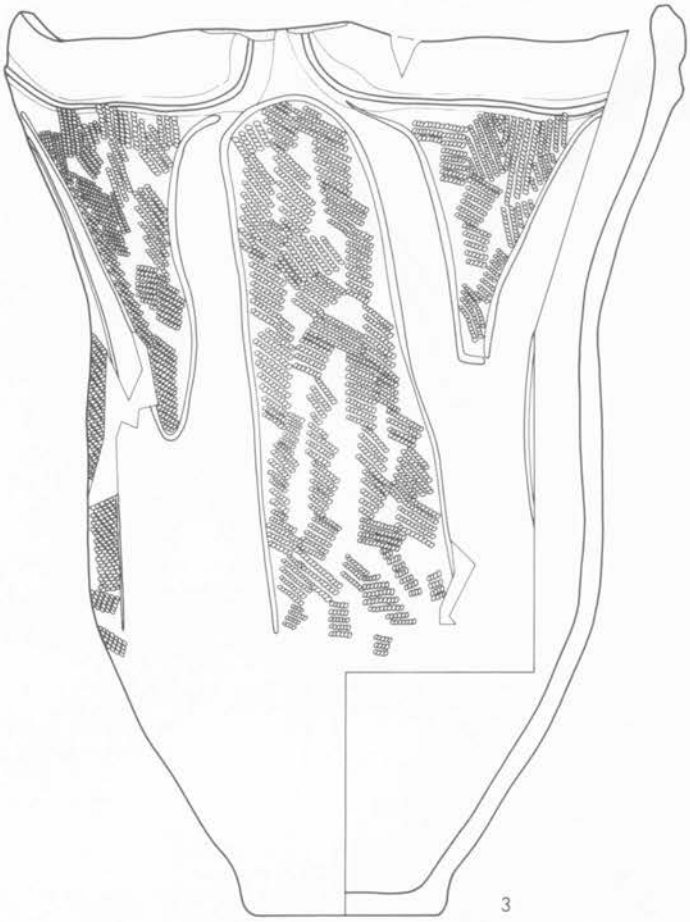
7・8は7号埋甕炉跡に埋設されていた土器である。7は半分のみが現存している。推定口径33.0cm，現在高38.5cmを測り，傾きは胴部でやや膨らみ，口縁部はやや外反する深鉢形土器である。口縁部文様は2条の平行沈線文によって無文帯を構成し，縦位の隆線または沈線によ

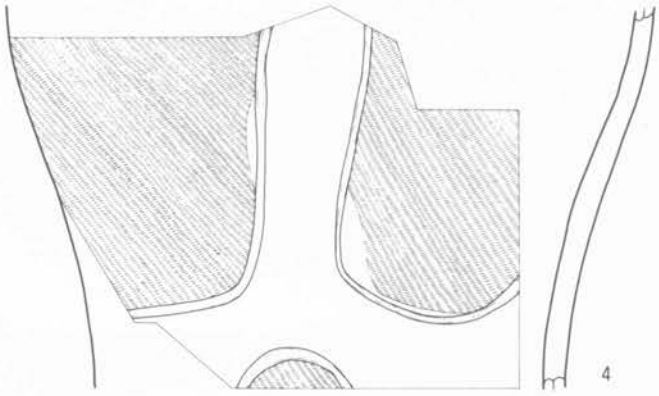






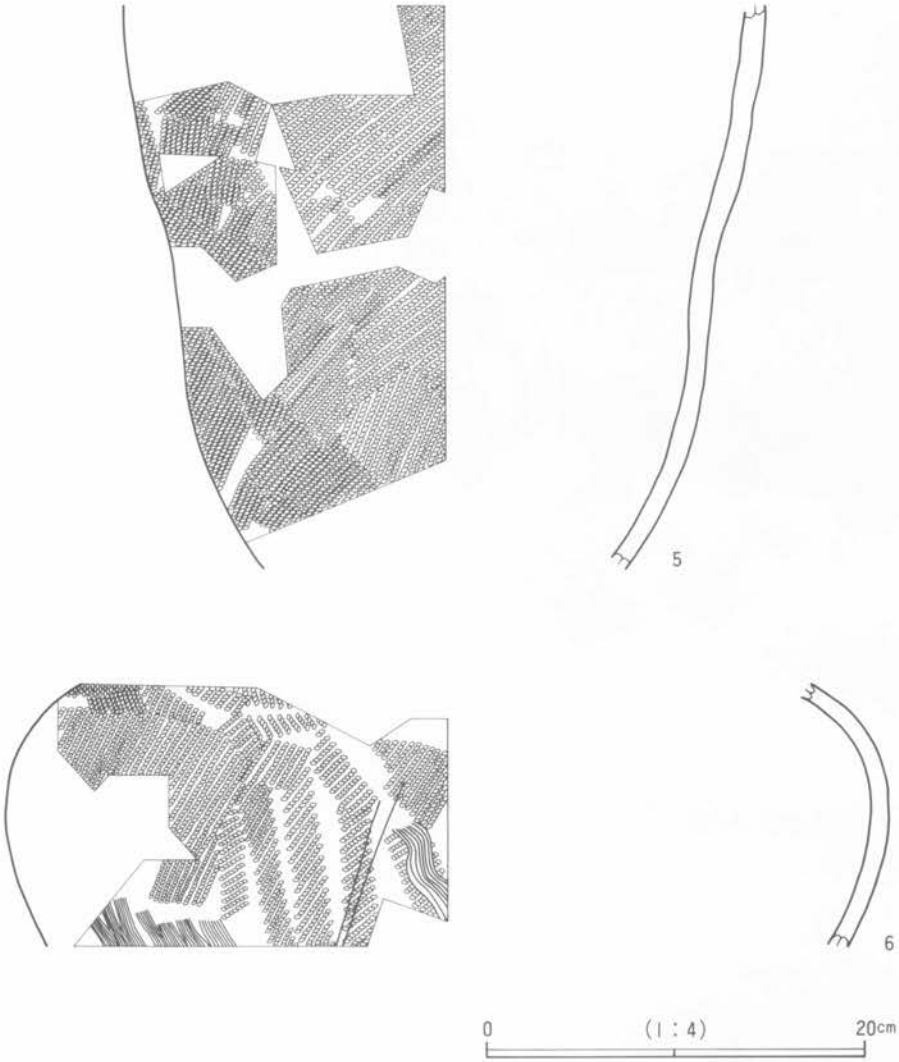
第14図　1・2号埋甕炉跡出土土器実測図





0 (1：4) 20cm

第15図　3・4号埋甕炉跡出土土器実測図

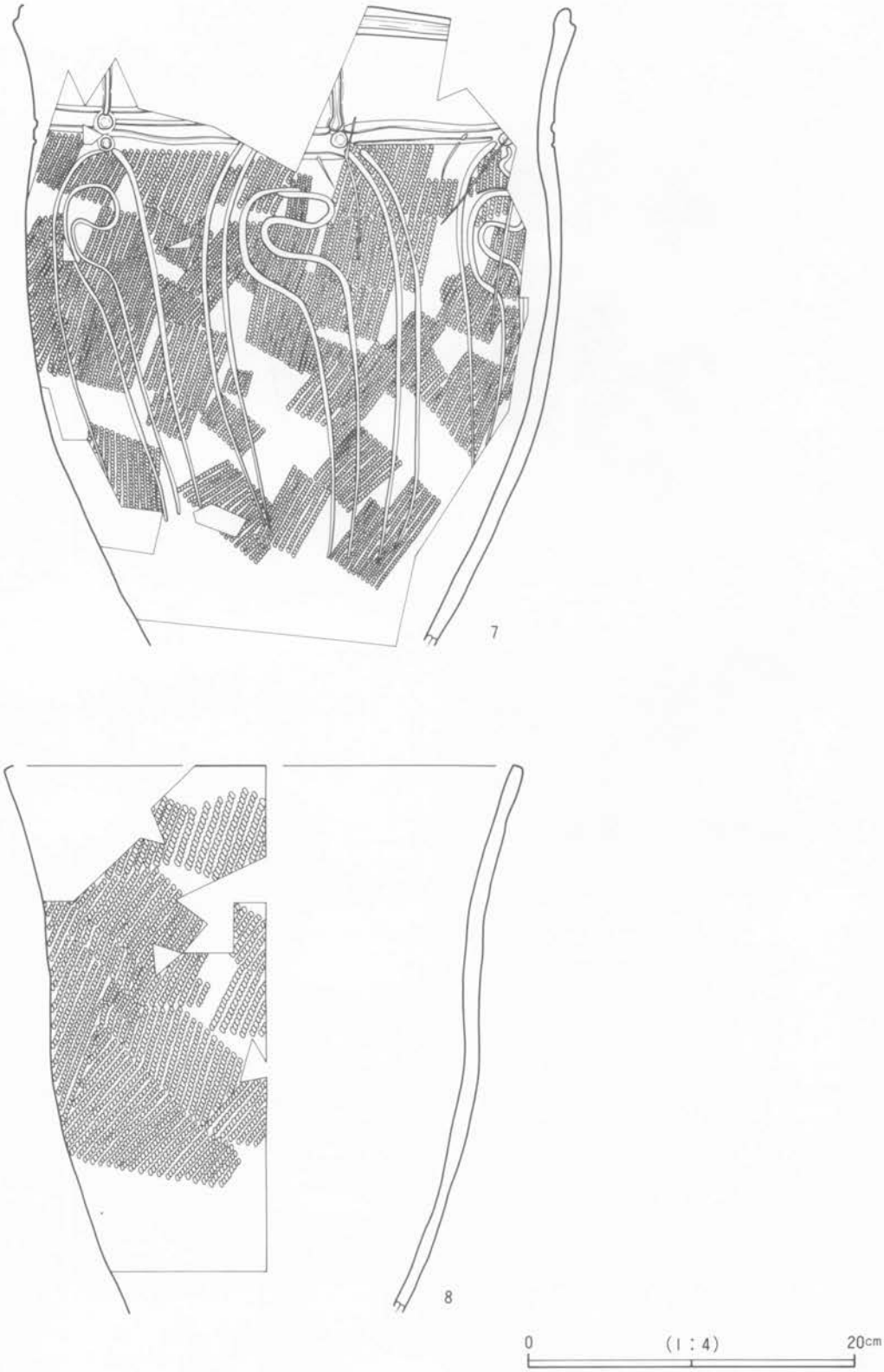


第16図　5・6号埋甕炉跡出土土器実測図

って区画している。また，口唇部には1条の凹線が施されている。胴部文様は単節ＬＲの斜縄文を地文とし，口唇から垂下した隆線または沈線から数本の沈線が曲線的に懸垂している。堀之内Ｉ式に比定される。遺存度1/2。11は口縁部と底部が欠損している。口径は31.3cm，現在高32.6cmを測り，傾きは胴部でやや膨らみ，口縁部において外反する深鉢形土器である。口縁は平縁である。文様は全体的に単節ＬＲの斜縄文のみが施されている。堀之内Ｉ式に比定される。遺存度2/3。

石器　（第77・80図9・60・69，図版44）

打製石斧が5号埋甕炉跡の覆土上層（第80図60），6号埋甕炉跡覆土内（第80図69）から，石



第17図　7号埋甕炉跡出土土器実測図

鏃が7号埋甕炉跡土内（第77図9）から出土している。これらについては“3．石器・石製品”の項で取扱う。

その他　（第92図12，第94図33・37，図版92・94）

板状土製品が6号埋甕炉跡（第94図33），7号埋甕炉跡（第94図37）の覆土内から，蓋の破片が7号埋甕炉跡（第92図12）から出土している。これらについても“4．土偶・土製品”の項で取扱った。

土　坑

土坑の規模，形態等は第2表のとおりである。ここでは，我々が今後もっと研究しなければならない土坑の性格について吟味する必要があるので，覆土の状態・土器の出土状況・時期を決定するための根拠等を詳細に記述することに専念した。

1号土坑（第18図）

本土坑は1号住居跡の北西4.8mに位置する。北側と東側は未調査である。底面に深さ65cmのピットを有する。覆土は8～10層は壁の崩落を繰り返しながら，流れ込みによる堆積である。しかし，3～7層に関しては土層断面図を見ると流れ込みによる堆積とするには不自然である。かといって，人為的堆積でもなさそうである。出土土器はない。

2号土坑（第18図，図版7）

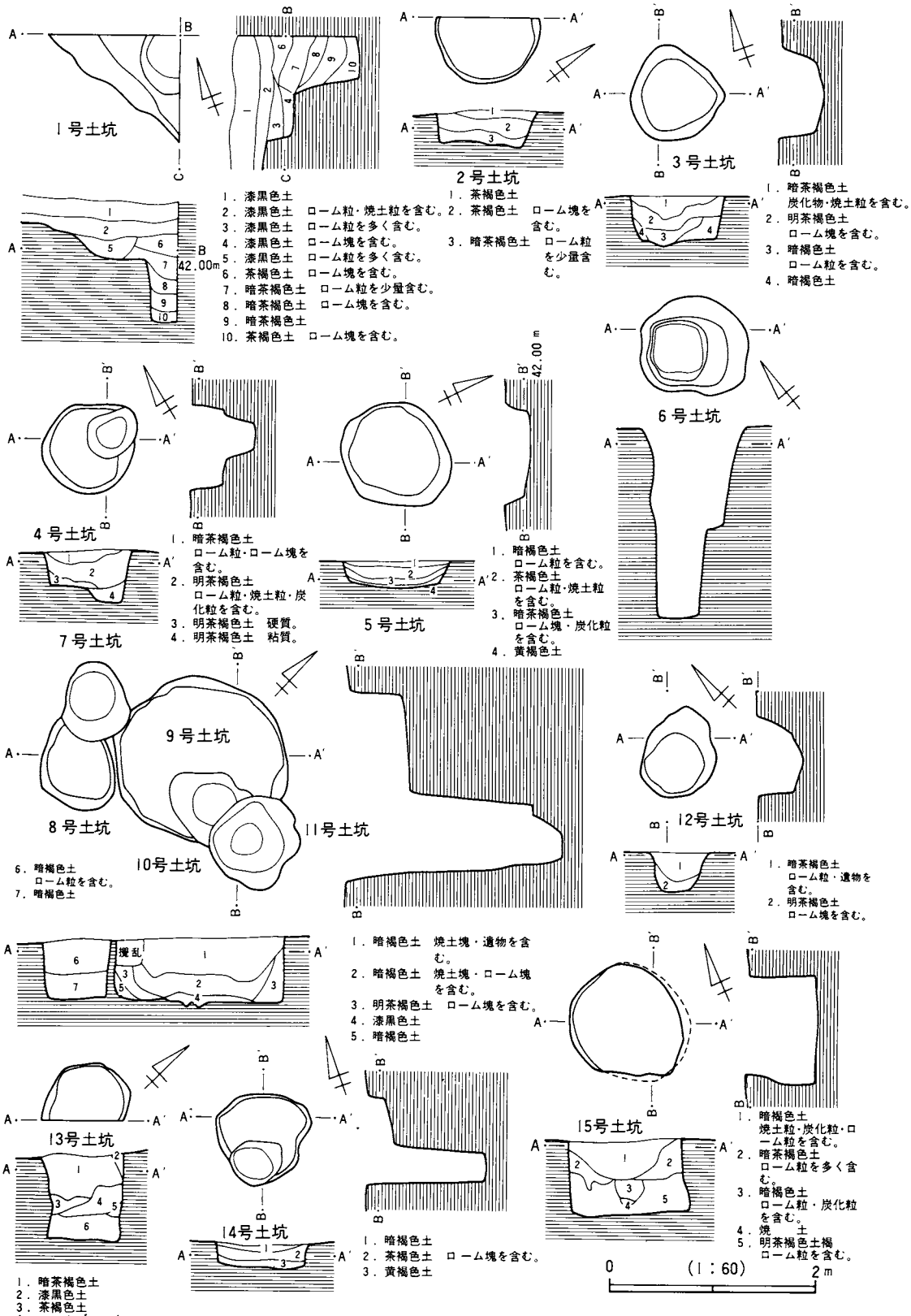
本土坑は1号土坑の南西0.6mに位置する。西側は未調査である。覆土は土層が水平で，しかもローム塊が全体に散らばっているので埋め戻しによる堆積であると判断した。2層の下部において加曽利EⅣ式の土器片（第27図実測1）1点を裏返しの状態で出土した。投棄によるものであろう。開口時期を加曽利EⅣ式期と理解したい。なぜなら，覆土は人為的堆積であり，短時間で埋まったものと考えるからである。

3号土坑（第18図，図版7）

本土坑は2号土坑の東3.0mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。1層において炭化物，焼土粒，多量の土器片が混入していた。おそらく，投棄によるものであろう。完全に埋まった時期を加曽利B式期と理解したい。なぜなら，1層において出土した土器片（第32図1～6）はすべて加曽利B式であるからである。

4号土坑（第18図，図版7）

本土坑は3号土坑の東5.0mに位置する。東壁寄りの底面に開口部径55×41cm，深さ32cmの小ピットがある。しかし，4層は地山の可能性もあり，これが本土坑に伴うものかどうか不明である。覆土は流れ込みによる堆積である。出土した土器片（第32図7～8）はわからない。すべて加曽利B式である。したがって，埋まっている時期を加曽利B式期以降と理解したい。



第18図　1～15号土坑実測図

5号土坑（第18図，図版7）

本土坑は2号土坑の北西5.2mに位置する。覆土は「レンズ」状に堆積しているので流れ込みによるものと考える。2層の上部には微粒の焼土粒が，3層中には炭化粒と数点の土器片が混入していた。時期は不明である。

6号土坑（第18図）

本土坑は2号土坑の西0.24mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。上部においては炭化粒や多量の土器片が混入している。投棄によるものであろう。土器が細片で時期決定のできる資料はない。西壁寄りの底面上6cmのところに骨粉が2ケ所検出された。しかし，獣骨か人間の骨かは不明である。

7号土坑（第18図，図版7）

本土坑は6号土坑の南東2.2mに位置する。8号，9号土坑と切り合っている。新旧関係は不明である。覆土中から加曽利B式の土偶の胴上半部（第90図）を出土した。しかし，土層断面図や出土地点を図示していないので本土坑に関係するものかどうか不明である。なお，A2－16グリッドで精査時に出土した土偶の胴下半部と接合したことを付記しておく。埋まっている時期は加曽利B式期以降と理解したい。

8号土坑（第18図，図版7）

本土坑は7号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。覆土は水平の土層で，しかもロ層が粗粒状でザクザクしていることから埋め戻しによる堆積であると考える。

9号土坑（第18図，図版7）

本土坑は7号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。覆土は流れ込みによる堆積である。1，2層においては焼土塊が，また1層では多量の土器片が混入している。おそらく，投棄によるものであろう。しかし，7～11号土坑から出土したであろう土器片を一括して取り上げているので，どの土坑から出土した土器片かわからず，各土坑の時期は不明である。（7号土坑は除く）

10号土坑（第18図，図版7）

本土坑は9号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は註記によれば本土坑の方が新しいかもしれぬとしている。

11号土坑（第18図，図版7）

本土坑は10号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。

12号土坑（第18図，図版8）

本土坑は4号土坑の南東3.24mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。1層において土器片が混入している。量は12片とあまり多くなく，細片であるので投棄によるものか，流れ込みによるものか不明である。土器片（第32図23～25）はすべて加曽利B式である。したがっ

て，完全に埋まった時期は加曽利B式期以降であろう。

13号土坑（第18図，図版８）

本土坑は12号土坑の東1.96mに位置する。東側は未調査である。覆土はローム塊が全体に混入し，また土層が不自然的に分層されていることから埋め戻しによる堆積である。６層下部に土器片が混入している。土器片は底面から少し浮いている状態で出土しているので，土坑に関係するものではなく，投棄によるものであると考えたい。土器片（第33図26～29）はすべて加曽利B式である。したがって，人為的堆積であることから，開口時期は加曽利B式期である。

14号土坑（第18図）

本土坑は６号土坑の南2.4mに位置する。南壁寄りの底面に小ピットが穿孔されているが，発掘担当者は本土坑に伴うものかどうかは不明としている。覆土は「レンズ」状に堆積しているので流れ込みによるものと考える。出土土器はない。

15号土坑（第18図，図版８）

本土坑は14号土坑の東1.92mに位置する。覆土は土層断面図を見ると２通りの考え方がある。１つは，４層が焼土層でローム粒が焼けており，３層中に炭化粒を含んでいることから，５層が人為的に埋められた後，本土坑の中央部に小ピットが掘られ，炉として２次的に利用されたのであろう。そして炉の廃絶後，１，２層が流れ込んで完全に埋まったのであろうと考えられる。もう１つは，全層すべて同時に埋め戻されたものであろうと考えられる。なぜならば，１層に焼土粒や炭化粒を含んでいることから，１，３，４層は他の炉から掻き出された土を持ってきて埋めたのであろうと考えられ，３，４層は偶然に５層の中央部に堆積したものであろう。１，２層は流れ込みによる堆積のように見えるが，２層中にローム粒が多量に含まれ，また本土坑が袋状であることを考慮すると，２層は開口部の壁が崩されて堆積したものであろう。以上であるが，筆者は直接発掘調査に携わっていないので，速断は避けたい。なお，出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，３型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

16号土坑（第19図）

本土坑は４号土坑の南2.96mに位置する。

17号土坑（第19図）

本土坑は16号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。出土した土器片は16号土坑といっしょに覆土中一括で取り上げられているので，時期は不明である。

18号土坑（第19図，図版８）

本土坑は14号土坑の西1.16mに位置する。中央部の底面に小ピットが２個切り合っている。それぞれの規模は推定径31cm，深さ10cmと推定径37cm，深さ58cmである。新旧関係は不明である。覆土は流れ込みによる堆積である。５層には多量の炭化材および炭化粒が混入していた。

出土した土器片(第33図34～35)は16片と少なく，細片であるので流れ込みによるものか，投棄によるものか不明であり，覆土中一括で取り上げられているので状況はわからない。しかし，すべて加曽利B式なので，埋まっている時期は加曽利B式期以降であろう。

19号土坑（第19図，図版８）

本土坑は11号土坑の南2.6mに位置する。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられているので状況はわからない。したがって，時期は不明である。

20号土坑（第19図，図版８）

本土坑は１号炉跡の南西0.96mに位置する。

21号土坑（第19図，図版８）

本土坑は20号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。覆土は全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。４層上面に焼土塊が，また３層中に焼土粒が混入している。20～26号土坑から出土したのであろう土器片を一括して取り上げているので，各土坑の時期は不明である。しかし，本土坑に関しては，註記によれば４層中で加曽利EⅣ式の土器片を出土したと記述しているので，人為的堆積であることから開口時期を加曽利EⅣ式期と考えたい。

22号土坑（第19図，図版８）

本土坑は21号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。

23号土坑（第19図，図版８）

本土坑は22号土坑の南東側で切り合っている。新旧関係は不明である。

24号土坑（第19図，図版８）

本土坑は23号土坑の南東側で切り合っている。新旧関係は不明である。

25号土坑（第19図，図版８）

本土坑は21号土坑の南東壁で接している。覆土は土層断面図を見ると土層が不自然的に分層されていることから埋め戻しによる堆積であると理解したい。ロ層中に焼土粒と炭化粒を混入している。

26号土坑（第19図，図版８）

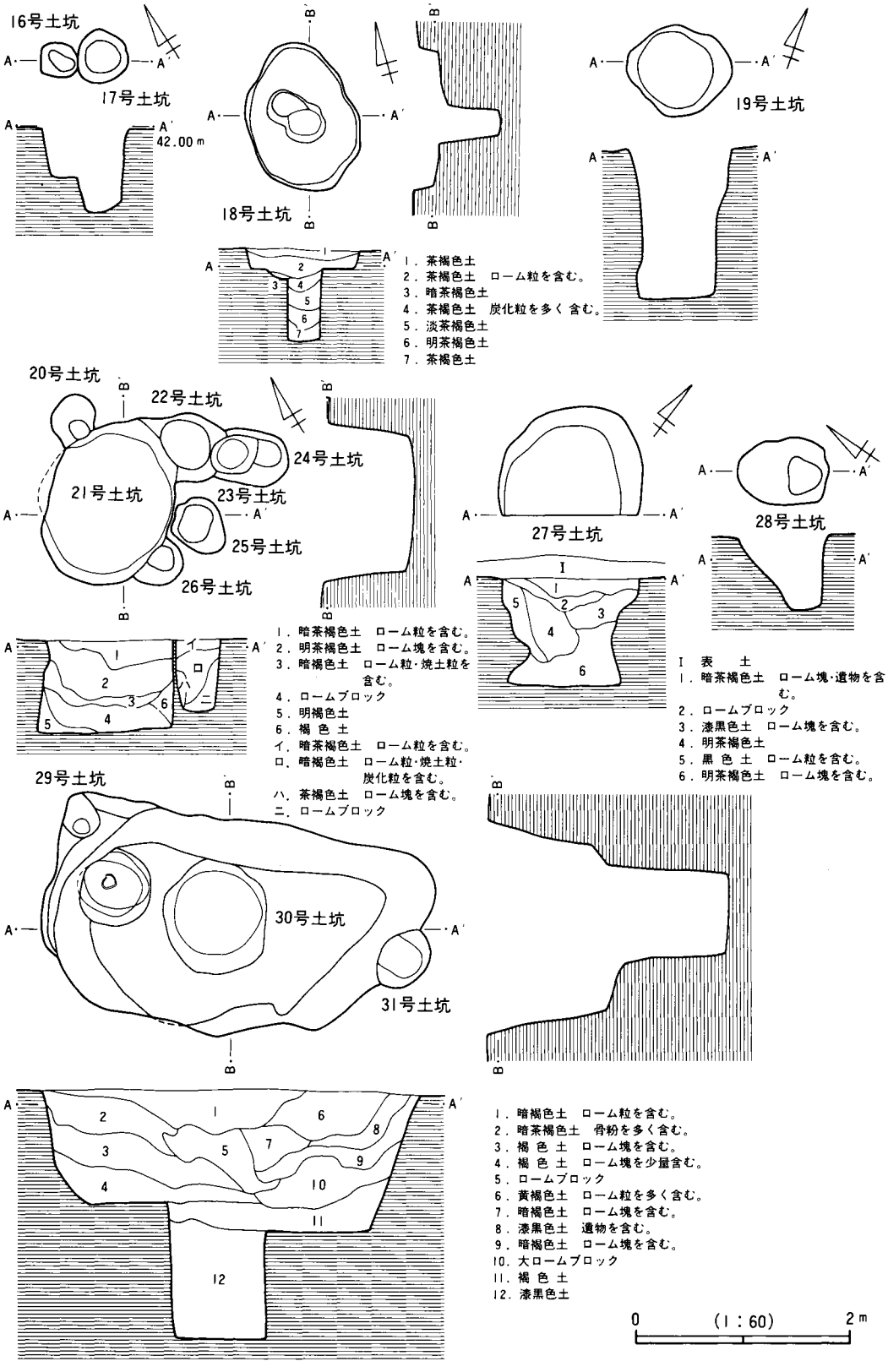
本土坑は21号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。

27号土坑（第19図，図版８）

本土坑は16号土坑の南4.24mに位置する。東側は未調査である。覆土は全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，２型式がまじっており，出土状況はわからないので，時期は不明である。

28号土坑（第19図，図版８）

本土坑は２号炉跡の北西3.96mに位置する。註記によれば，北壁側に掘り過ぎではないかと



第19図　16～31号土坑実測図

している。覆土は，西側の上部に埋まった大きなローム塊が人為的によるものだと判断できることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。出土した土器片(第35図63～64)が覆土中一括で取り上げられているが，すべて加曽利B式なので，開口時期を加曽利B式期であると考えたい。

29号土坑（第19図，図版9・19）

本土坑は19号土坑の南3.4mに位置する。2つの小ピットを有し，それぞれの規模は径40×32cm，深さ不明と径70cm，深さ115cmである。後者の小ピット中の底面上30cmのところに安行I式の土器(第27図実測3，4)が入っていた。おそらく投棄によるものであろう。したがって，開口時期は安行I式期である。

30号土坑（第19図，図版9）

本土坑は29号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は本土坑のほうが新しい。中央部の底面に径96cm，深さ124cmのピットを有する。覆土は土層断面図を見るとローム塊が全体に混入し，3，4，11層が粗粒状でザクザクしていると記述されているので埋め戻しによる堆積であると理解したい。なお，2層中には多量の骨粉を含み，8層では土器片が混入している。おそらく，投棄によるものであろう。しかし，29，31号土坑で出土したであろう土器片と一括して取り上げているので，時期は不明である。

31号土坑（第19図，図版9）

本土坑は30号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。

32号土坑（第20図，図版9）

本土坑は28号土坑の西2.4mに位置する。西壁寄りの底部に径61×47cm，深さ44cmの小ピットを有する。覆土は土層断面図を見ると流れ込みによる堆積である。2層中に土器片を混入している。大きな土器片が出土していることから投棄によるものと考えたい。出土した土器片(第36図81～82)はすべて加曽利EIV式なので，埋まっている時期は加曽利EIV式であろう。

33号土坑（第20図，図版9）

本土坑は32号土坑の南東0.4mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。なお，発掘担当者の註記によれば，1，2層は後世の撹乱としてある。6層中から出土した土器片(第36図89)は加曽利B式である。しかし，流れ込みによるものか，投棄によるものかわからず，4型式の土器片が覆土中一括で取り上げており，出土状況がわからないので時期は不明である。

34号土坑（第20図，図版9）

本土坑は33号土坑の南0.12mに位置する。覆土は土層断面図を見ると流れ込みによる堆積である。ハ層は焼土層である。出土土器はない。

35号土坑（第20図，図版9）

本土坑は34号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。出土土器はない。

36号土坑（第20図，図版９）

本土坑は35号土坑の東2.0mに位置する。出土したであろう土器片は37号土坑と一括して取り上げているので，時期は不明である。

37号土坑（第20図，図版９）

本土坑は36号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。覆土は全体にローム塊を混入し，３層が粗粒状でザクザクしていることから埋め戻しによる堆積であると理解したい。２層に焼土粒を少量含んでいる。発掘調査担当者の註記によれば，覆土中に称名寺式の土器片を出土したとしているので，開口時期を称名寺式期と考えたい。

38号土坑（第20図，図版９）

本土坑は３号炉跡の東0.1mに位置する。出土土器はない。

39号土坑（第20図，図版９）

本土坑は37号土坑の東2.26mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。１層には焼土塊が，２層には多量の土器片が混入している。おそらく，投棄によるものであろう。出土した土器片(第36図96～97)すべてが加曽利Ｂ式なので，埋まっている時期は加曽利Ｂ式期であると考えたい。

40号土坑（第20図）

本土坑は４号炉跡の南1.6mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。３層中に炭化粒を混入している。また，３層中の底面上８cmのところで加曽利ＥⅣ式の土器片(第36図98)を出土したと発掘担当者が註記している。それが流れ込みによるものか，投棄によるものかは明らかでなく，２型式の土器片が覆土中一括で取り上げられており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

41号土坑（第20図，図版９）

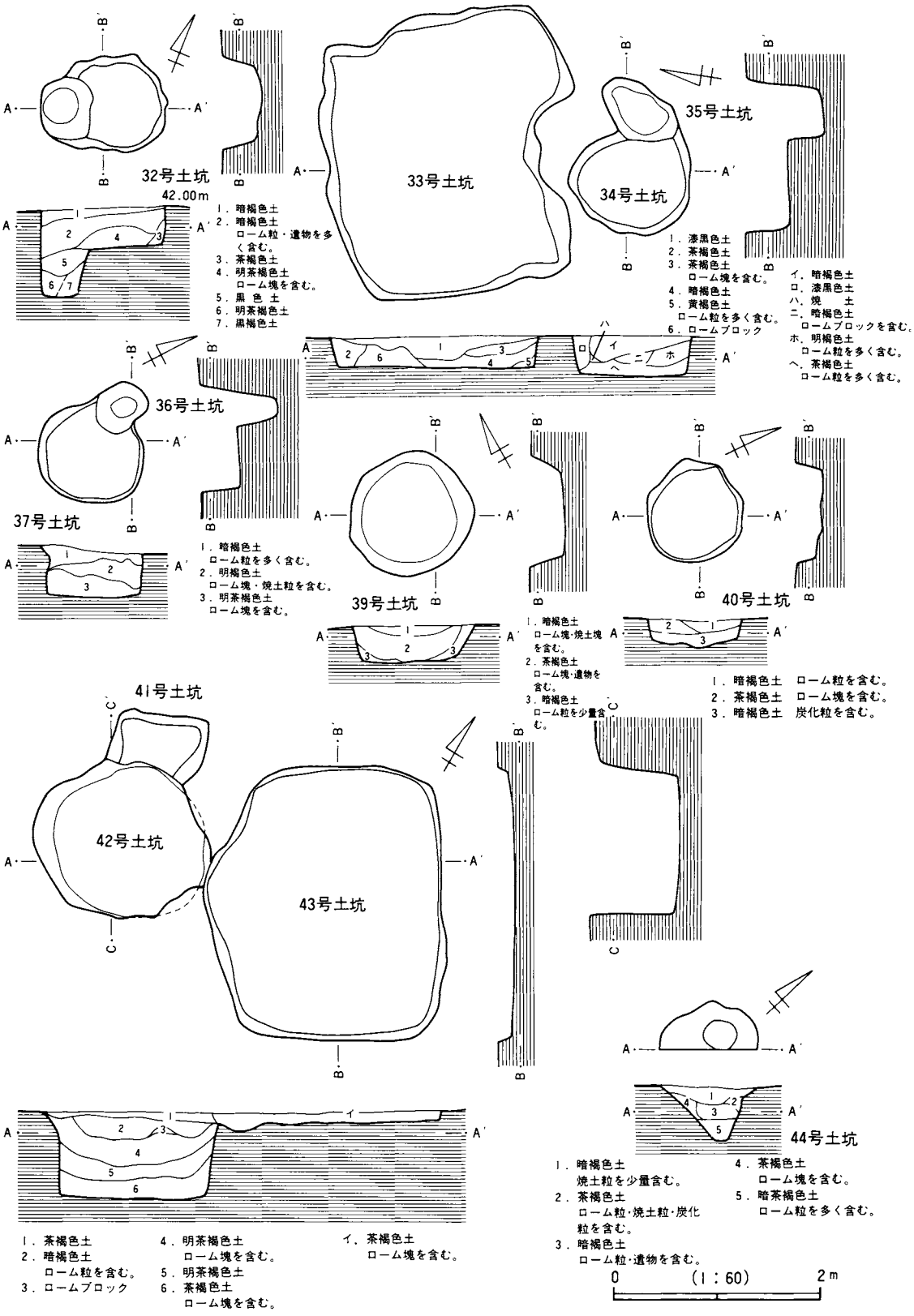
本土坑は40号土坑の南東1.6mに位置する。出土したであろう土器片は42～43号土坑と一括して取り上げられているので，時期は不明である。

42号土坑（第20図，図版９）

本土坑は41号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。覆土は「レンズ」状に堆積しているので，流れ込みによるものと理解する。３，５～７層には土器片が混入している。５～７層から出土した多量の土器片はすべて加曽利ＥⅣ式なので，投棄によるものであろう。そこで，底面直上から出土した土器片(第37図102)から判断して，開口時期を加曽利ＥⅣ式期と考えたい。

43号土坑（第20図，図版９）

本土坑は42号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は本土坑のほうが新しい。覆土は単一層である。東壁寄りの覆土中上部に土器片を出土した。流れ込みによるものか，投棄によるも



第20図　32～37・39～44号土坑実測図

のかは不明である。すべて加曽利B式なので，完全に埋まった時期は加曽利B式期以降と考えたい。

44号土坑（第20図）

本土坑は1号埋甕炉跡の南東4.78mに位置する。南東側は未調査である。覆土は流れ込みによる堆積である。3層には多量の土器片が混入している。投棄によるものであろう。出土した土器片(第37図106～108)はすべて加曽利B式なので，埋まっている時期を加曽利B式期と考えたい。

45号土坑（第21図，図版10）

本土坑は1号埋甕炉跡の北西0.82mに位置する。覆土は全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。4層には骨粉が含まれている。出土した土器片(第37図109)は堀之内I式なので，開口時期を堀之内I式期と考えたい。なお，西壁寄りの底部に穿孔されている小ピットは，撹乱である。

46号土坑（第21図）

本土坑は42号土坑の西0.42mに位置する。覆土は「レンズ」状に堆積しているので，流れ込みによるものと理解したい。出土した土器片は流れ込みによるものか，投棄によるものかは明らかでなく，2型式の土器片が覆土中一括で取り上げており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

47号土坑（第21図）

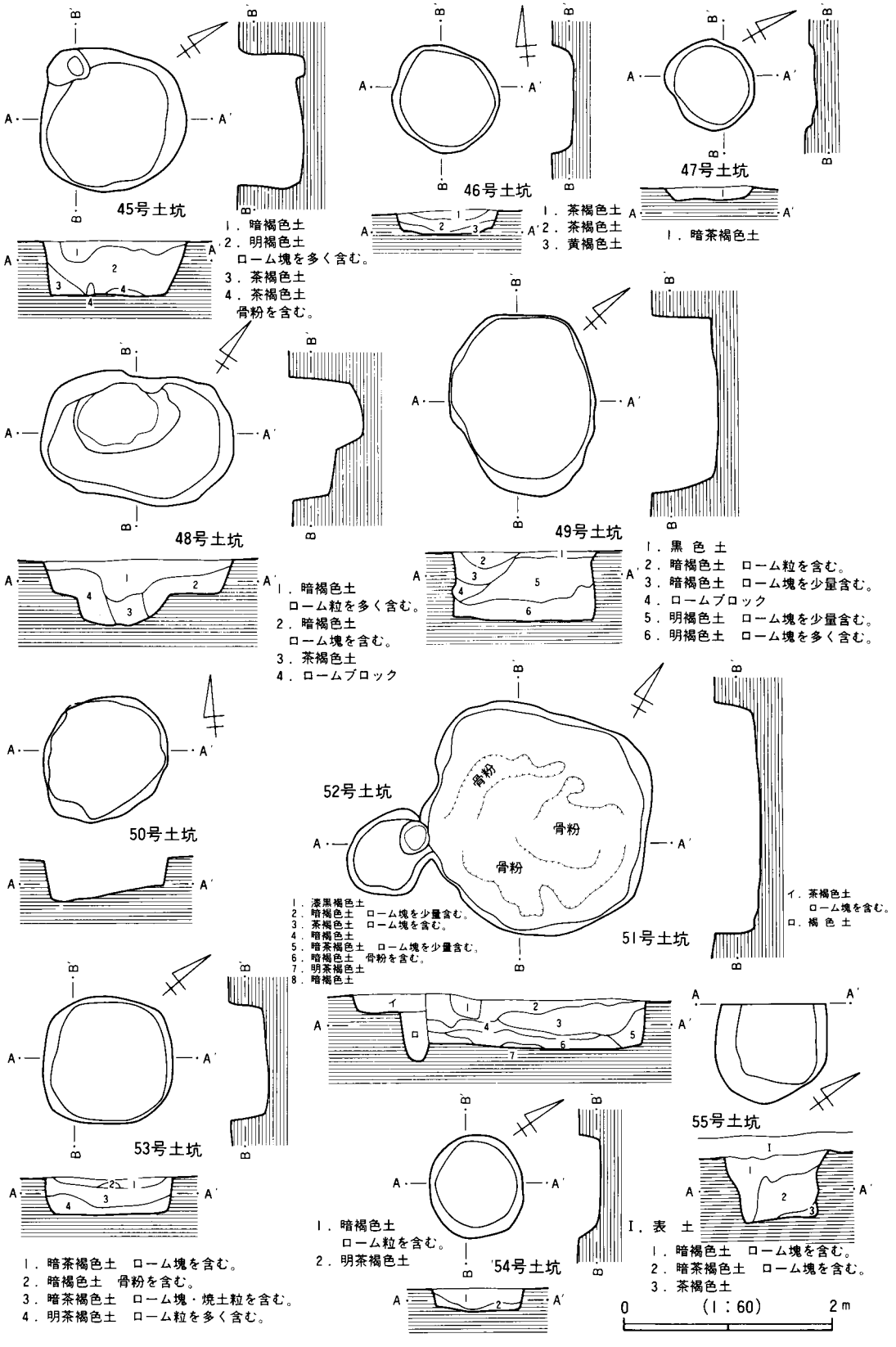
本土坑は46号土坑の南西1.2mに位置する。覆土は単一層である。出土土器として取り上げた土器片のほとんどは確認面で集中していたものであり，2型式がまじっているので時期は不明である。

48号土坑（第21図，図版10）

本土坑は47号土坑の南1.32mに位置する。覆土は全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積と理解したい。出土した土器片は3型式がまじり，すべて覆土中一括で取り上げており，出土状況がわからないので，時期は不明である。なお，北壁寄りのピットは註記によれば，3層が粒子状でザクザクと軟かい点から見ると新しいものか，あるいは2基の重複であろうとしている。

49号土坑（第21図，図版10）

本土坑は48号土坑の南0.24mに位置する。覆土は土層断面図を見ると5，6層が水平に分層されていることから，最初，5，6層が人為的に埋められ，その後2～4層の部分が穿孔されて自然的に流れ込んでいったのであろう。出土した土器片は2型式がまじっている。第38図120～122は確認面で出土したもので，その他は覆土中一括で取り上げられており，出土状況がわからないので，時期は不明である。



第21図　45～55号土坑実測図

50号土坑（第21図）

本土坑は49号土坑の東0.16mに位置する。出土した土器片(第38図123)は覆土中一括で取り上げられているが，すべて加曽利B式なので，埋まっている時期は加曽利B式期以降であろう。

51号土坑（第21図，図版10）

本土坑は50号土坑の東1.58mに位置する。覆土は不自然的に分層されており，また註記によれば，東側から西側に向って意識的に埋めたのであろうとしていることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。6層中には骨粉が混入している。また，底面に密着して骨粉が広がっていると記されている。この骨粉は獣骨か人骨かは明らかでない。時期を決定するための土器片の型式がわからないので，時期は不明である。

52号土坑（第21図，図版10）

東側の小ピットを本土坑とする。なぜならば，註記によれば，本土坑をとりこんでいるピットは壁，床ともに凸凹なので撹乱の可能性があるとしているからである。本土坑は51号土坑の南西側で切り合っている。新旧関係は不明である。本土坑の上面に大きな土器片(第38図124)が出土したことから，埋甕的様相を示すと記している。もしそうだとすると，加曽利EⅣ式期のものである。

53号土坑（第21図，図版10）

本土坑は51号土坑の南東1.74mに位置する。覆土はやや水平に分層され，ローム塊が全体に混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。2層には骨粉を，3層には焼土粒を含んでいる。出土した土器片は3型式がまじっており，覆土中一括で取り上げられているので，出土状況がわからず，時期は不明である。

54号土坑（第21図，図版10）

本土坑は53号土坑の南東0.98mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積であると理解したい。出土した土器片が4点と少ないので，おそらく流れ込んだものであろう。土器片は2型式がまじり，覆土中一括で取り上げられており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

55号土坑（第21図）

本土坑は51号土坑の南0.68mに位置する。覆土は不自然的に分層され，全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。出土した土器片(第38図134)は覆土中一括で取り上げられているが，すべて加曽利B式なので，開口時期を加曽利B式期と考えたい。なお，北西側は未調査である。

56号土坑（第22図，図版10）

本土坑は1号埋甕炉跡の南西0.32mに位置する。出土したであろう土器片は57号土坑と一括して取り上げられているので，時期は不明である。

57号土坑（第22図，図版10）

本土坑は56号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は不明である。覆土は流れ込みによる堆積である。

58号土坑（第22図，図版10）

本土坑は57号土坑の西側で切り合っている。新旧関係は註記によれば，本土坑のほうが新しいとしている。南壁寄りの底面に径27×24cm，深さ33cmの小ピットを有する。覆土は流れ込みによる堆積であると理解したい。1，2層中に多量の土器片を混入している。おそらく，投棄によるものであろう。出土した土器片は3型式がまじり，覆土中一括で取り上げられており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

59号土坑（第22図，図版10）

本土坑は55号土坑の南西0.18mに位置する。北西側は未調査である。註記によれば，2層と底面との関係が悪く，底面が凸凹になっているという点から撹乱であるとしている。

60号土坑（第22図，図版10）

本土坑は53号土坑の南0.72mに位置する。

61号土坑（第22図，図版10）

本土坑は60号土坑の南側で切り合っている。新旧関係は註記によれば，プラン確認の状況から本土坑のほうが新しいとしている。覆土は流れ込みによる堆積であると理解したい。2，3層中に土器片を混入している。出土した土器片は60，62号土坑と一括して取り上げられているので，各土坑の時期は不明である。

62号土坑（第22図，図版10）

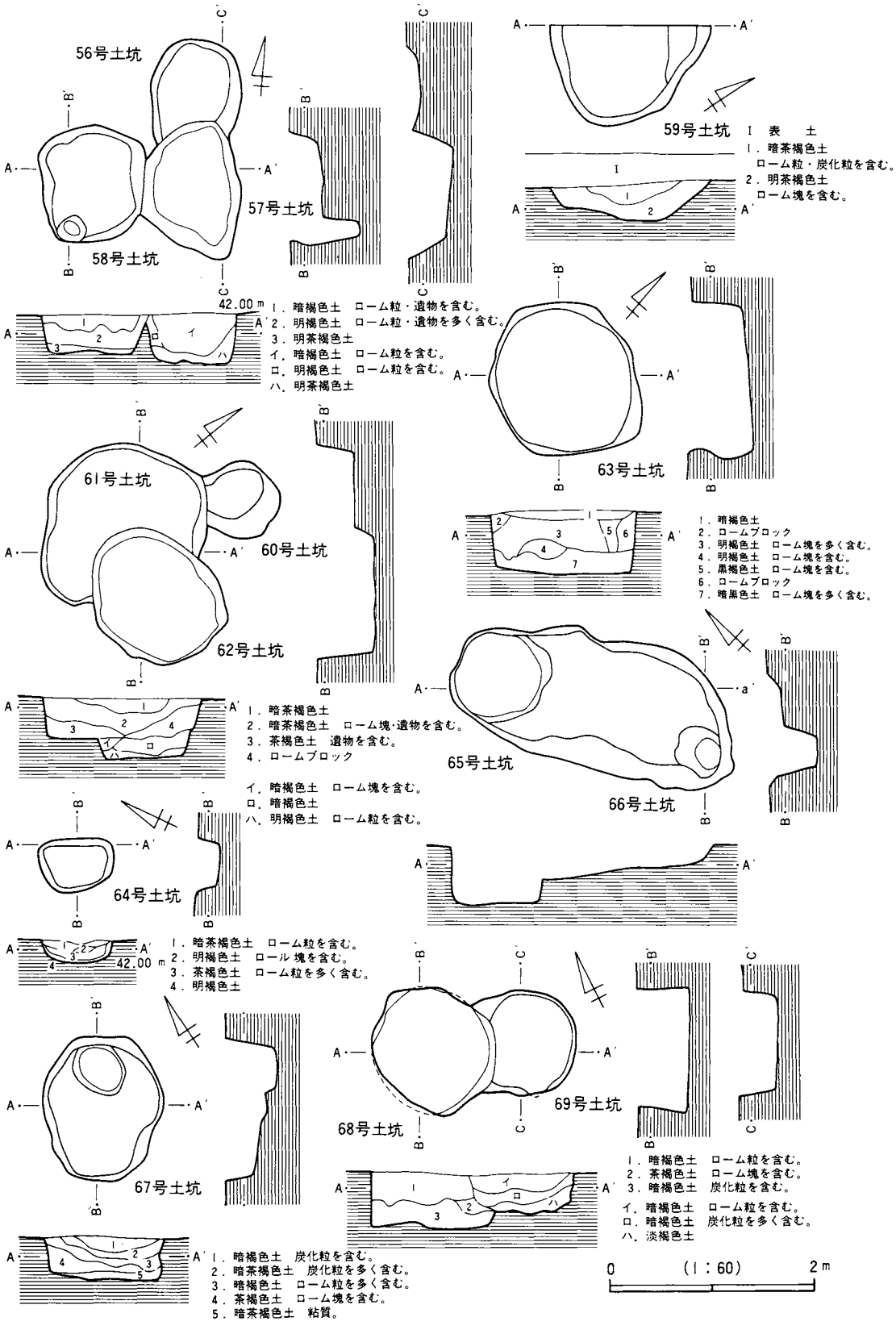
本土坑は61号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は註記によれば，本土坑のほうが古いとしている。覆土は土層断面図を見ると水平に分層され，ハ層がザクザクしているということから埋め戻しによる堆積であると理解したい。

63号土坑（第22図，図版10）

本土坑は49号土坑の西0.32mに位置する。覆土は土層断面図を見ると1，3，7層が水平的に分層され，また全体にローム塊が混入されていることから埋め戻しによる堆積であると理解したい。出土した土器片(第39図150～154)はすべて加曽利B式であることから，開口時期を加曽利B式期と考えたい。

64号土坑（第22図，図版10）

本土坑は61号土坑の西0.12mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。出土した土器片(第39図155)は覆土中一括で取り上げられているので，出土状況は明らかでない。しかし，すべて加曽利B式なので，埋まっている時期の加曽利B式期以降と考えたい。



第22図　56～69号土坑実測図

65号土坑（第22図）

本土坑は63号土坑の西1.0mに位置する。

66号土坑（第22図）

本土坑は65号土坑の北西側で切り合っている。新旧関係は不明である。南壁寄りの底面に穿孔されている小ピットは発掘担当者の註記によれば，撹乱であるとしている。出土した土器片は65号土坑と一括して取り上げられており，２型式がまじっているので，各土坑の時期は不明である。

67号土坑（第22図，図版11）

本土坑は59号土坑の南1.86mに位置する。北壁寄りの底面に穿孔されている小ピットは発掘担当者の註記によれば，本土坑に伴うものかどうかは不明であるとしている。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。１層の上部に土器片が混入されていた。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，３型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

68号土坑（第22図）

本土坑は67号土坑の南西0.84mに位置する。覆土は水平的に分層されていることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。３層中に炭化粒を混入している。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，２型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

69号土坑（第22図）

本土坑は68号土坑の南東側で切り合っている。新旧関係は註記によれば，本土坑のほうが新しいとしている。覆土は土層断面図を見ると「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。ロ層中に多量の炭化粒が混入されている。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，２型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

70号土坑（第23図，図版11）

本土坑は69号土坑の東1.34mに位置する。南東壁寄りの底面に穿孔されている小ピットは発掘担当者の註記によれば，撹乱であると判断している。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，２型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

71号土坑（第23図，図版11）

本土坑は69号土坑の南0.6mに位置する。出土した土器片（第40図173～178）はすべて加曽利Ｂ式で，しかも64片と多量であるので，投棄によるものであろう。したがって，埋まっている時期は加曽利Ｂ式期と考えたい。

72号土坑（第23図，図版11）

本土坑は71号土坑の西1.54mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積である。1層中に土器片を混入している。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，2型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

73号土坑（第23図）

本土坑は2号埋甕炉跡の西0.78mに位置する。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，2型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

74号土坑（第23図，図版11）

本土坑は66号土坑の南西1.62mに位置する。東壁寄りの底面には径57cm，深さ77cmの小ピットを有する。発掘担当者の註記によれば，北壁寄りの底面に焼土があり，その部分はロームが焼かれて硬くなっており，焼土の上に大きな土器片(第41図実測7)があることから，埋甕炉跡と判断している。しかし，筆者はその判断に少し疑問を感じている。なぜならば，埋設するために掘ったであろう小ピットがあまりにも深いことである。また，その小ピット中に混入していた遺物が軽石や埋甕としている土器片とは違ったもので，おそらく，それらは投棄によって混入したのであろうと考えるからである。覆土は土層断面図を見ると流れ込みによる堆積であると理解したい。2，3層中には焼土が，3～5層中には炭化粒が含まれている。また，1，2層中には多量の土器片を混入している。おそらく，投棄によるものであろう。1，2層から出土した土器片と7層から出土した土器片とが接合した(第28図実測7)ことから，開口時期は加曽利EⅣ式期と考えたい。

75号土坑（第23図，図版11）

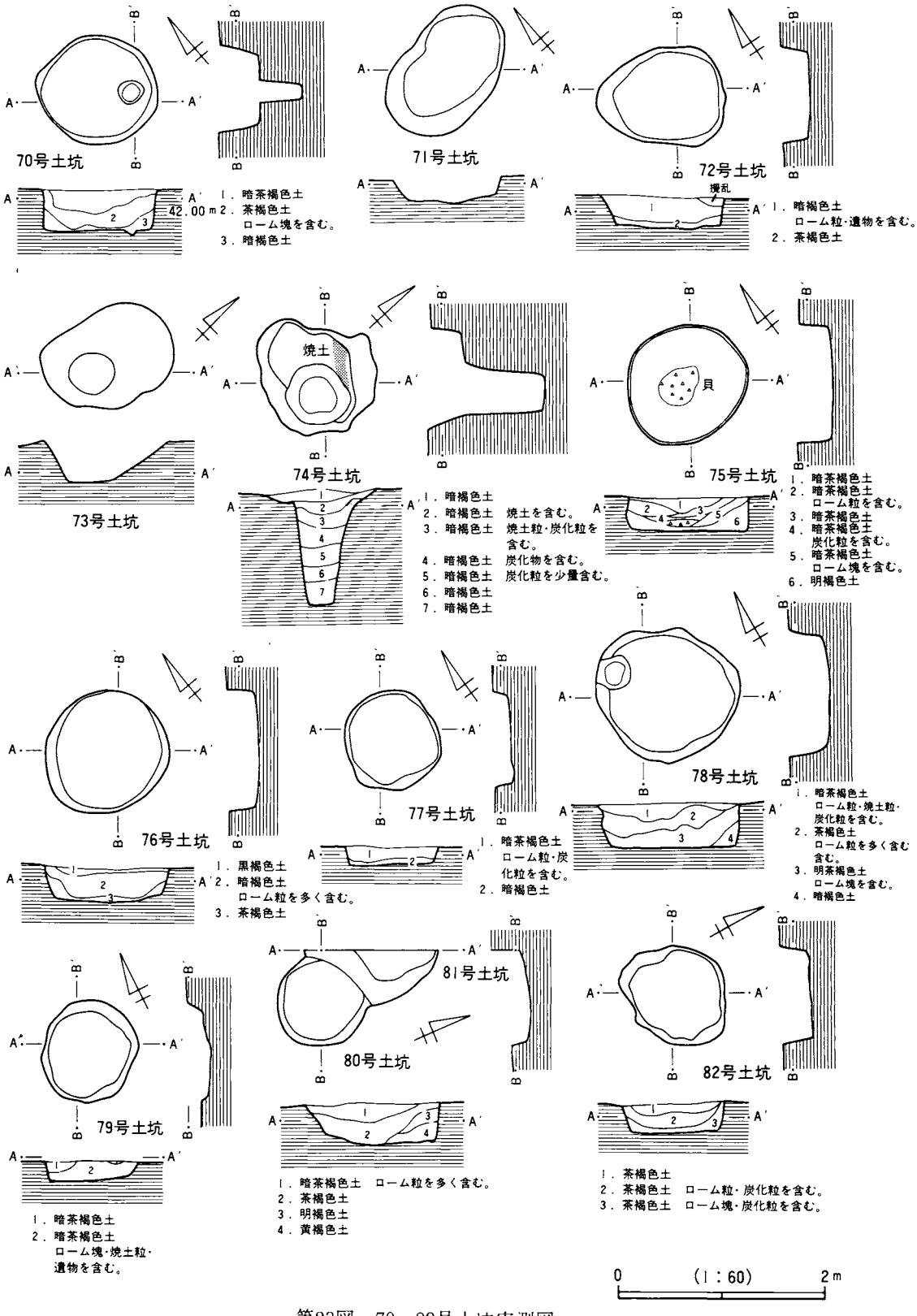
本土坑は72号土坑の南0.06mに位置する。覆土は土層断面図を見ると「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。4，6層中には炭化粒が含まれている。また，本土坑の中央部の底面上5cmのところに厚さ10cmの貝層がある。覆土上部より土器片を出土しているが，小片で数点しか出土していないので，時期決定は判断できない。

76号土坑（第23図，図版11・19）

本土坑は75号土坑の西0.05mに位置する。覆土は土坑断面図を見ると「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。本土坑の検出時において，第28図8の土器片が出土した。しかし，これが時期決定の土器片になるかどうかはわからない。なぜならば，覆土中一括で取り上げられた土器片中には3型式がまじっており，出土状況が不明であるからである。

77号土坑（第23図，図版12）

本土坑は76号土坑の南西1.56mに位置する。覆土は土層断面図を見ると流れ込みによる堆積であろう。1層に炭化粒を混入している。



第23図　70～82号土坑実測図

78号土坑（第23図，図版12）

本土坑は77号土坑の南東0.05mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。1層に焼土粒，炭化粒を混入している。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，2型式がまじっており出土状況がわからないので，時期は不明である。なお，南東壁寄りの底面に穿孔された小ピットは本土坑に伴うものかどうかは不明である。

79号土坑（第23図，図版12）

本土坑は78号土坑の南西0.96mに位置する。覆土は全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。2層には焼土粒および土器片が混入している。出土した土器片は覆土中で取り上げられ，2型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

80号土坑（第23図，図版12）

本土坑は77号土坑の西1.48mに位置する。

81号土坑（第23図，図版12）

本土坑は80号土坑の北側で切り合っている。新旧関係は不明である。北西側は未調査である。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。出土したであろう土器片は80号土坑と一括して取り上げられているので，各土坑の時期は不明である。

82号土坑（第23図）

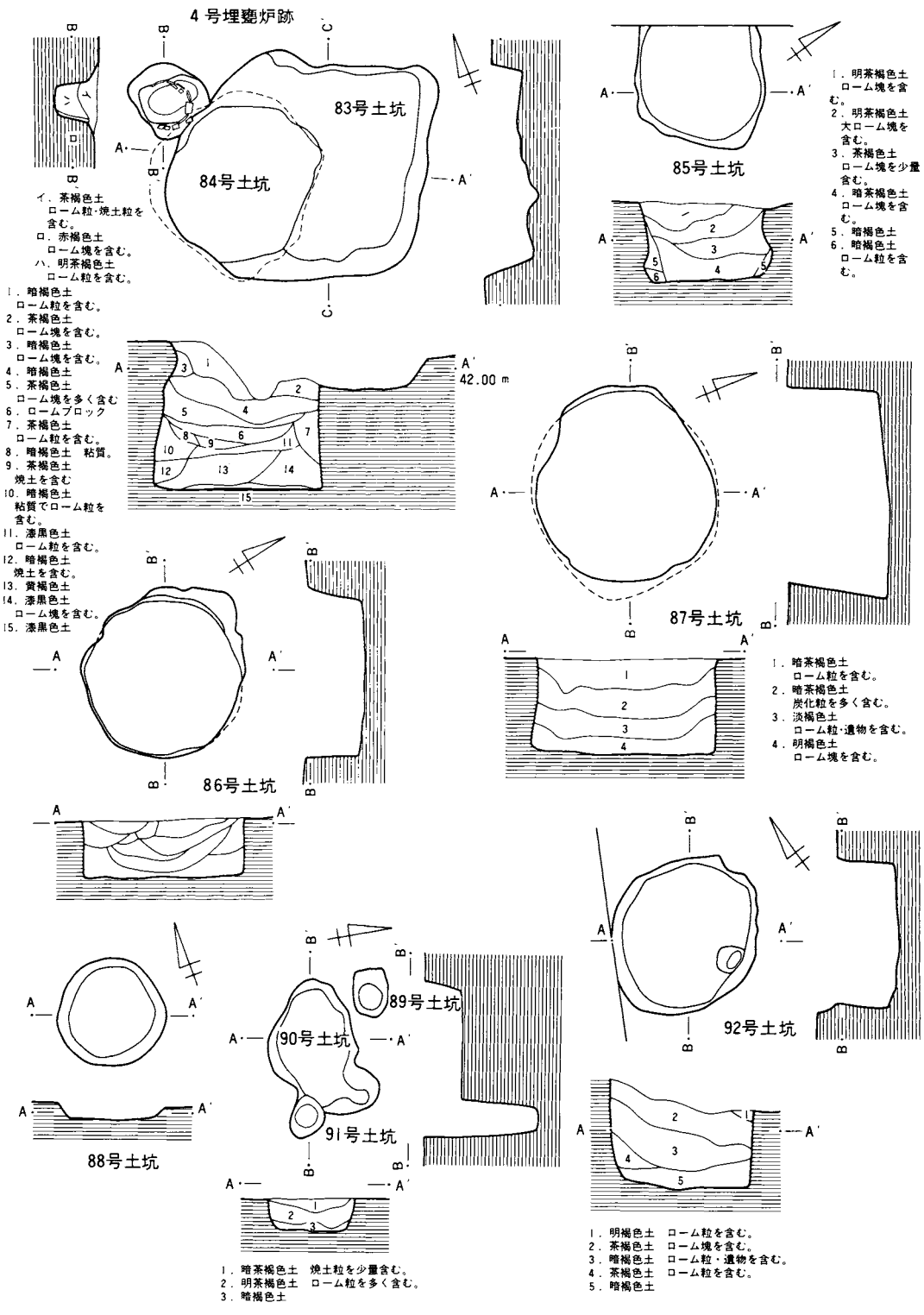
本土坑は81号土坑の北西1.68mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。2，3層に炭化粒を混入している。出土した土器片は小片であるので，おそらく流れ込んできたものであろう。それらは覆土中一括で取り上げられているが，すべて称名寺式なので，埋まっている時期は称名寺式期以降であると考えたい。

83号土坑（第24図，図版12）

本土坑は82号土坑の北西2.28mに位置する。出土したであろう土器片は84号土坑と一括して取り上げられているので，時期は不明である。

84号土坑（第24図，図版12）

本土坑は83号土坑の西側で切り合っている。新旧関係は註記によれば，本土坑のほうが古いとしている。覆土は土層断面図を見ると不自然的に分層され，ローム塊が全体に混入されていることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。9，12層に焼土を混入している。発掘担当者の註記によれば，これは焚かれたものではなく埋土中に混入されたものと思われるとしている。覆土中で大形の土器片を出土したが，本土坑に関係するものではなく，投棄によるものである。底面上20cm付近で出土した土器片(第29図実測9，第42図197)を時期決定の手段とす



第24図　4号埋甕炉跡・83～92号土坑実測図

ると，開口時期は加曽利ＥⅣ式期であると考えたい。

85号土坑（第24図，図版12）

本土坑は83号土坑の南西4.2mに位置する。西側は未調査である。覆土は全体にローム塊が混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。出土した土器片は覆土中一括で取り上げられ，４型式がまじっており，出土状況がわからないので，時期は不明である。

86号土坑（第24図，図版12）

本土坑は85号土坑の南東3.88mに位置する。覆土上部に完形に近い土器（第29図実測11）を出土した。これは本土坑に関係するものではなく，投棄によるものである。したがって，完全に埋まった時期を加曽利ＥⅣ式期と考えたい。

87号土坑（第24図，図版13）

本土坑は86号土坑の南東3.58mに位置する。覆土はやや水平的に分層されていることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。２層に炭化粒が，３層に土器片が多量に混入している。おそらく，投棄によるものであろう。出土した土器片（第43図214～216）はすべて加曽利ＥⅣ式なので，開口時期を加曽利ＥⅣ式期と考えたい。

88号土坑（第24図）

本土坑は87号土坑の北東1.44mに位置する。覆土は単一層であり，堆積状況はわからない。出土した土器片（第44図217）は少量であるので，流れ込みによるものであろう。これらは覆土中一括で取り上げられているが，すべて堀之内Ⅰ式なので，埋まっている時期を堀之内Ⅰ式期以降と考えたい。

89号土坑（第24図，図版13）

本土坑は87号土坑の東0.22mに位置する。

90号土坑（第24図，図版13）

本土坑は89号土坑の南0.08mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。１層に焼土粒および土器片を混入している。２層からは石棒（第87図156）の破損品を出土した。出土した土器片は89，91号土坑と一括して取り上げられ，４型式がまじっているので，各土坑の時期は不明である。

91号土坑（第24図，図版13）

本土坑は90号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。

92号土坑（第24図，図版13）

本土坑は86号土坑の西3.7mに位置する。南壁寄りの底面に径24×21cm，深さ12cmの小ピットを有する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。３層に多量の土器片を混入している。おそらく，投棄によるものであろう。３層から出土した土器片（第44図222・223・225・226）から判断すれば，埋まっている時期は加曽利ＥⅣ

式期であると考えたい。

93号土坑（第25図）

本土坑は92号土坑の南0.38mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。出土した土器片は検出時に出土したものと覆土中に出土したものが覆土中一括で取り上げられているので，3型式がまじっている。しかし，投棄によって2層に混入したであろう土器片(第29図実測12)から判断すれば，埋まっている時期は堀之内Ⅰ式期であると考えたい。

94号土坑（第25図）

本土坑は93号土坑の西0.48mに位置する。出土した土器片は大形で，多量であるので，投棄によるものであろう。ほとんどの土器片は覆土中一括で取り上げられ，出土状況はわからないが，第45図241の土器片は底面直上と出土状況が図面に記されているので，開口時期を称名寺式期と考えたい。

95号土坑（第25図，図版13）

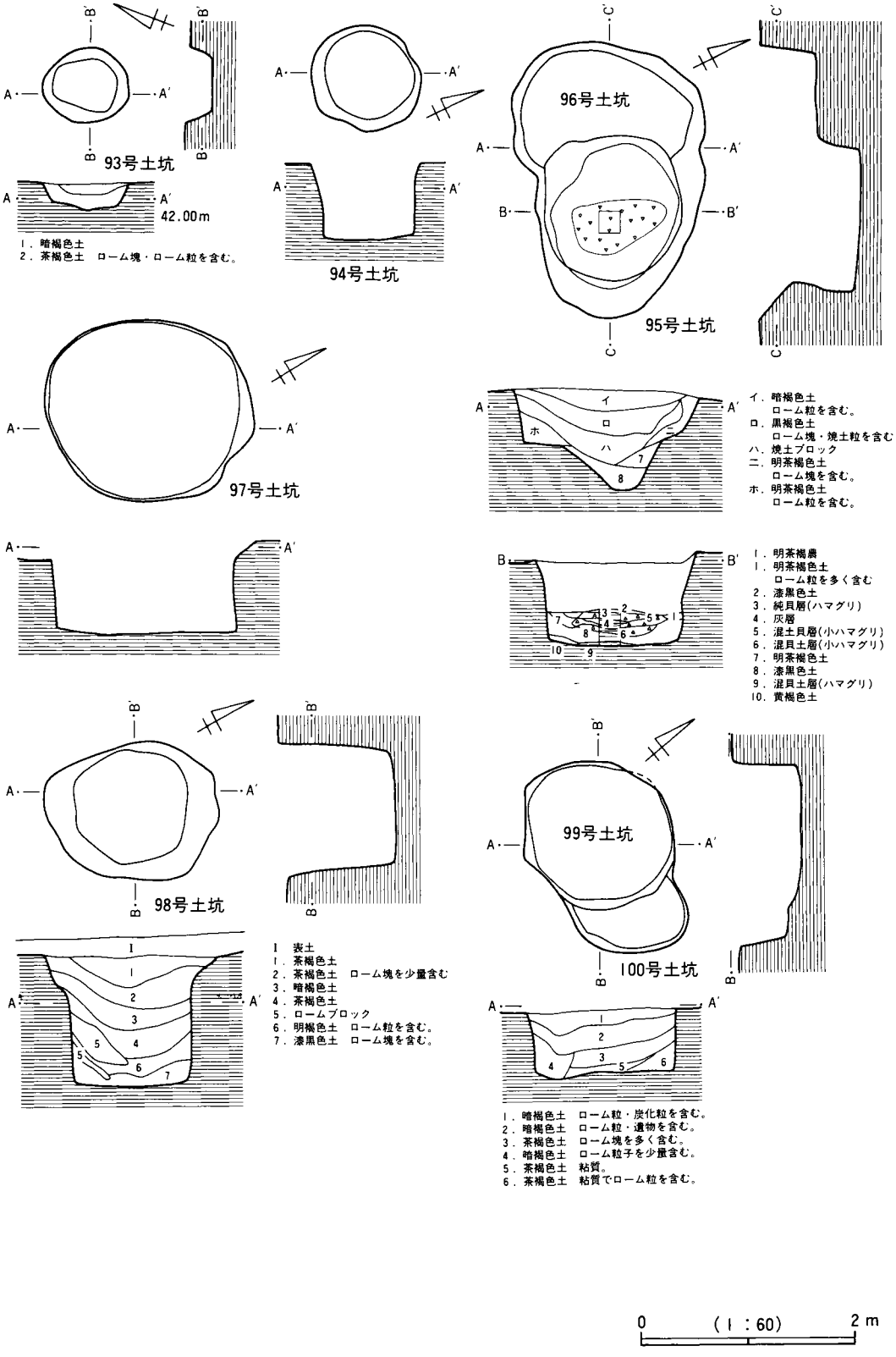
本土坑は93号土坑の南0.66mに位置する。覆土は本土坑上半部の覆土は96号土坑調査時において土層断面を残さないまま堀られてしまっている。したがって下半部の土層を見ると水平的に，あるいはブロック状に分層されているので，埋め戻しによる堆積と理解したい。4層は灰層で，3，5，6，9層は貝層である。出土した土器片はほとんどが，96号土坑とまざって取り上げられている。しかし，第29図実測13，第45図244・255・261の土器片は本土坑の下部または底面直上から出土したものであるので，開口時期を加曽利EⅣ式期と考えたい。

96号土坑（第25図，図版13）

本土坑は95号土坑の西側で切り合っている。新旧関係は，ハ層の焼土が95号土坑のほうまで広がっていたので，本土坑のほうが新しいとしている。覆土は土層断面図を見ると「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。ハ層は焼土層で，ロ層中にも焼土粒を混入している。また，イ～ハ層中には多量の土器片が混入している。おそらく，投棄によるものであろう。発掘担当者の註記によれば，ハ層の焼土はここで火を焚いたものであり，中に含まれた土器が焼けていると記している。しかし，筆者はそのようには考えず，他からもってきて投棄したものと考えたい。なぜならば，本土坑で焚いたのであれば，ニ，ホ，7，8の各層が熱によって硬くなっているはずなのに，土層説明においてそのような記述がないこと。焼土中に混入していた土器が完形もしくは完形に近いものではなく，小片であることの理由からである。出土状況が覆土の中位から出土したと記述されている第45図252の土器片から判断すると，埋まっている時期を加曽利EⅣ式期と考えたい。

97号土坑（第25図，図版13）

本土坑は95号土坑の南東0.9mに位置する。多量の土器片が覆土中一括で取り上げられ，2型



第25図　93～100号土坑実測図

式がまじっており，出土状況はわからないが，第47図269の土器片は開口部下14cmと記述されており，おそらく，投棄によるものと思われることから，完全に埋まった時期を加曽利EIV式期と考えたい。なお，検出時において南壁寄りにやや傾き加減の正位の状態で出土した土器(第53図3)は本土坑に伴うものかどうかは判断に苦しむところである。しかし，発掘担当者の註記によれば，本土坑の埋甕としている。

98号土坑（第25図，図版13）

本土坑は96号土坑の南西2.36mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。1，2層中に土器片が混入している。しかし，3型式の土器型がまじっているので，時期は不明である。なお，註記によれば，1層は撹乱の可能性があり，本土坑は最近のものと思われるとしている。

99号土坑（第25図，図版13）

本土坑は97号土坑の南西4.5mに位置する。覆土は「レンズ」状に分層されていることから，流れ込みによる堆積であると理解したい。1，2層に多量の土器片が混入している。おそらく，投棄によるものであろう。100号土坑にも出土したであろう土器片が本土坑と一括して取り上げられている。しかし，出土状況がわかる土器片(第47図279～281，283～285)から判断すると，完全に埋まった時期は加曽利EIV式期であると考えたい。

100号土坑（第25図，図版13）

本土坑は99号土坑の東側で切り合っている。新旧関係は不明である。

101号土坑（第26図，図版13）

本土坑は7号炉跡の西1.9mに位置する。覆土は不自然的に分層され，1，2層の全体のローム塊を混入していることから，埋め戻しによる堆積であると理解したい。1，2層中に炭化粒を含んでいる。出土した土器片はほとんどが覆土中一括で取り上げられ，2型式がまじっており出土状況がわからない。しかし，出土状況がわかる土器片(第48図289，290)は1層中からのものであるので，完全に埋まった時期を称名寺式期と考えたい。

102号土坑（第26図，図版14）

本土坑は101号土坑の南東0.72mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積であろう。出土した土器片は少量で，覆土中一括で取り上げられ，3型式がまじっているので，時期は不明である。

103号土坑（第26図，図版14）

本土坑は101号土坑の南西2.76mに位置する。出土した土器片は大形で，多量であり，本土坑の中央部の上層に集中していることから，投棄によるものと考えたい。したがって，出土状況のわかる土器片(第30図実測14，第48図292～294・296)から判断すれば，完全に埋まった時期を加曽利EIV式期としたい。

104号土坑（第26図）

本土坑は７号埋甕炉跡の南西0.4mに位置する。覆土は土層断面図を見ると流れ込みによる堆積であろう。２層に炭化粒を，また１層に骨粉を混入している。多量の土器片が覆土一括で取り上げられている。おそらく，投棄によるものであろう。出土した土器片(第48図297～299)すべてが加曽利ＥⅣ式なので，埋まっている時期を加曽利ＥⅣ式期と考えたい。なお，東側は未調査である。

105号土坑（第26図，図版14）

本土坑は103号土坑の南西1.64mに位置する。覆土は土層断面図を見ると流れ込みによる堆積であると理解したい。２，５層は貝層である。出土した土器片は投棄によって覆土中に混入したものである。12層中から出土した土器片(第49図301)から判断すると，開口時期は加曽利ＥⅣ式期と考えたい。

106号土坑（第26図，図版14）

本土坑は105号土坑の南西0.76mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積であると理解したい。１層に焼土粒が，３層に炭化物が混入している。土器片は全体に散らばっている。おそらく，投棄したものであろう。底面直上から出土した土器片(第30図実測16)から判断すれば，開口時期を加曽利ＥⅣ式期と考えたい。なお，北壁において舌状に延びる落ち込みに焼土がある。この部分の壁は熱によって硬くなっている。註記によれば，北側壁上面に焼土があり，１層まで続いていることから，本土坑上で火を焚いたかもしれないとしている。

107号土坑（第26図，図版14）

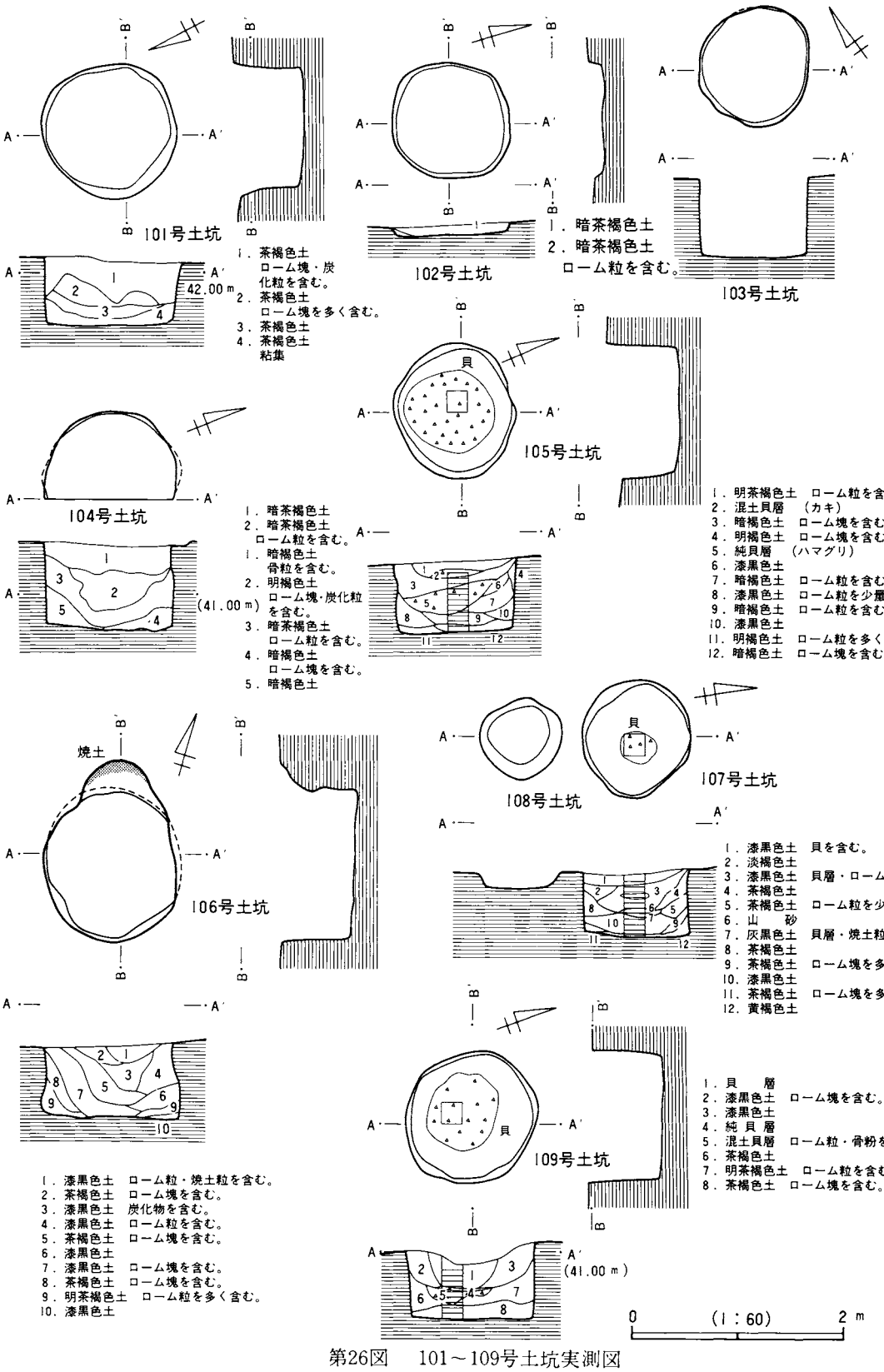
本土坑は106号土坑の南西2.94mに位置する。覆土は流込みによる堆積であると理解したい。１，３，７層に貝が，また７層に焼土粒が混入されている。出土した土器片はおそらく投棄によるものであろう。底面上18cmから出土した土器片(第50図320)で埋まっている時期を判断したいのであるが，型式が不明であるため，その他の土器片を考慮して，後期前葉と考えたい。

108号土坑（第26図，図版14）

本土坑は107号土坑の南0.12mに位置する。出土した土器片は少量であることから，流れ込んだものと思われる。第50図321は出土状況を見ると底面直上からの出土であるので，開口時期を堀之内Ⅰ式期以降と考えたい。

109号土坑（第26図，図版14）

本土坑は108号土坑の南西6.52mに位置する。覆土は流れ込みによる堆積であると理解したい。１層は撹乱による貝層であるが，５層は純貝層である。もちろん，貝層は投棄によるものである。出土した土器片(第31図実測18)は底面直上であるので，開口時期を加曽利ＥⅣ式期と考えたい。



第26図　101～109号土坑実測図

第2表　土坑一覧

単位：cm

番号	グリッド	開口部	底部	深さ	平面図	断面形	出土土器	時期	備考
1	A1-06			34		タライ状			深さ65のピットを有する
2	A1-06・16	100	94	35	円形	タライ状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	
3	A1-08	93×85	70×67	45	不整円形	タライ状	加曽利B	加曽利B式期	
4	B1-01	98×85	77	32	不整円形	タライ状	加曽利B	加曽利B式期以降	
5	A1-03・13	112×98	88×77	26	卵形	鍋底状			
6	A1-16	106×95	78×66	183	不整円形	U字状			底部で骨粉検出
7	A1-17・27	80×60	44		卵形			加曽利B式期以降	覆土中から土偶出土
8	A1-17・27・28	89×67(推定)	75×56(推定)	57	不整円形	円筒状			
9	A1-17・18・28	150	143	63	円形	円筒状	不整円形EIV，加曽利B，安行I		
10	A1-18・28	85×65(推定)	46×42(推定)	185	不整円形	U字状			
11	A1-18・28	87	33	212	不整円形	U字状			
12	B1-12・13	87×71	56×50	47	不整円形	U字状	加曽利B	加曽利B式期以降	
13	B1-14	76	67	70	円形	円筒状	加曽利B	加曽利B式期	西壁で一部オーバーハングする
14	A1-25・35	87×83	78×71	29	不整円形	タライ状			
15	A1-26	114×105	112×104	71	不整円形	袋状	加曽利EIV，称名寺	加曽利B	
16	B1-21	37×33(推定)	26×14(推定)	46	不整円形	U字状	加曽利B，安行I		
17	B1-21	47(推定)	32(推定)	78	円形	U字状			
18	A1-34	141×102	129×98	24	楕円形	タライ状	加曽利B	加曽利B式期以降	推定径31，深さ10と推定径37，深さ58の小ピットを有する
19	A1-38・39	98×86	71	143	不整円形	円筒状	加曽利B，安行I		
20	A1-36・46	43×37(推定)	17		不整円形				
21	A1-46・47	157×116	129×121	88	不整円形	袋状		加曽利EIV式期	
22	A1-47	66(推定)	49×41		円形				
23	A1-47	41×36	29		不整円形		加曽利EIV，加曽利B，安行I		
24	A1-47	73×50(推定)	60×23(推定)		楕円形				
25	A1-47	56×44	36×31	67	卵形				
26	A1-47	45(推定)	22(推定)		円形				
27	B1-42・52	134	106	97	円形	円筒状	加曽利B，安行I		西壁で一部オーバーハングする
28	A1-74	85×61	31×28	69	楕円形	U字状	加曽利B	加曽利B式期	
29	A1-59	153(長辺)	135(長辺)	38	方形(推定)	タライ状	加曽利B，安行I	安行I式期	径40×32の小ピットと径70，深さ115のピットを有する
30	A1-58・59・68・69・79 B1-60・70	368×195	324×132	113	長楕円形	タライ状			径96，深さ124のピットを有する
31	A1-79	62×45	40×30		不整円形		加曽利B，安行I		
32	A1－83・93	120×91	116×74	42	不整円形	円筒状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	径61×47，深さ44の小ピットを有する
33	A1-75・84・85・94・95	271×238	256×219	37	不整方形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，堀之内I，加曽利B，安行I		
34	A1-95	149×116	132×101	42	不整円形	タライ状			
35	A1-95	69×50	60×36	76	楕円形	円筒状			
36	A1-96	54×38	23×18	76	楕円形	U字状	称名寺，加曽利B		
37	A1-96・97	106	91	38	円形	円筒状		称名寺式期	
38	A1-77・87	59×55	44×26		楕円形				
39	A1-88	115	92	35	円形	タライ状	加曽利B	加曽利B式期	
40	A2-02	91	83	27	円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		

単位：cm

番号	グリッド	開口部	底部	深さ	平面図	断面形	出土土器	時期	備考
41	A2-03・13	90×72(推定)	69×63(推定)		不整形				
42	A2-03・04・13・14	165×149	154×144	87	不整円形	袋状	加曽利EIV，加曽利B	加曽利EIV式期	
43	A1-94，A2-04・05・14・15	261×225	253×207	17	不整方形	皿状		加曽利B式期以降	
44	B2-00	95×73(推定)	30	51	卵形	V字状	加曽利B	加曽利B式期	
45	A2-06・07・16・17	138	110	64	円形	円筒状	堀之内I	堀之内I式期	
46	A2-12・13	104	91	24	円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺		
47	A2-22	80	67	12	円形	皿状	加曽利EIV	称名寺	
48	A2-32・33・42・43	183×118	156×99	42	楕円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		
49	A2-33・34・43・44	167×141	149×135	64	楕円形	円筒状	加曽利EIV，加曽利B		南壁の一部でオーバーハングする
50	A2-34・44	130×110	119×99	33	不整円形	タライ状	加曽利B	加曽利B式期以降	底面が西壁に向って傾斜する
51	A2-25・26・35・36	240×208	230×204	40	不整円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		
52	A2-35	29	21	65	円形	U字状		加曽利EIV式期	埋甕の可能性あり
53	A2-27・37	120	113	38	不整円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		南壁の一部でオーバーハングする
54	A2-28・38	98	82	22	円形	タライ状	称名寺，堀之内I		
55	A2-36・46	93(推定)	77(推定)	56	円形	バケツ状	加曽利B	加曽利B式期	東壁の一部でオーバーハングする
56	A2-17・18	118×89(推定)	105×69(推定)	14	楕円形	皿状	称名寺，加曽利B		
57	A2-17・18・28	133×97(推定)	116×78(推定)	44	不整形	タライ状			
58	A2-17・27・28	112×100	97×76	34	不整円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		径27×24，深さ33の小ピットを有する
59	A2-45・46	158(推定)	103(推定)	37	不整円形	鍋底状	堀之内I，加曽利B		攪乱
60	A2-37・38	87×84(推定)	59×47(推定)		不整円形				
61	A2-37・38・47・48	181(推定)	168(推定)	52	不整円形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		
62	A2-38・48	115(推定)	97(推定)	57	円形	円筒状			
63	A2-42・43・52・53	143	133	63	不整円形	円筒状	加曽利B	加曽利B式期	南壁の一部でオーバーハングする
64	A2-47	72×51	61×39	25	不整形	鍋底状	加曽利B	加曽利B式期以降	
65	A2-52	88	80	55	円形	円筒状	加曽利EIV，加曽利B		
66	A2-52・53・62・63	282×131	270×94	34	長楕円形	皿状			
67	A2-56・57・66・67	137×117	124×109	39	卵形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		東壁の一部でオーバーハングする
68	A2-66・67・76・77	122	116	53	円形	袋状	加曽利EIV，加曽利B		
69	A2-67・77	99	91	40	円形	円筒状	加曽利EIV，堀之内I		
70	A2-68	111	99	39	円形	円筒状	加曽利EIV，加曽利B		西壁の一部でオーバーハングする
71	A2-77・78・87・88	140×89	119×71	30	楕円形	鍋底状	加曽利B	加曽利B式期	
72	A2-76・86	125×93	101×83	29	卵形	タライ状	称名寺，加曽利B		
73	A2-74	128×88	76	41	楕円形	バケツ状	称名寺，加曽利B		
74	A2-72	119×89	100×65	39	不整形	タライ状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	径57，深さ77の小ピットを有する
75	A2-86・87	120×117	107×104	35	不整円形	円筒状			覆土中に貝層あり
76	A2-86・96	123×113	113×104	32	不整円形	タライ状	加曽利EIV，堀之内I，加曽利B		
77	A3-05・06	92	84	20	円形	タライ状			
78	A3-06・07	135×121	121×109	40	不整円形	円筒状	称名寺，加曽利B		
79	A3-16・17	97×81	87×76	23	不整円形	鍋底状	加曽利EIV，加曽利B		
80	A3-05・15	86	73	18	円形	鍋底状	加曽利EIV		
81	A3-05・15	121×93(推定)	98×65(推定)	42	不整方形	タライ状			
82	A3-03・04・13・14	111×89	89×81	32	不整円形	タライ状	称名寺	称名寺式期以降	
83	A2-91・92，A3-01・02	205×189(推定)	187×172(推定)	34	不整方形	タライ状	加曽利EIV		
84	A2-91・92，A3-01，02	146×155	125×146	131	不整円形	袋状		加曽利EIV式期	

単位：cm

番号	グリッド	開口部	底部	深さ	平面図	断面形	出土土器	時期	備考
85	A3-20・21・30・31	135×118(推定)	122×109(推定)	54	不整円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺，堀之内I，加曽利B		ほぼ全周の½はオーバーハングする
86	A3-33・43	149	144	57	円形	袋状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	
87	A3-45・46・55・56	183×173	171×164	94	不整円形	袋状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	
88	A3-35・36・45・46	98	79	16	円形	皿状	堀之内I	堀之内I式期以降	
89	A3-46・56	42×24	32×21		不整円形				
90	A3-46・56	124×106	82×61	37	不整形	タライ状	加曽利EIV，称名寺，堀之内I		
91	A3-46・56	36×19	30×18	106	不整円形	U字状	加曽利B		
92	A3-41・51	150×132	132×112	75	不整円形	円筒状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	東壁の一部でオーバーハングする 径24×21，深さ12の小ピットを有する
93	A3-51	80×59	70×50	26	不整円形	鍋底状	加曽利EIV，称名寺，堀之内I	堀之内I式期	
94	A3-51・61	98	82	70	円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺	称名寺式期	
95	A3-52・62	167×131	145×122	96	不整円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺	加曽利EIV式期	覆土中に貝層あり
96	A3-51・52・61・62	181×160(推定)	139×117	56	楕円形	タライ状	堀之内I，加曽利B	加曽利EIV式期	
97	A3-53・54・63・64	185	166	88	円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺	加曽利EIV式期	
98	A3-70・71・80・81	163×105	123×101	110	不整円形	円筒状	加曽利EIV，堀之内I，加曽利B		
99	A3-84・94	138	132	67	円形	袋状	加曽利EIV，称名寺	加曽利EIV式期	
100	A3-84・85・94	100×83(推定)	93×71(推定)	46	楕円形	円筒状			
101	A4-04・05・14・15	126	117	68	円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺	称名寺式期	
102	A4-05・06・15	112	104	17	円形	皿状	加曽利EIV，称名寺，加曽利B		
103	A4-23・24	112×108	101×98	72	不整円形	袋状	加曽利EIV，称名寺	加曽利EIV式期	
104	A4-37・38・47・48	123(推定)	132(推定)	68	円形	袋状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	
105	A4-33・43	126×116	115×109	70	不整円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺	加曽利EIV式期	覆土中に貝層あり
106	A4-43・53	169×138	121×125	72	不整円形	袋状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	
107	A4-63・73	104×95	100×88	63	不整円形	円筒状	加曽利EIV，称名寺，堀之内I	後期前葉	覆土中に見層あり
108	A4-73	78×59	72×52	16	不整円形	鍋底状	加曽利EIV，堀之内I	堀之内I	堀之内I式期以降
109	A5-01・02・11・12	123	115	70	円形	円筒状	加曽利EIV	加曽利EIV式期	覆土中に貝層あり

出土遺物

土器

2号土坑（第27図実測1，図版17）

実測1は推定口径29.5cm，現在高22.0cmを測る深鉢形土器である。傾きは胴部がやや膨らみをもち，口唇下14cmのところで一担くびれ，そこから口縁に向って外反する。文様は口唇に沿って1条の沈線が全周し，口唇下1cm幅の無文帯を構成している。それ以下は単節ＬＲの斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が「Ｖ」字状，あるいは「Ｗ」字状に施されている。加曽利ＥⅣ式に比定される。遺存度1/4。

3号土坑（第32図1～6）

1は口縁部に指頭圧痕を有する隆帯文が貼付されている口縁部片である。胴部以下の文様は単節ＬＲ（横回転）の斜縄文が施されている。

2は口縁部文様が2条の平行沈線内に刻み目文を施されている口縁部片である。胴部以下の文様は単節ＬＲ（横回転）の斜縄文が施されている。

3は全面に単節ＬＲ（横回転）の斜縄文が施されている口縁部片である。

4～6は粗雑な縄文地もしくは無文地に斜行の沈線文が施されている胴部片である。

1～6はすべて加曽利Ｂ式に比定される。

4号土坑（第32図7・8）

7は斜縄文上に斜行の沈線文が施されている胴部片である。

8は2条の平行沈線内に斜線文が施されている胴部片である。

7・8はすべて加曽利ＥⅣ式に比定される。

7～11号土坑（第27図実測2，図版17第32図9～22）

実測2は口縁部片である。口縁部文様は2隆帯上に刻み目文が施されている。胴部文様は斜行のヘラケズリを行なった後に，3条の沈線を1単位とした懸垂文が施されている。なお，右側に補修孔が見られる。

9は斜縄文地に微隆起線区画による曲線的な磨消縄文が施された口縁部片である。

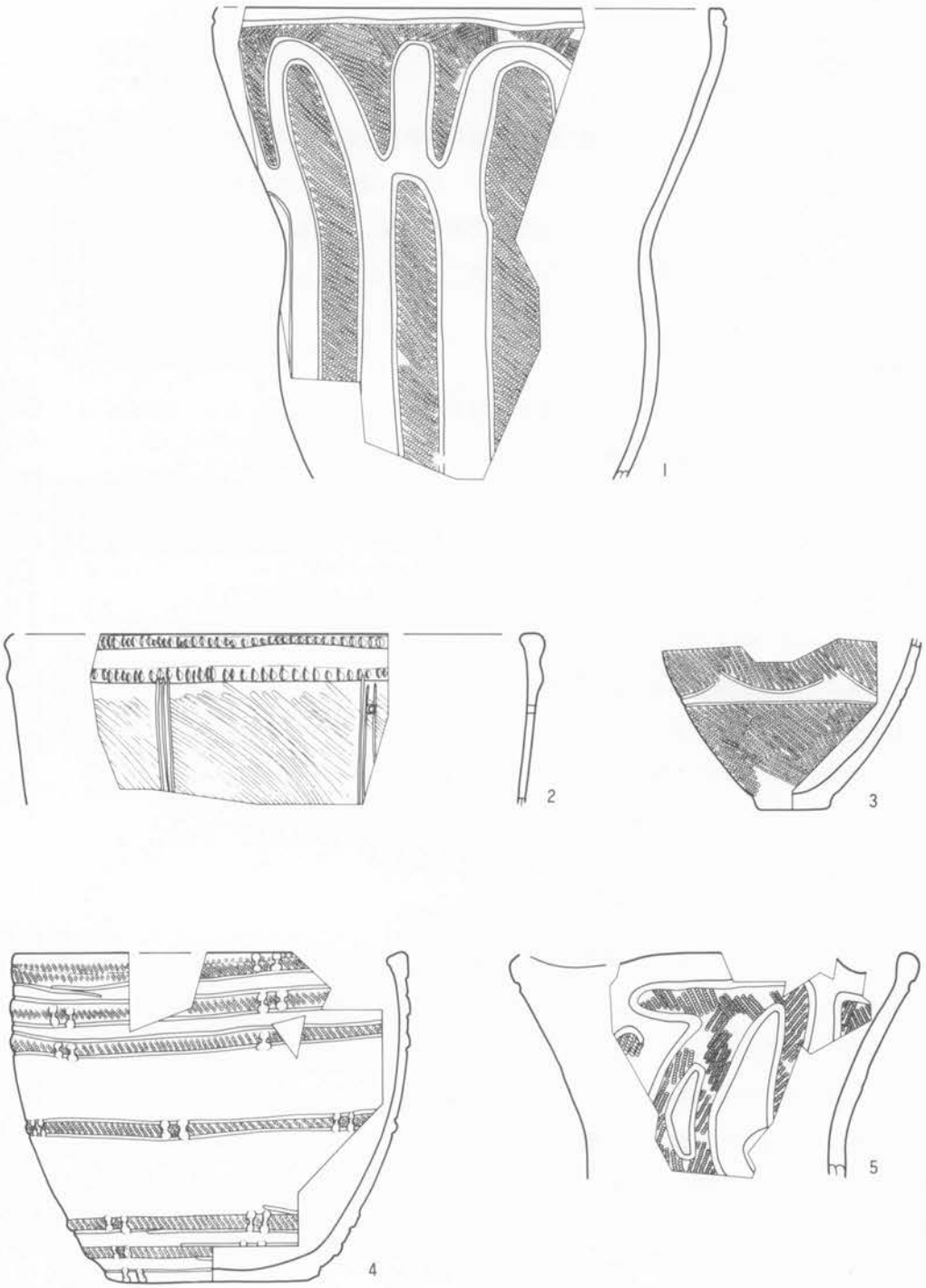
10は櫛目文が曲線的に施された胴部片である。

11・12は口縁部に指頭圧痕を有する隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文もしくは斜縄文上に斜行の沈線が施されている。なお，内面は口唇に沿って1条の沈線が全周している。

13は粗雑な斜縄文（単節ＲＬ）上に格子状の沈線が施されている胴部片である。

14は沈線区画内に曲線的な充填縄文が施されている胴部片である。

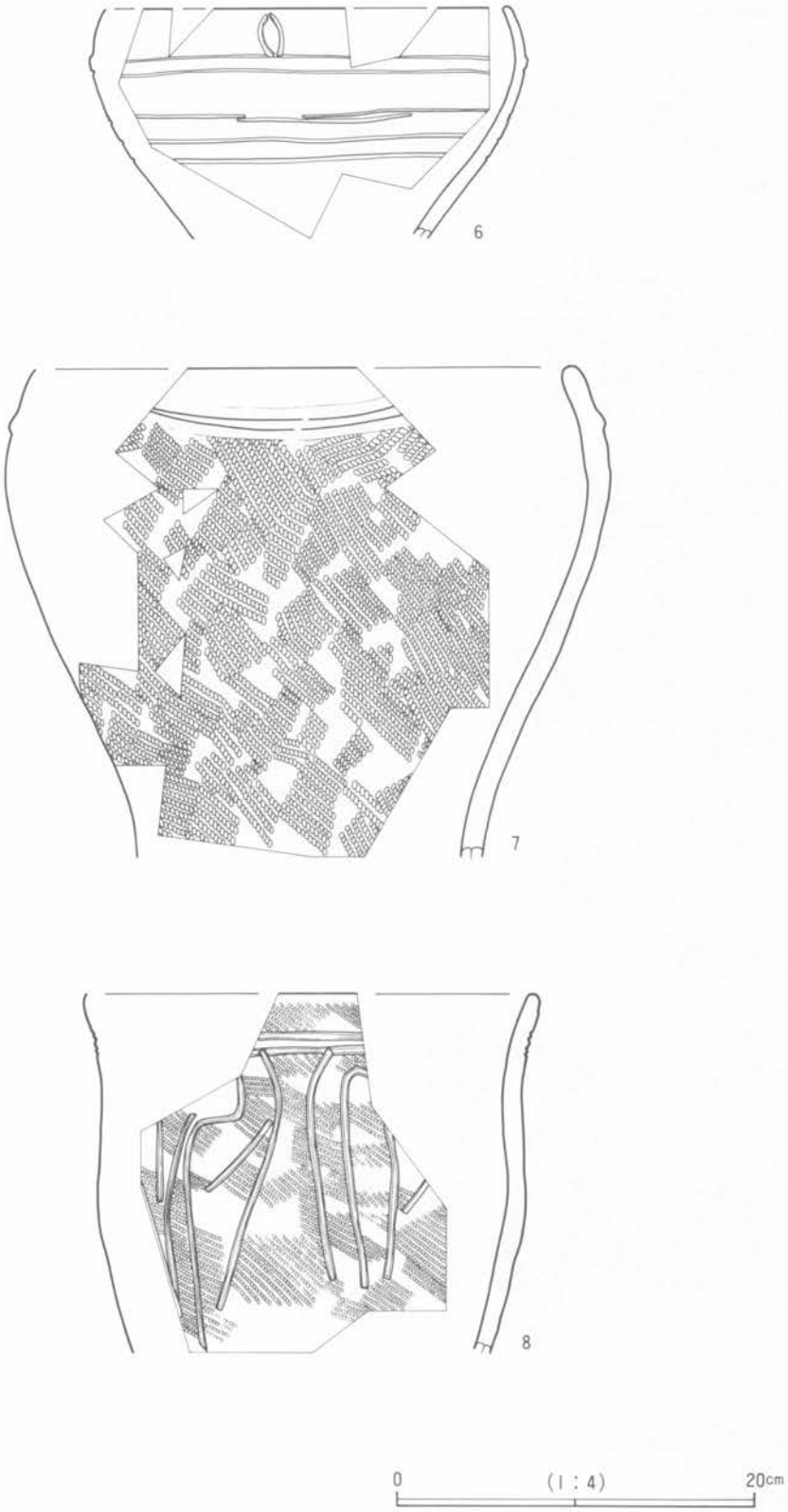
15～18は微隆帯上に縄文もしくは刻み目文が施されている口縁部片である。また，微隆帯に沿って沈線が施されている。



第27図　土坑内出土土器実測図(1)

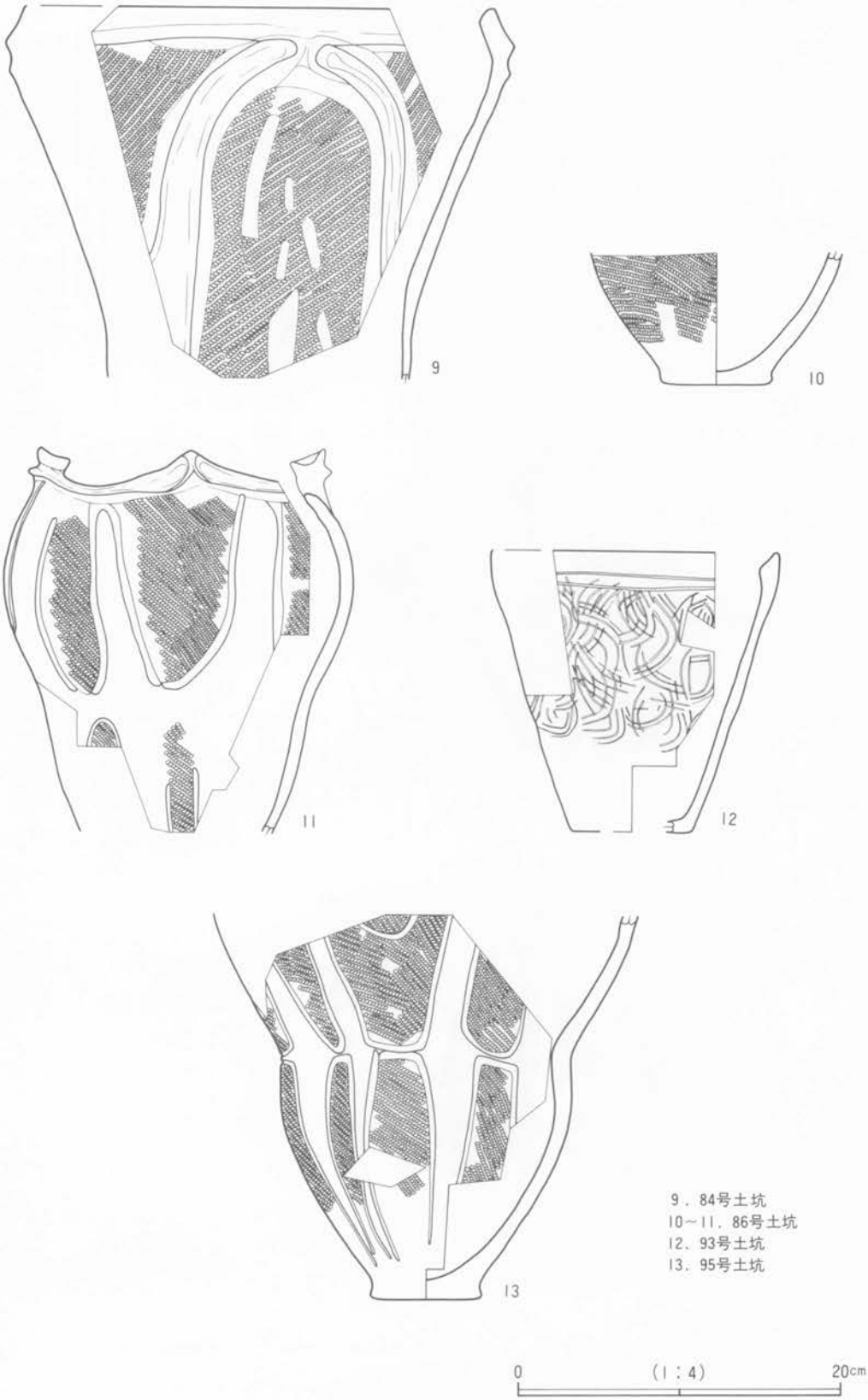
0　(1：4)　20cm

1．2号土坑　2．9号土坑　3～4．29号土坑　5．47号土坑

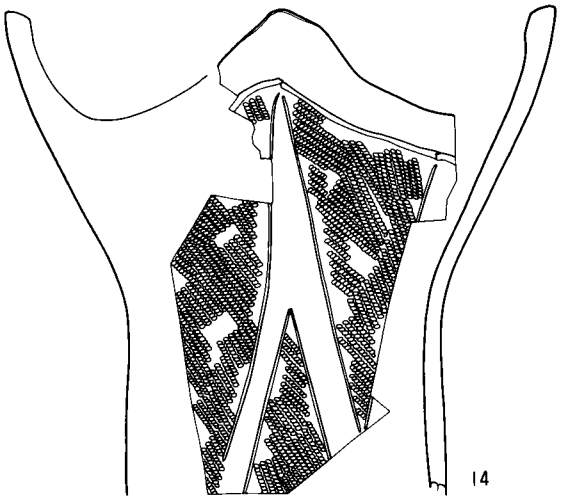


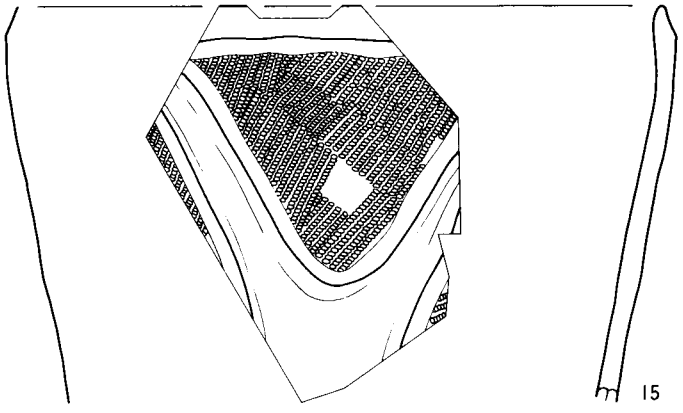
第28図　土坑内出土土器実測図(2)

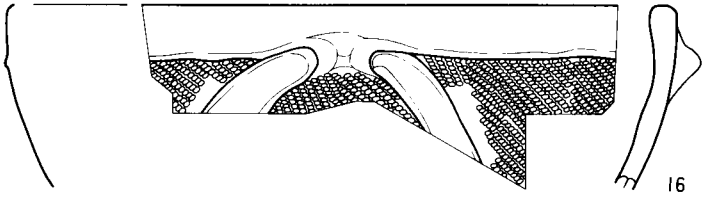
6．59号土坑　7．74号土坑　8．76号土坑



第29図　土坑内出土土器実測図(3)

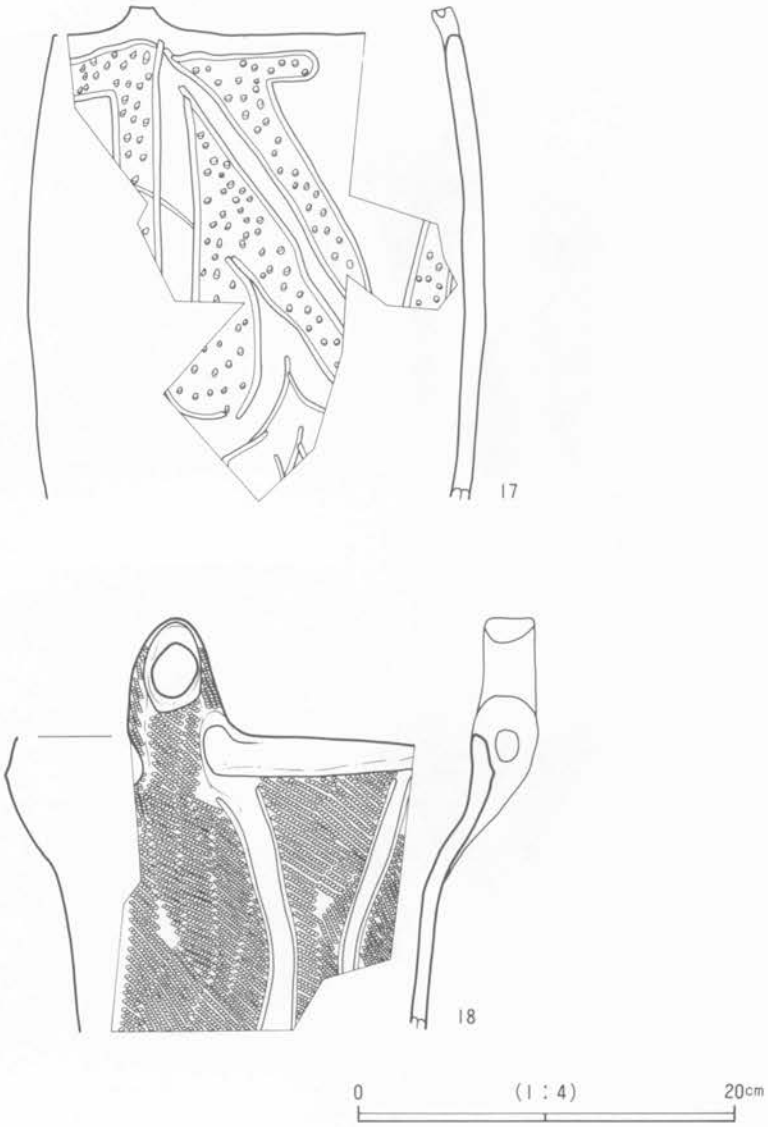






0 (1：4) 20cm

第30図　土坑内出土土器実測図(4)
14．103号土坑　15～16．106号土坑



第31図　土坑内出土土器実測図(5)

17．107号土坑　18．109号土坑

19・20は口縁部に指頭圧痕を有する微隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は斜行もしくは曲線的な沈線が施されている。

21は口縁部に1条の沈線に沿って刻み目文が施されている口縁部片である。胴部は斜行の浅い沈線が施されている。

22は全面に斜行の浅い沈線が施されている口縁部片である。

9は加曽利EⅣ式に，11～13は加曽利B式に，15～22は安行Ⅰ・Ⅱ式に比定される。

12号土坑（第32図23～25）

23は口縁部に指頭圧痕を有する2本の隆帯文が貼付されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に斜行の沈線が施されている。

24・25は粗雑な斜縄文が施されている胴部片である。

23～25は加曽利B式に比定される。

13号土坑（第33図26～29）

26・27は口唇に刻み目を有し，沈線区画による帯縄文が施されている口縁部片である。

28は口縁部に指頭圧痕を有する隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に半截竹管による弧状の沈線文が施されている。なお，内面には3条の平行沈線文が施されている。

29は全面に斜縄文が施されている口縁部片である。内面には1条の沈線が口縁に沿って全周している。

26～29はすべて加曽利B式に比定される。

15号土坑（第33図30・31）

30は沈線区画による充塡縄文が施されている胴部片である。「J」字状の文様になる。

31は斜行の平行沈線文が施されている胴部片である。

30は称名寺式に，31は加曽利B式に比定される。

16・17号土坑（第33図32・33）

32は刻み目と沈線が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は斜行の浅い平行沈線が施されている。

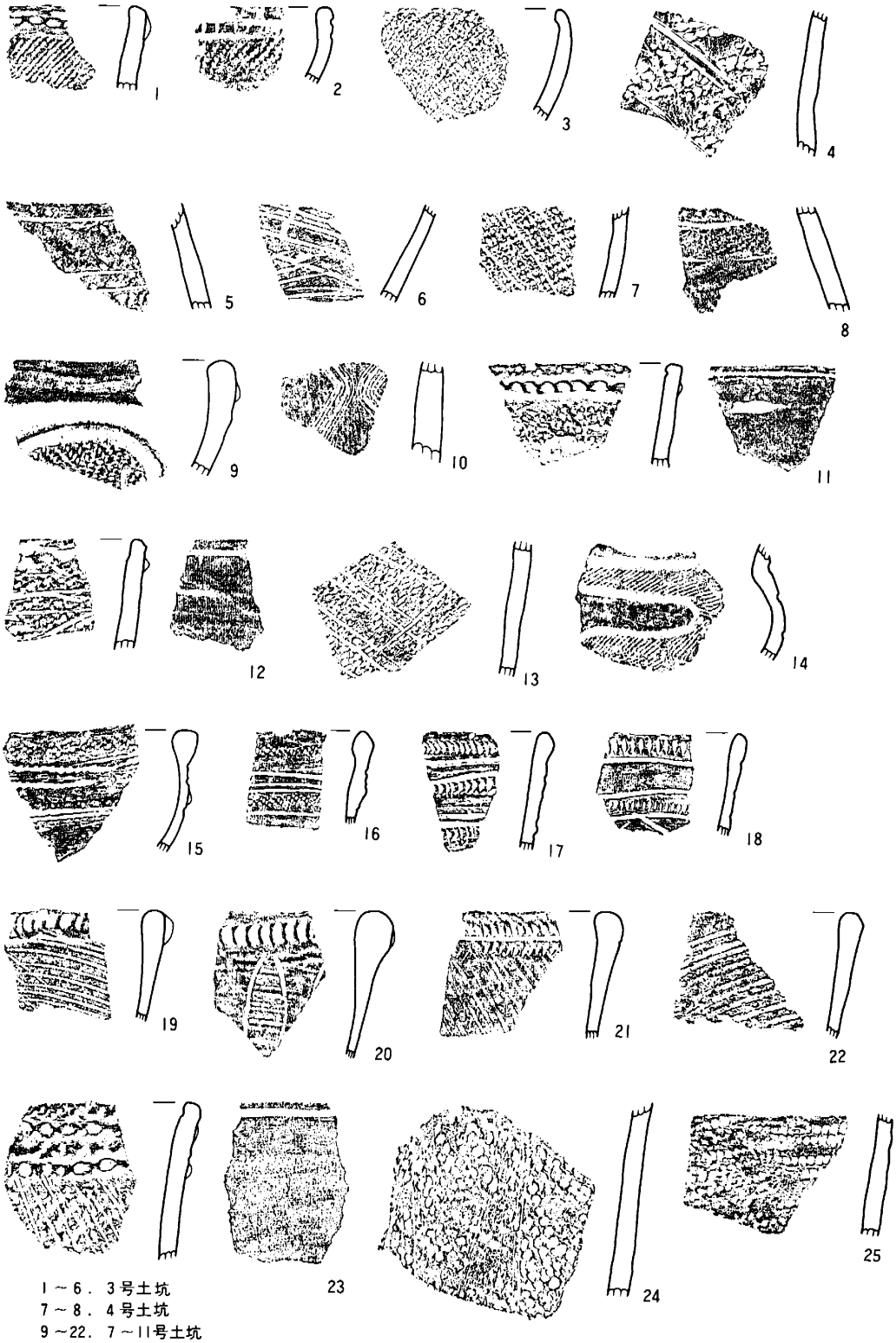
33は無文の底部片である。底部は小さい。

32・33は安行Ⅰ式に比定される。

18号土坑（第33図34・35）

34は口縁部に指頭圧痕を有する隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上にやや「V」字状の平行沈線文が施されている。なお，内面には口縁に沿って1条の沈線が全周する。

35は粗雑な斜縄文上に斜行の沈線文が施されている胴部片である。



1～6．3号土坑
7～8．4号土坑
9～22．7～11号土坑
23～25．12号土坑

0 (1：3) 10cm

第32図　土坑内出土土器拓影図(1)

26～29．13号土坑　32～33．16～17号土坑　36～44．19号土坑
30～31．15号土坑　34～35．18号土坑

第33図　土壙内出土土器拓影図(2)

34・35は加曽利B式に比定される。

19号土坑（第33図36～44）

36・37は平行沈線文内に刻み目または縄文が充塡されている口縁部片である。

38～40・43は口縁部に指頭圧痕を有する隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は38が粗雑な斜縄文，39～40・43が粗雑な斜行の沈線文である。なお，38の内面には口縁に沿って2条の平行沈線文が全周する。

41は粗雑な沈線文が施されている口縁部片である。内面には口縁に沿って1条の沈線が全周する。

42は頸部に2列の三角形の刺突文が全周する胴部片である。胴部には沈線区画による充塡縄文が施されている。

44は頸部に指頭圧痕の有する隆帯文が施されている胴部片である。胴部は斜行の沈線文が施されている。

36～38・40・41は加曽利B式に，39・42～44は安行Ⅰ式に比定される。

20～26号土坑（第34図45～58）

45は口縁に沿って1条の沈線が全周する口縁部片である。胴部は単節RLの斜縄文を地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている。

46・48は微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。ともに単節RLの斜縄文を地文としている。

47は1本の微隆起線文に沿って磨り消されている胴部片である。地文は単節RLである。

49は刻み目を有する隆帯文が口縁にそって施されている口縁部片である。口縁部は沈線区画内に斜行の沈線文が施されている。

50は数条の平行沈線文が施されている口縁部片である。

51・53～58は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文もしくはその上に斜行の沈線文が施されている。なお，内面には56を除き，他はすべて1条ないし2条の沈線が口縁に沿って全周する。

52は口縁に沿って三角形の刺突文が全周する口縁部片である。その他は斜行の平行沈線文が施されている。

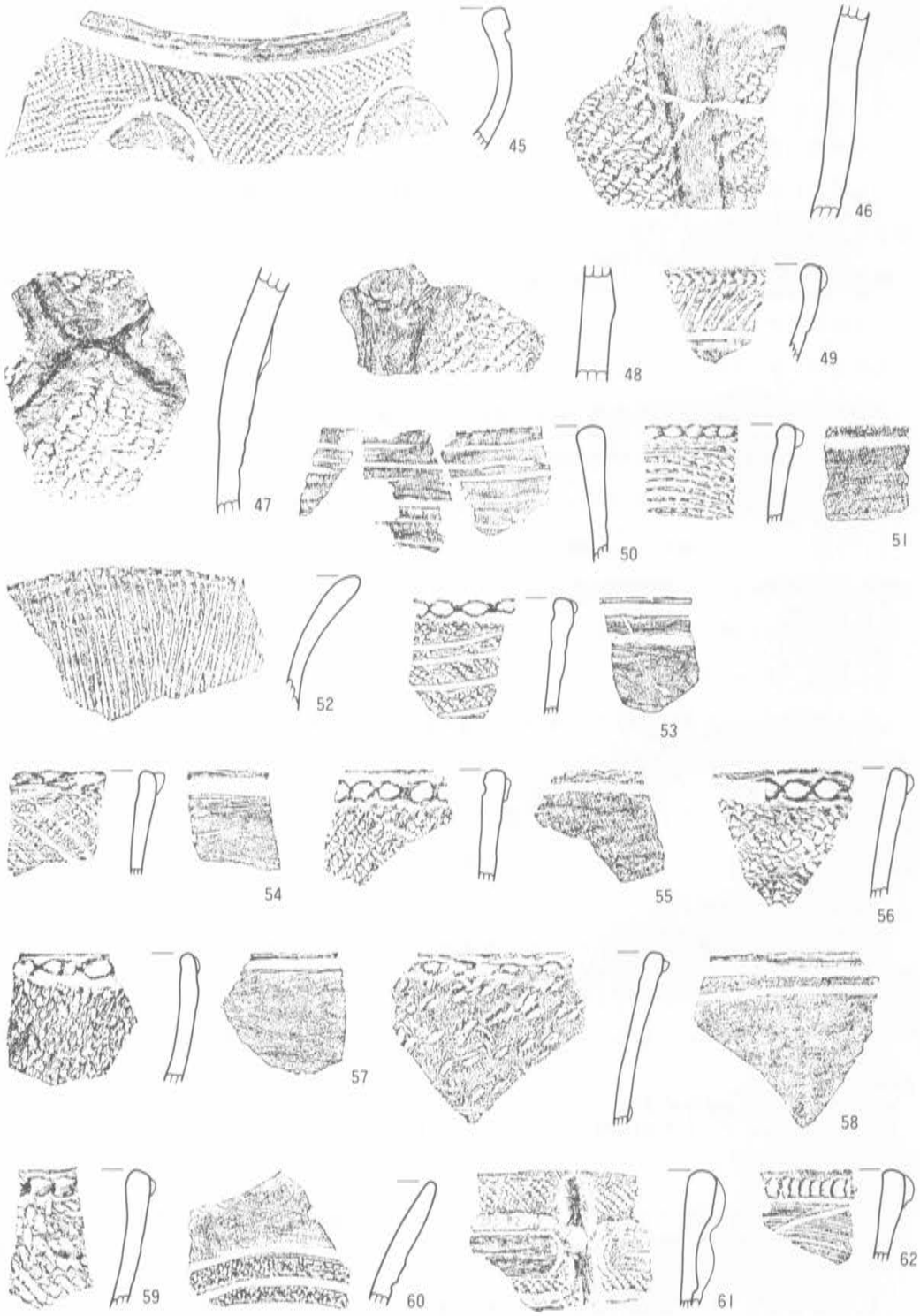
45～48は加曽利EⅣ式に，49～51・53～58は加曽利B式に，52は安行Ⅰ式に比定される。

27号土坑（第34図59～62）

59は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。

60は沈線区画による斜縄文が充塡されている口縁部片である。波状口縁を呈する。

61は隆帯上に斜縄文が施されている口縁部片である。縦位に突起が貼り付けられている。



45～58．20～26号土坑
59～62．27号土坑

0　(1：3)　10cm

第34図　土坑内出土土器拓影図(3)

62は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は斜行の沈線文が施されている。

59・60は加曽利B式に，61・62は安行Ⅰ式に比定される。

28号土坑（第35図63・64）

63は口縁に沿って2条の平行沈線文が全周する口縁部片である。胴部は単節RLの斜縄文が施されている。

64は粗雑な斜縄文上に平行沈線文が施されている胴部片である。

63～64は加曽利B式に比定される。

29号土坑（第27図実測3・4，図版17）

実測3は最大径15.1cm，現在高9.6cm，底径3.9cmを測る鉢形土器である。文様は単節RLの斜縄文地に沈線区画による山形の磨消縄文が施されている。遺存度1/3。

実測4は口径22.6cm，器高18.5cm，底径12.4cmを測る鉢形土器である。傾きはやや湾曲している。文様は6本の微隆帯上に斜縄文が施されている。その上に2個の1単位とした突起が等間隔に貼付されている。また，微隆帯に沿って沈線がなぞられている。ほぼ完形である。

すべて，安行Ⅰ式に比定される。

29～31号土坑（第35図65～80）

65は口縁に沿って平行沈線文内に刺突文が施されている口縁部片である。地文は単節RLの斜縄文である。

66～69は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に斜行もしくは格子状の沈線文が施されている。なお，69は内面には口縁に沿って2条の平行沈線が全周する。

70・71は全面に斜縄文が施されている口縁部片である。71の内面には口縁に沿って1条の沈線が全周する。

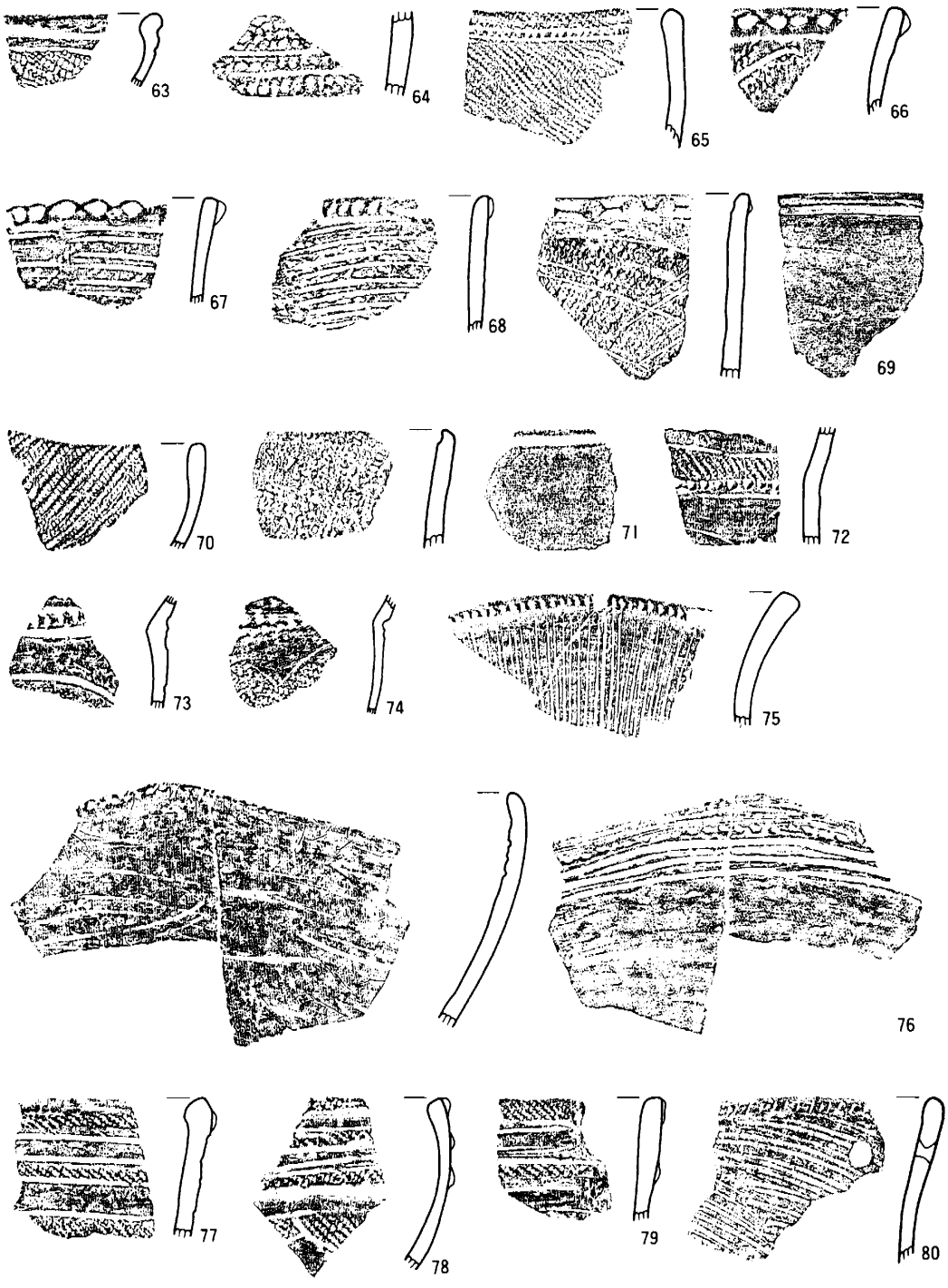
72～74は頸部に三角形の刺突文が全周する胴部片である。文様は沈線区画による充填縄文が施されている。

75は口縁に沿って三角形の刺突文が全周する口縁部片である。文様は縦位の平行沈線文が施されている。

76は口唇に円形の刺突文が全周する口縁部片である。内面には1列の円形刺突文と3条の平行沈線文が口縁に沿って全周する。浅鉢である。

77～79は微隆帯上に斜縄文が施されている口縁部片である。その微隆帯に沿って沈線がなぞられている。

80は口縁に沿って爪形文が全周する口縁部片である。胴部は斜行の浅い沈線文が施されている。なお，右側に補修孔が穿孔されている。



63～64.　28号土坑
65～80.　29～31号土坑

0　(1：3)　10cm

第35図　土坑内出土土器拓影図(4)

65～71・76は加曽利B式に，72～75・77～80は安行Ⅰ式に比定される。

32号土坑（第36図81・82）

81は単節ＲＬの斜縄文地に２本を１単位とした隆線文が施されている胴部片である。

82は全面に斜縄文が施されている口縁部片である。

すべて加曽利EⅣ式に比定される。

33号土坑（第36図83～93）

83は口縁部が微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。胴部は斜縄文が施されている。

84は沈線区画によって曲線的な磨消縄文が施されている胴部片である。

85は口縁に沿って三角形の刺突文と１条の沈線が全周する口縁部片である。文様は斜縄文が施されている。波状口縁を呈する。

86・87は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文もしくはその上に平行沈線文が施されている。87の内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

88は全面に粗雑な斜縄文が施されている口縁部片である。内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

89は無文の口縁部片である。内面には口縁に沿って２条の平行沈線が全周する。

90は数条の平行沈線文が施されている口縁部片である。

91・92は微隆帯上に斜縄文が施されている口縁部片である。その微隆帯に沿って沈線がなぞられている。

93は底部片である。

83は加曽利EⅣ式，84は称名寺式，85～90は加曽利B式，91・92は安行Ⅰ式にそれぞれ比定される。

36～37号土坑（第36図94・95）

94は全面に粗雑な斜縄文が施されている口縁部片である。

95は沈線区画による帯縄文が施されている胴部片である。

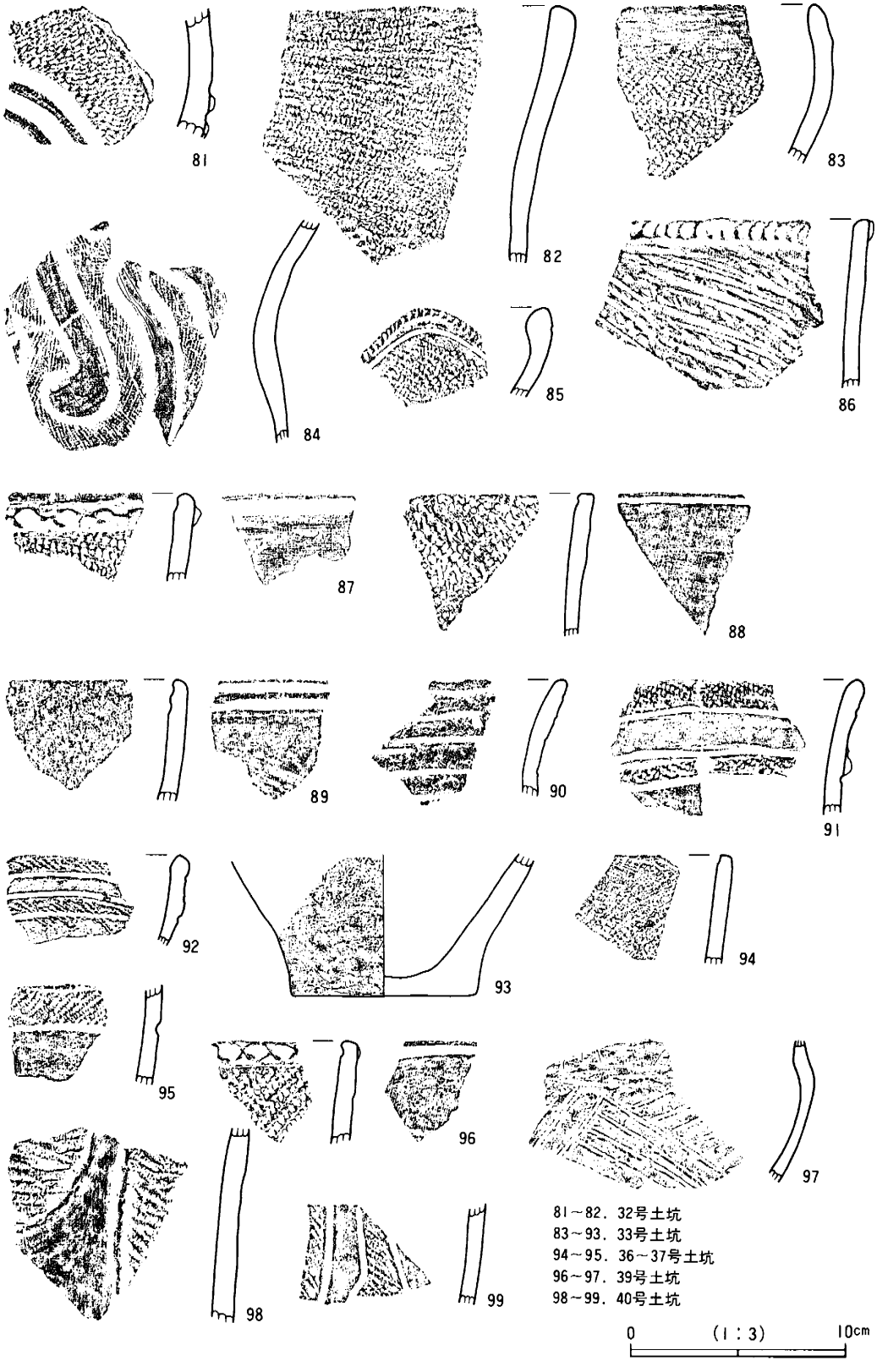
すべて加曽利B式に比定される。

39号土坑（第36図96・97）

96は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は単節ＬＲの斜縄文が施されている。なお，内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

97は平行沈線によって幾何学的に施されている胴部片である。

すべて加曽利B式に比定される。



第36図　土坑内出土土器拓影図(5)

40号土坑（第36図98・99）

98は微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。地文は無節の斜縄文である。

99は沈線区画による磨消縄文が施されている胴部片である。

98は加曽利ＥⅣ式に，99は称名寺式に比定される。

41～43号土坑（第37図100～105）

100は口縁部が微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。胴部は斜縄文が施されている。

101は口縁部に把手を有する口縁部片である。胴部は斜縄文が施されている。

102は口縁部に突起を有する口縁部片である。波状口縁を呈する。胴部は沈線区画による磨消懸垂文が施されている。地文は単節ＬＲである。

103・104は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。

105は口唇に刻み目が全周する浅鉢形土器の口縁部片である。口縁部と胴部の境界に段を有する。

101・102は加曽利ＥⅣ式に，103～105は加曽利Ｂ式に比定される。

44号土坑（第37図106～108）

106は指頭圧痕を有する隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に横位の平行沈線文が施されている。

107は口縁に沿って刻み目と１条の沈線が全周する口縁部片である。波状口縁を呈する。口縁部は縦位の平行沈線文が施されている。

108は粗雑な斜縄文上に斜行の櫛目文が施されている胴部片である。

すべて加曽利Ｂ式に比定される。

45号土坑（第37図109）

109は斜縄文上に平行沈線が懸垂されている胴部片である。堀之内Ｉ式に比定される。

46号土坑（第37図110～111）

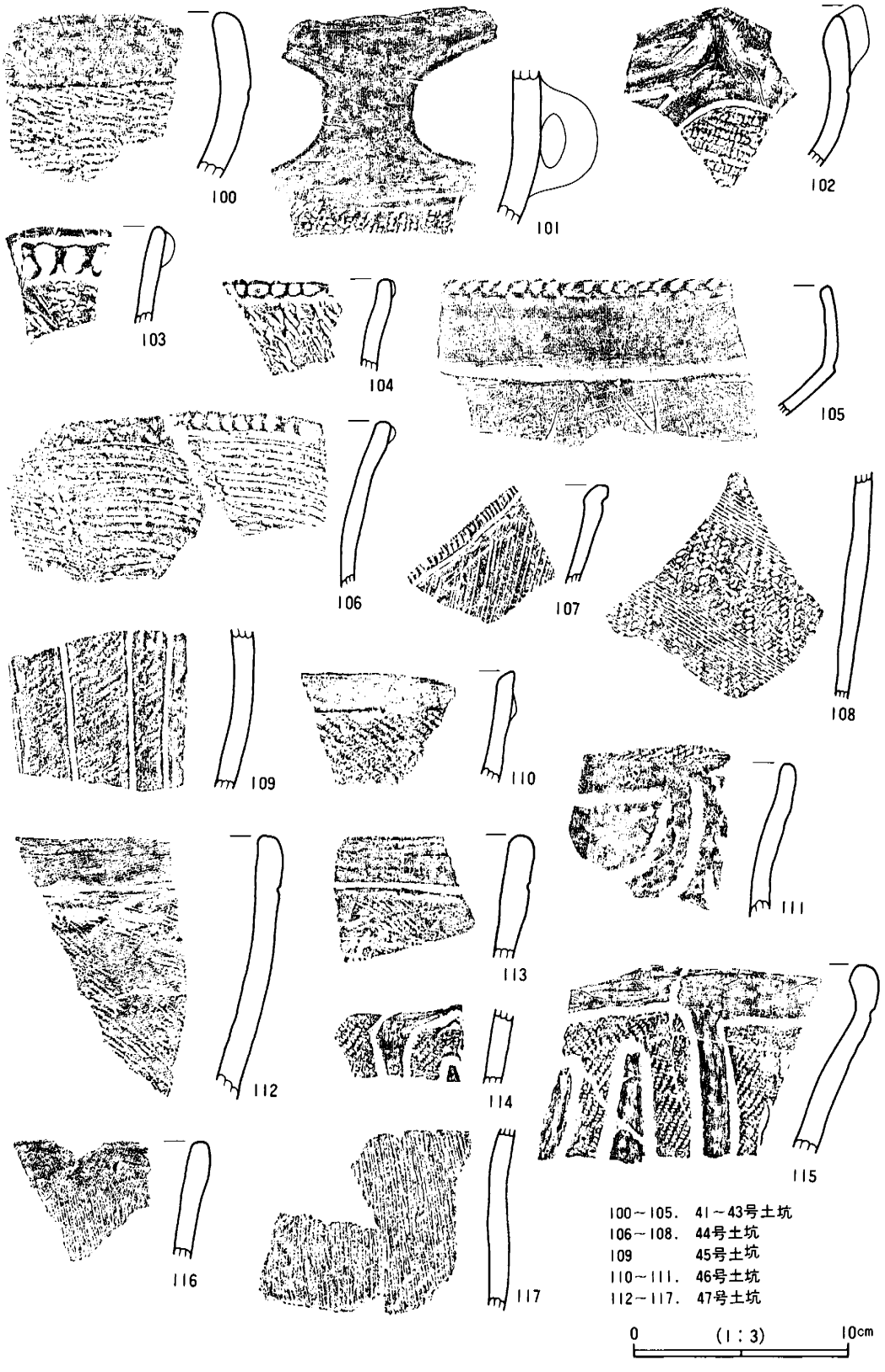
110は口縁部が微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。胴部は単節ＬＲの斜縄文が施されている。

111は口唇に斜縄文を全周する口縁部片である。胴部は沈線によって曲線的に文様化されている。

110は加曽利ＥⅣ式に，111は称名寺式に比定される。

47号土坑（第27図実測５図版17，第37図112～117）

112・113は口縁部が沈線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。胴部は斜縄文



第37図　土坑内出土土器拓影図(6)

が施されている。

実測５・114・115は沈線区画による磨消縄文が施されている口縁部片と胴部片である。

116・117は縦位の櫛目文が施されている口縁部片と胴部片である。

112・113は加曽利ＥⅣ式に，実測５・114・115は称名寺式に比定される。

48号土坑（第38図118・119）

118は沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。地文は単節ＲＬの斜縄文である。

119は全面に単節ＲＬの斜縄文が施されている口縁部片である。原体の回転方法の差異によって口縁部と胴部とを意識しているようである。

118は加曽利ＥⅣ式に，119は加曽利Ｂ式に比定される。

49号土坑（第38図120～122）

120・121は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。

122は沈線区画による充塡縄文が施されている胴部片である。

すべて加曽利Ｂ式に比定される。

50号土坑（第38図123）

123は指頭圧痕を有する隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に横位の沈線文が施されている。なお，内面には口縁にそって１条の沈線が全周する。加曽利Ｂ式に比定される。

51・52号土坑（第38図124～130）

124は沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。地文は単節ＬＲの充塡縄文である。

125・126は沈線区画による充塡縄文が施されている口縁部片である。

127は口縁に沿って２条の平行沈線内に刺突文を呈する文様が施されている口縁部片である。胴部は斜縄文が施されている。

128は全面に粗雑な斜縄文が施されている口縁部片である。内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

129・130は粗雑な斜縄文もしくはその上に斜行の平行沈線文が施されている胴部片である。

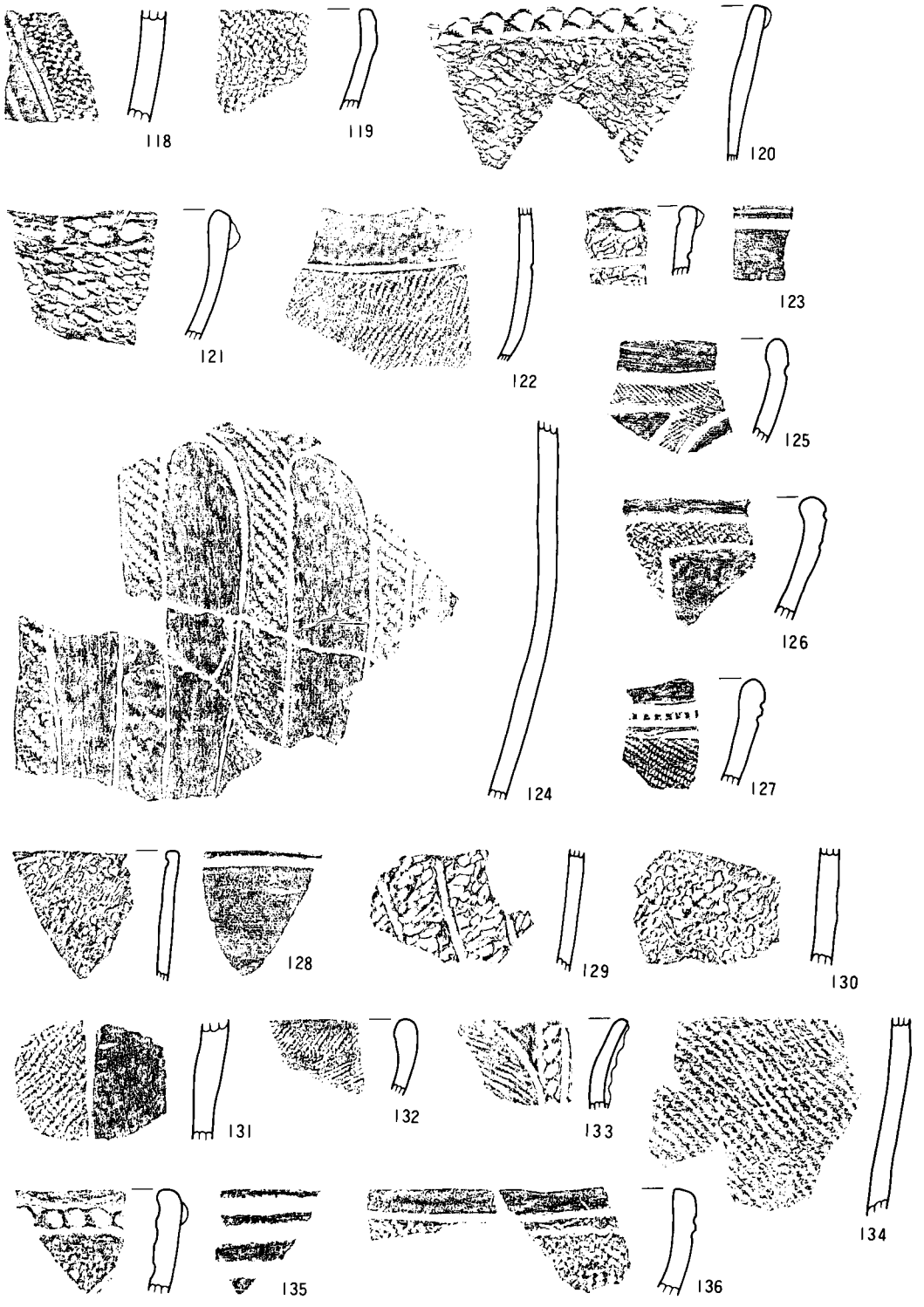
124は加曽利ＥⅣ式，125・126は称名寺式，127～130は加曽利Ｂ式にそれぞれ比定される。

53号土坑（第38図131・132）

131は沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

132は全面に斜縄文が施されている口縁部片である。

131は加曽利ＥⅣ式に，132は加曽利Ｂ式に比定される。



118～119．48号土坑
120～122．49号土坑
123　50号土坑
124～130．51～52号土坑
131～132．53号土坑
133　54号土坑
134　55号土坑
135　57号土坑
136　58号土坑

0　(1：3)　10cm

第38図　土坑内出土土器拓影図(7)

54号土坑（第38図133）

133は指頭圧痕を有する隆帯文が縦位に施されている口縁部片である。文様は沈線文と斜縄文が施されている。堀之内Ⅰ式に比定される。

55号土坑（第38図134）

134は全面に粗雑な斜縄文が施されている胴部片である。加曽利B式に比定される。

56・57号土坑（第38図135）

135は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。なお，内面には口縁に沿って数条の沈線が全周する。加曽利B式に比定される。

58号土坑（第38図136）

136は口縁にそって2条の平行沈線が全周する口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。

59号土坑（第28図実測6図版17，第39図137～141）

137は縦位の平行沈線内に列点文が施されている胴部片である。斜縄文を地文としている。

138は口縁に沿って平行沈線内に刺突文が全周する口縁部片である。波状口縁を呈する。単節ＬＲの斜縄文地に1条の沈線による蛇行懸垂文が施されている。

139は6条の平行沈線文内に斜縄文が充塡されている口縁部片である。内面には口縁に沿って2列の列点文と3条の平行沈線文内に刻み目が施されている。やや波状口縁を呈する。

140は波頂部に突起を有する口縁部片である。波状口縁を呈する。口縁に沿って2条の平行沈線内に刻み目文が全周する。胴部は沈線区画による充塡縄文が施されている。

141は口縁に沿って隆帯文が施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。なお，内面には口縁に沿って1条の沈線が全周する。

実測6は推定口径22.2cm，現在高13cmを測る浅鉢形土器である。傾きは湾曲する。口縁部文様は沈線がなぞられている1本の隆帯によって区画されている。区画内に沈線によるラグビーボール状の文様が1単位施されている。胴部文様は3条の平行沈線文が全周する。遺存度1/4。

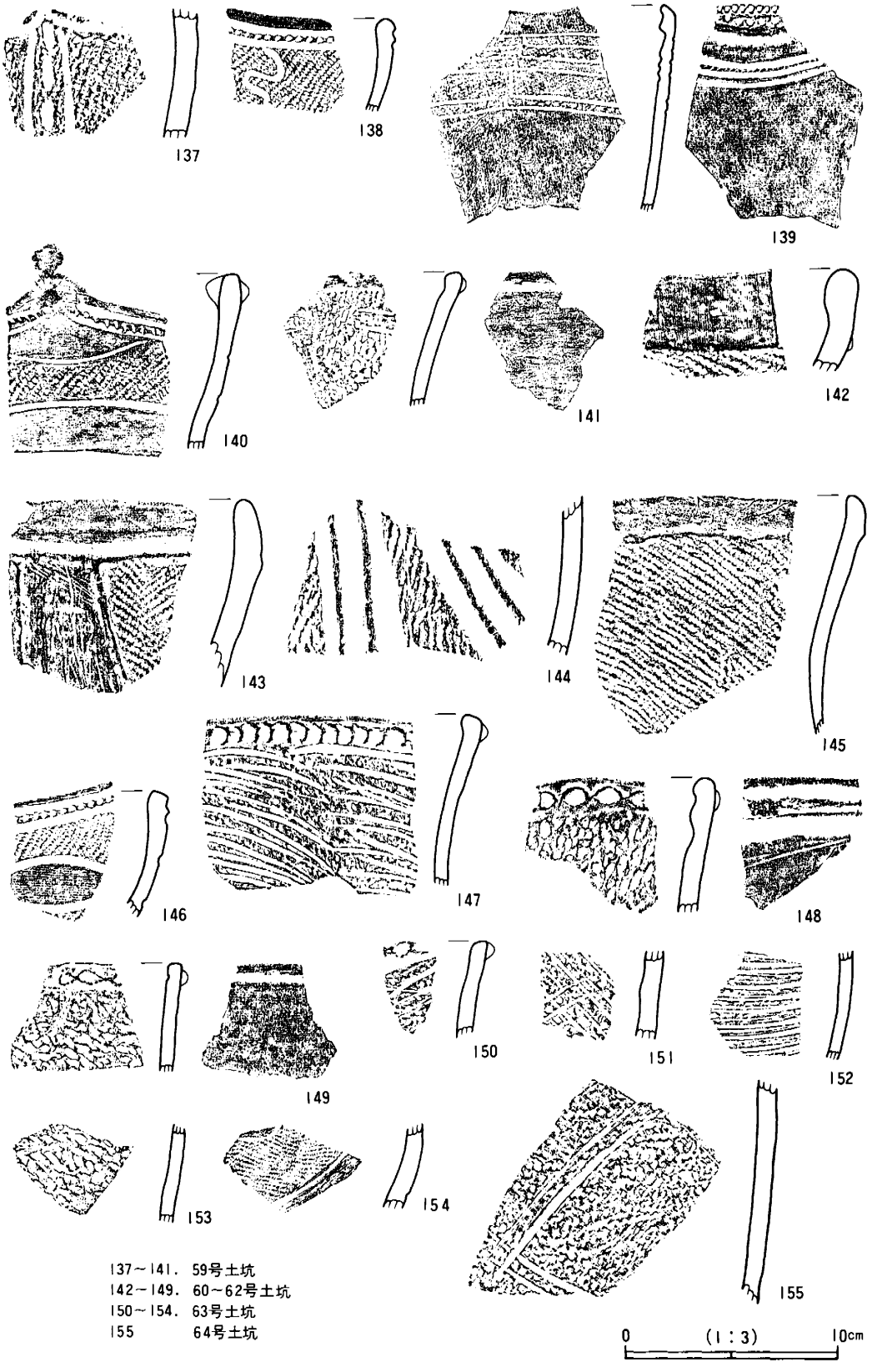
137は堀之内Ⅰ式に，実測6・138～141は加曽利B式に比定される。

60～62号土坑（第39図142～149）

142・143・145は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。142・145は胴部が単節ＬＲの斜縄文である。143は微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている。地文は斜縄文である。

144は斜縄文地に微隆起線区画による磨消縄文が施されている胴部片である。

146は口縁に沿って2条の平行沈線内に刺突文が全周する口縁部片である。波状口縁を呈する。口縁部は沈線区画による充塡縄文が施されている。



137～141．59号土坑
142～149．60～62号土坑
150～154．63号土坑
155　　64号土坑

第39図　土坑内出土土器拓影図(8)

147～149は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文もしくはその上に平行沈線文が施されている。148・149の内面には口縁に沿って1・2条の沈線が全周する。

142～145は加曽利EⅣ式に，146～149は加曽利B式に比定される。

63号土坑（第39図150～154）

150は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に格子状の沈線文が施されている。

151～153は粗雑な斜縄文もしくはその上に平行沈線文や格子状の沈線文が施されている胴部片である。

154は沈線区画に充填縄文が施されている胴部片である。

すべて加曽利B式に比定される。

64号土坑（第39図155）

155は粗雑な斜縄文上に半截竹管による格子状の沈線文が施されている胴部片である。加曽利B式に比定される。

65・66号土坑（第40図156～158）

156～158は微隆起線区画による磨消縄文が施されている胴部片である。すべて加曽利EⅣ式に比定される。

67号土坑（第40図159～161）

159～161は沈線区画による充填縄文が施されている口縁部片と胴部片である。すべて称名寺式に比定される。

68号土坑（第40図162～164）

162は微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。地文は単節ＲＬの斜縄文である。

163は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に横位の平行沈線文が施されている。

164は粗雑な斜縄文上にやや斜行する沈線文が施されている。

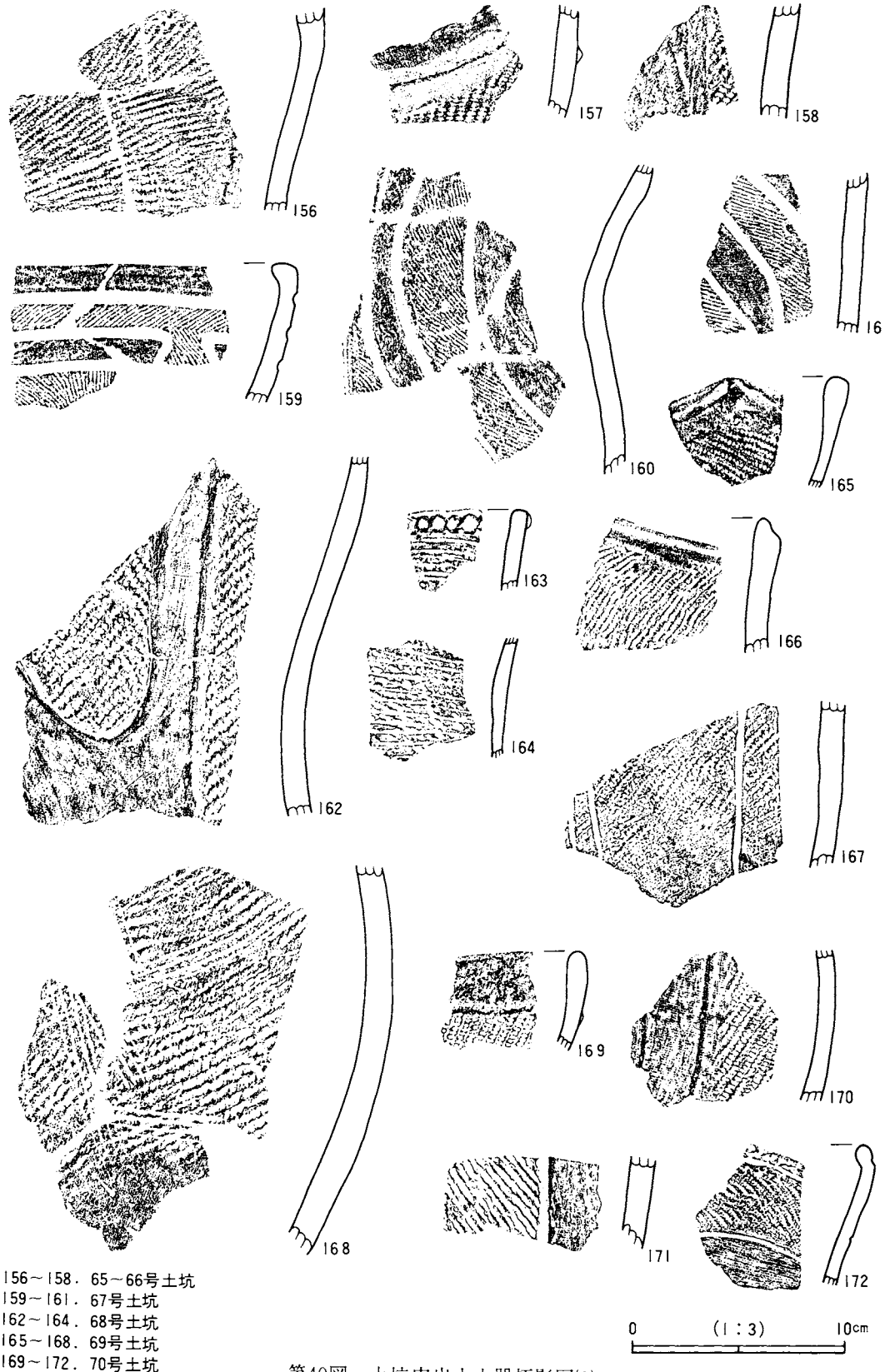
162は加曽利EⅣ式に，163・164は加曽利B式に比定される。

69号土坑（第40図165～168）

165は口縁部に無文帯を構成する口縁部片である。単節ＬＲの斜縄文を地文としている。波状口縁を呈する。

166は口唇に沿って凹線が施されている口縁部片である。波状口縁を呈する。その他は斜縄文が施されている。

167は斜縄文上に平行沈線文が懸垂されている胴部片である。



156～158．65～66号土坑
159～161．67号土坑
162～164．68号土坑
165～168．69号土坑
169～172．70号土坑

第40図　土坑内出土土器拓影図(9)

168は単節ＬＲの斜縄文上に櫛目文が縦横に施されている胴部片である。

165は加曽利ＥⅣ式に，166～168は堀之内Ⅰ式に比定される。

70号土坑（第40図169～172）

169は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。単節ＲＬの斜縄文を地文としている。

170微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

171は沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

172は口縁に沿って刺突文と1条の沈線が全周する口縁部片である。沈線区画による帯状縄文が施されている。

169～171は加曽利ＥⅣ式に，172加曽利Ｂ式に比定される。

71号土坑（第41図173～178）

173は沈線区画によって帯状縄文が施されている口縁部片である。

174・175は指頭圧痕の有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文もしくはその上に斜行の平行沈線文が施されている。175の内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

176～178は粗雑な斜縄文もしくはその上に斜行の平行沈線文が施されている胴部片である。

すべて加曽利Ｂ式に比定される。

72号土坑（第41図179～180）

179・180は沈線区画内に充塡縄文もしくは列点文が施されている胴部片である。

すべて称名寺式に比定される。

73号土坑（第41図181・182）

181は沈線区画による充塡縄文が施されている胴部片である。

182は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文上に横位の平行沈線文が施されている。なお，内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

74号土坑（第28図実測７図版17，第41図183～188）

実測７・183・184・186は微隆起線区画によって無文帯を構成する口縁部片である。胴部は斜縄文が施されている。183は突起を，184は把手を有する。

185・187は微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

188は沈線区画による磨消縄文が施されている。

すべて加曽利ＥⅣ式に比定される。

76号土坑（第28図実測８図版17，第41図189）

実測８は半截竹管による２条の平行沈線文によって口縁部が区画されている。区画内に単節

ＲＬの斜縄文が施されている。胴部は単節ＲＬの斜縄文地に半截竹管による沈線文が懸垂されている。

189は沈線区画による充塡縄文が施されている胴部片である。

実測８は堀之内Ｉ式に比定される。

78号土坑（第41図190）

190は沈線区画による充塡縄文が施されている口縁部片である。波状口縁を呈する。

80・81号土坑（第41図191）

191は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。単節ＲＬの斜縄文が羽状に施されている。加曽利ＥⅣ式に比定される。

82号土坑（第41図192・193）

192・193は沈線区画内に充塡縄文もしくは列点文が施されている胴部片である。

すべて称名寺式に比定される。

83・84号土坑（第42図194～202）

194～196は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

197～200は斜縄文地に微隆起線区画による磨消縄文が施されている胴部片である。

201は単節ＲＬの斜縄文地に沈線区画による磨消縄文が施されている胴部片である。

202は短沈線文が縦位に施されている胴部片である。

194～201は加曽利ＥⅣ式に比定される。

84号土坑（第42図実測８，図版17）

実測８は微隆起線区画によって無文帯の口縁部文様を構成している。胴部文様は単節ＲＬの斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている。加曽利ＥⅣ式に比定される。

85号土坑（第42図203～206）

203・204は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。斜縄文を地文としている。

205は全面に斜縄文が施されている口縁部片である。

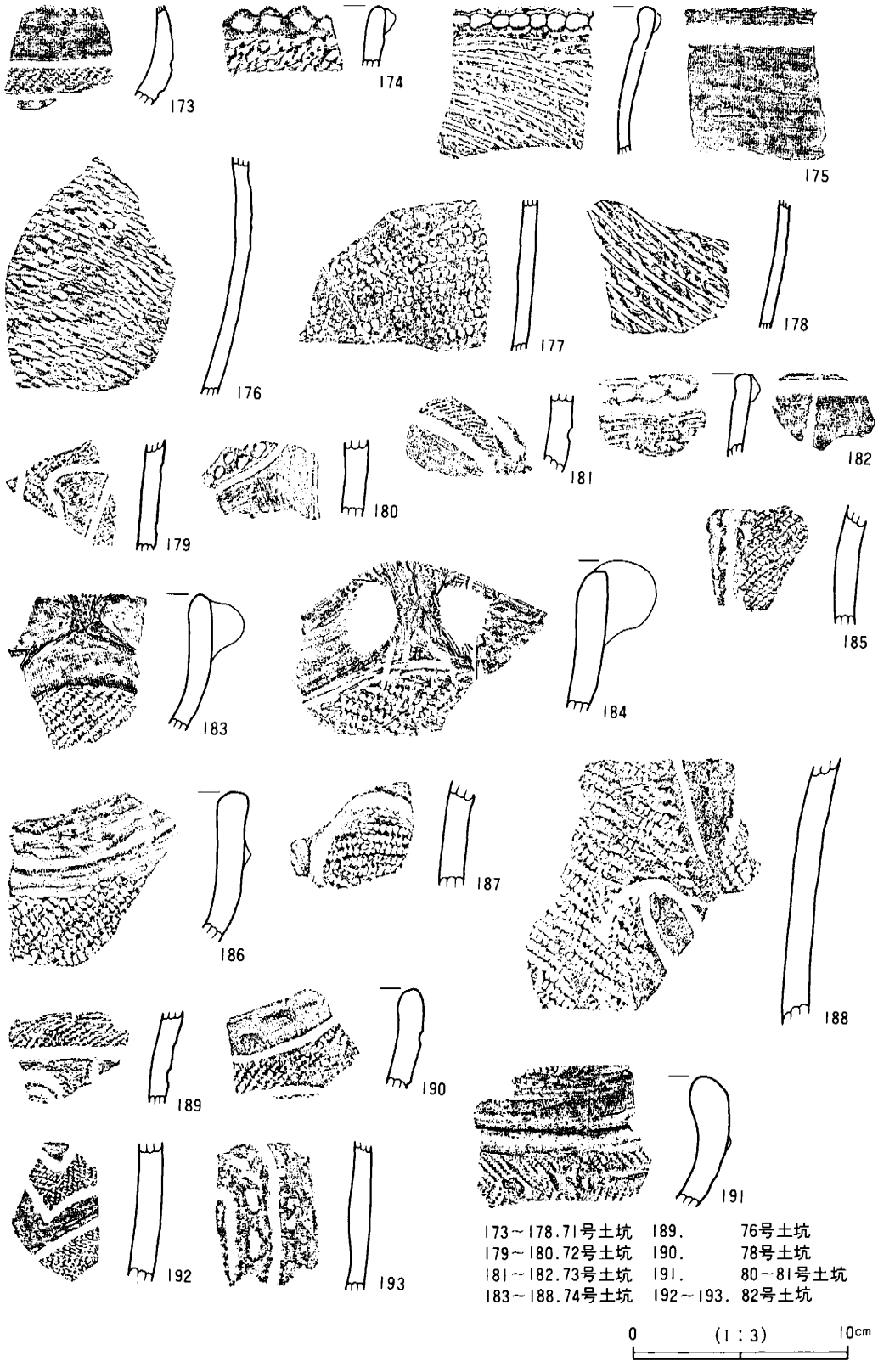
206は口縁に沿って２条の平行沈線が全周する口縁部片である。沈線区画内に単節ＬＲの帯縄文が施されている。

203・204は加曽利ＥⅣ式に，206は加曽利Ｂ式に比定される。

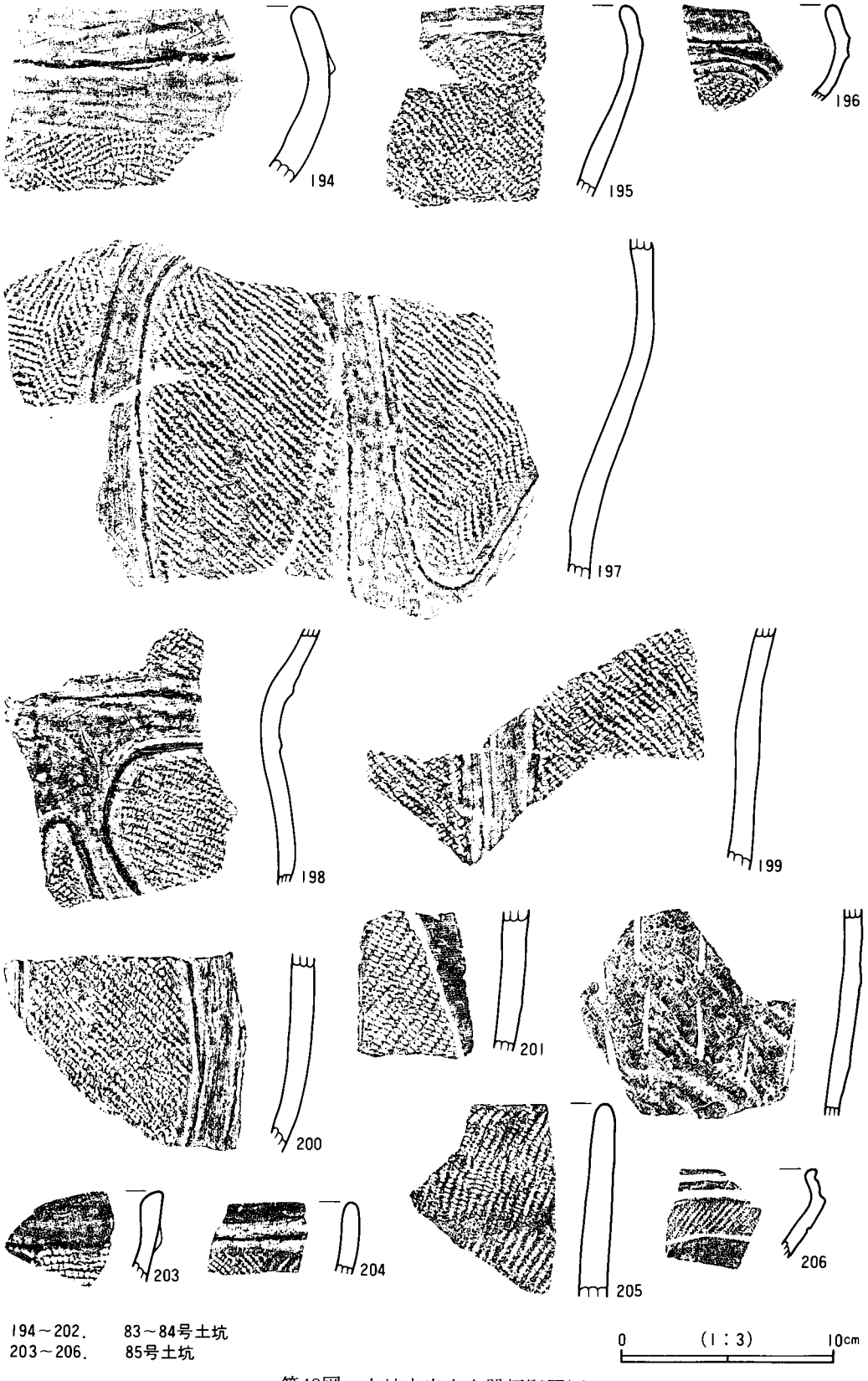
86号土坑（第29図実測10・11図版18，第43図207～213）

実測10は最大径15.4cm，底径6.8cm，現在高８cmを測る深鉢形土器である。平底を呈し，全面に単節ＲＬの斜縄文が施されている。遺存度1/4。

実測11は口径17.7cm，最大径21.4cm，現在高23.1cmを測る深鉢形土器である。傾きは胴部でややくびれており，全体的に湾曲している。波状口縁を呈する波頂部に４単位の突起を有する。



第41図　土坑内出土土器拓影図(10)



194～202.　83～84号土坑
203～206.　85号土坑

第42図　土坑内出土土器拓影図(11)

同形の突起が対面していて２単位＋２単位の構成をとっている。それぞれの突起を結んで微隆起線が口縁部を区画し，無文帯を構成している。胴部文様は単節ＬＲの斜縄文地に沈線区画による「Ｈ」字状の磨消縄文が施されている。遺存度1/2。

207・212は沈線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。212は波状口縁を呈し，沈線区画による磨消縄文が施されている。

208・209は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。202は突起を有し，微隆起線に沿って列点文が施されている。

210は全面に単節ＲＬの斜縄文が施されている口縁部片である。

211は沈線区画による充塡縄文が施されている胴部片である。

213は全面に縦位の櫛目文が施されている胴部片である。

実測10～11・207～211は加曽利ＥⅣ式に比定される。

87号土坑（第43図214～216）

214は沈線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

215は単節ＲＬの斜縄文地に沈線区画による磨消縄文が施されている胴部片である。

216は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

すべて加曽利ＥⅣ式に比定される。

88号土坑（第44図217）

217は楕円形の沈線文が施されている口縁部片である。堀之内Ⅰ式に比定される。

89～91号土坑（第44図218～220）

218は全面に粗雑な斜縄文が施されている口縁部片である。

219は２条の平行沈線が口縁に沿って全周する口縁部片である。粗雑な斜縄文上に沈線による蛇行懸垂文が施されている。

220は半截竹管による沈線文が施されている口縁部片である。

すべて堀之内Ⅰ式に比定される。

92号土坑（第44図221～226）

221は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

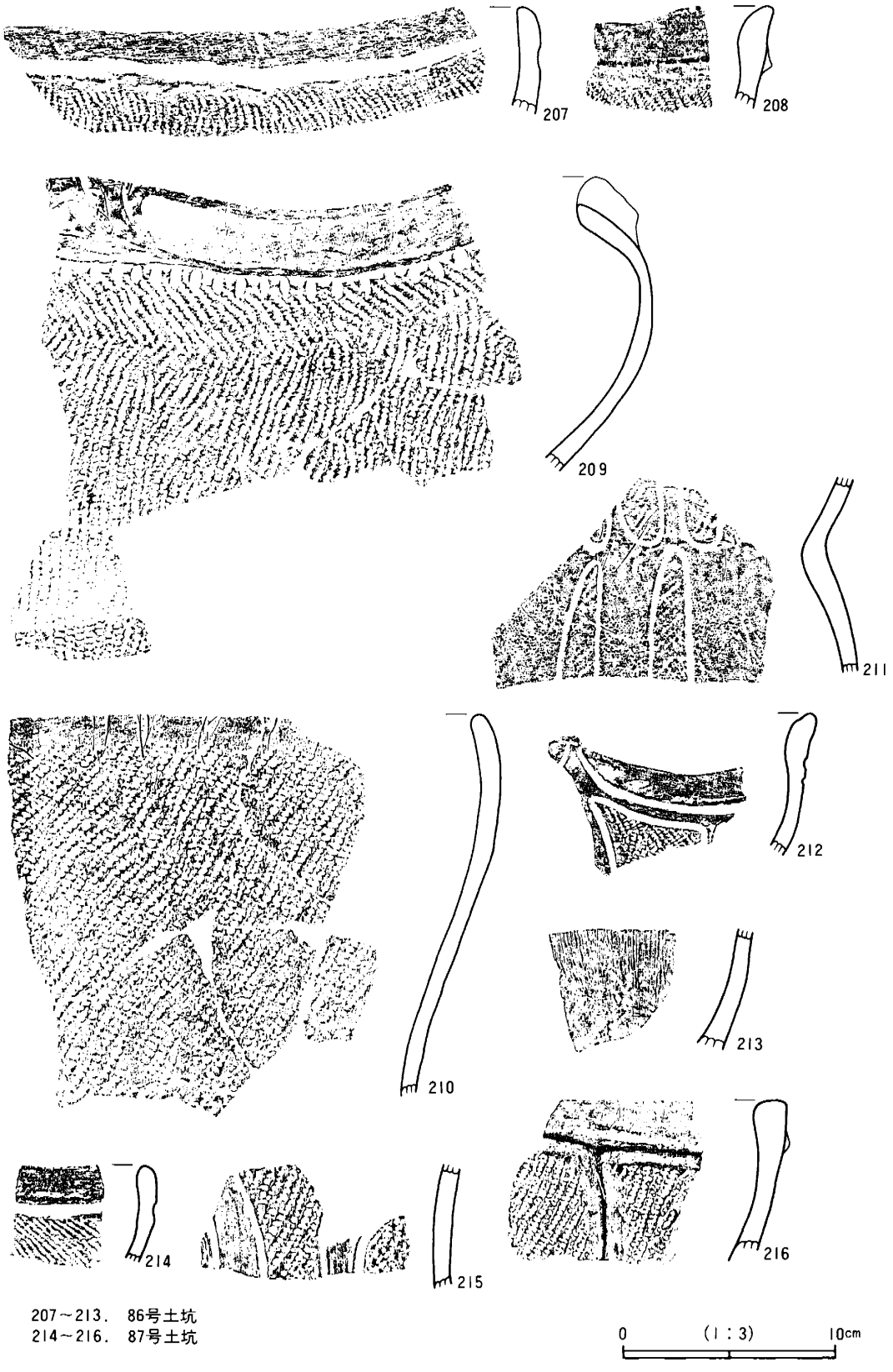
222・224～225は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

223・226は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

すべて加曽利ＥⅣ式に比定される。

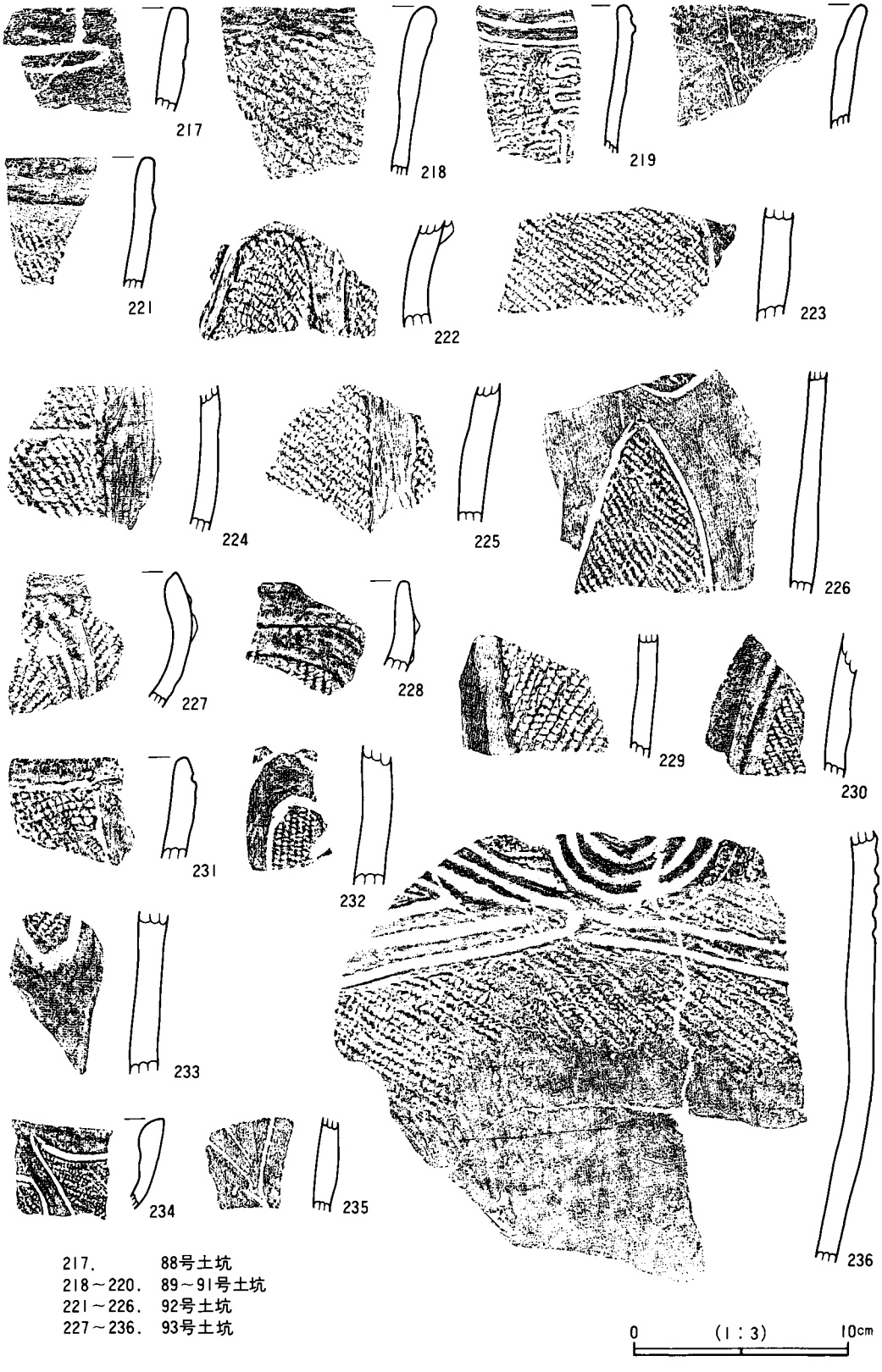
93号土坑（第29図実測12図版18，第44図227～236）

実測12は推定口径17.5cm，推定底径7.2cm，器高16.9cmを測る鉢形土器である。口唇は鋭角になっており，内面において口唇下１cmのところで稜を有する。傾きは外反する。２本歯による櫛目文によって口縁部を区画し，無文帯を構成している。胴部文様は３本歯による櫛目文が弧



207～213．86号土坑
214～216．87号土坑

第43図　土坑内出土土器拓影図(12)



217.　　88号土坑
218～220.　89～91号土坑
221～226.　92号土坑
227～236.　93号土坑

第44図　土坑内出土土器拓影図(13)

状に施されている。遺存度1/3。

227～230は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片と胴部片である。

231～233は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片と胴部片である。

234は沈線区画による磨消縄文が施されている口縁部片である。

235は「V」字状の沈線文が施されている胴部片である。

236は単節ＲＬの斜縄文地に沈線文が施されている胴部片である。

227～233は加曽利ＥⅣ式に，実測12・236は堀之内Ⅰ式に比定される。

94号土坑（第45図237～242）

237は隆線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

238は沈線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

239は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

240～242は沈線区画による充填縄文が施されている胴部片である。

237～239は加曽利ＥⅣ式に，240～242は称名寺式に比定される。

95～96号土坑（第29図実測13，図版18，第45図243～268）

実測13は最大径26.2cm，底径6.9cm，現在径23cmを測る深鉢形土器である。平底である。傾きは底面上15cmのところで一担内側にくびれ，口縁にむかって外反する。文様は沈線区画による「H」字状の磨消懸垂文が施されている。地文は単節ＬＲの斜縄文である。遺存度1/2。

243・248・259・261は斜縄文地に微隆起線文が施されている口縁部片と胴部片である。243は口縁部に把手を有し，2列の列点文が全周する。248は口縁部に1条の沈線と1列の円列文が全周する。

244・246・249・254・257・258・266は斜縄文地に微隆起線区画による磨消縄文が施される口縁部片と胴部片である。244と245は口縁部に突起を有する。246は微隆起線上に縄文が施されている。

247・260は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。胴部は斜縄文が施されている。

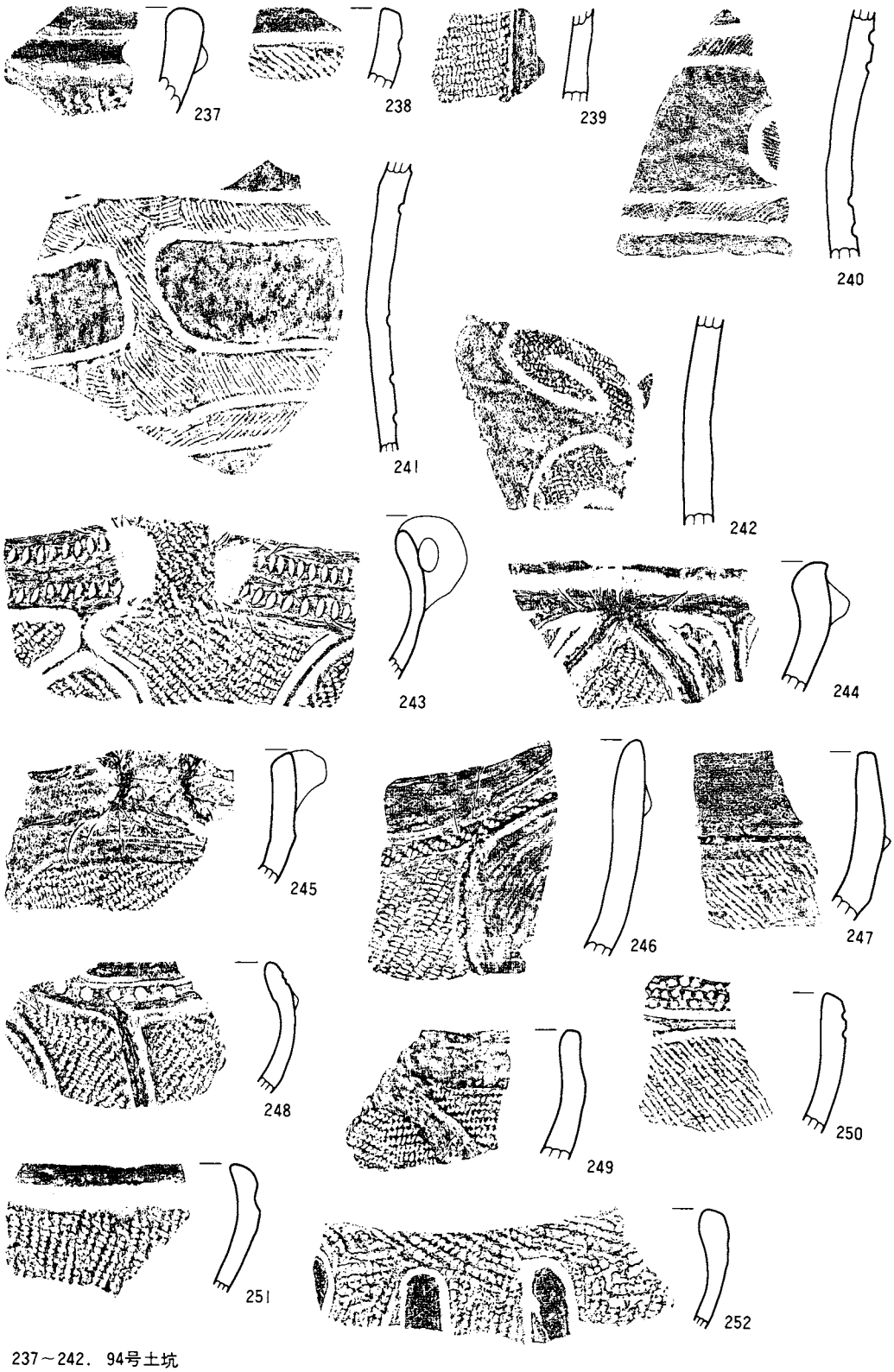
250・251は口縁に沿って沈線が全周する口縁部片である。250は沈線以外に3列の円列文が全周する。

252・253・255・256は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片と胴部片である。

262・267は櫛目文が施されている胴部片と口縁部片である。

263は沈線区画による充填縄文が施されている胴部片である。

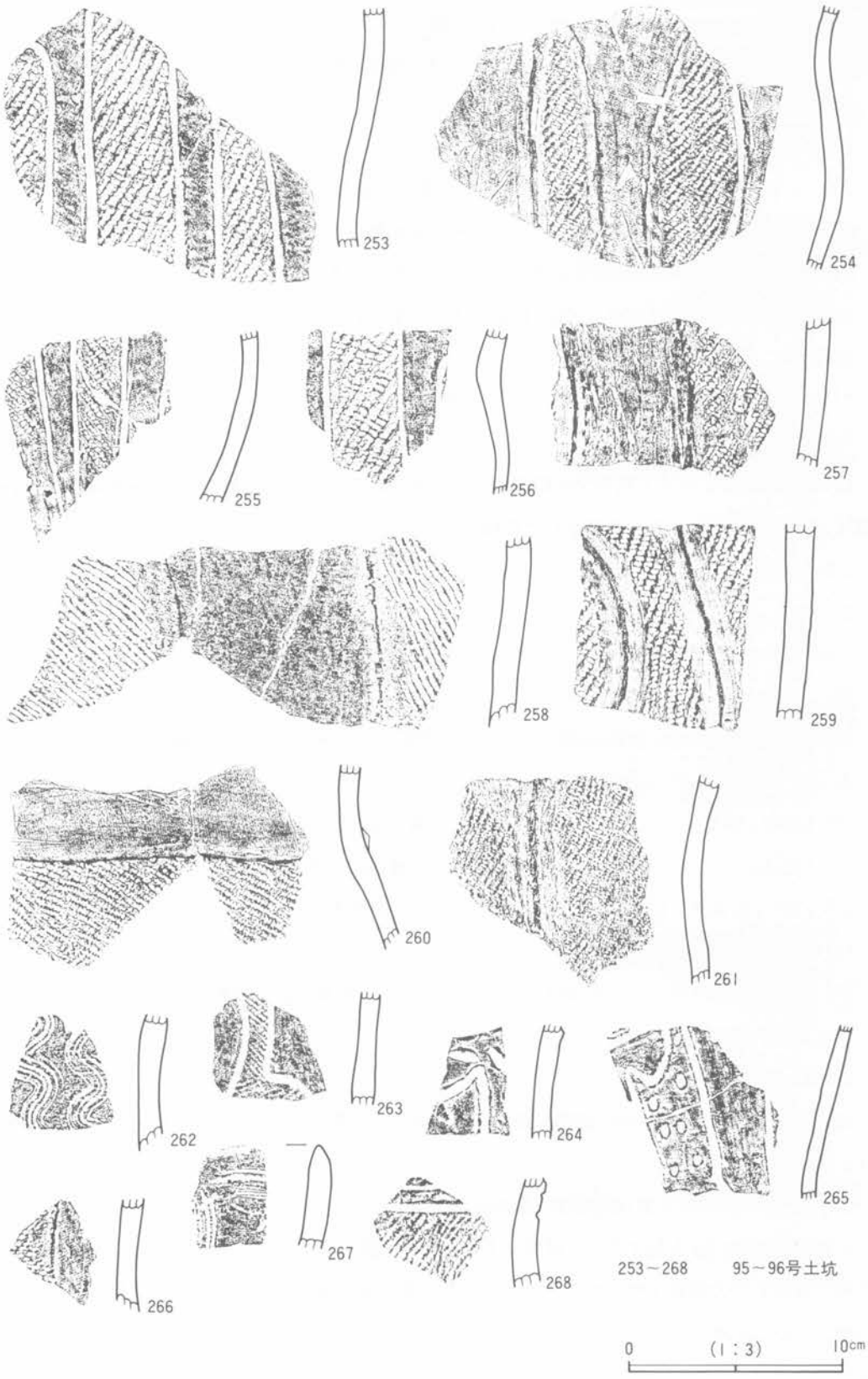
264・265は沈線区画内に列点文が施されている胴部片である。



237～242．94号土坑
243～252．95号土坑

0 (1：3) 10cm

第45図　土坑内出土土器拓影図(14)



第46図　土坑内出土土器拓影図(15)

268は斜縄文地に平行沈線文が施されている胴部片である。

実測13・243～261・266は加曽利ＥⅣ式に，263～265は称名寺式に比定される。

97号土坑（第47図269～273）

269は隆線と円列文が施されている胴部片である。

270～271は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

272は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

273は沈線区画による充塡縄文が施されている胴部片である。

269～272は加曽利ＥⅣ式に，273は称名寺式に比定される。

98号土坑（第47図274～278）

274～276は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片および胴部片である。

277は指頭圧痕を有する隆帯文が口縁に沿って施されている口縁部片である。胴部は粗雑な斜縄文が施されている。なお，内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

278は全面に粗雑な斜縄文が施されている口縁部片である。内面には口縁に沿って１条の沈線が全周する。

274～276は加曽利ＥⅣ式に，277・278は加曽利Ｂ式に比定する。

99・100号土坑（第47図279～286）

279～284は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片および胴部片である。

285は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片である。

286は沈線区画による充塡縄文が施されている口縁部片である。

279～285は加曽利ＥⅣ式に，286は称名寺式に比定される。

101号土坑（第48図287～290）

287～290は沈線区画による充塡縄文が施されている口縁部片および胴部片である。

すべて称名寺式に比定される。

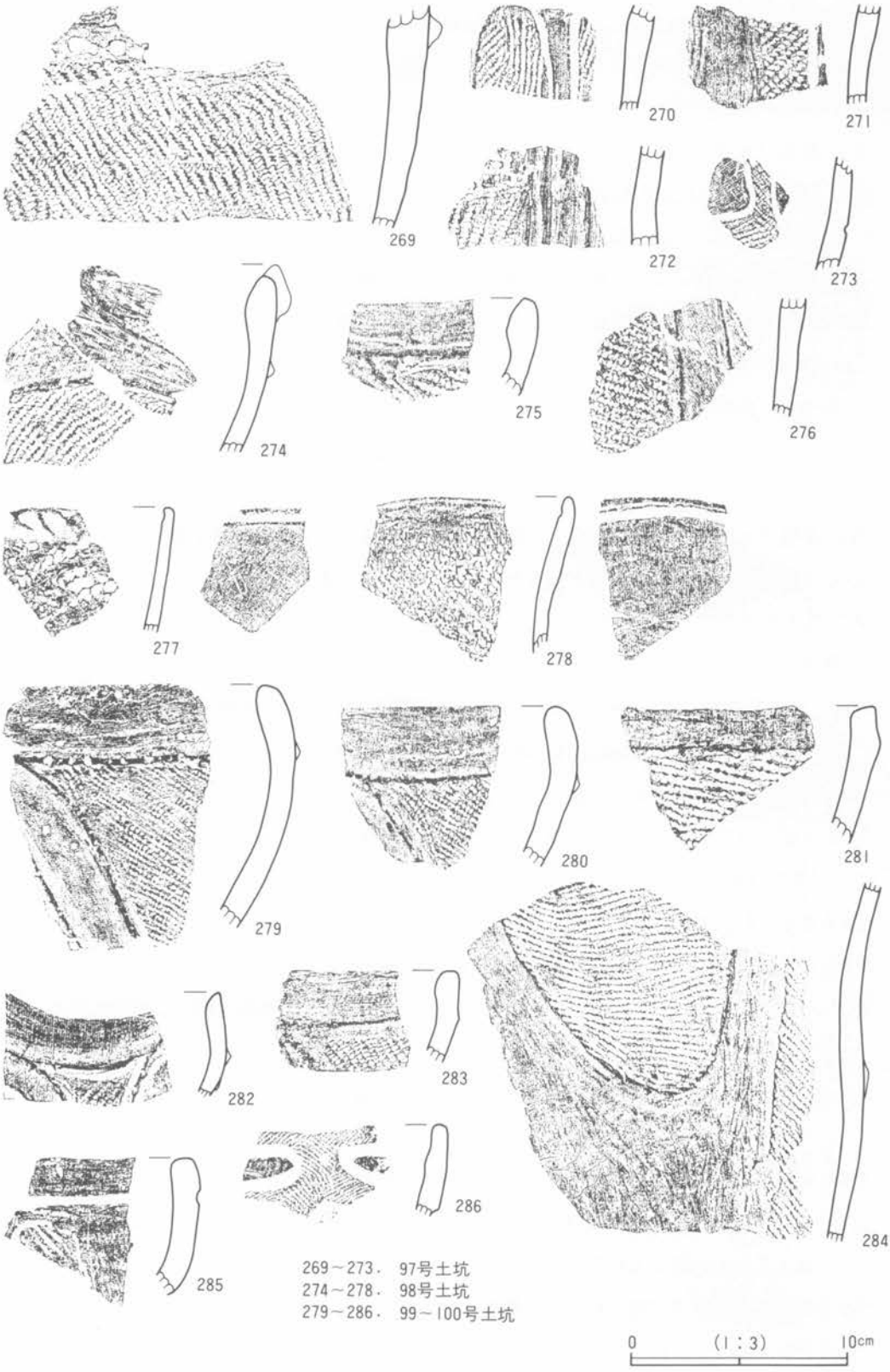
102号土坑（第48図291）

291は単節ＲＬの斜縄文地に微隆起線が懸垂されている胴部片である。加曽利ＥⅣ式に比定される。

103号土坑（第30図実測14図版18，第48図292～296）

実測14は波状口縁を呈する。口縁部は１条の沈線区画によって無文帯を構成している。胴部文様は単節ＬＲの斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている。遺存度1/4。

292・293は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片と胴部片である。



第47図　土坑内出土土器拓影図(16)

294は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

295は沈線区画による充塡縄文が施されている口縁部片である。波状口縁を呈し，波頂部に2個の円形刺突文が施されている。

296は底面に木葉痕がある底部片である。

実測14・292～294は加曽利ＥⅣ式に，295は称名寺式に比定される。

104号土坑（第48図297～299）

297は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

298・299は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。298は微隆起線上に縄文が施されている。

105号土坑（第48図300～302）

300は沈線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。地文は単節ＲＬの斜縄文である。

301は斜縄文上に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

302は沈線区画による充塡縄文が施されている口縁部片である。

301は加曽利ＥⅣ式に，302は称名寺式に比定される。

106号土坑（第30図実測15・16図版18，第49図303～314）

実測15・16・303～306・308～314は斜縄文地に微隆起線区画による磨消懸垂文が施されている口縁部片および胴部片である。314は磨消懸垂文というよりは渦巻状を構成する微隆起線文のほうが正しいかもしれない。

307は沈線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。

すべて加曽利ＥⅣ式に比定される。

107号土坑（第31図実測17図版19，第50図315～320）

実測17は推定口径21.4cm，現存高25.8cmを測る深鉢形土器である。傾きは口縁に向って徐々に内湾している。口唇上に1単位の突起が現存している。文様は沈線区画内に刺突文が施されている。遺存度1/4。

315は微隆起線区画によって無文帯を構成している口縁部片である。斜縄文は単節ＬＲである。

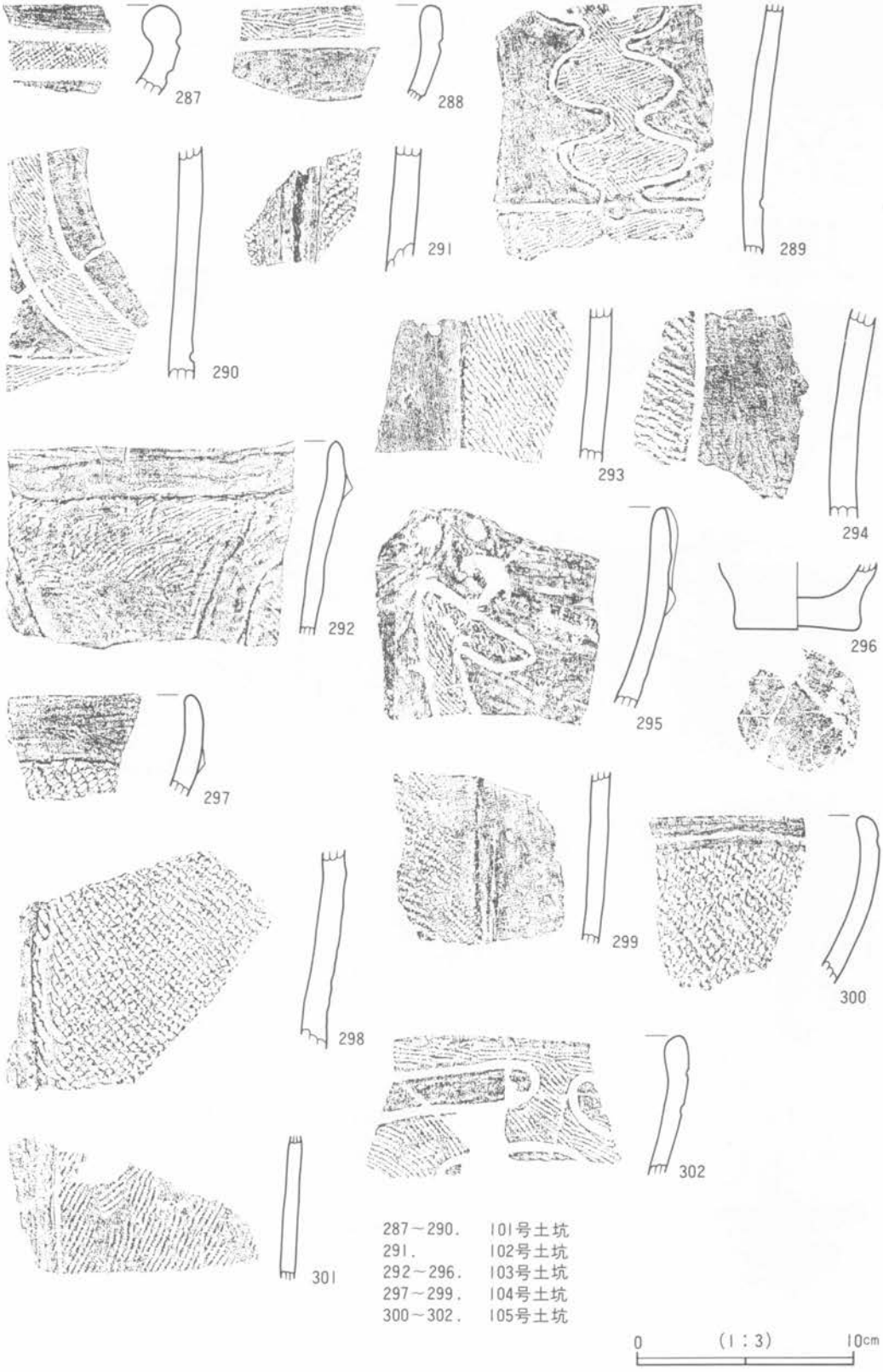
316は沈線区画内に刺突文が施されている口縁部片である。

317・318は円形の貼付文が施されている口縁部片である。斜縄文地に沈線文が施されている。317には環状把手が付随している。

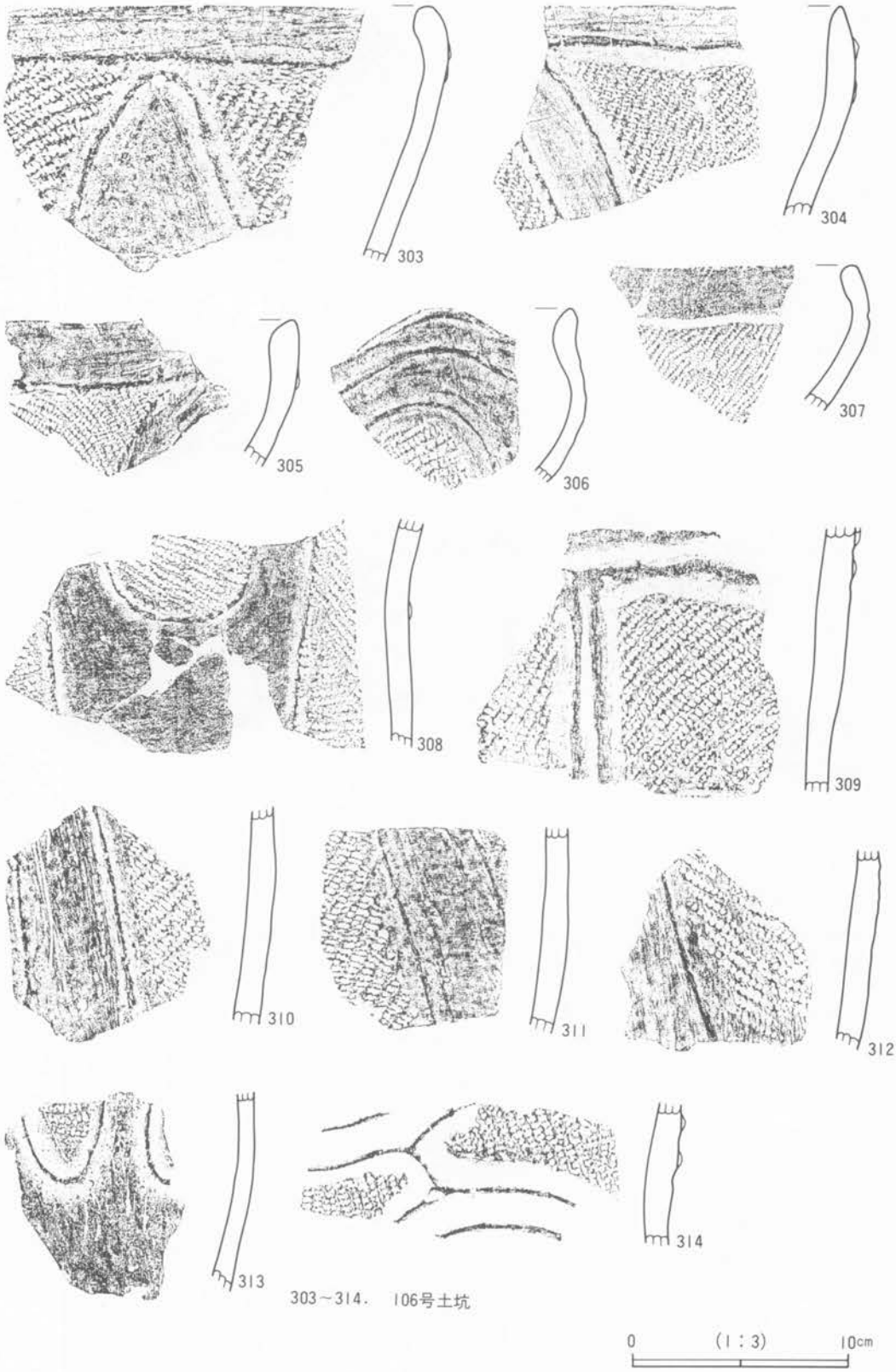
319は曲線的な沈線文が施されている胴部片である。

320は胴部に櫛目文が施されている口縁部片である。

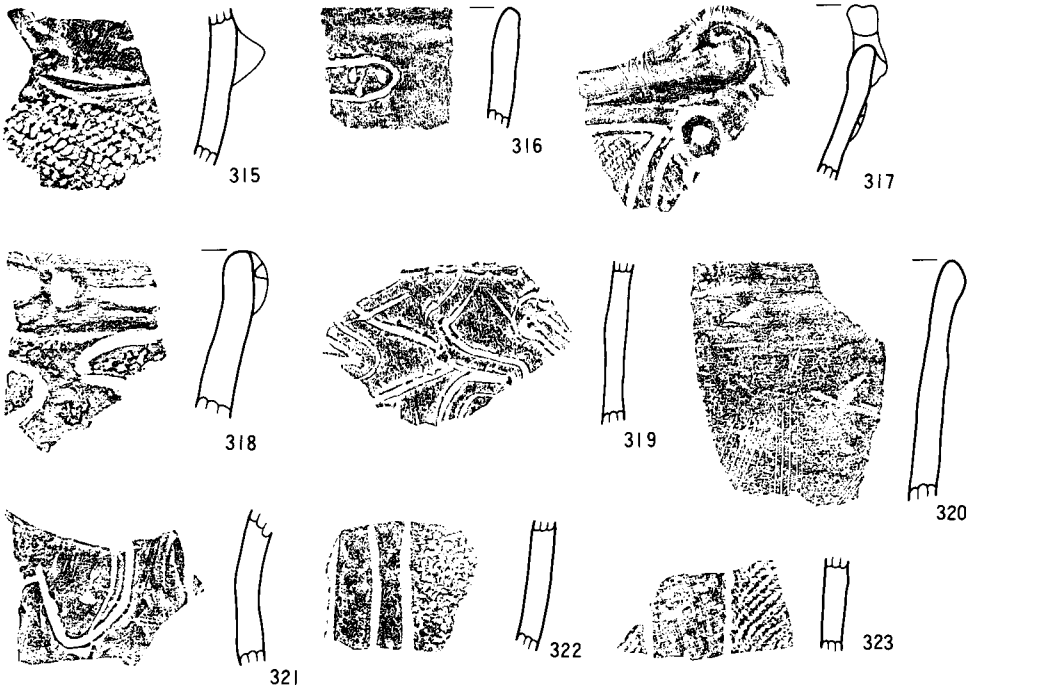
315は加曽利ＥⅣ式，実測17・316は称名寺式，317～319は堀之内Ⅰ式にそれぞれ比定される。



第48図　土坑内出土土器拓影図(17)



第49図　土坑内出土土器拓影図(18)



315～320.　107号土坑
321.　108号土坑
322～323.　109号土坑

0　(1：3)　10cm

第50図　土坑内出土土器拓影図(19)

108号土坑（第50図321）

321は曲線的な沈線文が施されている胴部片である。堀之内Ⅰ式に比定される。

109号土坑（第31図実測18図版19，第50図322・323）

実測18は推定口径24.2cm，現在高21.1cmを測る深鉢形土器である。傾きは口縁部のところでやや内湾している。口縁部は微隆起線区画によって無文帯を構成している。また，環状把手が1単位付随している。胴部文様は単節ＬＲの斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている。

322・323は斜縄文地に沈線区画による磨消懸垂文が施されている胴部片である。

すべて加曽利ＥⅣ式に比定される。

第3表　新旧番号対象

新　No	旧 No	新　No	旧 No	新　No	旧 No	新　No	旧 No
1号住居跡	077	17号　土　坑	149	48号　土　坑	023	79号　土　坑	122
1号　炉　跡	089	18	064	49	025	80	123
2	095	19	087	50	022	81	↓
3	096	20	090	51	021	82	042
4	013	21	↓	52	↓	83	044
5	057	22	↓	53	106	84	↓
6	136	23	↓	54	103	85	050
7	151	24	↓	55	107	86	048
1号埋甕炉跡	100	25	↓	56	101	87	134
2	027	26	↓	57	↓	88	132
3	032	27	093	58	102	89	135
4	043	28	010	59	109	90	↓
5	143	29	091	60	108	91	↓
6	144	30	↓	61	↓	92	052
7	153	31	↓	62	↓	93	054
1号　土　坑	066	32	012	63	028	94	055
2	073	33	011	64	150	95	053
3	075	34	009	65	029	96	056
4	078	35	↓	66	↓	97	058
5	065	36	097	67	110	98	001
6	068	37	↓	68	141	99	062
7	076	38	096	69	152	100	↓
8	↓	39	094	70	112	101	063
9	↓	40	017	71	116	102	138
10	↓	41	014	72	117	103	002
11	↓	42	↓	73	031	104	148
12	082	43	↓	74	035	105	003
13	083	44	099	75	115	106	106
14	070	45	↓	76	118	107	005
15	074	46	019	77	120	108	006
16	149	47	020	78	119	109	159

小　結

中台貝塚の調査において検出した遺構は住居跡１軒，炉跡７基，埋甕炉跡７基，土坑109基である。

住居跡は加曽利ＢⅠ式期のものである。何分にも，道路幅の調査であり，本貝塚全域を調査した訳ではないので，１軒しか検出できなかった。したがって，集落構造を明確に論述する事は困難である。しかし，地表に散布している貝殻の位置や調査区の北側が平坦部で南側が斜面部という地形を考え合わせると調査区の北側を中心に環状の集落跡が配置されているのだろうと思われる。もしそうだとすると，加曽利Ｂ式期における集落構造は住居群が土坑群の内側に配置されていることになる。一般に言われている縄文時代後期の集落構造は住居群の内側に土坑群が配置されるということなので，本貝塚における集落構造は特異なものと考えられる。

炉跡は時期を決定するのが困難である。しかし，土器片の混入から加曽利Ｂ式期以降と時期を限定できるものが２基ある。それらを加曽利Ｂ式期の土坑群の分布図に透写させ，位置関係について調べてみると土坑群のやや内側に配置されているようになる。しかしながら，炉跡は加曽利Ｂ式期のものと断定することができないので，それらのことはやや確証性に欠ける点があるかと思う。

埋甕炉跡は加曽利ＥⅣ式期のものが４基，称名寺式期のものが１基，堀之内Ⅰ式期のものが２基である。時期別に位置を調べてみると加曽利ＥⅣ式期は５号埋甕炉跡を除き他３基は調査区の中央部に位置し，土坑群の内側に配置されている。称名寺式期は加曽利ＥⅣ式期と同様，調査区の中央部に位置し，土坑群の内側に配置されている。堀之内Ⅰ式期は調査区南側のやや斜面部に位置し，今までとは逆に土坑群の外側に配置されている。このように，埋甕炉は時間が経過するにしたがって，調査区の中央部から南側へ移行して設営されていることが理解できる。また，堀之内Ⅰ式期には土坑群の外側に設営されるようになる。

ところで，発掘担当者は炉跡や埋甕炉跡をすべて屋外のものと考えて調査しているようである。しかし，筆者は中には屋内のものも含まれているのではなかろうかと疑問視している。なぜならば，多くのものが土坑群の内側に配置されており，集落構造から考えて住居群が土坑群の内側に配置されているだろうと予想されることから，屋内炉と考えてもよいと思うからである。

次に土坑について述べよう。大半は平面形が円形もしくは不整円形で，断面形が円筒状または「タライ」状である。標準的規模は開口部径が１ｍ前後，深さが50cm前後である。最近，論議されている袋状土坑はすべて加曽利ＥⅣ式期のものであることを付記しておく。

土坑109基のうち時期別にみると，加曽利ＥⅣ式期のものが19基，称名寺式期のものが４基，堀之内Ⅰ式期のものが５基，加曽利Ｂ式期のものが15基，安行Ⅰ式期のものが１基，時期不明

のものが65基にわかれる。時期不明のものは半分以上占めている。

このように土坑の時期を解明できたのは少なかった。なぜならば，まず，筆者が直接発掘調査に携わってないこと。第2に，大部分の出土土器片が覆土中一括で取り上げられていること。第3に，切り合っている土坑の新旧関係がはっきりせず，切り合っていても出土した土器片の多くは一括として取り上げられているので判断の足しにならないこと。以上のような要因があるからである。

従って今回，時期が決定できた土坑は次のような要素が含まれているものである。

1．土坑内から出土した土器片は単一型式であること。

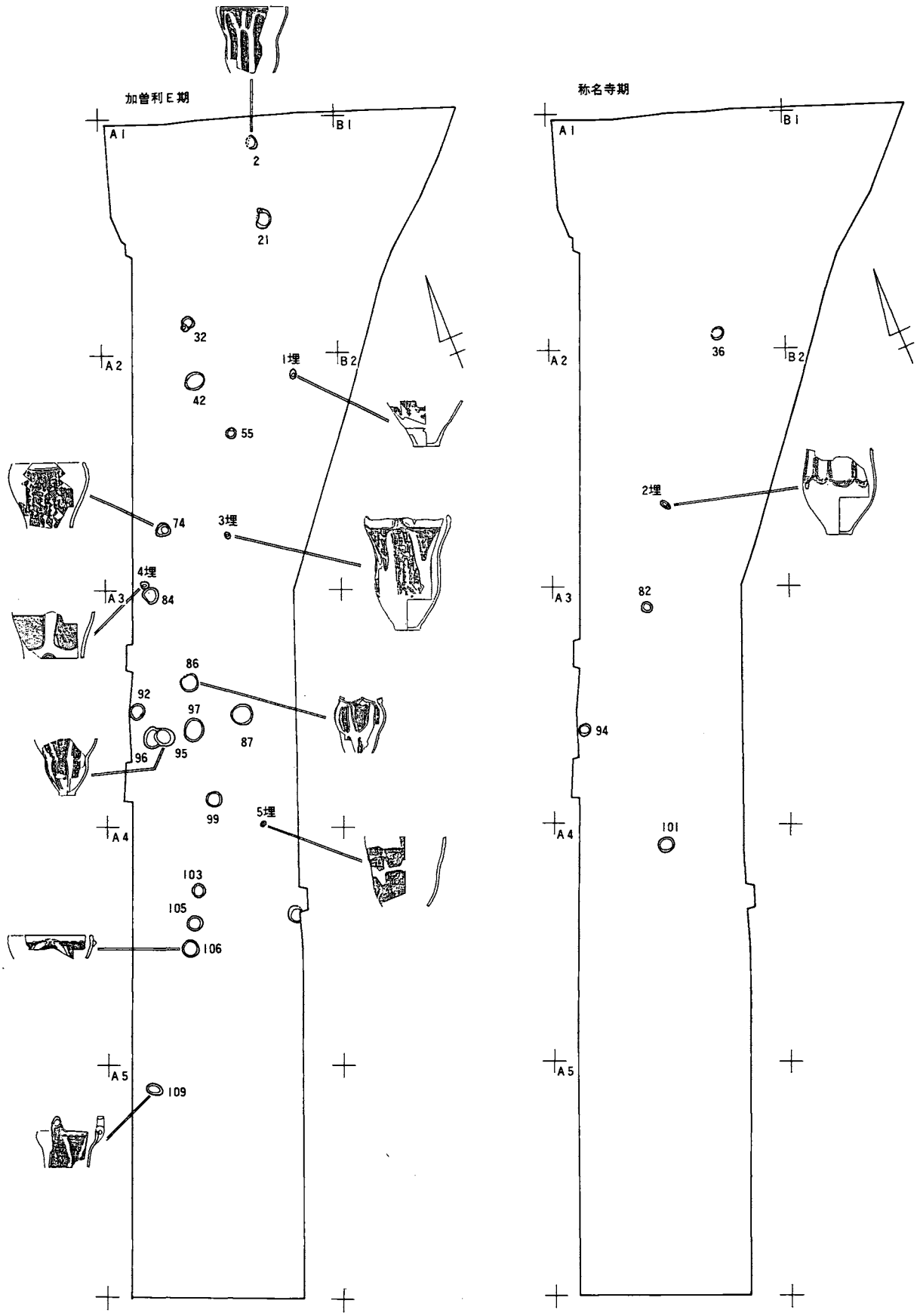
2．出土土器片の状況が明記されていること。

3．覆土の堆積状態と土器片の出土状況との関係が明確であること。

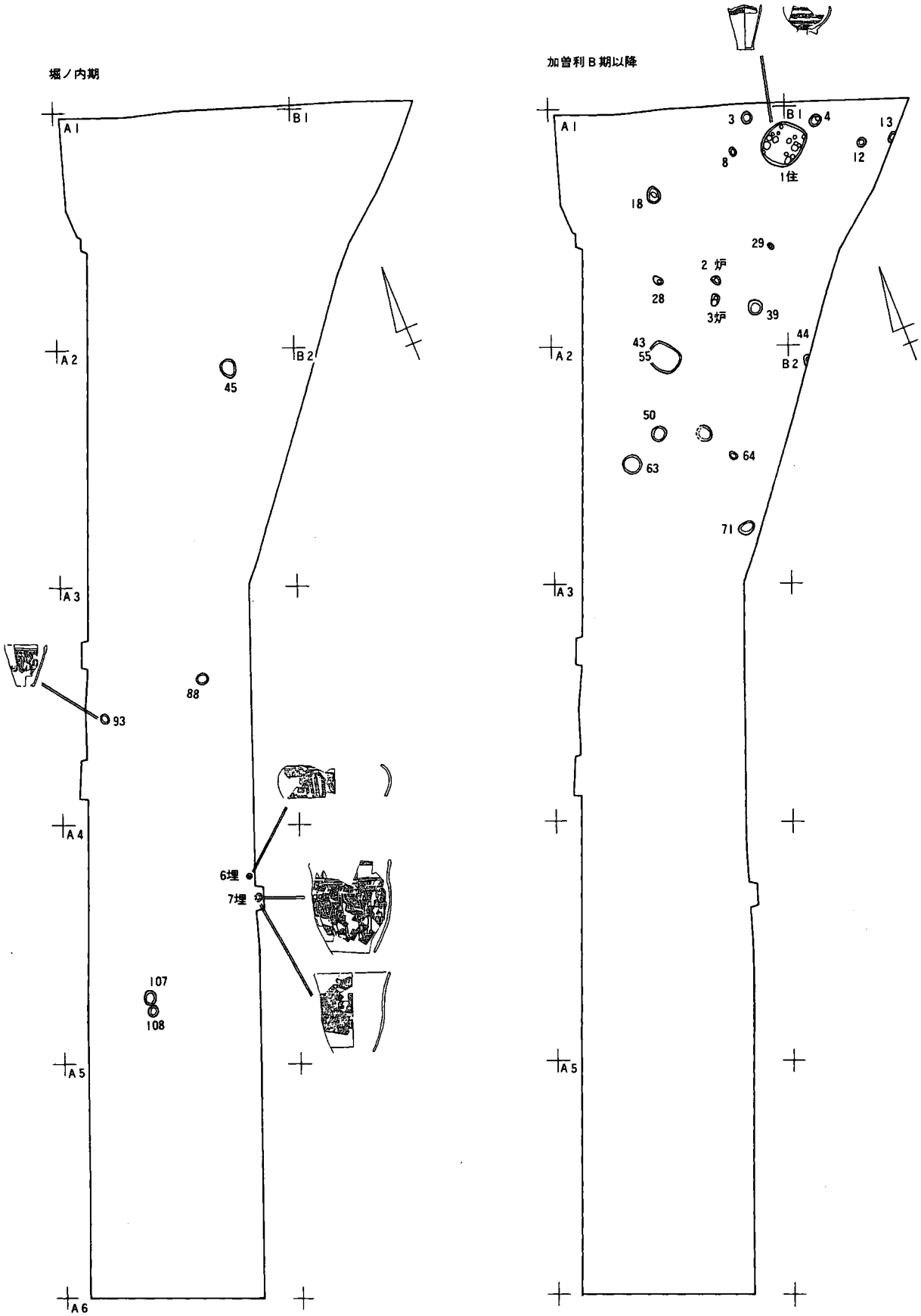
ここで，時期を決定するのに，土坑同士の切り合い関係で決めることはあまり考慮しなかった。なぜならば，土坑同士の新旧関係はわかりずらいし，わかったとしても，ほとんどの土坑には2型式以上の土器片が混入しているからである。たとえば，2基の土坑が切り合っており，そこに2型式の土器片が混入しているとする。覆土の状態から新旧がわかったとして，そこですぐ旧い土坑に旧い土器型式の時期を，新しい土坑には新しい土器型式の時期を当てはめがちである。しかし，そうとはかぎらないのである。なぜならば，切り合い関係では新旧がわかっても，同一型式の時期内で重複がおこなわれている可能性も考えられるからである。その場合，他型式の土器片は撹乱または流れこみによって混入したか，土器片の取り上げ時に混入した可能性があるからである。

土坑の分布を時期別に見てみると，加曽利EⅣ式期は土坑群が調査区の中央部から南側にかけて群集するようである。しかも，貝殻が混入している土坑は調査区の南側に集まっている。称名寺式期は土坑群が分散している感がある。加曽利EⅣ式期の土坑群とだいたい同位置にある。堀之内Ⅰ式期は土坑群が称名寺式よりはやや南側に位置している。加曽利B式期は土坑群が調査区の中央部から北側にかけて群集する。安行Ⅰ式期は土坑が1基しか検出できなかったので，何とも言えないが加曽利B式期の土坑群と同様に，調査区の北側に位置するようである。

以上のように，加曽利EⅣ式期と加曽利B式期の土坑が多く，時期が新しくなるにつれて，調査区の南側から北側へ移行しているようである。



第51図　時期別遺構配置図(1)（1：400）



第52図　時期別遺構配置図(2)(1：400)

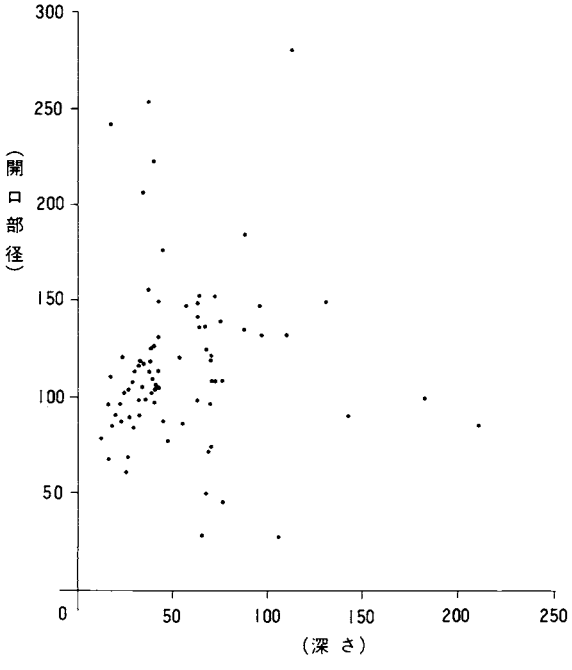
考　察

一般に記述される土坑の規模および形態は発掘調査時の状態であって，使用時の状態に等しいものであるとは言い難いものである。なぜならば，自然的堆積においては壁および開口部の崩落が，人為的堆積においては開口部を意識的に崩して埋めるということが考えられるからである。また，開口部として測量したのは検出面の規模であって，当時の開口部であったかどうかは確証できないからである。したがって，規模および形態について事細かに記述する必然性がないと考え，第2表土坑一覧として簡単にまとめた。しかし，中台貝塚においての標準的な土坑の規模をおさえておく必要があるので，開口部径と深さの関係について統計をとってみた。その結果が第4表である。

当貝塚における標準的な土坑の規模は開口部径が1m前後，深さが50cm前後である。形態は平面形が円形もしくは不整円形，断面形が「タライ」状もしくは円筒状を呈するものが大半を占めている。

土坑内の覆土堆積の仕方には，流れ込みや壁の崩落による自然的堆積と埋め戻しによる人為的堆積がある。そして，堆積の仕方によって土坑のもつ意味が違うのである。自然的堆積の場合は土坑本来の目的が終了した後，開口したまま廃絶されたものである。この時，破損した遺物の投棄という行為がおこなわれるものもある。人為的堆積の場合は土坑を完全に埋めて始めて本来の目的が終了したことになるのである。しかし，当初の目的が終了した後，開口している時にまた新めて二次的利用が行なわれ，人為的に埋めて目的が完了したことも考えられる。

第4表　土坑の開口径と深さの関係



本貝塚においての自然的堆積と人的堆積の割合はおよそ２：１になっている。

よく，覆土内の中位に焼土粒や炭化粒を混入している土坑が見られる。これは，流れ込んだものというよりは，遺物が投棄されている時に人為的行為によって混入されたものか，土器片に付着していたものであろうと考えたい。なぜならば，ほとんどが，焼土粒や炭化粒を含んでいる層中には投棄による多量の土器片が混入しているからである。

また，土坑内には遺物が出土する。ほとんどが土器片である。出土の位置や大きさ，量によって土器のもつ意味が違ってくる。それは，底面に密着して完形のまま出土した土器は，土坑に関係するものである。同一層で，量が多く，大形の破片が出土した土器片は，土坑に関係するものでなく，投棄したものである。小片で，量が少なく時たま別型式の土器片がまじって出土する土器は，土坑に関係するものでなく流れ込んだものである。以上，３通りのことが考えられる。

本貝塚における出土土器は投棄や流れ込みによる土器片が主流をなしており，土坑に関係する土器は出土しなかった。そこで，覆土の堆積の仕方と土器片の出土状況との関係を考えてみたい。

本貝塚においては３つのパターンが考えられる。

１．覆土が自然的堆積で，土器片が流れ込みによるパターン
２．覆土が自然的堆積で，土器片が投棄によるパターン
３．覆土が人為的堆積で，土器片が投棄によるパターン

１のパターンは土坑が使用後，開口したまま廃絶されて自然のなすがままに埋没していったのである。そこで土坑の時期を決定する場合は，色々な型式の土器片が混入していることがあるので，その中で一番新しい型式の土器片で時期を決定する。しかも，その時期は厳密に言うならば，使用時期ではなく，埋没している時期である。

２のパターンは土坑が使用後，開口したまま廃絶されて埋まっている途中で，土器片や石器片，たまに貝殻などの遺物を投棄するという「ゴミ穴」として埋没していったのである。時期を決定する場合は，投棄している層から出土している土器片の型式で時期を決定する。厳密に言うならば，時期は使用時期ではなく，井戸尻パターンであれば使用後の開口時期であり，吹上パターンであれば，埋没時期である。

３のパターンは土坑が使用後，何らかの目的で，土坑を埋めるという行為が考えられる。また，土坑が完全に埋められた時に土坑の目的が達せられるということも考えられる。時期を決定する場合は，投棄された土器片の型式で時期を決定する。時期は短時間で土坑が埋まったのだから，使用後すぐの開口時期かあるいは，使用時期である。

ここで遺物を投棄するという行為に対して「もの送り」として祭祀的行為と考えている人もいることを付記しておく。

土坑の用途は墓壙，採掘坑，貯蔵穴という考え方が一般に論じられている。本貝塚における土坑には，土坑に関係する遺物が出土しなかったので，用途まで論じるのは浅はかと思い，ここでは論じないことにする。

しかし，覆土の堆積の仕方や遺物の出方によって用途が異なるのではないかと思っている。今後の調査において，土坑の覆土や土器の出土状況をもう少し，詳細に観察する必要性を感じている。

参考文献

梅沢太久夫 「江光山遺跡」 1980年

海老原郁雄 「梨木平遺跡」第4次調査報告書 1975年

川名広文 「松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書」 1984年

桐生直彦 「東京都における縄文時代の袋状土壙」東京考古3 1985年

小曽根英理子 「自由学園南遺跡」 1983年

後藤祥夫 「新山遺跡」東久留米市埋蔵文化財調査報告第8集 1981年

竹迫紘・小林奈緒美 「神谷原II」 1982年

田代寛 「鉢木遺跡の袋状土坑」郷土史館研究報告第2集 1968年

永瀬福男 「貯蔵穴」季刊考古学創刊号 1982年

堀越正行 「小竪穴考(1)」史館第5号 1975年

同上 「小竪穴考(2)」史館第6号 1976年

同上 「小竪穴考(3)」史館第8号 1977年

同上 「小竪穴考(4)」史館第9号 1978年

馬目順一 「大畑貝塚調査報告」 1980年

2．グリッド出土の土器

土器の説明を行なうに際し，以下の6群に大別し，各群について説明を進めていく。

第Ⅰ群土器　縄文時代中期末　加曽利EⅢ・Ⅳ式土器
第Ⅱ群土器　後期初頭　称名寺式土器
第Ⅲ群土器　後期前葉　堀之内式土器
第Ⅳ群土器　後期中葉　加曽利B式土器
第Ⅴ群土器　後期後葉　曽谷式土器
第Ⅵ群土器　後期後葉　安行式土器

なお，必要に応じて，さらに細分を行なった。胴部・底部など所属の判然としないものや，特殊な土器や把手については，別に項を設けた。

第Ⅰ群土器

加曽利E式に比定されるもので，EⅣ式が主体。それにEⅢ式が若干加わる。ここではEⅢ式をⅠa類，EⅣ式をⅠb類に分けて記載する。

Ⅰa類（第56図，図版22）

1・2は口縁上端を横位の太い沈線で区切り，下部にRLの斜縄文の施されるもので，厚手である。口縁及び内面はよく研磨されている。1では逆U字形の無文部が沈線で画されている。3・4は沈線を添えた隆起線で文様を区画するもの。3では横位，4では縦に区画がなされ，区画内にはRLの縄文が充塡されている。5は頸部で，縦位のU字形の区画にRLの縄文の充塡がみられる。6は縦のU字形・逆U字形の区画内を縄文で埋めるもの。7・8は胴部でRLの縄文を地文に縦の無文帯が構成される。

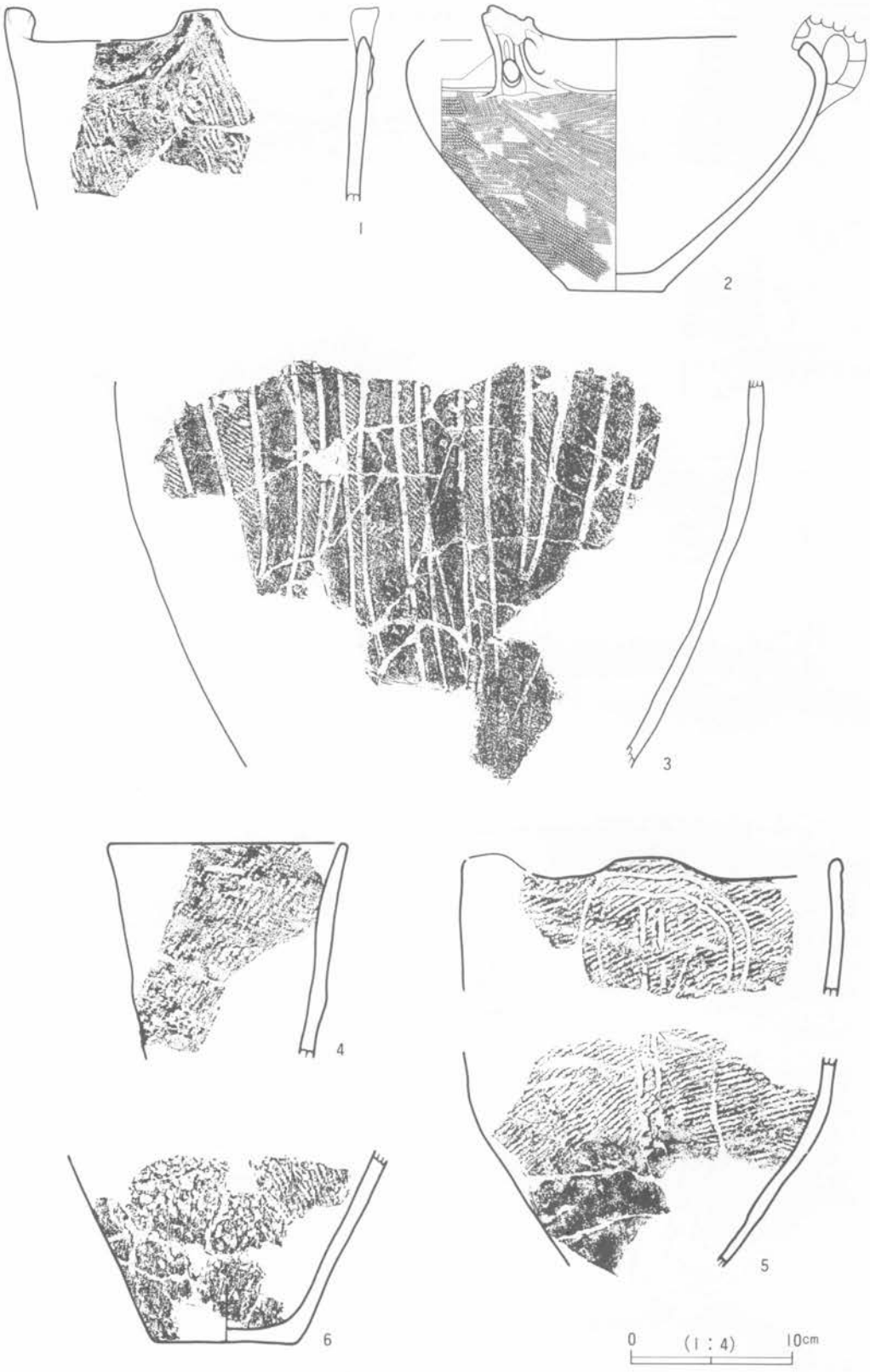
縄文の施文方向は，1では斜位ならびに縦位，2・4～8が縦位，3は横位である。

Ⅰb類（第53図1，第57図，図版20・23）

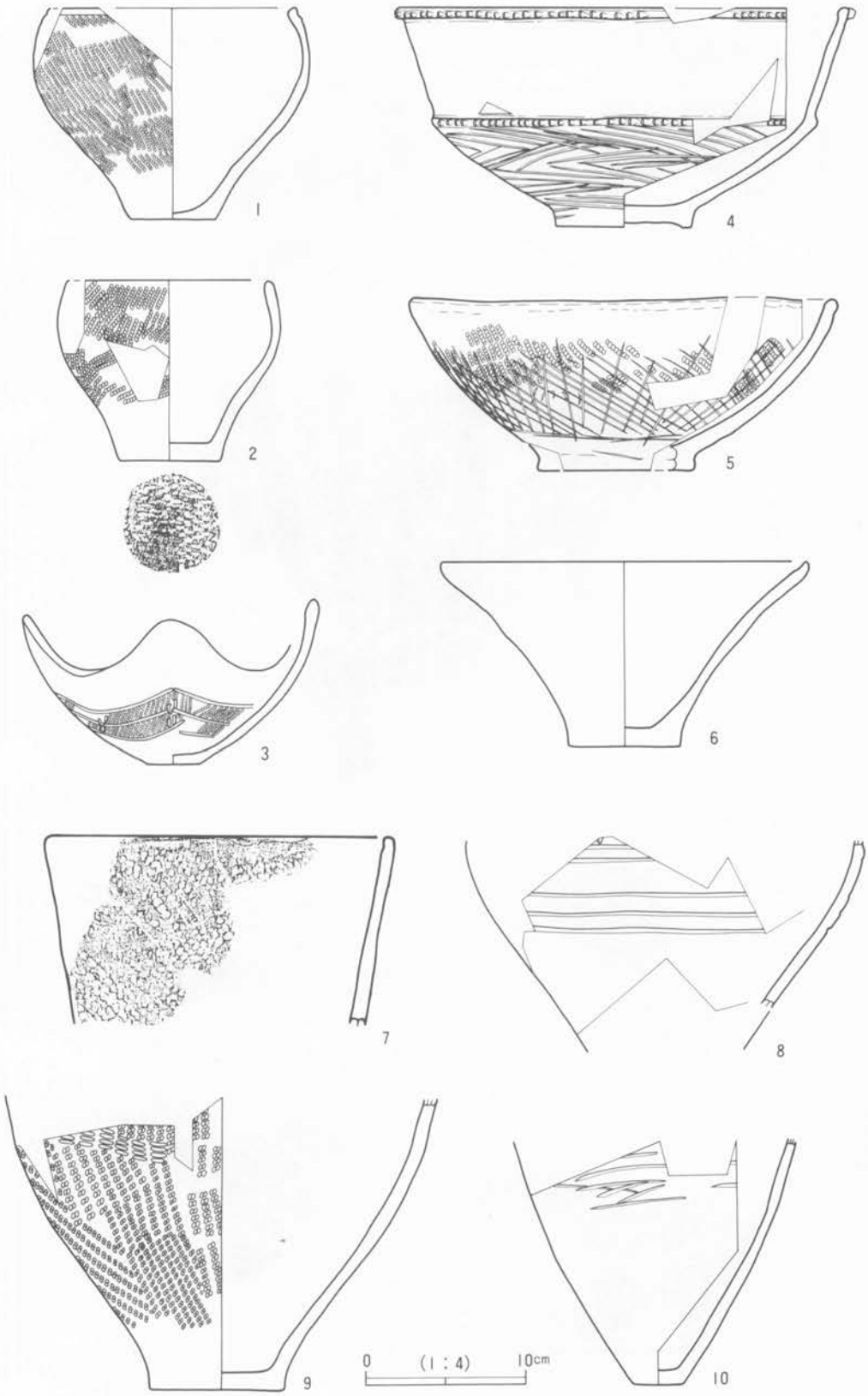
加曽利EⅣ式である。微隆起線を文様の区画に用いている。焼成・胎土はⅠa類と近似。内面もよく研磨される。

第53図1は四単位の小波状突起をもつ深鉢形土器で，口径は23cmほどである。口縁部，波頂間に弧状隆起線が配され，以下の胴部を無節Lの縄文が縦走施文されている。胎土・焼成は一般的なもの。内面はかるく研磨を受けている。

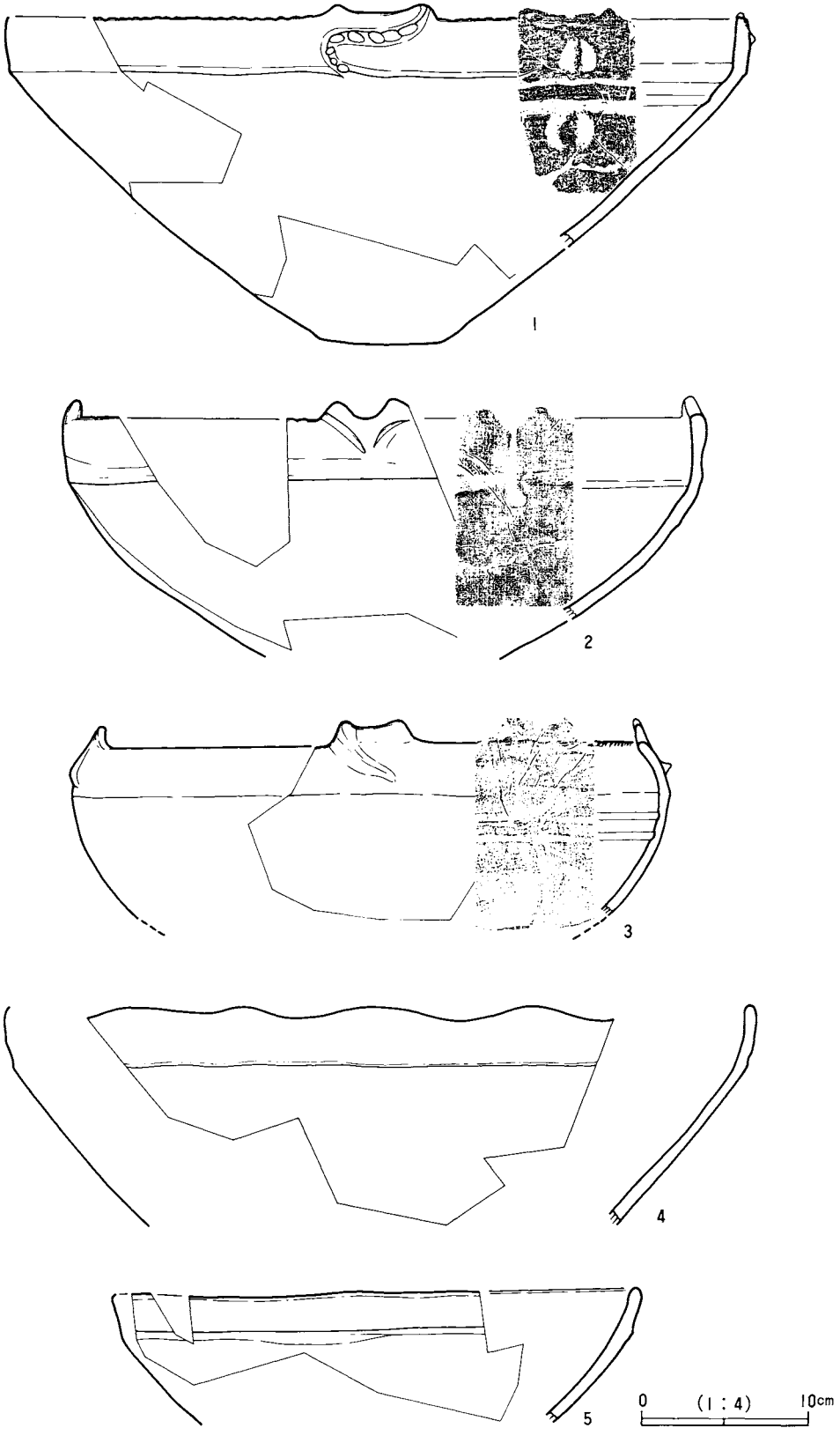
第57図では小破片13点を図示した。縄文を地文に隆起線を基調とした文様がみられる。但し13は口縁端部のみの破片で体部の文様が不明である。



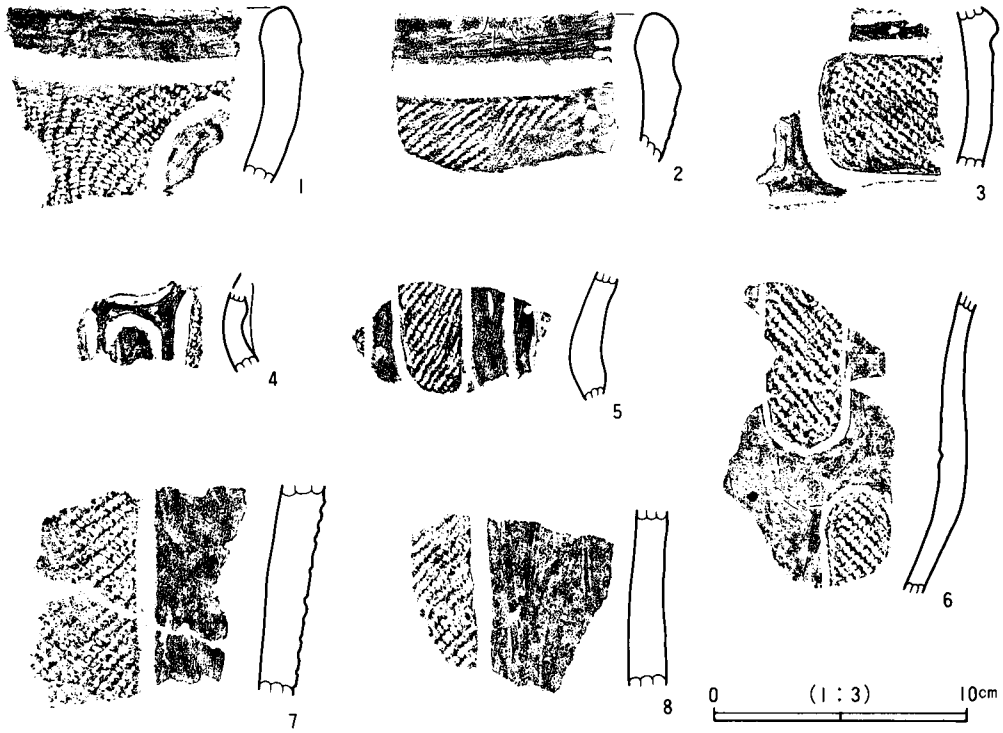
第53図　グリッド出土土器実測図(1)



第54図　グリッド出土土器実測図(2)



第55図　グリッド出土土器実測図(3)



第56図　グリッド出土土器拓影図(1)

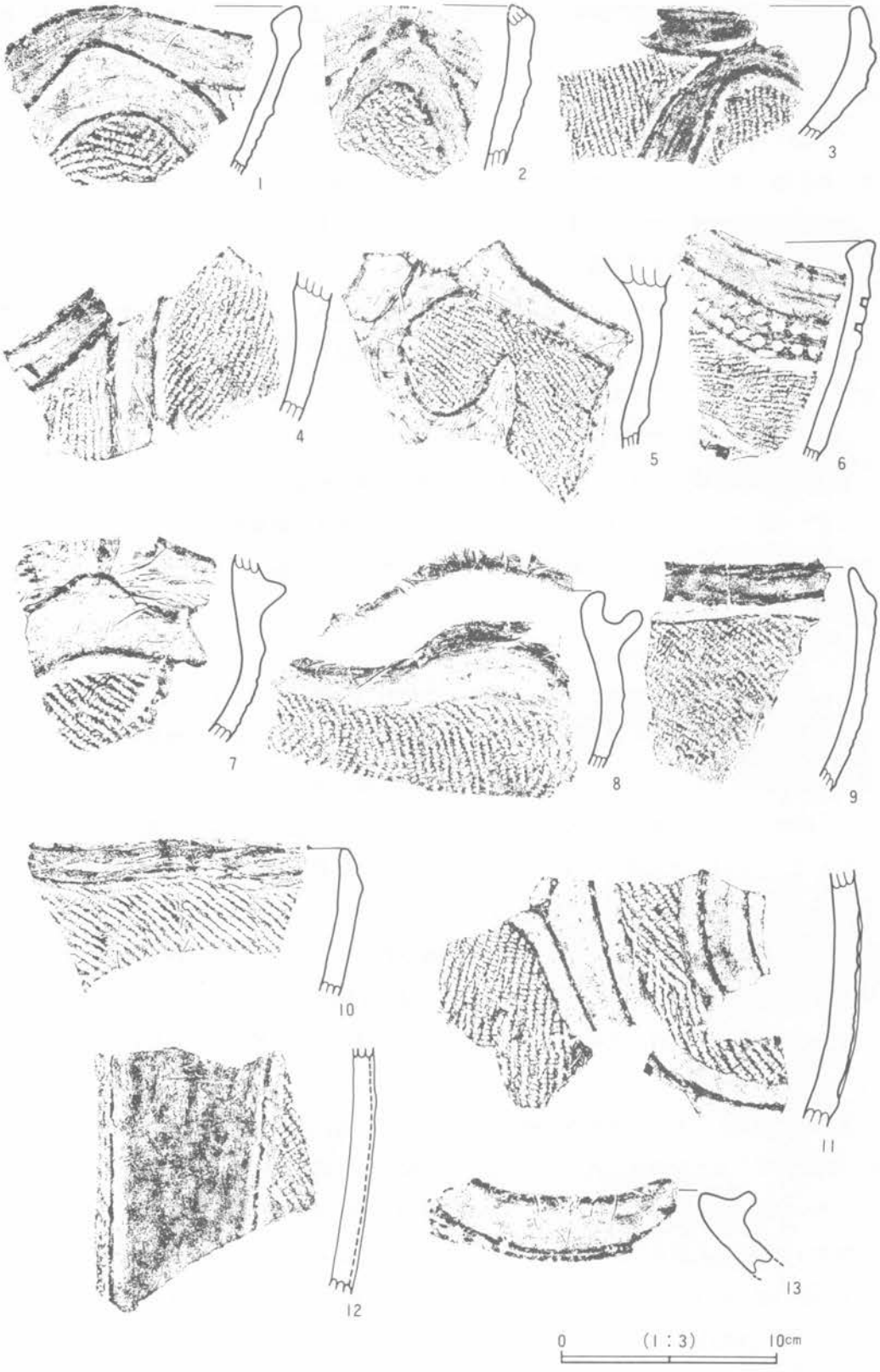
1～6は波状口縁のもので，口縁部無文帯，以下は縄文を地文に山形等の無文帯が隆起線で形成されている。1・2・4は波頂部であるが，3の例は波底部であり，山形の隆起線の頂部にはさらに縦の隆起線が入る。5では山形のかわりに釣鉤形の無文帯が配されている。波頂部には把手がつくと思われる。6は波状口縁で口縁にそって2条の隆起線で区切られたなかに2列の細い円形刺突文が巡っている。

7は波状の隆起線の波頂部が小突起をなしているもの。8は小波状の口縁で，無文帯を画する隆起線が波頂部で舌状に突起し，結果的に厚みをもった口唇に深い溝が入れられた様な効果をもつ。ともに胴部は縄文施文となる。

9・10は口辺を隆起線で区切り，無文部とし以下には縄文が施されるもので，口唇は外削ぎ状に加工されている。9の隆起線には下位に沈線が添えられている。10は胎土に多量のスコリアが含有されている。

11・12は胴部片である。11には2条の隆起線で形成される曲線の無文帯がみられる。12は縦位の無文帯と，縄文が充塡される部分が縦の隆起線で区切られている。ともに雲母・長石の含有がめだつ。

4～12の土器の地文として施文されている縄文原体は，4・8が単節ＲＬ，10が無節Ｌの他



第57図　グリッド出土土器拓影図(2)

は，単節ＬＲである。施文方向は，６が斜位，８の口辺では横位の部分もあるが，他は全て縦位である。

13は鍔状部のつく土器である。内湾する器形をとり，口縁の先端に環状の鍔が巡ると思われる。下位は粘土帯の接合部で割れている。

第Ⅱ群土器（第53図２・３，第58・59図，図版20・24・25）

称名寺式土器をまとめた。一部を除き，共通して内面研磨がよく行なわれる。茶褐色を呈し，胎土・焼成が一般的なものが多い。

第53図２は，口縁で内湾する器形をもつ浅鉢形土器である。環状把手を１個有する。口縁最大径28cm，口縁までの器高15.4cm，把手を含めた現存高は17.6cmである。口縁に沈線で区切る無文帯をめぐらせ，以下を単節ＲＬの斜縄文で埋めている。口縁，内面ともよく研磨されている。把手部には上面に沈線が配され，正面に貫通孔，内面側には凹みが設けられている。

第53図３は胴部破片であり，平行沈線により縦の区画を配し，ＬＲの縄文を充塡するもの。底部近くは無文となる。大きい深鉢形土器の中位部分である。橙褐色を呈しており，胎土には多量の砂粒を含んでいる。二次焼成を受けており，脆く接合し難い。本来はもっと復原できるもの。

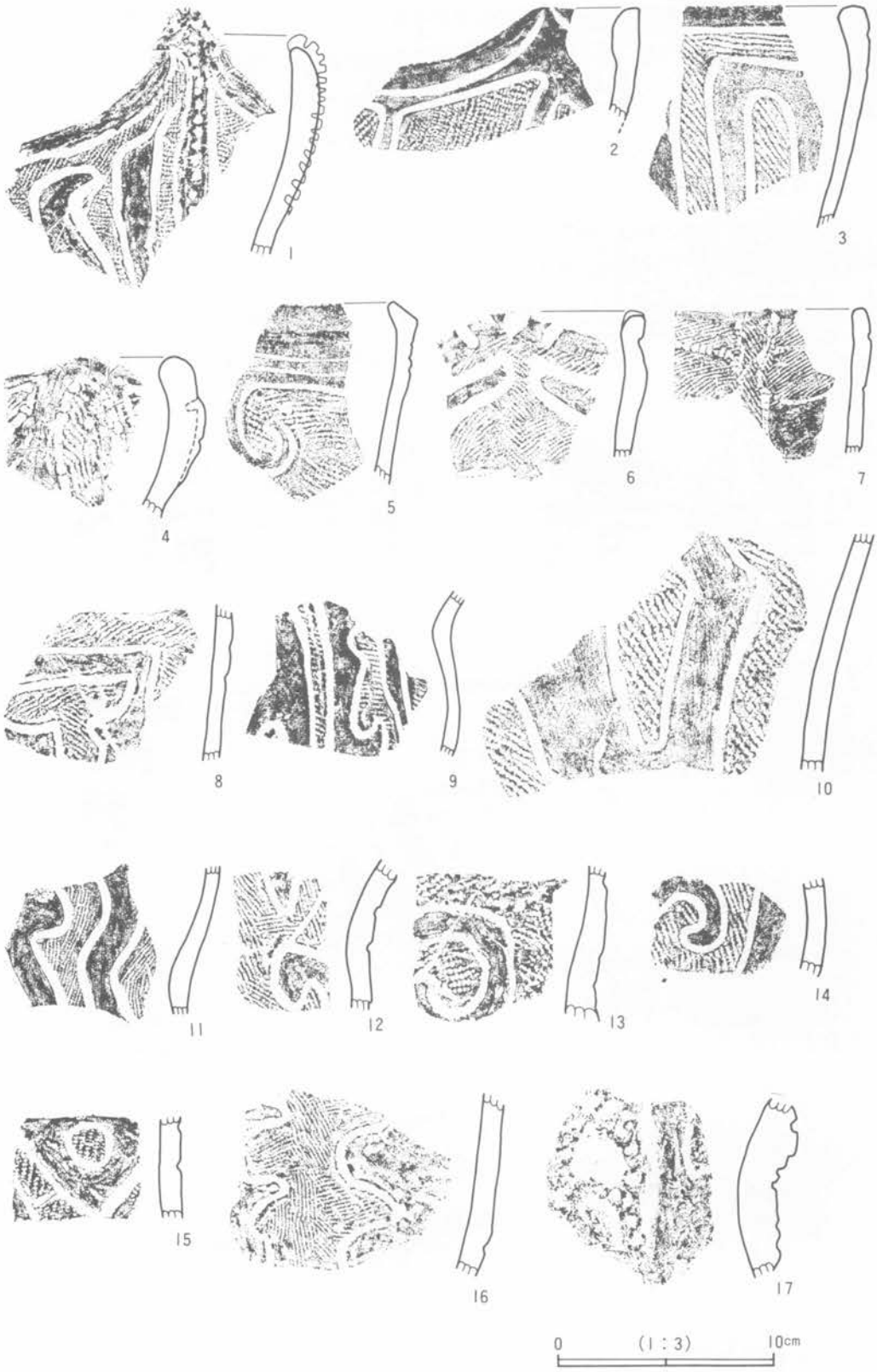
第58・59図１～28は破片のものを示した。

１～17は沈線で曲線・直線の文様を区画し，磨消及び充塡縄文を施すもの。１は山形の口縁をもち内湾するキャリパー形になるもので，波頂から連続刺突文を加えた隆帯が垂下される。２は波状口縁なすもので，縄文を地文に２条の沈線で細い無文帯が画されている。外面無文部，内面の研磨は著しい。縄文部と無文部がネガティブになり，他の例とはやや異なる。３は破片であるが，Ｊ字形に帯状縄文が施されるとみられる。４は波状口縁で頂部に縦長の隆帯がある。文様の区画は円形の刺突を加えた沈線（押し引きによるもの）で行なわれている。５は口辺がくの字に内湾するもので，細い蕨手の無文帯が配されている。６は波状口縁で細かい縄文を地に対向する波状の沈線で区画されている。口唇には波頂部に太い刻みが３列施される。７は縄文を地に，押し引き沈線で文様が構成されている。文様は縦位と横位の平行沈線が組合わされるパターンをとる。

８～17は胴部片である。区画内は縄文が充塡されている。８にはＴ字文がみられる。９は縦長の縄文帯間に変形蕨手文がみられる。10・11は縦位の曲線文をなす。12～14には渦巻き状の無文帯が配されている。15は円形とＶ字形の文様が，16には波状の区画が施されている。17には刺突列を付加した隆起線がみられる。胎土には細砂粒が多量に含まれている。

１～16の縄文原体は，１・３・５から７・９・10・12～14・16は単節ＬＲ，２・４・11・15はＲＬ，８は無節Ｌである。

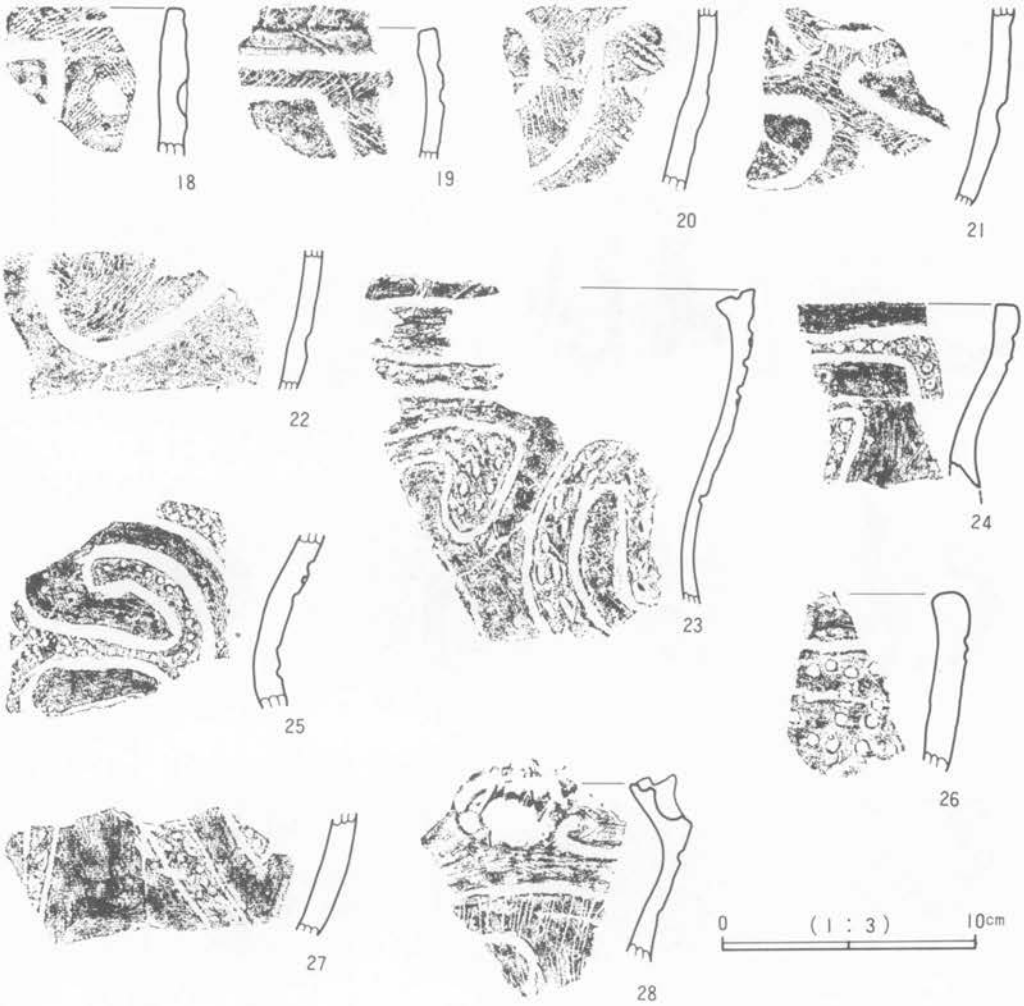
18～22はほぼ同一個体とみられるもの。区画内に細かい無節Ｒの縄文が充塡されている。黒



第58図　グリッド出土土器拓影図(3)

色を呈し，胎土には雲母，長石，石英の砕粒が多量に含まれている。内面の研磨はされておらず，器面の凹凸が激しい。18・19は口唇が平坦な口縁部で，直口気味である。ともにL字形の沈線が文様の区画に用いられている。18には小さな円形のくぼみが，19には口唇部にも施文がみられ，上端に無文部がおかれる。20～22は曲線で文様が区画されており，20の本来無文部の箇所には単節ＬＲの縄文がみられる。

23～27は平行沈線区画内が刺突文で充塡されるものである。23～25はくびれを有する口縁部で，23は黒色を呈し，区画内に篦先状の工具を斜方向から刺突して２列施すもの。口唇にも直線が一条めぐる。24は区画内に円形刺突文がみられる。外面は黒色を呈している。25には横位の釣鈎形区画内に細かい円形刺突文が施される。26は黒色を呈し，直線的な区画内に，25同様



第59図　グリッド出土土器拓影図(4)

の刺突文を２列有する。27は円形刺突文の施されたもの。

28は区画内に細かい沈線文を充塡したもの。口縁が内湾する器形をなし，小突起を有する。突起上には指頭ほどの円形の窪みを中心に，円形刺突文を起点とする沈線を巡らせる文様がみられる。

第Ⅲ群土器（第53図４・５，第60・61図，図版20・26・27）

堀之内式土器である。全般的に焼きは堅緻である。胎土には細砂粒が多量に含まれる。色調は黒っぽいものが多い。大半のものは，内面に研磨がみられる。Ⅰ式に比定されるものは厚手であるが，Ⅱ式では薄手になっている。

第53図４は平縁の小型深鉢土器で，厚手である。径14.8cm，現高12.4cmを測る。文様は不明瞭なＲＬ斜縄文（横位）を有する。口縁の外面上部には炭化物の付着が認められる。内面はよく磨かれている。

第53図５。緩い小波状口縁をなす深鉢形土器。径23.5cm，高さは推定で25cm程度になるもの。単位は５ないし６である。横位の無節Ｌの斜縄文を地文に弧状の平行沈線，波頂より垂下する平行短沈線が施されている。内面の研磨は顕著である。また器面にドングリの圧痕がみられる。

第60・61図１～22は破片のもの。１～16は口縁部片，17以下は胴部片である。

１は幅広の口縁部無文帯があり，胴部は横位にＬＲ斜縄文を地文とし太めの沈線で三角形に区画がなされるもので，沈線の交点には円形刺突文が施されている。また口唇部にも無文帯区画の沈線が巡っている。２は肥厚する波状口縁の一部で，上端に円形刺突文，沈線を組み合わせた文様があり，内面上部には段が形成されている。内外面は磨かれている。

３は口辺に横位の隆帯(刺突文が加えられている)，ボタン状貼付文があり，その下位に蕨手状沈線がみられる。４は沈線を頸部に廻らせ口縁部無文帯を区画し，以下には対弧文のみられるもの。交点にはボタン状貼付文が付されている。３・４とも口縁の区画下にＬＲ斜縄文がみられる。

５は沈線により形成される横位の区画に横位ＬＲの縄文が施文されるもの。円形刺突文もみられる。６は口唇を廻る沈線下位に対弧状と斜行する条線のみられるもの。７は上端に紐線文があり，半截竹管による条線を横位，対弧状と施している。６はＬＲ，７はＲＬの横位斜縄文を地文としている。

８は口縁を一条の横位沈線で区切り，その下位に対弧状の細い条線文がみられるもの。

９～11は口縁部に縦の隆起線のあるもの。いづれも２状単位であり，波状口縁になっている。９はかるい弧状の隆起線がある。頸部は横位の隆起線で区切られ，以下縄文部となる。隆起線の交点にはボタン状貼付文が付され，胴部からは隆起線にかわり，沈線が施されている。10は波頂部に円形のくぼみを有し，それを挟むように紐線状の隆起線がみられる。口唇及び隆起線

第60図　グリッド出土土器拓影図(5)

のわきには沈線が施されている。11は波頂部に刺突文がみられる。

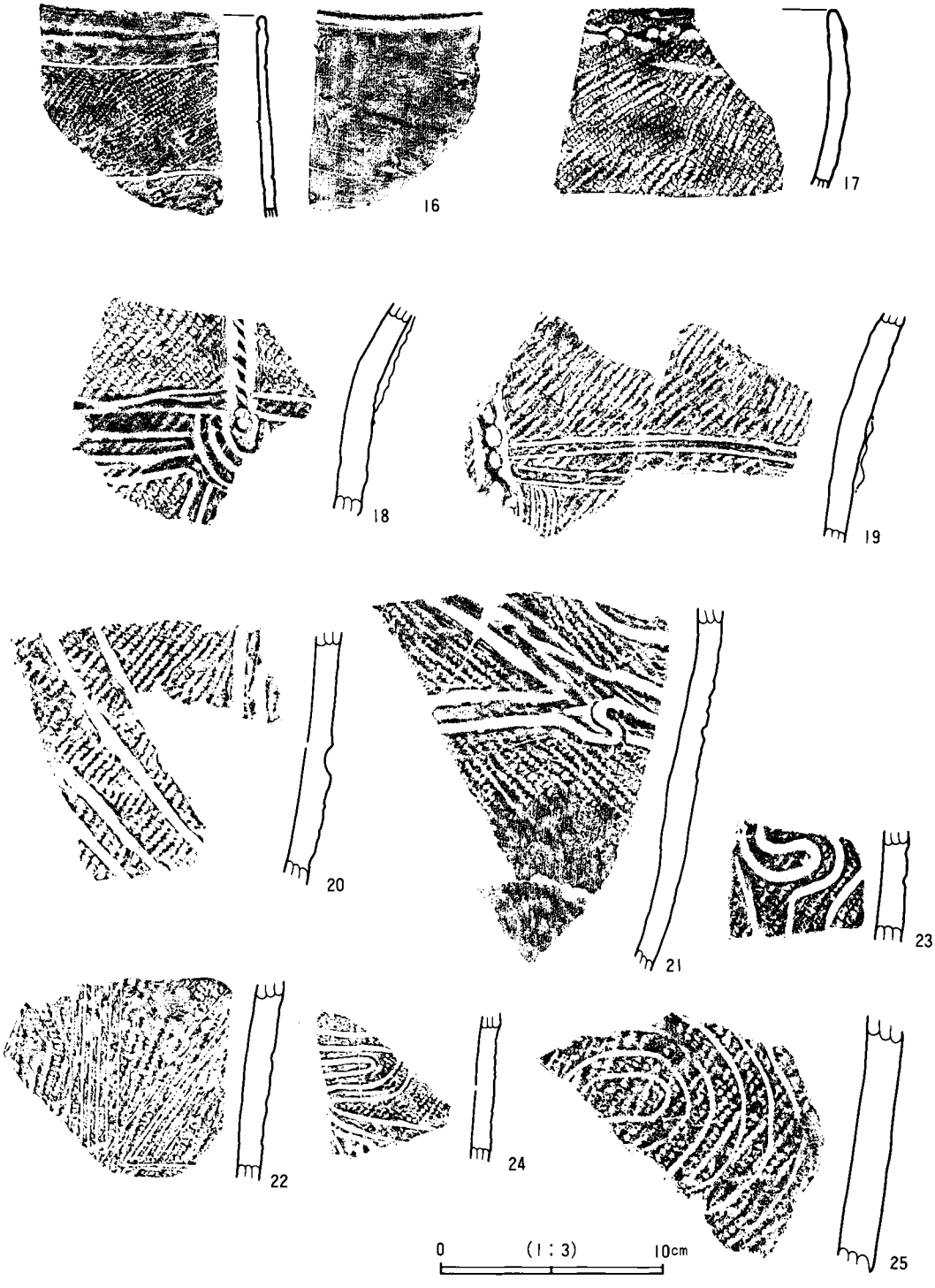
12は直行する口縁をなす小型の深鉢形土器で，平行沈線を口辺に横位に，胴部で斜行して施し三角形状の文様を構成している。地文には無節Ｌの縄文が下半部までみられる。

13・14は口縁部に刻み目を加えた隆起線が横位に施されるもので，堀之内II式の精製深鉢形土器の典型である。波状口縁をなし，頂部には球形の把手がつくものと思われ，その両側の口唇部には円形刺突文を起点とする沈線が巡っている。隆起線は２条あり，波頂下でボタン状貼付文が付され，更に縦位の隆起線で連結されている。胴部には沈線で横位文様帯が配され，連弧状区画内に細かいＬＲの縄文が施されている。無文部及び内面はよく研磨されている。15・17は口辺に隆起線の巡るもので横位縄文を地文（14はＬＲ，15はＲＬ）としている。15の隆起線は紐線文状，17は口唇上に沈線が巡らされている。16は薄手の平縁土器。口縁上端に微隆起線がめぐり，以下に細かいＬＲの線文が巾広く施され，上下を沈線で画し，側を磨消し縄文帯を形成している。内面は削り痕が残され，上端には横位沈線がめぐる。

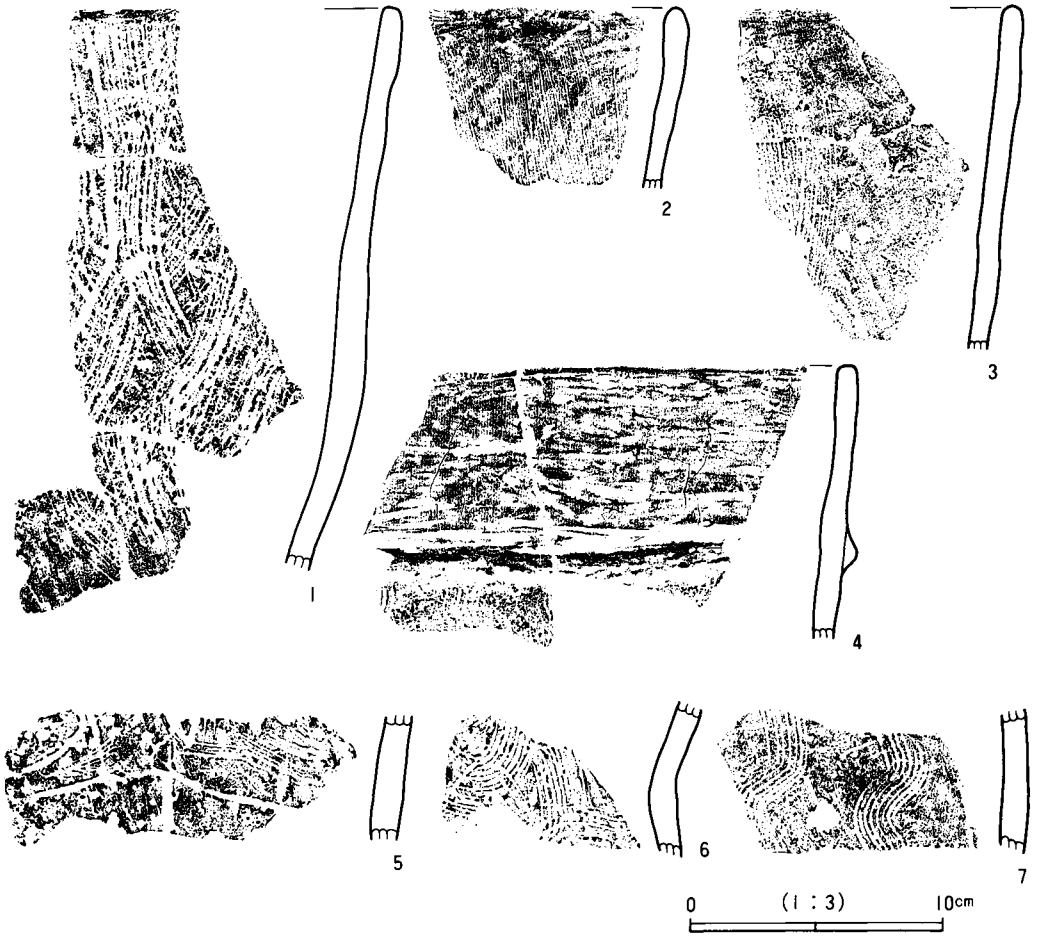
18・19は口縁部に隆起線が垂下し，頸部を横位の沈線で区切り，以下に沈線文の描かれるもの。ＬＲの縄文を地文としている。18の隆起線上には細かい刻み目か，その末端には円形刺突文が加えられ，半円形の文が施され，それから沈線が放射状にのびるモチーフが見られる。19も18と同様の文様構成をとるもので，ただし隆起線は紐線文状，沈線は半截竹管によるものである。20・21は太い棒状工具で直線的な沈線文が施されるもの。21では文様帯の下部を区切る沈線があり，そのすぐ下から無文となっている。22は半截竹管を利用した細い条線で同様の文様を描くもの。23・25は曲線文の施されているもので，23は蕨手状の文様，24には波状の条線文，25には渦巻き条の沈線がみられる。いずれも斜縄文が地文となっており，原体は20・23～25はＬＲ，21・22はＲＬである。時期的には13・14・16・17が堀之内２式とされる。他は堀之内１式に比定できる。

沈線文土器（第62図，図版28）

沈線文・条線文のみが施された土器。称名寺式から堀之内式にかけてのもので全体に厚手である。１は縦位の弧状条線が密に施文されている。内面は上部横ミガキ，下部縦ミガキである。２は縦位の条線文のもの。器面には，凹凸が見られる。３は縦位沈線があり，口縁部はよく研磨され無文帯をなしている。内面は上部横方向，下部縦方向のミガキが入る。４は口縁部を研磨，頸部に隆帯が配され，以下，縦位の波状条線となるもの。口唇，内面上部もミガキを受けている。５は胴下半部の破片、やや太い沈線で文様が区画され，条線文で区画内を埋める称名寺式と共通するモチーフをとっている。６・７は波状の条線文がみられるもので，６は頸部でくの字に屈曲する。



第61図　グリッド出土土器拓影図(6)



第62図　グリッド出土土器拓影図(7)

第Ⅳ群土器（第54・63～67図，図版21・22・29～33）

加曽利B式土器をまとめた。ただし浅鉢形土器，特殊土器，紐線文系土器，底部は除く。これらを諸特徴により，さらに6類に細分して記載する。

A類（第63図1～11・15）

よく研磨された体部の上部に沈線文を基調とする横位の文様帯を配するもので，縄文が横位施文され，横帯文を形成するものが主である。結果的に口縁部は無文帯を形成することになる。

1は上下を横帯文で区切った間を更に小区画の充塡縄文を施す横位文様帯がみられる。口唇には細かい刻文，内面には凹帯がみられる。

2～9は縄文を充塡した横帯文のみられるもの。

2は外削ぎ状の断面形態をもち，かるい波状をなす口縁部で，1同様口唇部には刻文，内面に凹帯がみられる。波頂部には貼付文の痕跡が認められる。3は強く外反する鋭角な山形口縁

になるもので，先端は欠けているが板状の突起を有する。口縁は末端で内湾しており，口唇は急激に器厚が増して断面が撥状になる。横帯文は口縁に沿って波状に巡っており，波頂下で縦に互違い状の弧線が入れられている。4は胴部が強く外傾し，口縁部で器厚が減じて直立し，胴部との境で段をなす。浅鉢形土器の器形になるものと思われる。無文帯を挟む横帯文に，円形刺突文から連なる縦位の対弧文状短刻文が施されている。5は波状口縁になるもので，細かい対弧文が付加されている。6は内湾する器形をなす口縁部で，横帯文を区画する沈線に釣針状の刻文が付加されている。内面上端には横位沈線もみられる。7は弧状の隆帯を付す小突起をもつもので，区画の沈線が鍵の手になって互い違い状に配されている。8は波状口縁になるもので，波状部には弧状文がみられ，直下の横帯文上に9の文字が付されている。9・10は胴部片であり，互違いの弧状刻文が入る。10には三角形の区画線もみられる。

11・12は沈線による横位文様が施されるもの。11は口辺でくの字に外傾し，さらに末端部で屈曲して立ち上がる器形を呈している。文様は太めの沈線で表現されており，S字状の短刻文が付されている。胎土には石英，輝石粒が多量に含まれている。12は細い沈線でクランク状に交差させているもので，内面上端に沈線が一条巡らされている。

なお，これらの内面はきれいに研磨を受けている。縄文の施文されているものの原体は，8・9が単節RLである他は単節LRである。

B類（第64図1～11・17・18）

口縁部上端に，沈線を主体に区切る横位の縄文帯が形成されるもの。無文部はよく研磨される。

1・2は平行口縁をなし，弧状の帯状縄文がみられるもの。1では2条の紐線文が口縁上端にあり，X字状に帯縄文が配される。2では端部に刻文帯を有し，下部に入り組状の帯縄文が配されている。

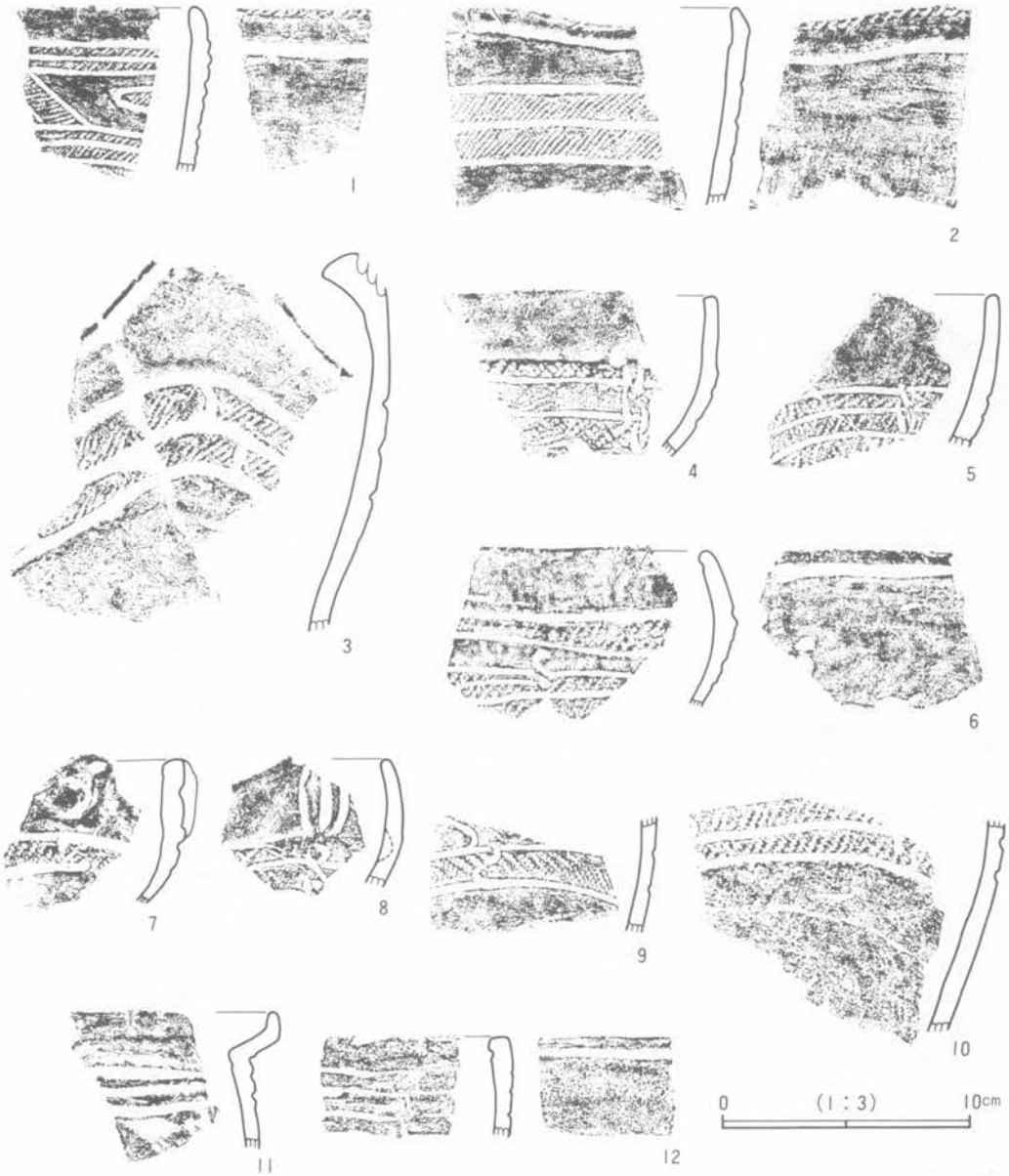
3～9は縄文帯の上端部に刻文帯ないし刻文列を有するもの。全貌の不明な9を除き，他は波状口縁で，かるいキャリパー形の器形になると予想される。3は波底部で，縄文部の下位の区切りは弧状沈線である。4は上端が肥厚して内面に段が形成されている。5では頸部にも刻文帯がみられる。5・6も内面が肥厚している。9には弧状の沈線が加えられている。

10・11は上下の沈線のみで文様帯が区切られるもので，平行口縁になる。11の上部の沈線は2条である。

17は直立する口縁をなし，上端に横位の縄文帯が区画される。

18は内湾する器形をなす口縁部片で，縄文を地文として，口辺に横位無文帯，胴部にも弧状の無文帯が配される。口縁区画の沈線の下には連続短刻線が付加されている。

施文される縄文の原体は単節のもので2・18がRL，他の10点はLRである。



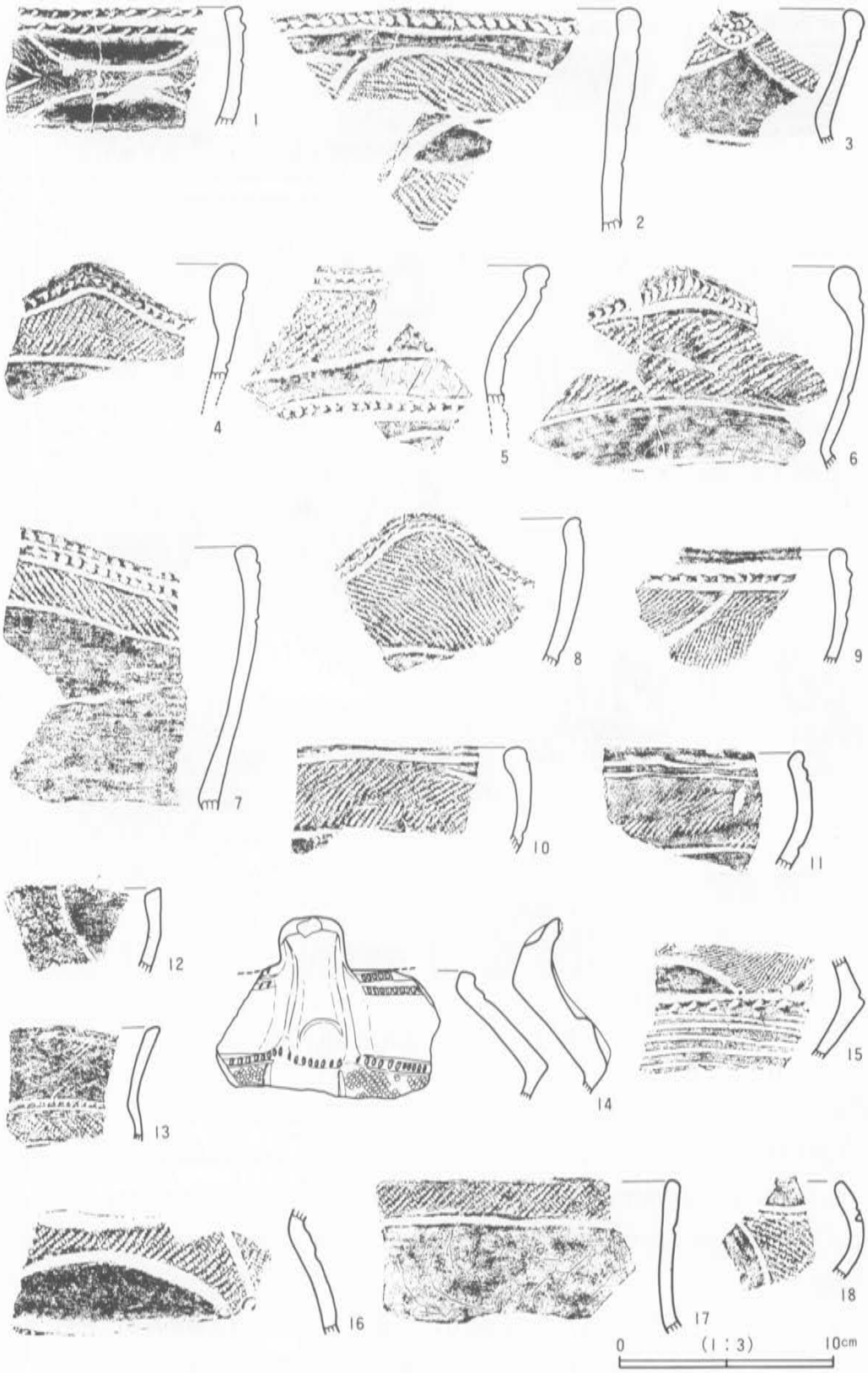
第63図　グリッド出土土器拓影図(8)

C類（第64図12～16）

胴部に縄文の施文される文様帯をもつもの。いずれも内面，無文部は研磨されている。

12は弧状の区画内が磨消されている口縁部片。13は小型の土器で，口縁が外反し頸部がややすぼまる壺形に近い器形をとるもの。口縁部は無文で，頸部から下は刻文帯・沈線で帯状縄文を施す。

14～16は算盤形の器形になるものである。14は口縁部で，上部に無文帯があり，その上下は刻文列を加えた隆起線で区切られ，縦位の2条の隆帯から舌状に突出する把手がみられる。把



第64図　グリッド出土土器拓影図(9)

手の内面上端には円形のくぼみを有する。口縁部隆起線間には下端に半円状の隆起文が配されている。下位には縄文部とは隆帯から縦位に無文帯が配されている。15・16は上半部が磨消弧線文のもの，15では弧線の端部に円形刺突文が配されており，胴部の稜には刻文列，以下下半部に横位の集合沈線がみられる。16は弧線間に円形刺突文を起点とした縦沈線がみられる。

縄文の原体は単節のもので，13・14はＲＬ，15・16はＬＲ，12は不明である。

D類（第65・66図１～27）

沈線文が主文様となるものである。胎土・焼成はＢ・Ｃ類に共通。黒っぽい色調のものが多い。内面の磨きはほとんど全部に行われる。

１～４は口縁部に幅広い無文帯の形成されるもの。１～３は斜行の沈線文が施されており，やや，内湾気味に外方へ開く波状口縁をなすもの。２では羽状の構成がとられ，内面側が肥厚している。３は口唇の両端部が肥厚し，外面に刻文列がある。４は極端に肥厚し外反する口縁末端の処理がなされるもので，波状口縁をなし，縁に刻文列の施された耳たぶ状の突起が加えられている。

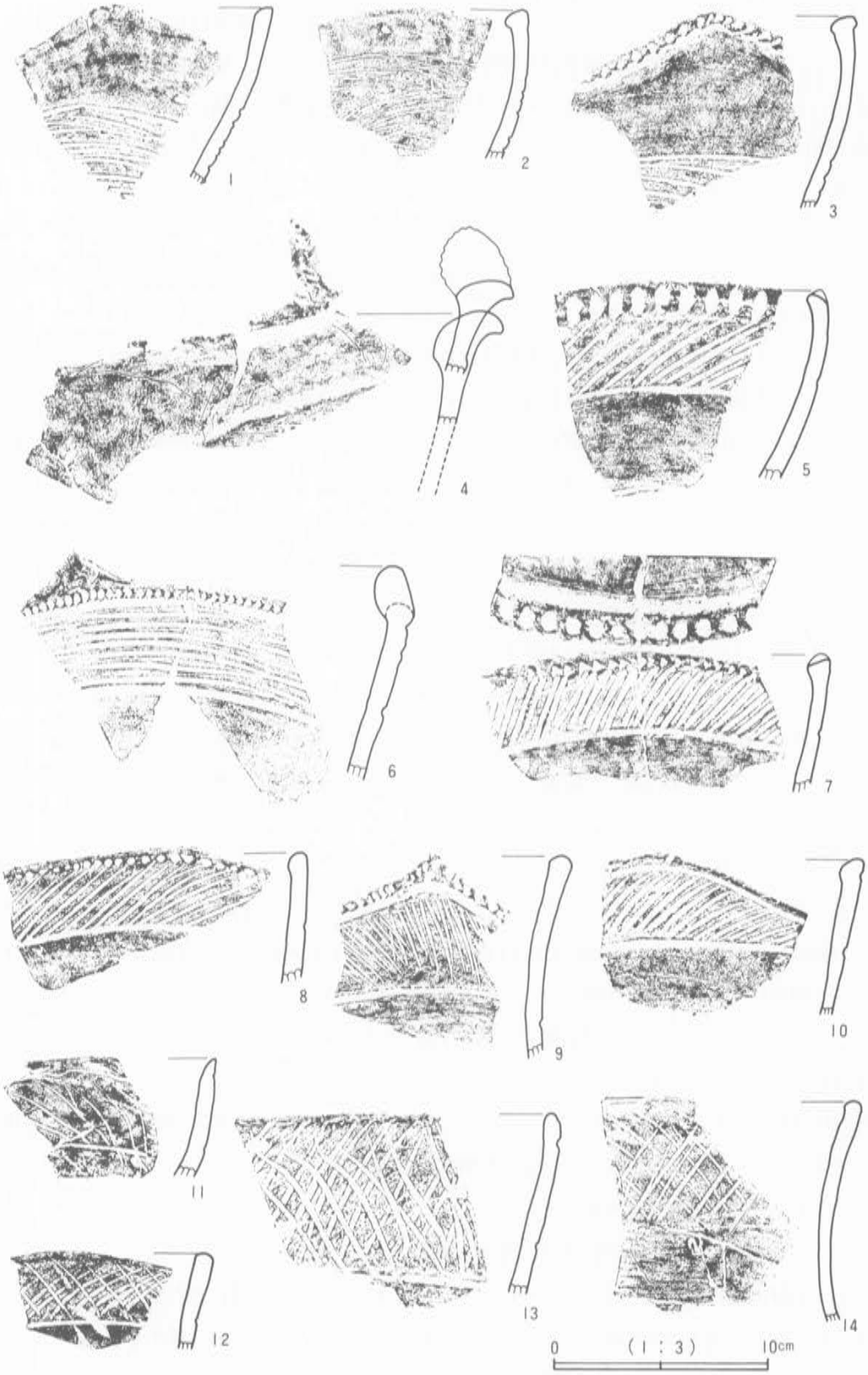
５～11は口縁上部に文様帯をもつもの。５は上下を沈線で区切った間に横位の集合沈線を施すもの。小波状の突起があり，口唇が肥厚している。６～11は斜行の集合沈線のもの。６は内湾ぎみに開くもので，口唇に太い刻文列をもち，文様の下部は横位の沈線で区切られる。７・８も同意匠になるもので，７は口唇が内側に肥厚し，上面に太い刻文列が，口縁上端にも細かい刻文列がみられる。８の刻文列は口縁上端のみである。９～11は沈線で文様帯の上下が区切られるもの。９は波状口縁で口縁端に刻文列がある。11は先頭状の口唇部になるもので，浅く粗雑な沈線文が特徴である。12から14は格子目文を施されたもので，ゆるく外反する器形をなす。12は波状口縁。13は下部が沈線で区切られている。

15～20は鉢形ないし浅鉢形の土器になるもので，口縁部がくの字に内湾する器形をとる。15は口縁部に無文帯を有し，屈曲部には刻文列，胴部には横位の連弧状集合沈線がみられる。16～19は胴部片で，16は斜行沈線文のみのもの。17～19には屈曲部に刻文列を有する。上部は磨かれ無文となっている。17は羽状構成である。20は上部に斜縄文がみられる。胴部は連弧状の沈線になり，算盤形の器形になり，屈曲部に刻文列が加えられている。

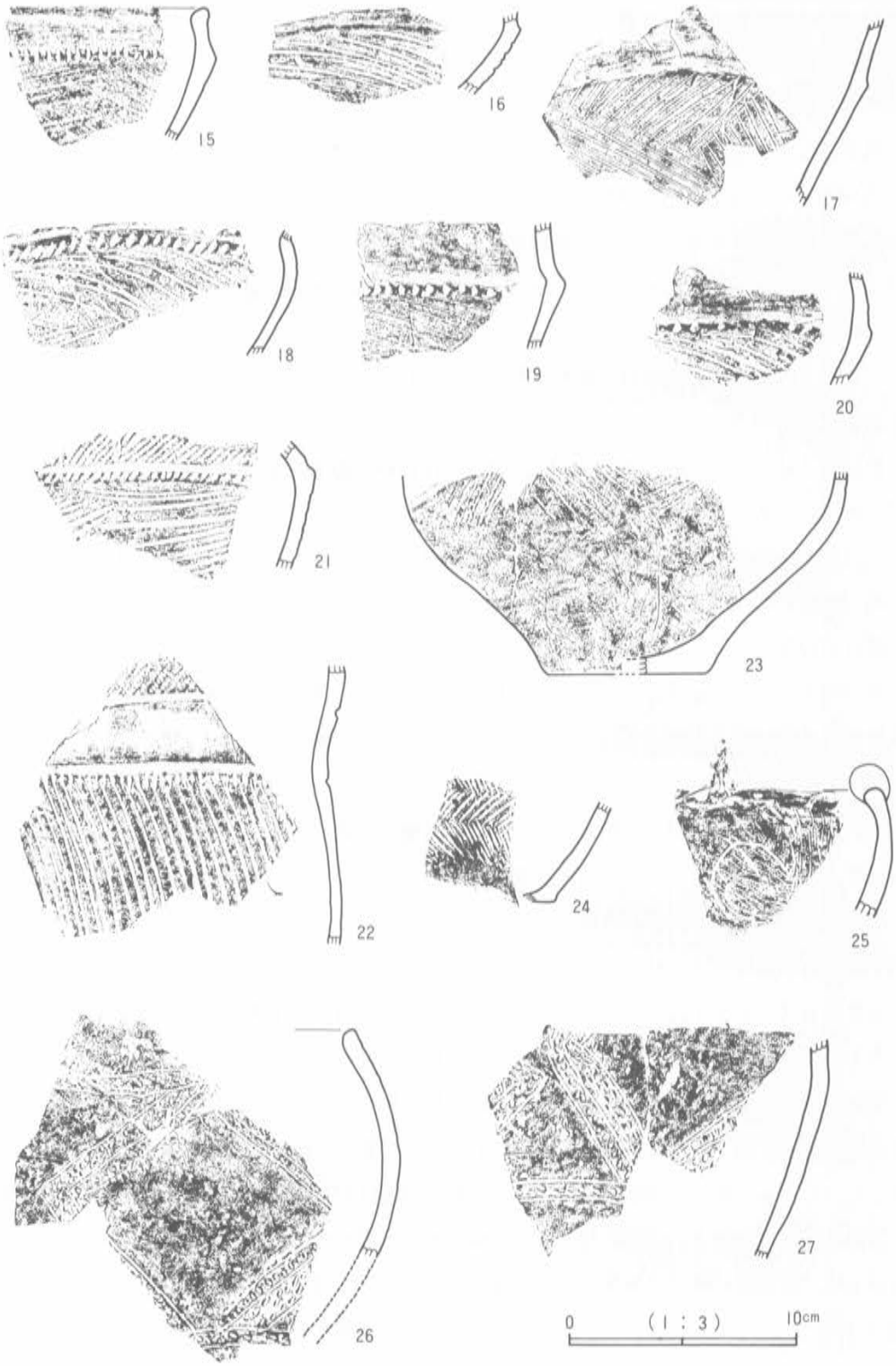
21は直線的に外方へ開く器形をなし，頸部に段を有する。胴部文様は方向の異なる斜行の集合沈線文を組み合わせるもの。22は頸部を横位の平行沈線文で区切り，上部に縄文，胴部以下が刻文列下に斜行集合沈線を配している。

23・24は底部である。23では縦位，24では横位に綾杉状沈線がみられる。

25～27は区画内に細かい沈線文を充塡する例。25は内湾気味の口縁に耳たぶ状の突起があり，Ｊ字状の沈線区画内に短沈線列が連続して施されている。26は内湾する口縁をもつもので，27も同一個体である。細い平行沈線内に刺突文（鋭い箆先で施されたもの）がみられる。文様の



第65図　グリッド出土土器拓影図(10)



第66図　グリッド出土土器拓影図(1)

パターンは上下を横位の沈線で区切り，中に菱形の区画を施すものである。磨消され不明瞭だが器面には地文に縄文が施されている。

E類（第54図１・２・７，第67図１～３）

施文されている文様が縄文のみ，あるいは縄文が主文様となっているもの。

第54図１・２は口縁部が球形に脹らみ，内湾する器形をもつ小型の深鉢形土器である。ともに文様には斜縄文が施文され，底部付近無文部をなす。

１は口径14.9cm，胴部最大径16.0cm高さ13.0cmを測る。内面口縁上端に沈線が巡らされている。原体はＲＬである。２は口径12.4cm，胴部最大径13.8cm，高さ10.9cm，３分の２ほどが残存している。胎土は精選され，砂粒が殆ど認められない。内面の研磨は粗い。原体はＬＲ。底面に網代痕がある。

第54図７は口径21.6cm，現高12.5cm，薄手の深鉢形土器である。体部外面には粗いＲＬ斜縄文（横位）があり，口縁上端に一条の凹線を有する。内面の研磨は顕著である。

第54図８は深鉢形土器の体下半で，現存部の径26.7cm，高さ17.6cmである。上部には，条間の開いた撚糸文（縄巻縄文か）とその原体を引きずってつけたとみられる短条線文が横位に施文されている。

第67図１～３は口縁部片で，原体はＬＲである。１は内湾する器形をなしている。２には半截竹管で斜行沈線文が加えられている。３の内面上端には横位沈線を有する。

F類（第67図４・５）

無文土器。４は口縁が若干肥厚し，口縁外面を横位に削ってつけた浅い凹帯がみられる。５は口縁上部に浅い凹帯があり，以下，胴部は縦方向のケズリ状の調整がみられる。質感からみて第III群以前の土器とは思われない。

第Ｖ群土器（第67図６～18，図版33）

加曽利Ｂ式と安行Ｉ式との中間な様相を示すもので，曽谷式土器に比定できるもの。薄手で黒色を呈するものが目立つ。胎土・焼成とも第IV群土器に近似。内面は研磨される。

６は肥厚する口縁部に細かい縄文を地文に平行沈線を中央に配し，間を磨消して二段の帯縄文を形成する。施される縄文の原体はＲとＬの撚りの異なる紐を撚り合わせて$L<\frac{R}{L}$とする特殊なものである。縦長の棒状貼付文が加えられ，口唇は平坦に作出されている。胴部には横位の箆書き綾杉文がある。内面にはまばらに横ミガキが行われている。７は口縁に多条の平行沈線があり，その上に縦位の棒状貼付文が施されており，下部が刻文帯で区切られる。胴部には縄文(無節Ｌ？)を地文に沈線文が施されている。８は内傾する口縁になるもので上端に横位に条線文がみられる。口唇には刻文列が付加されている。縄文は施されず軽く磨かれるのみである。９は口縁上部に耳たぶ状の貼付文のみられるもの。斜縄文(ＲＬ)を地文に太い沈線が施文される。10は横位の条線文を地文に口辺に隆起帯が施されるもので，口唇と隆起帯上に刻文列

がみられる。11は口縁に凹帯が形成され，その部位横位条沈線文の施される。胴部には斜縄文（ＬＲ）がみられる。12は口縁に平行な刻文帯，ボタン状貼付文がある。胴部は細かいＬＲの縄文が施される。磨消連弧文の構成をとるとみられる。13は口縁端部を刻文帯，以下に縄文（ＬＲ）を地文に，沈線で周囲を縁取る大きな円形隆起文を施すもの。14は口辺に刻文帯があり，胴部は弧状区画の磨消縄文となる。15は縄文を地文に磨消部のみられる胴部片で，ボタン状貼

第67図　グリッド出土土器拓影図(12)

付文が付されている。16は縦位ＲＬの縄文を地文に横位，斜位の平行沈線があり，交点にボタン状貼付文が施される。17は弧状の区画内に縄文(ＬＲ)の充塡される磨消連弧文のもので，弧線の交点にはボタン状の貼付文が入る。18は底部片で，下端部を刻文帯で横位に区切り，底際に斜縄文(ＲＬ)が施され，また縦位にも縄文帯が垂下され，交点には隆起文が付されるようである。

第Ⅵ群土器（第68図，図版34）

後期安行式である。黒っぽい土器多く，胴部は薄手である。内面にミガキ調整がされる。焼成は良好。胎土に微細砂粒を含むものが一般的。

１～10は口縁に沿って平行に隆起帯縄文(ＲＬ)が巡らされるもので，隆起帯は沈線により縁取られている。また隆起間は研磨される。１・２は山形に突起する波状口縁で，縦位に棒状貼付文が連続して付される。端部で肥厚，内削ぎ状に作出。３は波底部で，貼付文は口縁直下に大きい円形のものが、下位に刺突文を加えた小さなものがみられる。４・５は平坦な口縁のもので，やはり縦位に貼付文がみられる。５は二段構成の隆起帯になる。６は低い３条の隆起帯縄文を口縁にめぐらすもの。棒状貼付文がみられる。隆起帯の縁取りには押し引き沈線による。７は大きく弧状になる波状口縁で，口唇は尖頭状に作出されている。隆起帯は若干肥厚する程度の隆起度である。８は波状口縁で，細い２条の隆起帯がみられる。棒状貼付文は波頂部に配される。９・10は隆起帯の縁取りに押し引きの沈線文が加わっているもの。これらは安行Ｉ式に比定できる。

11～19は安行II式の隆起線を特徴とするもの。施される縄文は全て単節ＲＬである。

11は波状口縁で，波頂部に刻み目を有する長円形貼付文がみられる。隆起帯縄文は口縁上端に限られ，その下位には刻文列の付された細い隆起線が施文されている。12は口辺の隆起帯上に連続爪形文，豚鼻状貼付文，胴部には縄文を地文に縦に沈線が施される。隆起帯下縁には押し引き沈線で区切られている。13～15は11と同意匠の文様となるもの。13は波頂部で，口唇にも刻み目があり，縦刻文を有する貼付文が上端で横位に，下位には縦にＴ字状に配される。14は口辺に隆起帯縄文があり，以下に縦位の鋸歯状に隆起線が配されている。内面の研磨はみられない。15は隆起線がＸ字状になり，交点には貼付文がみられる。口辺の隆起帯は磨かれて無文である。器面の一部には丹が付着している。

16～19は隆起線で横位に区切り，下位に文様を施す胴部で，16・19は隆起線下に無文帯を介し，沈線で区切った下位に斜縄文が施される。隆起線上には豚鼻状の貼付文が配されている。17は貼付文はみられないが16・19と同様の構成をとる。18では下半部には綾杉状の沈線がみられる。なお17・18の隆起線は上下に沈線を密着させて施したものである。

20・21は球状に脹らみをもつ胴部で，連続する交互弧線区画内に縄文を充塡している。

22は太い刻み目の施された小突起を有するもので，弧状の区画内に細かい斜縄文が施されて

第68図　グリッド出土土器拓影図(13)

いる。内面調整はナデ程度である。やはり安行II式であろう。

浅鉢形土器（第54図３～６・第55・69図，図版22・22・35）

第54図３は四単位の大波状口縁をもつ浅鉢形土器で，椀状に膨らむ器形を呈する。口径17.9cm，高さ9.7cm，底径は3.1cmと小さい。口縁に沿い波状に区画される横帯文（ＬＲの斜縄文で充塡される）に対弧状沈線が付されている。内外面ともに無文部には研磨が著しい。

第54図４は高台付き浅鉢形土器である。口径28.4cm，高さ13.5cmで，2/3ほどが残存している。刻文列を有する２本の隆帯により口縁を区画し，研磨して無文帯を形成している。胴部には綾杉状の箆書き沈線が施されている。また内面も軽く磨かれている。

第54図５は椀状の浅鉢形土器。口径26.5cm，高さ10.0cmを測る。口縁直下は無文帯，以下ＲＬ斜縄文を地文に，箆書きの斜格子文が施されている。内面の研磨は顕著である。底部には円板状の台がつく。

第54図６は底部から口縁にむけ極端に外反する器形を呈するもので，無文である。口径22.6cm，高さ11.1cm，外面と底面にはケズリ痕がみられる。

第55図１～５は加曽利Ｂ式に特徴的な，口縁と胴部の境に段が巡る無文の浅鉢形土器である。これらは口縁外面と内面全体の研磨は顕著であり，胴部にはケズリ痕が残されている。

１は口径43cm，現高17.5cmで，高さは20cmほどになると思われる。残存度は1/2弱である。双角状の小突起をもち，その突起から逆Ｓ字状の隆起線が口縁部に施されている。隆起線上には太い刻み目がある。内面には２条の浅い凹線があり，突起下に対弧状の沈線がその凹線を挟む形で施されている。また口唇には細かい刻文列がみられる。突起の単位は３単位になる可能性が大である。

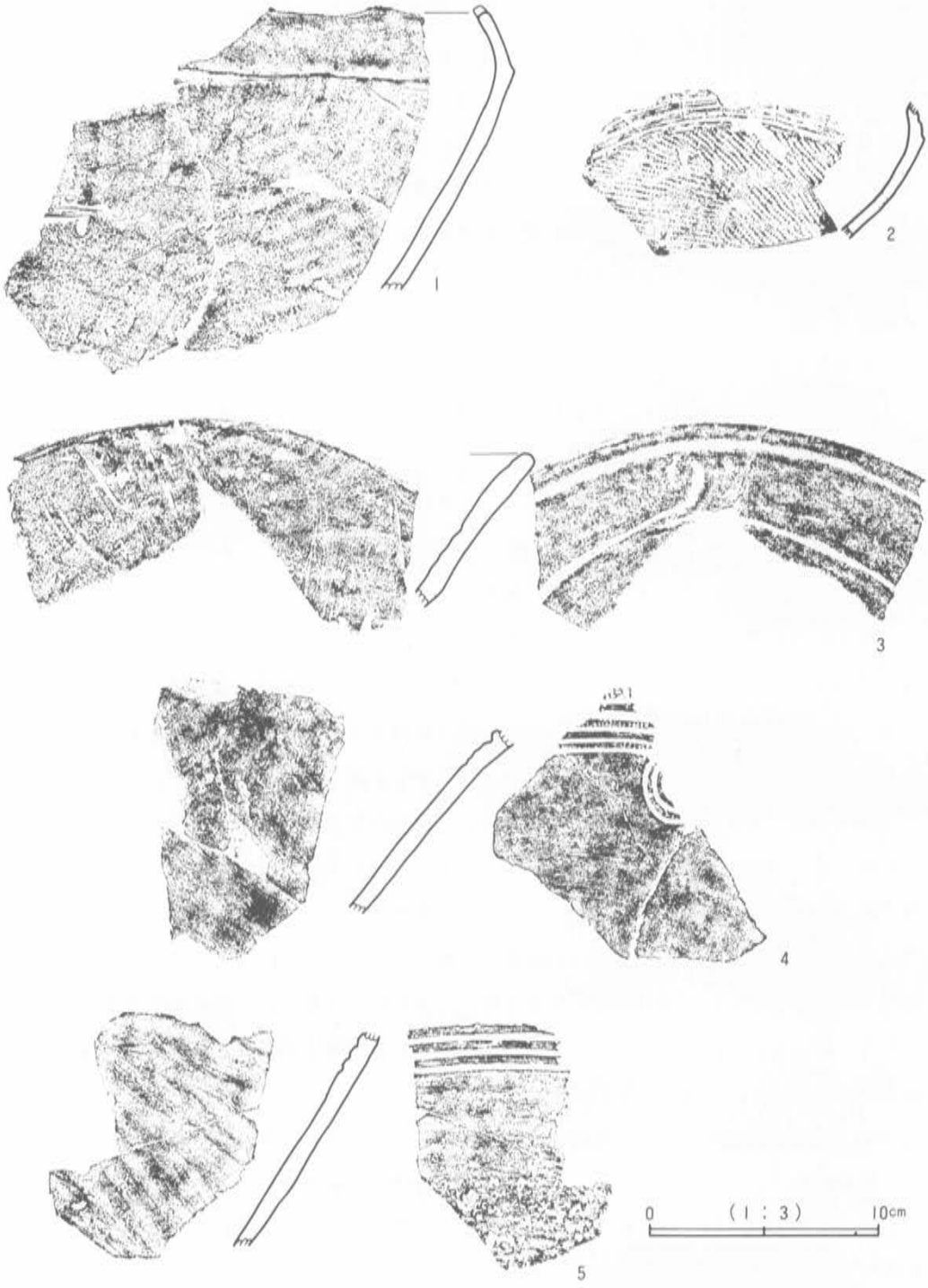
２は径38cm，現高15.4cmを測る。1/2の残存度である。双角状の小突起をもち，口唇には刻みを有する。口縁を浅い沈線で区切り，突起下にはＶ字状に沈線が入る。内面にも，突起下に縦に沈線文がみられる。

３は胴部にふくらみをもつもので，推定径33.0cm，である。口縁にＢ字状の突起があり，弧状の隆起線が施されている。内面には，胴上部に横走平行沈線，突起下に縦位の波状沈線が，浅く施文されている。胴部外面にはケズリ痕がみられる。

４は径44cm，現存高12.8cm，口縁部が1/2ほどの残存度である。緩い連続する波状の口縁となる。口縁の区切りには凹線を巡らせ段が形成されている。

５は径32cm，現存高7.8cm，やや小振りである。口縁の３分の１ほどが残存，文様，突起はみられない。

第69図１～５は破片のものである。１は口縁が連続する小波状口縁になるもので，第55図４と共通するもの。口縁はくの字状に内湾し，頸部に段を有する。胴部にはケズリ調整痕が残されている。



第69図　グリッド出土土器拓影図(14)

2は口縁を欠くもので，頸部に横位の沈線，胴部は斜縄文が施されている。

3～5は外面が無文で，内面に沈線文が施されるもの。3は直線的に外反する口縁部で，内面はよく磨かれており，間隔を開けて平行沈線を配し，下位の沈線では繰りからげた対弧文が構成されている。4は内面上部に横位の刻文帯があり，その下部に同心円文が施される。5は上部に横位の平行沈線が巡る。内外面とも器面が磨かれている。

1・3は加曽利B式，2は加曽利B式から曽谷式にかけてのもの。4・5は堀之内II式から加曽利BⅠ式にかけてのものである。

紐線文系土器（第70・71図，図版36・37）

いわゆる紐線文土器を主とする粗製深鉢形土器である。

1～15は粗い縄文を地文に，半截竹管の沈線，隆起線が施されるもの。内面は粗い研磨を有する例が多い。

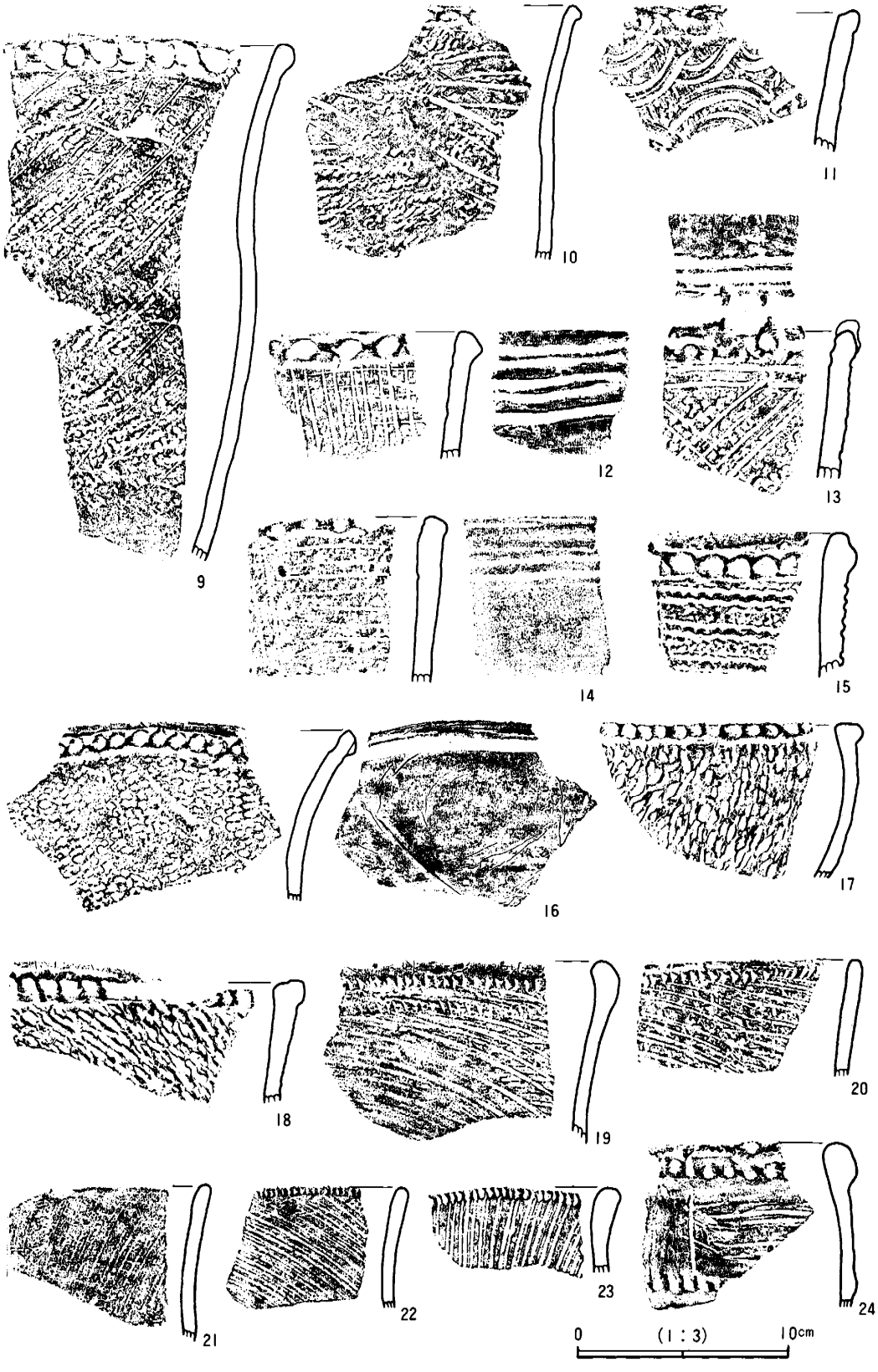
1～5は口縁上端と頸部に隆起線が巡る。1には口縁部に横走沈線，胴部に斜行の沈線がみられる。頸部はややくびれる。2は口縁部に連続短沈線が積層され，胴部は斜行沈線で綾杉状の構成をとるとみられる。3・4には口縁部に同様の短沈線がみられる。胴部は斜行の部分がみられる。3の磨きは丁寧である。5は直口する口縁で，対向する弧線文が施されている。地文の原体は1・2～5が単節LR，2は不明である。1・2・5には内面口縁上端に沈線が巡る。

6～15は紐線文が口縁上端だけにみられ，以下は縄文を地に沈線の施されるもの。7は連続弧状沈線が積層して施されている。器形はくびれをもち緩く外反するものである。紐線文の刻文は細かく密である。8は直口する口縁をなし，縦位の綾杉状構成をとる。内面は上端だけ磨かれる。9・10はくびれて緩く外反する器形をなし，斜行沈線の施されるもの。内面はよく研磨されている。11～15は小破片で，下位にもう一条紐線文を有する可能性もある。11では弧条，12は格子目の沈線がみられる。13は口縁直下に横位，以下にV字状に施しており，口唇には小貼付文が付されている。14は横位の条線に縦の沈線が付されるもの。15には小波状の沈線がみられる。地文となる縄文の原体は6・8～10・14がLR，他は不明。また8・12～14は内面に沈線がある。

16～18は地文の縄文のみで，沈線の施されないもの。16は外反する器形をなす。内面には上端に波線がめぐり，よく研磨されている。17は内湾する口縁形態をとる。黒色仕上げで口唇・内面とも研磨が著しい。18は直口する口縁になる。縄文の原体は17がLR，18はRLでともに単節で太くゆるい撚りのものである。

19～23は口縁上端部の紐線文がみられずに，斜行する条線文が施されるもの。内面はよく研磨を受けている。19は端部で肥厚し内湾する口縁部で，条線文（横走の後斜行施文）が施文され，上端には2条の刻文列が加えられている。20は上端に刻文列，地文に縄文のみられる薄手品である。21は薄手品で，刻文列は伴っていない。23は縦位に近い条線になる。下位の文様は

第70図　グリッド出土土器拓影図(15)



第71図　グリッド出土土器拓影図(16)

不明。

24は器形が胴部に向いタル状に若干外方へ張り出すもの。口端部に巾広の隆起帯（下端部に刻文列が施されている）が設けられ，横位の条線に縦位沈線を加えて施し，口縁下端を紐線文状の隆線で区切る。内面の調整はナデ程度である。隆起帯を多用する安行式に所属するものであろう。

特殊土器（第72図，図版38）

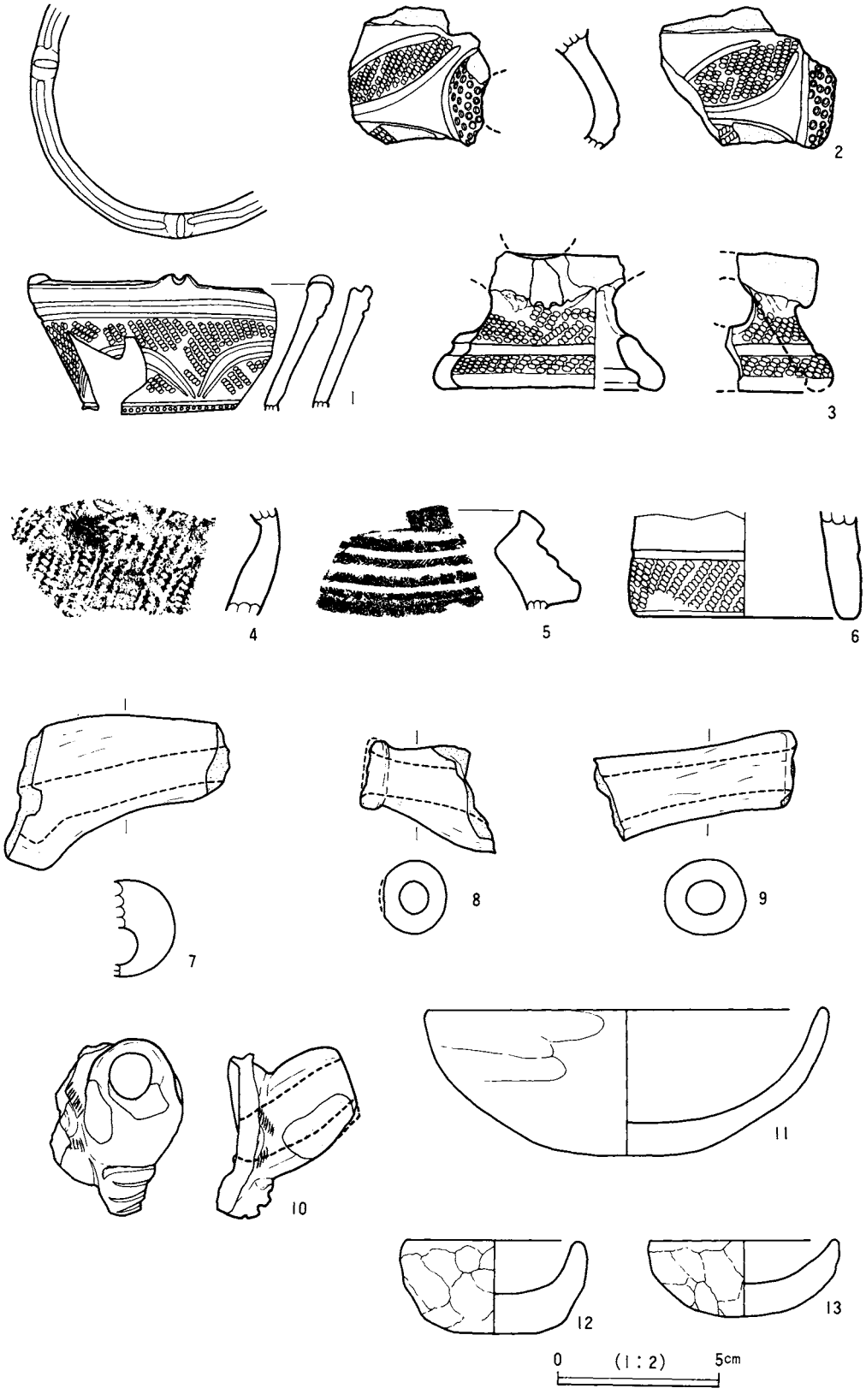
1は外反する口縁部で，口径9.4cm，現高4.2cmほどのもの。下端部が頸部のくびれで，胴部はそれより脹らみ，ちょうど土師器の小型壺のような器形になると思われる。文様は上端を沈線で，頸部を細かい円形刺突列を加えた刻文帯で区切る。横位の文様帯にＲＬの縄文を充塡し，連弧状平行沈線が配されている。また口唇には縦に刻みが入れられた小隆起文（４単位）があり，さらにその隆起文間には沈線が１条巡っている。内外面に赤色顔料の塗られた痕跡がみられる。内面の研磨は顕著。焼成は良好，胎土は一般的なものである。

２・３は異形台付土器になるもの。２は頸部から側口部にかけての破片で，胴部にはレンズ形をとる充塡縄文（ＬＲ）がＸ字状に配されるものとみられる。隆帯状の側口部には，表面に細かい円形刺突文が密接して施文されている。３は台部で，底部と側口の一部が残存している。底径は7.1cmになる。底面近くに沈線が一条，そして全体にＬＲの斜縄文が施されている。底部との接合部付近には，側口に直交する位置に径1.5cmほどの孔を有する。側口は径５cm程度の大き目のものになるとみられるもので，前面は平坦に整形されており，側縁部に太めの刻み目を有する。

４は胴部が膨らむ小型の土器で，ＬＲの斜縄文が施されている。５は口縁上部の破片で，肥厚して折り返し状になっており，口唇の先端は断面くの字状に外反し，内面には稜が形成されている。外面には条線が横位に巡らされ，細かい刻文が連続して施されている。６は台部分で，底径7.2cmを測る。下端を沈線で区切り，縄文帯（ＬＲ）が施される。大きさからみて，異形台付土器の高台部と思われる。

７～10は注口土器の注ぎ口の部分である。７は８cmほどの長さをもち，基部の下側に脹らみがある。外面はよく磨かれ，黒焼きされた上，丹が塗られている。８は長さ５cmほどの短く寸詰まりのもの。基部が脹らみ，先に向けて細くなり，先端部には環状の隆帯が廻る。外面調整は７と同様で，丹も塗られた痕跡がある。９は現存部の長さ６cm，径2.5cmのほぼ円筒形をなすもので，外面には擦痕が残されている。10は長さ５cmと短いもので，胴部には細かい刻文をもつ隆起線が施される。基部の下側には深い刻み目の入れられた隆起文がみられる。

11は埦形土器で，径13.6cm，高さ4.4cmの完形品である。内面はよく研磨されているが，外面は成形時のナデ程度の調整しかみられない。12・13は手づくねの，椀形をしたミニチュア土器である。12は径5.8cm，高さ2.8cm，13は径5.9cm，高さ2.3cmである。



第72図　グリッド出土土器実測図(4)

把手（第73図，図版39）

各時期の把手をまとめた。

1は鼓状を呈するもので，端部から外面へ過巻状太沈線が施される。沈線の縁は隆起線となる。外面では隆起線上にＬＲの縄文が施文され，体部の文様に連なる。

2はカップ状の突起をなす。外面には弧状微隆起線が配され，ＲＬの縄文が充塡されている。口唇には隆起線に沿って円形刺突列が付されている。

3は隆起帯を円弧状に連続させたもの。ＬＲの縄文が上面に施されている。

4は波状部を折返し筒状に成形するもの。両面，頂部から孔があけられている。縁部は外面で微隆起帯となり，体部へ連なる。隆起帯の両側には連続円形刺突文を伴っている。

5は巾広い環状部が付くもの。上方，内外面の3個所に径1cmほどの孔が穿たれており，さらに外面には孔に接して下方に耳が付されていたとみられる。文様は，波項部から微隆起線が弧状に配され，ＲＬ縄文の充塡されるもの。内面にも，低い隆帯がみられる。

6は折返して筒状とした把手で，内面に円錐状になる穴を有する。ＲＬの線文が外面から内面にまで施文されており，口縁上端には区画の微隆起線が一部残されている。内面はよく研磨されている。

7は，波項部に縦8の字状に隆起帯が付さるとみられる。隆起帯の中軸上に沈線が加えられ、内湾する断面形態をなす。口唇が平坦に作出され，さらに沈線がめぐらされている。隆起帯から口縁に沿っては微隆起線が細かい刺突列を伴って施されている。

1～7は加曽利ＥⅣ式になる。いづれも焼成は良好で胎土には細砂粒が含まれる通常のものである。

8はスプーン状に縁部が内湾して張り出す舌状の把手で，外面には左右に巾広い無文帯を配し，縦長の区画内にＲＬの縄文が地文に横位の沈線列が施される。内縁には円形刺突文と沈線がみられる。

9～11は称名寺式の把手部である。

9は波頂部に両面から円形の凹みが入れられ，その周囲には沈線が廻る。体部文は沈線で区画されるものとみられる。

10は波頂部に径1cmほどの孔が穿たれる。内外面には孔部の縁に円形刺突文に沈線を添えて配される。外面では区画の沈線がみられる。内面口縁上端部には隆起帯が形成される。

11は環状把手であり，口縁に対し，直角に径5cmほどの環がつく。側縁は，円形刺突文（小隆起上のもの），弧状沈線（円形刺突文を始点とする）が付されている。外面文様はこの破片ではうかがえない。

12は，山形の波状口縁の小突起に，指先状の隆起文を，先端及び表裏に施したもの。外部文様として下部に沈線，内面には上端に沈線が1条みられる。加曽利Ｂ式である。

第73図　グリッド出土土器実測図(5)

13・14は球状突起である。

13は頂部と側面に円形小隆起文，基部には玉抱き状沈線がめぐらされている。

14は内面には貼付文の落痕がみられ，刺突文が残されている。突起下に沈線が横位に配されている。両者とも焼成は良好で胎土には微細砂粒が含まれ精選されている。時期は堀之内II式から加曽利Ｂ１式に所属するものである。

15・16は土器の側面にＵ字状の環がつくいわゆる耳付土器の破片である。加曽利Ｅ式～称名寺式のものである。

15は耳の部分で，４cmと巾広である。側縁を縦位沈線で区切り，ＬＲの縄文を施している。表面の剝落激しい。下端は胴部との接合部である。

16は横位に配される環を有する胴部片，環の巾は２cm，厚み1.1cm，孔径1.4cm×0.7cmと偏平である。上部は磨かれて無文，下位には沈線文区画に縄文が施されている。

底部（第53図６・74・75図，図版21・39）

底部には特徴的な文様が少なく各群に比定が不可能なものが多いので，ここで一括して取扱うことにする。

原則として残存度が1/2以上で，器形が推定復原できるものを示した。

第53図６，第74図１～５は，底面から素直に外傾して立上り，胴部へ連なるもの。底板の径は８～９cmほどになる。

第53図６は上部にＬＲ縄文が縦位施文され下半部が磨かれて無文となるもの。橙褐色を呈する二次焼成を受け，外面の剝落が激しい。内面は上部が黒色になっている。

第74図１は内外明褐色を呈する。内外面は縦ミガキが顕著，底面もよく磨かれている。

２は内外面とも褐色を呈するもの，下端は筒状に立ち気味である。外面及び底面にはケズリ痕がみられる。上部にはＬＲの縄文が一部に残されている。

３は外面に軽いミガキを受けている。上端部に無節の縄文がみられる。色調は橙褐色を呈し，二次焼成を受け内面は剝落がみられる。

４は内外面，底面に研磨調整を受けている。内面は黒色を呈している。

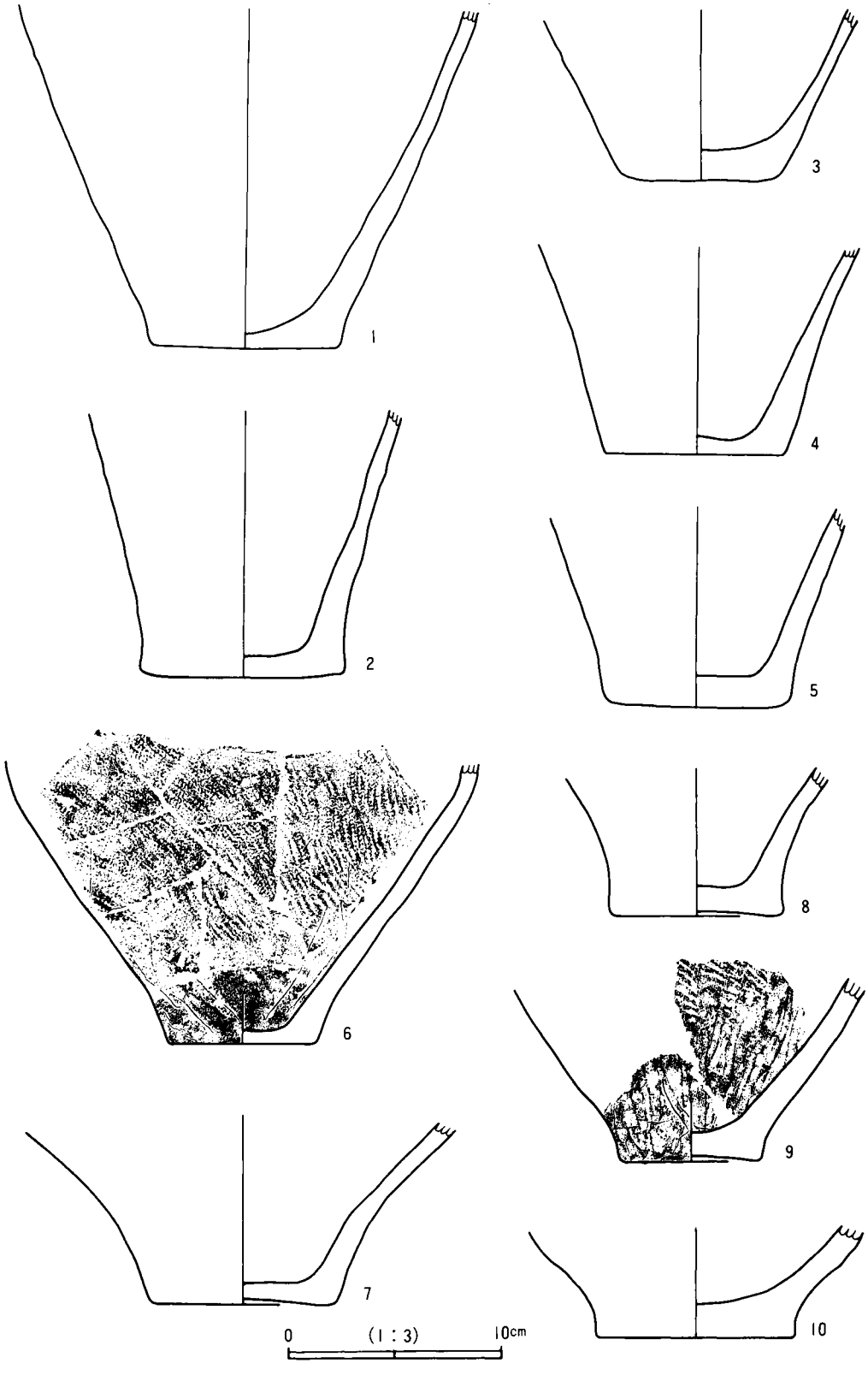
５は外面に磨き調整がみられる。内面は黒色である。

第74図６～10第75図11・12は底面が直角気味で，底板の直上から大きく外反する形態をとる。

６は底径７cmと小さ目で胴部で膨らむ器形を呈するものとみられ，黒ずんだ土器である。ＲＬの細かい縄文が横位に施され，底面近には縦位に磨消され無文となっている。ミガキ調整は底面，内面（横位）にも及んでいる。

７は底径8.5cmほどのものでかなり大型になると思われる。若干揚底を呈している。内外面，底面にミガキ調整されている。

８は底径８cm，内外明褐色を呈し，風化が激しい。調整は内面にミガキ痕がみられる。



第74図　グリッド出土土器実測図(6)

9は底径6.5cmと小さいもの，上部にＲＬの縄文が施文されている。内•外面，底面がよく磨かれている。縦方向のミガキである。内面下部には灰褐色付着物がみられる。

10は底径９cm，底板の厚さ1.5cmと厚い。底面から直に極端に外側へ開く。明褐色を呈している。

11は底面近のみのもの。底径８cm。黒色を呈し，外面にはミガキ調整がみられる。底面には網代痕がある。

12は底径5.5cmと小型のもの。外面にタテミガキ，底面にも磨かれている。

第75図13～15は底面の張り出し顕著なもの。13・14は底径10cm，15は8.5cm。

13は筒形の器形をなし，下半部の径が中位より太く，上部でまた径が増し始めている。内外面，底面ともよく磨かれている。

14は底面近辺の部分，外面にケズリ痕がみられる。

15は網代底になるもの。底径は９cmほど。底面近くで旦径が狭まり上部へ直線的に開く。

16～19は，底径が小さく，16・17は卵形の胴部に連なるもの。

16は底径３cm。内外とも明褐色を呈する。網代底になる。外面には弧条線が施文されている。

17は底径2.5cmほど。黒色を呈し内外面ともよく磨かれている。

18は底径3.5cm。外面にはタテミガキ，底面にはケズリ痕がみられる。

19は底径3.5cm，黒褐色を呈する。内外面にミガキ調整を有し，底面に網代痕が残されている。

第75図20～22は，底面から極端な角度で外反して開く器形になるもので，おそらく浅鉢形土器の底部であろう。

20は皿状をなすもの。底径6.5cm。内外面，底面ともよく磨き調整が行われており，内面は丹彩されている。

21は，底板が台状に突出しており，底径7.5cmを測る。底面は丸味を帯びよく磨かれている。内外面もミガキ調整され，内面は黒色を呈している。

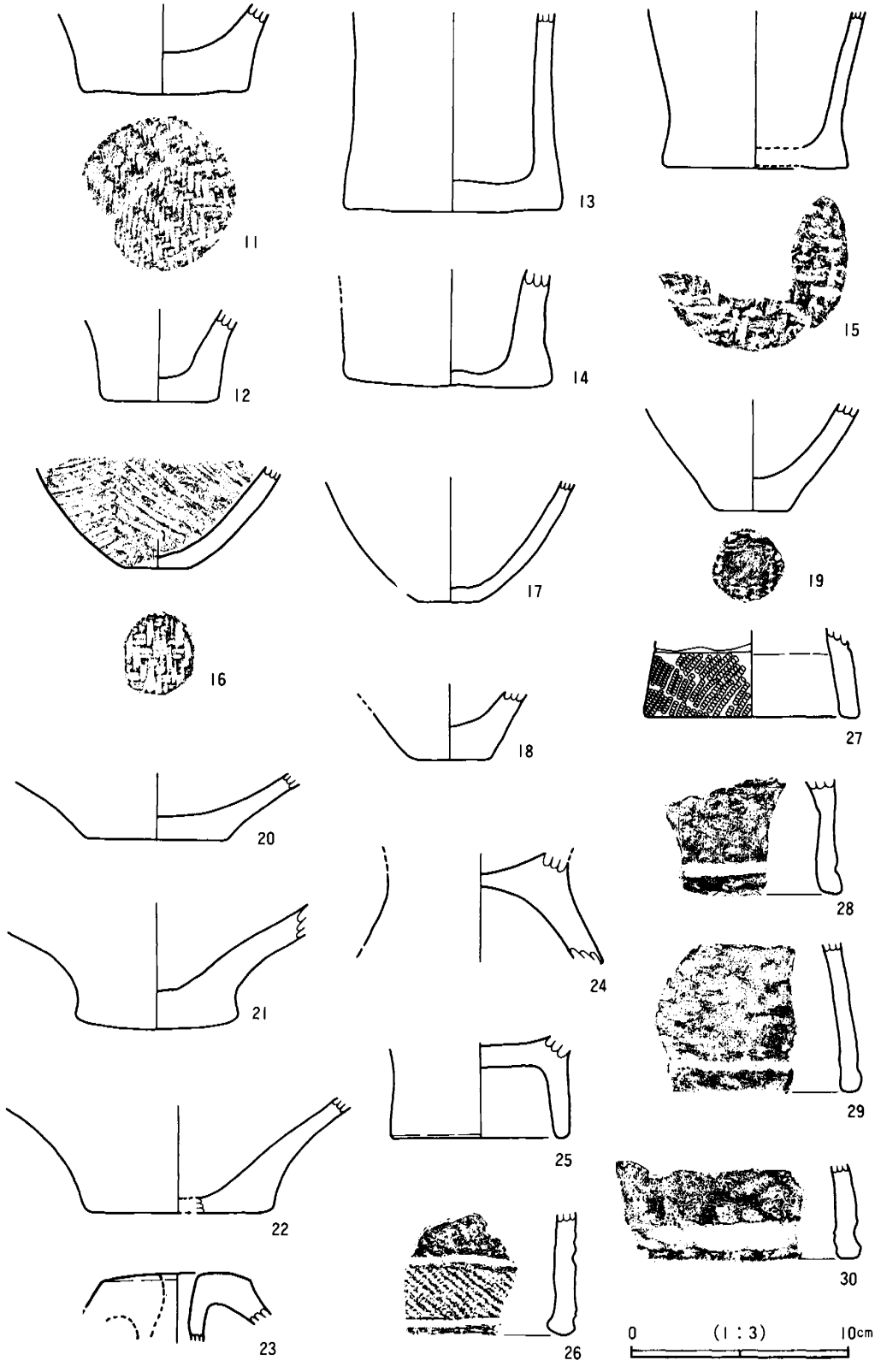
22は底径8.5cmほどのもの。内面は黒色研磨されており，外面には上部にケズリ痕がみられる。

第75図23は器台状を呈し，底面の中央から，内径１cmほどの管状に内側へ突出している。外面は磨かれ，ススが付着している。

第75図24～30は高台部である。

24は外側に開く台部になるもの。外面上部に条線文部が若干残されている。内面はよく研磨されている。

25は径９cmほどの円筒形の台部になるもので，黒色をしている。本体内面及び，台部内面が研磨されている。



第75図　グリッド出土土器実測図(7)

26は下部に上下を沈線で区画する。ＲＬの帯縄文のみられるもの。外面無文部及び端部は磨かれているが，内面は形成時のナデ調整のみである。

27は上端を沈線で区切りＬＲの帯縄文が施される。最大径10.0cmで，端部，内面にはケズリ痕がみられる。

28～30は底辺に一条の凹線を有するもの。

28は端部から外面が研磨を受けている。29は外面が軽く磨かれている。30は外面黒色を呈し，内外面にはケズリ痕がみられる。

小　結

今回の調査により出土した土器の総量は，遺構・グリッド出土分を含め，整理箱で約100箱，総点数で凡そ5,000点以上にのぼる。その内訳は中期末の第Ｉ群加曽利Ｅ・IV式土器から，後期末の第VI群安行II式土器までである。

第Ｉ群土器

加曽利ＥIII・IV式としたものである。

ＥIII式の出土は少ない。グリッド出土は38点で，いずれも断片であった。地点的にはＡ３区に多い。遺構では，２号土坑で1/3ほどの個体（実測－１）が出土しており，また20～26土坑出土の弧状区画の土器（45）もこの群に含められよう。破片ではＥIV式の沈線区画のものと区別が難しく，若干混同があるかも知れないが，いずれにしても沈線区画が崩れ加曽利ＥIV式との類縁性が強いものが多いとはいえよう。

加曽利ＥIV式はグリッド内はＡ２区からＡ４区にかけて広く計169点が出土しており，分布状況は加曽利ＥIV期の遺構の配置とほぼ重なっている。

文様区画にＥIV式では沈線及び微隆起線が使われるが，微隆起線区画のものが主体である。グリッド出土で示したもの、遺構出土では74号土坑例（実測７），84号土坑例（実測９），106号土坑例（実測16）が微隆起線区画の好例である。沈線区画のものも，遺構出土品を中心に少なからず認められている。103号土坑例(実測14)は沈線のみで区画されるもの，86号土坑例（実測１），３号埋甕炉例（実測３），109号土坑例（実測18）は口縁に微隆起線を伴う例である。

区画文の他，縄文のみの例も74号土坑例（実測７），86号土坑例（20），５号埋甕炉例（実測５）にみられる。

文様のパターンでは以下の４種が認められる。

○Ｖ字形と逆Ｕ字形を組み合わせ，一段構成をとるもの。

３号埋甕例（実測３），84号土坑例（実測９）

○一段構成で鋸歯状の区画をなすもの。

103号土坑例（実測14），109号土坑例（実測18）

○Ｖ字形あるいはＵ字形の区画を沈線で二段施す例

86号土坑（実測11），95号土坑（実測13）

○曲線隆起線を構成するもの

グリッド出土（11），95号土坑例（243・244・246・248）

二段構成の文様は加曽利ＥIII式での文様区画文のなごりが強く認められるもので，ＥIV式でも古い様相と思われる。

曲線の隆起線文を区画に用いるグリッド出土（11）には大木系土器の渦巻文を取入れた文様がみられる。胎土が通常のものとは異なっており，外来的な土器である。

また第Ｉ群土器中に第II群土器＝称名寺式土器との関連で注意すべきものがある。

グリッド出土（５）は称名寺的な釣鉤状の区画が微隆線でなされる例である。またグリッド出土（６）の連続円形刺突文を有する例は，同じ文様が埼玉県貝塚山遺跡，千葉市中野僧御堂遺跡出土の称名寺式土器にみられる。この２遺跡の土器は微隆起線が区画に採用され，称名寺式でも特異な例である。

これらについては類例の増加を待ち改めて検討したい。

第II群土器

称名寺式である。グリッド出土のものは破片を主に計163点の出土。Ａ１区南半からＡ４区西半にかけての区域に広く分布する。特に密な地点はＡ２区南半，Ａ３区中央部である。称名寺期の遺構とは分布が重なっている。

破片がほとんどで，文様構成が断片的にしか把握できず，明確に位置づけのできるものが少ないが，区画内に縄文の充塡されるものが主で，107号土坑例（実測17），グリッド出土例（23～26）のような列点文を充塡する，いわゆる称名寺II式は稀である。

文様パターン的には，グリッド出土土器の大半と47号土坑（実測５），107号土坑（実測17）にみられるような，縦長の区画がなされるものが多くみられ，横位に文様帯が区画される例は少ない。67号土坑（159），94号土坑（240･241），105号土坑（302）等はその横長区画文の例である。

また，縦方向の波状線で区画するグリッド出土（16），101号土坑（289）は特異なモチーフである。また，グリッド出土（18～22）の細礫を含む例は，胎土・調整・施文等が他例と異質で，外来的な様相が強いもので搬入品とみられる。

第III群土器

堀之内式でＩ式が主体を占める。グリッド出土は69点だが，条線文のものも堀之内式に含めると137点となる。

堀之内Ｉ式に比定されるものの文様をみると，蕨手状沈線を構成するものは少ない。７号埋

甕炉（実測６），76号土坑（実測８）がその例である。Ｉ式の文様で多くみられるものは，三角形の区画のものである。グリッド出土（１・12・21）93号土坑（236）が代表例である。

堀之内II式は比定されるものは稀かで，典型的なものはグリッド出土（13・14），把手（13）のみである。

第IV群土器

本遺跡での主体となるもので加曽利Ｂ式である。グリッド出土は整理箱約80箱分にのぼる。Ａ１～Ａ４，Ｂ１区のほぼ全面から出土しているが，加曽利Ｂ期に属する遺構の多いＡ１・Ａ２区に特に集中がみられる。

加曽利Ｂ式は，Ｂ１からＢ３式の３段階に細分が行われているが，本遺跡ではＣ類とした条線文を有する例が圧倒する点からみて，加曽利Ｂ２式が主体を占めると思われる。またかなりの量の紐線文土器を伴っている。

確実にＢ１式に含められるものは，１号住居跡例（実測－１），59号土坑例（139），グリッド出土例（Ａ類１・２）である。Ｂ３式はグリッド出土例（Ｂ・Ｃ類10～17，Ｄ類13・14・21・22）の他，浅鉢形土器（２），特殊土器（１）もこの類に含まれよう。他の土器の大半はＢ２式である。

第Ｖ群土器中で特異なものは，グリッド出土（Ｃ類26・27）の球状に膨らむ器形をなし，連続して大きな菱形区画が施される例である。他の類例は現時点では知らない。どの辺りの系統によるものか，検討を要する個体である。

第Ｖ群土器

曽谷式である。小破片のため，第IV群の加曽利Ｂ３式との分離が難しいが，典型的なもののみをこの群に含めた。

量的にはわずかで，図示したものが全てである。グリッドではＡ１区中央部に集中している。またこの時期の遺構は明確なものはない。

第VI群土器

後期安行式である。総数では63点が出土した。安行Ｉ式が主体で，II式はグリッド出土(22)と紐線文系粗製土器中に若干みられる。分布域はＡ１・Ｂ１区である。遺構では29号土坑がこの時期に属する。

参考文献

富士見市史編さん室　「貝塚山遺跡」『富士見市史　資料編２　考古』　富士見市教育委員会　1986年
折原　繁他　『千葉市中野僧御堂遺跡』　千葉県文化財センター　1976年

3．出土石器・石製品

旧石器時代出土石器（第76図，図版40）

ほとんどがグリッド単独出土，土坑等の覆土中の出土，表採資料であることから個々の石器の帰属時期については明確にすることができない。

1は正面左側縁及び裏面左側縁，裏面基部に調整加工の施されたナイフ形石器で，表面左側縁には一部稜上調整もみられる。使用石材が良質の頁岩であることとその形態から第II黒色帯上部の遺物と思われる。

2は3号埋甕炉内出土の角錐状石器で，打面は残置する。縦長剥片を素材とし，正面左側は裏→表，正面右側は左→右への稜上調整が施されている。

3は縦長剥片の左側縁及び上下両端部に調整加工が施されたナイフ形石器で右側縁裏面側に使用によると思われる微細な剥離痕が連続して観察される。

4は縦長剥片の正面左側縁に調整加工が施されたナイフ形石器である。右側縁については，発掘時の破損により観察不可能。

3・4ともに終末期のナイフ形石器であろうか。

5は，正面は全面加工，裏面は周辺に調整加工が施された尖頭器である。上半部を欠損する。

6は縦長剥片を素材とし，正面は全面に調整加工を施した片面加工の尖頭器である。上半部及び基部を欠損しており，裏面基部側の剥離痕は欠損時に生じたものと思われる。

7は縦長剥片を素材とした片面加工の尖頭器である。先端部がファシット状に欠損する。

8は縦長剥片を素材とし，正面は全面に，裏面は右側縁及び基部周辺に規則的な調整加工を施した尖頭器である。先端部を欠損する。

9は正面に自然面を一部残し，平坦な調整加工を施し，裏面では周辺に調整加工を施した尖頭器である。上半部を欠損する。

10は正面に一部自然面を残す以外，全面に調整加工を施した尖頭器である。上半部及び基部を欠損する。

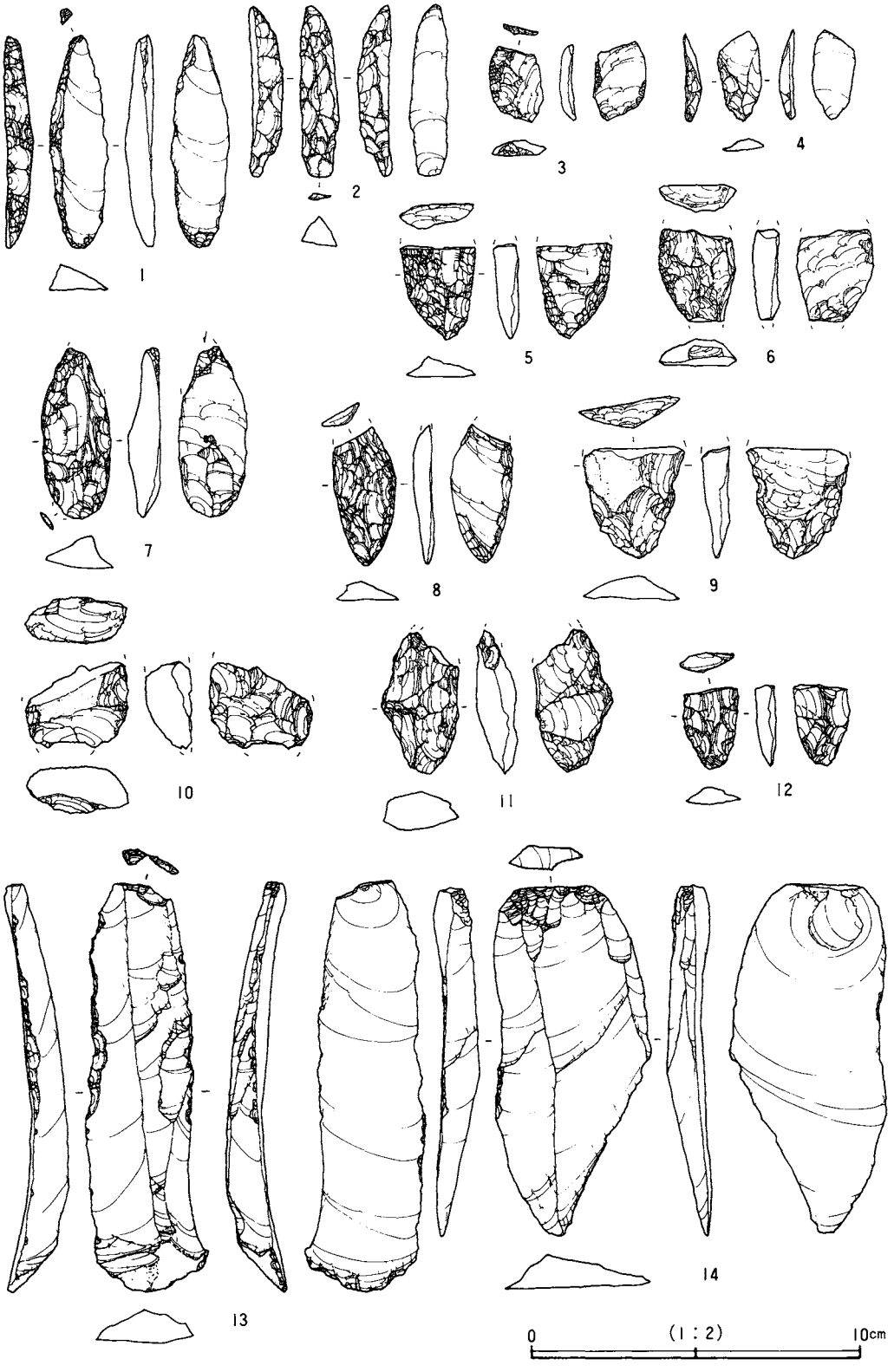
11は全面に比較的粗い調整加工を施した尖頭器である。先端部を欠損する。

12は表裏両面に丁寧な調整加工の施された尖頭器で上半部を欠損する。

5～11はほぼ同時期のものと思われ，旧石器時代末の尖頭器を主体とする時期に帰属しよう。12は他の一群の尖頭器とは形態的にも，調整加工のあり方においても異なることから，後者よりもさらに新しく旧石器時代終末期～縄文時代草創期に位置づけられよう。

13は大形の石刃の正面左側縁に連続的に調整加工の施された削器である。打面調整及び頭部調整がみられる。正面右側縁の剥離痕は使用による刃こぼれか。

14は大形の縦長剥片の左側縁に微細な剥離痕のみられる石器である。打面は平坦な剥離面打



第76図　旧石器時代石器実測図(ナイフ形石器1・3・4、角錐状石器2、尖頭器5～12、削器13、U-*fl*14)

面で入念な頭部調整もみられる。

13・14は打面の形状に差がみられるものの大形の石刃ないしはそれに近い縦長剝片を作出する技法の存在，頭部調整の存在，石材の同質性等からほぼ同時期と考えられよう。さらにその帰属時期は1のナイフ形石器同様，第II黒色帯上部辺りに位置づけられよう。

縄文時代出土石器（第77図～第89図，図版41～図版49）

中台貝塚出土の縄文時代石器の説明にあたり本稿では遺構（住居跡・炉跡・埋甕炉跡を除く土坑）出土の遺物もグリッド出土の遺物についても同様に一括して説明を加えてゆくことになり，掲載上の不統一性をお許しいただきたい。なお，遺物の出土遺構については第　表　縄文時代石器計測表を参照のこと。また，遺構出土の遺物はすべて覆土中であり，各土坑に伴うかどうかの断定は不可能である。

石鏃（第77図1～23，図版41）

1は，抉りが小さく，二等辺三角形を呈す。最終的な調整は，ＡＢ両面（以下，図上左側いわゆる正面側をＡ面，右側いわゆる裏面側をＢ面とする）の両側縁に集中する。主要剝離面を残す。基部・先端部を欠損する。

2は，抉りが小さく，二等辺三角形を呈す。最終的な調整は，Ａ面の両側縁に集中する。

3は，抉りが小さく，二等辺三角形を呈す。最終的な調整は，Ｂ面の両側縁に集中する。主要剝離面を大きく残す。

4は，抉りが小さく二等辺三角形を呈す。最終的な調整は，Ａ面の両側縁に集中する。基部を欠損する。

5は，抉りが大きく，基部のみの遺存の為，全体形状・最終的な調整は不明である。

6は，抉りが大きく二等辺三角形を呈す。最終的な調整は右側縁に集中する。上半部を欠損する。

7は，抉りが大きく二等辺三角形を呈す。最終的な調整は右側縁に集中する。基部を欠損する。

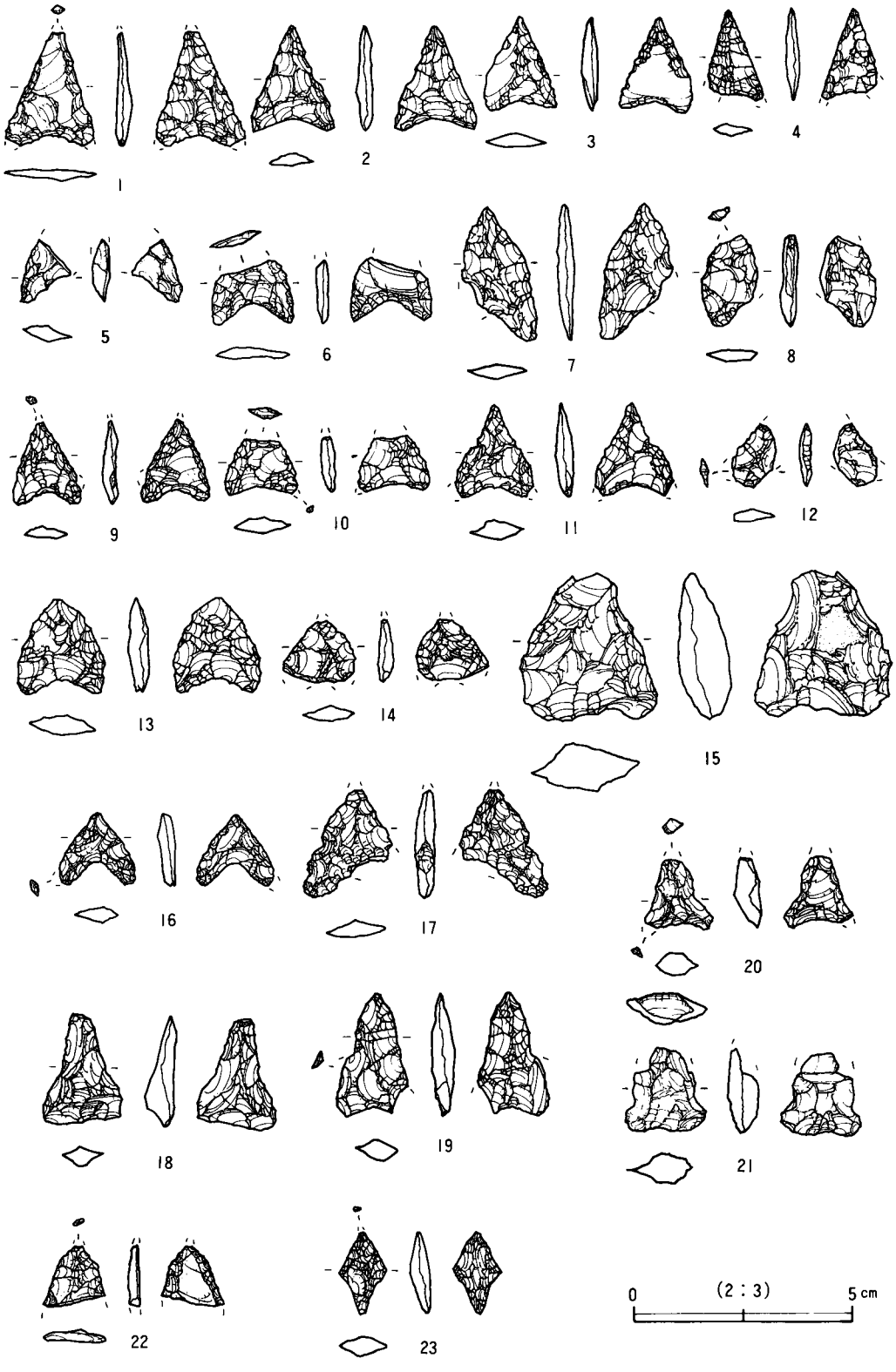
8は，抉りが大きく二等辺三角形を呈す。最終的な調整は不明である。基部のみ遺存する。

9は，抉りが小さく正三角形を呈す。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。主要剝離面を残す。先端部を欠損する。

10は，抉りが小さく正三角形を呈す。最終的な調整は右側縁に集中する。基部・先端部を欠損する。

11は，抉りが小さく正三角形を呈し，両側縁の中間部において若干段をもつ。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。基部を欠損する。

12は，抉りが小さく正三角形を呈し，11と同様，側縁の中間部において段をもつ。最終的な



第77図　縄文時代石器実測図(1)（石鏃）

調整は不明である。基部のみ遺存する。

13は，抉りが小さく正三角形を呈すが，側縁は緩やかな弧状を呈す。最終的な調整はA面の両側縁に集中する。

14は，抉りが小さく正三角形を呈すが，側縁は緩やかな弧状を呈す。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。基部・先端部を欠損する。

15は，抉りがほとんどなく正三角形を呈すが，側縁は緩やかな弧状を呈す。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。Ｂ面に自然面を残す。他の石鏃に比べ最も大形のものである。

16は，抉りが大きく正三角形を呈す。最終的な調整はＢ面の両側縁に集中する。基部を欠損する。

17は，抉りが大きく正三角形を呈す。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。基部・先端部を欠損する。

18は，抉りがほとんどなく二等辺三角形を呈す。両側縁の中間部に若干の段を有する。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。

19は，抉りがほとんどなく二等辺三角形を呈す。両側縁の中間部に段を有する。最終的な調整はＡ面の両側縁に集中する。基部を欠損する。

20は，抉りがほとんどなく二等辺三角形を呈す。両側縁の中間部に若干の段を有する。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。主要剝離面を残す。基部・先端部を欠損する。

21は，抉りがほとんどなく，二等辺三角形を呈す。両側縁の基部よりに段を有する。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中する。上半部を欠損する。本資料は筆者が整理担当時に遺跡を訪れた際に採集したものである。

22は，形態不明である。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中すると思われる。主要剝離面を残す。先端部・下半部を欠損する。

23は，凸基有茎石鏃で本遺跡では唯一のものである。最終的な調整はＡＢ両面の両側縁に集中すると思われる。

削器（第78図24～33，図版42）

24は，左側縁に調整加工を施し刃部を作出している。上半部を欠損する。

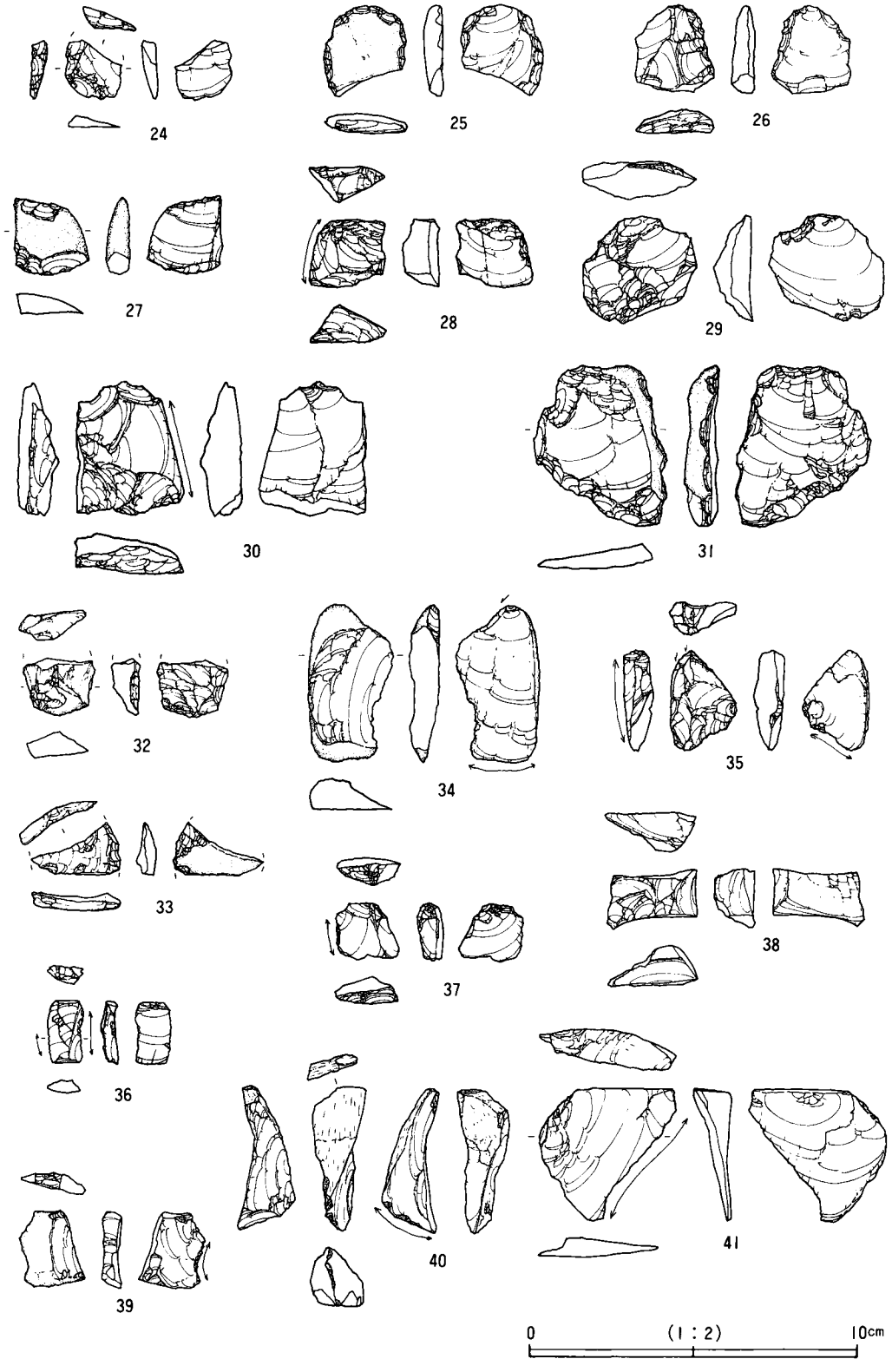
25は，両側縁及び上端部を調整加工を施したものでＡ面に自然面を大きく残す。両側縁の調整はＡＢ両面にみられる。下半部を欠損する。

26は，右側縁及び下端部に調整加工を施したもので右側縁の調整はＡＢ両面にみられる。

27は，上下両端に調整が施され，Ａ面に自然面を大きく残す。あるいは楔形石器の可能性もある。

28は，Ｂ面の右側縁に調整が施されＡ面の左側縁に微細な剝離痕がみられる。

29は，左側縁上部に inverse retouch が施される。



第78図　縄文時代石器実測図(2)(掻器24、削器25～33、彫器34・35，U-*fl*36～41)

30は，剝片の上端部に粗い鋸歯状の調整加工が施され，右側縁には微細な剝離痕がみられる。

31は，右側縁のＡＢ両面に調整加工が施される。

32は，左側縁のＡＢ両面に細かい調整加工が施される。右側縁は節理に沿って剝落しており，あるいは楔形石器の破損品とした方が妥当かもしれない。

33は，右側縁に調整加工が施される。Ｂ面に自然面を大きく残す。上半部を欠損する。

彫器（第78図34・35，図版42）

34は，縦長剝片の上端部Ｂ面側に左→右の加撃により刃部を作出したものである。

35は，横長剝片の末端部（図上Ａ面左側縁）に右→左の加撃により刃部を作出したもので，刃部には微細な剝離痕がみられる。さらに下端部にも微細な剝離痕がみられる。

Ｕ－ｆ Ｉ（第78図36～41，図版42）

36は，縦長剝片の両側縁に微細な剝離痕がみられる。

37は，不定形な剝片の左側縁に微細な剝離痕がみられる。

38は，上下両端及び右側縁の折断された剝片の左側縁に微細な剝離痕がみられる。

39は，Ａ面に自然面を残す剝片のＢ面右側縁に微細な剝離痕がみられる。

40は，Ａ面及びＢ面に節理面を残す不定形な剝片の下端部に微細な剝離痕がみられる。

41は，不定形な剝片の左側縁に微細な剝離痕がみられる。

石錐（第79図42～48，図版43）

42は，両側縁を折断した逆三角形状の剝片のＡ面下端部左側縁に調整を施し尖らせたものである。

43は，Ａ面下端部左側縁に調整を施したものである。

44は，Ａ面の両側縁に微細な調整を施したものである。刃部を一部欠損する。

45は，両面両側縁に調整を施したものである。

46は，両面両側縁に調整を施したものである。

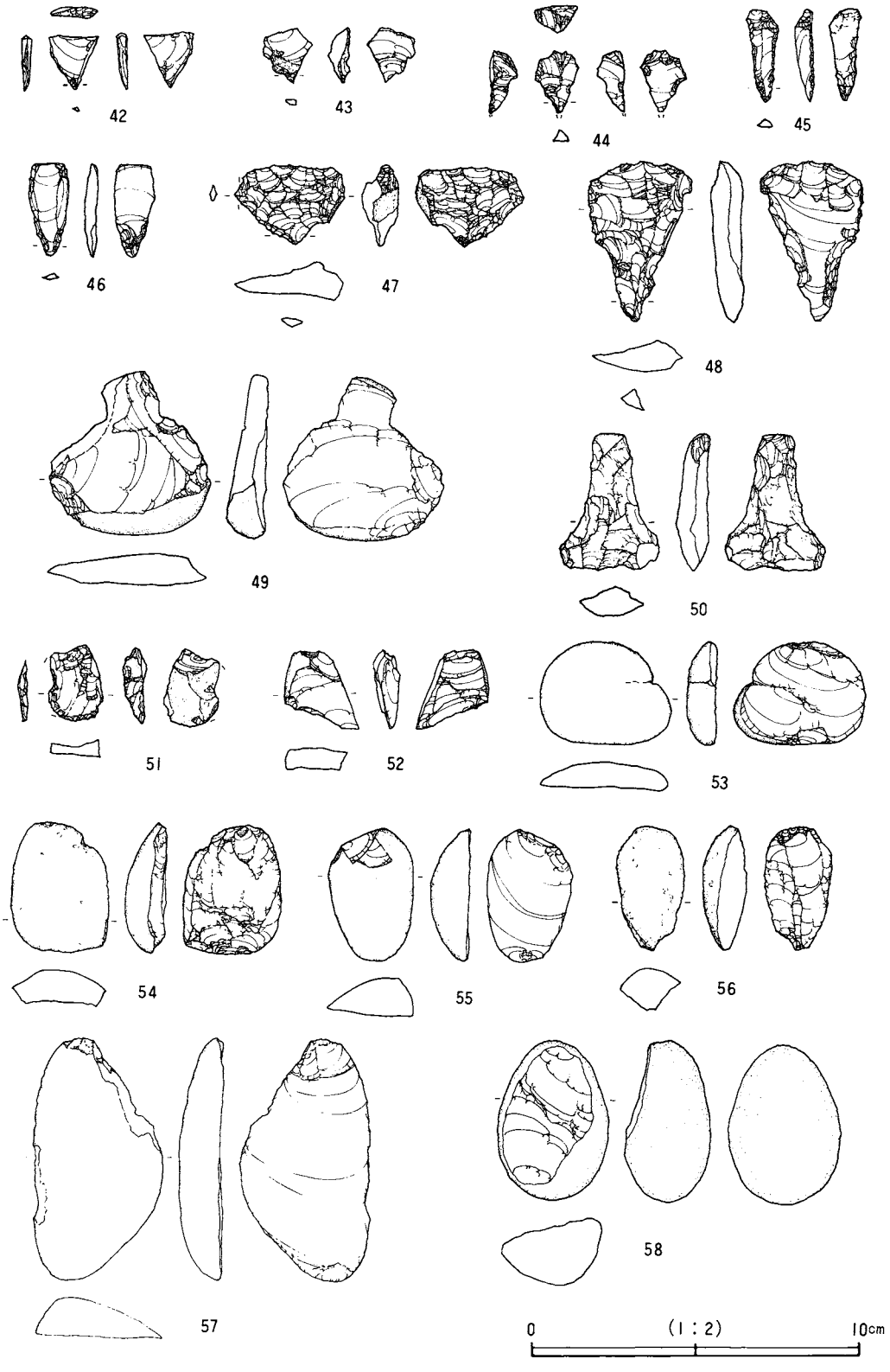
47は，両面に丁寧な調整が施され，その後，下端部及び右側縁の一部に微細な調整を施して尖らせている。

48は，Ａ面の全面及びＢ面の周縁に調整の施されたもので，Ａ面の左側縁下部に一部微細な調整がみられる。

石匙（第79図49・50，図版43）

49は，左側縁下部及び右側縁上部に調整がみられ，一見つまみの部分をもつ石匙に似るが，発掘時に左側縁上部の大半・右側縁上部の一部を欠損した為，断定はできない。

50は，全面に調整が施され，つまみの部分を作出した石匙である。本資料は整理時に筆者が遺跡を訪ねた際に表採したもので発掘時には本例に類似したものは採集されていない。



第79図　縄文時代石器実測図(3)(石錐42～48、石匙49・50、楔形石器51～58)

楔形石器（第79図51～58，図版43）

51は，上下両端に剝離痕がみられる。

52は，B面側の上下両端に剝離痕がみられる。

53・54・56は，A面に自然面を残し，B面の上下両端に剝離痕がみられる。

55・57は，A面に自然面を残し，A面の上部及びB面の上下両端に剝離痕がみられる。

58は，礫の表面に大きな上下二面の剝離痕がみられる。

53～55は同一グリッドの出土であるが，接合関係は認められない。53～58の楔形石器は，比較的小形で偏平な礫を素材とし，1回の加撃により作出されたものである。あるいはこれらの一群は楔形石器のブランクとして認識されるものかもしれない。

打製石斧（第80・82図69・70，図版44）

59は，両面に自然面を残し，周縁に比較的粗い調整を施した分銅形の打製石斧である。両面・両側縁に磨耗痕がみられる。なお，図上，縦のスクリーン・トーンで示した箇所が磨耗痕であり，磨耗の方向は意味していない。

60は，B面に大きく主要剝離面と思われる平坦な面を残し，周縁に調整が施された分銅形の打製石斧である。また，両側縁に一部自然面がみられる。下端部を欠損する。

61は，B面に主要剝離面を残し，先端部の調整が顕著である。A面は平坦で大きな調整が施され，側縁部（特に抉りの部分）の調整は丁寧に施されている。下半部を欠損する。

62は，両面に自然面を残し，周縁に平坦な調整を施した分銅形の打製石斧である。両面に磨耗痕がみられる。上半部を欠損する。

63は，両面に自然面を残し，A面の右側縁以外の周縁部に調整が施された分銅形の打製石斧である。B面に比べ，A面の加工の方が顕著である。

64は，B面に自然面を残し，A面は全面に調整の施された分銅形の打製石斧である。A面左側縁・B面右側縁に磨耗痕がみられる。中間部のみ遺存する。

65は，両面に自然面を残すが，B面の調整はより面的なものとなっている。打製石斧の一種であろう。本資料も筆者が整理担当時に遺跡を訪れた際に採集したものである。

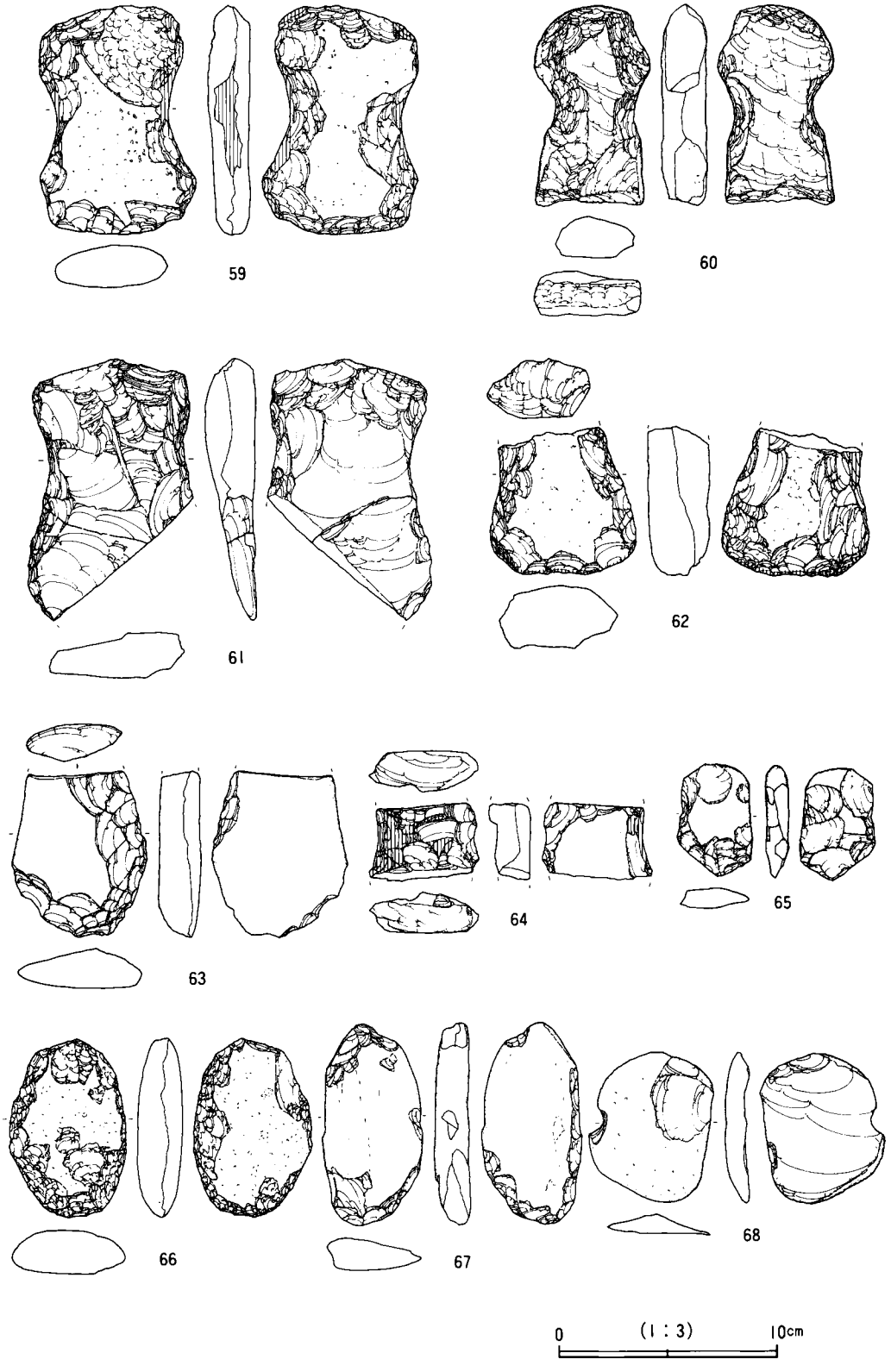
66は，両面に自然面を残し，周縁に比較的細かい調整を施した打製石斧である。

67は，両面に自然面を残し，刃部及びB面右側縁に調整を施した打製石斧である。

68は，A面に自然面，B面に主要別離面を残し，上端部及び両側縁中央部に調整を施したもので，打製石斧の一種であろう。

69は，A面に主要剝離面と思われる平坦な面を大きく残し，刃部及び右側縁に調整が施される。B面も中央に大きな別離面を残し，全周に調整が施される。非常にもろい石材で，板状に剝落する。

70は，A面に自然面を残し，上部に調整が施される。B面は全体に平坦な調整が施される。



第80図　縄文時代石器実測図(4)(打製石斧)

下半部を欠損する。

礫器（第81図72，図版44）

72は，偏平な礫の両面の下端部に平坦な調整を施した礫器である。B面に比べA面の調整が卓越し，剝離の順番もB面→A面となっている。

磨製石斧（第81図71・73～84，図版44）

71は，刃部と片面の一部を残して剝落した磨製石斧の欠損品である。おそらく定角式であろう。なお，図上，白ヌキの部分は研磨した箇所を表す。

73は，定角式の磨製石斧の胴部片である。

74は，定角式の磨製石斧の頭部である。B面の右側縁に大きな研磨ずれがみられる。

75は，上半部を欠損した定角式の磨製石斧で，刃部の両面に使用によると思われる剝離痕を残す。また，両面の刃部の先端部に磨耗痕がみられ，刃部欠損後も刃部の研磨を行うこともなく，ある程度使用していた可能性が示唆される。

76は，A面右側縁に稜をもつことから，おそらく上半部及び左側縁の一部を欠損した定角式の磨製石斧と思われる。本例は，同一地点（グリッド）において3点接合していることから，破損後この3点のみ一括して廃棄されたのであろう。

77は，一部に研磨された部分を残して欠損した磨製石斧で，A面の左側縁に稜を残すことからおそらく定角式であろう。

78は，刃部を遺存した定角式の磨製石斧である。

79は，比較的小形の偏平な礫のB面の刃部に研磨痕を残す不定形な局部磨製石斧である。A面の刃部，B面の両側縁に使用によると思われる剝離痕を残す。上半部を欠損する。

80は，上半部を欠損した小形の定角式の磨製石斧である。A面の左側縁に3段の研磨ずれがみられる。

81は，B面の頭部の一部に細かい剝離痕のみられる他は，ほぼ完形に近い定角式の磨製石斧である。A面右側縁に2段の研磨ずれがみられる。また，刃部に微細な剝離痕がみられる。

82は，A面の右側半分，B面の左側半分を研磨したもので，C面における側縁の形状はほぼ直線をなし，あたかも側縁に刃部を作出する為に研磨したかのようである。さらに，B面の左側縁には剝離痕もみられることから，別な器種として認識されるものかもしれない。

83は，両面に浅い溝を有する定角式の磨製石斧である。刃部における切合い関係の観察からは，A面の溝を作出後，B面の溝を作出している。さらに本例の場合，溝の作出後，さらに両面研磨しており，溝の断面形はC面にみられるように浅いU字状を呈す。

84は，上半部を欠損した定角式の磨製石斧であるが，A面の中央部の上下及びB面の中央部の上部に断面V字状の溝がみられる。この溝は本石斧の破損後，破損面の縁辺部を若干研磨し，その後に作出されている。

第81図　縄文時代石器実測図(5)（打製石斧69・70，礫器72，磨製石斧71・73～84）

83及び84は両者とも器体の中央部の上部から下部にかけて溝を有する点で共通性があるが，大きな相違点もある。１つは83が完形品であるのに対し84が破損品であること。２つは83が溝の作出後も研磨している点である。このことは，84における溝が破損品の再生の為，つまり破損品の中央部に（擦り切り）溝を作出し，２つに分割して小形の定角式の磨製石斧を製作する為のものと思われる（もっとも本遺跡内には破損品と同一個体と思われるものは存在していない)。このような破損品に擦り切り溝を有する例は，千葉県酒々井町伊篠白幡遺跡[1]，千葉県市原市草刈遺跡（B区[2]）等にみられ，伊篠白幡遺跡の場合，比較的近接した地域に同様の製品が存在することは非常に興味深い。しかも中台貝塚においては縄文時代中期末～後期（加曽利EⅣ式～加曽利B式)，伊篠白幡遺跡においては縄文時代後期（堀之内Ⅰ式）を主体としており，時期的にも非常に近い点は今後遺跡間比較を行う際，重要な指針の１つになると思われる。

石皿（第82図95，図版45）

85は，欠損品である為，全体形状は不明であるが，おそらく不整円形を呈すと思われる。使用面は１面のみで，中央部から約1/3の辺りから縁辺部にかけて傾斜がきつくなる。底面は中央部で凹状をなす。

86は，欠損品である為，全体形状は不明であるが，おそらく楕円形を呈すと思われる。使用面は１面で比較的平坦である。底面は中央部で凹状をなす。

87は，石皿の中央部の破片と思われる。現存する箇所における使用面・底面ともにほぼ平坦である。

88は，石皿の中央部の破片と思われる。現存する箇所における使用面はゆるく傾斜するのに対し，底面はほぼ平坦である。

89は，欠損品である為，全体形状は不明である。使用面は１面のみで，若干凸凹状を呈すが，傾斜はゆるやかである。底面はほぼ平坦である。

90は，欠損品である為，全体形状は不明である。使用面は１面のみで，ほぼ平坦である。底面は縁辺部及び中央部で凹状を呈すが，ほぼ平坦と考えてよい程度のものである。

91・93は，石皿の縁辺部の破片と思われるが，表裏両面とも欠損している。磨石等への再利用の痕跡はない。

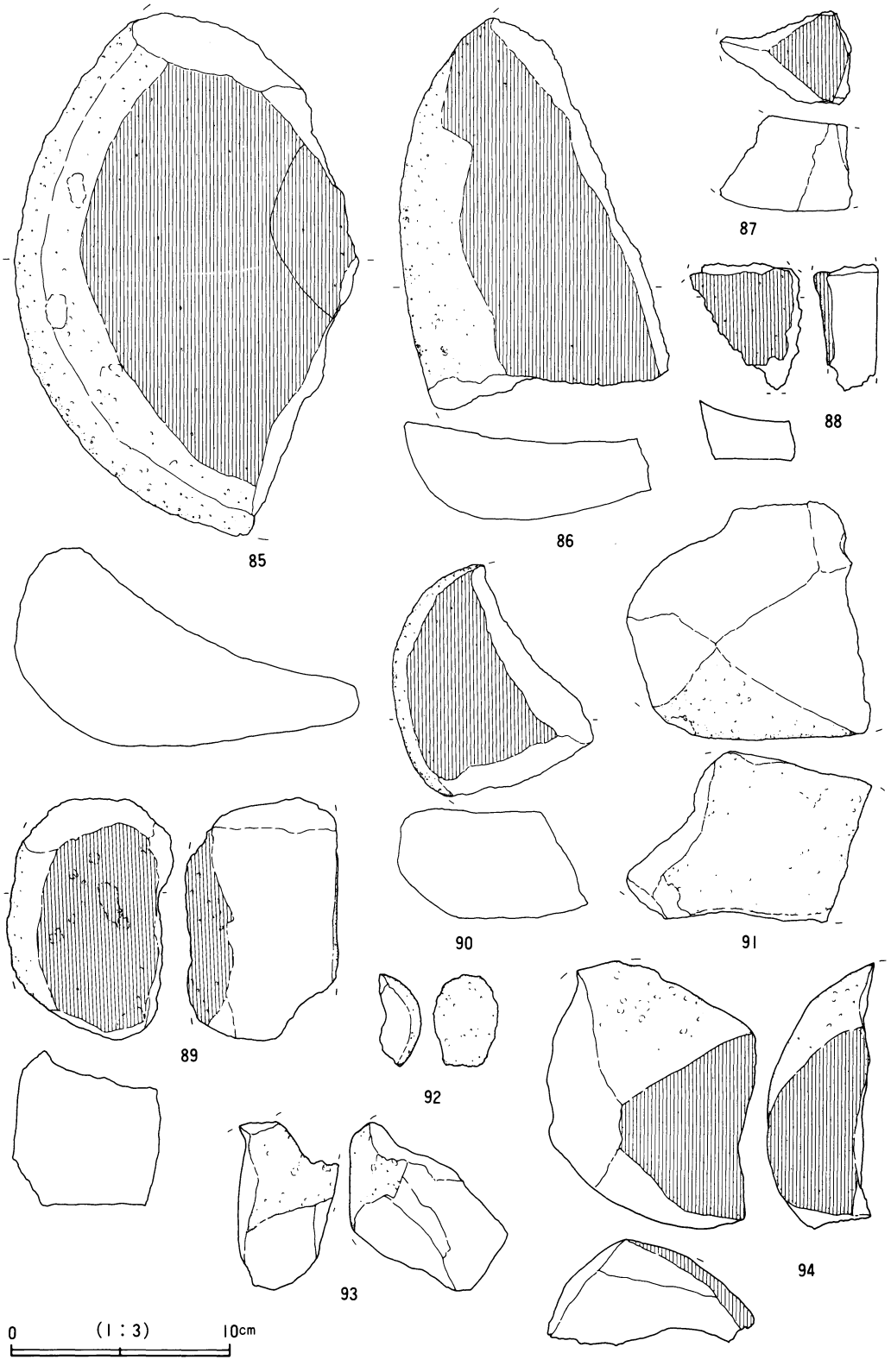
92は，石皿の縁辺部の破片と思われるが，磨石の破片の可能性もあろう。

94は，縁辺の１部と使用面を１部残した石皿の破片である。

95は，石皿の縁辺部の破片と思われる。磨石等への再利用の痕跡はない。

磨痕・敲打痕を有する石器（第83図96～第86図143，図版46・47）

本稿では，従来磨石・凹石・敲石と呼ばれていた石器に対し，一括して磨痕・敲打痕を有する石器として扱うことにする。なお，図上，縦線のスクリーン・トーンは磨痕，網が弱い敲打痕，霞状のスクリーン・トーンは強い敲打痕を意味している。そして，本稿での磨痕をもつ面



第82図　縄文時代石器実測図(6)(石皿)

とは，おそらく使用によることで他の面に比べて光沢があり，平滑な状態を呈すようになったであろうということであって，必ずしも他の面において磨るという行為がなされていないということではない。少くとも我々がこれらの石器類の観察から得られるのは，磨るという行為によっておそらく平滑な状態を呈したり，凹んだり，あるいは自然石利用の磨石の場合，明らかに他の自然面とは異なる状態を示したのであろうということであり[(3)]，敲くという行為によって他の面に比べて凹部を呈したであろうということでしかない。それ以上の問題は体系的な実験に基づいた使用痕の研究によらねばならないのであり，線状痕ポリッシュ等に比べ磨耗痕の使用痕研究が非常に困難なものであることは充分予測される。従って今回はあえて上記のような分析基準をもうけることで磨痕・敲打痕というものを理解することにした。

次に，これらの石器群（ただし，類型化は完形品のみで行う）に対し，形態・磨面・敲打の位置・敲打の数の4つの属性の組み合わせによっていくつかの類型に分類しておく（第5表）。以上の組み合わせから大きく次のように分類される。

Ⅰ－B類　円形を呈し，両面に磨痕をもつもの（第83図96～98）。

Ⅰ－B－2－○類　円形を呈し，両面に磨痕と両面に敲打痕をもつもの（第83図99）。

Ⅰ－B－5－○類　円形を呈し，両面に磨痕と両面＋側縁に敲打痕をもつもの(第83図100～101)。

Ⅱ－A－1－○類　楕円形を呈し，片面に磨痕と片面に敲打痕をもつもの（第83図102）。

Ⅱ－B－1－○類　楕円形を呈し，両面に磨痕と片面に敲打痕をもつもの（第83図104）。

Ⅱ－B－2－○類　楕円形を呈し，両面に磨痕と両面に敲打痕をもつもの（第83図105）。

Ⅱ－B－4－○類　楕円形を呈し，両面に磨痕と片面＋側縁に敲打痕をもつもの（第83図107）。

Ⅱ－B－5－○類　楕円形を呈し，両面に磨痕と両面＋側縁に敲打痕をもつもの(第83図103・106)。

Ⅲ－B－5－○類　方形を呈し，両面に磨痕と両面＋側縁に敲打痕をもつもの（第84図110）。

Ⅳ－B類　長方形を呈し，両面に磨痕をもつもの（第84図108・109）。

Ⅳ－B－5－○類　長方形を呈し，両面に磨痕と両面＋側縁に敲打痕をもつもの（第84図111）。

Ⅳ－E－5－○類　長方形を呈し，両面＋側縁に磨痕と両面＋側縁に敲打痕をもつもの（第84図112）。

Ⅱ－C類　楕円形を呈し，側縁に磨痕をもつもの（第86図139）。

Ⅳ－C類　長方形を呈し，側縁に磨痕をもつもの（第86図143・145）。

不明　（第84図113～第86図138・140～142）。

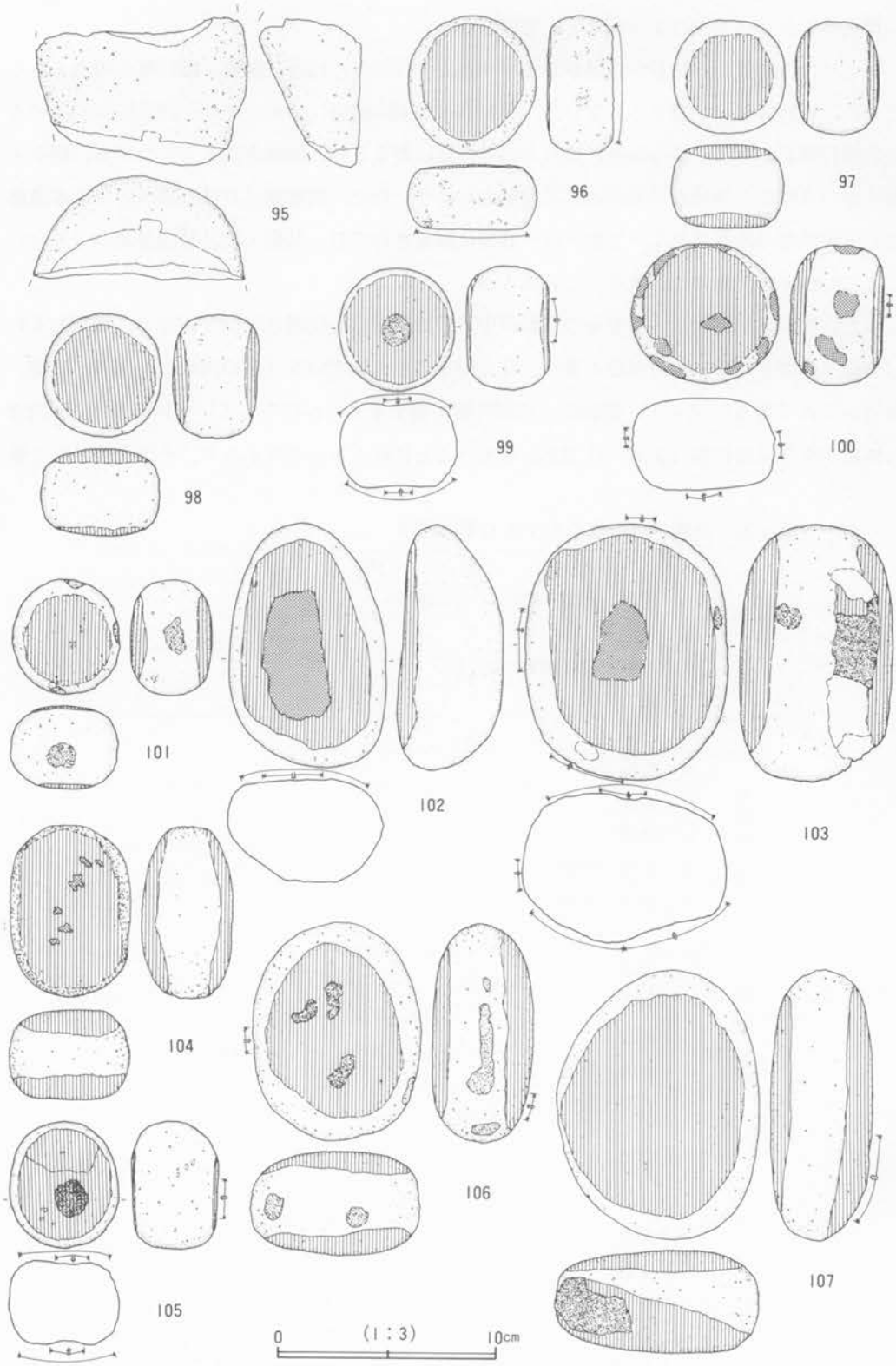
以上のことから，次のようなことが看取される。

ひとつは、磨痕のみ[(4)]をもつ資料が20点中８点でそれ以外の12点は磨痕・敲打痕の両者をもっており，それほど差が感じられないが，破損品（不明の資料）においては，29点中19点に何らかの敲打痕がみられることから，これらの石器類は磨るという機能を基本としつつも，磨る・敲くという機能を併せもつものとして理解されよう。ただ，完形品における磨痕のみの本遺跡での出現頻度の高さ及びⅠ－Ｂ類・Ⅳ－Ｂ類に限定されてⅡ－Ｂ類・Ⅲ，Ｂ類等がみられないことについては，何に起因するのであろうか。

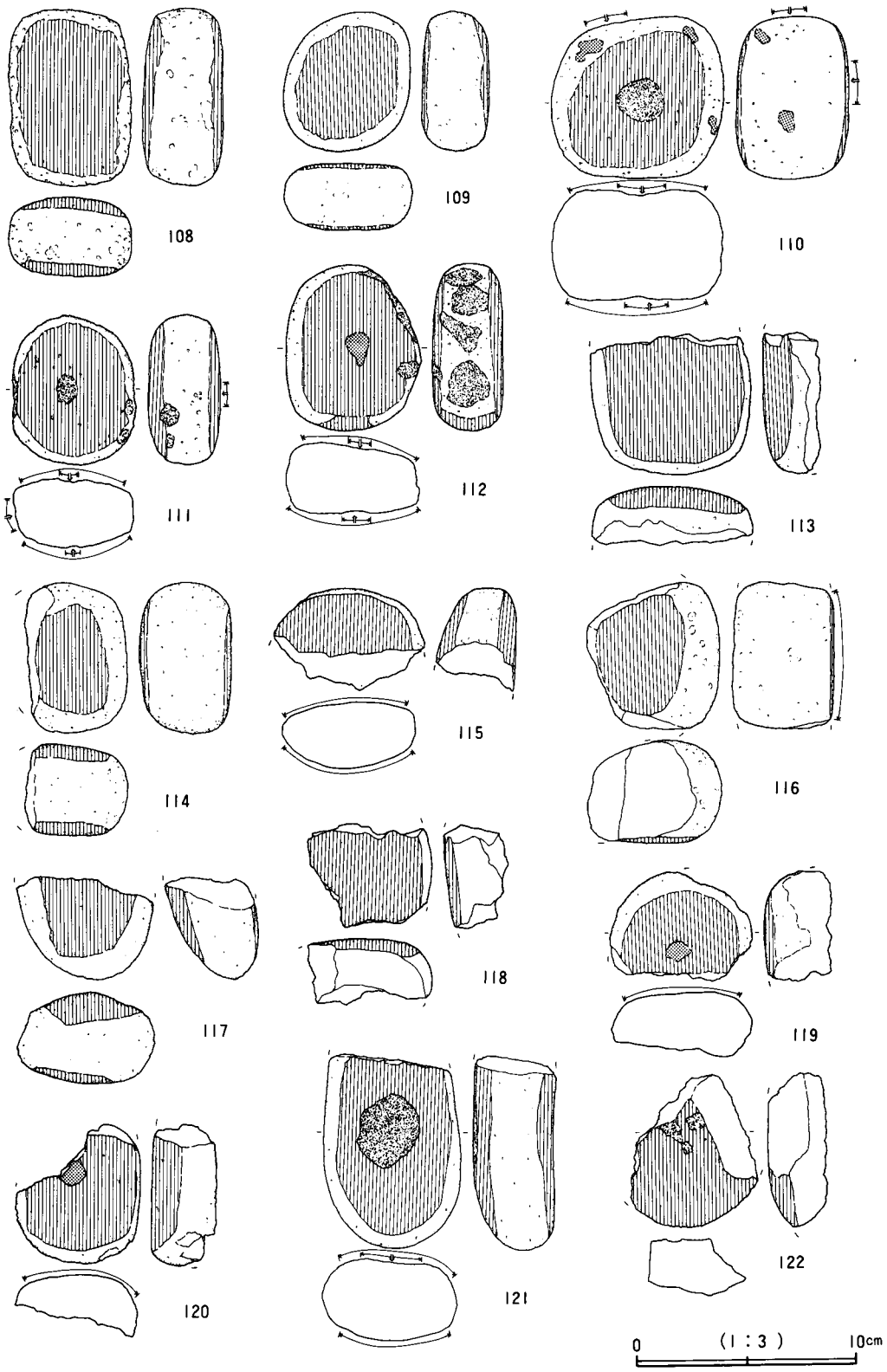
また，磨痕・敲打痕の両者をもつ資料の中で，特に敲打の位置についてみると，両面あるいは両面＋側縁というあり方が最も多く，12点中９点を占めている（その内訳は，前者が２点，後者が７点である)。そして，側縁のみに敲打痕を有するものが存在していないことから，両面の特に中央部に敲打痕（あるいは凹部）をもつことに何らかの意味があり，その派生として側

第５表　磨痕・敲打痕を有する石器の属性

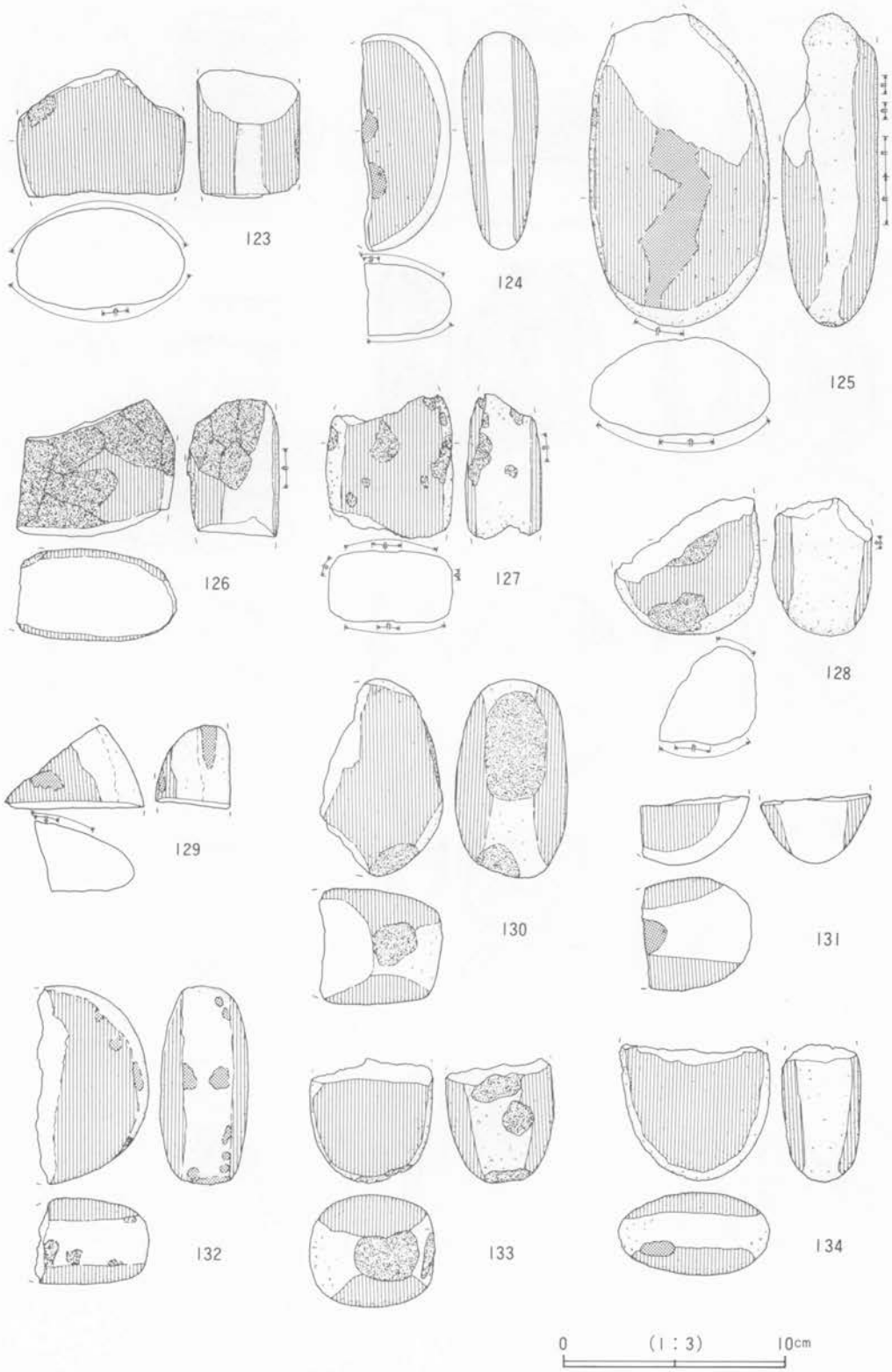
		属　性　内　容
属性	形態	Ⅰ：円形（長幅指数0.9以上)(註３)
		Ⅱ：楕円形
		Ⅲ：方形（長幅指数0.9以上）
		Ⅳ：長方形
		：
	磨面の位置	Ａ：片面
		Ｂ：両面
		Ｃ：側縁
		Ｄ：片面＋側縁
		Ｅ：両面＋側縁
	敲打の位置	１：片面
		２：両面
		３：側縁
		４：片面＋側縁
		５：両面＋側縁
	敲打の数	ａ：１個
		ｂ：２個
		ｃ：３個
		ｄ：４個
		ｅ：５個
		ｆ：６個
		ｇ：７個以上



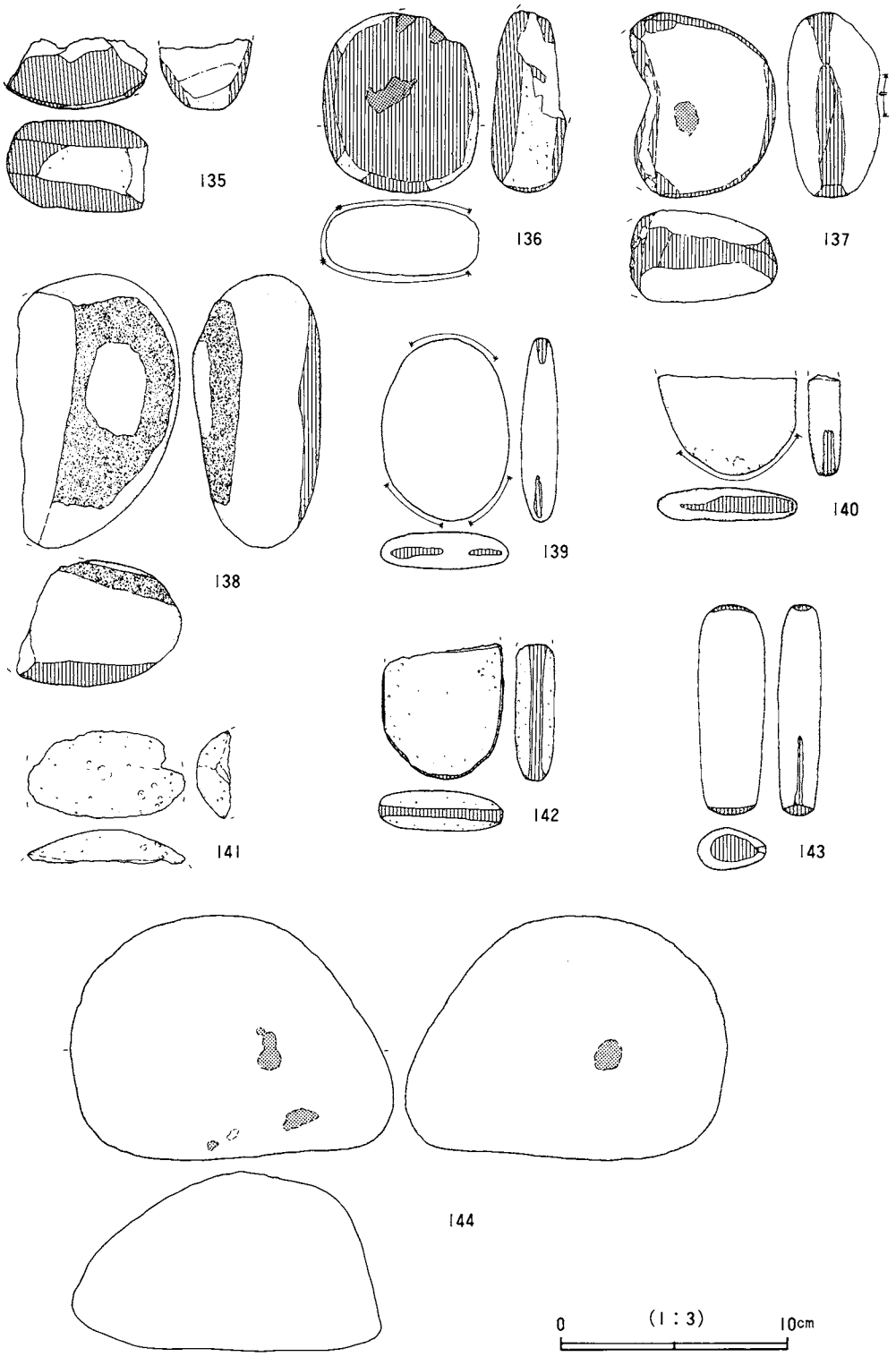
第83図　縄文時代石器実測図(7)(石皿95，磨痕・敲打痕を有する石器96～107)



第84図　縄文時代石器実測図(8)(磨痕・敲打痕を有する石器)



第85図　縄文時代石器実測図(9)(磨痕・敲打痕を有する石器)



第86図　縄文時代石器実測図(10)(磨痕・敲打痕を有する石器135～143，台石144)

縁にも敲打痕がみられると考えることも可能であろう。[5]

さらに，II－C類・IV－C類といった側縁にのみ磨痕のみられる一群は，明らかに他の一群とは弁別される特徴をもっており，磨るという機能（あるいは行為）内におけるより細かい機能差・行動差等も示唆されよう。

概して，磨痕・敲打痕を有する石器に関する観察は御座なりなものが多いが，このような人間行動（いわゆる磨る・敲くといった身体技法）が直接反映される石器類についての客観的な分析視点・方法等の確立が待たれるところである。[6] ただ，確かにランダムな要因の絡みやすいこれらの石器類ではあるが，大きさ（長さ・幅・厚さ・重さ），形態等の属性の組み合わせによる分析から各石器間の共通性・差異性を把握することはある程度までは可能なように思われる。

台石（第86図144，図版47）

144は，両面に若干，浅い凹部がみられる。

叩石（第87図146～151，図版48）

146は，細長い不定形な礫の下端部に敲打痕をもつ叩石である。

147は，細長い不定形な礫の両端に敲打痕をもつ叩石である。

148・149は，下端部に敲打痕をもつ叩石で，上半部を欠損する。

150は，下端部と器体中央部に敲打痕をもつ叩石で，上半部を欠損する。

151は，不整円形の礫の中央部と上端部に敲打痕をもつ叩石である。

石棒（第87図152～155，図版48）

152は，非常に大きな石棒であり，下半部を欠損する。現存する資料では大きく3つに破損している。この石棒と同一個体と思われる破片も若干採集されているが完形にはならない。

153・154は，石棒の中間部である。上部・下部を欠損する。

155は，下半部の欠損した石棒である。

石核（第88図156～第89図164，図版49）

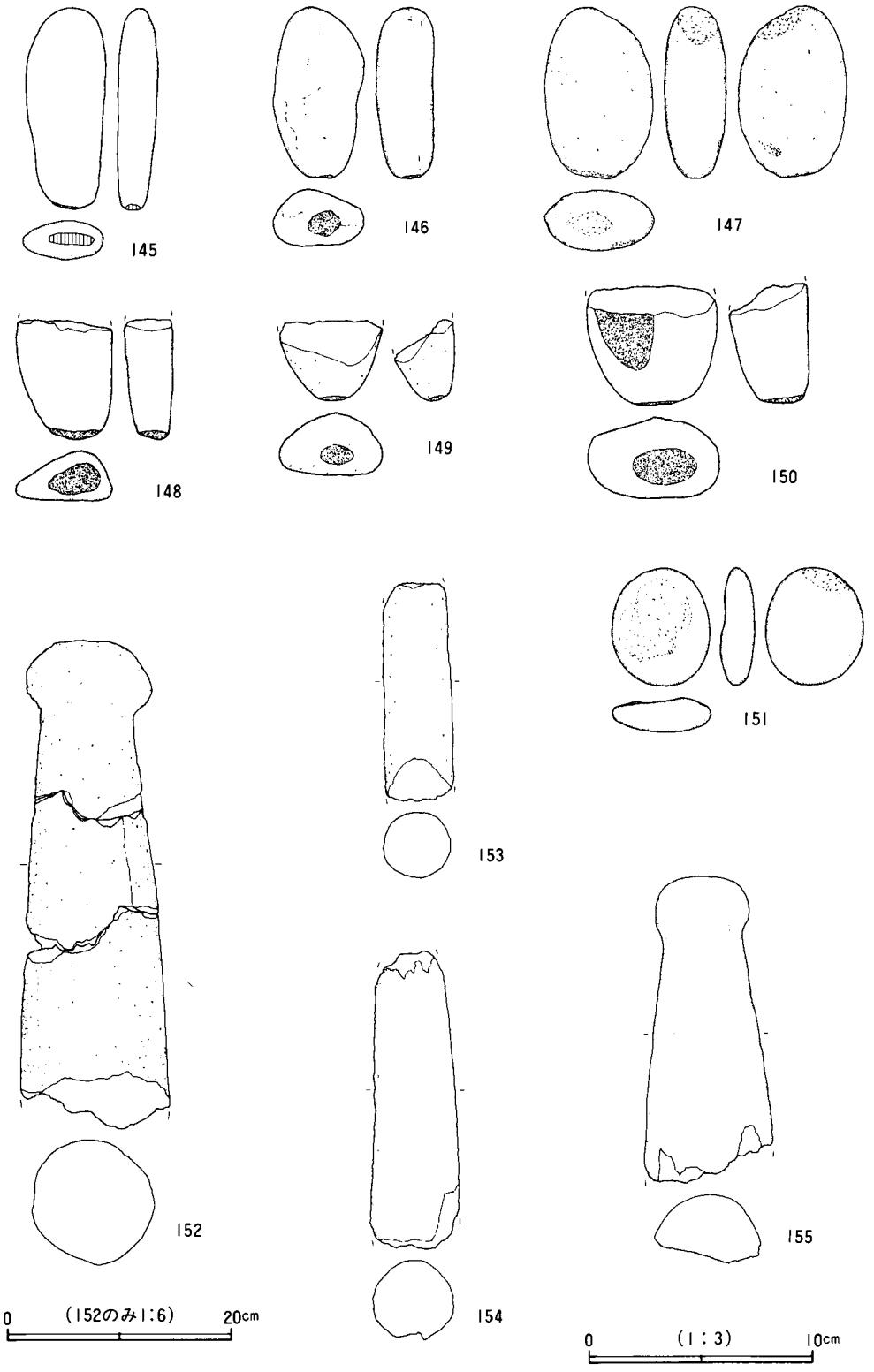
156・157は，剥片を素材とする石核で先行する剥離面・節理面を打面として剥片剥離を行ったものである。

158・159は，90度あるいは180度の打面転移を行った石核である。

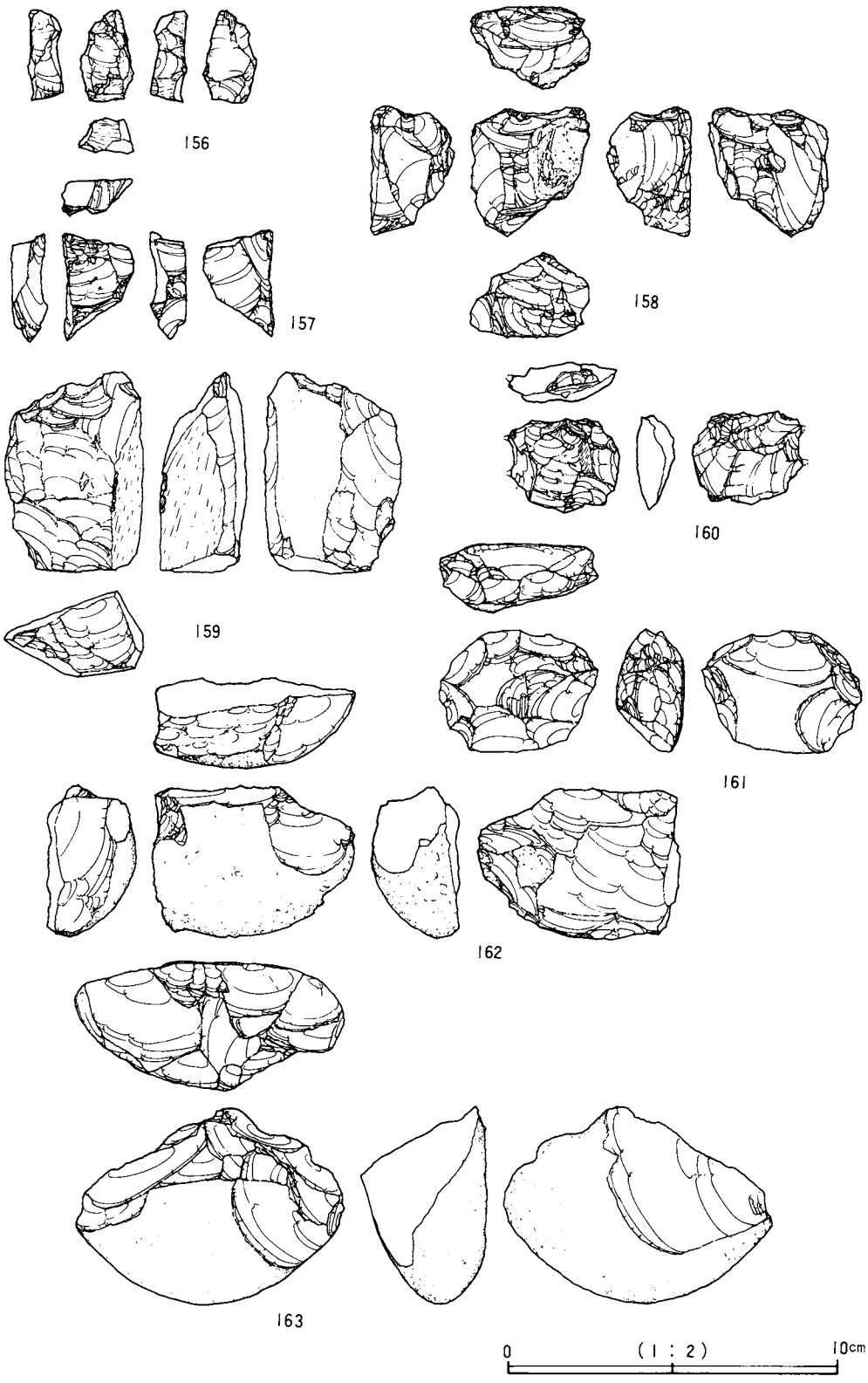
160～162は，周辺から中央部に向かって求心的に剥片剥離を行った石核である。残核形状は円盤形を呈す。

163は，B面側で1度だけ剥離が行われた後は，連続してA面側で剥片剥離を行った石核である。あるいは礫器として認識されるものかもしれない。

164は，比較的偏平な礫を素材として90度の打面転移を行った石核で，2回しか剥離されていない。



第87図　縄文時代石器実測図(11)(磨痕・敲打痕を有する石器145,叩き石146～151,石棒152～155)



第88図　縄文時代石器実測図(12)（石核）

接合資料No. 1（第89図165・166，図版49）

石核と剝片の接合資料であるが，本資料は土坑覆土中からの一括出土である。

接合資料No. 2（第89図167・168，図版49）

石核と剝片の接合資料である。石核の下端部に明瞭な敲打痕は認められないが，おそらく台石の上に原石をのせて加撃することで2分割するのが目的であったのだろうか。

石製円盤（第89図169，図版49）

169は，周縁部を丁寧に研磨したもので，縁辺部には微細な剝離痕がみられる。あるいは磨痕・敲打痕を有する石器の一種かもしれない。上半部を欠損する。

註

(1) ㈶千葉県文化財センター『酒々井町伊篠白幡遺跡』1986年

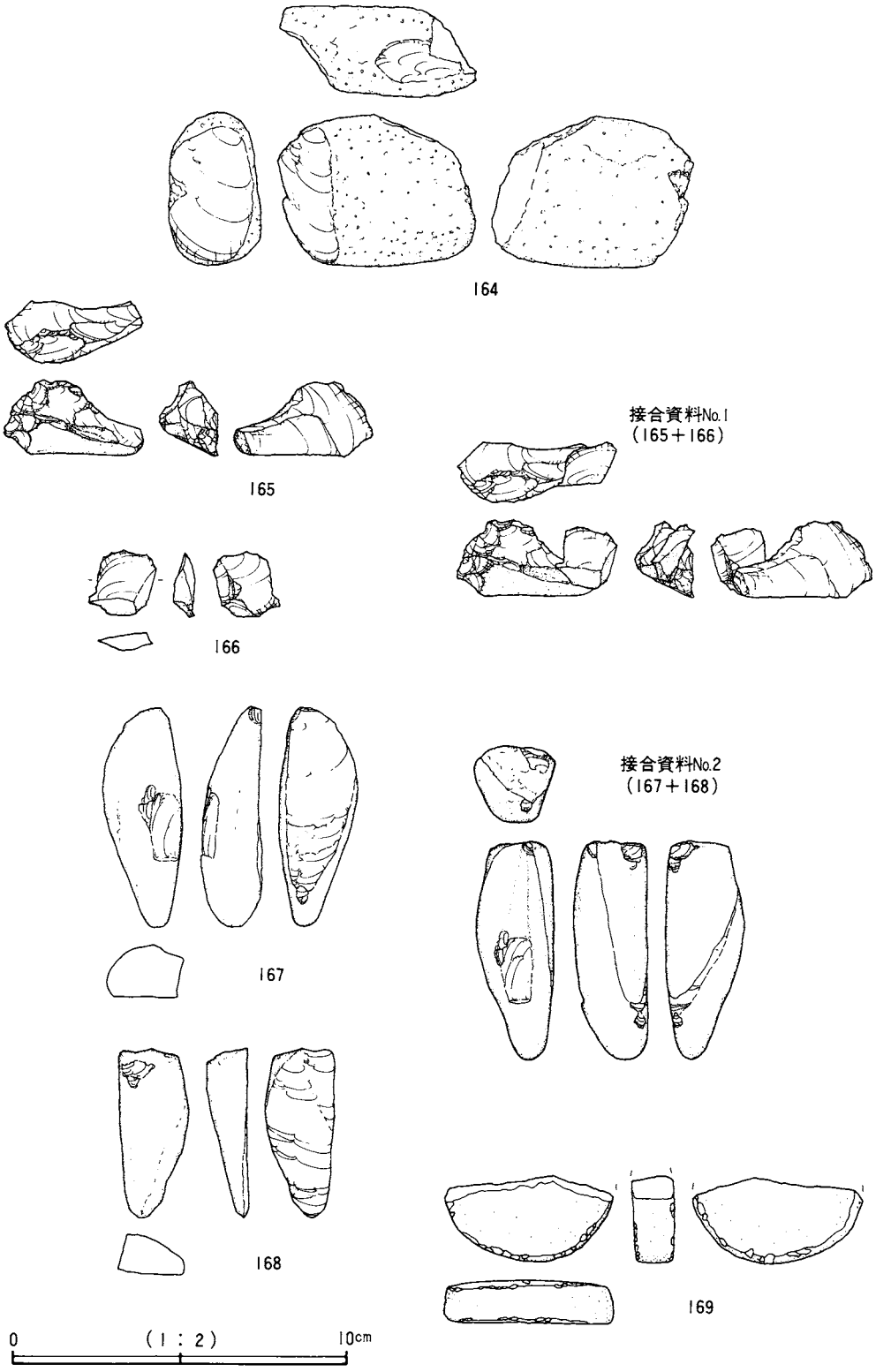
(2) ㈶千葉県文化財センター『千原台ニュータウンIII　草刈遺跡（B区）』1986年

(3) 長幅指数は幅／長さを表している。そして，各指数の度数分布は，0.90以上が7点，0.89～0.80が5点，0.79～0.70が3点，0.70未満が2点となっている。若干細長い形状を呈す0.70未満の資料を除けば円形・方形と楕円形・長方形の資料数は，ほぼ同数といえる。さらに視覚的に円形ないしは方形に近いと思われる資料が0.90以上のものに集中することも，0.90以上のものを機械的に円形・方形と認識した根拠になっているが，本来は0.90に近い数値を示す0.89，0.87等の長幅指数を示す第84図109，第83図105等の資料も円形，方形に含まれるべきかもしれない（本来は判別分析，クラスター分析等の統計的な手法を通して類似のものを数量的にまとめる作業を行うべきであろう）。今後，円形度のより客観的な認識法の整備が期待されよう。

(4) 磨面のみとは磨痕の定義で述べたのと同様に，必ずしも敲打されていないということは意味していない。あくまでも他の面あるいは他の石器と比較して明瞭に区別されうるような凹部を観察・確認できなかったということである。

(5) もっとも中央部の敲打痕も敲打後，磨られている例もあることから必要条件ではあっても十分条件ではないのかもしれない。

(6) 特に実測図における磨痕・敲打痕と自然面の書き分け及び本文等での注記は必須のことである。



第89図　縄文時代石器実測図(13)石核164～168接合資料，石製円盤169）

第6表　旧石器時代石器計測表

挿図番号	器種	最大限 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺構 グリッド	遺物番号	備考
第76図 1	ナイフ形石器	6.5	1.8	0.8	7.8	頁岩	A1-27	A1-27-1348	
第76図 2	角維伏石器	5.2	1.2	1.1	6.1	安山岩	3号埋甕炉	032-15	埋甕炉内覆土中部出土。
第76図 3	ナイフ形石器	2.4	1.6	0.4	1.6	黒曜石	A3-67	A3-67-532	
第76図 4	ナイフ形石器	2.8	1.3	0.5	1.6	安山岩	A3-76	A3-76-538	
第76図 5	尖頭器	(2.8)	(2.3)	(0.8)	(4.4)	黒曜石	表採	000-28	
第76図 6	尖頭器	(2.7)	(2.4)	(0.8)	(5.3)	黒曜石	A3-44	A3-44-25	
第76図 7	尖頭器	(5.1)	2.1	1.0	(8.8)	黒曜石	51号土坑	021-36	
第76図 8	尖頭器	(4.1)	1.9	0.6	(5.3)	安山岩	表採	000-11	
第76図 9	尖頭器	(3.3)	(3.1)	(0.9)	(7.2)	安山岩	33号土坑	011-6	
第76図 10	尖頭器	(2.4)	(3.2)	(1.5)	(10.5)	粘板岩	A2-22	A2-22-300	
第76図 11	尖頭器	(4.2)	2.4	1.2	(10.1)	黒曜石	A4-16	A4-16-111	ローム出土
第76図 12	尖頭器	(2.4)	(1.7)	(0.6)	(2.5)	チャート	A3-96	A3-96-459	
第76図 13	削器	12.2	3.7	1.3	48.8	頁岩	A2-29	A2-29-1002	
第76図 14	U fl	10.3	4.8	1.2	48.3	頁岩	A3-96	A3-96-596	

第7表　縄文時代石器計測表

挿図番号	器種	最大限 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺構 グリッド	遺物番号	備考
第77図 1	石鏃	(2.6)	(2.0)	0.3	(1.2)	凝灰質安山岩	99号土坑	062-15	
第77図 2	石鏃	2.4	1.9	0.4	1.2	チャート	86号土坑	048-70	
第77図 3	石鏃	2.2	1.7	0.4	0.8	黒曜石	86号土坑	048-36	
第77図 4	石鏃	(2.1)	(1.2)	0.3	(0.6)	黒曜石	A3-66	A3-66-409	
第77図 5	石鏃	(1.4)	(1.1)	(0.4)	(0.4)	頁岩	A3-76	A3-76-449	
第77図 6	石鏃	(1.4)	1.9	0.3	(0.6)	黒曜石	A3-86	A3-86-504	
第77図 7	石鏃	3.1	(1.8)	0.4	(1.5)	黒曜石	106号土坑	004-34	
第77図 8	石鏃	(2.1)	(1.3)	0.4	(1.0)	黒曜石	96号土坑	056-9	
第77図 9	石鏃	(1.9)	1.5	0.4	(0.7)	黒曜石	7号埋甕炉	153-36	
第77図 10	石鏃	(1.2)	(1.6)	0.3	(0.6)	黒曜石	102号土坑	138-1	
第77図 11	石鏃	(2.1)	(1.8)	0.4	(1.0)	黒曜石	96号土坑	056-35	
第77図 12	石鏃	(1.4)	(1.0)	(0.3)	(0.3)	黒曜石	A3-86	A3-86-493	
第77図 13	石鏃	2.2	2.0	0.4	1.6	黒曜石	96号土坑	056-133	
第77図 14	石鏃	(1.4)	(1.6)	0.4	—	黒曜石	表採	000-28	
第77図 15	石鏃	3.3	3.1	1.2	11.2	安山岩	96号土坑	056-118	
第77図 16	石鏃	1.6	(1.7)	0.4	(0.7)	チャート	A3-86	A3-86-398	
第77図 17	石鏃	(2.4)	(2.0)	0.5	(1.7)	黒曜石	A2-78	A2-78-878	
第77図 18	石鏃	2.5	1.8	0.7	2.0	安山岩	96号土坑	056-37	
第77図 19	石鏃	(2.8)	(1.7)	0.6	(1.8)	黒曜石	96号土坑	056-10	
第77図 20	石鏃	(1.7)	(1.5)	0.6	(1.1)	安山岩	A3-43	A3-43-151	
第77図 21	石鏃	(1.9)	1.8	(0.7)	(1.8)	玄武岩	表採	—	
第77図 22	石鏃	(1.4)	(1.4)	(0.3)	(0.5)	チャート	A3-03	A3-03-301	
第77図 23	石鏃	(1.8)	1.1	0.5	(0.6)	チャート	B1-溝	B1-溝-1	
第78図 24	削器	(1.8)	(1.7)	(0.5)	(1.1)	黒曜石	49号土坑	025-14	
第78図 25	削器	2.7	2.5	0.6	4.9	チャート	A3-62	A3-62-315	
第78図 26	削器	2.7	2.4	0.7	4.2	メノウ	A3-07	A3-07-434	
第78図 27	削器	2.3	2.3	0.8	4.6	安山岩	A2-92	A2-92-724	
第78図 28	削器	2.0	2.3	1.1	5.4	頁岩	A1-83	A1-83-250	
第78図 29	削器	3.2	3.5	1.3	10.0	頁岩	A2-29	A2-29-1005	
第78図 30	削器	4.0	3.3	1.2	15.1	チャート	A2-03	A2-03-305	
第78図 31	削器	4.8	4.1	1.0	19.4	チャート	A4-61	A4-61-51	
第78図 32	削器	(1.7)	(2.2)	(0.8)	(3.1)	玉髄	96号土坑	056-63	
第78図 33	削器	(1.6)	(2.7)	(0.5)	(1.6)	流紋岩	83号土坑	044-26	
第78図 34	彫器	4.7	2.6	0.9	11.7	安山岩	A2-63	A2-63-240	
第78図 35	彫器	3.0	2.0	0.9	3.8	黒曜石	96号土坑	056-167	
第78図 36	U fl	1.8	1.1	0.5	1.0	黒曜石	A4-32	A4-32-47	

挿図番号	器種	最大限 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺構 グリッド	遺物番号	備考
第78図 37	U - fl	1.8	2.0	0.8	2.2	黒曜石	A3-47	A3-47-361	
第78図 38	U - fl	1.6	2.7	1.2	5.5	頁岩	30号土坑	091-9	
第78図 39	U - fl	2.3	2.0	0.6	2.4	チャート	A3-16	A3-16-437	
第78図 40	U - fl	4.4	1.6	1.7	7.1	チャート	96号土坑	056-11	
第78図 41	U - fl	4.0	4.2	1.0	10.1	チャート	A1-57	A1-57-1211	
第79図 42	石錐	1.7	1.5	0.3	0.6	黒曜石	A4-01	A4-01-44	
第79図 43	石錐	1.6	1.5	0.7	0.8	黒曜石	A2-72	A2-72-710	
第79図 44	石錐	(1.9)	1.3	0.8	(1.1)	黒曜石	A1	A1-836	
第79図 45	石錐	2.8	1.0	0.6	1.0	チャート	A5-35	A5-35-10	
第79図 46	石錐	2.8	1.2	0.4	1.2	黒曜石	A3-96	A3-96-395	
第79図 47	石錐	2.5	3.3	1.2	7.3	玉髄	96号土坑	056-146	
第79図 48	石錐	4.9	3.2	1.0	11.2	頁岩	A2-66	A2-66-957	
第79図 49	石匙	4.9	4.9	1.2	26.9	玄武岩	A2-23	A2-23-390	
第79図 50	石匙	4.1	3.0	1.1	9.8	玄武岩	表採	——	
第79図 51	楔形石器	2.3	(1.7)	0.8	(2.2)	黒曜石	96号土坑	056-166	
第79図 52	楔形石器	2.3	2.1	0.7	3.5	安山岩	92号土坑	052-1	
第79図 53	楔形石器	3.1	4.0	0.9	136	玄武岩	A3-65	A3-65-356B	
第79図 54	楔形石器	3.9	3.0	1.2	15.2	流紋岩	A3-65	A3-65-356C	
第79図 55	楔形石器	4.0	2.6	1.2	14.6	玄武岩	A3-65	A3-65-356A	
第79図 56	楔形石器	3.7	2.1	1.3	9.8	砂岩	A2-52	A2-52-621	
第79図 57	楔形石器	7.2	4.0	1.3	47.2	玄武岩	A3-35	A3-35-331	
第79図 58	楔形石器	4.8	3.4	2.5	51.5	玄武岩	B1-51	B1-51-138	
第80図 59	打製石斧	10.5	7.2	2.0	194.5	安山岩	A1-36	A1-36-812	
第80図 60	打製石斧	(9.2)	(5.3)	2.1	153.5	雲母片岩	5号埋甕炉	143-17	
第80図 61	打製石斧	(11.7)	(7.5)	2.4	191.0	安山岩	A1-09	A1-09-991	
第80図 62	打製石斧	(6.7)	6.7	2.8	160.0	流紋岩	A1-86	A1-86-635	
第80図 63	打製石斧	(7.5)	(6.2)	1.9	125.0	安山岩	A3-96	A3-96-351	
第80図 64	打製石斧	(3.4)	(5.0)	(1.9)	(43.3)	砂岩	A4-22	A4-22-22	
第80図 65	打製石斧	5.0	3.5	1.1	22.5	玄武岩	表採	——	
第80図 66	打製石斧	8.1	5.4	2.0	119.5	安山岩？	A2-23	A2-23-389	
第80図 67	打製石斧	9.1	4.6	1.7	93.6	雲母片岩	A4-61	A4-61-37	
第80図 68	打製石斧	6.8	5.7	1.1	45.4	安山岩	A2-35	A2-35-55	
第81図 69	打製石斧	9.3	7.4	2.5	198.0	雲母片岩	6号埋甕炉	144-24	
第81図 70	打製石斧	(4.1)	(4.2)	(1.6)	(35.0)	安山岩	A4-62	A4-62-49	
第81図 71	磨製石斧	(4.5)	(3.2)	(0.8)	(14.8)	蛇紋岩	A2-28	A2-28-5B	
第81図 72	礫器	6.5	6.3	3.1	163.0	砂岩	A1-95	A1-95-238	
第81図 73	磨製石斧	(4.0)	(2.9)	(2.9)	28.5	砂岩	A3-62	A3-62-314	
第81図 74	磨製石斧	(3.5)	(3.7)	(2.2)	(42.1)	変成岩	A3-97	A3-97-386	
第81図 75	磨製石斧	(11.3)	5.4	3.3	333	蛇紋岩	B1-02	B1-02-33	
第81図 76	磨製石斧	(7.3)	(4.6)	(2.8)	(80.4)	頁岩	A1-92	A1-92-115	
第81図 77	磨製石斧	(6.1)	(3.4)	(1.3)	(29.0)	粘板岩	A2-45	A2-45-127	
第81図 78	磨製石斧	(2.4)	(4.2)	(1.7)	(22.5)	緑泥片岩	96号土坑	056-36	
第81図 79	磨製石斧	(5.4)	4.1	1.3	(43.6)	頁岩	A1-37	A1-37-1225	
第81図 80	磨製石斧	(3.8)	2.1	1.1	14.0	蛇紋岩	A1	A1-853	
第81図 81	磨製石斧	6.7	3.8	2.0	87.3	蛇紋岩	30号土坑	091-29	
第81図 82	磨製石斧	8.8	3.3	1.3	51.7	安山岩	B1-52	B1-52-141	
第81図 83	磨製石斧	6.4	4.7	1.6	79.2	蛇紋岩	A1	A1-852	
第81図 84	磨製石斧	(4.8)	4.3	1.1	(45.1)	蛇紋岩	表採	000-10	
第82図 85	石皿	(23.6)	(15.7)	(8.7)	(2600)	多孔質安山岩	A3-47	A3-47-362	
第82図 86	石皿	(17.8)	(12.4)	(5.8)	(970)	安山岩	30号土坑	091-24	
第82図 87	石皿	(4.4)	(6.0)	(4.3)	(10.5)	安山岩	A3-93	A3-93-268	
第82図 88	石皿	(6.6)	(4.1)	2.7	(50.6)	安山岩	A1-68	一括	
第82図 89	石皿	(10.5)	(7.0)	(6.8)	(630)	安山岩	A1-37	A1-37-894	
第82図 90	石皿	(10.3)	(9.2)	(5.3)	(460)	安山岩	A5-66	A5-66-1B	

挿図番号	器　　種	最大限 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　　材	遺　構 グリッド	遺物番号	備　　考
第82図 91	石　　皿	(6.9)	(7.1)	(10.4)	(890)	安山岩	4号炉跡	013-36	
第82図 92	石　　皿	(3.0)	(4.1)	(1.9)	(21.6)	安山岩	A2-83	A2-83-681	
第82図 93	石　　皿	(7.3)	(7.5)	(4.6)	(170.7)	安山岩	A2-72	A2-72-758	
第82図 94	石　　皿	(12.0)	(9.6)	(4.8)	(530.5)	安山岩	A2-05	A2-05-715	
第83図 95	石　　皿	(6.8)	(9.5)	(4.7)	(247)	安山岩	61号土坑	108-6	
第83図 96	磨痕 敲打痕を有する石器	6.4	5.9	3.0	176	安山岩	A3-02	A03-02-6	I-B類，長幅指数0.92。
第83図 97	磨痕 敲打痕を有する石器	5.2	5.1	3.8	150	砂　岩	A1-37	A1-37-940	I-B類，長幅指数0.98。
第83図 98	磨痕 敲打痕を有する石器	5.6	5.4	3.9	172	安山岩	A1-37	A1-37-866	I-B類，長幅指数0.96。
第83図 99	磨痕 敲打痕を有する石器	5.7	5.4	3.8	171	角閃石安山岩	A1-04	A1-04-789	I-B-2-b類，長幅指数0.95。
第83図100	磨痕 敲打痕を有する石器	6.7	6.4	4.3	274	安山岩	A1-57	A1-57-1057	I-B-5-g類，長幅指数0.96。
第83図101	磨痕 敲打痕を有する石器	5.2	4.9	3.8	127	安山岩	A1-59	A1-59-1805	I-B-5-c類，長幅指数0.94。
第83図102	磨痕 敲打痕を有する石器	10.9	7.2	4.7	503	砂　岩	B1-02	B1-02-63	II-A-1-a類，長幅指数0.66。
第83図103	磨痕 敲打痕を有する石器	11.5	9.3	6.9	1035	角閃石安山岩	A1-83	A1-83-619	II-B-5-g類，長幅指数0.81。
第83図104	磨痕 敲打痕を有する石器	7.5	5.5	4.1	232	安山岩	1号住居跡	077-12	II-B-1-f類，長幅指数0.73。
第83図105	磨痕 敲打痕を有する石器	5.6	5.0	4.0	152	安山岩	A1-19	A1-19-1012C	II-B-2-b類，長幅指数0.87。
第83図106	磨痕 敲打痕を有する石器	9.7	7.7	4.6	510	安山岩	A2-46	A2-46-897	II-B-5-g類，長幅指数0.79。
第83図107	磨痕 敲打痕を有する石器	12.0	9.2	4.7	790	安山岩	A4-32	A4-32-23	II-B-4-b類，長幅指数0.77。
第84図108	磨痕 敲打痕を有する石器	8.1	5.6	3.6	228	多孔質安山岩	21号土坑	090-19A	IV-B類，長幅指数0.69。
第84図109	磨痕 敲打痕を有する石器	6.5	5.8	3.1	194	安山岩	A1-93	A1-93-455	IV-B類，長幅指数0.89。
第84図110	磨痕 敲打痕を有する石器	7.5	7.9	5.2	500	角閃石安山岩	A1-08	A1-08-1010	III-B-5-f類，長幅指数0.94。
第84図111	磨痕 敲打痕を有する石器	6.7	5.7	3.3	97.3	安山岩	A1-63	A1-63-174	IV-B-5-e類，長幅指数0.85。
第84図112	磨痕 敲打痕を有する石器	7.5	6.2	3.2	243	安山岩	A1	A1-833A	IV-E-5-g類，長幅指数0.83。
第84図113	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.3)	(7.3)	(2.6)	(171)	安山岩	A1	A1-833C	不明。
第84図114	磨痕 敲打痕を有する石器	6.7	(4.4)	(4.1)	(223)	安山岩	A2-57	A2-57-903	不明。破損後，破損面を使用。
第84図115	磨痕 敲打痕を有する石器	(4.5)	(6.9)	(3.7)	(120)	安山岩	A1-79	A1-79-1324	不明。
第84図116	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.5)	(6.0)	(4.6)	(276)	安山岩	A3-67	A3-67-604	不明。石皿の破損品を転用。
第84図117	磨痕 敲打痕を有する石器	(4.7)	(6.2)	(4.2)	(125)	砂　岩	A2-11	A2-11-158	不明。
第84図118	磨痕 敲打痕を有する石器	(4.7)	(5.7)	(3.0)	(92.0)	安山岩	A1-87	A1-87-1100	不明。
第84図119	磨痕 敲打痕を有する石器	(4.9)	6.5	(3.1)	(127)	安山岩	A1-93	A1-93-484	不明。弱い敲打痕あり。
第84図120	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.3)	(5.7)	(3.0)	(100)	安山岩	B1-20	B1-20-27	不明。弱い敲打痕あり。
第84図121	磨痕 敲打痕を有する石器	(8.7)	6.3	3.8	(342)	砂　岩	A4-01	A4-01-28	不明。強い敲打痕あり。
第84図122	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.9)	(5.8)	(2.6)	(100)	安山岩	16・17号 土坑	149-2	不明。強い敲打痕あり。
第85図123	磨痕 敲打痕を有する石器	(5.9)	7.6	4.6	(308)	安山岩	A1-22	A1-22-781	不明。両者の敲打痕あり。
第85図124	磨痕 敲打痕を有する石器	9.8	(4.1)	3.5	(198)	砂　岩	A1-79	A1-79-27	不明。弱い敲打痕あり。
第85図125	磨痕 敲打痕を有する石器	(13.9)	8.0	(4.3)	(670)	安山岩	A2-24	A2-24-47	不明。弱い敲打痕あり。
第85図126	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.1)	(7.1)	(4.1)	(267.5)	砂　岩	A2-12	A2-12-70	不明。強い敲打痕あり。
第85図127	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.4)	5.8	3.5	(164)	安山岩	27号土坑	093-3	不明。強い敲打痕あり。
第85図128	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.2)	(6.6)	4.5	(208)	安山岩	A4-71	A4-71-53A	不明。強い敲打痕あり。
第85図129	磨痕 敲打痕を有する石器	(3.7)	(6.3)	(3.4)	(70.0)	砂　岩	A1-63	A1-63-439	不明。弱い敲打痕あり。
第85図130	磨痕 敲打痕を有する石器	(8.8)	(5.6)	(5.2)	(308)	安山岩	A1-96	A1-96-566	不明。強い敲打痕あり。
第85図131	磨痕 敲打痕を有する石器	(3.1)	(4.5)	(5.0)	(86.4)	砂　岩	A1-19	A1-19-992C	不明。弱い敲打痕あり。
第85図132	磨痕 敲打痕を有する石器	(8.9)	(5.1)	(3.9)	(236)	安山岩	21号土坑	090-19B	不明。両者の敲打痕あり。
第85図133	磨痕 敲打痕を有する石器	(5.6)	5.6	5.0	(205)	安山岩	A1-65	A1-65-492	不明。強い敲打痕あり。
第85図134	磨痕 敲打痕を有する石器	(6.1)	6.8	(3.6)	(200)	安山岩	A1-92	A1-92-515	不明。弱い敲打痕あり。
第86図135	磨痕 敲打痕を有する石器	(3.3)	(6.2)	(4.0)	101	安山岩	A1-63	A1-63-413	不明。
第86図136	磨痕 敲打痕を有する石器	8.0	6.9	(3.3)	(258)	安山岩	A1-58	一　括	不明。弱い敲打痕あり。
第86図137	磨痕 敲打痕を有する石器	8.2	(6.4)	4.1	(288)	砂　岩	83号土坑	044-17	不明。弱い敲打痕あり。
第86図138	磨痕 敲打痕を有する石器	11.7	(7.4)	5.3	(590)	砂　岩	A2-45	A2-45-58	不明。強い敲打痕あり。破損後，破損面を使用。
第86図139	磨痕 敲打痕を有する石器	7.9	5.7	1.6	106	石英質砂岩	A1-16	A1-16-803	II-C類
第86図140	磨痕 敲打痕を有する石器	(4.3)	(6.0)	(1.4)	(56.2)	砂　岩	A2-06	A2-06-449	不明。
第86図141	磨痕 敲打痕を有する石器	(3.8)	(6.9)	(1.5)	(32.3)	安山岩	7号埋甕炉	153-6	不明。
第86図142	磨痕 敲打痕を有する石器	(5.9)	5.4	1.8	(81.0)	安山岩	A1-19	A1-19-992D	不明。
第86図143	磨痕 敲打痕を有する石器	9.2	3.0	1.9	82.5	砂　岩	A1-05	A1-05-791	IV-C類。
第86図144	台　　石	14.3	10.7	7.7	1860	輝石安山岩	A1-83	A1-83-424	
第87図145	磨痕 敲打痕を有する石器	9.1	3.6	1.8	90	砂　岩	A1-55	A1-55-759	IV-C類。

挿図番号	器種	最大限(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺構グリッド	遺物番号	備考
第87図146	叩石	7.6	3.9	2.6	118	チャート	A1-86	A1-86-632	
第87図147	叩石	7.8	4.8	2.7	143	石英質砂岩	A5-35	A5-35-7	
第87図148	叩石	(5.3)	(4.3)	(2.2)	(64)	砂岩	A1	A1-834d	
第87図149	叩石	(3.6)	(4.6)	(3.7)	(43.5)	砂岩	A1-03	A1-03-776A	
第87図150	叩石	(4.9)	5.7	3.6	(131)	安山岩	A1-26	A1-26-792	
第87図151	叩石	5.2	4.3	1.5	42.2	砂岩	A3-34	A3-34-24	
第87図152	石棒	(43.1)	(13.4)	(12.9)	(9000)	緑色片岩	A1-67	A1-67-1197	
第87図153	石棒	(9.4)	(3.1)	(3.2)	(168)	緑色片岩	90号土坑	135-2	
第87図154	石棒	(12.9)	(3.9)	(3.9)	(340)	緑色片岩	A1-92	A1-92-513	
第87図155	石棒	(13.5)	(5.8)	(3.4)	(375)	緑色片岩	表採	000-27	
第88図156	石核	2.8	1.6	1.1	4.4	黒曜石	96号土坑	056-170	
第88図157	石核	3.2	2.1	1.0	6.1	チャート	A1-29	A1-29-997	
第88図158	石核	4.0	3.6	2.6	29.8	黒曜石	A1-93	A1-93-423	
第88図159	石核	6.0	4.2	2.6	75.9	頁岩	99号土坑	062-2	
第88図160	石核	2.8	(3.4)	1.2	(10.6)	チャート		145-2	
第88図161	石核	3.6	4.8	2.1	37.8	玄武岩	A4-11	A4-11-30	
第88図162	石核	4.5	6.1	2.7	92.3	頁岩	A3-32	A3-32-9A	
第88図163	石核	5.9	8.1	3.8	1800	砂岩	A3-32	A3-32-9B	
第89図164	石核	4.6	6.0	2.8	101.5	安山岩	A1	A1-837	
第89図165	石核	2.2	4.2	1.8	11.2	黒曜石	83号土坑	044-13	第89図166と接合。
第89図166	剝片	1.9	2.0	0.6	1.7	黒曜石	83号土坑	044-16	第89図165と接合。
第89図167	石核	6.5	2.4	1.8	29.4	泥岩	B1-24	B1-24-86A	第89図167と接合。
第89図168	剝片	5.0	2.1	1.2	13.4	泥岩	B1-24	B1-24-86B	第89図166と接合。
第89図169	石製円盤	(5.0)	(2.5)	1.2	(22.1)	砂岩	A1-37	A1-37-975	

第8表　縄文時代石器出土量一覧

品種	石鏃	打製石斧	磨製石斧	掻器・削器	彫器	使用痕ある剝片	石錐	石匙	楔形石器	礫器	石皿	磨石・凹石	敲石・叩石	石棒	石核	剝片	砕片	原石	礫 焼	礫 生	軽石	その他	計
点数	23	14	13	12	2	7	7	2	8	1	16	54	10	9	11	283	105	86	180	75	51	7	976
%	2.4	1.4	1.3	1.2	0.2	0.7	0.7	0.2	0.8	0.1	1.6	5.5	1.0	0.9	1.1	29.0	10.8	8.8	18.4	7.7	5.2	0.7	99.7

小　結

総数976点が出土した。石器類の所属も土器と同様に中期末から後期にかけての所産で，なかでも加曽利Ｂ期のものが主体と思われる。

出土比率は別表のとおりであるが，点数的に最多のものは剝片・破片の類で，総数388点で，次いで礫の255点である。

剝片の分布はＡ１区～Ａ４区にわたり，特にＡ３-76.86.96区に集中がみられる。このブロックには石核を伴っていない。石器製作址であるか，石器を製作した後の主要な残片を一括して廃棄したとみられる。

礫はＡ４区南半部に至るまで全面にみられるが，特にＡ１区南半部，Ａ２区北半部に集中が著しい。礫では約70％が火を受けており，多くは調理の為に用いられていた可能性がたかい。出土地域内では炉跡・埋甕炉跡が検出されているので，それらとの関連が考えられる

加工された石器では，磨石・凹石類の最多で，約３割（28.9％）を占めている。それに比して中期以前の時期に比率の高かった石鏃は12.3％と比率が下がっている。これは後期遺跡での一般的傾向であるが，その理由は如何なるものであろうか。

磨石・凹石とセットになる石皿を合わせた分布状況をみると，Ａ１・Ａ２区を中心とした分布域とＡ４区北半部を中心とする分布域に分けられる。Ａ１・Ａ２区は加曽利Ｂ期の分布と重なる。Ａ４区は加曽利ＥⅣ期の密度が濃い部分である。この差異はおそらく磨石・凹石類の時期的な位置を示唆しているものであろう。

他の石器は量も少なく，分布の仕方にも特に留意すべき点は認められなかった。

4．土偶・土製品

土偶（第90・91図，図版50・51）

全部で14点が出土した。遺構からの出土は2のみで，他は包含層出土である。

1は土偶の顔面部分である。左半部と顎の部分が欠損している。顔の下半部がすぼまる逆三角形を呈するようである。隆起線により，目・眉・鼻が表現されており，更に刺突により細かい表現が加えられている。

2は座った状態を表現する土偶で，7号土坑の出土の上半身と，A2－16区出土の下半身が接合したもの。顔・手足が欠損している。現存状態での高さは8cmほどである。蹲踞をしているか，右足を立て膝にしているようである。文様は沈線を横位に巡らせ，背面と腰に縄文帯を配し，間を磨り消して無文帯としている。

3は腰が広がる三角形の形状をとる胴部分。小さな粘土粒を貼り付けることにより，乳房を表現している。首の後ろ側にも小さな隆起がある。細かい縄文を地文に，条線をタスキ状に配している。条線は背中ではX字状になっている。

4は胴上半身のもので，右手部分が残っている。乳房は小隆起で表現され鳩尾の部分には縦に沈線が入る。背面は研磨され，肩から背中にかけて条線文が菱形に配されている。

5は胴部破片。沈線で，縄文による文様帯を区画するもの。

6～8は腕部片で，斜め下に手を開き手先の部分が外方へ反り返る形をとっている。6は沈線に細かい円形刺突を，7・8は沈線のみが施されている。

9～12は脚部片である。9は左足部と思われる，腰が横に張り出し足は垂直に立つ形をとる。文様は沈線が間隔をあけて巡らされているのみである。10も9と同様に腰の張った形態をとるもので，縄文を地文とし，腰と足先，側面部には沈線で無文帯が配されている。新しい溝からの出土である。11は中空土偶になるもので，足首状のくびれがあり，先端が半球状になっている。上部には縄文が施されている。12は端部で足首状にくびれるもので，下部が沈線で区切られ縄文が施文されている。

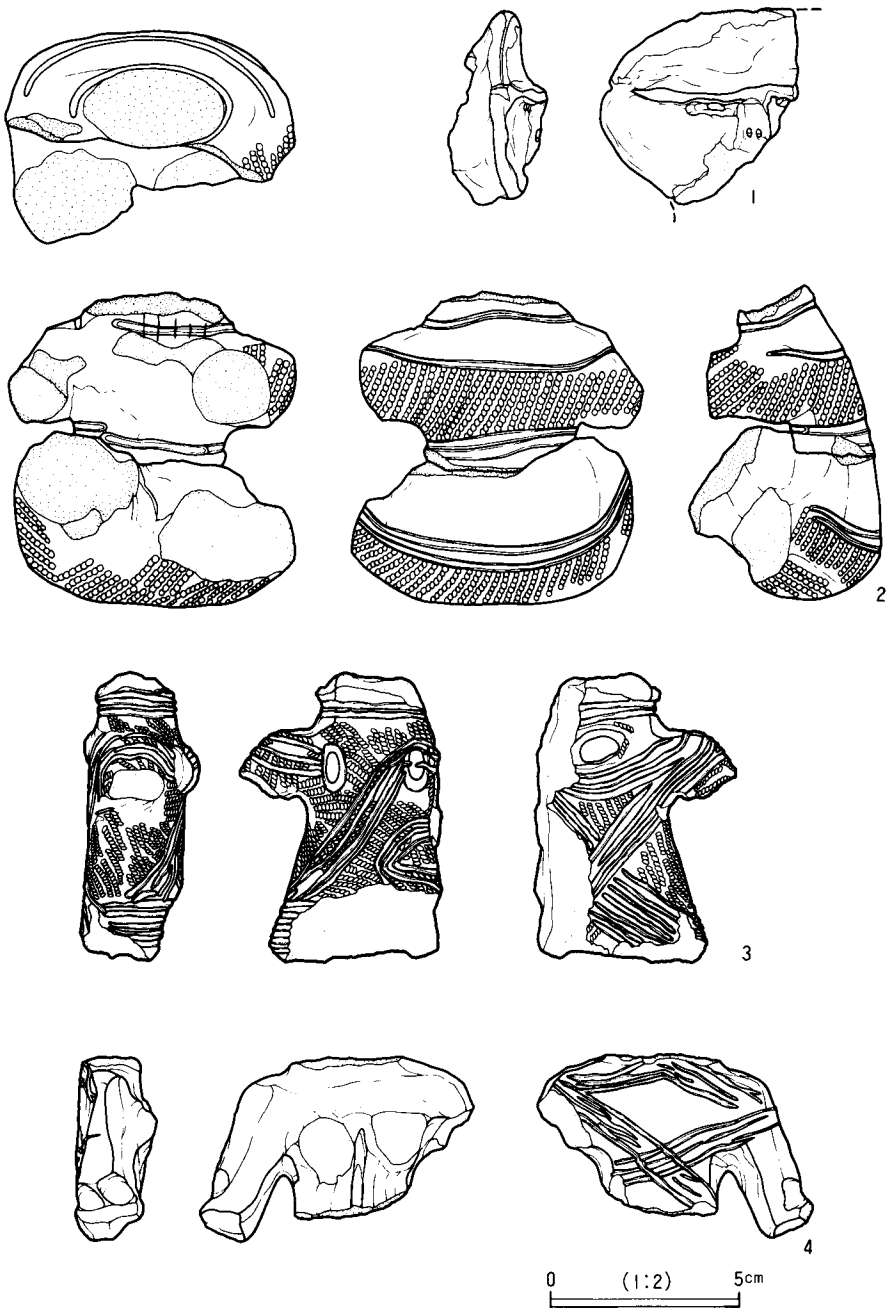
13は臀部の破片とみられるもので，細かい沈線文が幾重にも施されている。14は肩の部分で，沈線文がみられる。

特殊土製品（第92図，図版52）

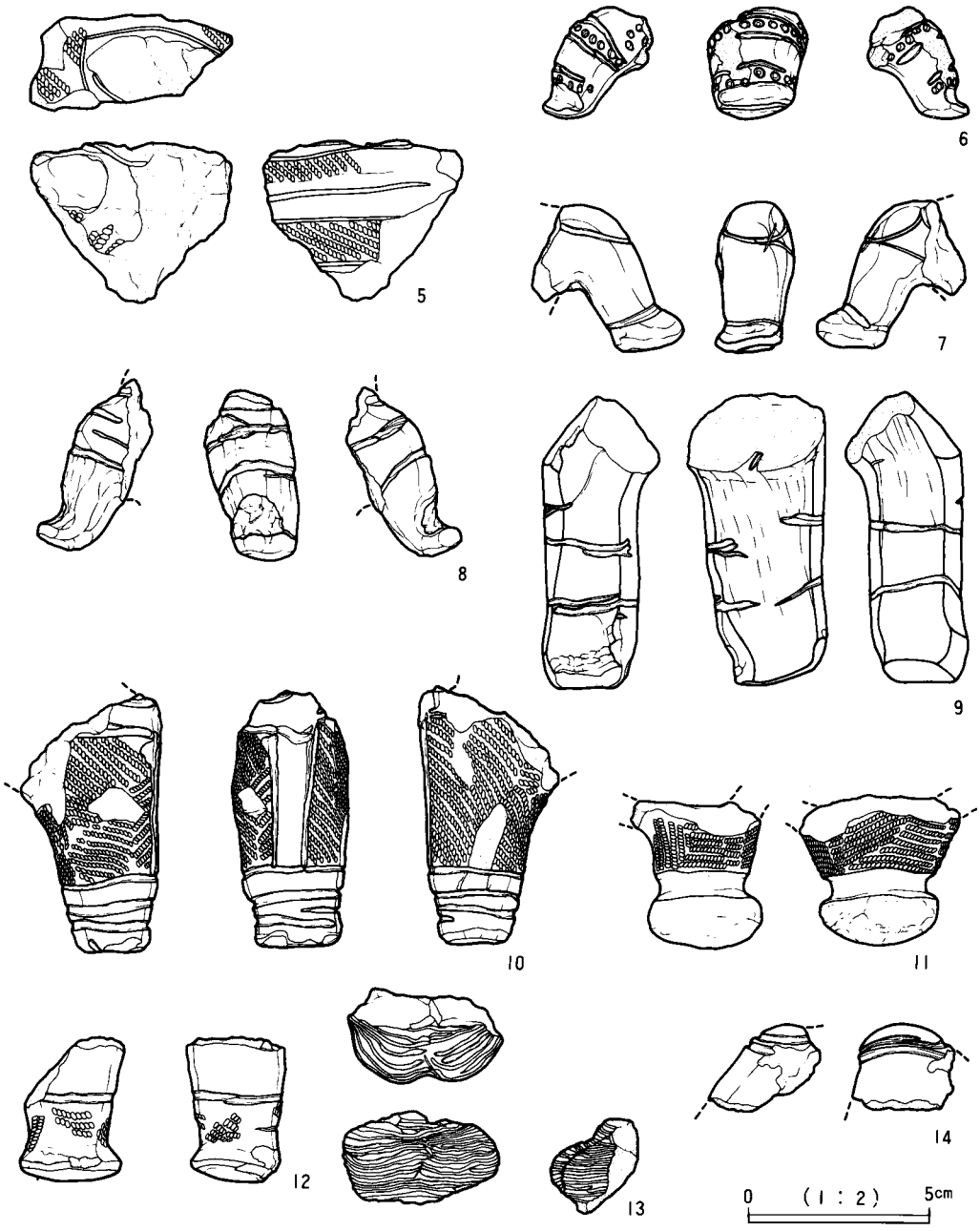
土器片錘や円板，板状土製品以外の土製品を一括した。

スタンプ形土製品（1）

径5.5cm×2.8cm，厚さ1.3cmの偏平な楕円板の一面に，径1.6cm，長さ3.5cmほどの円棒状のつまみをつけ，他面に直線，弧状，渦巻状沈線で土版様の抽象文の描かれるもの。柄部には長軸



第90図　土偶実測図(1)



第91図　土偶実測図(2)

に直交して小孔が穿たれている。

耳飾（2）

滑車形耳飾りの破片で，推定径約5cm，厚さ1.9cmほどになるもの。全体の三分の一程の破片である。大きな透かしの入る装飾面があり，わずかに刻み目を有する貼付線が残存している。また部分的に赤色顔料が付着している。

垂飾（3）

長さ2.4cm，幅・厚さとも1.4cmの涙滴形をなし，上部に小孔がある。表面にはＬＲの単節縄文が施されている。

棒状土製品（4）

かるく弧状に湾曲する棒状の土製品。現存長10.2cm。下部は巾3.2cm，厚さ1.3cmと偏平で，上端部に至り径2.8cmの円棒状となる。末端部は平坦に整形されている。中軸に沿って2箇所，両面から焼成前に穴が開けられている。外面に粗く削ったのみの調整が行なわれている。

有孔円板（5・6）

土器片を利用したもの。

5は長軸6.4cm，短軸6.3cmの不整円形を呈するもので，側縁の加工はごく一部が擦られているのみで，ほとんど粗割りのままである。中央には外面側から途中まで穿孔されるスリ鉢状の小孔が配されている。鋸歯状の文様が施されており，第IV群加曽利Ｂ式と思われる。

6は整った円形をなすもので，半欠品。径は5.9cmほどである。側縁がよく磨かれており，中央に穴が開けられている。穿孔は主に裏側から行なわれている。素材の土器には文様はなく，器面調整の擦痕がみられるのみである。

環状土製品（7～9）

中央に径が広い穴が配される円板。

7は推定外径5cm，内径1.5cmほどのもので，四分の一ほどが残存している。表面はよく研磨されている。玦状耳飾の断片のようにもみえる。

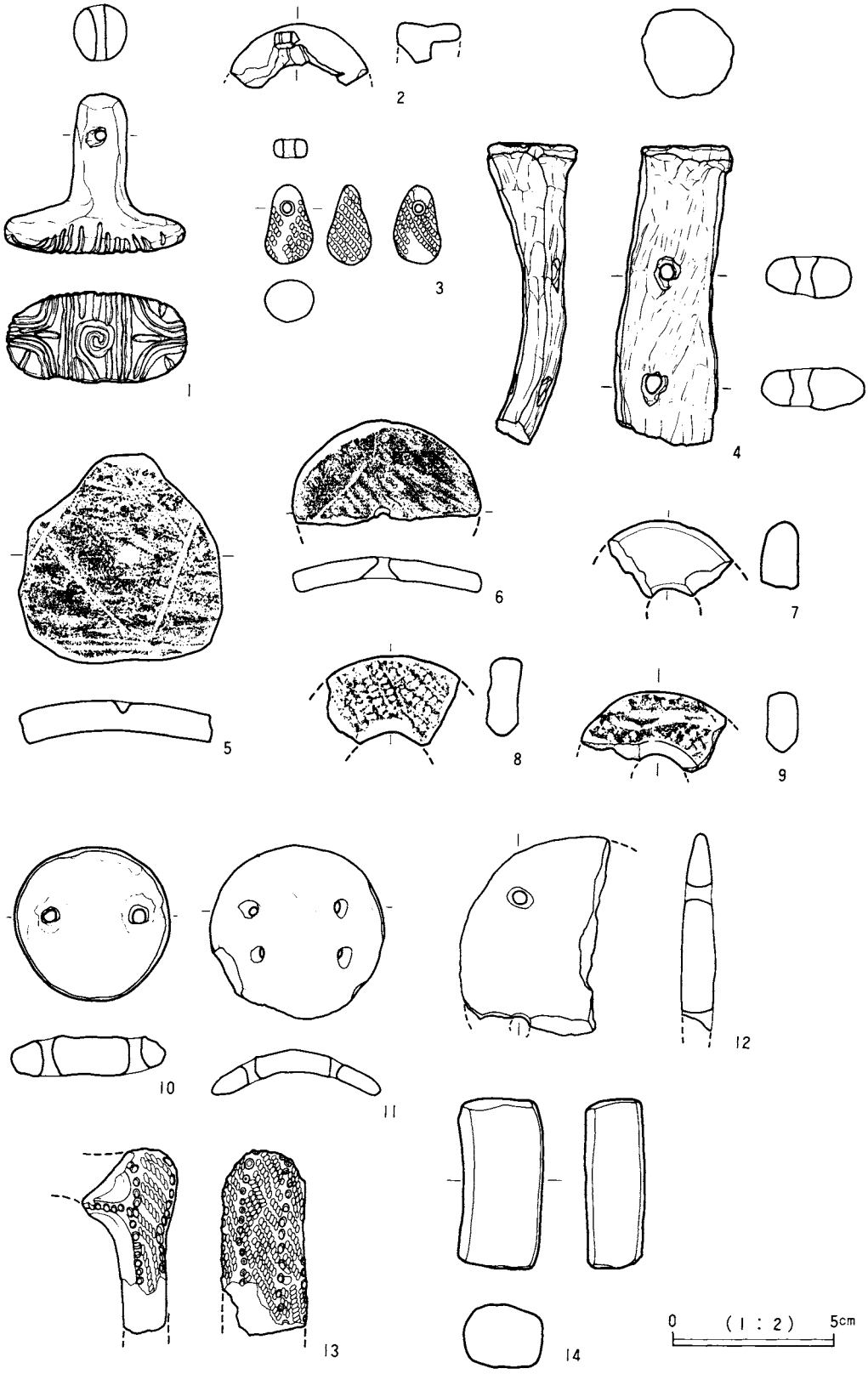
8・9は土器片を再利用したもので縁をよく磨って整形してある。8は外径6.8cm，内径2.5cm，厚さ1.0cm，9は外径5.5cm，内径0.9cm，厚さ0.9cmのもので，ともに残存度は四分の一である。ともに斜縄文が施された土器片が素材である。

蓋（10～12）

10は径4.8cm×4.7cm，厚さ1.1cmの円板状のもので，中軸線からやや片側によって2.7cmの間隔に一対の孔があけられている。

11は径5.3cm，厚さ0.6cmほどのもので，かるい半球状をなしている。2.7cmの間隔に2個単位で対になって孔があけられている。

12は7号埋甕炉跡中に出土したもの。推定径約7cm程，三分の一ほどが残存している。孔は



第92図　土製品実測図

縁に近い部分に２個配されている。

その他（13・14）

13はＬ字形に曲がる棒状を呈するもので，外面側には細かいＲＬの縄文が施され，細竹管による連続刺突文が長軸沿いに配されている。

14は101号土坑出土のもの。長さ5.1cm，巾2.5cm，厚さ1.9cm，重さ31.5ｇを測る。厚手の土器の口縁部を利用し，口唇を残し３辺を擦り込んで長方形に整形しており，その整形面は鋸で裁ち落とした様に直線的，平坦である。

土製円板（第93図，図版53）

土器片を円形に整形し，円板状にしたもの。縁部の加工の差によりＡ～Ｃの３類に分けて取り扱う。

Ａ類（１～15）

周縁がよく擦られ，略円形に整形されているもの。大きさは１が径3.1cm×2.8cmで最小，13が径5.1cm×4.8cmで最大であり，３cmから５cm弱の範囲に全て含まれている。11は周縁が斜めに擦られ，断面が台形をなしている。15は周縁が直線的に擦られ，長円形を呈している。

Ｂ類（16～19）

円形に粗割り整形後，縁の一部に擦られた痕跡を残すもので４点のみの出土である。径は４cmほどのものである。

Ｃ類（20～41）

円板状に周縁が粗割り整形を受けたのみのもの。径は約３cm強から５cm強であり，Ａ類に比して大き目である。また41は例外的に８cmを越えている。

各類の素材となった土器片の文様は部分的で，所属する群の判定が不確実なものが多いが，41は第Ｉ群の加曽利Ｅ４式，13，19，22，27，28，30，34，35，38については第IV群加曽利Ｂ式とされる。他のものもおそらく後期，しかもこの第５群土器に所属するものが多いと思われる。

土器片錘（第94図１～29，図版54）

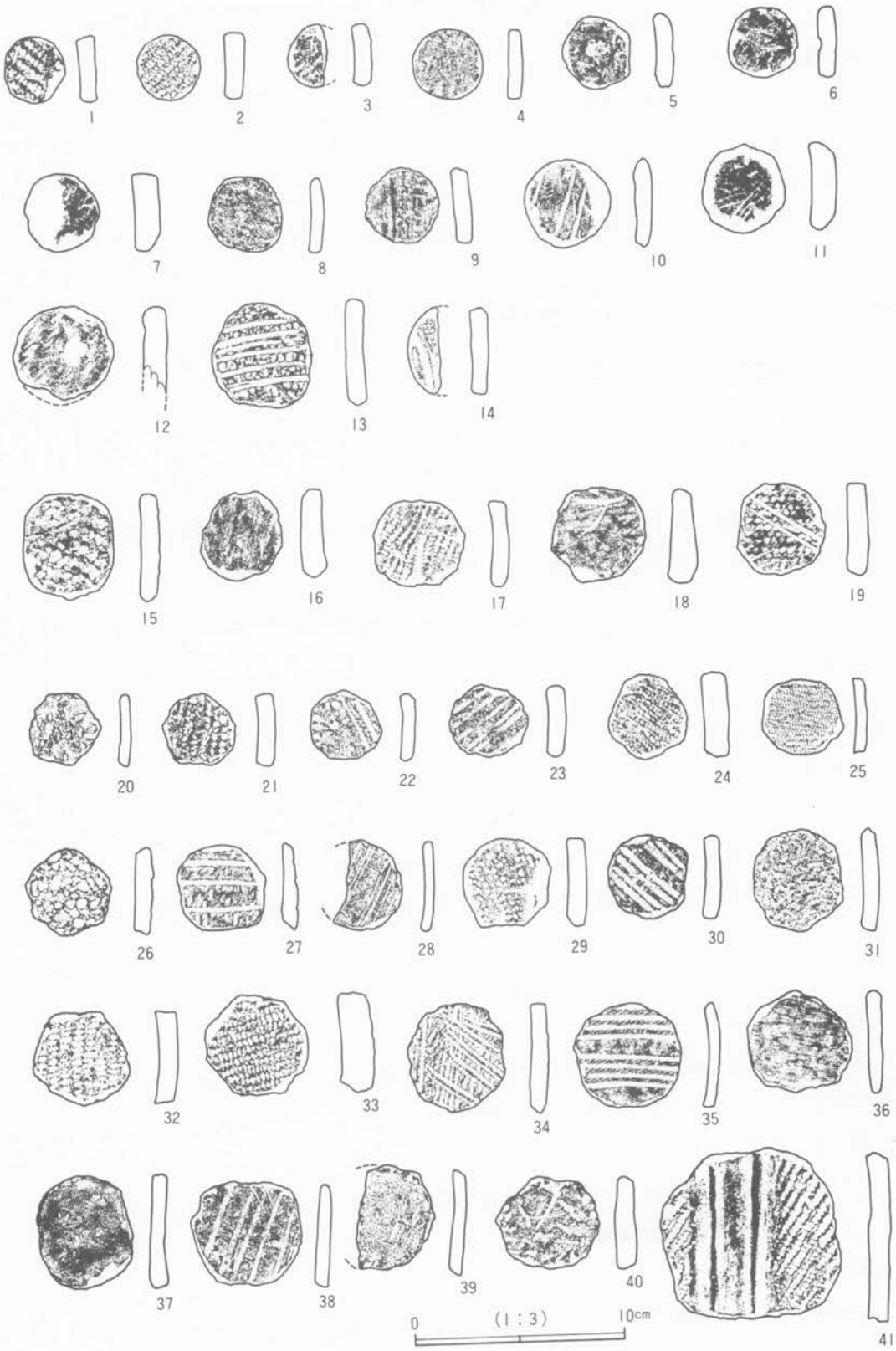
土器片を再利用した錘で，縁の一部が打ち欠かれ糸掛けの切り込みが入れられている。これを周縁部の加工の状況により，Ａ・Ｂの２類に分けた。

Ａ類（１～12）

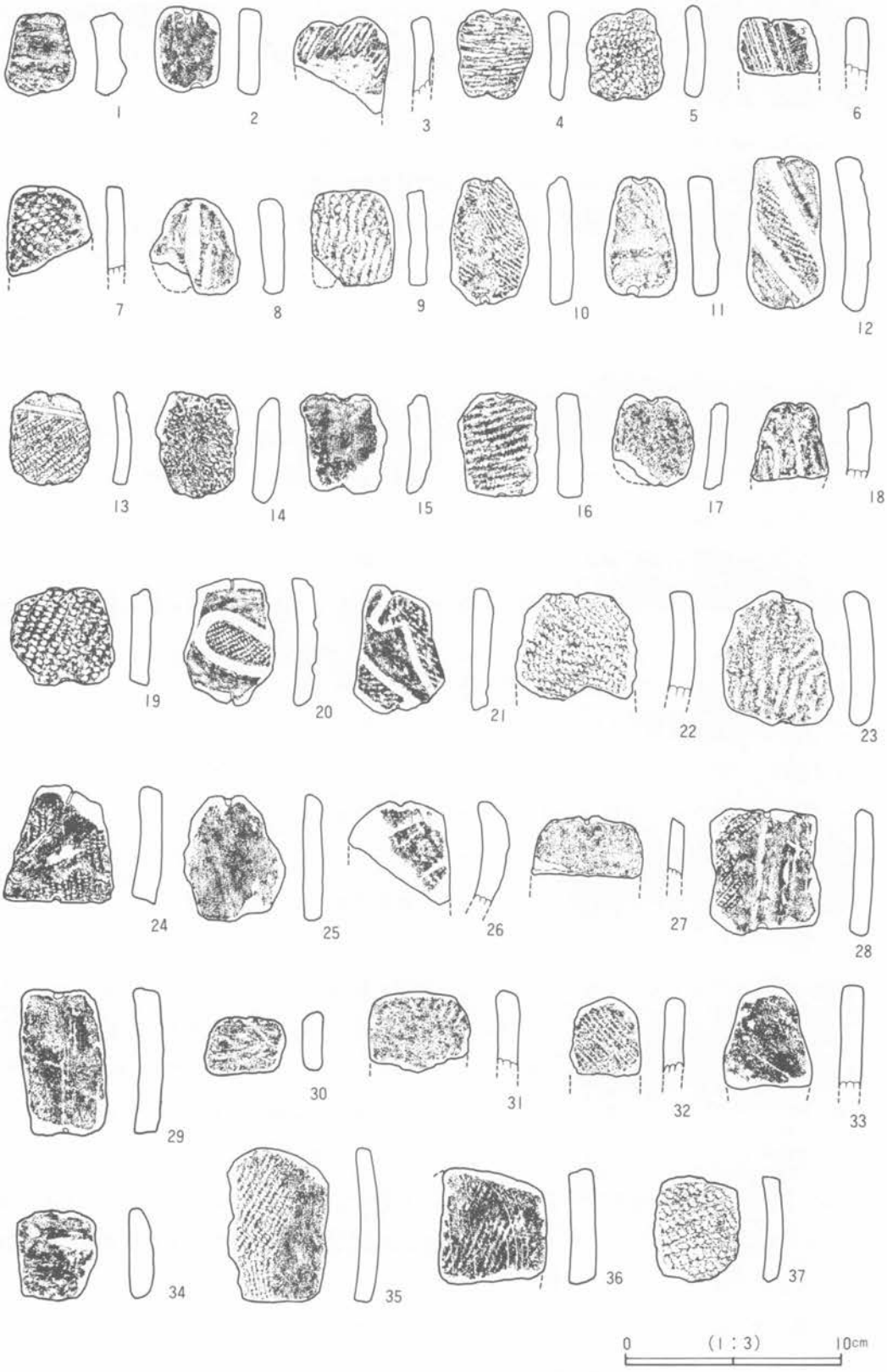
台形ないし長方形に整形されており，周縁が擦られ摩滅しているもの。１が長さ3.8cmで最小，12が長さ8.1cmで最大である。

Ｂ類（13～29）

周縁は粗く打ち欠かれたままで，切り込みだけを入れて製作されているもの。方形もしくは台形のものが多い。最小のものは17で長さ4.0cm，最大のものは29で長さ6.7cmである。



第93図　土製円板実測図



第94図　土器片錘，板状土製品実測図

素材の土器の時期は，1，11，24，28は第Ⅰ群加曽利ＥⅣ式，12，20，21は第Ⅱ群称名寺式である。22は第Ⅲ群堀之内式とみられる。第Ⅳ群加曽利Ｂ式以降のものはみられない。

板状土製品（第94図30～37，図版54）

土器片の周縁が擦られて，板状にされているもので，円板状以外のもの。長方形を呈し薄手の土器片を素材にするものが主。土器片錘の未製品の可能性もある。

所属する時期の判明するものは，35が加曽利ＥⅣ式，36が堀之内式である。37は加曽利ＥⅣ式か称名寺式とみられる。

小　結

土偶

計14点が出土した。いずれも破損した状態で，完形品はなかった。分布はＡ１・Ａ２区に集中しており，ほぼ第Ⅳ群加曽利Ｂ式の土器及び遺構の分布と重なっている。特に注目されるものは，第91図２に図示した座った状態を示す土偶である。この土偶は７号土坑の覆土から出土した上半身と，Ａ２－16グリッド出土の下半身が20cm離れて接合している。土偶は人為的に破損され廃棄される例が一般的であるが，この例も，わざわざ分断して別々に棄てられた可能性が高い。

またこの土偶のとっている姿勢も特徴的で，おそらく立て膝か蹲踞をしていると思われる。蹲踞土偶の類例は東北地方を中心に知られているが，関東地方では稀であり，変形的だが東京都宮田遺跡で中期に乳を飲ませ膝を曲げて横ずわりする土偶が知られる程度であろう。実見はしていないが市川市曽谷貝塚にも類例があるとのことである。

スタンプ形土製品

第92図１で示したものはいわゆるスタンプ形土製品である。文様は沈線で土版に似た抽象文を描くもので，両端に手足の表現のような弧状文がみられる。

類似の例は佐原市大倉南貝塚２点出土しているが，本例よりさらに抽象的な文様である。西村正衛氏はスタンプ形土製品について「加曽利Ｂ期に流行した装身具と考えられる」と指摘している。本例も加曽利Ｂ期のものであろうか。しかしながら文様的には土版の文様との共通性が強く感じられる。土版は晩期に特徴的な遺物であるので，関連性を考えると本例はもう少し新しく位置づけてもよいのではなかろうか。

用途に関しては各種いわれているが，少なくとも単なる装身具ではないであろう。土版は護符・呪いの道具としての用途が考えられているが，本例は文様的にみて，また携帯用の紐を通す穴もある点，護符とよぶにふさわしいといえる。

この種の遺物の用途を断定することは，なかなか困難なことである。今後の類例の増加を期待したい。

土製円板・土器片錘について

土製円板は計41点が出土した。包含層ではＡ１・Ｂ１区及びＡ２区北半の地域が分布域である。この状況は加曽利Ｂ期遺構の分布と重なっており，それも１号住居址の周辺に多い印象を受ける。土製円板は後期に特徴的な土製品の一つとされるが，本遺跡例も本文で述べたように後期，それも加曽利Ｂ期のものが主体と思われる。

ただＡ３－51区に所在する92・93・96号土坑（92・96号は加曽利ＥIV期）から１・14・33・41の計４点が出土している点は異例である。92・93号では土器片錘も伴う。周辺は加曽利ＥIV期の土器・遺構の分布域であり，この４点もその時期に所属が求められよう。

大きさは径３cm～５cmのもので，重量は６ｇ～28ｇの間にほとんどが入る。平均は19.4ｇである。ただ41は96.9ｇと特異である。Ａ類とした周縁のよく擦られるものと，Ｂ類の一部擦られるものを加えた数と，Ｃ類の全く荒割のものとはほぼ同率である。小型のもので比較した場合，Ｃ類がＡ類よりも一回り大き目である点から判断して，Ｃ類はＡ類に加工するための素材である可能性もあろう。

土器片錘は29点，板状土製品は８点の出土。Ａ１区～Ａ４区まで散漫的に分布している。加曽利ＥIV期・称名寺期の土器・遺構の分布状況と重なる。素材とされた土器は第Ｉ・II群の加曽利ＥIV・称名寺式が主体であり分布状況とよく一致する。

形状が長幅比7.3～8.8の長方形ないし台形のものが７割を占める。重量的には14ｇ～18ｇが５点（24％），21ｇ～30ｇが９点（43％），35～38ｇが３点（14％）に集中がみられる。25ｇ前後が最多である。

土製円板と土器片錘・板状土製品は錘りとしての用途が最も有力である。形態差は時期差と考えられる。ただし土製円板では小型化し，重量が10ｇ前後のものが半数を占める。この変化の理由は加曽利Ｂ期に至り，網猟の対象，方法等に変化を生じたためであろう。

参考文献

野口義磨　「土偶の変遷」『古代史発掘３　土偶芸術と信仰』　講談社　1974年
水野正好篇　「土偶」『日本の原始美術』５　講談社　1979年
小野美代子・江坂輝彌　『土偶の知識』　考古学シリーズ　18　1984年
西村正衛　「千葉県佐倉市大倉南貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究―貝塚を中心として―』早稲田大学出版部　1984年

第9表　土製品・土偶出土地点

土偶

No.	部　位	出土地点	備　考
1	顔　面	A 1 −45 778	
2	胴　部	076　A2−16 7 ＋ 211	7号土坑とグリット出土の接合
3	〃	A 1 −87 1082	
4	胴　(上)	A 1 −15 7	
5	〃	A 2 −83 243	
6	腕　部	A 2 −49 920	
7	〃	A 1 −59 137	
8	〃	A 2 −12 13	
9	脚　部	A 2 −28 819	
10	〃	B 1 溝中 1	
11	〃	A 1 −37 1266	
12	〃	A 1 −37 1265	
13	臀　部	A 1 −37 1003	
14	肩　部	A 2 −77 1013	

土製品

No.	名　称	出土地点	備　考
1	スタンプ形土製品	A 1 −11 359	
2	耳　飾	080 1	撹乱(B1-11)
3	垂　飾	B 1 −40 113	
4	棒状土製品	A 3 −42 148	
5	有孔円板	A 3 −62 313	
6	〃	152 1	撹乱(A4-27)
7	環状土製品	A 3 −67 587	
8	〃	014 6	41〜43号土坑
9	〃	A 1 −86 273	
10	蓋	A 1 −72 434	
11	〃	A 2 −13 428	
12	〃	153 3	7号埋甕炉跡
13	把手？	A 1 −97 1026	
14	土　板	063 5	101号　土坑

第10表　土製円板計測表

No	分類	計測値 長（cm）	巾（cm）	厚（cm）	重（g）	出土地点	備考
1	A 類	3.1	2.8	0.9	8.7	052/1	92号土坑
2	↓	3.1	3.0	0.9	10.9	A1－97	
3		3.0	(1.9)	1.0	(5.5)	047/1	撹乱(A3－43) 半欠
4		3.4	3.4	0.7	9.1	A4－53/41	
5		3.5	3.2	0.9	10.4	074/1	15号土坑
6		3.4	3.3	0.8	11.5	B1－30/132	
7		3.7	3.5	1.3	(17.1)	A2－27/804	一部欠
8		3.5	3.5	0.4	8.7	A2－45/127	
9		3.5	3.5	0.5	11.1	A1－46/815	
10		4.1	4.1	0.7	12.4	077/4	1号住居跡
11		4.2	3.9	1.1	19.3	A5－66/4	
12		(4.4)	4.9	0.9	(25.5)	A1－97/1027	欠
13		5.1	4.8	0.6	26.5	142/84	撹乱(A3)
14		(4.0)	1.6	0.6	(6.2)	054/4	93号土坑　欠
15	↓	5.0	4.2	0.8	25.1	A2－33/236	
16	B 類	4.1	3.8	1.1	20.2	A2－87/914	
17	↓	4.0	4.4	0.7	18.7	A2－02/15	
18		4.4	4.5	1.3	27.3	A2－45/8	
19	↓	4.3	4.2	0.8	22.1	B1－20/44	
20	C 類	3.3	3.4	0.3	6.9	A1－72/5	
21	↓	3.3	3.4	0.8	11.3	B1－40/113	
22		3.2	3.4	0.4	7.1	A2－11/766	
23		3.3	3.8	0.8	12.8	B1－50/114	
24		3.9	3.7	1.1	19.1	090/7	20～26号土坑
25		3.5	3.8	0.4	9.8	076/1	7～11号土坑
26		4.0	4.0	0.9	15.4	079/1	撹乱(B1－01・11)
27		3.9	4.2	0.7	13.9	079/1	撹乱(　〃　)
28		4.2	(3.3)	0.4	(7.0)	A1－79/1310	欠
29		4.1	4.2	0.9	18.9	A1－31/119	
30		3.9	3.8	0.7	13.5	A2－12/13	
31		5.2	4.2	0.7	18.4	076/10	7～11号土坑
32		4.3	4.5	1.1	22.7	062/20	99・100号土坑
33		4.6	4.9	1.5	40.0	054/4	93号土坑
34		5.1	4.6	0.9	27.1	A1－37/1250	
35		4.8	5.1	0.5	18.2	A1－96/447	
36		4.8	4.9	0.6	19.4	A1－88/1166	
37		5.2	4.5	0.7	21.0	A1－41/383	
38		4.8	5.2	0.6	20.9	A1－37/958	
39		4.9	(3.7)	0.6	(14.2)	A1－92/592	欠
40		4.3	4.9	0.9	22.5	B1－42/131	
41	↓	8.0	8.6	1.2	96.9	056/212	96号土坑

第11表　土器片錘計測表

No	分類	形状	計測値 長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	重(g)	縦横比(巾/長)	出土地点	備考
1	A類	台形	3.8	3.3	1.4	17.7	0.87	004 54	106号土坑
2	↓	長方形	4.0	3.0	1.0	15.5	0.75	A3－32 43	
3		—	(4.6)	4.5	1.0	(19.3)	—	039 2	撹乱(A2-92)欠
4		台形	4.2	3.5	0.9	15.9	0.83	A3－26 345	
5		長方形	4.3	3.5	0.8	15.9	0.81	A3－71 273	
6		長方形？	(2.8)	(3.7)	1.1	(14.8)	—	A3－62 270	半欠
7		—	(4.2)	(3.9)	0.9	(12.8)	—	074 2	15号土坑　欠
8		台形	4.9	(4.1)	1.1	(18.3)	—	004 23	106号土坑 一部欠
9		長方形	4.4	3.8	0.9	(19.3)	0.86	112 2	70号土坑一部欠
10		不整台形	5.8	3.6	1.0	24.7	0.62	002 20	103号土坑
11		台形	5.5	3.3	1.3	27.3	0.6	063 5	101号土坑
12	↓	長方形	8.1	3.6	1.2	38.0	0.44	A2－03 336	
13	B類	楕円形	4.2	3.7	0.6	14.0	0.88	054 4	93号土坑
14	↓	不整長方形	4.8	3.8	1.1	23.4	0.79	A2－61 287	
15		長方形	4.5	3.8	1.1	21.7	0.84	044 27	83・84号土坑
16		不整長方形	4.7	3.7	1.1	25.9	0.78	052 1	92号土坑
17		長方形	4.0	3.7	0.9	(15.8)	0.93	113 1	撹乱（A2-55・56）一部欠
18		台形？	(3.6)	(3.5)	1.1	(14.2)	—	020 18	47号土坑　欠
19		方形	4.5	4.8	0.9	30.1	1.07	054 2	93号土坑
20		不整台形	6.3	4.2	0.9	25.9	0.67	A1－61 157	
21		不整台形	5.9	4.3	1.0	21.7	0.73	A3－42 482	
22		長方形？	(4.8)	(5.6)	1.1	(34.8)	—	A2－61 639	半欠
23		台形	6.1	5.0	1.2	33.0	0.82	A2－36 489	
24		台形	5.6	4.9	1.1	35.5	0.88	A2－02 15	
25		台形	6.3	4.6	0.9	29.5	0.73	A2－53 570	
26		—	(4.7)	(4.7)	1.2	(23.6)	—	A4－25 3	欠
27		—	(2.8)	(5.1)	0.7	(13.0)	—	A2－36 64	欠
28		長方形	5.7	5.0	1.0	37.5	0.88	A2－45 7	
29	↓	長方形	6.7	3.8	1.2	44.6	0.57	A1－47 1236	
30	板状土製品	長方形	2.6	3.8	0.9	10.2	0.68	A1－41 58	
31	↓	長方形	(3.7)	4.8	1.2	(22.5)	—	020 24	47号土坑　欠
32		楕円形？	(3.7)	(3.3)	1.0	(13.0)	—	A2－33 236	欠
33		台形？	(4.8)	4.1	1.0	(21.5)	—	114 15	撹乱A2-66・76 欠
34		台形	4.2	3.7	1.1	21.2	0.88	A1－68 760	
35		長方形	7.1	(4.7)	0.9	(34.5)	—	A2－75 617	一部欠
36		—	(5.4)	(5.0)	1.3	(34.1)	—	050 3	85号土坑　欠
37	↓	長方形	4.8	3.9	0.7	20.1	0.81	153 33	7号埋甕炉

5．自然遺物

95号，105号，107号，109号土坑出土の動物遺存体

(1) 資料の方法

a．資料の採集方法

上記4基の土坑はいずれも貝層のみとめられた遺構で，動物遺存体資料はコラムサンプルを水洗選別して得たものである。

各遺構におけるコラムサンプルの採取地点は，遺構のほぼ中央部に1地点ずつ設定されている(第25図，第26図)。採取地点の大きさは109号跡をのぞくと，いずれも約20cm×20cmの正方形であるが，109号跡だけは約30cm×25cmの長方形になった。コラムサンプルはこの面の鉛直方向に存在する遺構内堆積物であるが，便宜上，上位のものから約5cmごとの厚さで連続的にカットし，得られた体積約20cm×20cm×5cm＝2,000cm³を単位サンプルとして，水洗選別の諸工程を各単位ごとに行った。ただし，109号土坑の単位サンプルだけは体積が約30cm×25cm×5cm＝3,750cm³となった。なお，単位サンプルには，採取した各地点ごとの相対深度(0～5cm，5～10cm……)が発掘調査時に付せられており，整理時もそれを踏襲したが，報告書中では相対深度表示を各地点ごとの採取順を示す通し番号(①，②，③……)に改めた。

サンプルの水洗には，メッシュ寸法が9.52mm，4.0mm，2.0mm，1.0mm，直径200mmの4種類の黄銅製試験フルイを用いて行った。各メッシュ面上の分離物は自然乾燥を待って，この中から肉眼的に識別しうる資料を採集した。この作業はきわめて煩雑で神経を消耗する作業であるが，その指導は横山が行った。

採集資料のうち微細なものの同定については，WILD社製実体顕微鏡M-8型を用いて約3～5倍に拡大して筆者が行った。

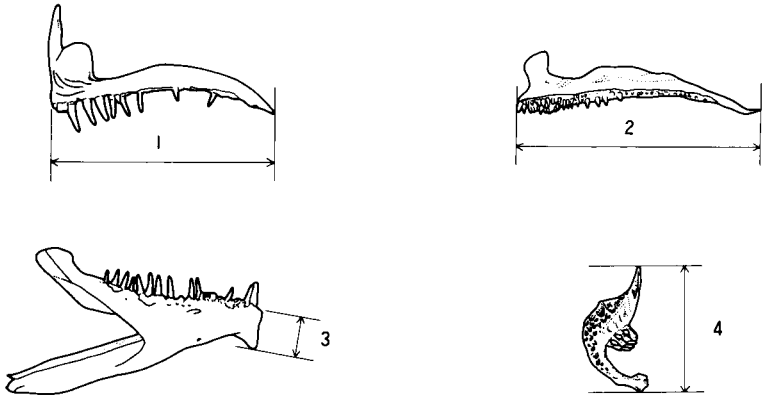
なお，上記4基の土坑以外にも75号土坑で貝層がみとめられたが，コラムサンプルを採取した記録がないので，その内容については本報告の対象から外した。

b．集計および計測方法

貝類資料のうち，腹足綱については体層を保存する資料を集計対象とし，殻径および殻高を計測した。二枚貝綱については殻頂を保存する資料を左右の殻別に集計し，殻長を計測した。二枚貝綱の集計は左右殻いずれか多い方の側の頻度数を集計した。

魚類資料は，内臓骨，鰭棘については関節部を保存するものだけを集計した。脊椎骨は椎体を1/2以上保存するものを集計したが，頭骨，胸帯，腰帯を構成する骨は現状では同定がむずかしいものが多く，その大部分が集計の対象外におかれた可能性が高い。計測は主上顎骨長，前上顎骨長，咽頭骨長を計測し(第95図)，計測部が破損しているものは白紙上に原形を復原して

計測を行った。なお，計測には田島製作所製ダイヤル式カーボンファイバーノギス DIAL-15を使用した。



第95図　魚類遺骸計測部位

1：前上顎骨長　2：主上顎骨長　3：歯骨高　4：咽頭骨長

(2) 同定結果

調査した4基の土坑のコラムサンプル中からいままでに同定した動物は，第12表に示す腹足綱9種類，二枚貝綱11種類，甲殻綱1種類，軟骨魚綱2種類，硬骨魚綱13種類，両生綱4種類，哺乳綱3種類に分類される。以下では各遺構別に動物遺存体の同定結果を示し，各動物種の最小個体数を算定する。

なお，各動物遺存体の同定記載については，3項に一括して述べた。

第12表　中台貝塚産出動物一覧

軟体動物	
腹 足 綱	
ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum* (Lesson)
イシダタミガイ	*Monodonta labio confusa* Tapparone-Canefri
クボガイ	*Chlorostoma argyrostoma lischkei* (Tapparone-Canefri)
クマノコガイ	*Chlorostoma xanthostigma* (A. Adams)
ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke)
ツメタガイ	*Neverita (Glaussaulax) didyma* (Röding)
イボニシ	*Reishia clavigera* (Küster)
レイシガイ	*Reishia bronni* (Dunker)
有肺亜綱種不明	Pulmonata order indet.

二枚貝綱

ムラサキインコガイ	*Septifer (Mytilisepta) virgatus* (Wiegmann)
ヒメイガイ	*Septifer (Mytilisepta) keenae* Nomura
マガキ	*Crassostrea gigas* (Thunberg)
イタボガキ？	cf. *Ostrea denselamellosa* Lischke
ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime
ウネナシトマヤガイ	*Trapezium (Neotrapezium) liratum* (Reeve)
チョウセンハマグリ	*Meretrix lamarcki* Deshayes
ハマグリ	*Meretrix lusoria* Röding
アサリ	*Ruditapes philippinarum* (Adams & Reeve)
オキシジミ	*Cyclina sinensis* (Gmelin)
フジノハナガイ	*Chion semigranosus* (Dunker)

節足動物

甲 殻 綱

フジツボ類

脊椎動物

軟骨魚綱

サメ目種不明	Lamniformes fam.indet.
軟骨魚綱種不明	Chondrichthyes order indet.

硬骨魚綱

マイワシ	*Sardinops melanostictus* (Temminck & Schlegeli)
ニシン科種不明	Clupeidae gen & sp. indet.
カタクチイワシ	*Engraulis japonicus* (Houttuyn)
タナゴ亜科種不明	Rhodeinae gen & sp. indet.
ギンブナ	*Carassius auratus langsdorfii* Temminck & Schlegeli
ギバチ	*Pseudobagrus aurantiacus* (Temmink & Schlegeli)
ウナギ	*Anguilla japonica* Temminck & Schlegeli
ボラ科種不明	Mugilidae gen. & sp. indet.
アジ亜科種不明	Caranginae gen. & sp. indet.
スズキ属種不明	*Lateolabrax* sp.
クロダイ属種不明	*Acanthopagrus* sp.
マハゼ属種不明	*Acanthogobius* sp.
真骨類種不明	Teleostei order indet.

両 生 綱

ヤマアカガエル	*Rana ornativentris*
アカガエル属種不明	*Rana* sp.
モリアオガエル	*Rhacophorus arboreus*
アオガエル属	*Rhacophorus* sp.

哺 乳 綱

アカネズミ属	*Apodemus* sp.
イヌ科種不明	Canidae gen. & sp. indet.
シカ	*Cervus* sp.

(a) 95号土坑

本号跡のコラムサンプルは，確認面から相対深度－35cmまでの堆積物を採取したもので，7単位のサンプルによって構成される(第25図)。本号跡の覆土からは約340点の土器片が出土したが，横山によるとその約90%が加曽利EⅣ式に比定される。これらの土器片は覆土中の広い範囲に散らばって分布しており，接合資料のなかには出土地点が覆土の上層と下層にまたがるものがある。このような事実にもとづくと，本号跡覆土の堆積時期は縄文時代中期末葉とするのが妥当となる。なお，以下の各号跡覆土の堆積時期の判定はいずれも主として横山の考えに従ったものである。

また，今回の各土坑から同定した動物の捕獲時期は，覆土の堆積時期と考古学的な時間差をもたないものと仮定した。

貝類

採取した7単位のサンプルからは第13表に示す腹足綱2種類，二枚貝綱4種類が同定された。同表上欄にはサンプル番号とサンプル採取地点の相対深度を示し，また右欄には各貝種別に同定頻度の合計と最小個体数およびその相対頻度を示した。この方式は，貝類遺骸の同定結果を示す以下の各表に共通する。

この表から明らかなように，資料はサンプル①をのぞく各サンプルから出現している。上記6種類の貝のうちではチョウセンハマグリの出現頻度が最も高く，最小個体数の合計は1,500を越え，全体の99%以上を占める。したがって，本種の単位体積あたりの出現頻度の大小が本号跡内貝層の密度を決めていると考えられる。

第13表　95号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果

種名		サンプル番号 サンプル深度(単位-cm) ① 0～5	② 5～10	③ 10～15	④ 15～20	⑤ 20～25	⑥ 25～30	⑦ 30～35	合計 資料数	最小個体数	同相対頻度(%)
ダンベイキサゴ						1			1	1	0.06
腹足綱種不明						1			1	1	0.06
ウネナシトマヤガイ	右								・	1	0.06
	左				1				1		
ムラサキインコガイ	右								・	1	0.06
	左				1				1		
チョウセンハマグリ	右		479	436	182	83	335	40	1,555	1,555	99.49
	左		501	440	167	77	329	33	1,547		
フジノハナガイ	右		4						4	4	0.26
	左		2	1					3		
小計			986	877	351	162	664	73	3,113	1,563	99.99
有肺亜綱種不明				+	+	+			・	・	・

+：稀れ　++：やや多い　+++：非常に多い

脊椎動物

本号跡のコラムサンプルから同定した脊椎動物遺存体の同定結果は第14表のとおりで，硬骨魚綱7種類，哺乳綱1種類が同定された。表の上欄にはサンプル番号(①，②，③……)とサン

プルの相対深度，そして各サンプルごとに資料を分離したメッシュ寸法(a～d)を示した。これらの方式は脊椎動物の同定結果を表わす各表に共通する。

資料は，貝類遺骸と同様にサンプル①をのぞく各サンプルから出現するが，貝類の出現頻度の低いサンプル④～⑤で出現頻度が最も高い。資料の大部分が魚類である。魚類は目以下の同定が困難なものをのぞくと，スズキ型椎体の頻度が最も高く，サンプル②～⑥まで連続して出現した。スズキ属に同定される資料はサンプル③～④と⑦に出現しており，両者の資料の出現傾向はおおよそ類似する。これについでコイ科資料の出現頻度が高く，サンプル②～⑦まで連続して出現した。

第14表　95号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果

動物名・同定部位		サンプル番号 サンプル深度および水洗メッシュ寸法																								合計
		① 0～5cm				② 5～10cm				③ 10～15cm				④ 15～20cm				⑤ 20～25cm				⑥ 25～30cm				⑦ 30～35cm				
		a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d	
ギンブナ	an_R												1																	1
	ph																				+									+
コイ科種不明	op_L						1												1											2
	3rd											1	1																	2
	pca																			1				1						2
	cau																1			1	2			2						6
	sp																				1							1		2
ウナギ	pca															2	2													4
	cau																1			2				1						4
ボラ科種不明	cau																							1						1
スズキ属	mx_R																1													1
	mx_L											2																1		3
	d_R											1																		1
	an_L															1														1
	ot_R															1														1
	pop_R																		1											1
スズキ型	pca							1			1	4				1			2		1									10
	cau							3								2	1			1				2						9
真骨類種不明	qu																			1										1
	pop														1															1
	op																											1		1
	tem															1														1
	sp							1				1		1		4														7
	int											1				1			1	1				1						5
	rb							1	2			4	1		+	3	6		2	2	1			4	2			5	3	36
	ce							1	1			1	1		1	5	3			5	7			3	5		1			34
	sc								r				r							r	r			r	c			c	r	•
哺乳綱 食肉目種不明	p?						1																							1

an：角骨　cau：尾椎椎体　ce：椎体　d：歯骨　int：担鰭骨　mx：主上顎骨　op：主鰓蓋骨　ot：耳石
pop：前鰓蓋骨　qu：方骨　rb：肋骨　sc：鱗　sp：鰭棘　tem：後側頭骨　L：左　R：右　3rd：第3脊椎
＊a：9.52mmメッシュ分離資料　b：40 mmメッシュ分離資料　c：2.0mmメッシュ分離資料　d：1.0mmメッシュ分離資料
以下各表同じ
＊r：稀れ　c：やや多い　v：非常に多い
＊＋：集計対象外の資料

最小個体数の算定　ギンブナはサンプル③と⑤で角骨と咽頭骨が1点ずつ出現した。属以下の種同定が現状では困難なコイ科資料は，サンプル②～⑦まで連続して出現するが，本号跡からはギンブナ以外のコイ科が同定されないこと，これらの資料は現生標本とは形態的特徴に矛

盾がないことなどからギンブナに同定される可能性が強い。したがって，もしこれらをすべてギンブナに由来するものと考えると，このスポットにおけるギンブナ資料はサンプル④を境にして少なくも2群に分れて堆積していた可能性が高く，その最小個体数はサンプル③に出現した第3脊椎と咽頭骨にもとづいて3に算定される。ウナギはサンプル④～⑥に連続して椎体が出現した。サンプル④の腹椎には大きさに若干相違があり，それぞれ別個体に由来する可能性があるが，現状では明確に判別することが困難であるので，最小個体数は1としておく。ボラ科も1である。スズキ属はコラムサンプル中層付近と最下層に分れて出現したが，スズキ型椎体がスズキ属に由来するとすれば，上層～下層まで連続してスズキ属資料が出現したことになる。しかし，スズキ属資料はサンプル④に出現した耳石をのぞくと，いずれも小形で個体識別が困難であるので，最小個体数は左主上顎骨の採集数3と耳石の採集数にもとづき4とした。なお，サンプル③に出現した歯骨の歯骨高は2.0㎜である。真骨類は，サンプル⑤に出現した方骨が，上記のいずれの魚種にも属さないので，最小個体数1を算定しておく。

食肉目の遊離歯はイヌ科のものと推定されるが，個体数は1である。

(b). 105号土坑

本号跡のコラムサンプルは11単位のサンプルによって構成される。覆土中からは約30点の土器片が出土したが，その約82%が加曽利EⅣ式に比定される。これらの土器片は覆土上層～下層にわたって広範囲に分布するので，覆土の堆積時期は縄文時代中期末葉と推定される。

第15表　105号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果

種名		サンプル番号 サンプル深度(単位~cm) ① 0～5	② 5～10	③ 10～15	④ 15～20	⑤ 20～25	⑥ 25～30	⑦ 30～35	⑧ 35～40	⑨ 40～45	⑩ 45～50	⑪ 50～55	合計 資料数	最小個体数	同相対頻度(%)
ダンベイキサゴ		1	1					9	9			1	21	21	1.56
ウミニナ		11	14	5	2								32	32	2.37
ツメタガイ									1				1	1	0.07
イボニシ									2				2	2	0.15
レイシガイ								1					1	1	0.07
マガキ	右	8	16	38	5			1	7	3	1		79	79	5.86
	左	16	13	29	5				6	4			73		
チョウセンハマグリ	右	23	5		38	247	386	375	96	11	3	3	1,187	1,187	88.06
	左	20	2		45	229	383	375	102	7	3	3	1,169		
ハマグリ	右	10											10	14	1.04
	左	14											14		
ハマグリ属	右	6	2										8	8	0.59
	左	4	2										6		
アサリ	右							1					1	1	0.07
	左						1						1		
オキシジミ	右								1				1	1	0.07
	左												・		
フジノハナガイ	右												・	1	0.07
	左		1										1		
小計		113	56	72	95	476	770	762	224	25	7	7	2,607	1,348	99.98
有肺亜綱種不明			+	+	+	+	+	+	+	+			・	・	・
フジツボ科種不明										77			77	・	・

貝類その他

11単位のサンプルからは腹足綱5種類，二枚貝綱7種類，このほかに有肺亜綱，甲殻綱が同定された(第15表)。出現頻度の合計ではチョウセンハマグリの頻度数が最も多いが，本種が顕著に優占するのはサンプル⑤～⑧で，サンプル②～③ではマガキの方が多く出現した。第26図の土層断面をみると，前者のサンプルはハマグリ純貝層，後者はカキ混土貝層に相当する層準のサンプルであるので，第15表の同定結果は本号跡覆土に堆積する貝層の性状を反映しているものと考えられる。

脊椎動物

軟骨魚綱1種類，硬骨魚綱9種類が同定されたが，魚類以外の脊椎動物資料は確認できなかった(第16表)。資料は11単位すべてのサンプルに出現したが，サンプル③～⑤と⑧～⑨で相対的な頻度が高い。魚種別では，目以下の同定が困難な真骨類（以下では真骨類と略称）をのぞくとウナギの頻度が最も高い。

第16表　105号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果

魚種名・同定部位		サンプル番号 サンプル深度および水洗メッシュ寸法											合計
		① 0～5cm a b c d	② 5～10cm a b c d	③ 10～15cm a b c d	④ 15～20cm a b c d	⑤ 20～25cm a b c d	⑥ 25～30cm a b c d	⑦ 30～35cm a b c d	⑧ 35～40cm a b c d	⑨ 40～45cm a b c d	⑩ 45～50cm a b c d	⑪ 50～55cm a b c d	
軟骨魚綱種不明	ce											1	1
ギンブナ	d_R								1				1
コイ科種不明	pm_L									1			1
	pht									4			4
	sp									1			1
ウナギ	pca				3	1			1			1	6
	cau	1			1	1	1		1	1			6
ボラ科種不明	op_R				1								1
ボラ科型	pca				2								2
	cau				3	1							4
スズキ型	pca								1				1
クロダイ属	d							+	+				・
ハゼ科型	op_R		1										1
	pca			1									1
	cau			2									2
真骨類種不明	mx_L										1		1
	an_R								1				1
	an_L		1										1
	qu_L					1							1
	op_R			1									1
	sp			1	2 5	2	1	5 1		2			19
	rb			1 1		1 1				1			5
	ce	1	1	1	2				1				6
	sc	r	r	r r r	r c v	r r c c	r c	r	r r c	r c	r r	r r	・

pht：咽頭歯　　pm：前上顎骨　　他は第14表に同じ

最小個体数の算定　軟骨魚綱の椎体がサンプル⑪から1点しているので，個体数は1に算定される。ギンブナはサンプル⑧で同定された歯骨資料にもとづいて1個体が算定されるが，サンプル⑨の1.0mmメッシュ面で分離されたコイ科資料は，このギンブナと同一個体に由来する可

能性が高く，これらの資料については個体数を算定しない。ウナギは，サンプル①，④～⑥，⑧～⑨，⑪の4群に分れて椎体資料が同定された。上記各サンプルの採取深度にウナギの堆積層があったと考えられ，とくに④～⑥で資料の相対的な出現頻度が高いが，この群内における個体識別は現状では困難であるので，最小個体数は4にとどめた。ボラ科はサンプル④に同定された主鰓蓋骨で1個体が算定される。サンプル④～⑤に出現したボラ科型椎体は，これと同一個体に由来する可能性があるので，後者については算定を行わない。

スズキ型椎体はサンプル⑧で1点同定されている。後述のように，スズキ属の椎体が魚種同定の決め手となりうるかどうかは検討の余地を多く残しているので，個体数算定の対象から外した。クロダイ属はサンプル⑦と⑧で歯骨破片が出現したが，個体数は1に算定した。サンプル②～③に出現したハゼ科型資料は，マハゼ属に酷似するものである。ハゼ科には多くの魚種が属しており，各魚種間の骨学的比較を十分検討していないが，ここではすべてを一応マハゼ属に同定し，最小個体数を1に算定した。真骨類はサンプル①～④の1㎜メッシュ面上に椎体が出現しているが，これらは既述の各魚種のどの椎体とも一致しない。また，サンプル⑩に出現した主上顎骨(第99図4)も既述の魚種に所属しないので，真骨類は2個体以上が出現しているものと考えられる。この結果，本号跡のコラムサンプル中に出現した魚の最小個体数合計は11である。

(c). 107号土坑

本号跡のコラムサンプルは，11単位のサンプルで構成される。覆土中からは加曽利EⅣ式，称名寺式，堀之内Ⅰ式土器片が出土するが，接合状態の良好な大形破片はいずれも称名寺式に

第17表　107号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果

種名		サンプル番号 サンプル深度(単位-cm) ① 0～5	② 5～10	③ 10～15	④ 15～20	⑤ 20～25	⑥ 25～30	⑦ 30～35	⑧ 35～40	⑨ 40～45	⑩ 45～50	⑪ 50～55	合計 資料数	最小個体数	同相対頻度(%)
ダンベイキサゴ		3	11	16	14	6	10	7		1			68	68	48.57
ウミニナ							1						1	1	0.71
腹足綱種不明			1										1	1	0.71
ムラサキインコガイ	右												・	2	1.43
	左	1	1										2		
ヤマトシジミ	右		1	1	1	1							4	4	2.86
	左	1	1										2		
チョウセンハマグリ	右	10	21	13	3	5	3	3					58	58	41.43
	左	16	15	8	7	6	3	3					58		
ハマグリ	右	3		1									4	4	2.86
	左	1	1	1									3		
ハマグリ属種不明	右			1									1	1	0.71
	左												・		
アサリ	右												・	1	0.71
	左						1						1		
合計		35	52	41	25	18	18	13	0	1	0	0	203	140	99.99
有肺亜綱種不明		+	+	+		+	+						・	・	・
フジツボ科種不明						1			1				2	・	・

属すことから，覆土の堆積時期は縄文時代後期初頭～前葉と推定される。

貝類その他

11単位のサンプルからは第17表に示す腹足綱3種類，二枚貝綱6種類，他に有肺亜綱，甲殻綱が同定された。資料はサンプル①～⑦まで連続して出現したが，これよりも下位の各サンプルではダンベイキサゴが1点得られただけにとどまった。本号跡の土層断面をみると(第26図)，貝殻を含む層準は1層，3層，7層に限られるので，上記の結果はそれに反映されたものであることがわかる。同定した貝類の中ではダンベイキサゴとチョウセンハマグリの出現頻度が相対的に高いが，この両種の出現頻度がピークをつくる深度には若干のズレがあり，チョウセンハマグリがサンプル①～③で高いのに対して，ダンベイキサゴはサンプル②～④，⑥で高い。両者の堆積に若干の時間差があったかもしれない。なお，本コラム中に出現したすべての貝類の最小個体数は，調査した4基の土坑中で最も少なく，140個体にとどまっている。

脊椎動物

このサンプル中からはこれまでに，軟骨魚綱2種類，硬骨魚綱13種類，両生綱4種類，爬虫綱1種類，哺乳綱1種類が同定された(第18表)。資料の出土量は4基の土坑中で突出的に多く11単位のすべてのサンプルから出土しているが，とくにサンプル①～③における頻度が著しく高い。サンプル④より下位の各サンプルでは，深度が下がるにつれて出現頻度も低下する傾向にあるが，貝類資料が出現しなくなるサンフル⑦付近を境にして頻度の低下が顕著である。しかし，土坑底に接するサンプル⑪では資料の出現頻度が再び増加する。

動物の種類別では真骨類をのぞくと，コイ科種不明とした資料の出現頻度が最も高く，とくにコラムサンプル上層で多量に出現している。以下，カタクチイワシ，ギンブナ，ウナギの出現頻度が高く，サンプル上層～中層付近と最下層に多く出現したが，カタクチイワシだけは下層のサンプルからはあまり出現しない。上記以外の各魚種ともコラムサンプルの上層～中層付近で出現頻度が高いが，タナゴ亜科は下層だけから同定された。なお，両生綱は中層付近に爬虫綱と哺乳綱は中層と最下層に出現した。

最小個体数の算定　サメ目はサンプル③と⑥から遊離歯が1点ずつ同定された。これらは形態的な特徴から別個体に由来すると考えられるので(第97図)，算定数は2である。目以下の同定が困難な軟骨魚綱の椎体はサンプル④と⑩～⑪で出現している。前者の資料は小形で，上記の遊離歯のいずれかと同一個体に由来する可能性があるが，後者の資料はこれらとは別個体に由来すると考えてよく，最小個体数を1に算定した。

マイワシは第1脊椎が3点，第2脊椎が5点同定されたが，垂直方向への出現頻度はサンプル⑦を境に不連続になる。サンプル①～⑥に出現した第1，第2脊椎の計測結果はサンプル③に出現したものを除くと別個体に由来することが明らかであるので(第22表)，これにサンプル⑪の第2脊椎を加えて6個体を算定した。なお，属以下の種同定が困難なニシン科の椎体は，

垂直方向にはマイワシとよく似た分布をしており，これと同一個体に由来する可能性が強いので，個体数算定の対象としない。カタクチイワシはすべてのサンプル中に出現し資料量も多いので，相当量の個体数が堆積しているものと推定されるが，現状ではこのように集中して出現した椎体を個体ごとに識別するのは困難であるので，今回は第1脊椎の点数だけに算定基準を限定し，個体数を17とした。

タナゴ亜科は咽頭骨以外の部位を同定できなかったので，最小個体数はこの資料にもとづいて10に算定した。ギンブナは11単位すべてのサンプルから多量の骨が同定された魚種で，相当量の個体が覆土のほぼ全層にわたって堆積しているものと考えられる。しかし，上述のカタクチイワシの場合と同様に，資料が高密度かつ広範囲に連続して出現した場合，現状では個体識別は限られた部位によって行うのが最も安全であるので，最小個体数は左咽頭骨の採集点数にもとづいて68に算定した。属以下の同定が不確実なコイ科の資料は大部分が現生ギンブナ標本と一致するので，重複をさけ個体数算定は行わない。なお，ギバチはサンプル⑧に出現した右胸鰭棘にもとづいて1に算定した。

ウナギもすべてのサンプルに出現しており，現状では椎体資料による個体識別は困難であるが，顎骨の垂直方向への出現頻度はおおよそ4群に分れており，各群ごとに個体数を評価すると以下のようになる。第1，第2群はサンプル①と③に出現した歯骨と顎篩鋤骨で，大きさは接近するが別個体と考えた。第3群はサンプル⑤～⑦に出現したもので，4点の左右上顎骨長の計測結果(第26表)にもとづいて個体数を4に算定した。第4群はサンプル⑨～⑪に出現したもので，左主上顎骨数にもとづくと5個体が数えられる。したがって，本コラムサンプル中に出現したウナギの最小個体数は合計11である。ボラ科はサンプル⑥で歯骨が1点得られた。このサンプルとその上下のサンプルにはボラ型の椎体資料が集中的に出現している。このような資料の集中箇所はサンプル⑪にもみられる。ボラ型椎体資料は同定精度に若干疑問の余地を含むものであるが，上記2ケ所の集中箇所にもとづいて最小個体数を2に算定しておく。スズキ属は上下顎骨が垂直方向に2群に分れて出現した。第1群はサンプル②に出現した左角骨で，第2群はサンプル④～⑥に出現したものである。サンプル②と④に出現した左右の角骨は大きさが接近するが，別個体と考えた。最小個体数は角骨にもとづくと3である。なお，タイ科型臼歯は遊離状態で個体数算定資料としてはなじまない。

マハゼ属の顎骨資料はサンプル①，③～④，⑥～⑧，⑩～⑪の4群に分れて出現した。各群はそれぞれ堆積経過が異なるものと考えられるので，第1群は右歯骨の採集数，第2群は左前上顎骨もしくは左歯骨の採集数，第3群は左前上顎骨の採集数，そして第4群は左前上顎骨あるいは左右の歯骨の採集数にもとづき，それぞれ2個体ずつ合計8を算定した。ハゼ科型椎体は上記のマハゼ属資料とほぼ同じ頻度で出現しており，同じ個体に由来する可能性があるので算定対象としない。

第18表　107号土坑コラムサンプル出土脊椎動物同定結果

魚種名・同定部位		サンプル番号 サンプル深度および水洗メッシュ寸法 ① 0～5cm a	b	c	d	② 5～10cm a	b	c	d	③ 10～15cm a	b	c	d	④ 15～20cm a	b	c	d	⑤ 20～25cm a	b	c	d	⑥ 25～30cm a	b	c	d	⑦ 30～35cm a	b	c	d	⑧ 35～40cm a	b	c	d	⑨ 40～45cm a	b	c	d	⑩ 45～50cm a	b	c	d	⑪ 50～55cm a	b	c	d	合計
サメ目	dnt												1												1																								2
軟骨魚綱種不明	ce															1																										1				1			3
マイワシ	at												1				1								1																								3
	2nd				1				1				1																																		1	4
ニシン科種不明	pca				13				7				7				2			1	6				4				2																				42
	cau				4				9				2				3				1				1																								20
カタクチイワシ	at				1				1				1				2			1	2				6				2				1																17
	2nd				4				2																																								6
	pca			1	30				27			4	64			4	57			9	59			1	41			6	40				17			1	5				1							367
	cau			2	31			1	41			3	53			4	40			11	41			3	33			7	38				10				1				1						1	321
タナゴ亜科種不明	ph_R																																														6	7
	ph_L																																												1	9		10
ギンブナ	mx_R				4			1	7				7				2								2				3				1												13	4		44
	mx_L				5				2			1	5			1	1				1				2			1	1				2				1									6	3		32
	pm_R			1	2				1																																		2		1	2		9
	Pm_L			1	1								1				1																										3		1	3		11
	d_R			3	5			1	11			1	4				3			1			1	2	3			4	2			3	4			3							3		1	7	5	67
	d_L			4	6			4	10			2	6				4		2	2					2			1	2			2	2								1	1		2	5	1	59
	an_R							1	1				1			1											1	2	1				1				2									2	3		16
	an_L																5							1	4				3							1	1								3	1		19
	qu_R				2																							1				1													7	2		13
	qu_L																											1					1												2			4
	hy_R																			1								1	1				1			1								1	1			7
	hy_L								1															1				1	1			2																6
	ph_R		1	5	6		1	6	12			2	5				3			3	1				1		1	4	4			3				1					1			1	1	2	64
	ph_L			2	6		1	6	10			3	4			2	3			3	1			1	4			7	2			2	1			1	1				1			1	3	3	68
コイ科種不明	op_R		1	2				3	1			3	1							1						1	1																					14
	op_L			1			1	3	1								1			1					1				1																			10
	3rd				17				4			1	7				2			1	3		1	2	3				6				3												1	1		52
	tri								6				1												1																						3		11
	pca			5	72			2	93			2	63			2	36			1	4	21			25			2	35				14								1			2	19		399
	cau				73			3	85			3	58				18			1	1	20		2	18				35			2	13								4			4	18		358
	sp		1	3	18			6	17			4	9			2	4			+	1			2	3		1	4	8			1	4								2			1	3		94
ギバチ	ps_R																															1																1
ウナギ	mx_R																											1	2																			3
	mx_L																							1												1					1			3			6
	d_R																																											1	1			2
	d_L			1																1					1		1													1			1				6
	pev											1																	1												1			1				4
	pca		1	3			1	6			1	19	1			11	3		2	9	1		1	7	1			17	4		1	7			2	1		1	14	5		1	44	19		183
	cau			6	2			6	3		1	2	8			13	4			9	4			6	5			24	10			2	4			4	8			22	9		2	82	33		269
ボラ科種不明	d_R																								1																								1
ボラ科型	pca																1			2	1			1	2		1	1	3							1				1				6			20
	cau								1				3			2	1			5	2			1	9		1	3	5				1			1				2				11	2		50
スズキ属	mx_R																			1																												1
	mx_L																				1																											1
	pm_L																								1																							1
	an_R															1				1																												2
	an_L							1																																								1
スズキ型	cau																														1															1	2
タイ科型	dnt																1																															1
マハゼ属	pm_R															1									1																							2
	pm_L				1							1												1	1			+													1				1		6
	d_R				2																												+													2		4
	d_L												1			1												1																	2		5
	an_R											1																																				1
	an_L				1								1															1																				3
ハゼ科型	op_R												1			1																																2
	pca											1	1			2	1			2				3				2	1			1														1	15
	cau				1				1			1	4			5	2			4				6	3			1	1				1													2	32
真骨類種不明	mx_R																								1				2																			3
	mx_L																								2																							2
	pm_L																								1																							1
	d_R																				1								1																			2
	an_R			1					3																				1															1			6
	an_L			2	2				1				1																																			6
	qu				1			2					4								2			2	3		1	2	6							1					3			1	5		33
	op_L																																												1			1
	tem																																										1					1
	sp				4			2	1			1	4			2	2			3	6			1	6				10				2			1				3			1	11	5	65
	int						3	11	1			12	11			4	1							3	2			2	8		4	2			2	3			1	8		1	10	3	92
	rb		1	5	2		1	5	13			4	27	1	1					1	5		2	2	3			1	14				11			2			1	6		1	22	36	167
	ce			6	183			5	193			18	250	1	7		96		2	14	71			10	75			19	57		4	40			4	6			7	19			21	51	1,159
	sc			r	r	r	r	r					r				r				r			r	r																				r		・
両生綱																																																
ヤマアカガエル	ili_R																								1																							1
モリアオガエル	hu_R																		1																													1
アオガエル属	fe_R																								1																							1
無尾目種不明	ce																						1	1				4			1																7
爬虫綱																																																
ヘビ亜目種不明	ce											1		1																														2			4
哺乳綱																																																
アカネズミ属種不明	ma_R																																										1					1
	ma_L																						1																									1
齧歯目種不明	sk_R																		1																													1
	sk_L																			1																												1
	hu_L																		1																													1
	pel										1																																					1
	fe_R										1									1				1																			1				4
	ti_R													1																																		1
哺乳綱種不明	ce											1		1					1																									2			5
	lim																			2																												2

fe：大腿骨　hu：上腕骨　ili：寛骨　lim：肢骨　ma：下顎骨　pel：骨盤　ps：胸鰭棘　sk：頭蓋　te：脛骨　tri：三脚骨　他は第14表と同じ

なお，真骨類は資料の出現状況にもとづけば，現状では同定のできない個体が多数堆積していることはまちがいがない。椎体資料が多量に出現し，とくにサンプル①～④と⑪で出現頻度が高い。この層位に相当するサンプルに出現した既述の魚種のなかには椎体資料が同定できなかったものはないので，これらの多量の椎体は既述した魚種とは別種の魚に由来するはずである。また，サンプル⑥に出現した左前上顎骨と右主上顎骨はそれぞれ別個体に由来し，既述のどの魚種にも属さない(第99図１，３)。以上の結果にもとづけば，真骨類の最小個体数の合計は２である。

両生綱はヤマアカガエルとモリアオガエルの右寛骨と右上腕骨が，サンプル⑥と⑤で出現しており，各１個体ずつ算定される。サンプル⑥に出現したアオガエル属の右大腿骨は，モリアオガエルと同一個体に由来する可能性が高いので個体数の算定を行わない。

アカネズミ属はサンプル⑥と⑪で左右の下顎骨が出現しており，最小個体数は２とするのが妥当であろう。これらとほぼ同じ層準から齧歯目の大腿骨，頭蓋骨などが出現するが，上記の下顎骨と同一個体に由来する可能性が強い。

(d). 109号土坑

本号跡のコラムサンプルは，10単位のサンプルから構成される(第26図)。覆土中からは加曽利ＥⅣ式土器片が19点出土た。これ以外の土器片を含まないので，覆土の堆積時期は縄文時代中期末葉と推定される。

貝類

コラムサンプル中に出現した貝の種類数は本号跡が４基中最も多く，腹足綱７種類，二枚貝綱10種類と有肺亜綱が同定された(第19表)。資料はサンプル①～⑧まで連続して出現するが，サンプル⑨より下位には出現しない。これは本号跡の貝層の堆積がサンプル⑧の採取地点よりも下位にみられないためで，また各サンプルにおける貝の出現頻度の大小も発掘中の観察記録とよく符合する。有肺亜綱をのぞく17種類の貝のうち最も出現頻度が高いのはチョウセンハマグリである。

脊椎動物

これまでに第20表に示す硬骨魚綱11種類，哺乳綱３種類が同定された。魚類資料はすべてのサンプル中に出現したが，とくにサンプル⑦～⑧における頻度が相対的に高く，貝類資料とは異なる分布状態になる。真骨類をのぞくと魚類資料ではウナギの頻度が最も高く，コラムサンプルの中層～下層にかけて集中する。これについでカタクチイワシが多く同定され，資料の集中する深度もウナギとおおよそ一致する。哺乳綱はコラムサンプルの上層～中層にかけて出現し，サンプル⑦より下位のサンプルからは同定できなかった。この傾向は既述の貝類資料に類似する。

第19表　109号土坑コラムサンプル出土貝類同定結果

種名		サンプル番号 サンプル深度(単位−cm) ① 0～5	② 5～10	③ 10～15	④ 15～20	⑤ 20～25	⑥ 25～30	⑦ 30～35	⑧ 35～40	⑨ 40～45	⑩ 45～50	合計 資料数	最小個体数	同相対頻度(%)
カサガイ科種不明		1	1									2	2	0.30
ダンベイキサゴ		3	2	6	3	4		2	2			22	22	3.30
イシダタミガイ						1			1			2	2	0.30
クボガイ				1								1	1	0.15
クマノコガイ		1			1							2	2	0.30
ツメタガイ		1		1	1							3	3	0.45
イボニシ				2		2						4	4	0.60
ムラサキインコガイ	右	3	6	6	1	15		1				32	32	4.80
	左	8	6	6	1	5		1				27		
ヒメイガイ	右			1								1	1	0.15
	左			1								1		
マガキ	右											・	1	0.15
	左								1			1		
イタボガキ	右			1					1			2	2	0.30
	左											・		
ヤマトシジミ	右	2	1	1		1			1			6	6	0.90
	左				1		1					2		
ウネナシトマヤガイ	右	1										1	1	0.15
	左											・		
チョウセンハマグリ	右	46	51	68	56	94	148	102	5			570	585	87.71
	左	51	56	70	46	103	147	107	5			585		
ハマグリ	右											・	1	0.15
	左			1								1		
オキシジミ	右											・	1	0.15
	左			1								1		
フジノハナガイ	右	1										1	1	0.15
	左											・		
合計		118	123	166	110	225	296	213	16			1,267	667	100.01
有肺亜綱種不明		+	+	+		+	+	+				・	・	・

最小個体数の算定　属以下の同定が困難なニシン科はサンプル①に出現した資料にもとづいて1とした。カタクチイワシは垂直方向には3群に分れて出現しており，少なくとも3枚の堆積層があったものと推定される。第1群はサンプル①に生じたトビである。第2群はサンプル⑤～⑧に連続して出現した資料である。第3群はサンプル⑩に出現した1点の資料である。第2群は最も大きい群であるが，サンプル⑧に出現した第1脊椎椎体以外には現状で部位を特定できる資料は未発見である。ところで，堀田(1961)と高橋(1962)の研究によるとカタクチイワシの場合，最初の血管棘は第26ないし第27脊椎骨に形成される。筆者が同定したカタクチイワシの腹椎資料には第2脊椎以前のものを含まないので，第2群の28点の腹椎資料は2個体以上に由来することが明らかである。したがって，最小個体数は第1，第3群が各1，合計4に算定される。タナゴ亜科はサンプル⑦だけから同定できた。左咽頭骨の採集点数にもとづいて3に算定する。ギンブナはサンプル①と⑦に分れて同定された。両方のサンプルから左咽頭骨が1点ずつ出現しており，最小個体数は2である。なお，属以下が同定困難なコイ科資料はいずれもギンブナ現生標本に類似するもので，コラムサンプルの垂直方向への出現頻度も上記のギンブナ資料とほぼ一致する。ギンブナと同一個体に由来する可能性の強い資料であるので，個

第20表　109号土坑コラムサンプル出土脊椎運動物同定結果

種名・同定部位		サンプル番号 サンプル相対深度および水洗メッシュ寸法										合計
		① 0～5cm a b c d	② 5～10cm a b c d	③ 10～15cm a b c d	④ 15～20cm a b c d	⑤ 20～25cm a b c d	⑥ 25～30cm a b c d	⑦ 30～35cm a b c d	⑧ 35～40cm a b c d	⑨ 40～45cm a b c d	⑩ 45～50cm a b c d	
ニシン科種不明	pca	1										1
	cau	1										1
カタクチイワシ	at								1			1
	pca						2	18	8			28
	cau	1				1	6	15	4		1	28
タナゴ亜科種不明	ph_R							1				1
	ph_L							3				3
ギンブナ	ph_L	1						1				2
	d_R							1				1
コイ科種不明	op_R			1				1				2
	pca		1					3	1			5
	cau							7	2			9
ウナギ	mx_R					1						1
	d_R					1						1
	pmev							1	1			2
	pca	1		1 2	1	3 1	8 5	1 9 16	5 2			55
	cau		1		2	5 3	11 5	15 24	8		4	51
ボラ型	pca	1							1	1	1	4
	cau		1							1 1	1	4
アジ亜科種不明	sc							1 1				2
スズキ属	pm_L							1				1
	an_L										1	1
	pop_R						1					1
スズキ型	pca							5	2		1	8
	cau							1				1
マハゼ属	pm_R							1				1
	d_R							5	1			6
	d_L							1	1			2
ハゼ型	op_R							1				1
	op_L									1		1
	pca							7	2			9
	cau							11	1		3	15
真骨類種不明	pm_R										1	1
	qu						1	3	1		1	6
	sp	1 1	1	1 1	1	3 2	1	3	1 2	1 4	1 2 11	37
	int	1	1	1			1		1	1	5	11
	rb	1 2		1		1	1 1		1		1	9
	ce	2 3	5	2	1 1	1 1 3	5 6	5 72	31	5	10 16	169
	sc	r r			r	r r r	r	r r	r r	r r c	r c c	・
哺乳綱 食肉目種不明	p?						1					1
シカ	ant					1						1
哺乳綱種不明	fg	c	c	c		r	r					・
	ce						1					1

ant：鹿角　　fg：破片　　他は第14表と同じ

体数の算定は行わない。

ウナギはサンプル⑨をのぞくすべてのサンプルから同定された。顎骨はサンプル⑤と⑦～⑧に分れて出現した。前者の主上顎骨と歯骨は同一個体に由来する可能性が高いが，後者は顎篩鋤骨の採集点数に従って2個体が算定される。そうだとすると，サンプル⑤～⑧に出現した椎体はこれらと同一個体に由来するものと考え，個体数算定の対象から外すのが妥当であるが，

サンプル⑩にトビをつくる資料とサンプル①に出現した大形資料は，いずれも近接したサンプル内に出現した椎体とは別個体に由来するものと考え，それぞれ1個体を算定すべきである。したがって，ウナギの最小個体数は合計5に算定される。ボラ科の同定資料は同定の正確さを欠くものであるが，コラムサンプルの上層と下層に分れて出現した資料について一応2個体を算定した。アジ亜科はサンプル⑦に出現した稜鱗を同一個体と考え，1個体を算定した。

スズキ属の頭部の骨は2群に分れて出現した。第1群はサンプル⑥～⑦で同定された右前鰓蓋骨と左前上顎骨であるが，ともに小形の資料で別個体に評価することは困難である。第2群はサンプル⑩の左角骨で，前者とは明らかに別個体に属す。各群ごとに1個体を評価すると，最小個体数は2に算定される。なお，スズキ型椎体がサンプル⑦よりも下位のサンプルにかたよって出現している。おそらく，上記のスズキ属と同一個体に由来するものと考えられるので，個体数は算定しない。マハゼ属の顎骨はサンプル⑦～⑨に集中して出現している。サンプル⑩にはハゼ型椎体が出現しているので，サンプル⑦よりも下位の各層にハゼ科が多く堆積しているものと推定される。集中して出現したほぼ同大の資料を個体識別するのはかなり困難であるので，右歯骨の採集点数にもとづいて一応個体数を6に算定した。真骨類は10単位すべてのサンプルから出現しており，サンプル⑦～⑧でとくに出現頻度が高い。これは既述した魚種以外の魚が相当量あることを示すものである。サンプル⑩に出現した右前上顎骨（第99図2）は，明らかに既述の魚種に属さない。また，椎体はすべてのサンプルに連続的に出現しているが，サンプル⑨を境にしてこれを2群に分けるとすると，サンプル⑩の椎体群には上記の右前上顎骨と同一個体を含む可能性があるが，サンプル①～⑧の椎体群はこれと同一個体に由来する可能性は少ない。したがって，真骨類については2個体を算定しておく。

哺乳綱は，シカと食肉目が同定された。後者の資料はイヌ科のPと思われる遊離歯である。両種とも個体数は1に算定される。なお，サンプル①～③，⑤～⑥の4㎜メッシュ面上からは，現状では種同定が困難な哺乳綱遺存体が多く分離された。いずれも中小の破片であるが，割れ口の新しい資料も多く含む。既述のようにこれらの資料の垂直方向における出現頻度は，サンプル④を境にしてそれより上位のものと下位のものに2分される。しかし，これらの2群と上記のシカ，食肉目が同一個体に由来するかどうかは現状では明らかにできない。

(3) 同定記載および計測値

軟体動物　Mollusca

腹足綱　Gastropoda

前鰓亜綱　Prosobranchia

原始腹足目　Archaeogastropoda

ニシキウズガイ科　Trochidae

(1)ダンベイキザゴ　*Umboniunm (Suchium) giganteum*

調査資料数：110

各遺構とも殻径約24～35㎜の範囲のものが出現したが，28～30㎜前後のものの頻度が高い。破損資料が多く，計測のできないものが大部分を占めた。

本種は福島県以南の外洋の砂底海岸に分布する。関東地方では九十九里浜や相模湾沿岸の縄文貝塚から多く出土する。

(2)イシダタミガイ　*Monodonta labio confusa*

調査資料数：2（殻径約22，23㎜，殻高約18㎜）

殻表の彫刻は明瞭なレンガ状であるので，同属の近縁種とは容易に区別される。本種は109号土坑のサンプル中に出現した2点だけで，他の遺構からは同定できなかった。

本種は北海道南部以南の潮間帯岩礫底に生息する。関東地方では三浦半島の縄文貝塚から多く出土するが，中台貝塚周辺では銚子市粟島台貝塚（前期～中期），勝浦市本寿堂洞遺跡（晩期），天津小湊町松ケ鼻貝塚（後期）などで知られる程度で例数は少ない（酒詰 1961）。

(3)クボガイ　*Chrolostoma argyrostoma lischkei*

調査資料数：1（殻径21.4㎜，殻高19.6㎜）

109号土坑のサンプルから得た上記1点の資料だけにとどまった。臍孔の状態は観察できないが，周縁角は丸味を帯び，殻径殻高比もほぼ1に近いので，ヘソアキクボガイ *Ch. a. turbinata* やヒメクボガイ　*Omphalius nigerrimus* などの近縁種と区別して本種に同定した。

(4)クマノコガイ　*Chrolostoma xanthostigma*

調査資料数：（殻径22.5，26.0㎜，殻高18.3，19.6㎜）

臍孔周辺に緑色斑が残っている。クボガイと同様に房総半島以南の潮間帯岩礫底に生息するが，本種の方が生息深度が深い。

中腹足目　Mesogastropoda

ウミニナ科　Potamididae

(5)ウミニナ　*Batillaria multiformis*

調査資料数：3

保存状態は不良で，計測は困難である。

タマガイ科　Naticidae

(6)ツメタガイ　*Neverita (Glassaulax) didyma*

調査資料数：4（殻径約21～48㎜，殻高約18～30㎜）

新腹足目　Neogastropoda

アクキガイ科　Muricidae

(7)イボニシ　*Reisha clavigera*

調査資料数：6（殻高約33～40㎜）

(8)レイシガイ　*Reishia bronni*

調査資料数：1（殻径22.2㎜，殻高39.7㎜）

有肺亜綱　Pulmonata

(9)有肺亜綱種不明

調査した各土坑のコラムサンプル中からはオカチョウジガイ科，キセルガイ科などに属する資料が検出された。これらは，各土坑の覆土がどのような環境下で堆積したかを知る手がかりとして重要であるが，今回は時間等の都合で詳しい種同定と集計作業を省いた。

二枚貝綱　Pelecypoda

翼形目　Pteriomorphia

イガイ科　Mytilidae

(10)ムラサキインコガイ　*Septifer (Mytilisepta) virgatus*

調査資料数：62（殻長約27.5～35㎜）

殻形は横に細長く，殻厚も相対的にやや厚い。イガイ　*Mytilus corsucus* の幼貝に似るが，資料の殻頂部には隔板がみられるので，これとは区別して本種に同定した。

本種は北海道以南の潮間帯岩礁に足糸で固着する。縄文貝塚からの出土例は少なく，青森県ドウマンチャ貝塚，岩手県獺沢貝塚など東北地方太平洋岸で報告される程度であるが（酒詰1961），今回調査した土坑のうちでは105号土坑をのぞく3基の土坑から出土している。

(11)ヒメイガイ *Septifer (Mytilisepta) keenae*

調査資料数：2

殻形，大きさとも前種に似る。殻頂部に隔板がある。しかし，殻表には分岐する放射状の刻み目があるので前種とは区別し，本種に同定した。

ヒメイガイは房総半島以南に分布し，岩礁に固着する。縄文貝塚からの出土例に乏しく，岩手県細浦貝塚など東北地方太平洋岸で知られる（酒詰1961）。しかし，これらの出土貝塚の分布は現生種の生息域に比べて北方に偏りすぎており，同定に若干疑問がある。

イタボガキ科　Ostreidae

(12)マガキ　*Crassostrea gigas*

調査資料数：153　（殻長約5～6㎝）

(13)イタボガキ　*Ostrea denselamellosa*

調査資料数：2

異歯目　Heterodonta

シジミガイ科　Corbiculidae

(14)ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*

調査資料数：14(殻長約12～35㎜)

貝塚産資料では本種とマシジミ *Corbiculina. leana* は混同しやすいが，今回の資料はいずれも成長脈の彫刻が弱いので，一応本種に同定しておいた。

ヤマトシジミは日本全国の河口付近に生息する汽水性の食用貝であるが，中台貝塚周辺の縄文貝塚では一ノ宮貝塚で多量に出土する例がある以外は報告例が少ない。

フナガタガイ科　Trapeziidae

⒂ウネナシトマヤガイ　*Trapezium (Neotrapezium) liratum*

調査資料数：2(殻長13.4，13.6㎜)

マルスダレガイ科　Veneridae

⒃チョウセンハマグリ　*Meretrix lamarcki*

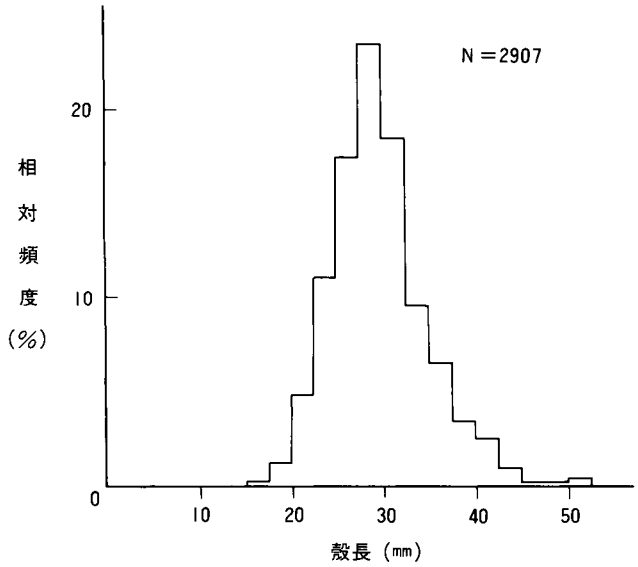
調査資料数：6,653

貝塚に堆積する二枚貝の貝殻は，一般に外套痕線の保存状態の悪いものが多く含まれるので，本種はハマグリ *M. lusoria* と混同されやすい。しかし，チョウセンハマグリはハマグリに比べて殻厚が相対的に厚いこと，殻の膨らみが弱いことなどの特徴があり，これらの性状は外套痕線の観察しにくい貝塚産資料の同定に際して有効に働く。今回はこれらの特徴によって両種を区別した。なお，第ｊ表に殻長の計測結果を遺構別に示した。各遺構間では資料の大きさに若干の差がみられるが，おおむね殻長約25～32㎜のものの出現頻度が高い(第96図)。

チョウセンハマグリは鹿島灘以南の外洋に面した砂底に生息するが，中台貝塚周辺の縄文貝塚では中期以後の貝塚で多く出土する。

第21表　チョウセンハマグリ殻長計測結果(左殻)

殻長(㎜)	遺構名				合計	
	95号土坑	105号土坑	107号土坑	109号土坑		
15.0～17.5	3		3	2	8	0.3 %
17.5～20.0	24	1	7	2	34	1.2
20.0～22.5	109	8	5	18	140	4.8
22.5～25.0	231	49	8	34	322	11.1
25.0～27.5	344	142	4	14	504	17.3
27.5～30.0	420	243	3	16	682	23.5
30.0～32.5	202	285	5	39	531	18.3
32.5～35.0	30	178	5	63	276	9.5
35.0～37.5	5	93	2	88	188	6.5
37.5～40.0		27	3	69	99	3.4
40.0～42.5	2	8	3	59	72	2.5
42.5～45.0		5	1	20	26	0.9
45.0～47.5		2		3	5	0.2
47.5～50.0			2	5	7	0.2
50.0＜		7		6	13	0.4
小　計	1,370	1,048	51	438	2,907	100.1
計測不能	177	106	7	138	428	・
総　計	1,547	1,154	58	576	3,335	・



第96図　コラムサンプル出土のチョウセンハマグリ殻長分布

(17)ハマグリ　*Meretrix lusoria*

調査資料数：8

資料はいずれも計測部位を破損するが，全体としては小形のものが多い。

(18)ハマグリ属種不明　*Meretrix* sp.

殻頂付近のみを残す破片資料で，上記2種の区別が困難なものである。107号土坑のサンプル中から得た。

(19)アサリ　*Ruditapes philippinarum*

調査資料数：3（殻長12.3，14.4，14.9mm）

(20)オキシジミ　*Cyclina sinensis*

調査資料数：1

フジノハナガイ科　Donacidae

(21)フジノハナガイ　*Chion semigranosus*

調査資料数：8（殻長約8.5～15mm）

三角形状を呈しナミノコガイ *Latona cuneata* に似るが，内面腹縁に刻み目があるので本種に同定した。

節足動物　Arthropoda

甲殻綱　Crustacea

完胸目　Thoracica

(1)フジツボ類

いずれも破損資料である。筆者には科以下の種同定は困難である。

脊椎動物　Vertebrata

軟骨魚綱　Chondrichthyes

サメ目　Lamniformes

(1)サメ目種不明(a)　Lamniformes fam. indet. (a)

同定資料：遊離歯１点(第97図，図版55－８)

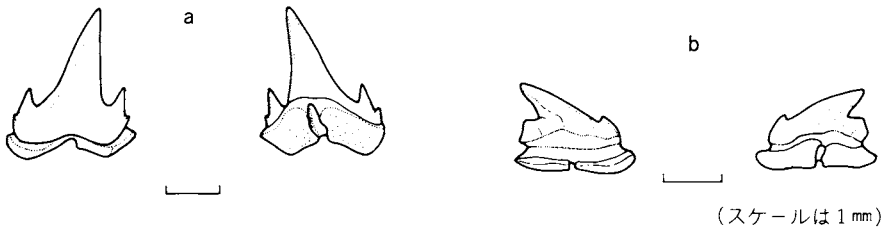
107号土坑のサンプルから分離したネズミザメ型の遊離歯で，主咬頭の両脇に２つの側咬頭がある。歯縁は刻まれない。孔溝がある。資料は小形で２㎜メッシュ面を通過した。外側面歯冠長は2.4㎜，歯根幅は2.3㎜である。

(2)サメ目種不明(b)　Lamniformes fam. indet. (b)

同定資料：遊離歯１点（第97図，図版55－９）

これも107号土坑のサンプルから分離したもので，咬頭は後方へ弯曲し，側咬頭がある。歯縁は刻まれない。孔溝がある。上記の資料と同様に２㎜メッシュ面を通過する程度に小形で，外側面歯冠長は1.0㎜，歯根幅は2.1㎜である。

現状では科以下の種同定は困難であるが，ここでは一応 a，b 両資料は別種に由来するものと考えておく。



第97図　サメ目遊離歯

(3)軟骨魚綱種不明　Chondrichthyesorderindet.

同定資料：椎体４点

短筒形の椎体で，４㎜メッシュ面上で分離されるものと，これを通過するものとがあるが，いずれも内湾性貝塚でしばしば発見される軟骨魚綱の椎体と性質が似ており，小形である。現状では目以下の種同定は困難である。

硬骨魚綱　Osteichthyes

真骨類　Teleostei

ニシン目　Clupeiformes

ニシン科　Clupeidae

(4)マイワシ　*Sardinops melanostictus*

同定資料：第1脊椎3点，第2脊椎5点（図版55－1，2）

HKC8603標本と酷似する第1，第2脊椎である。その計測値は第22表に示すとおりで，いずれも2㎜メッシュを通過した。

第22表　107号土坑出土のマイワシ第1・第2脊椎椎体幅計測結果（単位㎜）

	サンプル番号					
	①	②	③	④	⑥	⑪
第1脊椎			1.3	1.7	1.8	
第2脊椎	1.35	1.3	1.4			1.4

(5)ニシン科種不明　Clupeidae gen.& sp. indet.

同定資料：第3脊椎以降の椎体63点

ほとんどすべての資料が2㎜メッシュを通過した。コラムサンプル中に出現したニシン科のうち属以下の種同定が可能な魚種はマイワシ1種にとどまっているので，これらの資料もマイワシに由来する可能性が高い。

カタクチイワシ科　Engraulidae

(6)カタクチイワシ　*Engraulis japonicus*

同定資料：椎体769点

HKC76014標本と形態的特徴が一致するもので，ほとんどの資料が2㎜メッシュ面を通過する。第1脊椎の計測結果は第23表のとおりである。

第23表　カタクチイワシ第1脊椎椎体長計測結果(単位㎜)

遺構名	サンプル番号																	
	計測値																	
107号土坑	①	②	③	④		⑤			⑥						⑦		⑧
	1.3	1.4	1.7	1.8	1.9	1.7	2.0	2.0	1.3	1.6	1.7	1.75	1.9	2.0	(1.1)	1.8	1.9
109号土坑	⑧																
	1.5																

コイ目　Cypriniformes

コイ科　Cyprinidae

(7)タナゴ亜科種不明　Rhodeinae gen. & sp. indet.

同定資料：咽頭骨21点（図版55－4）

資料は前角と後角が発達し，前腕，後腕ものびる。歯列は5，0，0－0，0，5である。凹面は前腕部まで及ぶ。全体の形状はタナゴ型を呈すが，咽頭歯側面は刻まれない。

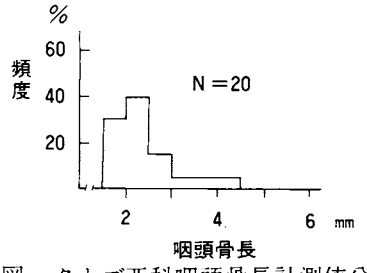
中村(1971)によるとわが国のタナゴ類は，*Acheilognathus*，*Rhodeus*，*Tanakia*，*Pseudoperilampus* の4属13種に分類される。しかし，タナゴ類の分類は研究者によって異なった見解がなされており，咽頭歯側面の溝の有無，背鰭と臀鰭前部の棘条の有無，口髭の有無，体側縦帯の有無とその後端の太さ，尾鰭中央の色などの諸特徴にもとづいて現在までに5属14～15種が提唱されている(長田　1976)。これに対して宮地ほか(1976)は，従来の研究者がタナゴ類の属区分の指標とした特徴は，コイ科の他属と比較すると亜属の区分に適用すべきであると考えて，日本産タナゴ類を暫定的にすべてタナゴ属 *Rhodeus* 1属に統合した。

筆者はこれらの論議についての当否を判断できる立場にないが，貝塚産資料のように情報量の少ない資料を扱う考古学の立場からすれば，咽頭歯側面の刻み目の有無という特徴は種同定に際して見落すことのできない特徴である。ところで，従来の分類による *Acheilognathus* には咽頭歯側面に刻み目のある魚種とない魚種が混じって編入されており，小林・前田(1961)は早くから咽頭骨と咽頭歯に関しては，*Rhodeus* と *Acheilognathus* の区別が困難であるとしている。

ところが，宮地ほか(1976)の分類るよると，その7亜属11種のうち咽頭歯側面に刻み目をもたない魚種は，*Rhodeus (Rhodeus)*，*R. (Tanakia)*，*R. (Acheilognatus)*の3亜属5種に限定されており，しかも，この5種のうち関東地方に天然分布するのはヤリタナゴ *R. (A.)lanceolatus* とミヤコタナゴ *R. (T.)tanago* の2種に特定される。このことは，既述のような資料を同定する考古学の側には好都合で，この方法によれば，採集資料は上記の2種のいずれかに同定される。採集資料は咽頭骨長1.5～4.5mmの範囲に出現し，2mm前後の小形のものが多い(第24表，第98図)。これらがすべてヤリタナゴに由来するとすれば，小林・前田(1961)に従って復原される体長範囲は約1.8～5mmで，その大部分が体長2.4cm前後のもので占められる。

第24表　タナゴ亜科咽頭骨長計測結果

咽頭骨長(mm)	遺構名 107号土坑	109号土坑	合計	
1.5～2.0	6		6	30.0%
2.0～2.5	8		8	40.0
2.5～3.0	1	2	3	15.0
3.0～3.5		1	1	5.0
3.5～4.0		1	1	5.0
4.0～4.5	1		1	5.0
合計	16	4	20	100



第98図　タナゴ亜科咽頭骨長計測値分布

(8)ギンブナ　*Carassius auratus langsdorfii*

同定資料：主上顎骨，前上顎骨，歯骨，角骨，方骨，咽頭骨など（図版55－5～7）

資料はHKC7906標本に酷似するもので，咽頭骨の第1歯はラッキョウ型を呈する。

ギンブナの資料は調査した4基すべての土坑から出土したが，特に107号土坑のサンプル中か

ら多く出土した。その出土資料の咽頭骨長の計測結果をサンプルの深度別に示すと第25表のようになる。資料はサンプル⑨と⑪をのぞくと，各サンプルとも咽頭骨長6㎜前後のものの出現頻度が高く，全体に小形である。なお，107号土坑以外の出土資料もいずれも小形で，咽頭骨長6～7㎜の範囲にある。

第25表　107号土坑出土ギンブナ咽頭骨長計測結果

咽頭骨長(㎜)	サンプル番号 サンプル深度（単位：－cm）											合計	
	① 0～5	② 5～10	③ 10～15	④ 15～20	⑤ 20～25	⑥ 25～30	⑦ 30～35	⑧ 35～40	⑨ 40～45	⑩ 45～50	⑪ 50～55		
4.0～4.5					2		1				1	4	4.65%
4.5～5.0	1		1									2	2.33
5.0～5.5	2	1	1				1			1		6	6.98
5.5～6.0	5	5	2	1	1	2						16	18.60
6.0～6.5	4	7	2	2	1	1	1					18	20.93
6.5～7.0	2	2	1	1	2			1		1		10	11.63
7.0～7.5	3	2					2	1				8	9.30
7.5～8.0		1					1	1				3	3.49
8.0～8.5							1					1	1.16
8.5～9.0	1											1	1.16
9.0～9.5		1	1				1	1			1	5	5.81
9.5～10.0			1				1				1	3	3.49
10.0～10.5							1				1	2	2.33
10.5～11.0												・	・
11.0～11.5							1					1	1.16
11.5～12.0		1									3	4	4.65
12.0～12.5												・	・
12.5～13.0												・	・
13.0～13.5												・	・
13.5～14.0							1					1	1.16
14.0～14.5	1											1	1.16
合計	19	20	9	4	6	3	12	4		2	7	86	99.99

ギギ科　Bagridae

(9)ギバチ　*Pseudobagrus aurantiacus*

同定資料：胸鰭棘1点(図版55－10)

HKC7911標本に酷似する資料であるが遠位部を欠損する。同標本よりも明らかに小形で，近位端最大幅は2.4㎜である。復原体長は8cmに達しないかもしれない。

ウナギ目　Anguilliformes

ウナギ科　Anguillidae

(10)ウナギ　*Anguilla japonica*

同定資料：主上顎骨10点，歯骨9点，前顎篩鋤骨6点，椎体多数（図版55－11～14）

資料はいずれもHKC8203標本に酷似する。本種に最も近縁なオオウナギ *A. marmorata* との比較は行っていないが，マアナゴ *Conger myriaster* やウツボ *Gymnothorax kidako* とは明らかに区別される。

資料の大部分は小形で，2㎜メッシュ面上と1㎜メッシュ面上で分離されたが，第26表に主上顎骨長の計測結果を示した。これらはHKC8203標本に比してかなり小形で，復原全長は107号土坑のものが約20～30cm，109号土坑のものが約40cm程度と推定される。ウナギは河川の上流から河口，内湾に至る広い範囲の水域に生息し，秋に成熟間近い親ウナギが降海する(中村

1971)。イギリスのバアン河におけるヨーロッパウナギ *A. anguilla* の下り鰻の♀の体長は47～95cmで，その多くは54～60cmである。また，♂は33.5～44cmである(松井　1972)。日本産ウナギ *A. japonica* にこのデータが直ちに適用できるかどうか疑問であるが，松井(1972)によると卵径0.2mm以上の卵を卵巣内にもちOoplasmaの充分発達した♀の体長は40.5～68.4cmで，一方，精巣幅3.0mm以上の♂の体長は45.5～58.0cmであるので，第26表に示したウナギでは109号土坑出土の資料1点をのぞくといずれも下り鰻に由来する可能性はない。

第26表　ウナギ主上顎骨長計測結果(単位mm)

遺構名	サンプル番号 計測値*								
107号土坑	⑥	⑦			⑨	⑩	⑪		
	9.1L	5.0R	6.1R	6.6R	5.8L	6.35L	5.8L	8.1L	8.2L
109号土坑	⑤								
	12.0R								

* 計測値の右にあるLRは，主上顎骨の左右を示す。

スズキ目　Perciformes

ボラ科　Mugilidae

⑾ボラ科種不明　Mugilidae gen. & sp. indet.

同定資料：歯骨1点

資料はHKC7430標本に酷似するが，ボラ *Mugil cephalus* の近縁種との比較検討は行っていない。なお，上記標本と類似する椎体資料をボラ型椎体に同定し，今回の集計の対象とした。

アジ科　Carangidae

⑿アジ亜科種不明　Caranginae gen. & sp. indet.

同定資料：稜鱗2点（図版55－16）

資料は小形である。*Trachurus* 属，*Decapterus* 属，*Caranx* 属などに由来するものと思われるが，現状では属以下の同定は困難である。

スズキ科　Percichthyidae

⒀スズキ属種不明 *Lateolabrax* sp.

同定資料：主上顎骨6点，前上顎骨2点，歯骨1点，角骨5点，前鰓蓋骨2点，耳石1点

HKC7306標本と形態的特徴が一致する資料である。耳石以外はいずれも小形で，2mmと1mmメッシュ面上で分離された。スズキ *Lateolabrax japonicus* もしくはヒラスズキ *L. latus* に同定されるが，95号土坑のサンプル③に出現した資料の歯骨高は上記現生標本と同値の2.0mmで，また107号土坑のサンプル⑥に出現した資料の前上顎骨関節突起高1.6mmは上記標本よりも小形である。したがって，これらの由来する魚体長は10～12cm前後と推定されるが，他の同定資料もこれに前後する大きさの個体に由来するものと考えられる。しかし，スズキ科の椎体について

は形態比較が充分でないので，上記標本に酷似する椎体資料をスズキ型椎体に同定し，既述の同定資料に準じて集計を行った。

なお，95号土坑サンプル④に出現した耳石は前部を欠損するが，耳石周縁は鋸歯状の突起がめぐること，裂溝の終末部は弱く下方に曲ること，上方凹面は不明瞭で楕円形を呈することなどの特徴が，Ohe(1985)のスズキ耳石の記載と図によく一致する。この資料の耳石高は4.5mmで，体長25cm前後の個体に由来すると考えられ，これだけが他の個体よりも大形になった。

タイ科　Sparidae

⒁クロダイ属種不明　*Acanthopagrus* sp.

同定資料：歯骨１点

資料は先端部破片で，105号土坑から出土した。資料は計測部を保存しないが，復原体長は20～30cmの範囲にあるものと見込まれる。

ハゼ科　Gobiidae

⒂マハゼ属種不明　cf. *Acanthogobius* sp.　同定資料：前上顎骨10点，歯骨17点，角骨４点(図版55－17，18)

資料はHKC7308標本に酷似するもので，従来，筆者がマハゼ *A. flavimanus* に同定してきたものを多く含む。日本産ハゼ科魚類は，背鰭，腹鰭の形態差や感覚管開孔と孔器の配列のちがいなどによって多くの属に分類されているが(明仁親王　1984)，今回の採集資料のように資料の保存状態が悪いと，チチブ *Tridentiger obscurus* やアシシロハゼ A. lactipes などが混入していても，これらを正確に区別することがむずかしい。そのような点からすれば，今回の同定は厳密には Gobiidae gen. & sp.にとどめておくのが妥当である。同定資料は前上顎骨関節突起高のみが計測可能で，0.8～4.0mmの範囲に出現した(第27表)。これらがすべてマハゼに由来するものだとすると，推定復原される体長は約４～５cmから13～14cmの範囲になる。なお，上記現生標本と酷似する椎体資料については比較検討がまだ充分できないので，ハゼ型椎体に同定し，集計は上記同定資料に準じた扱いとした。

第27表　マハゼ属前上顎骨関節突起高計測結果(単位 mm)

遺構名	サンプル番号 計測値*						
107号土坑	① 1.5L	③ 3.4L	④ 3.5R	⑥ 2.5R	2.9L	4.0L	⑩ 1.3L	⑪ 0.8L
109号土坑	⑦ 1.3R							

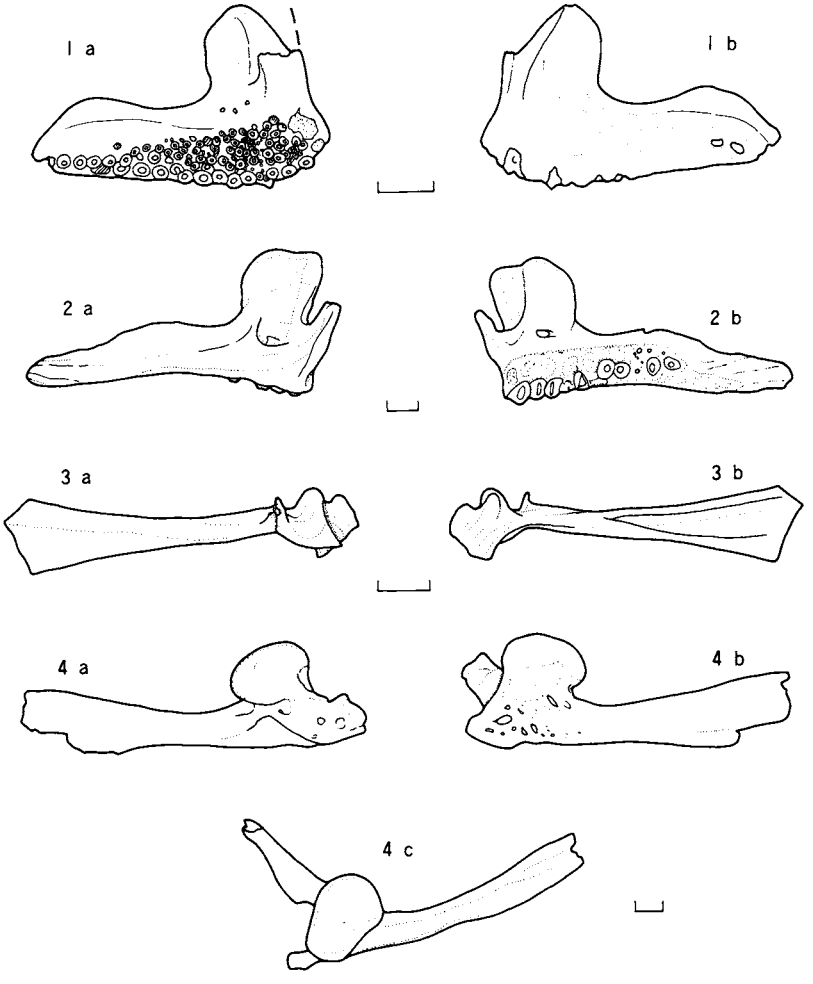
* 計測値の右にある LR は前上顎骨の左右を示す。

⒃真骨類種不明　Teleostei order indet.

同定資料：主上顎骨，前上顎骨，椎体，鰭棘など

現状では目以下の種同定が困難な資料が，調査した4基すべての土坑のコラムサンプル中に出現した。その大部分は2㎜と1㎜メッシュ面上で分離されており，小形魚に由来する骨であることが明らかである。このような同定および個体数算定のできない小形魚が多量に存在する事実は，各地の縄文貝塚でしばしばみとめられており，その性格の解明を急がなければならない。

第99図は，これらの資料のうち比較的保存状態の良い主上顎骨と前上顎骨を2点ずつ示したものである。1は，107号土坑のサンプル⑥の1㎜メッシュ面上で分離された左前上顎骨で，上向突起は基部付近から欠損し，前上顎骨枝も後端部を欠損する。歯はすべて脱落するが，その脱落痕は咬合面に密集する。外側1列の脱落歯痕径は相対的に大きく，前上顎骨枝先端部から



スケールは1㎜

第99図　同定未了の真骨類資料

1：左前上顎骨(a：内側面、b：外側面) 2：右前上顎骨(a：外側面、b：内側面)
3：右主上顎骨(a：外側面、b：内側面) 4：左主上顎骨(a：内側面、b：外側面、c：背面)

後端にわたって並ぶ。前上顎骨枝外側面には褶襞状の弱い筋が縦走する。前上顎長は5.4㎜である。2は，109号土坑のサンプル⑩の2㎜メッシュ面上で分離された右前上顎骨である。上向突起は基部付近から欠損する。咬合面は剝離が著しいが，残存する脱落歯痕の配列から判断すると，前上顎骨前端部には4ないし5個の門歯が1列並び，その内側に臼歯状の歯が1列と粟粒状の小形臼歯が散在していたものと思われる。前上顎枝後端部の内外面にやや強い褶襞がみられ，関接突起の外面基部に陥凹がある。前上顎骨長は9.2㎜である。3は，107号土坑のサンプル⑥の1㎜メッシュ面上で分離された右主上顎骨である。保存状態は良好で，欠損はみとめられない。表面は滑らかである。外側面の前部には小突起があり，上方へのびる。主上顎骨後端は截断状で，「く」の字状を呈す。全長は7.0㎜である。4は，105号土坑のサンプル⑩の2㎜メッシュ面上で分離された左主上顎骨である。前端部の内腕と外腕は前方にのび，とくに内腕の発達が著しい。主上顎骨の外側面前部には小突起がみられない。

両生綱　Amphibia

無尾目　Anura

アオガエル科　Rhacophoridae

(1)モリアオガエル　*Rhacophorus arboreus*

同定資料：上腕骨1点（図版55－22）

107号土坑のサンプル⑤から出土した資料で，欠損はない。滑車と内側上顆下端がほぼ同レベルにあること，滑車正中線が骨体正中線よりも外側にずれること，骨体幅が骨体長に比較して細いこと，骨頭窩が明瞭であることなどの特徴が，Nokariya(1983)の記載するアオガエル属の特徴と一致する。両生類の同定に練度の低い筆者には，種レベルの同定は困難であったが，後日，野苅家氏の御教示により，モリアオガエル♂に同定された。上腕骨の全長は23.9㎜である。

(2)アオガエル属種不明　*Rhacophorus* sp.

同定資料：大腿骨1点

107号土坑のサンプル⑥から出土した。遠位端を欠損するが，割れ口は古い。野苅家氏の同定による資料であるが，上記のモリアオガエル上腕骨との関係は明らかでない。

(3)ヤマアカガエル　*Rana (Rana) ornativentris*

同定資料：腸骨1点（図版55－21）

107号土坑のサンプル⑥から出土した。腸翼骨が発達し，腸骨突起角は広い。これらの特徴は，Nokairya(1984)の示す図や記載をみるかぎりではアカガエル属の特徴と一致する。筆者には種レベルの同定は困難であるが，この資料も，後日，野苅家氏によってヤマアカガエルに同定された。ヤマアカガエルはニホンアカガエル *Rana (Rana) japonica japonica* よりも山間部に生息するが，房総半島ではその地史的な性格から両者のすみ分けは完成していないと考えられており，半島南部などニホンアカガエルの分布していない地域では，ヤマアカガエルが低地

まで分布する(大野　1974)。

これが事実だとすると,107号土坑の覆土の堆積時期は縄文時代後期初頭〜前葉と推定されるので，中台貝塚の所在する芝山町付近ではヤマアカガエルが低地に生息していた時期は，少なくともこの時期まで遡れる可能性がある。なお，筆者は大網白里町上貝塚の土坑№2のコラムサンプルから得た両生類上腕骨をヤマアカガエルもしくはツチガエル *Rana*(*Rana*) *rugosa* に同定したが(小宮　1985)，その堆積時期は，ずっと下って17世紀初頭と考えられている(小高 1985)。

(4)カエル類種不明

同定資料：脊椎骨

科以下の同定が困難な脊椎骨である。107号土坑から出土しており，出土地点の深度も上記のアオガエル属やアカガエル属とほぼ等しいので，これらのいずれかに由来する可能性が高い。

哺乳綱　Mammalia

齧歯目　Rodentia

(1)カヤネズミ属もしくはアカネズミ属種不明 *Micromys* sp. or *Apodemus* sp.

同定資料：下顎骨2点（図版55－29，30）

107号土坑から出土した。筋突起と関節突起の間の弯入は比較的浅く，臼歯は相対的に大きい。第3大臼歯は角前切痕とほぼ同位置か，やや後方にある。形態的にはカヤネズミ *Micromys minutus* に最も似る。サンプル⑪出土の下顎資料は保存状態が良好で,下顎全長(Driesch　1976)は12.9㎜に達する。サンプル⑥出土の資料は角突起を欠損する。この資料は上記の資料とほぼ同大であるが，別個体に由来するものと考えられる。アカネズミ *Apodemus specious* やヒメネズミ *A. argenteus* の可能性も考慮すべきであるが，現状では細かな比較検討ができない。

なお,107号土坑からは齧歯目に特徴的な三角筋粗面をもつ上腕骨や第3転子の発達した大腿骨などが出土する。これらの大腿骨は2つの型に分類されるが，現状では正確な種同定は困難である。

食肉目　Carnivora

(2)イヌ科種不明　Canidae gen. & sp. indet.

同定資料：遊離歯2点

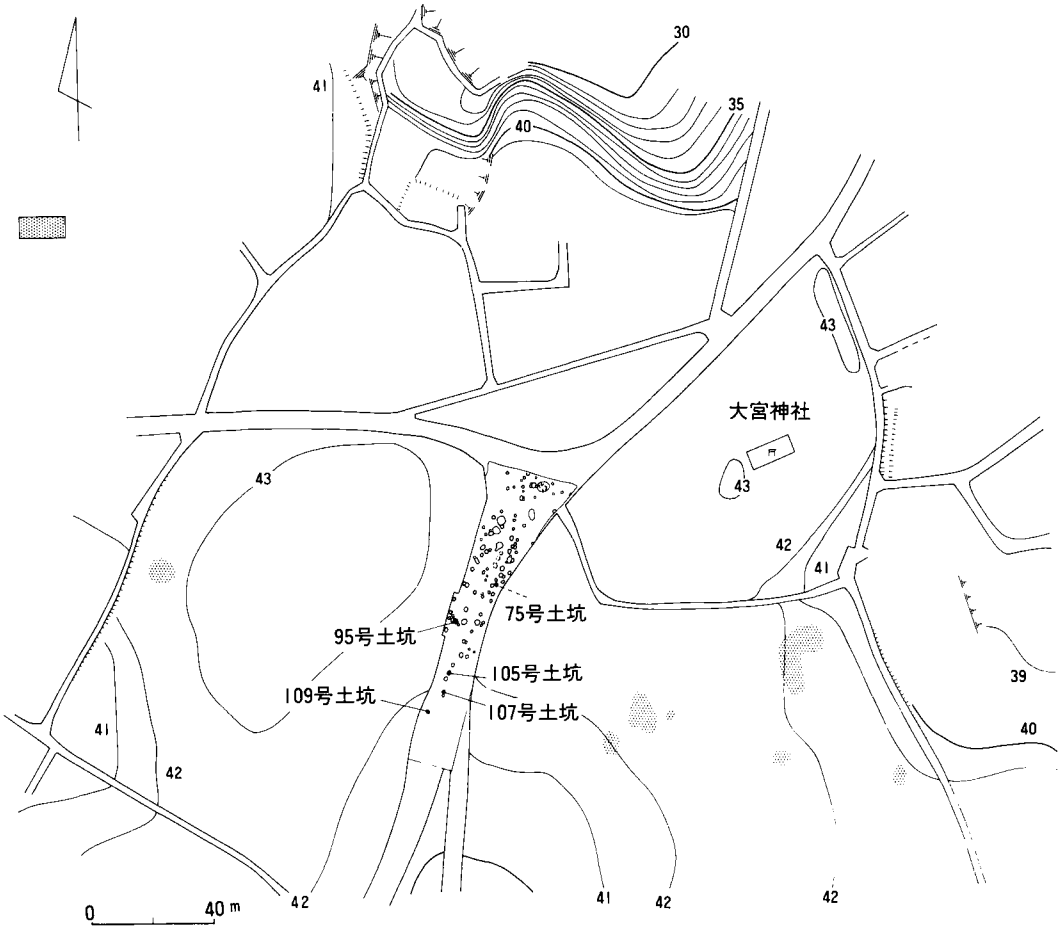
資料は遊離した臼歯である。大きさは比較的小形で,タヌキ *Nyctereutes procyonoides* の可能性が強い。

(4) 考察

(a) 中台貝塚の規模

第100図は,今回の調査にともなって作成した貝塚周辺地形図に今回検出した遺構の平面分布図を重ねたものである。検出遺構の多くは土坑であるが，覆土内に貝層をもつもの(75，95，105，107，109号土坑)は縄文時代中期もしくは後期の遺物を堆積しており，75号土坑以外は調査区域の南半分に偏在している。貝層はこれ以外にも調査区両脇の台地上に点在しているので，これらの貝層下には貝層をともなう縄文時代の住居跡や土坑が存在する可能性がある。

ところで，中台貝塚は早くから知られた遺跡であるが，過去に発掘調査の報告例はなく，遺跡の広がりやその内容などについては不明な点が多い。実をいうと筆者は，慶応義塾大学考古学研究室が1967年度に行った栗山川流域の踏査に参加し，たまたま当地を訪れている。当時の筆者が1／25,000地形図上に残した記録によると，中台貝塚の貝層は第100図に示した以外に大



第100図　中台貝塚周辺と貝層分布図

宮神社の北西方向にある台地斜面部にも存在する。この記録に誤りがないとすると，当貝塚の貝層分布は第100図に示すよりも広範囲にわたり，巨視的には東西約250m，南北約170mほどの長円の円弧上に不連続にならぶ。

もし，これらの貝層が今回調査した貝層を残したものと同じ集団によってつくられたものであれば，中台貝塚もこの時期に特徴的な馬蹄形もしくは環状貝塚の形態をとる大規模な集落遺跡の可能性がある。しかし，中台貝塚の東には貝塚とほぼ同時期に形成された可能性が高い中台遺跡A～Cが至近距離で隣接しており(清水 1958，川戸 1975，千葉県文化財センター 1986)，貝塚の規模や性格などについてはこれらの遺跡群との関連からも検討を要するものと思われる。

(b) 産出魚貝類の特徴

4基の土坑コラムサンプル中に出現した魚貝類の最小個体数を遺構別に示すと，第28表のようになる。貝類では4基すべての土坑のコラムサンプル中に出現したのは，ダンベイキサゴとチョウセンハマグリの2種であるが，チョウセンハマグリは1種だけで全個体数の約91%以上

第28表　遺構別産出魚貝類の最小個体数比較

	種　名	遺構名				合計	相対頻度
		95号土坑	105号土坑	107号土坑	109号土坑		
腹足綱	カサガイ科？種不明				2	2	0.05%
	ダンベイキサゴ	1	21	68	22	112	3.01
	イシダタミガイ				2	2	0.05
	クボガイ				1	1	0.03
	クマノコガイ				2	2	0.05
	ウミニナ		32	1		33	0.89
	ツメタガイ		1		3	4	0.11
	イボニシ		2		4	6	0.16
	レイシガイ		1			1	0.03
	腹足綱種不明	1		1		2	0.05
二枚貝綱	ムラサキインコガイ	1		2	32	35	[illegible].94
	ヒメイガイ				1	1	0.03
	マガキ		79		1	80	2.15
	イタボガキ？				2	2	0.05
	ヤマトシジミ			4	6	10	0.27
	ウネナシトマヤガイ	1			1	2	0.05
	チョウセンハマグリ	1,555	1,187	58	585	3,385	91.04
	ハマグリ		14	4	1	19	0.51
	ハマグリ属種不明		8	1		9	0.24
	アサリ		1	1		2	0.05
	オキシジミ		1		1	2	0.05
	フジノハナガイ	4	1		1	6	0.16
	合　計	1,563	1,348	140	667	3,718	99.97%
魚類	サメ目種不明			2		2	1.11%
	軟骨魚綱種不明		1	1		2	1.11
	マイワシ			6		6	3.33
	ニシン科種不明				1	1	0.56
	カタクチイワシ			17	4	21	11.67
	タナゴ亜科種不明			10	3	13	7.22
	ギンブナ	3	1	68	2	74	41.11
	ギバチ			1		1	0.56
	ウナギ	1	4	11	5	21	11.67
	ボラ科種不明	1	1	2	2	6	3.33
	アジ亜科種不明				1	1	0.56
	スズキ属	4	1	3	2	10	5.56
	クロダイ属		1			1	0.56
	マハゼ属		1	8	6	15	8.33
	真骨類種不明	1	1	2	2	6	3.33
	合　計	10	11	131	28	180	100.01%

を占めている。魚類では，15種類のうちギンブナ，ウナギ，ボラ科，スズキ属の4種類だけが4基すべての土坑のサンプル中に出現し，その頻度も相対的に高い。

貝類では圧倒的に優勢なチョウセンハマグリとダンベイキサゴは，外洋に面した砂浜海岸に生息する貝種で，これら以外の産出貝類の大部分も外洋のもので占められている。しかし，このような傾向に反して，魚類は外洋性のものは支配的でなく，淡水産種もしくは汽水産種が優勢である。

このように，縄文時代の遺跡や遺構から優占的に出土する魚類と貝類の生態が一致しない例は極めて少なく，中台貝塚産魚貝類の重要な特徴となるが，このことは，魚類と貝類の漁場を考える上で貴重である。

（c）漁場

4基の土坑内のサンプルに優占的に出現した魚類と貝類の漁場が，互いに性質の異なる環境になるらしいことは前項で述べた。ここでは同定したすべての魚貝類と生態別に分類しなおし，その構成がどのようになっているかを明らかにして，遺跡に持ちこまれた魚貝類の漁場の性格についてもう少し詳しく検討してみる。

第29表は，第28表に示した魚貝類を生態別に8つのグループ(A～D，Ⅰ～Ⅳ)に分け，それぞ

第29表　生態別魚貝類最小個体数分布

魚類			貝類		
Aグループ	淡水域で生活するもの……	59.39%			
	タナゴ亜科	7.22%			
	ギンブナ	41.11			
	ギバチ	0.56			
	ウナギ(未成熟体)	10.5			
Bグループ	淡水域～海へ降るもの……	1.17%	Ⅰグループ	鹹度の低い汽水域に生息するもの……	0.27%
	ウナギ(成熟体)	1.17		ヤマトシジミ	0.27%
Cグループ	汽水種もしくは汽水域に侵入する海魚……	33.9%	Ⅱグループ	内湾の砂底もしくは泥底に生息するもの…	3.86%
	マイワシ	3.33		ウミニナ	0.89
	ニシン科種不明	0.56		ツメタガイ	0.11
	カタクチイワシ	11.67		マガキ	2.15
	ボラ科種不明	3.33		イタボガキ	0.05
	アジ亜科	0.56		ウネナシトマヤガイ	0.05
	スズキ属	5.56		ハマグリ	0.51
	クロダイ属	0.56		アサリ	0.05
	マハゼ属	8.33		オキシジミ	0.05
Dグループ	生態を明らかに出来ないもの……	5.55%	Ⅲグループ	外洋の砂底に生息するもの……	94.21%
	サメ目種不明	1.11		ダンベイキサゴ	3.01
	軟骨魚綱種不明	1.11		チョウセンハマグリ	91.04
	真骨類種不明	3.33		フジノハナガイ	0.16
			Ⅳグループ	外洋の岩礫底などに生息するもの……	1.18%
				イシダタミガイ	0.05
				クボガイ	0.03
				クマノコガイ	0.05
				イボニシ	0.03
				レイシガイ	0.05
				ムラサキインコガイ	0.94
				ヒメイガイ	0.03

れの最小個体数(相対値)が各グループ内にどのように分布するかを調べたものである。貝類の生態区分は岡田ほか監修(1965)にもとづくもので，内訳は表中説明どおりであるが，魚類の区分について説明を加えると以下のようである。

Aグループは，コイ科と性成熟に至らないウナギが属するグループである。ウナギの成熟度の判定は，主上顎骨資料の計測値(第26表)から推定復原した体長にもとづくが，算定した21個体のうち，この部位が計測可能な資料は10個体分にとどまった。計測対象からはずれた11個体については，第26表推定した成熟体と未成熟の混合割合(1：9)に従って，この中に含まれる未成熟体の混合比をを割り出す方法をとった。この方法によると，未成熟体の推定総尾数は18.9尾，相対値では10.39となる。Bグループは，下り鰻の体長範囲内にあるウナギで，漁獲される可能性のある水域は，淡水域～海域までの広い範囲に及ぶ。相対値1.15は11.54－10.39によって導いた。Cグループはいずれも海産魚であるが，季節的もしくは成長のある段階などに汽水域に侵入するもので，各魚種とも採集資料から推定復原される体長範囲ではその確率が相対的に高いものである。Dグループは現状では種同定の精度が低いために，その生態を明らかに出来ないものである。

上記のようなA～Dまでのグループ分けによると，魚の個体数ではAグループが最も多く，全体の約60%近くを占めている。これについでCグループが全体の約34%を占める。Aグループの魚種組成は比較的単純で，沼や池などの浅い止水域か流れのゆるい河川の下流域に出現する魚種によって構成される。したがって，Aグループの魚と縄文人が接触しうる場所は，上記のような性質をもった淡水域である。一方，Cグループには現在8種類の魚種が属しているが，将来，同定の技術と精度が高まれば，現在のところ生態が明らかでないDグループの大部分はCグループに改められる可能性が高い。そうだとすると，Cグループに属する魚類の最小個体数も増加し，Aグループに接近するが，DグループからAグループとCグループへの加入尾数の相対差が46尾以上にならないかぎり両グループ間における最小個体数順位の逆転はおこらない。

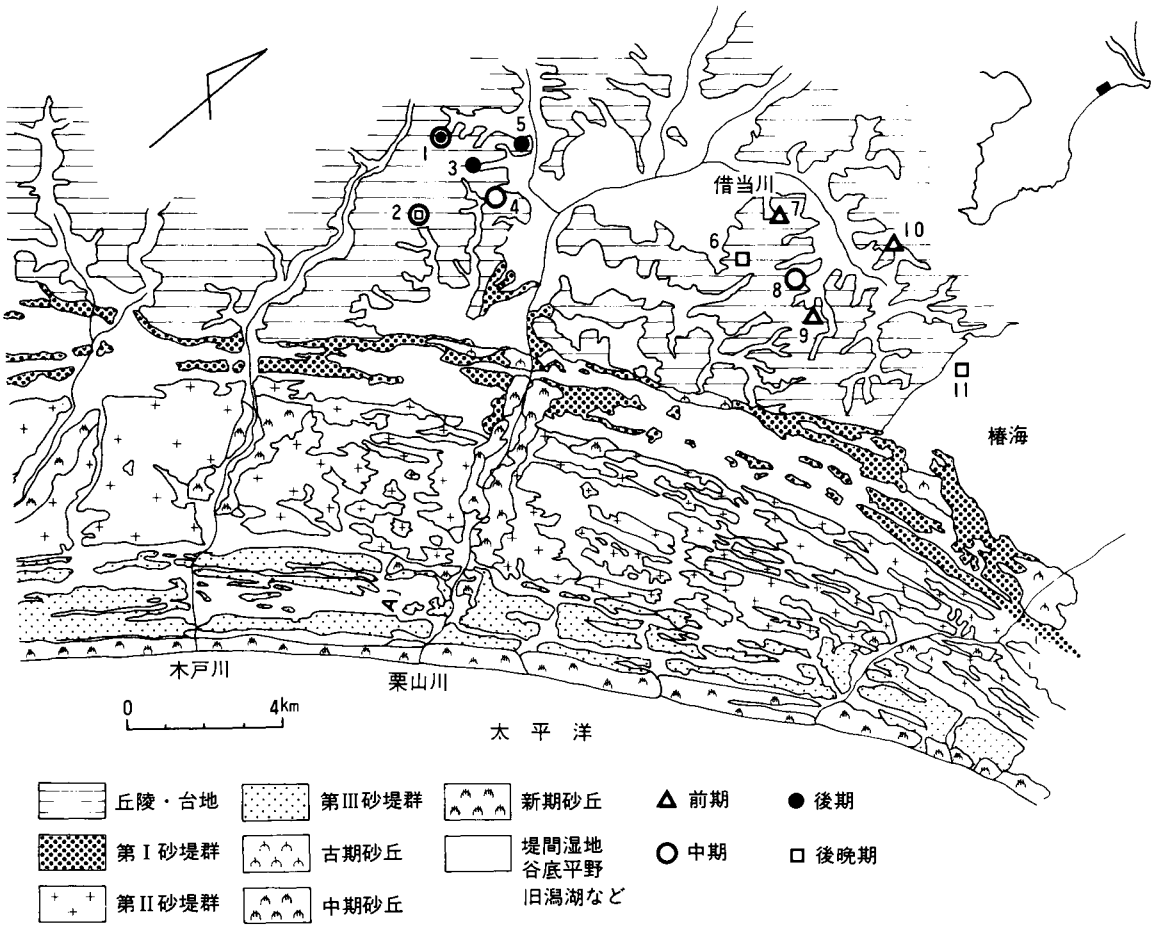
ところで，Cグループの魚と縄文人が接触しうる場所は汽水域と海の広い範囲にわたるが，この地方の沿岸海域に出現するサバ，カマス，マダイなどの沿岸魚がこのグループに含まれていないので，両者の接触水域は汽水域内にとどまっていた可能性が強い。

一方，貝類は第IIIグループが最も優勢で全体の約95%を占めている。第IIIグループは外洋に面した砂底に生息しており，魚とりの主漁場と推定される汽水域や淡水域には分布しない。また第IVグループは，銚子市余山貝塚や本県の夷隅郡の貝塚で多く出土するもので，低鹹な環境には生息しない。

第101図は，栗山川下流域の地形図を森脇(1979)の形態区分にしたがって略写し，縄文遺跡を加筆して作成したものである。森脇(1979)によると，九十九里平野に10列以上分布する砂堤列は縄文海進極相期以降に形成されたもので，縄文時代中期後半には平野の南部で第I砂堤群が

発達するが，平野北部では砂堤の形成は顕著ではなく，その背後の潟湖はいぜん海水の流入する環境下にあった。そして，台地内の谷底平野が汽水的な環境から淡水化するのは，縄文時代後期後半であるという。

この考えに従うと，中台貝塚がつくられた当時は，栗山川下流の低地一帯はC′グループの魚や第I～IIグループの貝が生息するのに適した環境だったと考えられる。この低地のほぼ中央部にある栗山川と高谷川の合流地点と貝塚との距離は，約4～5kmの範囲内にあって比較的近距離であるので，上記のグループに属する魚貝類が比較的高い頻度で出土した今回のデータを解釈するうえで不都合はない。しかし，貝塚からはAグループの魚が最も高い頻度で出現した事実にもとづけば，台地下の谷底平野の淡水化は縄文時代後期後半よりも早い時期に始まっていた可能性がある。このことについては将来のデータの蓄積をまって検討されるべきであるが，いずれにせよ中台貝塚をつくった縄文人が日常的に入手していた魚の大部分は砂堤後方にある



第101図　九十九里浜北部の地形区分と主要縄文遺跡分布（森脇1979に加筆）
1．中台 2．姥山 3．鴻ノ巣 4．木戸台 5．牛熊 6．久方 7．宿井戸 8．八辺 9．松山 10．飯高 11．多古田

水域内から得たものと考えられ，このことについては，かつて清水(1958)が鴻ノ巣，牛熊，八辺など栗山川下流域の貝塚産魚類の組成内容から推定した結果と矛盾しない。しかしながら，彼らが入手した貝の主漁場がこの砂堤後方に存在していた可能性は低く，とくに第III～IVグループに接触するためには砂堤群の外側まで出なければならなかったと考えられる。

以上のように第29表に示す魚貝類を彼らが安定的に入手していたとすれば，それらの多様な産出環境に対応した計画的な運営制度――季節的な仕事割，分業，交易など――が確立していた可能性がある。そこで次項では当時の魚とりの季節性について検討を加えてみる。

(d) 107号土坑出土魚類の季節性

107号土坑コラムサンプルから同定した魚類は，今回筆者が担当した4基の土坑のコラムサンプル中で最も組成内容が豊富である。また，この中には復原した魚体長にもとづいて漁獲時の季節を推定しうるものが少なからず存在するので，当時の魚とりの季節性を検討するのに都合がよい。

ところで，このような検討を行う際に最も重要なことは，魚類の季節性の推定や最小個体数の算定がどのように行われたかを明らかにすることである。後者については1に詳述したので，以下ではまず魚種資料の出現頻度が最も高い107号土坑から同定した12種類のうち，季節性の推定しうる7種類について魚種別　にその判定法を示し，つぎに漁期の問題についての検討を加える。

マイワシ：近藤(1985)によると，マイワシの産卵は11～12月頃から始まるが，主産卵期は2～3月で，孵化した仔魚は春～夏にかけて沿岸域や内湾，汽水域に来游し，活発に餌をとって体長6～12cmに成長する。一方，11～12月に産卵した発生期の早いものは満1年後に体長14～15cmに成長し，この中にはその年のうちに成魚に発育するものがある。本コラムサンプル中に出現した6点のマイワシの第1，第2脊椎の計測結果（第22表）によると，サンプル④と⑥に出現した資料はHKC8603標本よりも小形で，推定復原体長は10cm前後であるが，他の4点はこれよりもさらに小形で復原体長は10cm未満である。これらが主産卵期に生まれたものか，それよりも早い時期に生まれたものかは明らかでないが，確率的に前者をとると漁獲された時期はどれも夏である。また，もしこれらが後者に由来するとすれば，上記の体長範囲には主産卵期生まれよりも早く到達する。しかし，この体長に成長するには春～夏の索餌期を経ていると考えられるので，遡っても春以前には想定できない。

カタクチイワシ：本種の成長については，これまでに多くの研究者が研究しているが，その結果はかならずしも一致していない。しかし，研究結果を総合すると体長は孵化後6ヶ月で50～90mm，12ヶ月で100～132mmである(久保 1961)。本コラムサンプル中に出現した17点の第1脊椎の計測結果(第23表)にもとづくと，サンプル①，②，⑥，⑦で出現した小形資料4点(1.1～1.4mm)を除く13点はHKC76014標本とほぼ同大で，推定復原体長が約9～11cmの孵化後6ヶ月

から1年のものによって占められる。カタクチイワシの産卵期は周年におよぶ場合があるが，①その盛期は春と秋に沿岸で行われること，②本種の局地的な回游はかなり顕著で，大村湾，瀬戸内海，東京湾などでは春に湾外から湾内に移動し，秋の水温低下とともに湾内から沖合に出る傾向にある(山田 1958，前川・八柳 1951)ことなどにもとづくと，当時のカタクチイワシの漁期は春から秋におよぶとしても，その盛期はおそらく春と秋であろう。

タナゴ亜科：2に既述したようにサンプル⑪で採集した咽頭骨がいずれもヤリタナゴに由来するとすれば，その計測値(第24表)と小林・前田(1961)にもとづく復原体長範囲は約2～5cmで，その大部分は体長2.4cm前後である。宮地ほか(1976)によると，ヤリタナゴの産卵期は4～6月で，1年で体長2～4cmに達する。したがって復原された体長組成にもとづくと，サンプル⑪だけに集中して出現した本種の漁獲時期は春であるが，咽頭骨長1.5mm未満の資料が1mmメッシュ面を通過していれば，生後満1年未満の体長群の存在はエラーされたことになる。

ギンブナ：第25表に示す咽頭骨の計測結果と小林・前田(1962)によると，本コラムサンプルに出現したギンブナの復原体長範囲は約3.5～13cmで，体長5～5.5cm前後のものが数量的には最も多い。宮地ほか(1976)によると，ギンブナの産卵期は3～6月におよび，飼育下では1年で全長8～10cmに成長する。上記の復原体長を飼育下のデータにあてはめるのはむずかしいが，その最小群と出現頻度の最も高い体長群はおそらく生後満1年魚に相当すると考えてよいであろう。そうだとすると，その漁獲時期は春で，同じ層準から出土するこれよりも大形で漁獲時期を明らかに出来ないギンブナもこの季節に漁獲されたものと考えるのが自然である。ただし，生後満1年に達していないギンブナの咽頭骨は1mmメッシュ面を通過する可能性があるが，もし，サンプルの水洗中に，このようなことがたびたび生じたとすれば，その漁獲は春以前に遡るわけである(小宮 1986a)。

ギバチ：2に述べたように復原体長は8cmに満たないと推定される。宮地ほか(1976)によると，東京付近のギバチの産卵期は6～7月である。しかし孵化後の成長過程は明らかでないので，漁獲時期を割り出すことは困難であるが，比較に用いたHKC7911標本は上記資料よりも十分大きく，また標本の採集時期が7月である事実を考えると，漁獲時期はこれよりは早く，春～初夏ごろであった可能性がある。

スズキ属：いずれも0年魚相当の小形資料が同定されたが，体長復原が可能な資料はサンプル⑥に出現した前上顎骨のみにとどまった。2で述べたように，この資料は体長10～12cm前後の個体に由来すると推定される。これ以外の同定資料もいずれも小形で，復原体長も同程度と推定される。松島湾における観測によると，スズキの産卵期は12月中旬～翌1月上旬であるが，0年魚の成長は7月に体長8.5cm，以下，8月：12.5cm，9月：15cm，10月：17cmに達する(畑中・関野 1962)。ヒラスズキの生態や成長度もこれに準じていると思われるので，本コラムサンプル中に出現したスズキ属の漁獲時期は8月を中心とする夏～初秋と推定される。

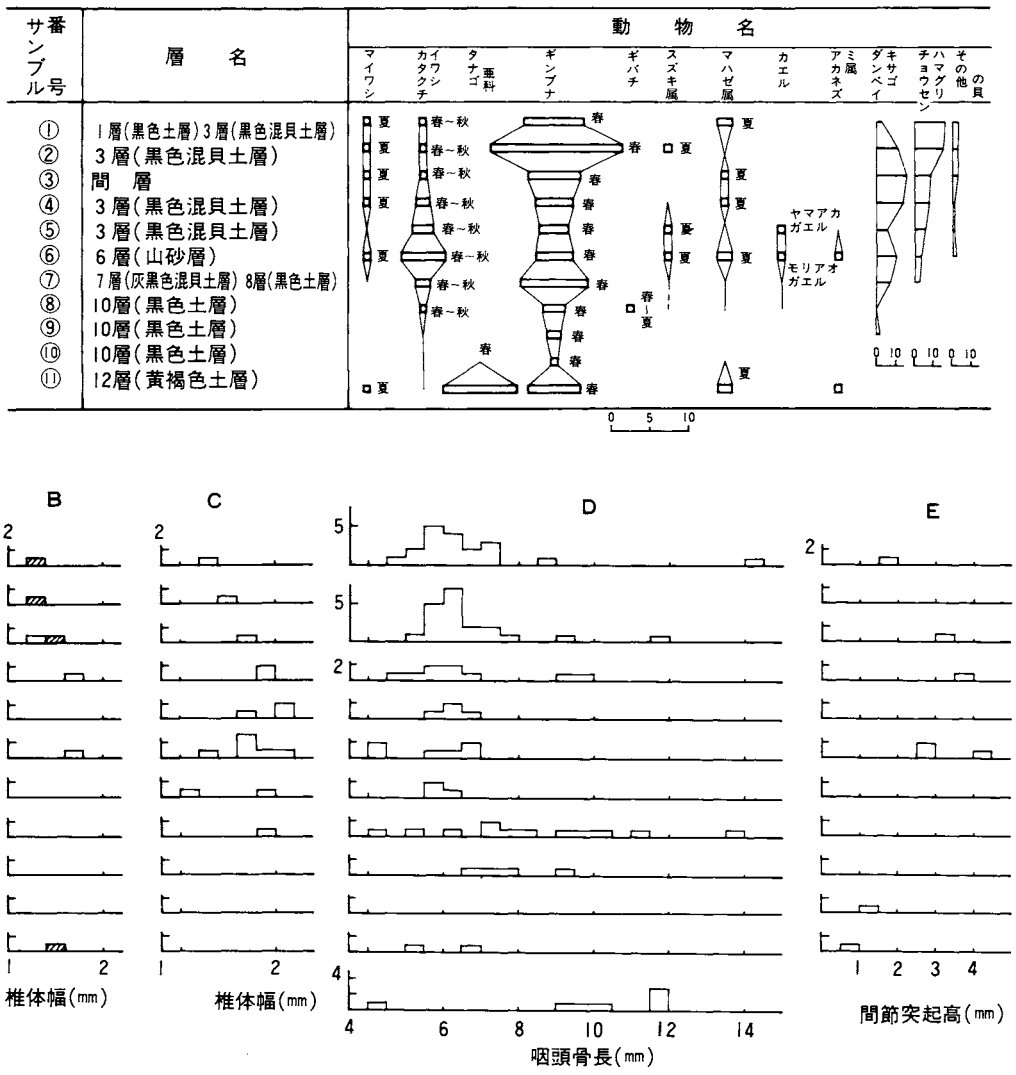
マハゼ属：宮崎(1940)によると，マハゼの産卵盛期は比較的短くほぼ4月に集中する。しかし，孵化後は，生後約1年で産卵する産卵群と成長が相対的に遅く翌々年に産卵する未産卵越年群の2群が生じる。神奈川県金沢地先では，7月下旬～8月にその年生まれの産卵群は体長4～5cm，11月に9cm前後に達し，晩秋～初冬にかけて前年以前に生まれた群とともに沖合の深場に移動する。一方，前年生まれの未産卵越年群は5月には体長10cm前後に成長しており，9月には13～14cmに達する(宮崎 1940)。ところで，第27表に示した資料がすべてマハゼに由来するとして現生標本(HKC7308～7327)と比較すると，本コラムサンプルに出現したマハゼの復原体長は，サンプル①が6～7cm，同じく③と④が12cm前後，⑥がそれぞれ13～14cm，10～11cm，10cm前後，⑩が6～7cm，そして⑪が4cm前後に推定される。サンプル⑪の資料は，その年生まれの産卵群もしくは非産卵群で8月ごろに漁獲されたものに由来する可能性が強い。サンプル⑪の上位にあるサンプル⑩～③までの出現資料は上位のものほど大きさを増す傾向がみられるので，時間の経過とともにより成長の進んだ個体が漁獲対象に選ばれた印象をうけるが，サンプル①で再び小さな個体が出現する(第102図)。したがって，当時，冬場に深みに落ちたハゼをねらう沖釣りをやっていないことを前提にすると，その漁獲時期は8月以降の夏～初秋で，0年魚と前年生まれの非産卵群を混獲していたと考えられる。

第102図は，107号土坑から同定した12種類の魚のうち，上述した7種類について推定される漁獲時期と最小個体数をサンプルの単位別に示したもので，同図B～Cにはマイワシ，カタクチイワシ，ギンブナ，マハゼ属の計測値を同様の方法で示した。なお，各単位サンプルは発掘中に観察した層序とは無関係に採取したものであるが，サンプル採取地点の平面的位置と標高などの記録類を参考にすると，両者の関係は第102図Aのように対比される。

この図からわかるように各魚種の推定漁獲時期は，タナゴ亜科とギンブナが春，ギバチが春から初夏までの期間，マイワシが夏，スズキ属とマハゼ属が8月を中心とする夏から初秋までの期間となる。このように，漁獲時期が春から秋までの長期間に推定可能なカタクチイワシをのぞくと，各魚種の推定漁期は各層をつうじてほぼ一定しており，漁獲時期が確実に冬に推定できる魚種はない。ところで，107号土坑以外の3基の土坑のサンプルから同定した各魚種は，107号土坑出土の各魚種とそれぞれ類似した体長組成となるので，これらの魚の漁獲時期も上記のと同様の期間に推定してよいと思われる。

したがって漁期の推定法に大きな誤りがなく，また4基の土坑のサンプルから得た同定結果が貝塚全体の傾向をよく代表しているとすれば，第102図から明らかなことはつぎの2点である。すなわち，その第1は中台貝塚をつくった人たちが魚とりをした期間は春から秋までの季節に限られており，冬には魚をとっていないこと，第2はコイ科の魚は専ら春にとっていたらしいことである。

栗山川下流域や利根川下流域などのように縄文海進極相期以降の海水準の低下にともなって



第102図　107号土坑サンプル出土の主要魚類の最少個体数と推定漁期(A)ならびに計測結果(B～E)
B：マイワシ第1(白ぬき),第2脊椎(斜線)、C：カタクチイワシ第1脊椎、D：ギンブナ咽頭骨、E：マハゼ属前上顎骨

広く浅い汽水性の潟湖が出現したと考えられる地域では，このような汽水湖をはさんで淡水域と海洋が連絡し，生産性の高い水系がつくられたはずである。このような地域では長い魚食文化の伝統をもつ縄文人が，豊富に出現する川や海の魚を追って漁場や漁具を使いわけ，それぞれの季節ごとに食用に適した魚を選択的に漁獲するシステムをこの時期までに開発し，漁撈の運営をはかっていたとしても不思議はない。日本産のコイ科魚類は産卵期もしくはその直前にシュンを迎えるものが多く，そのような意味からすれば今回の結果は注意すべきかもしれない。

千葉県印旛沼に臨む縄文時代後期の石神台貝塚からは，生後満1年に達していないと推定されるギンブナ，タナゴ亜科[1]，ウグイ属 *Tribolodon* sp.，コイ *Cyprinus carpio* が比較的高い

頻度で同定されており，これらのコイ科魚類の漁獲時期も春もしくはそれ以前の時期と考えられる(小宮 1984)。利根川下流域には，小山台貝塚(金子 1976)，冬木貝塚(赤澤・小宮 1981)など石神台貝塚と類似した産出魚類組成をもつ後期貝塚が存在することが最近の調査によって明らかになっているが，このような例は栗山川下流域でも将来追加されるものと思われる。

なお，第102図は産出魚類の漁獲時期を示唆するだけでなく，107号土坑の覆土がどのように堆積したかを知りうる情報をもっている。今回，動物遺存体を調査した4基の土坑は，いずれも小竪穴とよばれる遺構の範疇(堀越 1975)に属しているが，小竪穴が当時どのような目的で作成され，どのように利用されたかについてはまだ定説がない。最近になって，小竪穴内の堆積物がどのくらいの時間経過をへて形成されたかを検討する報告例がいくつか出されているが(小池 1984，小宮 1986bなど)，まだ類例は少なく，将来のデータ蓄積を待って考察を加えたい。

註

(1)原記載ではそれぞれフナ属，タナゴ属であるが，現在では上記のように改めるのが妥当である。

引用文献

赤澤威・小宮孟　1981　冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動。『茨城県教育財団文化財報告1X 冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』　茨城県教育財団：1－37，7 pls.

明仁親王　1984　ハゼ亜目。益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫編『日本産魚類大図鑑』：228－229・東海大学出版会

千葉県文化財センター　1986　『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』　28 maps, 140pp., 4pls.

Driesch, A. von den 1976 "A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites."*Peabody Museum Bulletin 1, Harvard Univ.,* 137pp.

畑中正吉・関野清成　1962　スズキの生態学的研究　II.日本水産学会誌28(9)：857－861.

堀越正行　1975　小竪穴考(1)　史館5：11－25

堀田秀之　1961　日本産硬骨魚類の中軸骨格の比較研究。農林水産技術会議事務局研究成果5，155 pp.，69pls.

金子浩昌　1976　小山台貝塚出土動物遺存体。永松実・斎藤隆・渡辺昌宏編『小山台貝塚』　図書刊行会：83－95

川戸彰　1975　縄文式文化。横芝町史編纂委員会編『横芝町史』：23－75

小林久雄・前田孟　1961　日本産タナゴ亜科魚類の咽頭骨と咽頭歯。日本水産学会誌27(2)：113－118

小林久雄・前田孟　1962　日本産ウグイ亜科とコイ亜科の咽頭骨と咽頭歯について。動物学雑誌71(10)：307－312

小宮孟　1984　貝塚出土の自然遺物。古内茂・三浦和信編『石神台貝塚・戸ノ内貝塚』　印旛村史編纂委員会：59－82

小宮孟　1985　上貝塚出土の動・植物遺存体。大網白里町史編纂委員会編『大網白里町上貝塚発掘調査報告書』：26－35，2 pls.

小宮孟　1986a　水洗選別法による遺物採集の効果。千葉県文化財センター研究紀要10：101－112

小宮孟　1986b　コラムサンプル出土の動物遺存体　千葉文化財センター『千原台ニュータウンIII　草刈遺跡(B 区)：』549－598

近藤恵一　1985　マイワシ。沖山宗雄・鈴木克美編『日本の海洋生物』　東海大学出版会：87－91

久保伊津男　1961　『水産資源各論』　恒星社厚生閣，(2＋)7＋396p

前川兼佑・八柳健郎　1951　山口県瀬戸内海に於ける重要生物の資源学的研究，第1報，カタクチイワシの生態学的研究。日本水産学会誌　16(12)：174－178

松井魁　1972　『鰻学〔生物学的研究篇〕』恒星社厚生閣．5＋283pp

宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦　1976　『原色日本淡水魚類図鑑』　保育社　462pp.，56pls.

宮崎一老　1940　マハゼに就て。日本水産学会誌9(4)：159－180

森脇広　1979　九十九里浜平野の地形発達史。第四紀研究18(1)：1－16

長田芳和　1976　世界のタナゴ類。淡水魚　2：120－133

中村守純　1971　『原色淡水魚類検索図鑑(第2版)』　北隆館　260pp

Nokariya, H. 1984 Comparative osteology of japanese frogs and toads for paleontologocial studies (III):*Rana.* 国立科学博物館研究報告C類10(2)：55－79

小高春雄　1985　調査の成果，中近世。大網白里町史編纂委員会編『大網白里町上貝塚発掘調査報告書』：11－22

Ohe, F. 1985 "Marine fish-otoliths of Japan." *Special Volume of Bulletin (Earth-Science), The Senior High School Attached to The Aichi University of Education.*,184pp.

岡田要・内田清之助・内田亨監修　1965　『新日本動物図鑑(中巻)』　北隆館　12＋803pp.2756figs.

酒詰仲男　1961　『日本縄文石器時代食料総説』　土曜会3＋322pp

清水潤三　1958　千葉県栗山川沿岸渓谷における貝塚の地域的研究(予報)。史学31(1～4)：193－230

高橋善弥　1962　瀬戸内海とその隣接海域産硬骨魚類の脊梁構造による種の査定のための研究。内海区水産研究所報告16：1－198，pls　1－122，

山田鉄雄　1958　大村湾内のカタクチイワシの産卵生態。長崎大学水産学部研究報告6：73－82

魚類資料の同定に用いた比較現生標本

記載は，標本番号(HKC＝Hajime Komiya's Collection)，魚種名，標準体長(cm)，採集場所，採集年月日の順に行った。

HKC 7306スズキ *Lateolabrax japonicus* 12.5 千葉県一宮川(新地) 1973, Ⅷ, HKC7308マハゼ *Acanthogobius flavimanus* 7.8 千葉県一宮川(新地) 1973, Ⅷ, HKC7309 8.0, HKC7310 9.0, HKC7311 9.0, HKC7312 9.0, HKC7313 9.0, HKC7314 9.2, HKC7315 9.0, HKC7316 9.5, HKC7317 9.6, HKC7318 10.0, HKC7319 10.2, HKC7320 10.2, HKC7321 10.0, HKC7322 10.5, HKC7323 11.0, HKC7324 11.0, HKC7325 11.0, HKC7326 12.0, HKC7327 12.0, HKC7430ボラ *Mugil cephalus* 22.0 横須賀市秋谷 1974. Ⅸ, HKC76014カタクチイワシ 11.3 東京(干物) 1976. Ⅹ, HKC7906ギンブナ *Carassius auratus langsdorfii* 14.0 東金市雄蛇ヶ池 1979. Ⅳ, HKC7911ギバチ *Pseudobagrus aurantiacus* 9.2 千葉県養老川(加茂) 1979. Ⅶ, HKC8203ウナギ 全長56.0 千葉県栗山川(光町) 1982. Ⅶ, HKC8603マイワシ *Sardinops melanostictus* 11.8 東京(鮮魚)

第4節　小　括

本県は全国でも有数の貝塚県としてしられている。しかしその分布は古東京湾沿岸域や，現利根川流域部に集中し，こと九十九里沿岸地域に関しては分布の密度が薄くなっている。

今回報告した中台貝塚はこの九十九沿岸地域にあり，栗山川水系に属する谷に面した貝塚である。この水系沿いには19箇所ほどの既知の貝塚があるが，当貝塚は前期の八日市場市飯高貝塚等とならび，その内でも最も内陸部に位置している。

中台貝塚の記録上の初見は昭和33年のことで，清水潤三氏による「千葉県栗山川渓谷における貝塚の地域的研究（予報）」である。戦後慶応大学では氏を中心に九十九里地域で精力的な調査を実施しているが，その際の分布調査で明らかになったものとみられる。

中台貝塚の遺跡全体は，列点状に5箇所ほど分布する貝塚を含む径50m，面積10,000m²の範囲が見込まれる。遺物の散布状況からは更に広範囲にひろがる可能性が高い。今回調査された箇所は，遺跡南半部中央を南北に縦断する道路敷部分である。

検出された遺構は中期末から後期の土坑109基，住居跡1軒，炉跡7基，埋甕炉跡7基である。この内主体となるものは，加曽利EⅣ期と加曽利B期のものであった。遺物は加曽利B式土器が圧倒していた。遺構・遺物の検出状況は各時期により差が認められる。部分的な調査であり，即断はできないが，住居跡や炉跡を中心に土坑がとりまく配置が想定される。

また当時の遺跡周辺の環境・生産活動の跡を推し量る上で，非常に重要な資料を得ることができた。土坑から検出された貝層では、中期末加曽利E期には外洋種のチョウセンハマグリを主体に内湾正の貝を若干混じえた構成がみられ，後期堀之内期ではチョウセンハマグリ・ダンベイキサゴが主で，加えて汽水種のヤマトシジミが検出されている。この貝の構成の変化には海退の影響が考慮されよう。外洋種の貝は遺跡から5km以上離れた海岸まで行ってとったと思われるが，当時の生業圏を考える上で示唆的な結果である。魚骨ではギンブナ等の淡水産のものが，主体を占めており，内陸の貝塚の在り方を示すものとして注目される。

この他，土偶・土製品にもみるべきものがあったことを加えておく。

今回の調査は中台貝塚のごく一部について行なったにすぎず，全容に関しては今後の調査に待たなければいけない。また周辺の遺跡が調査され，その結果との比較検討が必要な事は論を待たない。ともあれ，九十九里地域での貝塚のあり方を明らかにできたことは，大きな意義があろう。この報文が，本地域での縄文時代研究の面に多少なりとも寄与できれば幸いである。

第Ⅲ章　松尾東雲遺跡

第１節　調査の概要

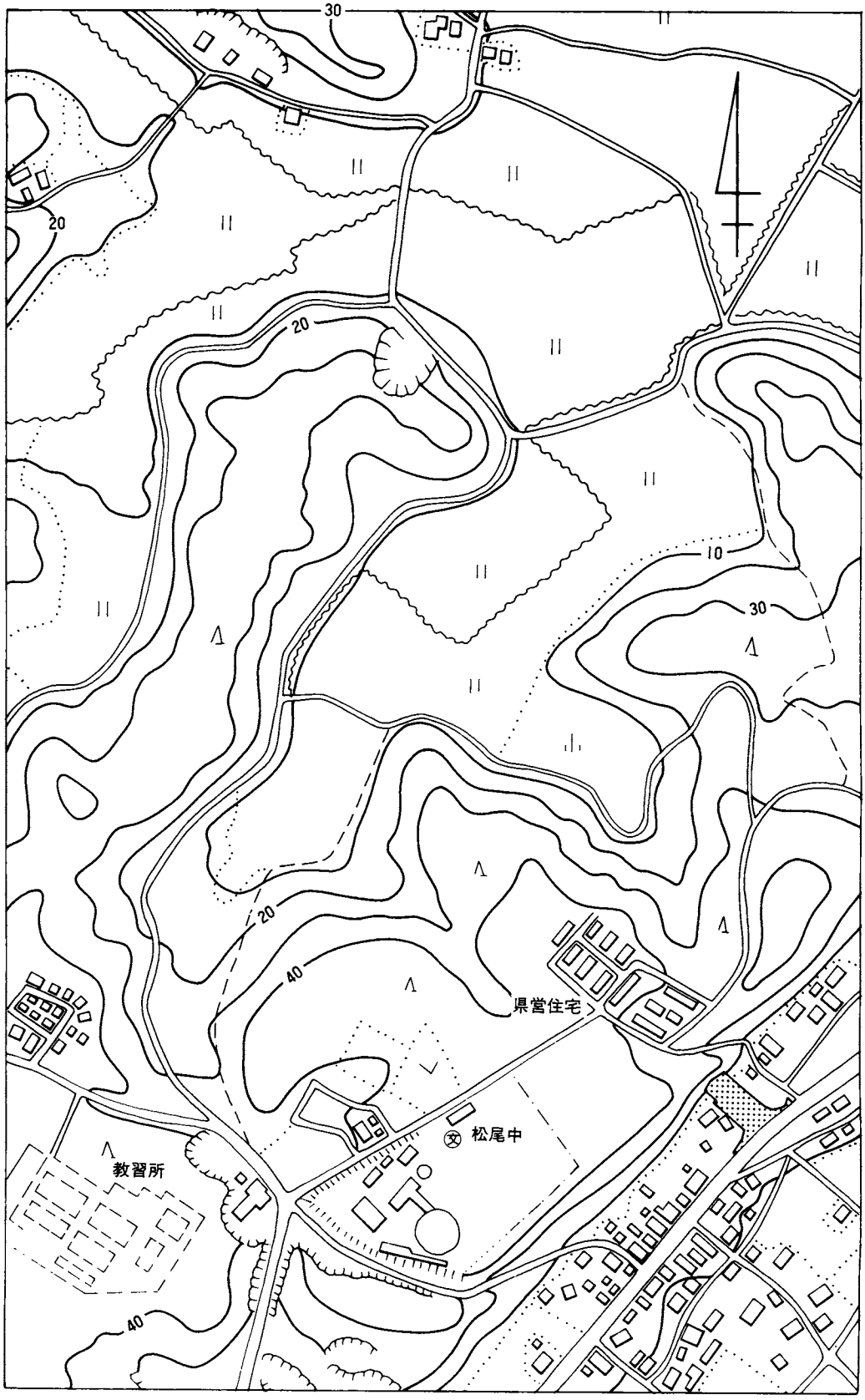
松尾東雲遺跡は，千葉県山武郡松尾町松尾字東雲97他に所在する遺跡である。主要地方道成田松尾線の調査遺跡のうち最も南に位置し，道路の終点にあたる場所である。

発掘調査は，昭和59年４月２日より同年６月30日まで実施した。調査対象は1,120m²の散布地である。まず始めに発掘区のほぼ中央を南東から北西に横切る道路予定地の中心杭に平行して幅4m,長さ14mと18mのトレンチ，各２本を４ケ所設定した。現地は，宅地及び荒蕪地がその大半を占めており，遺構の依存は不良であることが予想された。試掘トレンチ内の搬入土及び撹乱が混然となった表土層を始めに除去し，黒褐色の砂質土面を露呈させたが，試掘全域にわたっては，拡がっておらず，また遺構検出が困難な為，更に地山面である淡黄色の成田砂層面まで掘り下げた。その結果，遺構は検出できなかった。一方，遺物は，土師器の小片を主体に，古墳時代～近世にかけての土器及び陶磁器の小片が出土したが，図示し得る遺物は出土しなかった。これらの遺物全ては，その大半が搬入土である表土層内からの出土であることから，他土より土に混入して運び込まれた可能性が強い。又，当遺跡の北西に接する比高30mを測る古い波蝕崖である急崖上は，開谷と九十九里平野に囲まれた独立丘状の台地で，古くは猿尾古墳群・近世では松尾城と良好な遺跡の立地条件を持っており，これら遺跡に関わる遺物が流れ落ちたものと考えることもできよう。先土器時代については前述の様に地山が成田砂層であることから，同層以下の遺物出土及び遺構の検出はないと判断し，調査は実施しなかった。

調査は，以上のように遺構の検出を見ないまま６月下旬に終末に向い，埋戻し終了後の６月30日に器材等を撤収し，終了した。

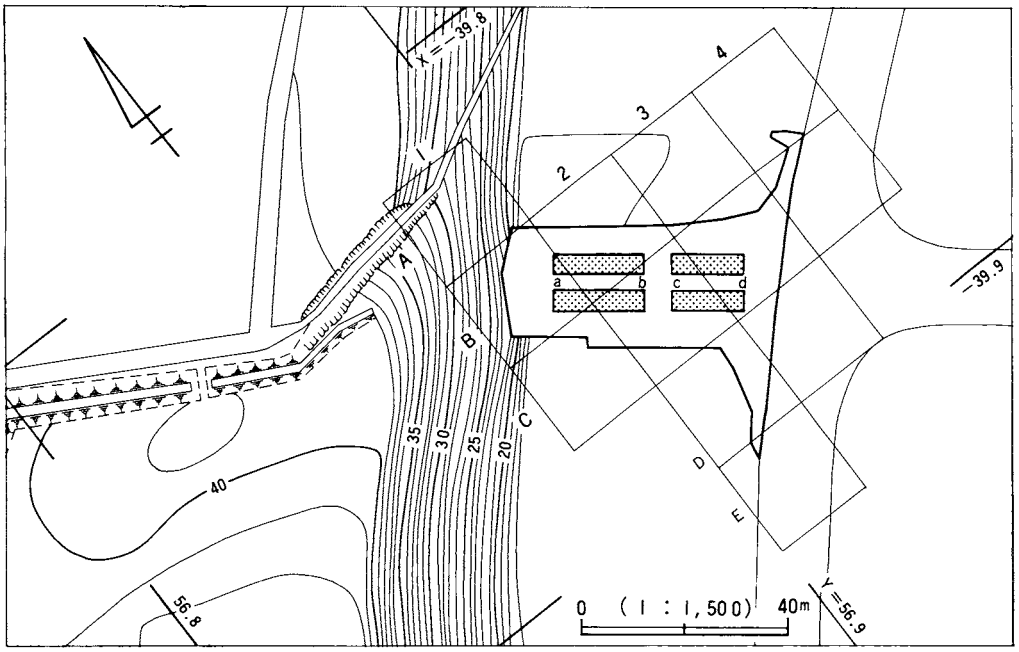
第２節　層序

第１層から第七層まで表土層としてとらえた。第１層は暗褐色砂質土。宅地，耕作等による撹乱が著しい。第２層は黒褐色砂質土。第１層程の撹乱を受けない。第３層は暗灰色砂質土。砂，ローム粒，炭化物を含む搬入土と考えられる層である。第４層は，褐色土。ローム単一土層で同様に搬入土である。第５層は灰褐色砂質土。砂を多く含む搬入土である。第６層は暗灰褐色砂質土のローム粒，砂を含む搬入土である。第７層は橙褐色砂質土。砂を多く含み，硬くしまっている。第８層は黒褐色砂層。上層と比べ混入物が少なくこの層が成田層への漸移層と思われる。第９層は淡黄色砂層。この層以下が成田層の残存層である。硬くよくしまっているが粘性に乏しい。

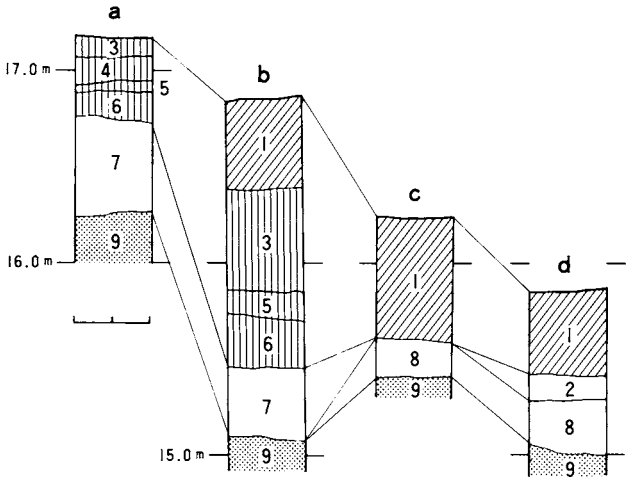


第103図　松尾東雲遺跡周辺地形図

0　(1：5,000)　200 m



第104図　調査区



第105図　土層図

第Ⅳ章　八田太田台遺跡

第１節　調査の方法と経過（第106図，図版59～61）

八田太田台遺跡は，山武郡松尾町八田字太田台に所在する。遺跡は，台地の東側と南側を栗山川に開析する支谷によって，北側を浅い谷によってそれぞれ画され，西側のみ台地平坦面へと続く。台地平坦面と沖積低地との比高差は30mである。調査区は，この台地の平坦部東端から斜面部にかけての3500m²である。

調査は，昭和59年４月７日から開始し，昭和59年７月31日に終了した。整理作業は昭和60年４月１日から昭和61年３月31日までの期間で実施した。

調査の方法は，グリッド方式とし，座標軸に合わせて設定した。20m×20mを基本に，北西を基点に東へＡ・Ｂ・Ｃと，南へ１・２・３と振り，Ａ－１グリッド・Ｂ－２グリッド等と呼称した。またこの大グリッドを４ｍ×４ｍの小グリッドに分割して，北西隅を00とし，東方向を01，02，03，04，南方向を10，20，30，40，南東隅の小グリッドを44とした。

調査は，まず調査対象地に対し，上層遺構の確認を行ない，また上層遺構が確認されない地区については下層遺構の確認に入った。その結果，北端部の一画が上層，下層とも遺構・遺物がなく確認調査のみで終了した他は全面調査となった。

本調査は，南端から重機で表土剝ぎを行なった後，手掘りで検出遺構の精査に入り，遺構実測及び記録写真撮影を併行していった。上層遺構の調査後には，下層遺構の確認調査を再び実施した。

調査の結果，台地平坦面から斜面部に造り出されたテラスにかけて33軒の住居跡を主体とする遺構が検出された。

第２節　遺構・遺物

第１項　旧石器時代（第108～116・124図，図版62～67）

旧石器時代の遺構・遺物は第１礫群と第２礫群の２ケ所の礫群が検出されている。２ケ所の礫群ともソフトローム層上位から出土している。

第１礫群（第108～115図，図版62～67）

Ｂ３グリッドからＢ４グリッドにまたがって，東西16m，南北20mの範囲（西側は調査区外に延びることは確実なことから範囲は拡大する）で北西方向に緩やかに傾斜しだした地形に分布する。1504点の礫・石器が出土している。

１．礫

礫は1432点出土しており，ほどんどが火熱を受けている。石材別の内訳はチャート464点(32.4%)，砂岩397点（27.7%），流紋岩類484点《流紋岩299点（20.9%），石英斑岩185点（12.9%)》，泥岩31点（2.2%），安山岩30点（2.1%），ホルンフェルス17点（1.2%），結晶片岩七点，花崗岩２点である。チャート，砂岩，流紋岩類（流紋岩・石英斑岩）が主体（93.9%）を占める。

２．石器

本石器群は，少量のTool類と多量の石核･剝片類によって形成されており，石器製作跡としての性格が考えられよう。ただし，接合関係については１例認められるのみで，本石器群における石核のあり方｛おそらく台石上の偏平な小礫の一端に加撃を加えて剝片を作出するような石核（あるいはこれらの石核は従来，楔形石器とよばれるものであるが）が主体を占めるようなあり方｝からは，特異な性格の遺跡といえよう。これらの石器群の帰属時期は，（出土層位ソフトローム中)，ナイフ形石器の形態，剝片剝離技法等から武蔵野台地における第II a 期に位置付けられよう。

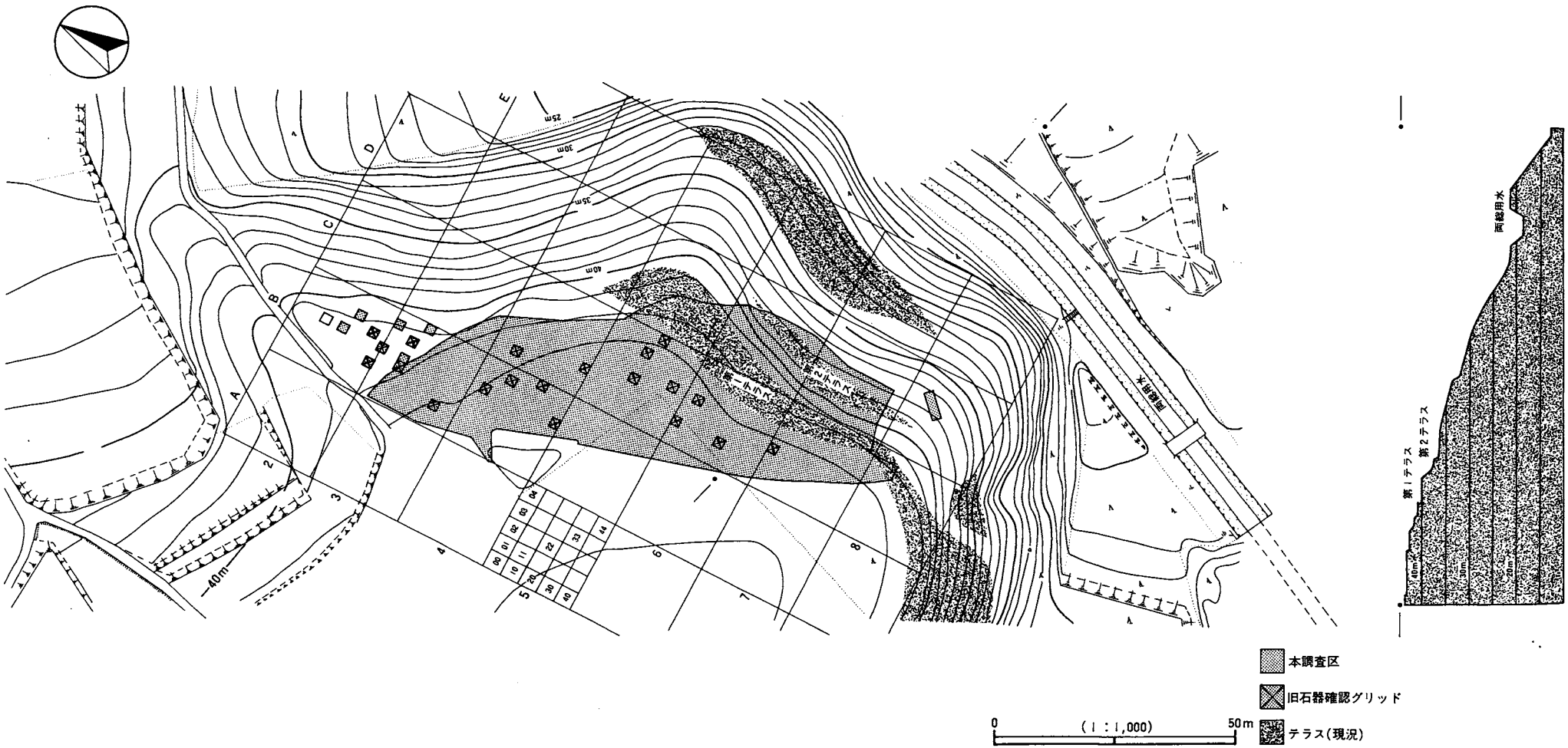
ナイフ形石器（第109図１～２，図版64）

１は縦長剝片の二側縁に急傾斜なブランティングを施したもので，素材の変形度の大きいものである。２は縦長剝片の二側縁に鋸歯状のブランティングを施したもので，刃部に自然面を残す。

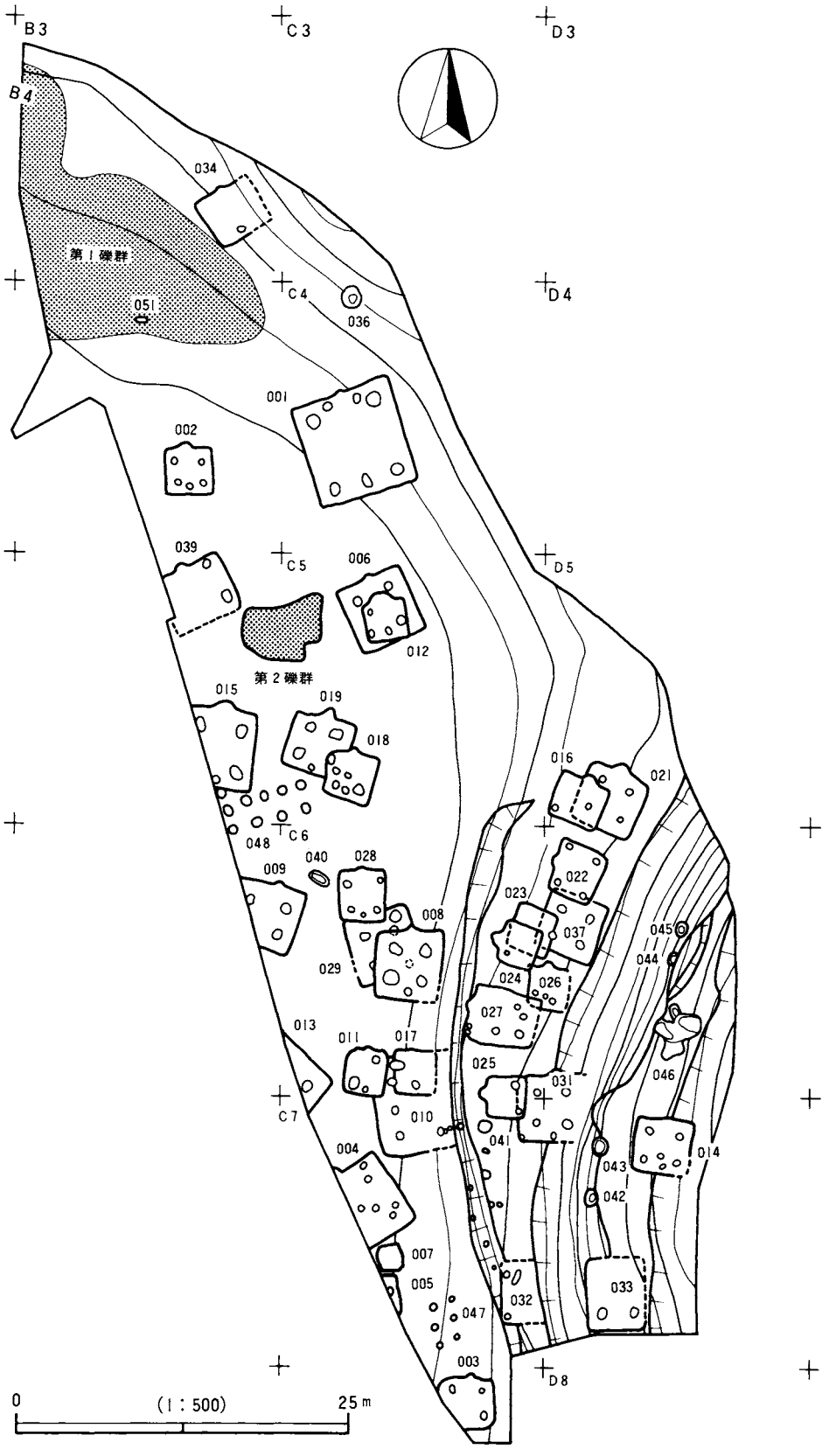
削器（第109図３～４，図版64）

３は縦長剝片の両側縁に調整加工を施したもので，Ａ面の右側縁の下部に微細な剝離痕がみられる。あるいは，Ｂ面の左側縁に大きな剝離痕がみられることから石核の可能性もある。

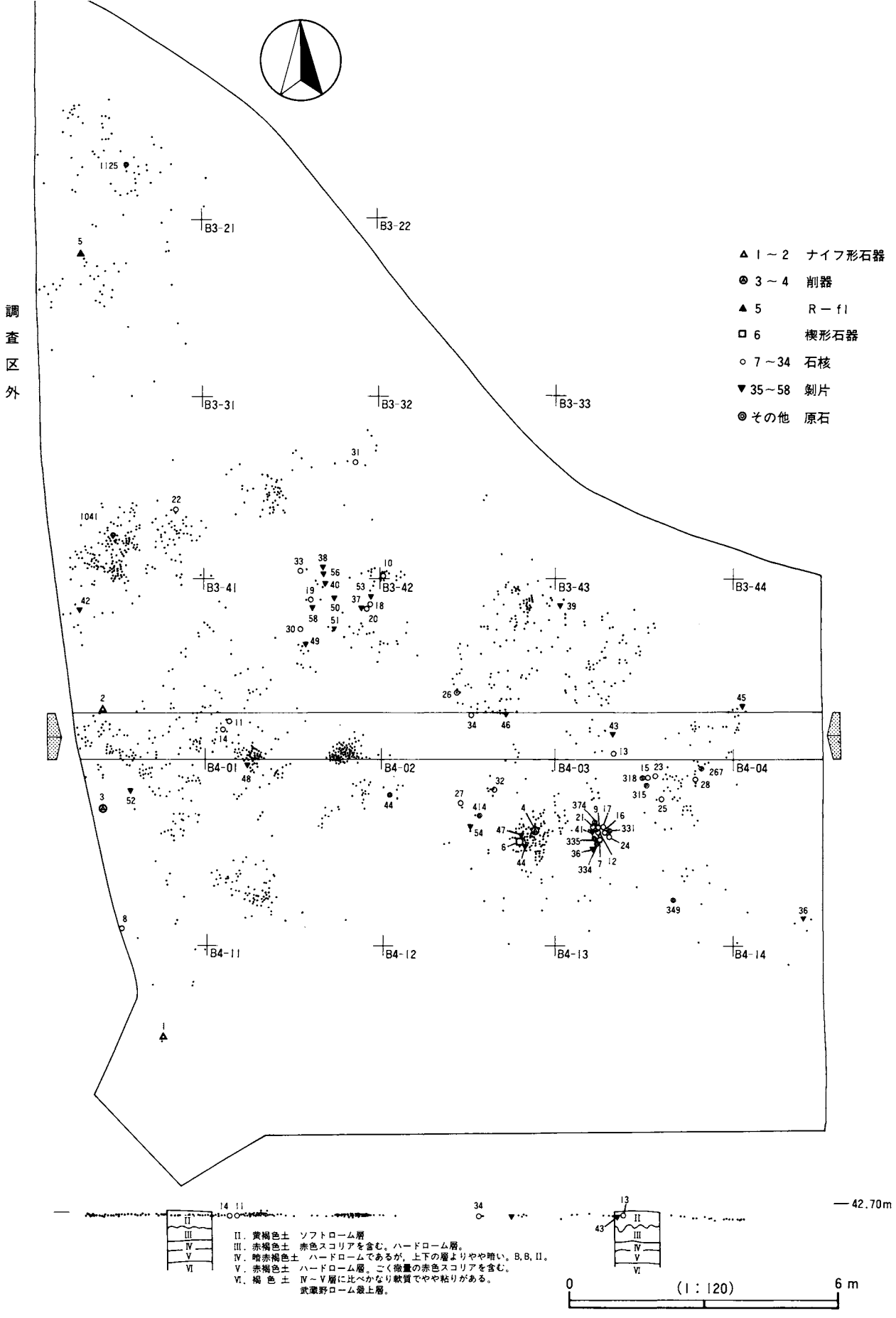
４は縦長剝片の一側縁に調整加工を施したものである。



第106図　調査区地形測量・旧石器時代グリッド配置図



第107図　八田太田台遺跡遺構分布図



第108図　第１礫群　平面・断面出土分布図

R－f Ⅰ（第109図５，図版64）

５は横長剝片の上部に微細な調整加工を施したもので，あるいは本例はナイフ形石器の未製品かもしれない。

楔形石器（第109図６，図版64）

６は四方向に剝離痕を残す楔形石器で，典型的な楔形石器は本例のみである。

石核（第109図７～第113図34，図版64～65）

本遺跡の石核は，大きく５種類に分類される。

Ⅰ類（７～13）は偏平な礫の正面にのみ剝離痕の見られるもので，13には下端部に敲打痕がみられる。

Ⅱ類（14～23）は偏平な礫の両面に剝離痕の見られるもので，21～23には下端部に敲打痕が見られる。Ⅰ類とⅡ類は，単に製作工程の差を反映したものであろう。

Ⅲ類（24～27）は比較的偏平な礫の一端なしい両端から両面への加撃により剝片を作出したもので，chopping- toll 状を呈す。剝片剝離は，片面において集中的に剝片を作出した後，その剝離面を打面として反対側の面に剝片剝離を行う特徴をもつ。あるいは，これらの石核もⅠ・Ⅱ類と同様に製作工程の差とも考えられるが，素材の礫に差異性が見られる。

Ⅳ類（28）は比較的大形の礫の分割したものを素材として90度あるいは180度の打面転移により直方体を呈したものである。D面に主要剝離面と思われる面を残す。

Ⅴ類（29～34）は剝片を素材とし，先行する剝離面を打面として剝片剝離を行うものである。

剝片（第113図35～第115図55，図版66）

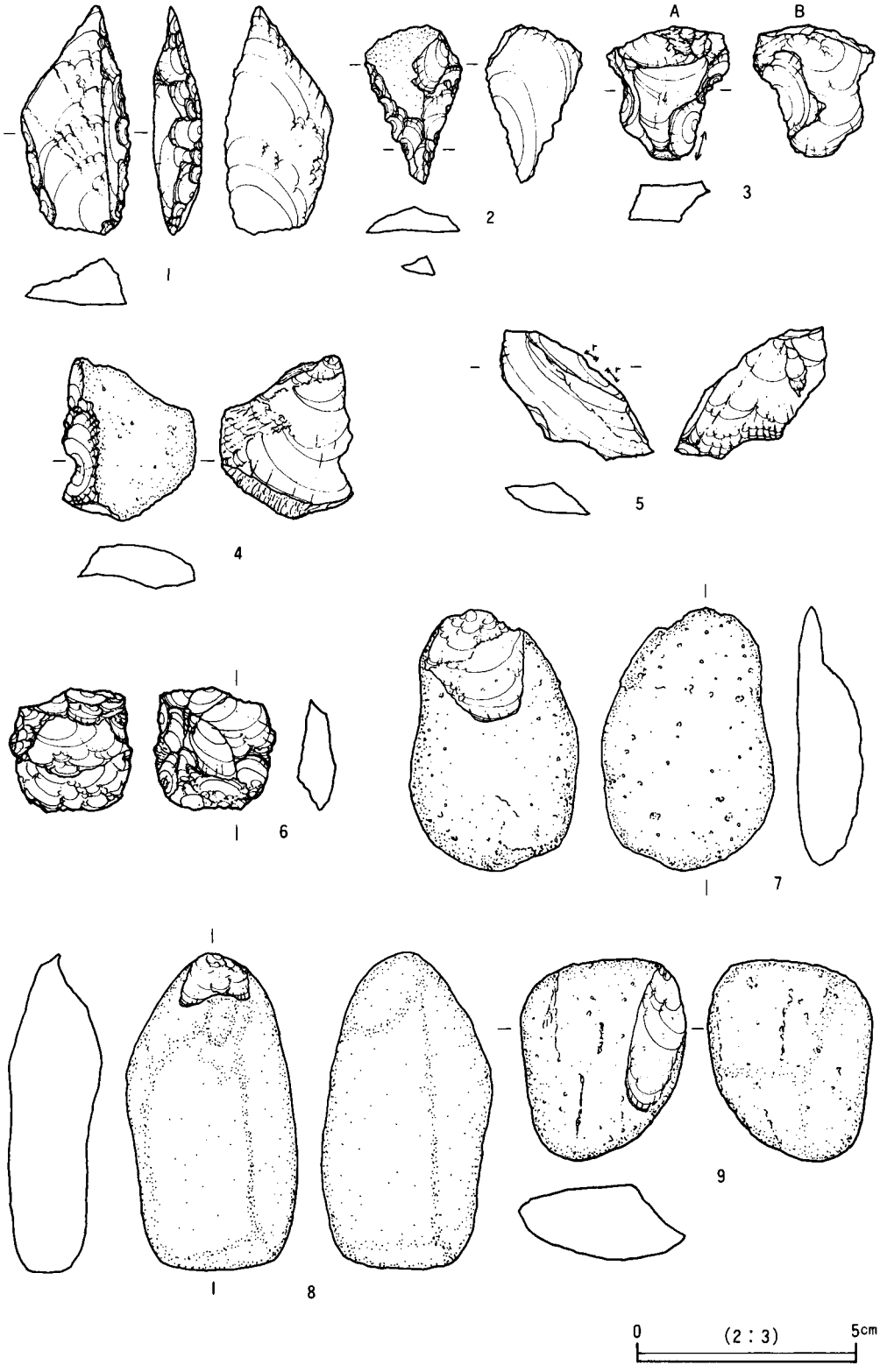
剝片は正面に自然面を残す一群（35～47）と剝離面に覆われる一群（48～55）の大きく２種類に分類される。石核のあり方，接合資料から剝片剝離工程上の段階差を反映したものと思われる。

接合資料（第115図56～58，図版67）

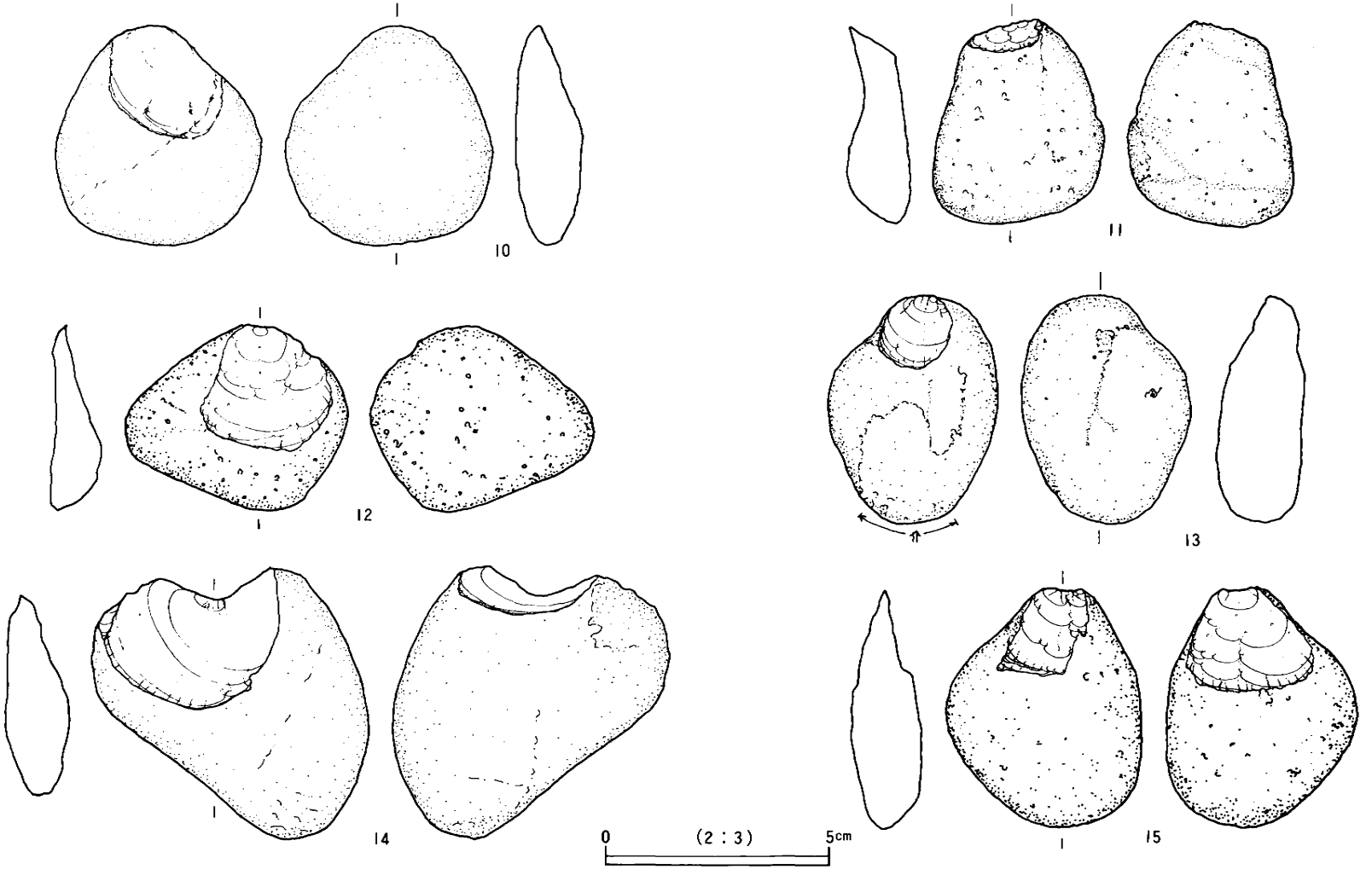
比較的偏平な礫を素材とし，上端部から交互に先行する剝離面を打面として剝片剝離を行ったもので，Ⅲ類の石核における剝片剝離とは若干異なる。

第２礫群（第116図）

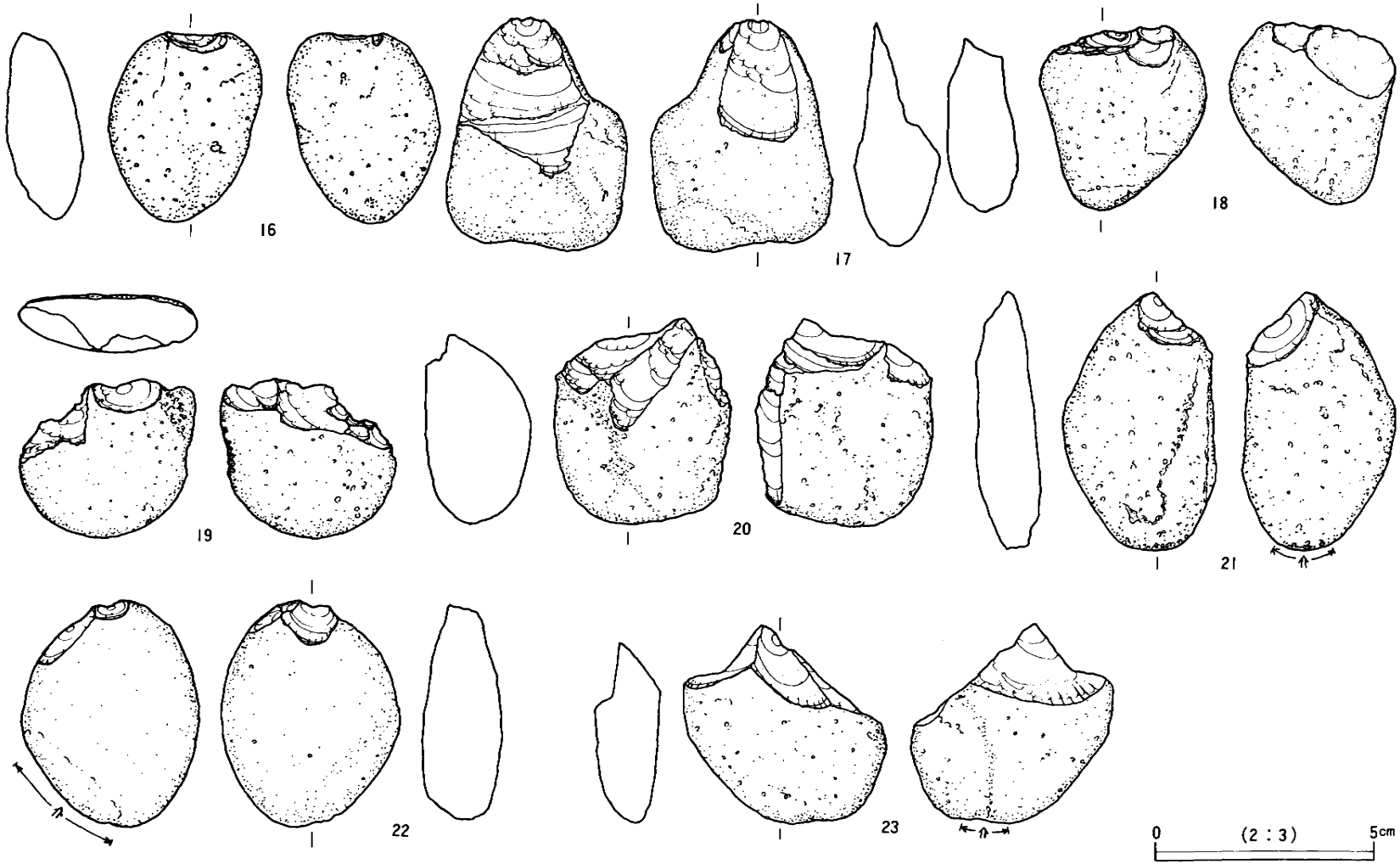
146点の礫からなり，石器は出土していない。ほとんどが火熱を受けている。B５－40，C５－10グリッドを主に台地平坦面に東西６m，南北4.5mの範囲に分布している。石材別の内訳はチャート61点（41.8%），砂岩32点（21.9%），流紋岩類45点《流紋岩30点（20.6%），石英斑岩15点（10.1%）》，泥岩５点（3.4%），安山岩２点，結晶片岩１点である。チャート，砂岩，流紋岩類（流紋岩・石英斑岩）が主体（94.4%）を占める。第1礫群の10分の１程の出土点数であるが，チャート，砂岩，流紋岩類が占める割合はほとんど同値である。



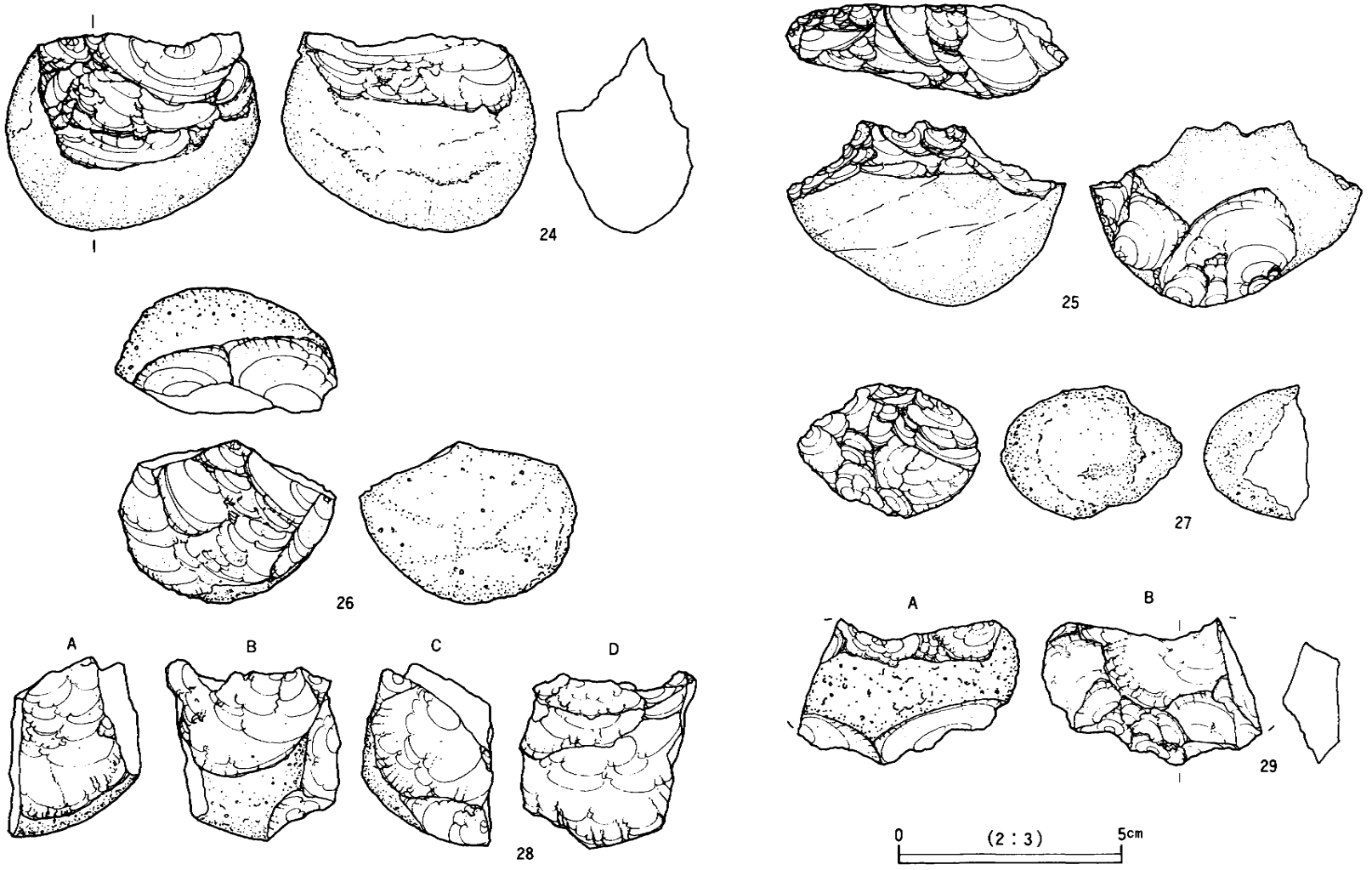
第109図　旧石器時代石器実測図（1･2ナイフ形石器，3･4削器，5R-f1，6楔形石器，7～9石核）



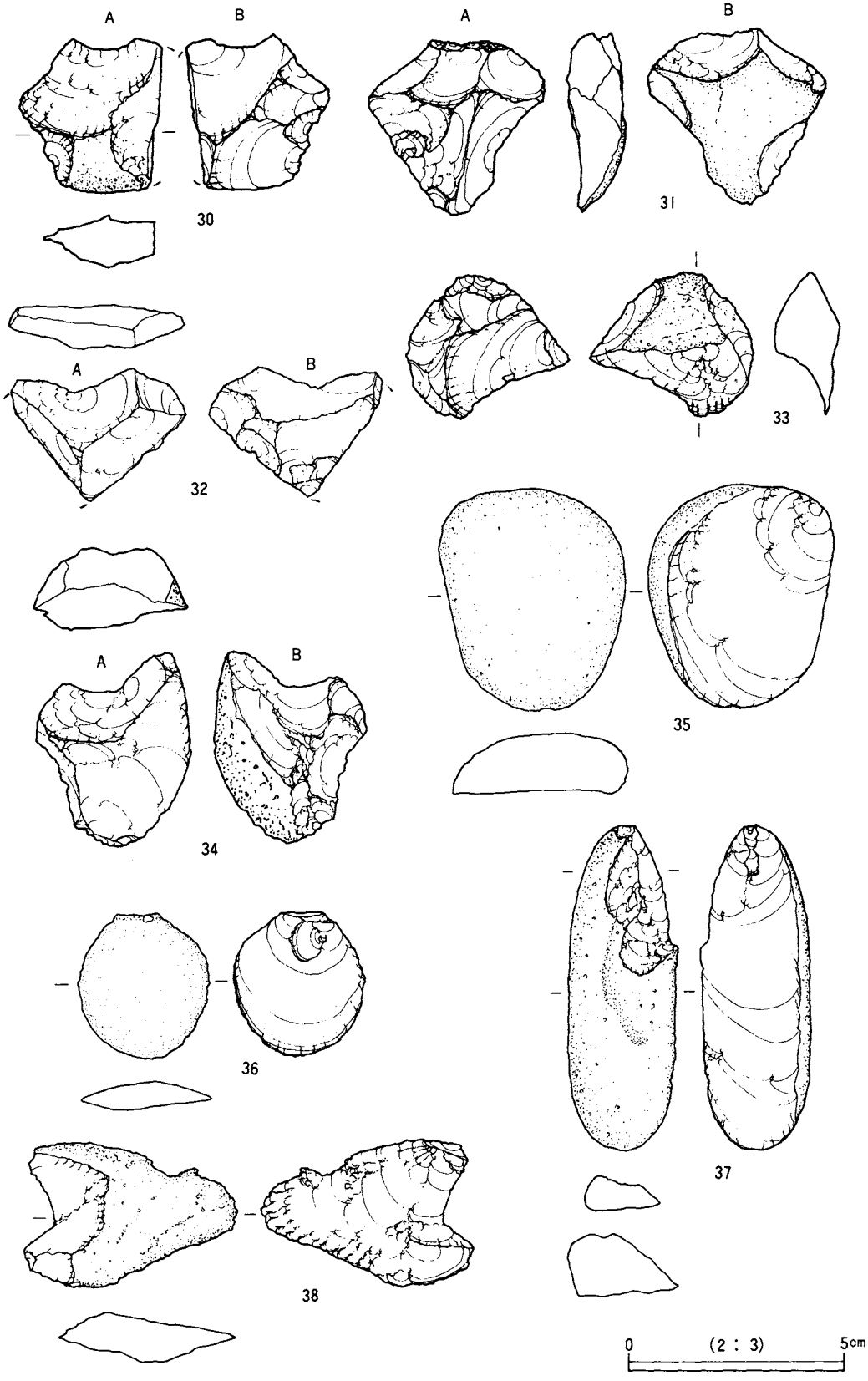
第110図　旧石器時代石器実測図（10.～15　石核）



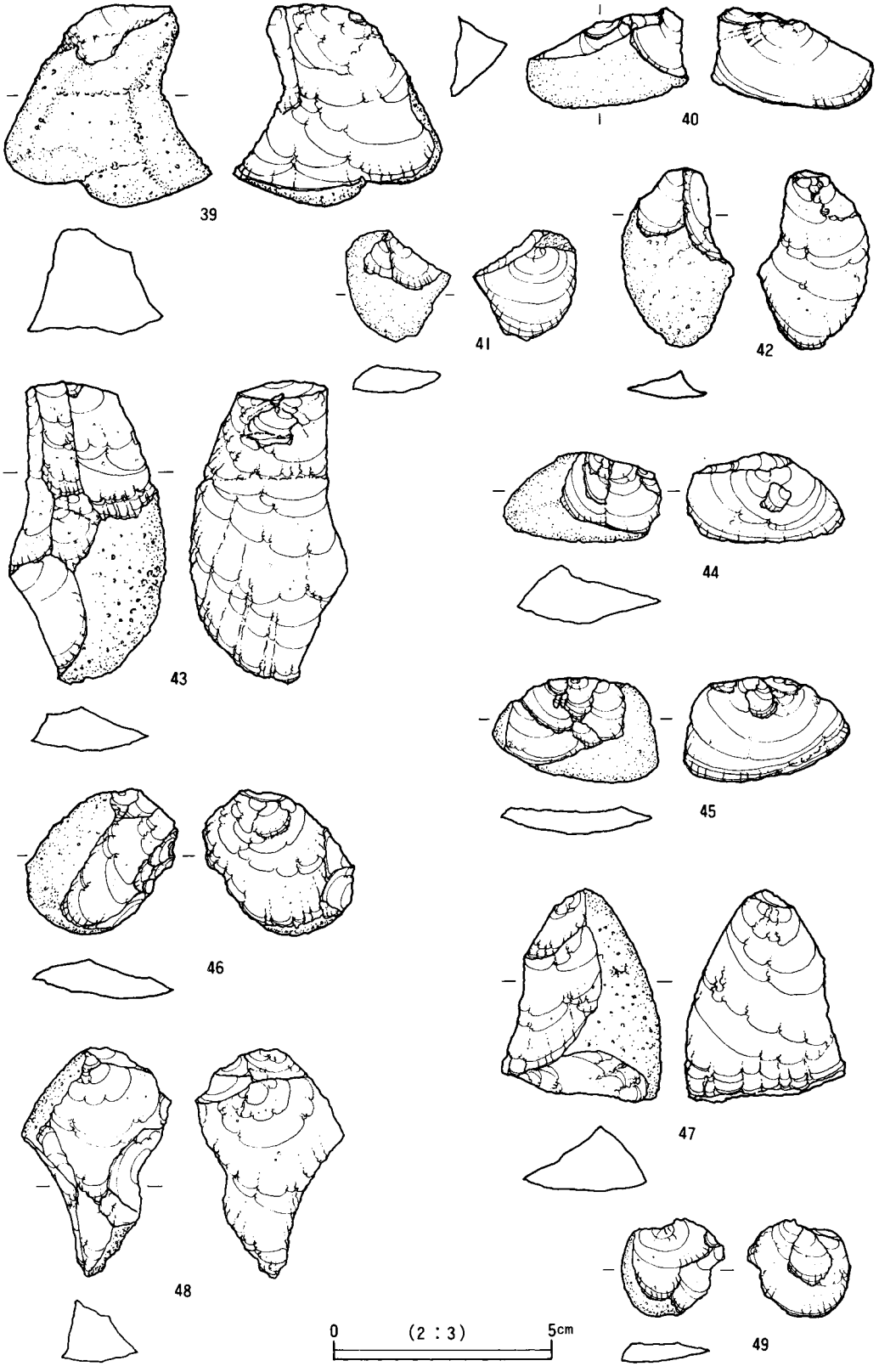
第111図　旧石器時代石器実測図（16～23　石核）



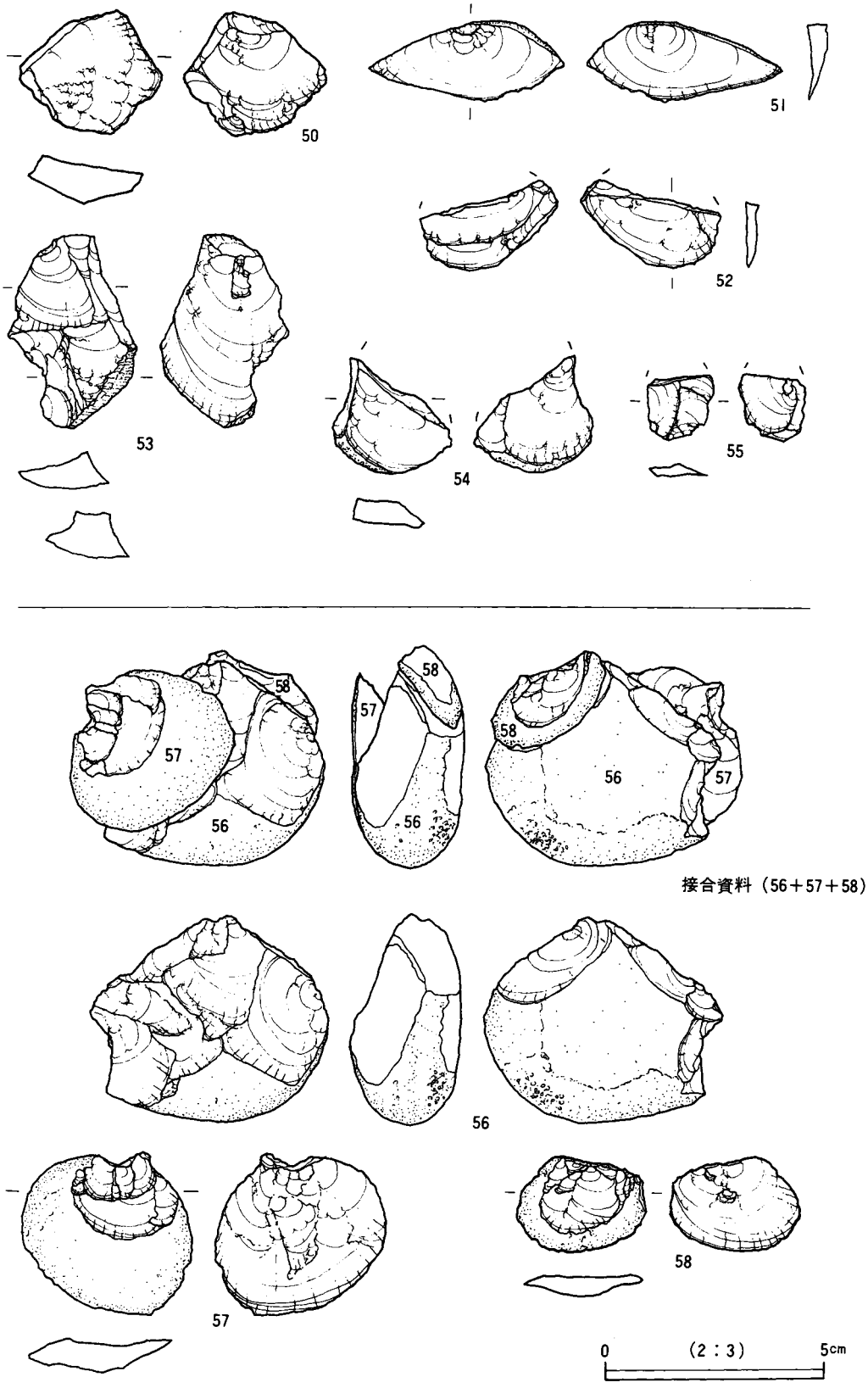
第112図　旧石器時代石器実測図（24～29　石核）



第113図　旧石器時代石器実測図（30～34　石核，35～38　剥片）



第114図　旧石器時代石器実測図（39～49　剥片）



第115図　旧石器時代石器実測図（50～55　剥片）接合資料実測図（56　石核，57～58　剥片）

第30表　旧石器時代石器計測表

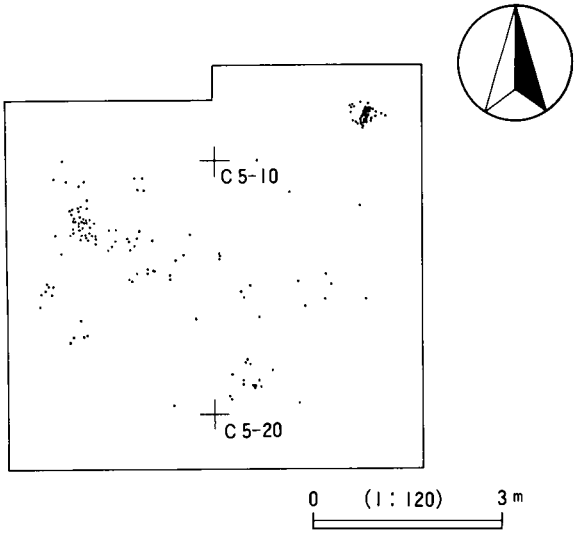
挿図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	遺物番号	備考
第109図 1	ナイフ形石器	5.2	2.5	1.1	12.1	玄武岩	049- 740	
第 図 2	ナイフ形石器	3.6	2.2	1.0	5.0	チャート	049-1081	
第 図 3	削器	3.0	2.8	0.8	6.6	チャート	049- 573	
第 図 4	削器	3.6	3.0	1.0	11.8	チャート	049- 178	
第 図 5	R－f1	2.9	3.5	0.8	5.6	安山岩	049- 790	
第 図 6	楔形石器	2.8	2.8	1.2	10.7	玉髄	049- 114	
第 図 7	石核	5.9	3.9	1.5	46.2	玄武岩	049- 333	
第 図 8	石核	7.1	3.9	2.1	82.0	頁岩	049- 522	
第 図 9	石核	4.5	3.8	1.9	40.8	玄武岩	049- 328	
第110図 10	石核	5.0	4.6	1.5	43.1	凝灰岩	049-1313	
第 図 11	石核	4.6	3.8	1.4	32.7	玄武岩	049- 700	
第 図 12	石核	4.2	4.9	1.2	27.8	玄武岩	049- 373	
第 図 13	石核	5.2	3.8	2.0	54.0	玉髄	049- 164	上下両端に敲打痕が顕著にみられる。
第 図 14	石核	6.1	6.1	1.4	65.3	安山岩	049- 803	
第 図 15	石核	5.4	4.3	1.6	46.4	玄武岩	049- 317	
第111図 16	石核	4.3	3.4	1.8	32.7	玄武岩	049- 330	
第 図 17	石核	5.2	4.0	2.1	49.9	玄武岩	049- 329	
第 図 18	石核	4.1	3.8	1.6	31.5	玄武岩	049-1420	
第 図 19	石核	3.7	3.9	1.4	25.1	玄武岩	049-1444	
第 図 20	石核	4.7	3.9	2.3	56.9	玄武岩	049-1421	
第 図 21	石核	5.9	3.5	1.4	36.9	玄武岩	049- 327	下端部に敲打により平坦面を呈す。
第 図 22	石核	5.2	4.0	1.8	51.0	凝灰岩	049-1203	下端部に若干敲打痕と思われる「器面のあれ」がみられる。
第 図 23	石核	4.5	4.5	1.7	37.9	玄武岩	049- 316	下端部に若干敲打痕がみられる。
第112図 24	石核	4.5	5.7	3.2	92.7	玉髄	049- 332	
第 図 25	石核	4.2	6.2	2.1	47.3	頁岩	049- 313	
第 図 26	石核	3.8	4.9	2.9	59.4	玄武岩	049-1361	
第 図 27	石核	3.1	4.1	2.3	29.5	玄武岩	049- 417	
第 図 28	石核	4.1	3.9	3.4	54.8	玄武岩	049- 273	
第 図 29	石核	(3.3)	(5.0)	1.4	(22.5)	玄武岩	番号不明	B面の上部に主要剥離面を残し，A面左側が折断されている。
第113図 30	石核	3.6	(3.3)	1.3	(13.2)	玄武岩	049-1456	A面左側が表→裏の衝撃により折断されている。
第 図 31	石核	4.1	4.1	1.3	18.2	頁岩	049-1302	A面の上部に頭部調整がみられる。
第 図 32	石核	(3.0)	(4.0)	1.0	(8.9)	玄武岩	049- 421	A面左側が折断されている。
第 図 33	石核	3.3	3.8	1.6	14.8	玄武岩	049-1454	
第 図 34	石核	4.4	3.5	1.9	23.5	玄武岩	049-1395	A面下部に主要剥離面を残す。
第 図 35	剥片	5.1	4.3	1.4	33.7	凝灰岩	番号不明	
第 図 36	剥片	3.3	3.1	0.6	6.9	流紋岩	049- 371	51と同一母岩。
第 図 37	剥片	7.4	2.5	1.5	33.2	玄武岩	049-1422	
第 図 38	剥片	3.3	4.9	1.2	15.8	玄武岩	049-1452	
第114図 39	剥片	4.6	4.7	3.2	6.0	玄武岩	049- 204	
第 図 40	剥片	2.4	3.7	1.4	7.9	頁岩	049-1448	

挿図番号	器　種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　材	遺物番号	備　考
第　図 41	剝　片	2.6	2.4	0.8	3.9	頁　岩	049- 337	
第　図 42	剝　片	4.0	2.5	0.8	5.7	玄武岩	049-1069	
第　図 43	剝　片	6.7	3.6	1.8	33.8	玄武岩	049- 165	
第　図 44	剝　片	2.0	3.6	1.2	7.2	頁　岩	049- 190	
第　図 45	剝　片	2.4	3.8	0.7	6.0	頁　岩	049- 259	
第　図 46	剝　片	3.2	3.4	1.1	11.1	玄武岩	049-1385	
第　図 47	剝　片	4.8	3.6	1.7	27.5	玄武岩	049- 179	
第　図 48	剝　片	5.1	3.4	1.7	20.6	玄武岩	049- 498	
第　図 49	剝　片	2.2	2.3	0.4	2.3	玄武岩	049-1457	
第115図 50	剝　片	2.8	3.2	1.0	9.5	玄武岩	049-1437	
第　図 51	剝　片	1.8	4.5	0.9	4.4	流紋岩	049-1440	35と同一母岩。
第　図 52	剝　片	(2.0)	(3.2)	0.5	(2.4)	玄武岩	049- 563	上部を表→裏の衝撃により折断される。
第　図 53	剝　片	4.4	2.9	1.1	10.3	玉　髄	049-1409	
第　図 54	剝　片	(2.6)	2.7	0.8	(6.3)	玄武岩	049- 413	上部を裏→表の衝撃により折断される。
第　図 55	剝　片	(1.5)	1.5	0.5	(1.0)	玉　髄	番号不明	上部を表→裏の衝撃により折断される。
第　図 56	石　核	4.6	5.5	2.5	66.0	チャート	049-1451	57・58と接合。
第　図 57	剝　片	3.7	3.9	0.9	12.1	チャート	番号不明	56・58と接合。
第　図 58	剝　片	2.1	3.0	0.5	3.3	チャート	049-1443	56・57と接合。
第　図	剝　片	3.0	3.7	0.5	5.9	玄武岩	049-1125	
第　図	原　石	4.8	3.3	1.7	39.9	玄武岩	049- 374	
第　図	原　石	5.1	3.8	2.3	57.1	玄武岩	049- 318	
第　図	原　石	5.8	4.0	2.3	72.0	玄武岩	049-1014	
第　図	原　石	6.5	3.8	1.5	46.9	玄武岩	049- 315	
第　図	原　石	4.3	3.7	1.6	35.1	玄武岩	049- 331	
第　図	原　石	5.2	3.7	1.6	44.4	玄武岩	049- 414	
第　図	原　石	4.2	3.1	2.2	41.5	玄武岩	049- 267	
第　図	原　石	3.8	3.4	2.0	35.8	玄武岩	049- 334	
第　図	原　石	4.9	3.4	1.4	37.1	玄武岩	049- 434	
第　図	原　石	6.0	3.2	1.1	23.4	凝灰岩	番号不明	
第　図	原　石	4.9	3.6	2.2	41.2	頁　岩	049- 349	
第　図	原　石	4.0	4.0	2.3	42.7	玉　髄	049- 335	
第　図	原　石	3.9	2.8	0.9	13.5	玉　髄	049- 362	

3．グリッド出土の石器（第124図１～２，図版72）

１・２は旧石器時代の遺物で，１は横長剝片を素材とし，打面側に急角度の調整加工を施した一側縁加工のナイフ形石器である。下端部に自然面を残している。２は表面に大きく自然面を残した横長剝片を素材とし，急角度の粗い（鋸歯状の）調整加工を施した角錐状石器である。胴上半部の調整加工は器体中央部にまで及ぶが，下半部は及ばなかった為，周辺加工となっている。２例とも素材の用い方，調整の部位・あり方等から武蔵野台地における第II a 期に帰属

しよう。また，これらの遺物は遺構（表採相当）の覆土中出土であるが，本遺跡における旧石器時代のブロック群と同一の所産のものである可能性は高い。



第 116図　第2礫群平面出土分布図

第31表　グリッド出土旧石器時代及び縄文時代石器計測表

挿図番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	遺物番号	備考
第124図 1	ナイフ形石器	3.2	1.9	0.7	3.5	(ガラス質)安山岩	015－2	
第 図 2	角錐状石器	3.5	1.7	0.8	4.7	(ガラス質)安山岩	015－70	
第 図 3	石鏃	2.7	1.7	0.5	2.0	チャート	009－1	
第 図 4	石鏃	2.4	2.4	0.8	3.6	黒曜石	不明	
第 図 5	石鏃	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.8)	(ガラス質)安山岩	006－5	
第 図 6	石鏃	(2.1)	(1.5)	(0.3)	(0.9)	黒曜石	C6－136	
第 図 7	局部磨製石斧	6.3	3.7	1.4	46.0	砂岩	C8－36	
第 図 8	局部磨製石斧	(7.6)	(2.9)	(2.2)	(67.5)	結晶片岩	027－1	
第 図 9	局部磨製石斧	(7.8)	5.0	2.5	(140.0)	砂岩	009B－括	
第 図 10	局部磨製石斧	5.8	2.9	0.9	23.5	砂岩	2テラス北－括	
第125図 11	ノッチ状石器	(5.3)	(6.3)	(1.8)	(69.0)	砂岩	049－276	
第 図 12	磨石	8.5	7.0	4.1	375.0	砂岩	C7－1314	
第 図 13	磨石	4.6	4.6	3.9	143.0	砂岩	B4－括	
第 図 14	叩石	6.6	3.2	2.5	60.6	安山岩	019－2	
第 図 15	台石	(9.9)	(14.0)	8.4	(1001.5)	安山岩	B3－12－括	
第 図 16	砥石	8.3	7.6	3.8	217.5	砂岩	3トレ－括	
第 図 17	砥石	8.1	10.2	4.5	536.5	砂岩	C5－21C	

第2項　縄文時代

1．グリッド出土の土器

第Ⅰ群土器（第117・118図，図版68・69）

早期撚糸文系土器である。

1は端部が折返し状に肥厚し，口唇に斜行縄文，口縁上部に横走縄文が施される。2は薄手で，1と同様横走縄文がみられる。3は口唇外縁に斜縄文があり，口縁直下が磨かれて無文となっている。4は端部で外反するもので，口唇には細い撚糸文（R）がみられる。外面はこの破片には施文されていない。5・6は細かいRの撚糸文が，口唇，体部に施文されるもの。施文方向は口縁では斜～横位，胴部は縦位である。口唇上面は平坦化されている。

7～9は端部で肥厚外反するもので，口唇に斜行，体部は縦走の縄文となる。

7は口縁直下に撚紐圧痕文がみられる。8は口縁下端が指頭押圧痕がある。

10～26は体部に縦走縄文のみられるもの。原体は23を除き単節ＲＬである。口唇上端で肥厚ないし外反するもの多い。

10は斜縄文と（横位施文）がみられる。端部の肥厚はない。11は上端部でゆるく外反する器形をなすもので，胴部は縦走の縄文を有し，口縁はナデられ文様がみられない。内面にはケズリ調整痕がみられる。22～23は肥厚せず，直口する口縁となる。23は無節の縄文。24～26は粗い原体で浅く施文される。

27～42は，撚糸文の施されるもの。

27は口唇上端に斜行，体部縦位の撚糸文がみられる。

28は小型のもので，端部で外反する口縁で，体部には細かい縦位の撚糸文（R）が密に施文されている。また，口唇部にも施文される。

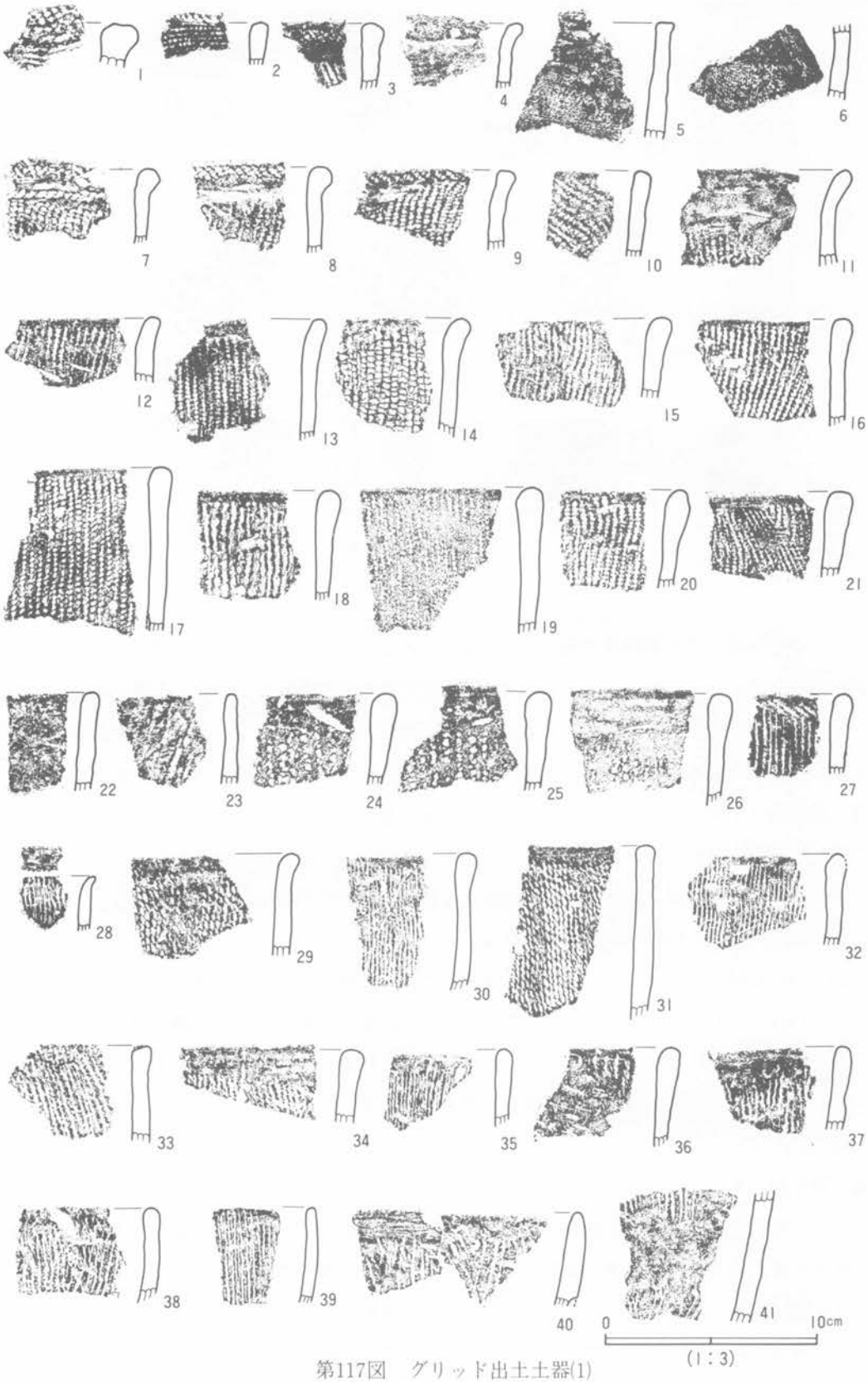
27～39は体部全面に縦位撚糸文の施されるもの。断面形態は縄文のものと同様である。34は端部が磨消され無文となる。36は文様器面がケズられて文様が消される。内面にもケズリ痕がある。

40は条線で文様が鋸歯条に構成されるもの。端部にはケズリ痕がみられる。

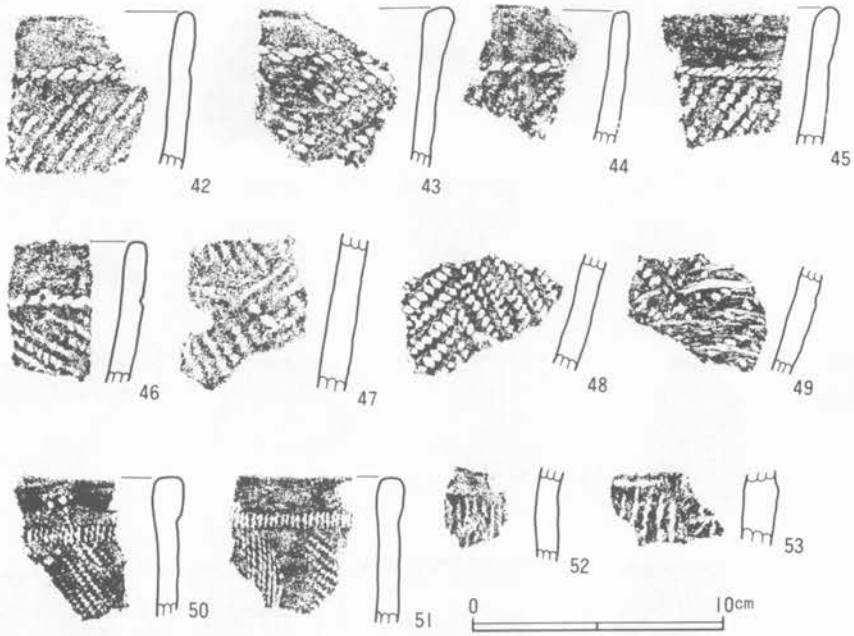
41は，幅広い無文部を介し，上下に施文されるもの。

1～7は井草Ⅰ式の古手に，8・9，27・28井草Ⅱ式に比定される。11は口唇の施文はないが，無文部は横位文様帯を意識したとすれば古式のほうに入れておく方が妥当であろう。10，12～27，29～40は夏島式とみられる。またまばらな縄文の24～26と条間の空く撚糸文を有する40は，その特徴より稲荷台式に近いものとされよう。

42～53は口縁を無文帯として区切り，以下に文様を施すもので花輪台式に比定される。口縁部は原体の側面圧痕等で下位が区切られる。



第117図　グリッド出土土器(1)



第118図　グリッド出土土器(2)

42～46は胴部にＲＬ斜縄文の施される口縁部である。42は，ＲＬの撚紐圧痕の区切り，43は肥厚する口縁をなす。原体は太いもので，口縁区切りの圧痕文はゆるいＲＬの撚紐によるものである。44は42に似た口縁形態であるが，撚紐圧痕文はＲとみられる。45はやや肥厚するもので，口縁下端は凹帯をなし，Ｒの撚紐が押捺されている。42～45の縄文は，縦位施文である。46は胴部縄文が横位施文されるもので，42と口縁形態は同じである。右下りに同一個体で羽状文様を構成すると思われる。

47～48は胴部片で異方向施文のＲＬ斜縄文を組み合わせ羽状縄文を形成している。

49は底部片で同心円状の擦痕がみられる。

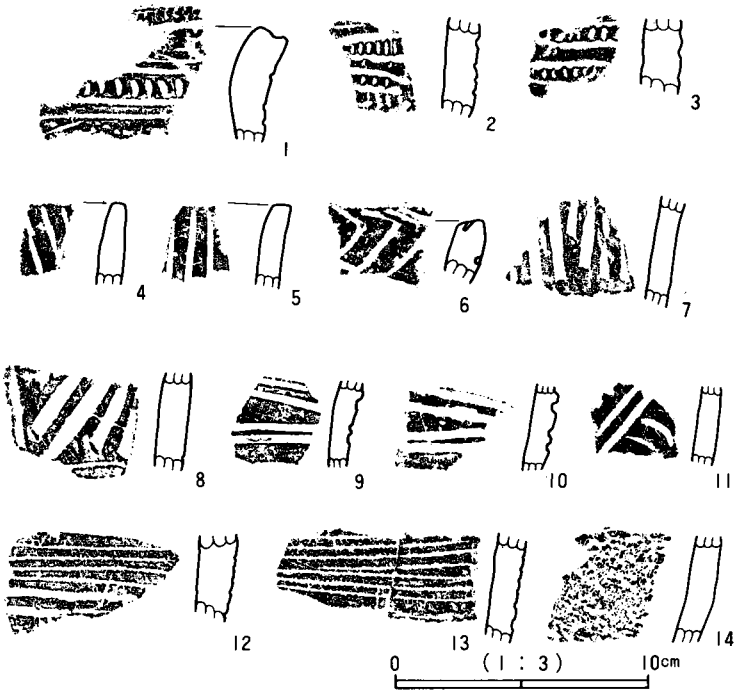
50・51は口縁の区切りに絡条体圧痕文が用いられる。折り返し状に肥厚する口縁をなしており同一個体と思われる。口唇，内面は磨かれている。50では縦位の細かい縄文(ＬＲ)，51では同様の縄文（ＬＲ）に加え撚糸文（Ｒ）が縦列施文される。

52は撚糸圧痕で区切られ，以下縦位Ｒの撚糸文になる。53は沈線で区切り，Ｌの撚糸文縦位に施す。

第Ⅱ群土器（第119図，図版69）

田戸下層式土器である。全般的に茶褐色を呈する焼きのいい土器で，沈線を主体とした文様が施される。胎土に微細砂礫が多量に含まれる。内面は研磨を受けている。

１は肥厚しかるく外反する口縁部で平行沈線間に連続爪形文，下位には半截竹管文もみられる。口唇は平坦に作出され沈線を挟んで半截竹管刺突文が配される。内面はよく磨かれている。



第119図　グリッド出土土器(3)

2・3は同一個体。横位沈線間に刻文列が施され，キャタピラ状の文様となる。

4～8は縦位沈線の施されるもの。4・5は縦方向沈線文の施された口縁で，口唇は平坦にされ磨かれている。6は口唇と外面に斜位の深い沈線文の施されるもの。胎土は灰ぽく焼成はあまり良くない感じを受ける。繊維を含まず，沈線文が施されてはいるが田戸下層式としては異質でむしろ，上層ないし子母口式に近似の印象を受ける。7・8は縦あるいは，斜位の太い沈線文のもので複合鋸歯文を構成するものか。内面はよく研磨されている。

9・10は横位の平行沈線が施されるもの。菱形文を構成するとみられる。胎土には殆んど砂粒を含まない。

11は斜行と弧状の平行沈線が組み合わさる文様がみられる。12・13は細かい条線文と太い横位沈線がみられる。

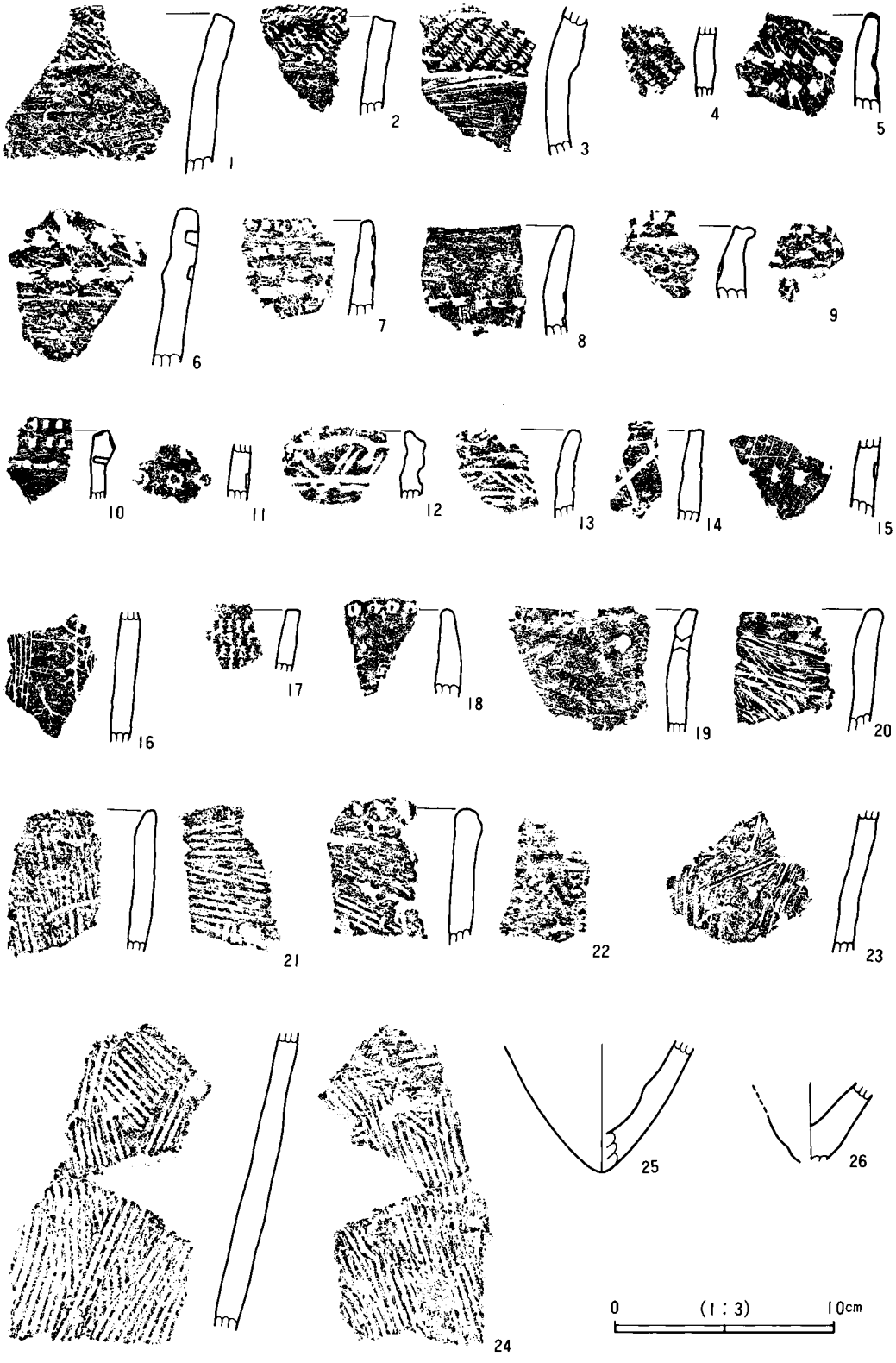
14は外面に器面ケズリ調整痕をそのまま残し，砂粒の移動した跡が顕著にみられるもの。胎土には石英，長石などの細粒が多量に含まれている。

第III群土器（第120図，図版70）

条痕文系土器で子母口式が主体である。胎土には4・18を除き繊維が含まれている。

1～4は絡条体圧痕文の施された土器である。

1・2は同一個体で，折返し状の口縁の上面と口唇に絡条体が斜位施文さる。この撚紐の原体はRであるが，平板的な圧痕文であるので巻かれた棒，おそらく円棒ではなく，面の平らな



第120図　グリッド出土土器(4)

角棒か板状のものであったろう。また内外面とも擦痕がみられる。3は巾広い隆起帯上に左下り絡条体圧痕文（円棒に巻つけたもの）を密に施文する。外面には擦痕がみられる。糸には節が見当らない。rの原体か。4は原体が3と同じく円棒状のものである。胎土には繊維が認められない。

5～11は刺突文がみられるもの。

5は内外面とも条痕が施され，斜方向からの刺突列が二段観察される刺突列は口唇にもみられ刻目状になる。6は刺突が深く内面には突瘤が形成される。口唇部には刻目を有する。外面擦痕，内面は剝げて不明瞭だが条痕文があるかもしれない。7は口唇と外面（3条）に刺突文を有する。この刺突文は工具を寝かせ押し引き連続状に施されたもの。8は口縁上端に無文帯があり，以下連続刺突文がみられる。9は端部で急に外反する形態をなし，口縁部と内面（2条）に連続刺突文の廻る例。10は折返し状の肥厚する口縁部で，口唇上端・口唇に箆先状の連続刺突文，口縁下端に連続円形刺突を有する。円形刺突文は深く施文され，内面に突瘤が形成されている。11には円形刺突文・箆先状刺突文がみられる。

12～16は沈線による文様がみられるもの。

12は平行沈線で上下を区切り，鋸歯状沈線文を施すものと思われる。沈線には半截竹管が使用されており，また繊維は殆んど含まれていない。13は鋭い沈線で12と似た構成をとるもの。口唇には刻目がみられる。14は格子状の沈線のもの。口唇部に絡条体圧痕を有する。15には細かい条線文と連続刺突文の組合わせがみられる。16は縦位の細かい条線文がみられる。

17は口唇に絡条帯圧痕文，外面には浅い連続刺突文を密接して施文している。

18は口唇部に竹管の連続刺突文がみられる。繊維の混入は認められない。

19は無文の薄手のもの。平縁になる。器壁には繊維の走痕が顕著である。また両側から穿孔された補修孔を有している。

20～24は条痕文（おそらくサルボウ等の貝によると思われる）の土器である。

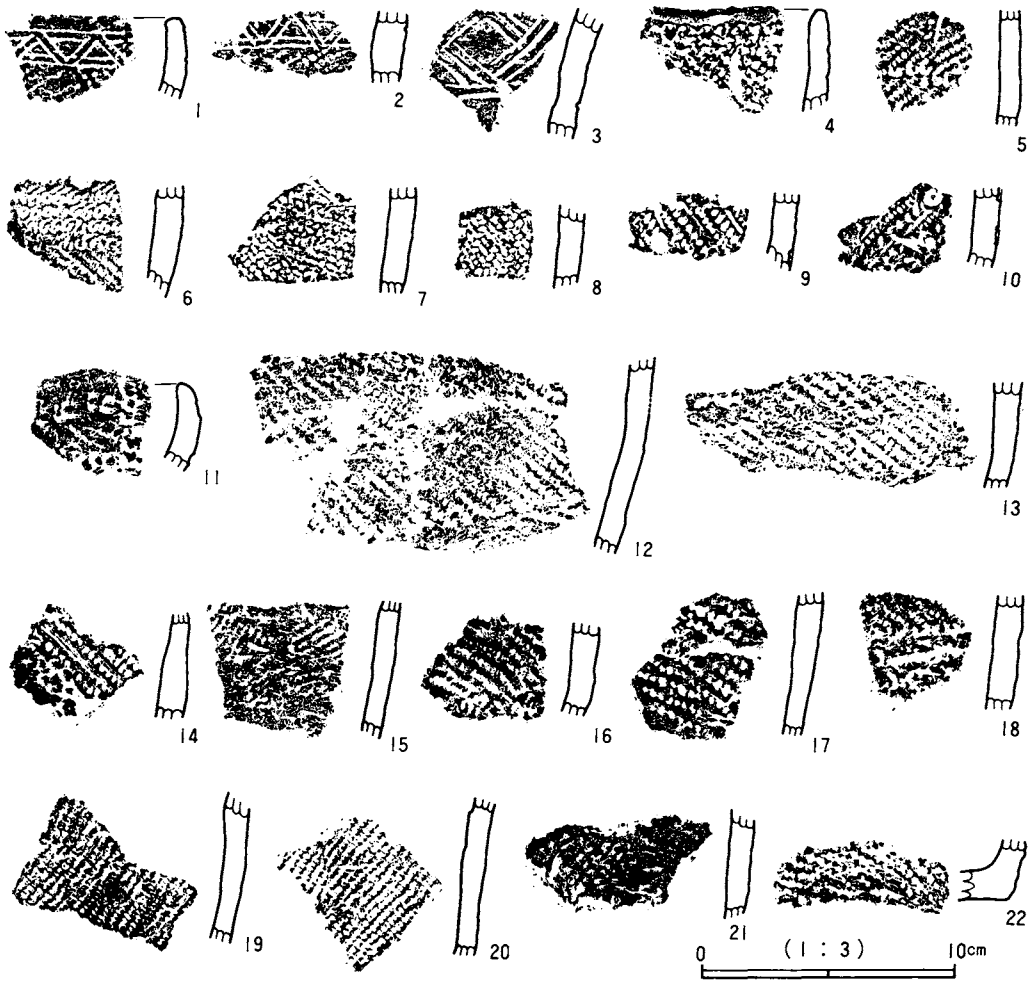
20は外面に施文されるもの。繊維は殆んど認められない。21は内外条痕文の認められる口縁部である。外面は縦，内面は横から斜位に施文されている。22は内外面条痕文がみられ，口唇には太い刻目が施されている。24は内外面条痕文の胴部片。

25・26は無文の尖底部である。

第Ⅳ群土器（第121図，図版71）

縄文前期の繊維土器を一括した。多量の繊維を含み内面がよく研磨されるものが多い。断面では黒色を呈する。

1～3は沈線文が施されるもの。1は半截竹管で平行線間に鋸歯条文が配される。地文にRLの縄文を有する。2も同一の構成になろうか。地文はLRの縄文である。いずれも内面は磨かれている。3は菱形区画になるもの。



第121図　グリッド出土土器(5)

4～6はループ文のみられるもの。4は平縁をなす口縁部で，上端にループ文を3段，LRの縄文になる。5はLRの縄文をループを伴って横位に多段施文したもの。6は無節Lと，多条RLの縄文間に，先の無節の原体を利用してループ文が4段施されている。

7・8には組紐圧痕文がみられる。

9・10は縄文を地に円形竹管文の施される例で，地文は9がR＜$^{L\,R}_{L}$，10がL＜$^{R\,L}_{R}$の付加条縄文である。

11は半截竹管での浅い連続刺突文がみられる。

12～21は単節斜縄文の施される胴部片である。

12・13は同一個体。黒色で繊維を多量に含む土器である。14は浅い沈線文を伴っている。15・16は底部近くと思われるもので，16には下端にループ文を伴う。18は不明瞭だが，ループ部がある様にも見える。19・20は同体。焼きは良く堅緻である。21も底部近くの破片である。原

体はＬＲが15，19・20他の９点はＲＬである。

22は底部で，内面，底面とも磨かれている。

時期的に１～８は関山式に，９～21は黒浜式に比定できよう。

第Ⅴ群土器（第122図１～５，図版71）

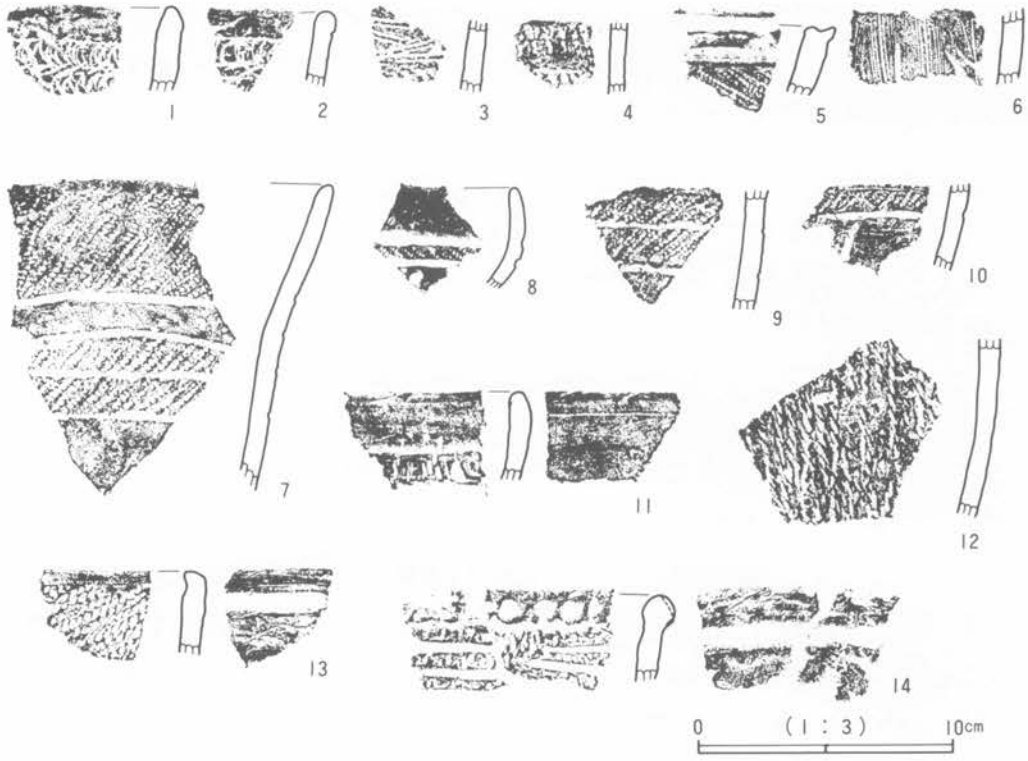
前～中期の土器である。

１～４は前期浮島式土器で，図示した４点が全てである。１・２は同一個体と思われるもので，平行線間に，波条爪形文が施され，二段目の波線に沿って斜位の連続短刻線が付される。３は波条爪形文の下位にもち，半截竹管の斜行沈線がみられる。４は波状貝殻文のもの。５は中期加曽利Ｅ式の古手のもので赤褐色を呈し，ＲＬの細かい縄文を有す，口唇と口縁上端には沈線が施されている。

第Ⅵ群土器（第122図６～14，図版71）

後期の土器である。

６は縦位の細条線のみられるもの。土師器の刷毛目痕に類似している。時期的に後期に求められよう。７～10は横位縄文帯（横帯文）の構成されるもの。７では口縁部に巾広い文様帯が配されている。平縁で，口縁部が急に外反し開く深鉢形土器の器形をなす。胎土には微細礫，



第122図　グリッド出土土器(6)

特に長石粒が目立つ。原体はＬＲである。内面にはかるく横ミガキが行われている。８は内湾する断面形をなすもの。口辺に凹線を廻らせ，下位にＲＬの縄文と横位沈線で横帯文。弧状短沈線がみられる。口縁，内面の研磨は顕著である。９・10は７と同一構成と思われる。９は７と同一個体であろう。11は口辺を凹線で区切り，撚糸文を地に，上部を研磨し無文帯としている。下位には弧状の沈線の一部が残されている。内面は磨かれ，上端に細かい沈線を有する。12は11と同様の原体（Ｒの撚糸文か）の施文された胴部である。

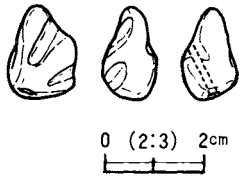
13はＬＲの縄文の施されるもの。内面上端に沈線を有する。14はいわゆる紐線文土器で地文(おそらく撚糸文)の上に横位沈線が施文される。端部には紐線が加えられる。内面は磨かれ上端に凹線が廻らされる。

７～14は後期加曽利Ｂ式に比定される。

２．グリッド出土の土製品（第123図，図版67）

円錘状の小型土製品である。長さ1.8cm，巾1.4cm，厚み1.1cmを測る。斜行沈線が部分的に施され，底面から側面に細かい貫通孔が開けられている。明褐色を呈し，焼成は良い。胎土には微細砂粒を混えており，それが表面に現われザラついた感じになる。全体的な質感から判断して縄文時代の所産であろう。

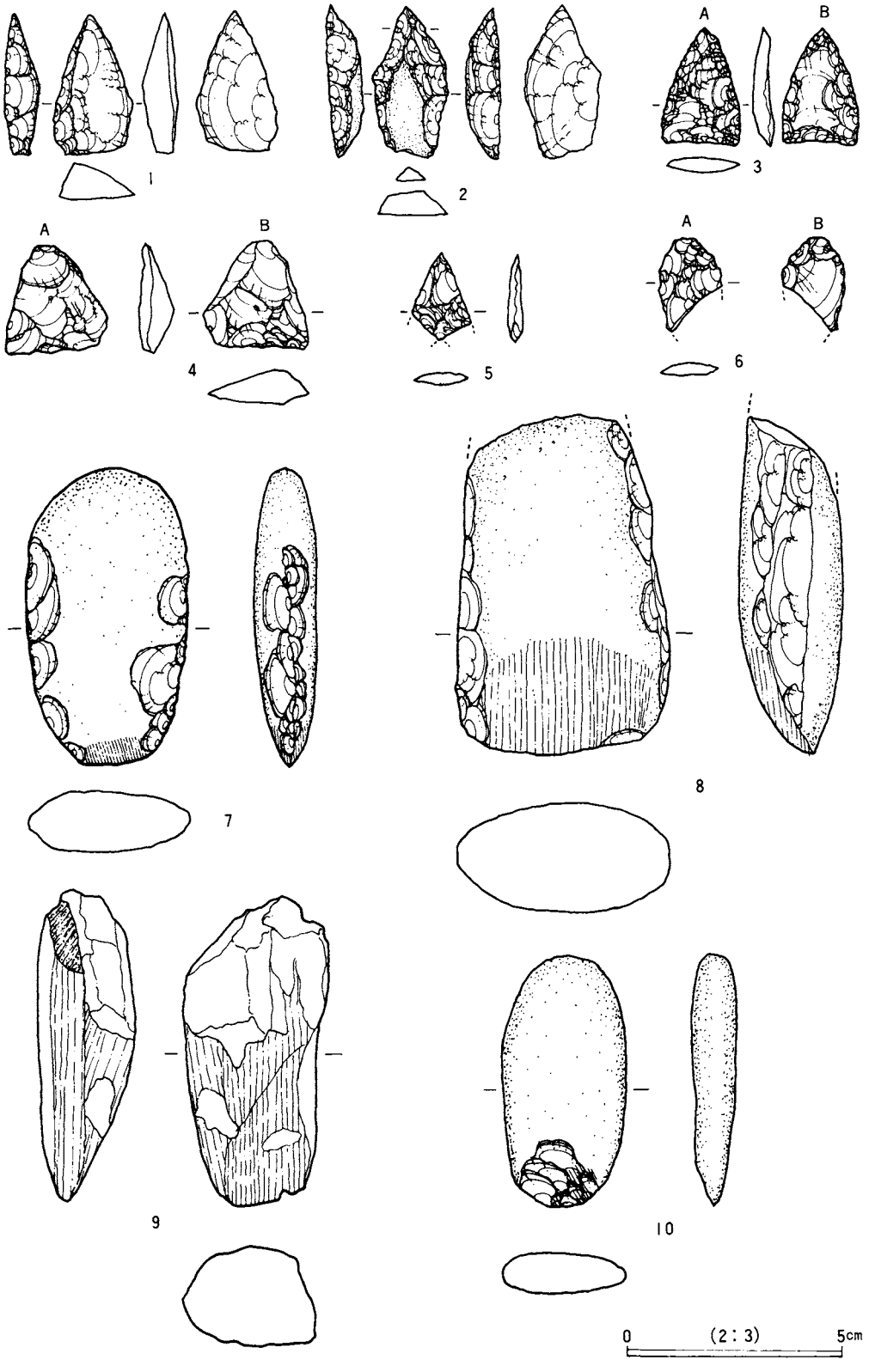
図示しなかったが不整形の土製品とみられるものや焼成を受けた粘土塊が20点あまり出土している。撚糸文期にはこの種の土製品が知られているので，当遺跡の例も第Ｉ群土器（撚糸文系土器）に伴うものの可能性が高い。



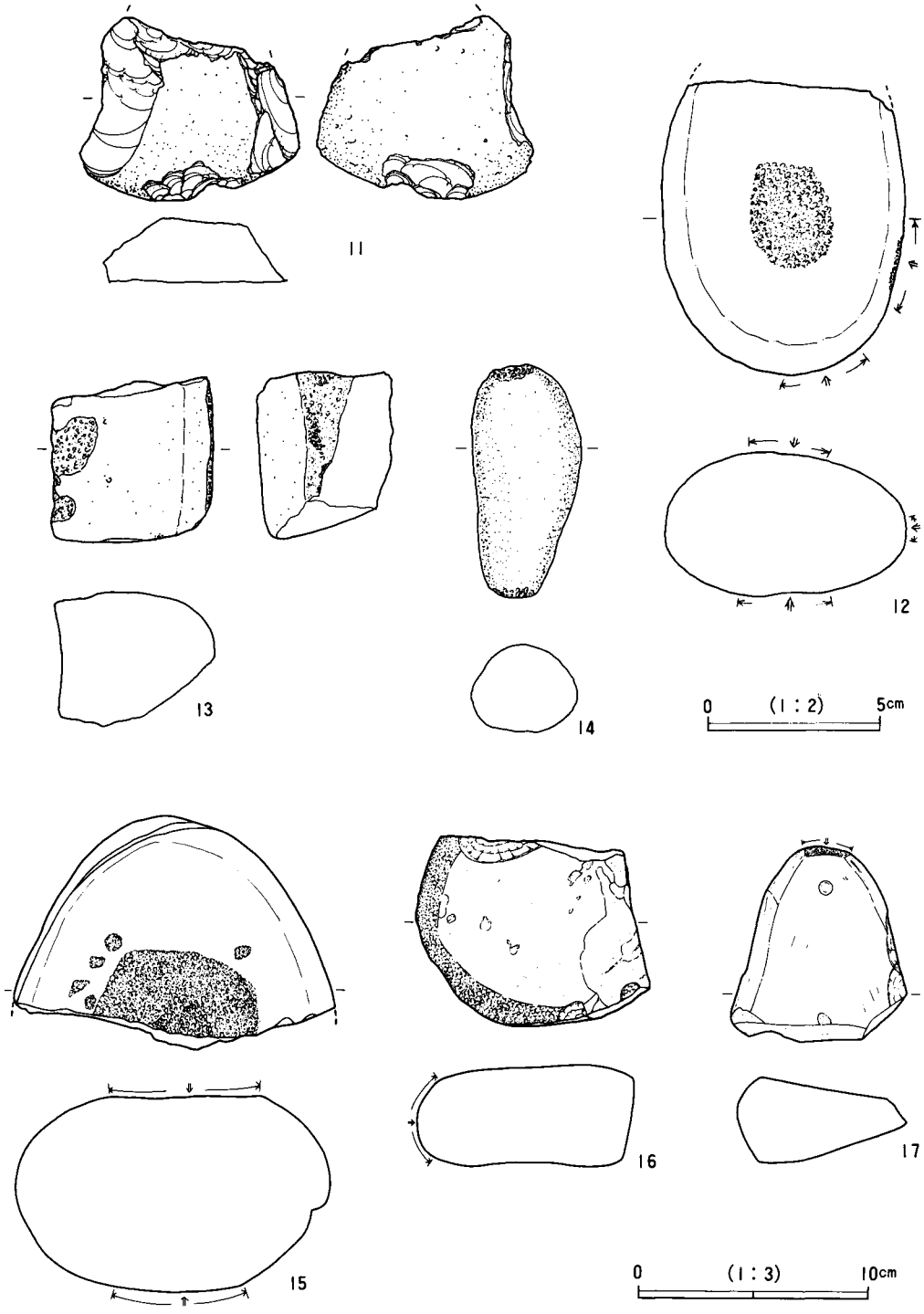
第123図　土製品

３．グリッド出土の石器（第124図３～10・第125図，図版72）

３～17は，縄文時代の遺物である。３はごく浅い抉りをもつ石鏃で，Ｂ面に主要剥離面を残すが，両面とも丁寧な調整が施されている。最終的な調整（いわゆる仕上げ痕）は，両面とも右側縁に集中する。４はＢ面の下端部に調整のみられるもので，石鏃の未製品ないしは削器であろう。５は基部を欠損した石鏃で丁寧な調整が施されている。６は下半部を欠損した石鏃で，Ｂ面には大きく主要剥離面を残している。７は局部磨製石斧である。偏平な礫の両側縁に調整を施した後，下端部の両面を研磨して刃部を作出している。また，両側縁に研磨痕か敲打痕であろうか，磨られたような痕跡がみられる。８は上半部を欠損した局部磨製石斧である。７と



第124図　単独出土旧石器時代及び縄文時代石器実測図(ナイフ形石器1, 角錐状石器2, 石鏃3～6, 局部磨製石斧7～10)



第125図　グリッド出土の石器

同様，両側縁に調整を施した後，両側縁及び片面の下端部を研磨して刃部を作出している。9は破損の状態・石材当から観察は困難であるが，全体的に丁寧に研磨されているようである。特に刃部の研磨は顕著で，片刃の局部磨製石斧と思われる。10は偏平な礫の下端部に剝離痕のみられるもので，刃部に一部研磨の跡がみられることから局部磨製石斧と思われる。研磨は片面のみで，剝離痕も同様である。

11はノッチと思われるもので，一端を欠いている。側縁は片面から急角度な粗い加工が行われており，刃部は縁の一部を両面から打ち欠いてノッチを形成している。礫表皮が両面に大きく残されている。

12・13は砂岩礫を用いた磨石である。12は偏平な楕円形を用いたもので，一部を欠損している。両面の中央に敲打による浅い凹みを有し，また端部及び側縁の一部に敲打痕がみられる。13は特殊な磨石で半欠品である。元々の素材は円礫を縦に裁断したもので，先端を平坦に作出し，その面をきれいに擦っている。片面には平滑な磨面が残されているが，反対面は表皮が剝がされている。敲打痕が側縁にみられる。

14は敲石で，細長い円礫の両端に軽い敲打痕が認められる。

15は安山岩の大きな円礫を利用した台石と思われるもので，1/3ほど残存している。両面の中央部に広範囲に敲打による凹みが設けられている。凹石的な使用痕であるが，大きさからみて，置いて敲石等の台として用いられたものと思われる。表皮面はザラついておりあまり正確な判断はできないが，側縁にも敲打痕があるようである。ハードローム上面出土であるが，傾斜地で撹乱を受けている個所であるもので，出土層位は判然としない。

16・17は軟質砂岩を用いた砥石である。16は三角形を呈するもので，両面と周縁が砥面になっており，一面の先端部には小円孔が浅く穿たれている。先端部には敲打痕がある。17は不整方形をなしており，両面と側縁（3面）が砥面となっている。別の一側縁には，敲打痕が顕著に残されて円礫状の曲面をなしている。

第３項　古墳時代・歴史時代

１．遺構とその遺物

住居跡

本調査区域からは33軒の住居跡が検出された。

001号址（第126～128図，図版75・76・99）

Ｃ４－21・31グリッドを主に，台地縁辺に位置する住居跡である。

遺構　検出された住居跡の中では最も大形で，7.8m×7.7mのほぼ正方形プランを呈する。検出面から最大70cmの深さを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を25cm程掘り込む。両袖外側にピットがそれぞれ検出されている。壁溝はカマド下を除いて全周し，溝内に小ピットが認められる。柱穴は四隅と南壁中央部に計５カ所検出された。床面は全体に踏み固められている。四隅の柱穴脇にハードロームを主体とした高まりが認められたが，高まりの下の床面は全て踏み固められていた。遺物は左袖側ピット内から出土した他は床直遺物は少ない。

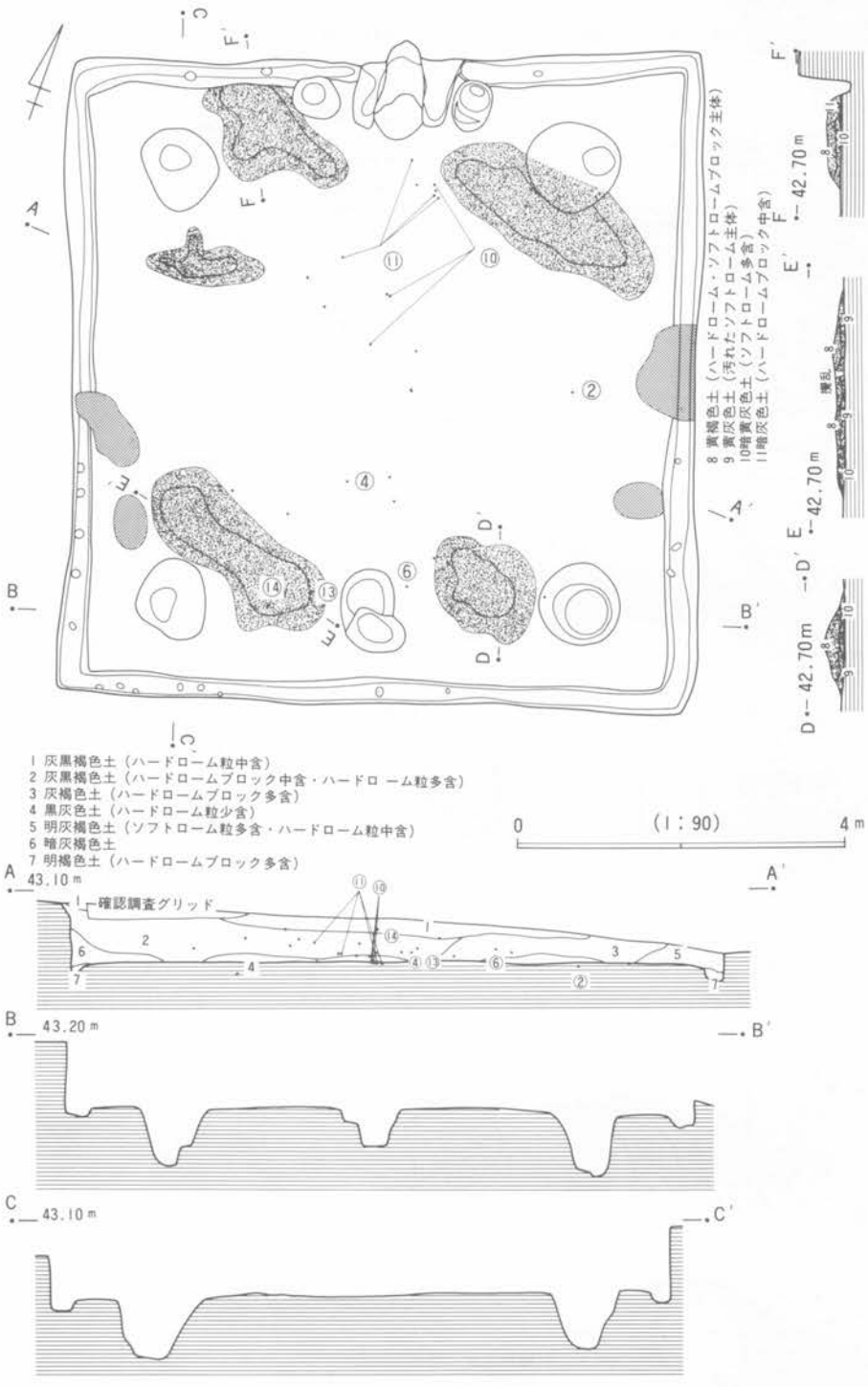
カマド　袖部は砂質土で構築されている。両袖部内側と火床部はよく焼けている。

遺物　１は須恵器坏，２～３は土師器坏，あるいは埦としてよい器形である。須恵器は質悪く，また，３の内面は剝離が認められる。４は土師器高坏である。胎土は柔らかい。５～８・12は小型の土師器甕である。８の底面には木葉痕が認められる。９・10は大形の土師器甕であり，10には外面に水もれ防止のための粘土が付着する。11・13は土師器壺である。14は甑であり，底部に単孔をうがつものである。15は須恵器壺の胴部片である。16は支脚の破損品である。

９は床面，２・３・４・６・13は床面より若干浮いた状態で，５・７・12・16はカマド内，またはその周辺，残りは全て覆土中からの出土である。

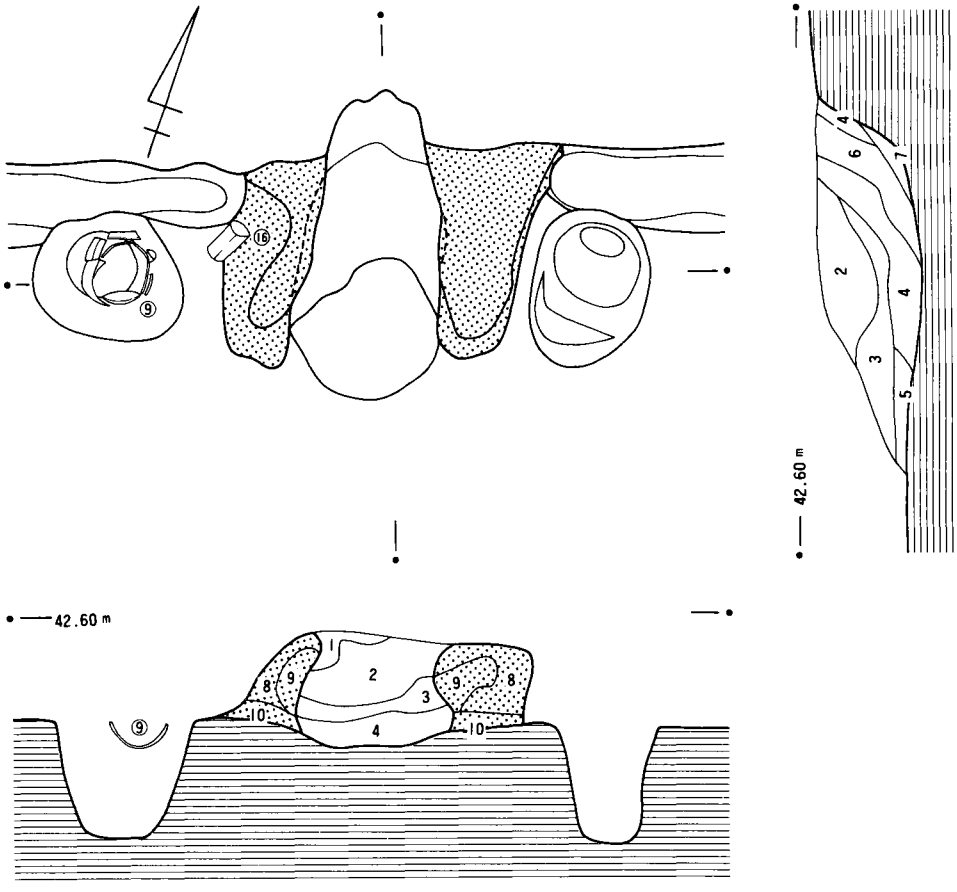
001号址　　第32表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器　坏	(7.0)	(14.2)		約$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$	白く粉質，砂粒一少	明灰白色，灰黒色	外面　ロクロナデ 内面　ロクロナデ	覆土
2	土師器　坏	3.4	10.7		約$\frac{1}{2}$～$\frac{1}{3}$		黄～赤褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ 内面　指ミガキ	床面やや浮き
3	土師器　坏(埦)	4.2	10.2		約$\frac{1}{2}$	微砂粒	明黄褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部摩耗のため不明 内面　指頭によるミガキ	床面やや浮き
4	土師器　高坏					微砂粒　軟質	灰褐色	外面　体部摩耗，底部荒い指ナデ 内面　剝落及び摩耗	床面やや浮き
5	土師器　甕	10.2	10.8	5.8	ほぼ完形	砂粒	赤褐色(一部暗褐色)	外面　口辺部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ 内面　上位，下位指ナデ，他ヘラケズリ	カマド内
6	土師器　甕		(12.1)		約$\frac{1}{3}$	微砂粒一多	外面　赤褐色 内面　黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，胴部タテヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ，指ナデ	床面やや浮き
7	土師器　甕				約$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{5}$	砂粒	外面　赤褐色 内面　黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，胴部タテヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，胴部指ナデ	カマド内
8	土師器　甕			6.8	約$\frac{1}{2}$～$\frac{1}{3}$		黄褐色	外面　胴部タテヘラナデ，下位ヨコナデ底部木葉痕 内面　指ナデ	覆土



第126図　001号址実測図

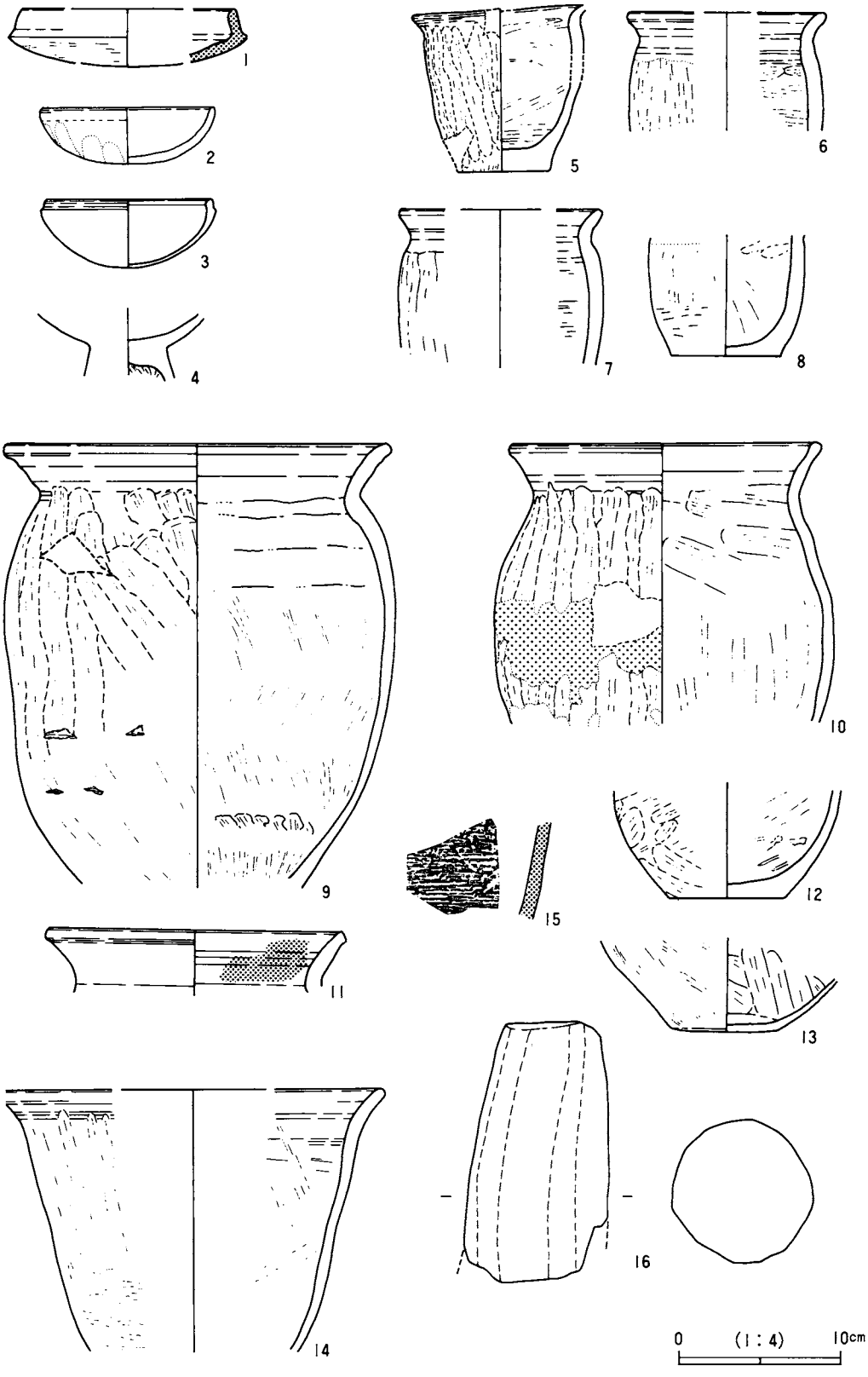
挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
9	土師器 甕	(28.5～29.5)	23.6		底部なし	砂粒一多	黄褐色～赤褐色	外面 口辺ロクロナデ，胴部上位タテヘラケズリ，下位， 内面 ヘラケズリに近いヘラナデ	床面
10	土師器 甕		19.1		約$\frac{1}{4}$	砂粒	外面 黒褐色 内面 黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ 内面 口辺部ヨコナデ，胴部上位指ナデ，下位指ナデ後ヘラナデ	覆土
11	土師器 壺		18.2		$\frac{1}{4}$	砂粒一多	明黄褐色	内面 黒斑	覆土
12	土師器 甕			(7.2)	約$\frac{1}{2}$～$\frac{1}{4}$	微砂粒	外面 赤黒色 内面 赤褐色	外面 ヘラケズリ 内面 指ナデ	カマド袖内
13	土師器 甕(壺)			6.6	底部	微砂粒	明赤褐色	外面 丁寧なナデ 内面 荒い指ナデ	床面やや浮き
14	土師器 甑		(23.6)		$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{8}$	砂粒一多	外面 赤褐色 内面 褐色	外面 口辺部ヨコナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ，下位ヘラナデに近いヨコヘラケズリ 内面 口辺部ヨコナデ，胴部指頭ナデ後，ヘラナデ	覆土
15	須恵器 壺				胴部片	白色微粒子	灰色	外面 タタキ 内面 剝落のため不明	覆土
16	土製支脚				約$\frac{1}{2}$～$\frac{3}{4}$	砂	赤褐色	砂のブロックを削り整えて，支脚としたもの	カマド袖脇



1 黒灰色土
2 暗灰色砂土（焼土粒少含）
3 暗紫色土（焼土粒・ハードローム粒中含）
4 焼　土
5 黒灰色土（ハードローム粒多含）
6 暗褐色土（焼土粒少含）
7 暗灰色土（ハードローム粒少含）
8 暗灰白色砂土
9 赤褐色砂土
10 明灰色土（ハードローム粒中含）

0　(1：30)　1 m

第127図　001号址カマド実測図

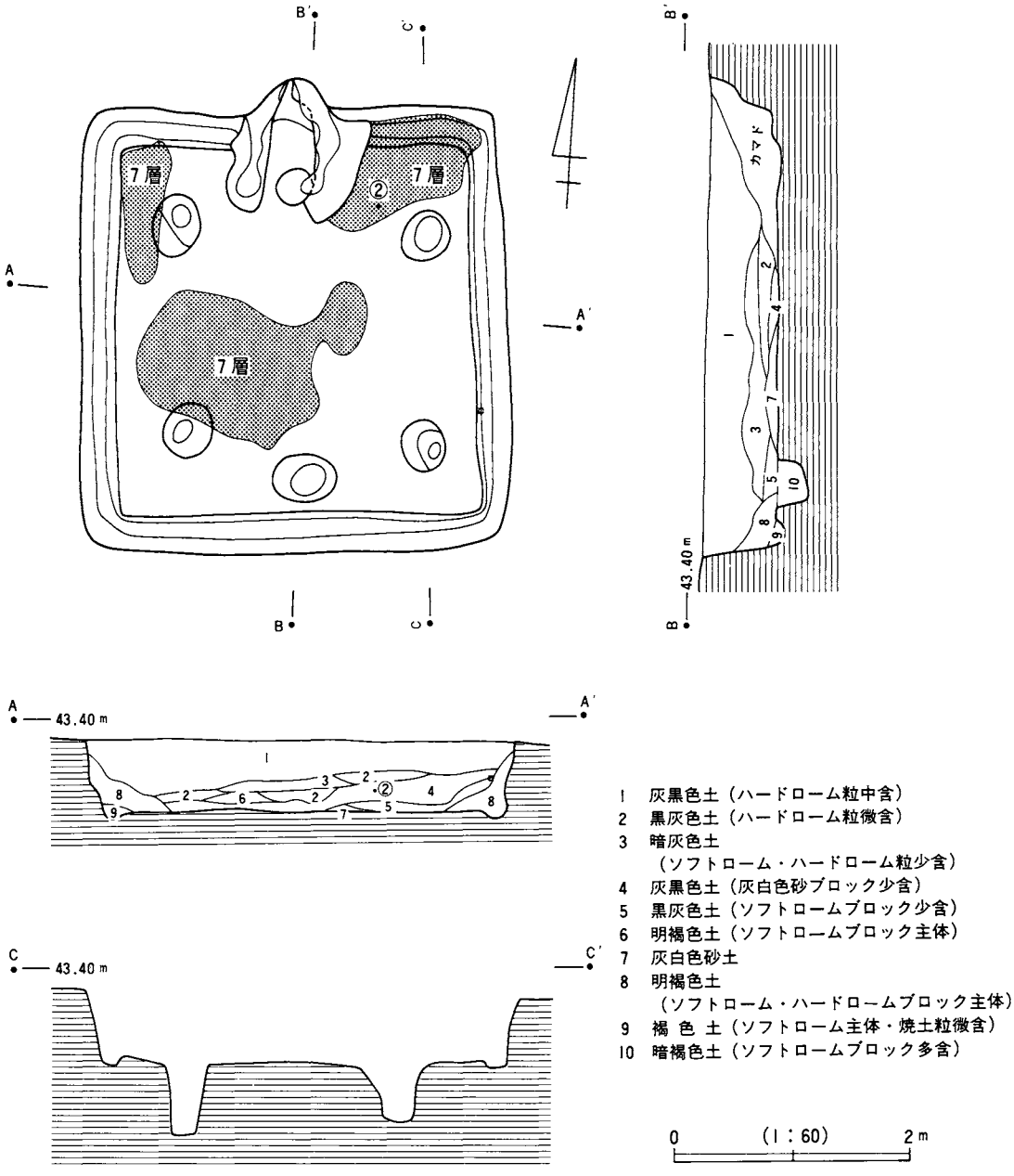


第128図　001号址出土遺物実測図

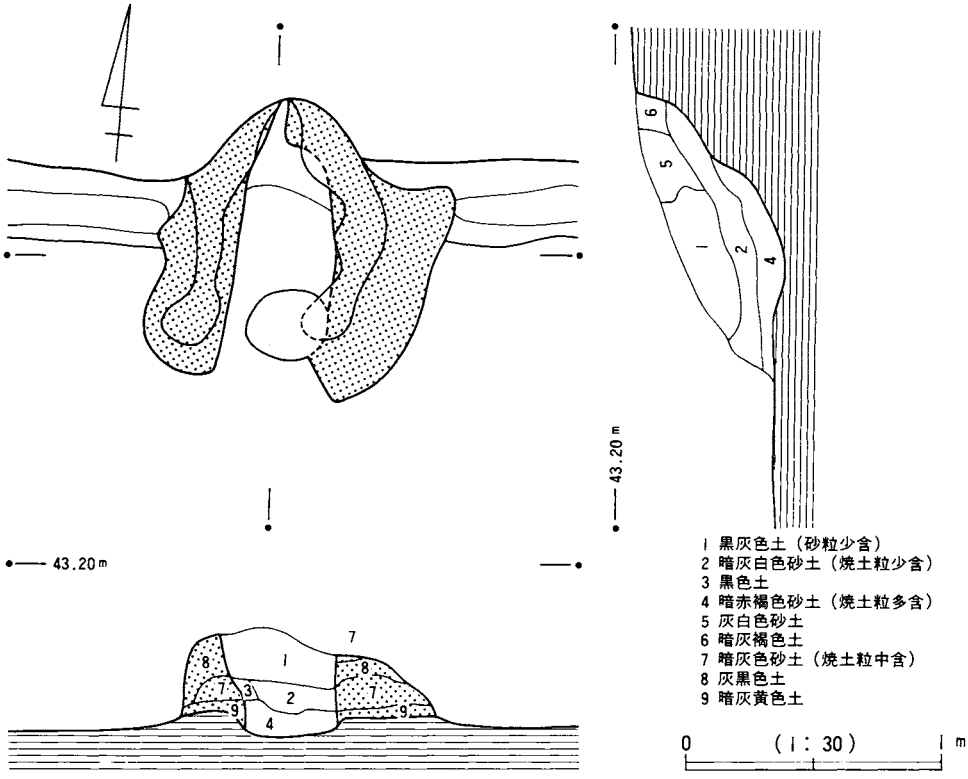
002号址（第129～131図，図版75・76）

B４－33グリッドを主に台地平坦面縁辺に位置する住居跡である。

遺構　3.75m×3.65mのほぼ正方形プランを呈し，検出面から60cmの深さを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を20cm程掘り込む。壁溝はカマド下を除いて全周する。柱穴は四隅と南壁中央に計５カ所検出された。床面は全体に踏み固められている。灰白色砂土層が床面直上に認められた。遺物は主に覆土中層から大部分細片の状態で出土している。



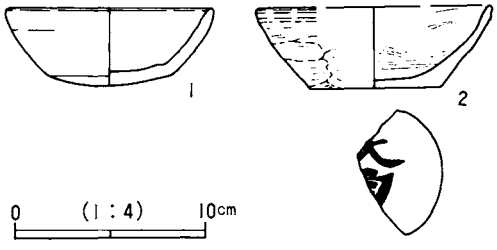
第129図　002号址実測図



第130図　002号址カマド実測図

カマド　袖部は砂質土を主体に構築されている。袖部内側はほとんど赤化していないが，火床部はよく焼けていた。

遺物　1・2共に土師器杯である。1は内外面が摩耗し，整形技法は不明である。2は墨書土器であるが，大の下の字は判読困難である。1・2共に覆土中よりの出土である。



第131図　002号址出土遺物実測図

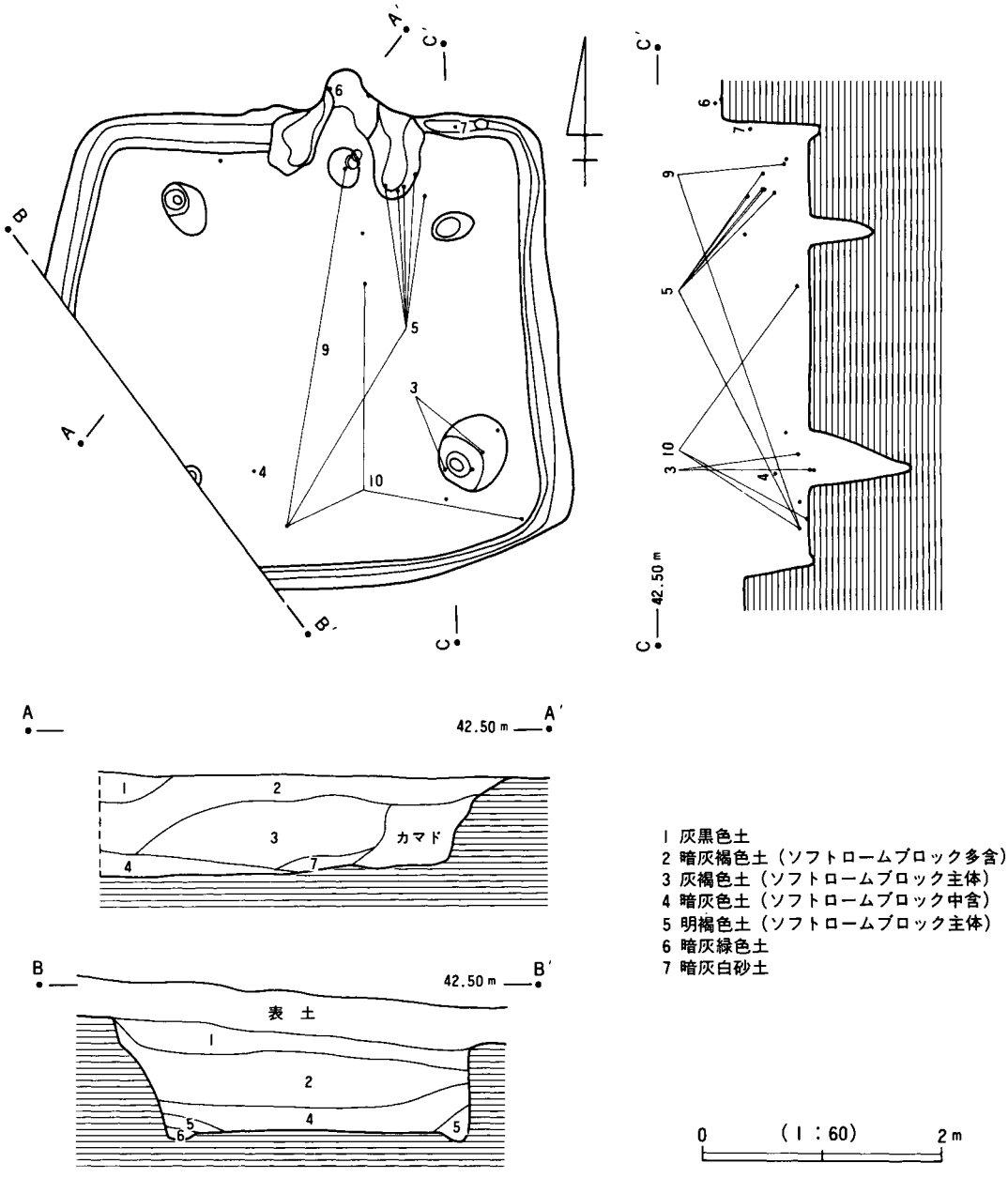
002号址　　第33表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	4.0	10.8	6.5	約½～¼	微砂粒	黄褐色	内外面 摩耗	覆土
2	土師器 坏	4.2	(12.4)	7.0	約¼	砂粒	明赤褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヨコヘラケズリ，底部多方向手持ちヘラケズリ 内面 指ナデ	覆土

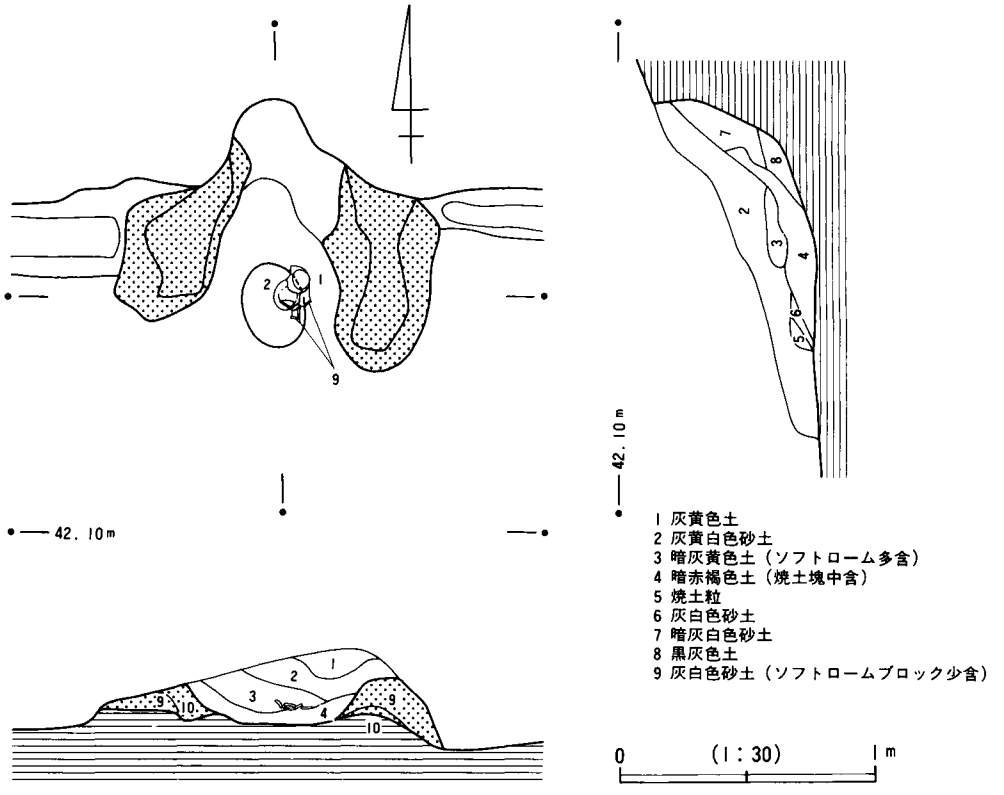
003号址（第132～134図，図版77・78・100）

Ｃ８－03グリッドを主に調査区南端の台地縁辺に位置する住居跡である。南西部は調査区外に拡がり完掘していない。

遺構　4.3m×４mの規模で南にやや広がる方形プランを呈すると思われる。検出面から80cm程の深さを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を30cm程掘り込む。壁溝はカマド下を除いて全周



第132図　003号址実測図



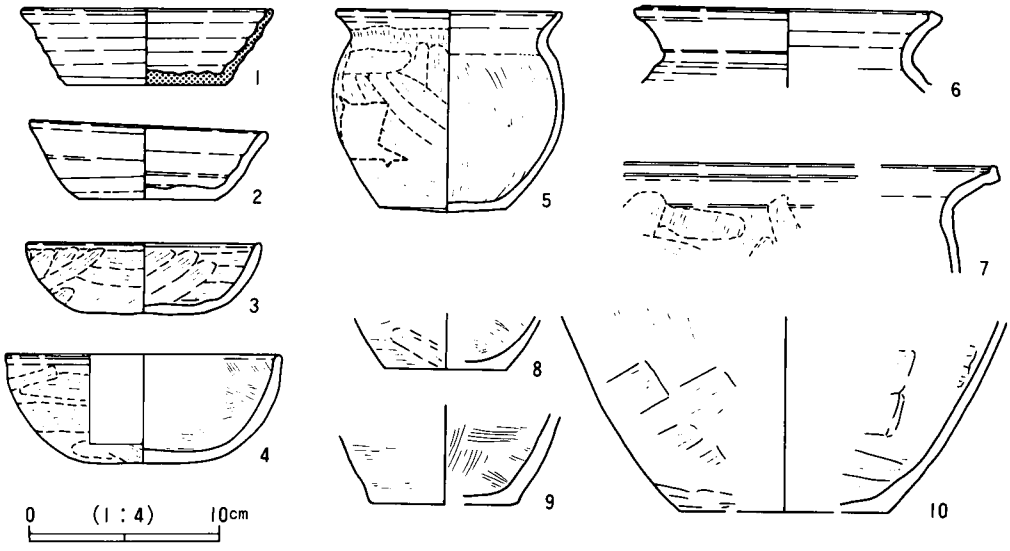
第133図　003号址カマド実測図

すると思われる。柱穴は四隅に1カ所ずつ検出された。床面は中央部は踏み固められていたが周縁は極端に軟らかくなる。遺物はカマド内からややまとまって出土している。

カマド　袖部は砂質土で構築されている。左袖内側はよく赤化しているが，右袖内側は赤化していない。また火床面から煙道部にかけてはよく焼けている。

遺物　1は須恵器坏であり，ほぼ完形のものである。2・3は土師器坏であるが，2がロクロ土師器に対し，3は伝統的な技法によるものである。4は大形の土師器椀で体部のロクロ痕跡は全てヘラケズリによって削られている。5は小形の土師器甕，6～10はそれぞれ土師器甕の口辺部と底部である。9の底部は径2.5cmの焼成後による孔がみられ，意識的なものであろうか。

3・10が床面，1・2・6・9がカマド内より出土し，残りは覆土中からの出土である。なお，3は覆土中の破片とも接合した。



第134図　003号址出土遺物実測図

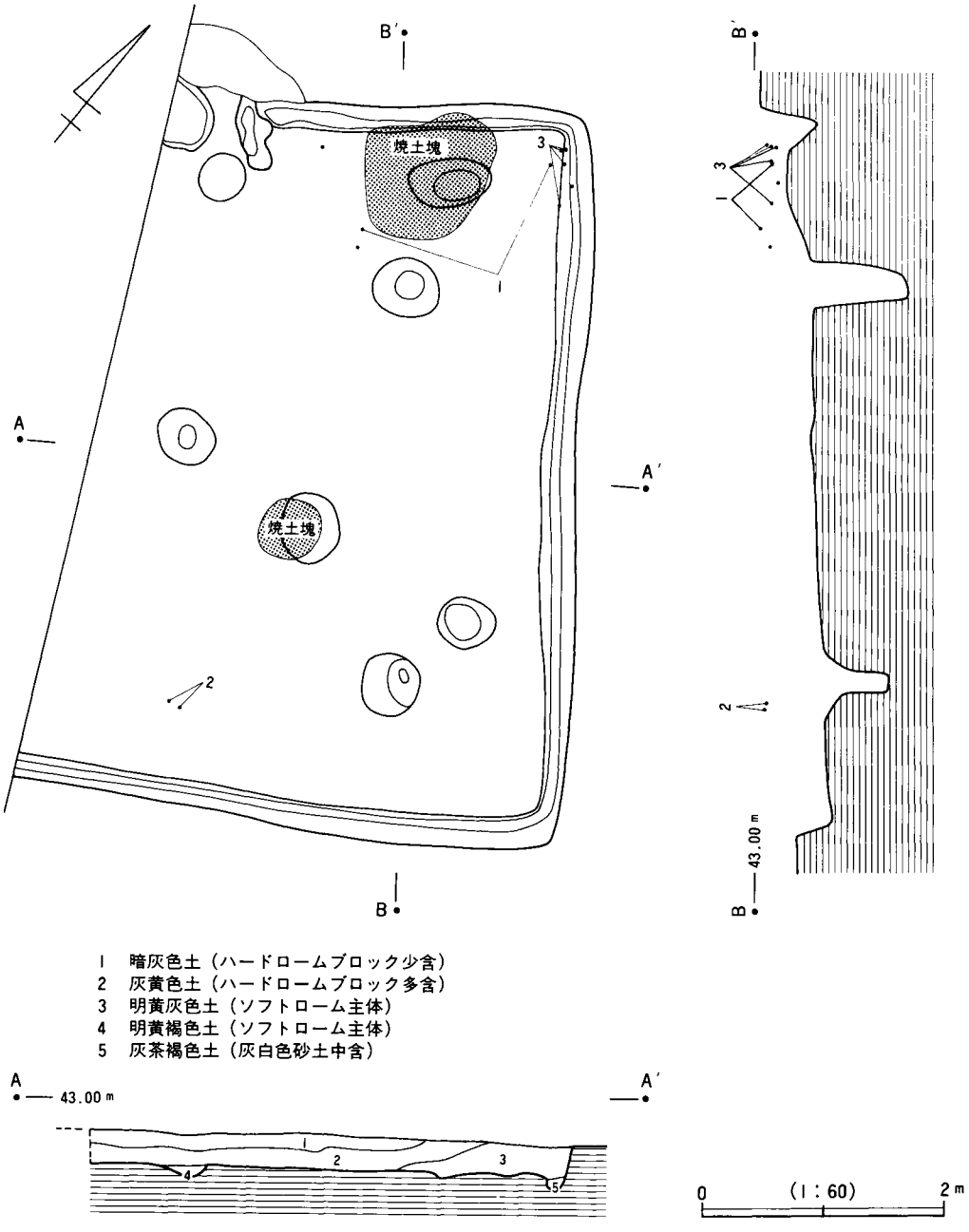
003号址　　第34表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器 坏		13.2	8.5	ほぼ完形	砂粒，不純物一多	灰色	外底面 ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ回転ヘラ切り	カマド内
2	土師器 坏	4.0	12.4	7.4	ほぼ完形	微砂粒	赤褐色	外面 上位ロクロナデ，下位回転ヘラケズリ，底面回転ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	カマド内
3	土師器 坏	3.7	12.2	7.2	約½	微砂粒一微	外面 黄褐色 内面 黒褐色	外面 ヨコヘラケズリ，底面ヘラミガキに近いヘラナデ 内面 指ナデ	床面，覆土
4	土師器 椀	5.6	(14.5)	7.6	口辺～体部½底部完形	微砂粒	黄褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部ヨコヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキに近い丁寧なナデ	覆土
5	土師器 甕	10.8	11.9	6.8	ほぼ完形	砂粒	褐色～黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラケズリ，下位ヘラナデ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部指ナデ	床面，カマド上
6	土師器 甕		16.3		口辺部約½強	微砂粒	暗褐色	内外面 ロクロナデ	カマド内
7	土師器 甕				口辺部約½	微砂粒	暗褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部タテヘラケズリ 内面 ロクロナデ	覆土
8	土師器 甕			(3.5)	底部約½	砂粒	黒褐色	外面 ヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面 ヘラナデ	覆土
9	土師器 甕			8.0	底部片のみ	砂粒，石英粒	黄褐色～黒褐色	外面 ヘラナデか 内面 指ナデ(底部に径2.5cmの貫通孔)	カマド内
10	土師器 甕			(11.0)	底部約½	微砂粒	黒褐色	外面 ヘラナデ，下位ヘラケズリ，底面ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	床面

004号址（第135～137図，図版77・78・100）

Ｃ７－11グリッドを主に調査区南端の台地平坦面縁辺に位置する住居跡である。西側半分程が調査区外にかかり完掘していない。

遺構　一辺６ｍ程の方形プランを呈すると思われる。検出面からの深さは25cmを測る。カマドは北西壁にある。壁溝はカマド下を除き全周すると思われる。柱穴は北・東のコーナー部に１カ所ずつ，他に支柱穴及び貯蔵穴と思われるピットが４カ所検出されている。床面は全体に踏み固められている。

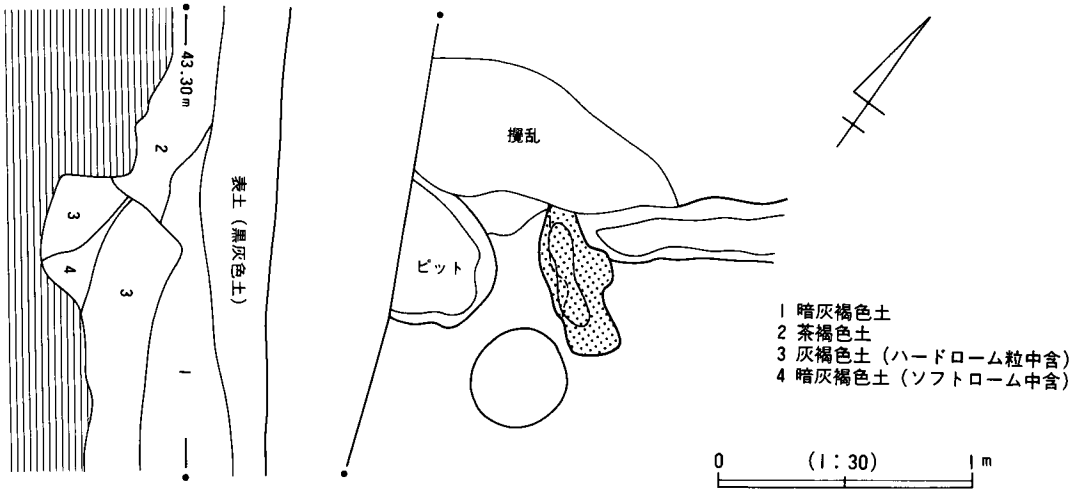


第135図　004号址実測図

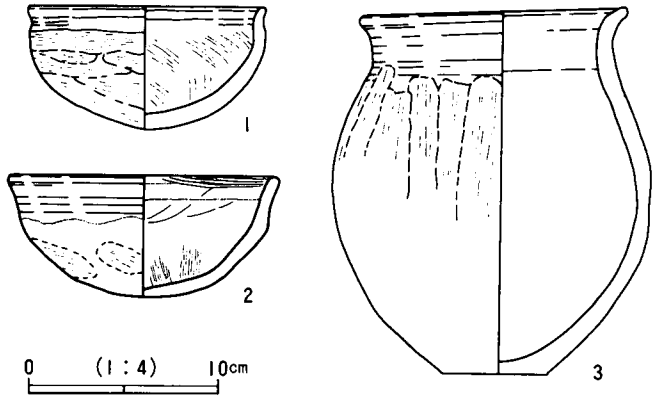
カマド　攪乱による影響が大きく右袖基部と火床部が残っていただけである。火床部は良く焼けている。

遺物　1・2共に土師器埦であるが，1は安定性に欠け，2は口縁部が外反するものである。整形は指ナデとヘラケズリを基本とするが，2は一度体部外面にヘラナデを加えた後，一部ヘラケズリを加えている。3は土師器壺である。胴部外面下位は磨耗のため整形不明。

これら図示した遺物は，いずれも覆土中の出土である。



第136図　004号址カマド実測図



第137図　004号址出土遺物実測図

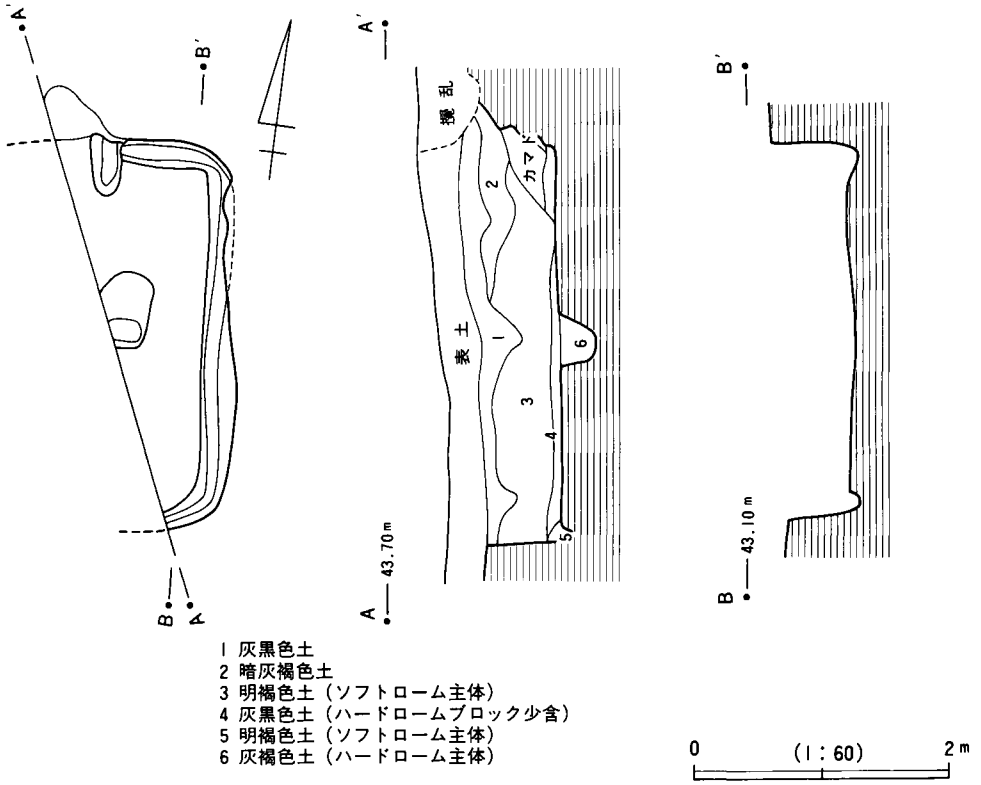
004号址　　第35表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　埦	6.3	12.4		約½	砂粒	褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部上位ヘラケズリ 下位ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，体部丁寧な指ナデ	覆土
2	土師器　埦		(14.1)		約½	並	黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部下半，底部ヘラケズリ 内面　一部にヘラケズリを加えたヘラナデ	覆土
3	土師器　壺	19.0	13.9	5.4	約⅔	砂粒	褐色	外面　口辺部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ，底面一方向ヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，胴部丁寧な指ナデ	覆土

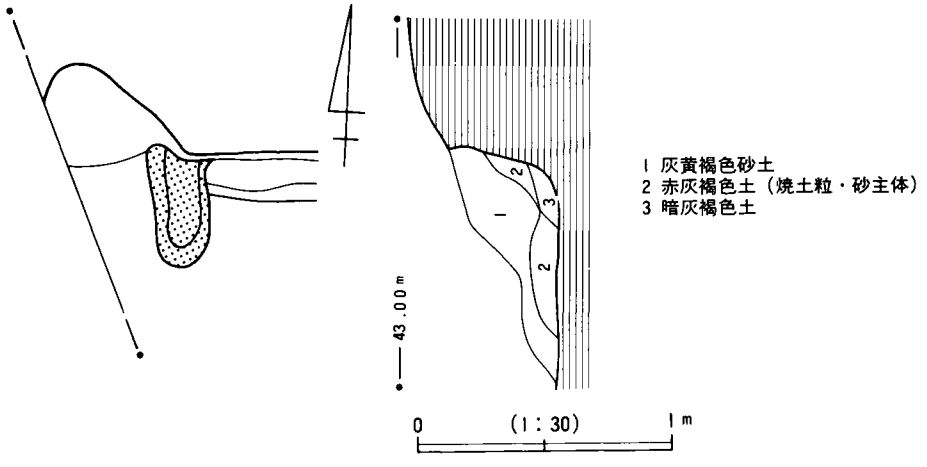
005号址（第138・139図，図版78）

C 7 －31•32グリッドの台地平坦面縁辺に位置する住居跡。大部分調査区外にあり東側1/3程を掘ったに過ぎない。

遺構　一辺３m程の方形プランを呈すると思われる小形の住居跡で，検出面より55cmの深さを



第138図　005号址実測図



第139図　005号址カマド実測図

測る。カマドは北壁中央部にあり壁面を40cm掘り込む。壁溝はカマド下を除き巡っている。柱穴は中央東寄りに1カ所検出された。床面は全体に踏み固められている。遺物は覆土及びカマド内から少量の細片が出土している。

カマド　右袖部と火床部を検出している。袖部は砂質土で壁面中位から構築され，内側はあまり焼けていない。火床部上には焼土粒が多量にみられるが，火床面はそれほど焼けていない。

遺物　図示できるような遺物は出土せず，遺物そのものの絶対量も少ない。

006号址（第140～142図，図版79・80・100）

C5－01・02グリッドを主に台地平坦面縁辺に位置する住居跡である。本号址内に012号址（住居跡）が掘り込まれている。

遺構　一辺5.25mの正方形プランを呈する。検出面より25cmの深さを測る。カマドは北西壁中央にあり壁面を10cm掘り込んでいる。壁溝はカマド下を除き全周する。柱穴は四隅と南東辺中央に計5カ所検出された。四隅の柱穴には外側に向って斜めに掘り込まれている。床面は全体に踏み固められている。遺物は覆土内，カマド内から細片を主体に出土している。

カマド　袖部は砂質土で構築されている。全体に押しつぶされた状態で検出した。右袖内側と火床部はよく焼けていたが，左袖内側はそれほどではない。

遺物　1は土師器坏の完形品である。2は墨書土器破片である。土師器坏底面に記される。字は「侶」とはっきり読みとれる。3は鉄釘である。遺存長5.5cm，頭部を欠く。断面の形状はやや丸みを帯びた長方形で，全体に遺存がよい。重量は5gである。

1は床面，2・3は共に覆土中の出土である。

008号址（第143～145図，図版79・80・91・100）

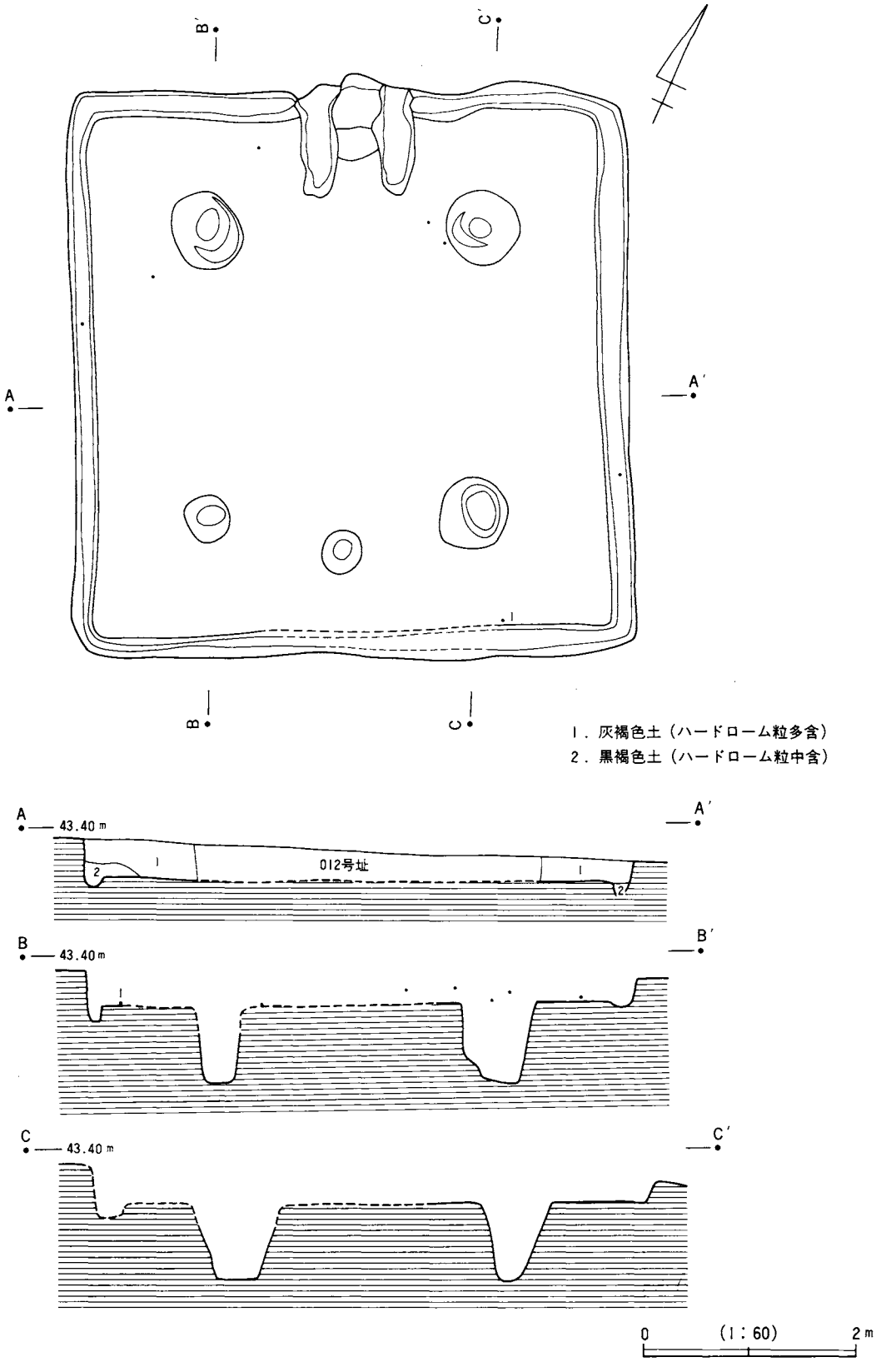
C6－22グリッドを主に台地縁辺に位置する住居跡である。029号址（住居跡）と重複し，本号址の方が新しい。

遺構　5.25×5.0mの方形プランを呈する。検出面から72cmの深さを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を20cm掘り込む。壁溝はカマド下を除いて全周すると思われる。柱穴は四隅にあり，支柱穴が南辺中央に1カ所検出された。床面は全体に踏み固められている。

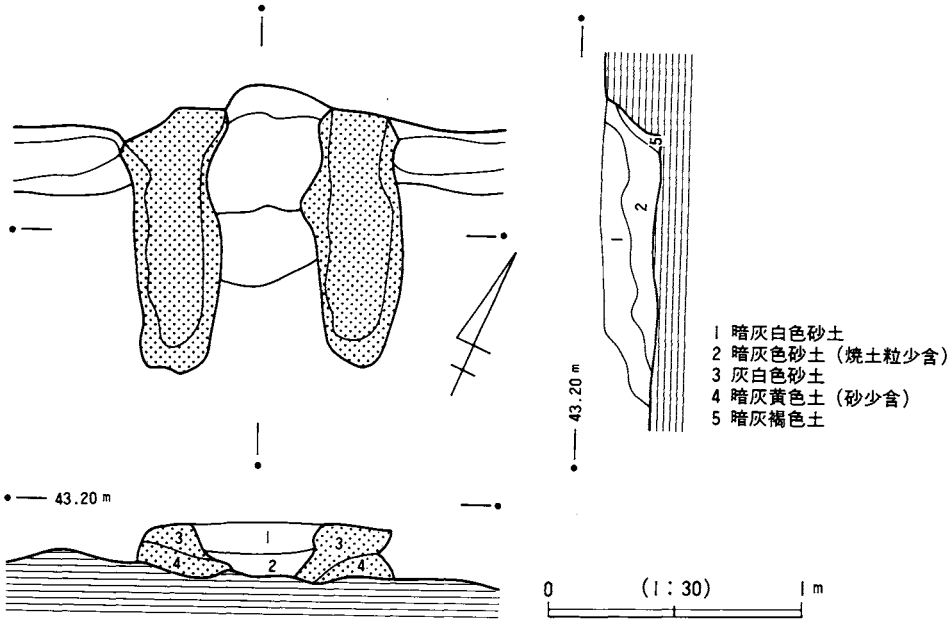
カマド　袖部は砂質土で構築されている。両袖部内側はよく焼けているが，火床部はあまり焼けていない。天井部が袖際に若干残っている。

遺物　1～2は土師器坏，3は土師器椀あるいは坏としてよい器形である。2は体部のラインに比し，口縁部が直立する特徴を有する。1・2共に内側はヘラミガキを施す。3は稜直下に布目痕跡が明瞭であり，押しつけたと思われる圧痕である。4は土師器甕の大型破片である。5は鍛冶滓であり，椀形滓と呼ばれるもので，斜線個所は砂の付着部分を示す。

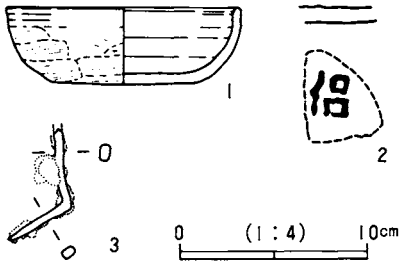
1・3・4は共に床面，あるいは床面より多少浮いた状態で，2はカマド内より，5は覆土中よりそれぞれ出土した。



第140図　006号址実測図



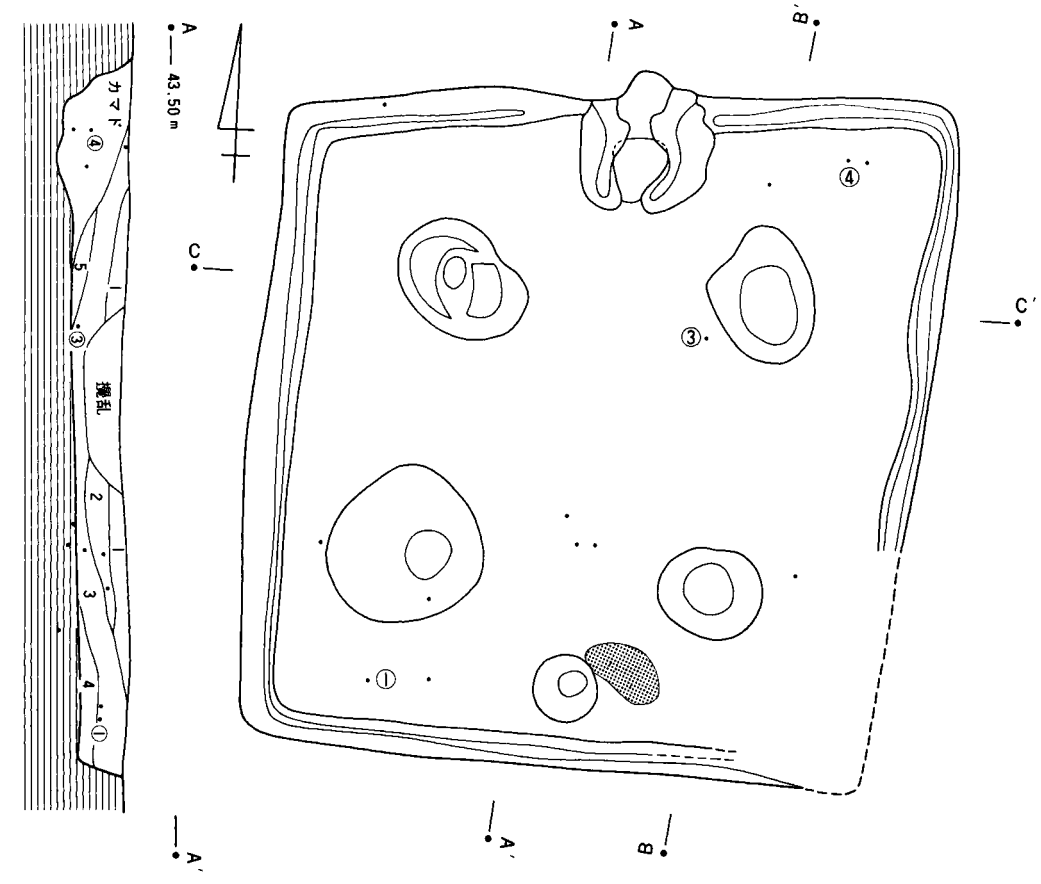
第141図　006号址カマド実測図



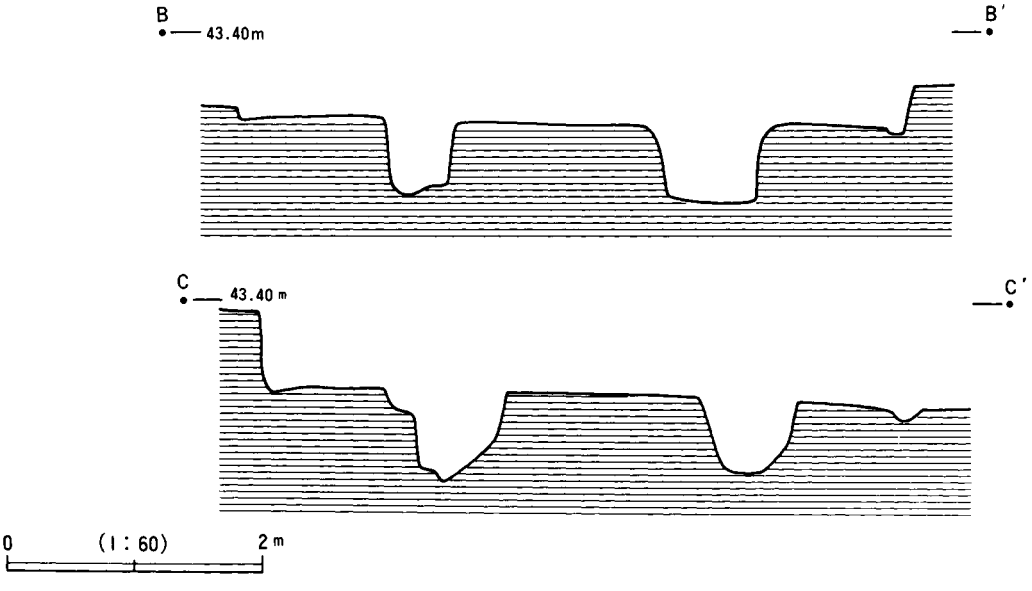
第142図　006号址出土遺物実測図

006号址　　第36表

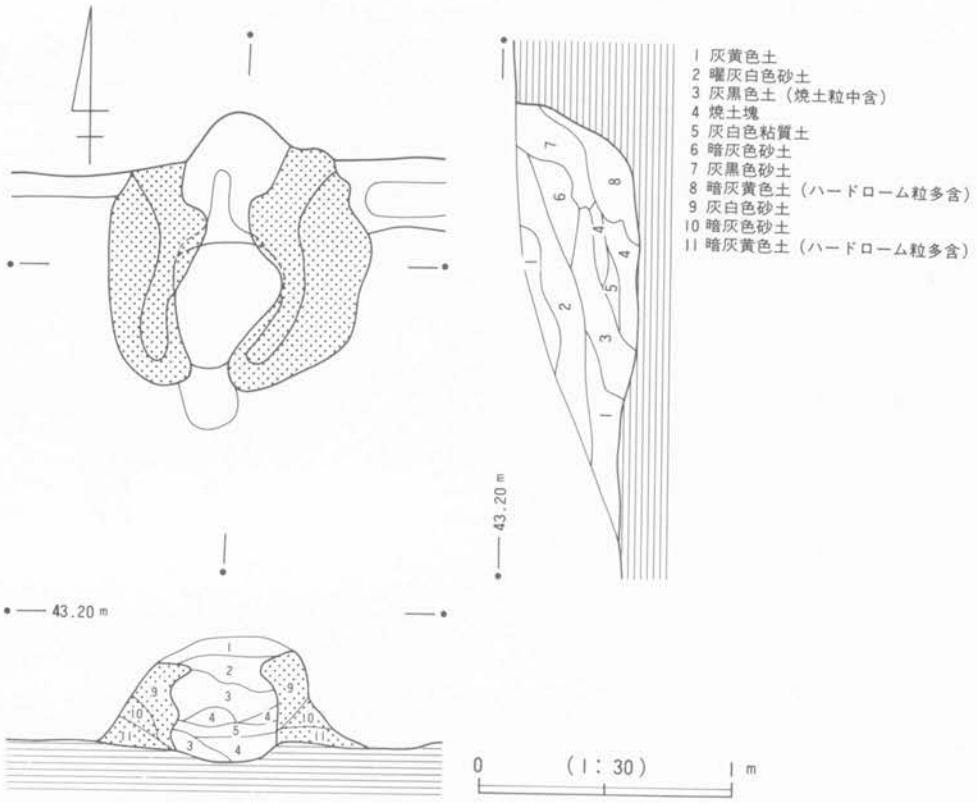
挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　坏	3.9	12.4	7.6	完形	砂粒一多	赤褐色～黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	床面
2	土師器　坏				底部	砂粒	明黄褐色		覆土



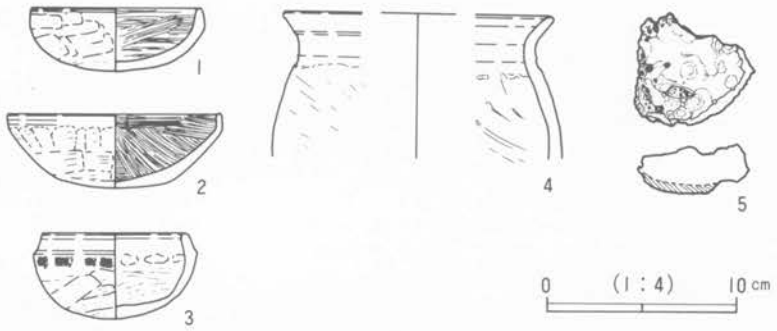
1 灰黒色土（ハードローム粒少含）
2 暗灰色土（ソフトロームブロック中含）
3 明灰褐色土（ソフト・ハードロームブロック多含）
4 暗灰色土（ハードローム粒微含）
5 暗灰色土（ハードローム粒少含）



第143図　008号址実測図



第144図　008号址カマド実測図



第145図　008号址出土遺物実測図

008号址　　第37表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	3.2	8.8		完形	精良	明灰褐色	外面 口辺部ヨコナデ，底面ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	
2	土師器 坏	3.8	11.3	6.2	約$\frac{3}{4}$	微砂粒－微	黒褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヨコヘラケズリ，底面，手持ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ	カマド内
3	土師器 椀	4.4	7.5		完形		黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部布状痕跡底面ヘラケズリ 内面 口辺部ヨコナデ，体部指ナデ	床面やや浮き
4	土師器 甕		(14.4)		口辺～胴部約$\frac{1}{4}$	微砂粒	外面 褐色 内面 黒褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面 口辺部ヨコナデ，体部ヘラナデ	床面

009号址（第146～148図，図版81・101）

Ｃ３－14グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。西側1/3程が調査区外に延び完掘していない。

遺構　5×(5.2) mの方形プランをなすと思われ，検出面から深さ45cmを測る。カマドは北壁中央東寄りにあり，壁面を40cm掘り込む。壁溝はカマド下を除き全周すると思われる。柱穴は調査区外を除くコーナー部で検出されている。床面は全体に踏み固められている。出土遺物の量は少なく細片が多い。

カマド　袖部は砂質土で壁面中位から構築されている。両袖部内側はよく焼けているが，火床部はそれほどでもない。

遺物　1・2は土師器坏である。1は完形，2は約1/2個体である。1は体部外面がヘラケズリによると思われるが，表面剝落により図化は不可能である。3は墨書土器であり，土師器坏の底部に記される。文字の判読には至らない。

1，2は床面，または床面より若干浮いた状態で，3は覆土中より出土した。

010号址（第149・150図，図版81・82）

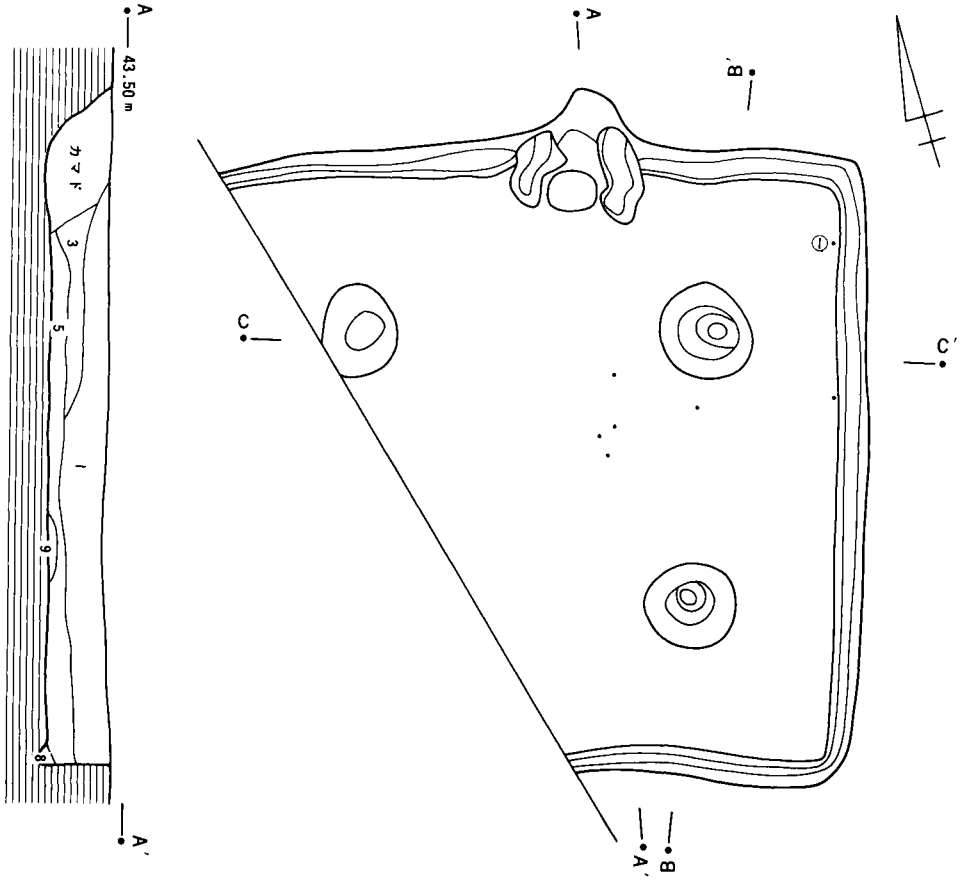
Ｃ７－02グリッドを主に台地縁辺部に位置する住居跡である。011号址・017号址と重複するがそれらの住居跡より古い。

遺構　住居跡同士の重複や東壁が斜面にかかるため明確ではないが，一辺7.2m程の方形プランを呈する。検出面からの深さは35cmを測る。カマドは北壁中央にあったと思われるが017号址により痕跡も認められなかった。壁溝は北壁，西壁，南壁沿いに認められる。柱穴は西壁沿いに3カ所，南東隅に1カ所検出された。床面は全体に踏み固められている。遺物は床面からやや浮いたレベルで若干出土した他は覆土中からの出土である。

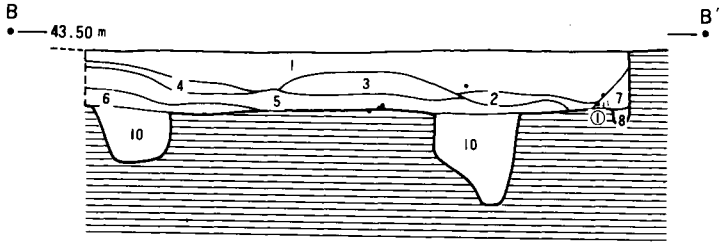
カマド　017号址に破壊されていたため痕跡もないが，北壁西よりに貯蔵穴と思われるピットがあるため北壁中央にあったであろう。

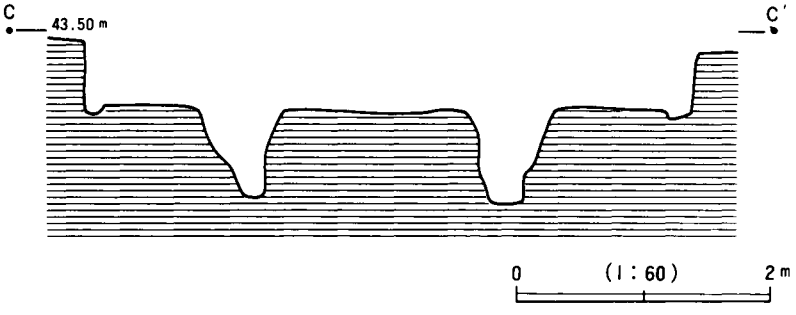
遺物　1は土師器坏である。約1/4個体を復元実測した。2は土師器高坏の体部～脚部であり，胎土には砂粒の混入がみられない。3は壺の大形破片を推定し，復元実測した。4は約1/2個体の土師器甕で，外面には焼土が部分的に付着する。なお，2，4は，重複する017号址よりの出土（4は大部分）であるが，本址からの混入品と考えられるので，ここで扱った。

1は周溝内，2は覆土中よりの出土である。

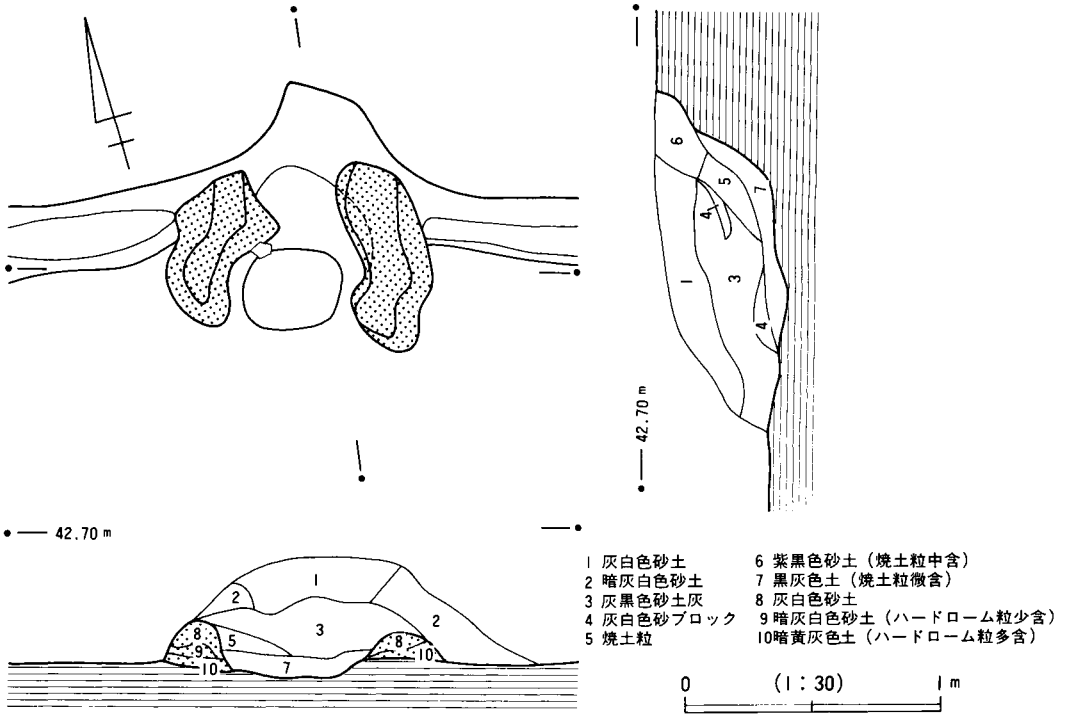


1．暗灰褐色土(ハードローム粒中含)
2．灰褐色土(ソフトロームブロック中含)
3．暗灰色土(灰白色砂ブロック多含)
4．灰黒色土
5．灰黒色土(ハードロームブロック中含)
6．灰黒色土(4層と同質)
7．黒灰色土(ソフト・ハードローム粒中含)
8．明灰褐色土(ソフトロームブロック多含)
9．明黄褐色土(ハードロームブロック主体)
10．暗灰色土(ハードローム粒中含)

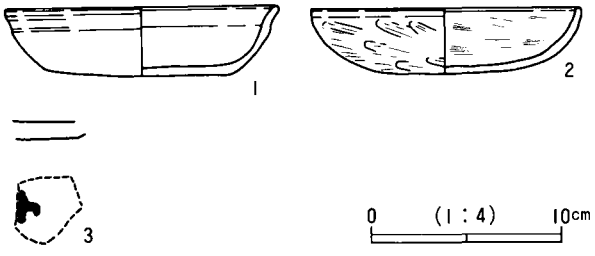




第146図　009号址実測図



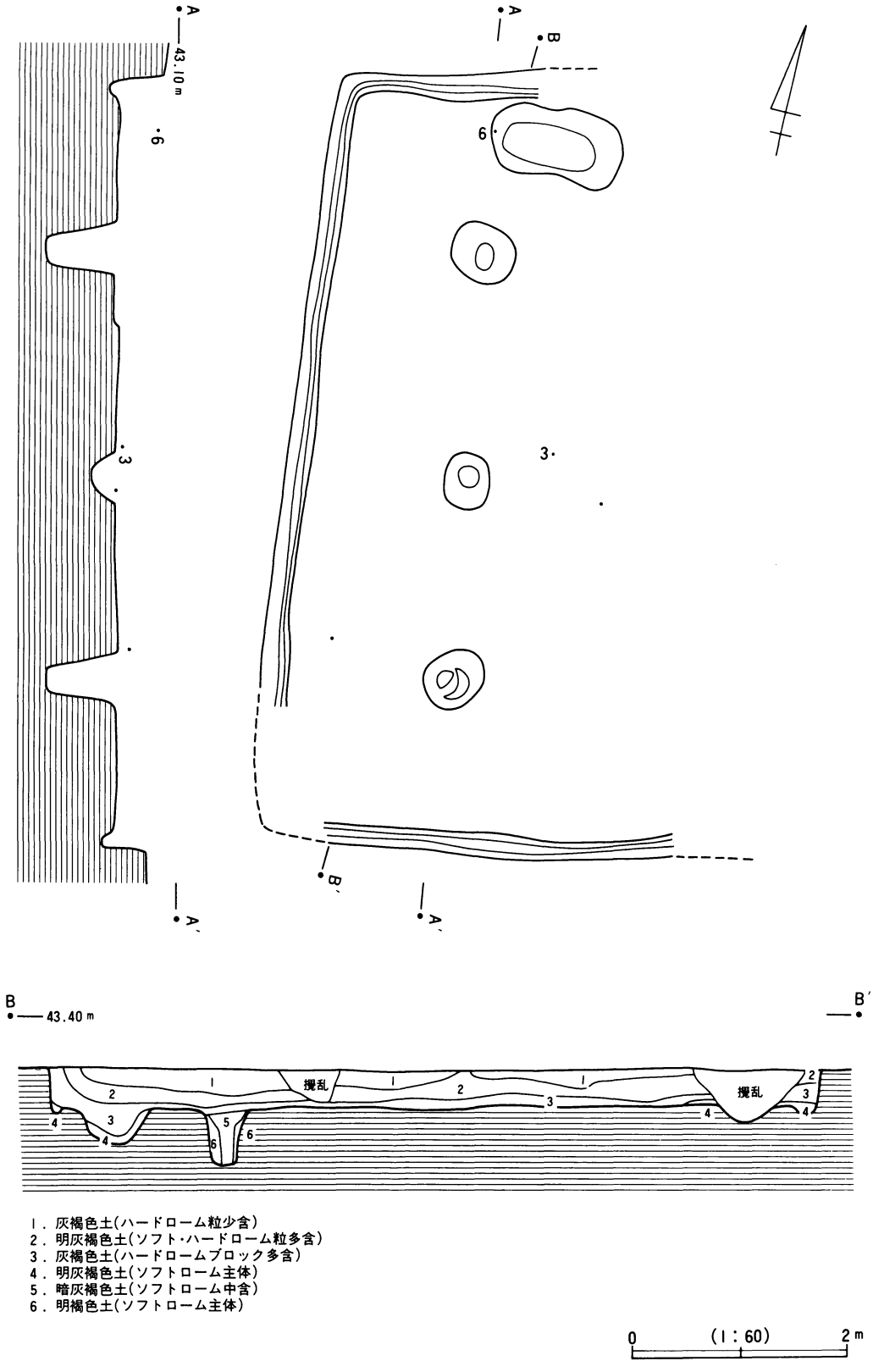
第147図　009号址カマド実測図



第148図　009号住居跡出土遺物実測図

009号址　　第38表

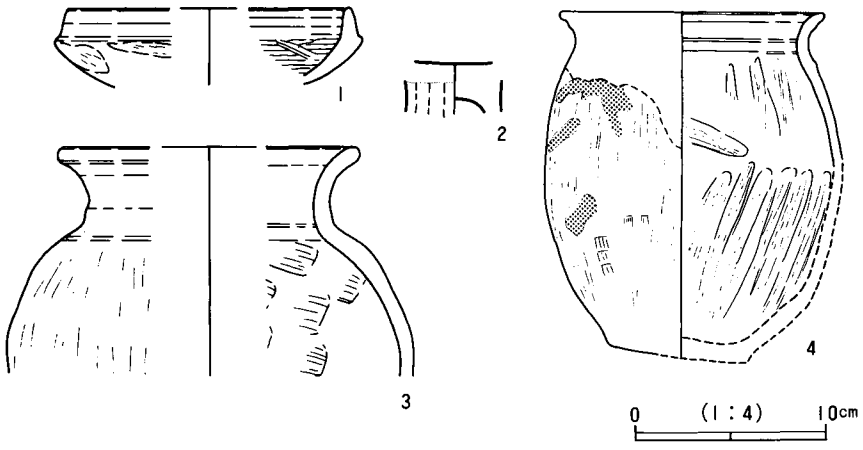
挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	3.5	14.3	9.8	完形	微砂粒	外面 明黄褐色 内面 褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ(剝落のため整形痕不明) 内面 ヘラミガキ	覆土
2	土師器 坏	3.4	(14.2)	(6.6)	約½	微砂粒	明赤褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面 丁寧なヘラミガキ	床面
3	土師器 坏				底面のみ	微砂粒混入	明黄褐色	外面 回転糸切り，周辺部手持ちヘラケズリ	覆土



1．灰褐色土(ハードローム粒少含)
2．明灰褐色土(ソフト・ハードローム粒多含)
3．灰褐色土(ハードロームブロック多含)
4．明灰褐色土(ソフトローム主体)
5．暗灰褐色土(ソフトローム中含)
6．明褐色土(ソフトローム主体)

0　(1：60)　2m

第149図　010号址実測図



第150図　010号址出土遺物実測図

010号址　　第39表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏		(14.8)		約$\frac{1}{8}$	並	黒色	外面 口辺部ナデ，体部ヘラナデ 内面 口辺部指ナデ，体部ヘラナデ	周溝内
2	土師器 高坏				体部～脚部	並	褐色	外面 タテヘラケズリ，坏部内面は，いぶしにより黒色を呈す	覆土
3	土師器 壺				胴部上位$\frac{1}{4}$	微砂粒	外 黒褐色 内 赤褐色	外面 口辺部ナデ，胴部タテヘラ削り後ヨコナデ 内面 口辺部ヨコナデ，胴部ヘラナデ	床面やや浮き
4	土師器 甕	18.0～18.5	13.8	胴部最大径 15.5	約半個体	砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面 ナデ	床面やや浮き

011号址（第151～153図，図面81・82・101）

C 6－41グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。010号址と重複するが本号址の方が新しい。

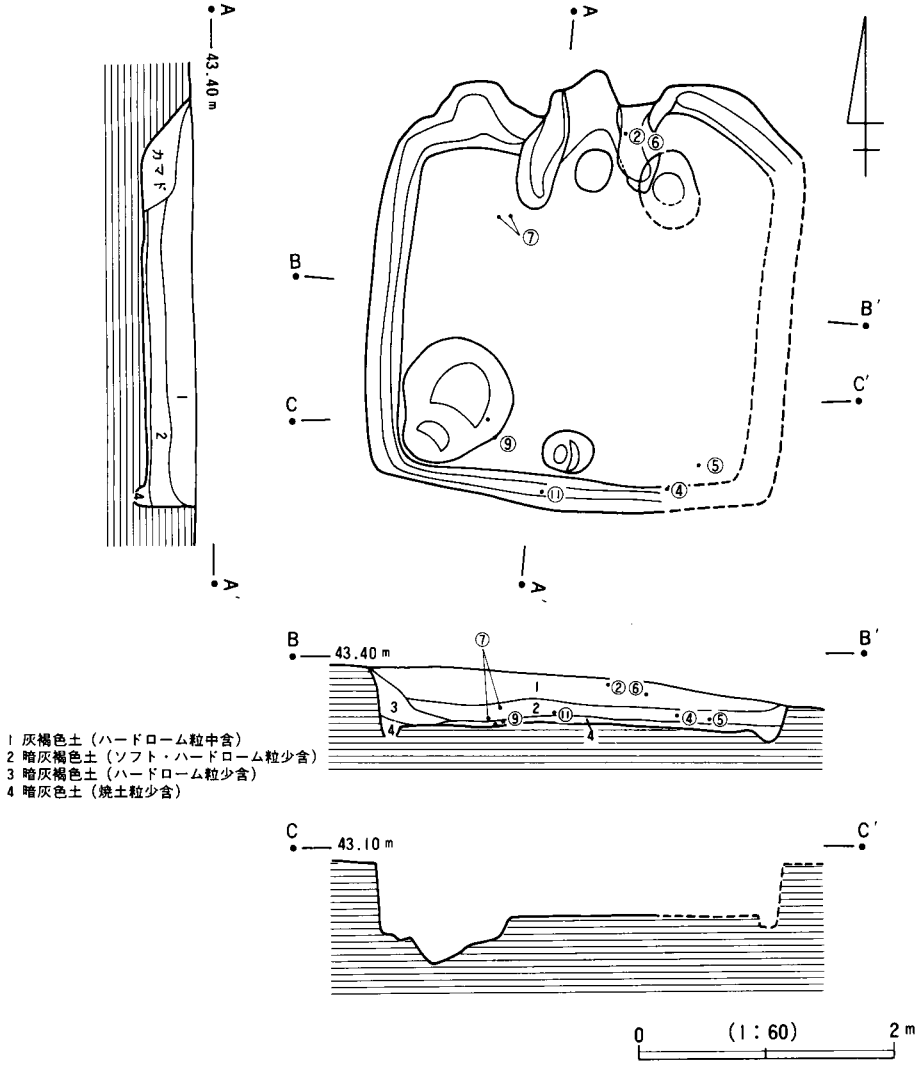
遺構　一辺3.3mの方形プランを呈し，検出面から40cmの深さである。カマドは北壁中央にあり壁面を25cm掘り込む。壁溝はカマド下を除いて全周すると思われる。主柱穴は南西コーナー部に，支柱穴がカマド右脇と南辺中央にある。床面は全体に踏み固められている。

カマド　袖部は砂質土で構築され，両袖内側はよく焼けているが，火床部はほとんど焼けていない。カマド内から甕口縁部が逆位の状態で出土している。

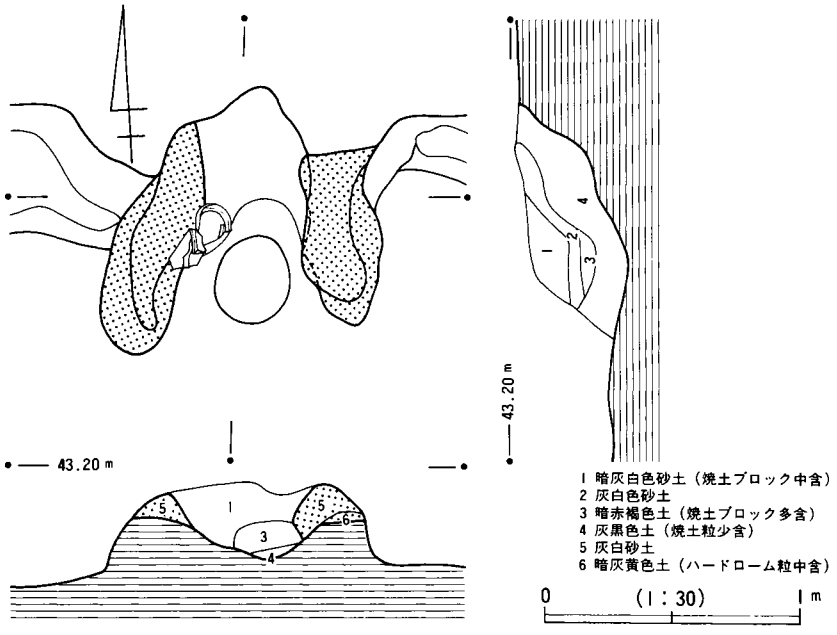
遺物　1～4は土師器坏である。1～3はいわゆるロクロ土師器，4は従来のヘラ整形によるものである。5は口辺～体部を欠く須恵器高台付坏である。6は約1/2個体の土師器高台付皿である。内面はヘラミガキ整形である。7，8は土師器甕である。7は内外面剝落が著しく，また，部分的に焼土の付着がみられる。8は内面剝落が著しい。9は土師質須恵器の甑底部～胴部下位にかけての大型破片である。10・11は土師質須恵器の瓶，あるいは甑の破片である。10

・11も9と同種，同時期のものと思われるが，9は灰色を呈し，10は灰褐色を呈す。

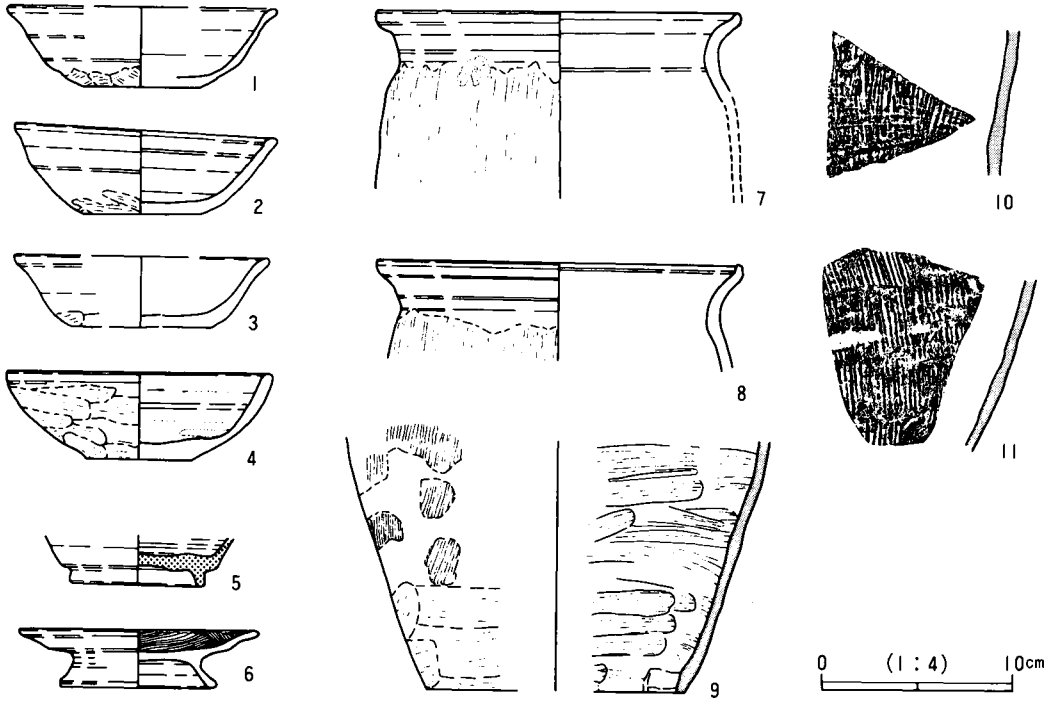
2・3・4・7・11は床面より若干浮いた状態，1・5・8・9はカマド内，6・10は覆土中からの出土である。



第151図　011号址実測図



第152図　011号址カマド実測図



第153図　011号址出土遺物実測図

011号址　　第40表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　坏	4.1	14.0	6.2	約½	砂粒－多	赤褐色	外面　体部ロクロナデ，下位底面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	カマド内
2	土師器　坏	4.3	13.6	6.2	約⅔	微砂粒－多	褐色	外面　体部ロクロナデ，体部下位手持ちヘラケズリ，，底面ヘラケズリ 内面　体部ロクロナデ	床面やや浮き
3	土師器　坏	3.7	(13.4)	(7.4)	約½～¼	並	明赤褐色	外面　体部ロクロナデ，体部下位手持ちヘラケズリ，底面剝落の為不明 内面　剝落	床面やや浮き
4	土師器　坏	4.5	13.8	5.6	完形品	砂粒－多	黄褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヨコヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　体部上位ロクロナデ，下位荒いナデ	床面やや浮き
5	須恵器　坏			6.9	底部～体部完形品	並(不良)	明灰色	外面　体部ロクロナデ，底面回転糸切り 内面　ロクロナデ	カマド内
6	高台付皿	3.0	12.4	8.0	約½	微砂粒	褐色	外面　体部ロクロナデ，底面ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ	覆土
7	土師器　甕		19.1		口縁～胴部約半固体	不良	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　指ナデ	床面やや浮き
8	土師器　甕		19.2		口縁～胴部	微砂粒	明赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴上位ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　剝落の為整形不明	カマド内
9	土師質須恵器甑			(13.6)	胴部下位～底部約½	微砂粒	外面　明淡褐色 内面　明灰赤褐色	外面　胴部上位タタキ，下位ヨコヘラケズリ 内面　指ナデ	カマド内
10	土師質須恵器瓶(甑)				胴部片	白色微砂粒，堅緻	灰色(胎土は赤褐色	外面　タタキ 内面　当て	覆土
11	土師質須恵器甑				胴部片	微砂粒	外面　明灰褐色 内面　明黄褐色	外面　タタキ 内面　指ナデ	床面やや浮き

012号址（第154～156図，図版79・80・101）

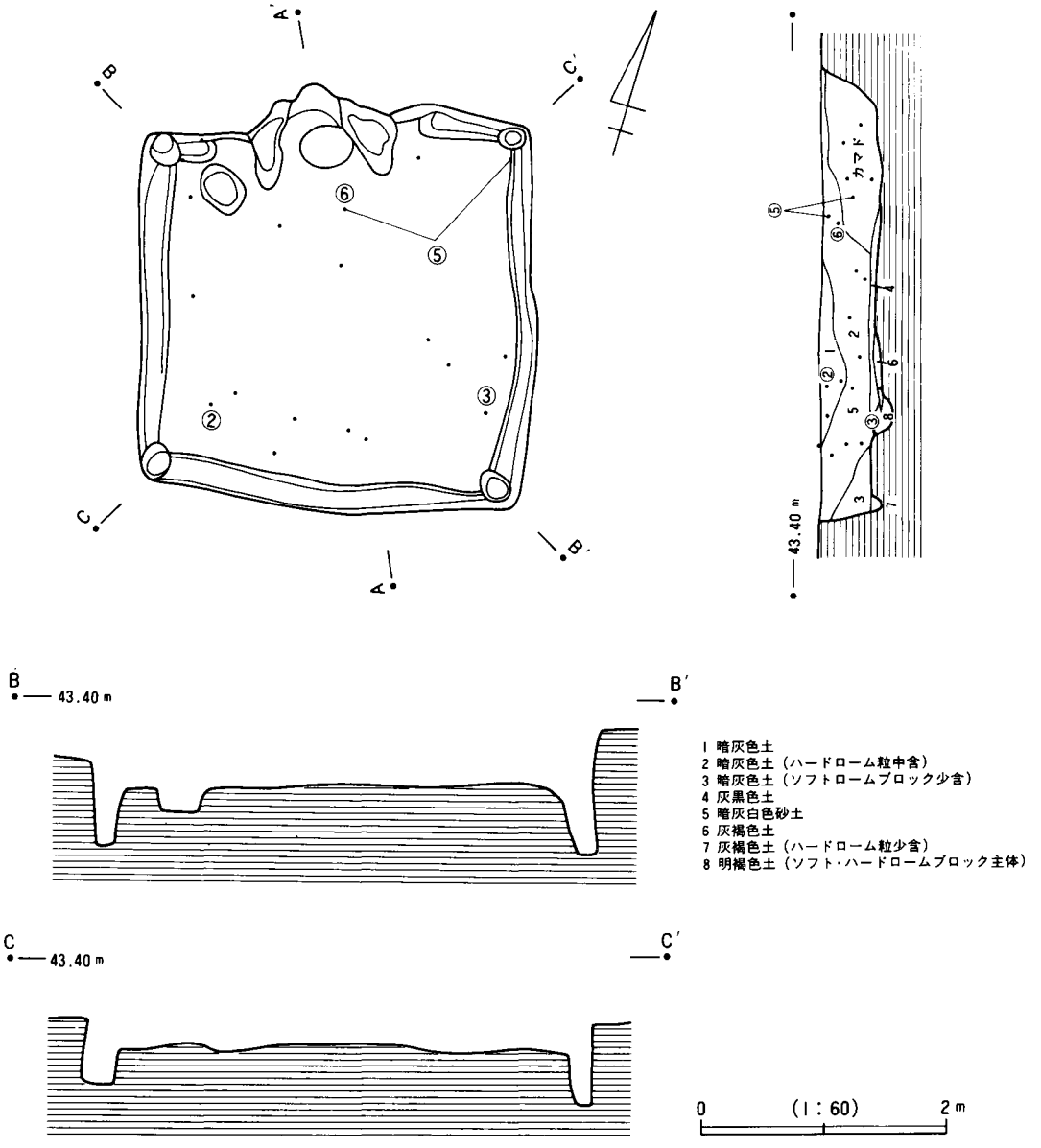
Ｃ５－12グリッドを主に台地平坦面縁辺に位置する住居跡である。006号址覆土に掘り込んでいる。

遺構　一辺3.2m程の正方形プランを呈する。検出面からの深さは50cmを測る。カマドは北壁中央部にあり壁面（006号址覆土）を40cm程掘り込んでいる。壁溝はカマド下を除いて全周する。小形の柱穴が四隅壁際で検出されている。床面は中央部のみ踏み固められている。

カマド　袖部は砂質土で構築され，両袖部内側及び火床部はよく焼けている。

遺物　１～５は土師器坏である。２は大形の坏で，1/2個体に満たないものを復元実測した。３・４はそれぞれ，口辺部，底部を欠くもので，３は外面丹塗である。５は高台付坏の体部を欠くもので，内面はヘラミガキを施した後にいぶされて黒色を呈す。６は土師器壺の底部である。

全て覆土中～上位にかけての出土である。

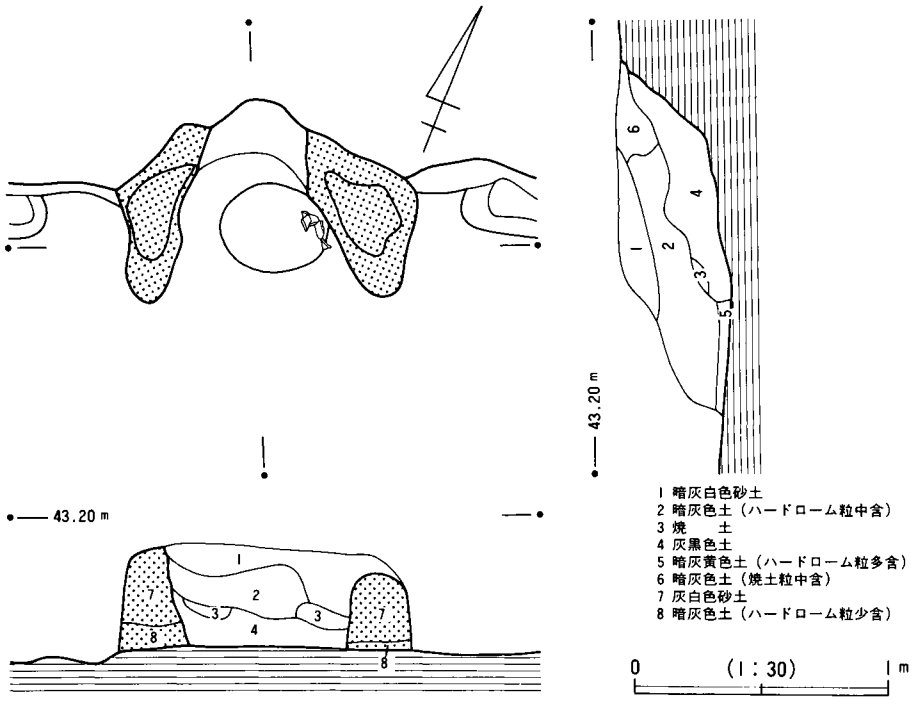


第154図　012号址実測図

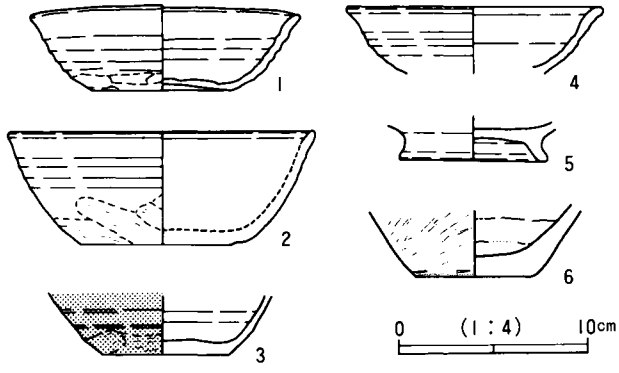
012号址

第41表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	4.4	14.2	6.2	½	微砂粒	黄褐色	外面 ロクロナデ，体部下端手持ちヘラケズリ，底面回転糸切り 内面 ロクロナデ	覆土
2	土師器 坏	5.7	(16.2)	9.0	⅓～¼	微砂粒	褐色(胎土は明赤褐色)	外面 胴部上位ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ，底面回転糸切り後手持ちヘラケズリ 内面 剝落	覆土
3	土師器 坏			6.7	体部～底部完形	砂粒	黄褐色	外面 ロクロナデ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	覆土
4	土師器 坏	(3.6)	13.5		微砂粒		明黄褐色	外面 上位ロクロナデ，下位ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	覆土
5	土師器 坏			7.8	底部	微砂粒	外面 明黄褐色 内面 黒色	外面 ロクロナデ，底面ヘラナデ 内面 ヘラミガキ後，いぶし処理	覆土
6	土師器 壺			6.2	底部	微砂粒	赤褐色	外面 胴部下位ナナメヘラケズリ，底部多方向ヘラケズリ 内面 粘土紐痕明瞭	赤褐色



第155図　012号址カマド実測図



第156図　012号址出土遺物実測図

013号址（第157・158図，図版82・101）

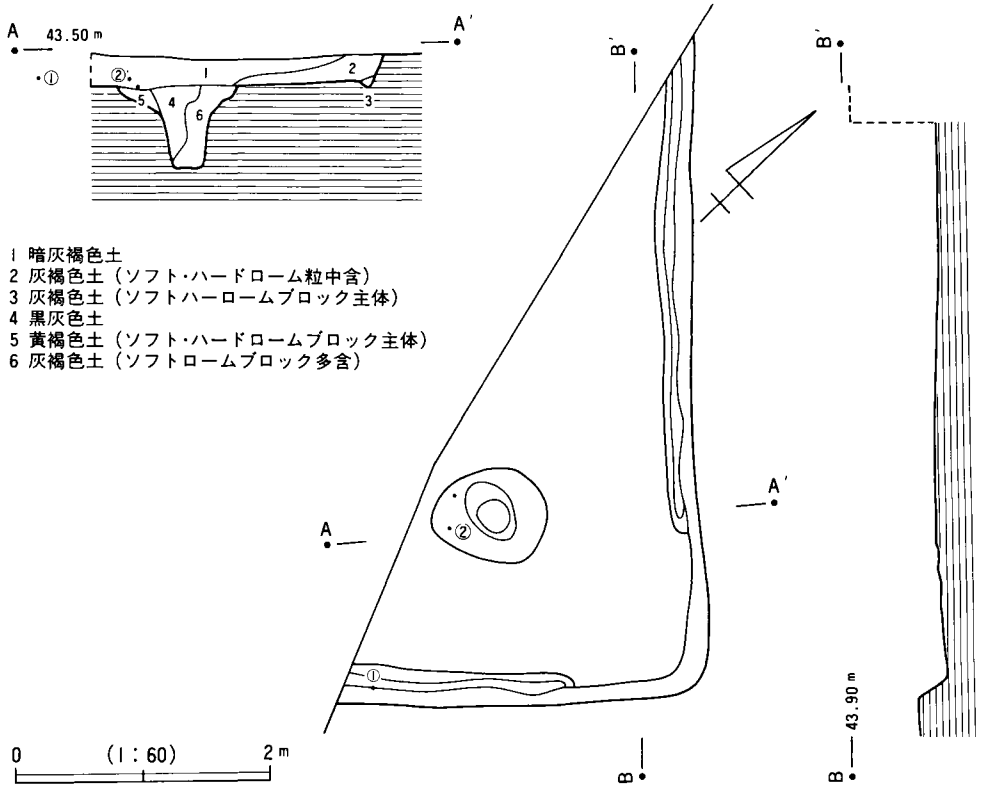
C 6 －40グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。大部分調査区外にかかり，僅に東側コーナー部を検出したのみである。

遺構　規模は不明であるが方形プランになると思われる。検出面からの深さ20cmを測る。壁溝はコーナー部で跡切れている。柱穴は1カ所検出されている。床面は検出した範囲では踏み固

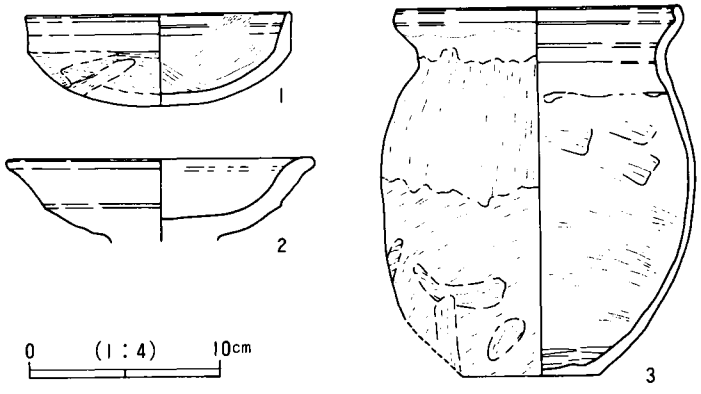
められている。

遺物　1は土師器坏約1/3個体を復元実測したものである。2は土師器高坏で脚部を欠く。内面はヘラミガキの後いぶしをかけ，外面丹塗りである。3はほぼ完形品の土師器甕である。

1・2は床面より若干浮いた状態で，3は覆土中よりの出土である。



第157図　013号址実測図



第158図　013号址出土遺物実測図

013号址　　第42表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	19.3	14.8	7.1	約½	微砂粒	明黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ，底部ヘラナデ 内面 口辺部ヨコナデ，体部指ナデ	
2	高坏		15.8		坏部のみ完形	砂粒	外面 赤褐色 内面 黒色	外面 上位指ナデ，下位ヘラナデ 内面 ヘラミガキ後，いぶし処理	
3	土師器 甕	19.3	14.8	7.1	ほぼ完形品	微砂粒－多	黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ，底面ヘラケズリ 内面 胴部ナデ，一部ヘラナデ	

014号址（第159～161図，図版83・84・102）

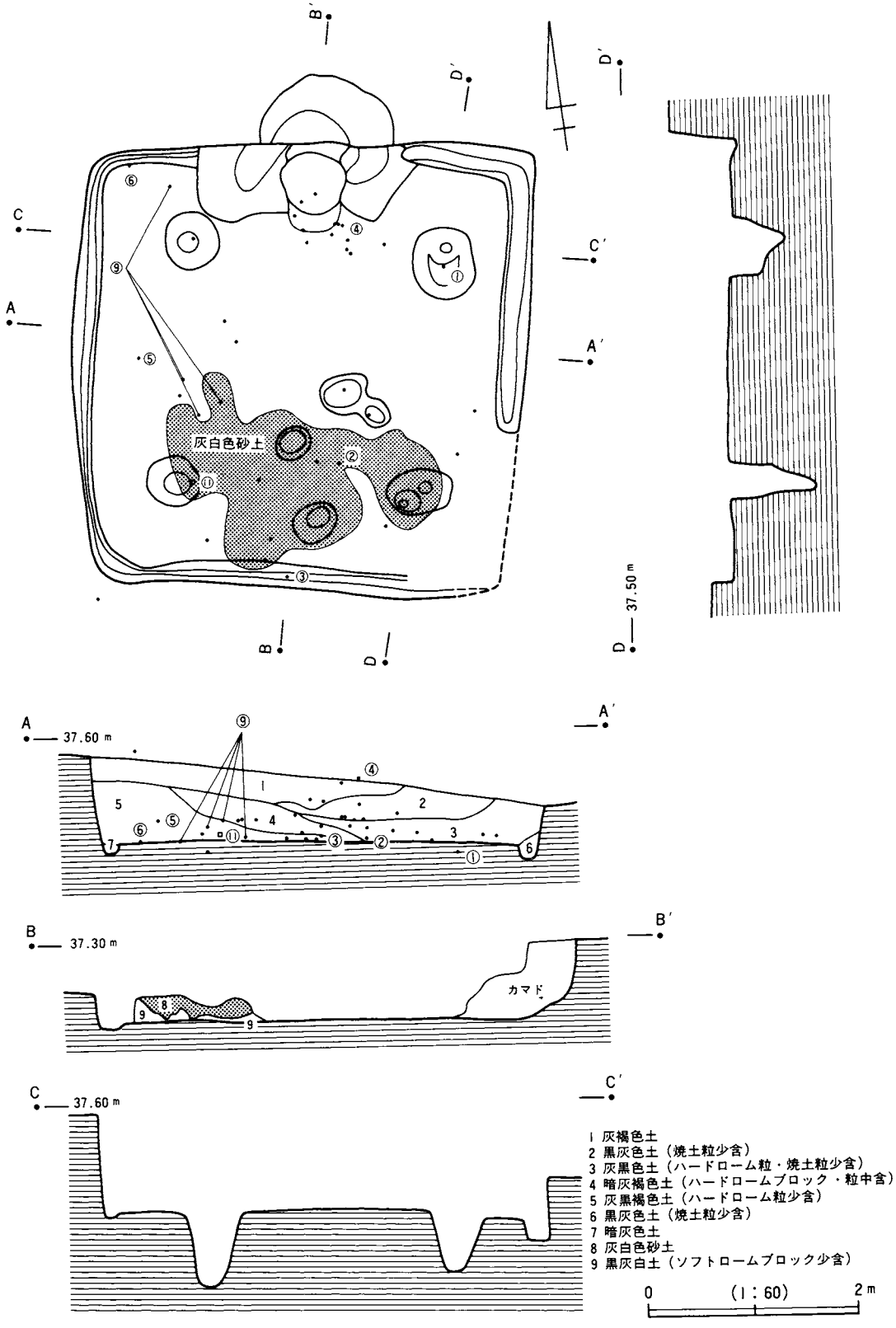
D７－02グリッドを主に第２テラスに位置する住居跡である。

遺構　4.35×4.25mのほぼ正方形プランを呈し，検出面から最大92cmを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を65cm掘り込む。壁溝は南東コーナー部が不明であるが，カマド下を除いて本来は全周していたものと思われる。柱穴は四隅と南辺中央に支柱穴が検出された。床面は西側半分はハードローム層に，東側半分は黒茶褐色土上にハードロームブロックの貼床である。全体に踏み固められている。南辺寄りに灰白色砂土が多量に認められたが，一部が床面に密着しているが，大部分は床面とに間層が入っていた。出土遺物は多く中央部に向かって擂鉢状に出土している。

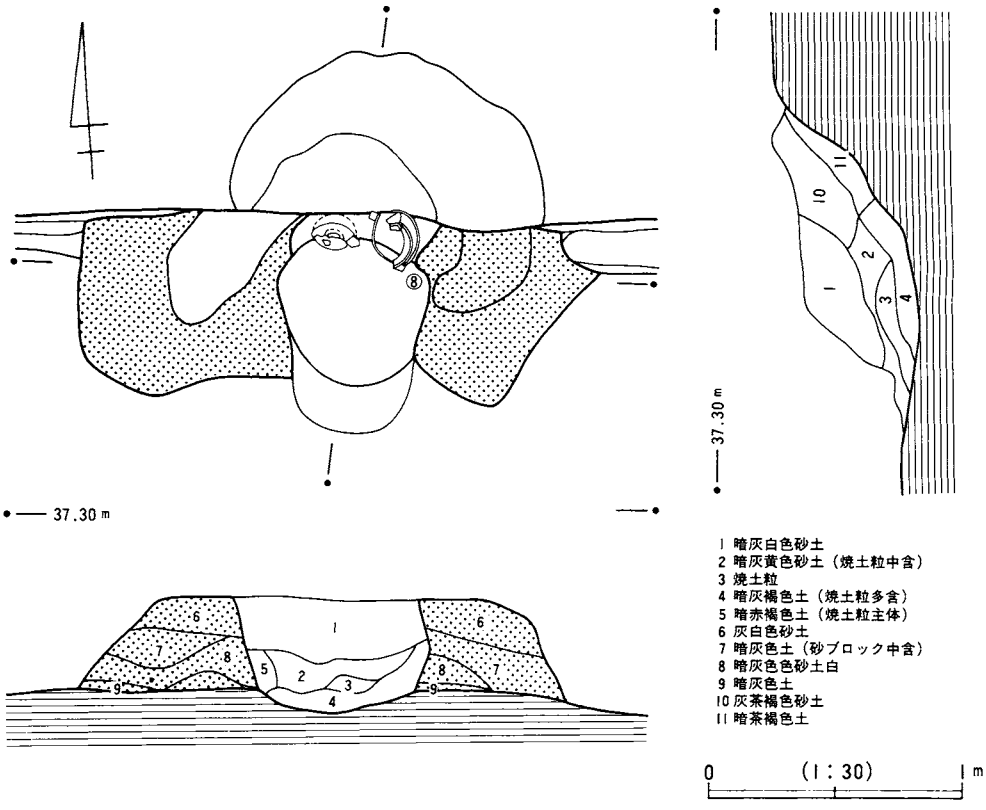
カマド　袖部は壁面中位から砂質土で構築されている。袖部内側はよく焼けているが特に右袖部は著しい。しかし火床部はほとんど焼けていない。

遺物　１～４は土師器坏であるが，内２ヶは墨書土器である。字は２が「中」，３が「矢中」と読みとれる。なお，２は内外面磨耗が激しい。５の坏は，ヘラケズリ（外面），指ナデ（内面）による整形である。燈明皿として使用したものか。内面，及び，口縁外面（４ヶ所）に油煙の付着が認められる。５，６は須恵器壺（瓶）である。１は底部約1/2個体，６は胴部の大形破片を復元実測したものである。６は外面に灰釉（自然釉）が垂下しており，表面は黒く発色している。胎土は灰白色を呈す。７は土師質須恵器の瓶胴部片である。８・９は甕である。それぞれ，約3/4個体を復元実測した。共に口辺部はロクロナデ整形による。８は内面に煤状の炭化物の付着が認められる。１・６は床面，２は床面やや浮き，８はカマド内，３・４・５・７・９は覆土中よりの出土である。10は刀子である。茎末端と刃部先端を欠く，重量17g である。11は軽石である。一面に擦痕がみられ，砥石状の用途を果たしたと思われる。重量78g。

10・11共に床面よりやや浮きの状態で出土した。



第159図　014号址実測図

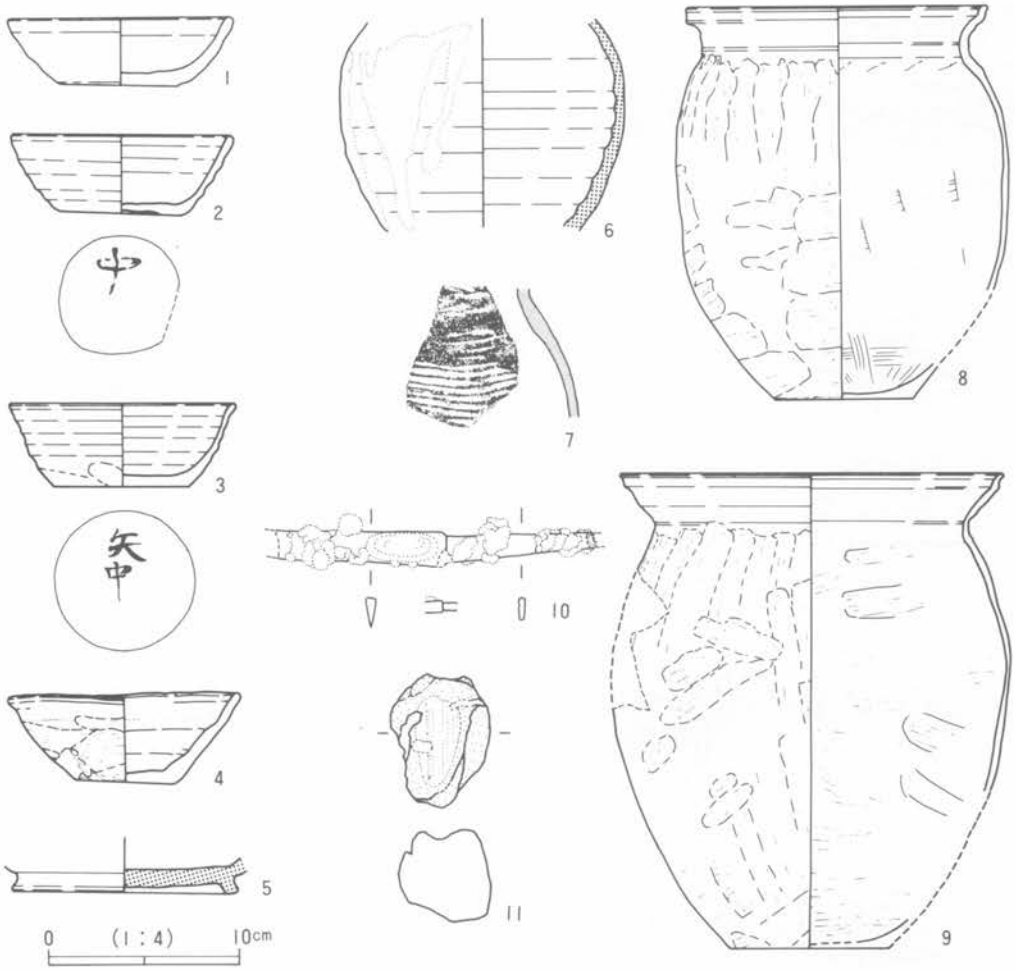


第160図　014号址カマド実測図

014号址

第43表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	3.7	11.7	6.0	完形	径1～3㎜のシルト質粘土含む	明桃褐色	外面 ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	床面
2	土師器 坏	4.2	11.6	6.5	約½～⅔	微砂粒，石英粒	明赤褐色	外面 ロクロナデ，底面回転糸切り後周辺部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	明赤褐色
3	土師器 坏	4.3	11.8	7.6	完形	砂粒－微	明赤褐色	外面 口縁～体部ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ，底面回転糸切り後周辺部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	覆土
4	土師器 坏	4.7	12.1	5.3	完形	砂粒－多	黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヨコ手持ちヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面 指ナデ	覆土
5	須恵器 壺			11.6	約½～⅓		青灰色	外面 ロクロナデ，底面ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	覆土
6	須恵器 壺				胴部約⅓		暗灰色		床面
7	須恵器 瓶				胴部片	白色粒子，砂粒，雲母状物質	灰色	外面 タタキ 内面 指ナデ	覆土
8	土師器 甕	20.6	15.6	7.1	約⅔	砂粒－多	明赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，輪積み痕，胴部上位タテヘラケズリ，下位ヨコヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部ロクロナデ，胴部丁寧な指ナデ(一部ヘラナデ)	カマド内
9	土師器 甕	24.5	20.0	8.3	約⅔	砂粒－多	外面 上位赤褐色 下位黒褐色 内面 明赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ，胴部下位タテヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部丁寧な指ナデ	覆土下位～中位



第161図　014号址出土遺物実測図

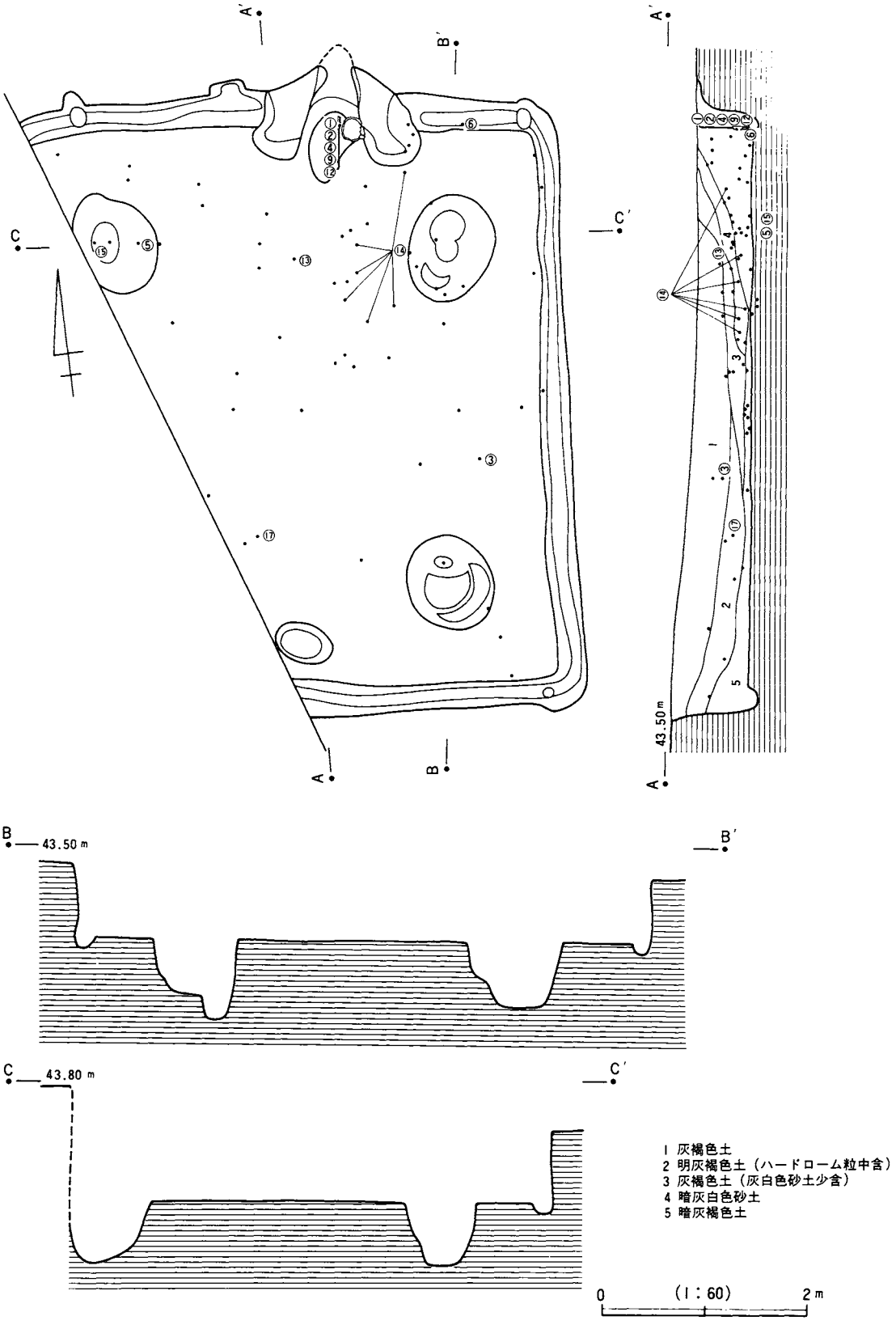
015号址（第162～164図，図版83・84・103）

B 5 －33･34グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。南西側1/4程が調査区外に拡がり完掘していない。

遺構　5.8×（5.4）mの方形プランを呈すると思われる。検出面から最大75cmの深さを測る。カマドは北壁中央部にあり壁面を40cm程掘り込む。壁溝はカマド下を除き全周していたと思われる。未検出の南西隅を除いて主柱穴が，南辺中央に支柱穴が検出された。またコーナー壁面には壁溝に達する小ピットも検出されている。床面は全体に踏み固められている。

カマド　袖部は砂質土で構築され，袖内側及び火床部は良く焼けている。

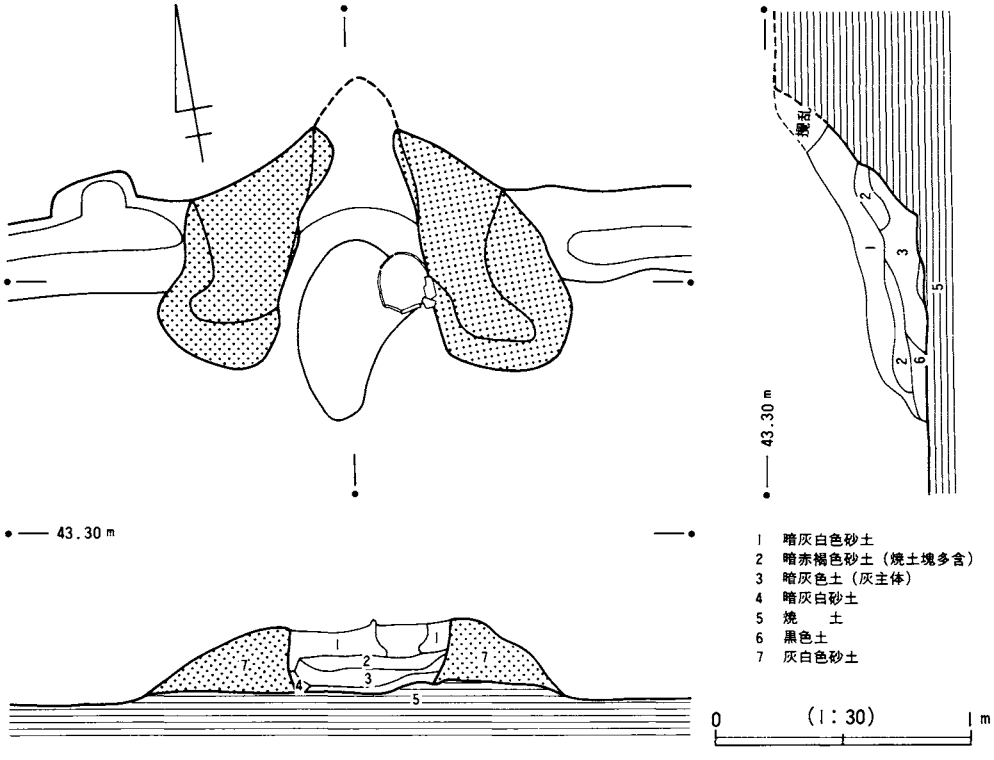
遺物　1～3は須恵器坏であるが，2は半還元ともいうべきものである。1の外面には火ダス



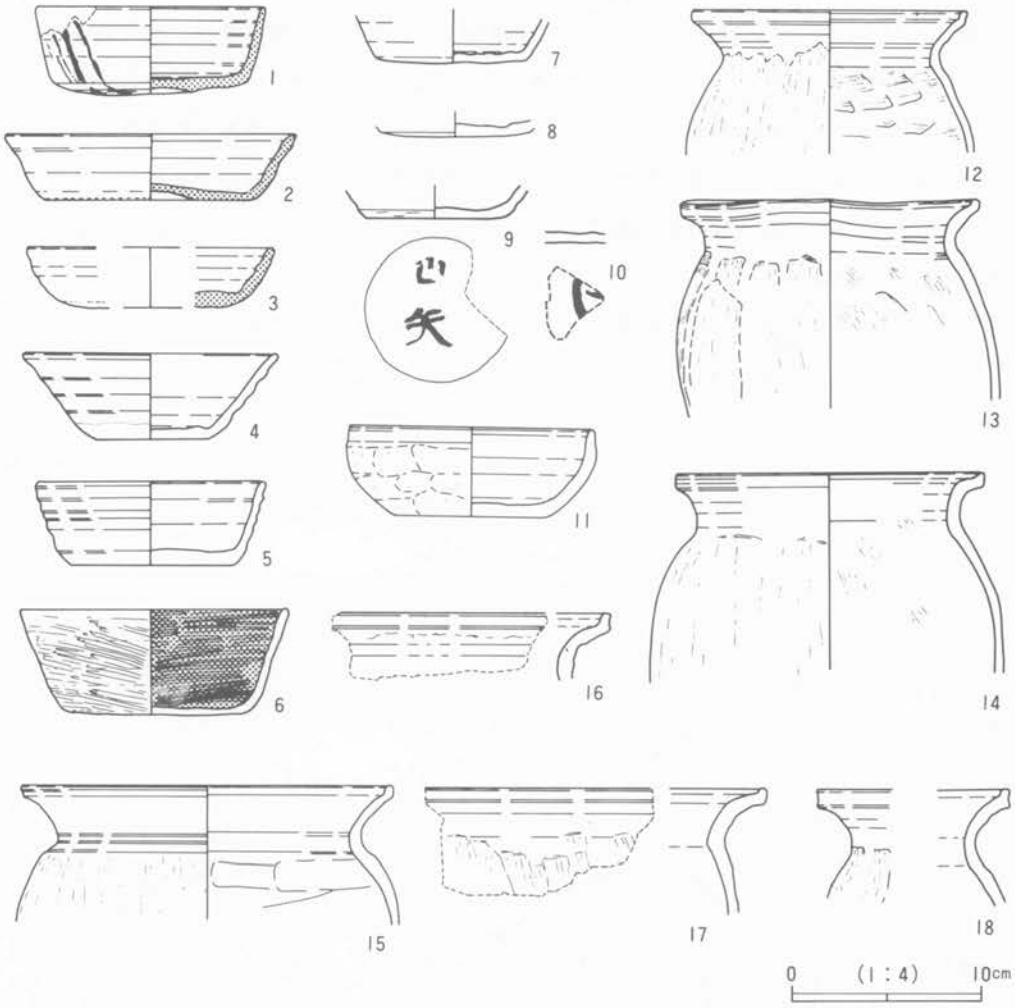
第162図　015号址実測図

キが認められる。4～11は土師器坏である。4は胎土に石英粒を多量に含む。内面磨耗が著しい。5は約2/3個体を復元実測した。6は特徴のある土器で，内外面をヘラミガキした後，内面をいぶしている。9・10は墨書土器である。9はうすいが「山矢」と読みとれるのに対し，10は困難である。11は器形，外面の整形共に従来の鬼高期坏技法によるものであるが，内面はロクロナデとしてよい。12～18は土師器甕であるが，完形品ではない。12～15は器形が窺える例，残りは口縁部片である。

カマド内より多くの遺物の出土をみた。1・2・4・9・10・12がそれであるが，この内，1・2・4・9については016号址覆土中の遺物と接合した。6は床面より若干浮いた状態で，残りは全て覆土中からの出土である。



第163図　015号址実測図



第164図　015号址出土遺物実測図

015号址

第44表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器 坏	4.6	12.0	8.6	約$\frac{3}{4}$	並	明灰褐色	外面 体部ロクロナデ，底面回転糸切り後，周辺部回転ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	カマド内
2	須恵器 坏	3.5	(15.2)	10.6	約$\frac{1}{2}$～$\frac{3}{4}$	微砂粒	灰赤色～灰褐色	外面 ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	カマド内
3	須恵器 坏	3.1	(13.0)	(8.0)	$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{2}$	微砂粒	外面 灰褐色 内面 赤褐色	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	覆土
4	土師器 坏	4.5	13.3	6.0	完形	石英粒－多	暗褐色	外面 体部上位ロクロナデ，下位ヘラナデに近いヘラケズリ，底面一方向ヘラケズリ 内面 体部ロクロナデ	カマド内
5	土師器 坏	4.3	11.9	8.7	約$\frac{3}{4}$	砂粒	赤褐色	外面 体部ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ 内面 体部ロクロナデ	
6	土師器 坏	5.4	14.1	9.6	ほぼ$\frac{3}{4}$	微砂粒	外面 褐色 内面 黒色	外面 ロクロナデ後ヘラミガキ，底面回転糸切り後ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ後，いぶし処理	床面やや浮き

7	土師器　坏			8.0	約½	良	褐色	外面　体部ロクロナデ，底面手持ちヘラミガキ 内面　体部ロクロナデ	覆土
8	土師器　坏			8.1	底部	砂粒	赤褐色	外面　体部下位ロクロナデ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	覆土
9	土師器　坏			7.5	約¾	砂粒	明黄褐色	外面　体部下位回転ヘラケズリ，底部回転糸切り後周辺部手持ちヘラケズリ 内面　丁寧なナデ	カマド内
10	坏				底部	微砂粒	黄褐色	外面　多方向手持ちヘラケズリ	カマド内
11	土師器　坏	4.5	13.0	8.0	約½	微砂粒	明黄褐色	外面　口辺部ロクロナデ，体部ヨコヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	覆土
12	土師器　甕		14.3		胴部上位	微砂粒	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデ	カマド内
13	土師器　甕		15.7		口縁～胴部上位	砂粒－多	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　胴部丁寧なナデ	覆土
14	土師器　甕		16.3		口縁～胴部上位	微砂粒	明黄褐色	外面　口辺部～頸部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　丁寧なナデ	覆土
15	土師器　甕		19.2		口縁～胴部	微砂粒	赤褐色	外面　口辺～頸部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラ削り 内面　口辺，頸部ロクロナデ，胴部上位指ナデ	覆土
16	土師器　甕				口辺部のみ	微砂粒	明黄褐色	外面　ロクロナデ 内面　ロクロナデ	覆土
17	土師器　甕				口縁部片	微砂粒	黄褐色	外面　ロクロナデ 内面　剝落	覆土

016号址（第165・166図，図版85・103）

Ｄ５－40グリッドを主に第１テラス北に位置する住居跡である。021号址（住居跡）と重複するが，本号址の方が新しい。

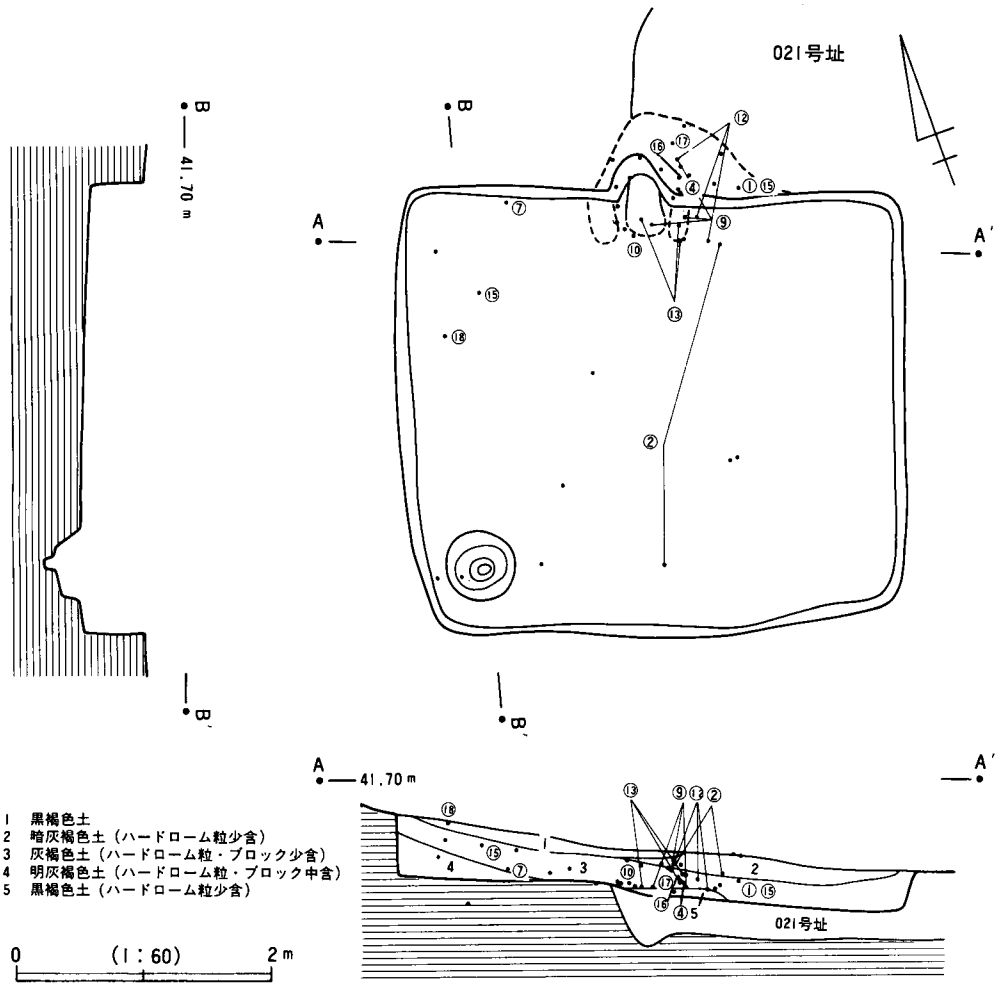
遺構　4.1×3.5mの方形プランを呈し，検出面より深さ35cmを測る。カマドは北壁中央部にあり壁面を65cm掘り込む。壁溝は検出されなかった。柱穴は南西隅に１カ所のみ検出されたが，深さ20cmで浅い。床面は021号址と重複する部分はハードロームブロックを主体とした貼床である。部分的に踏み固められているものの，全体には軟らかい。

カマド　021号址覆土中に構築さていたため残りは非常に悪く，砂質土が固まっていた感じである。火床部は焼けた痕跡はなかった。

遺物　１は土師質須恵器坏である。約1/3個体を復元実測した。２は須恵器坏である。底部～体部約1/4個体を復元実測した。３～12は土師器坏であるが，９～10は高台付坏，11は高坏である。３は約1/3個体を復元実測した。４は約1/3個体を復元実測したものであるが，径については若干の減があってもよかろう。５は外面がヘラケズリ，口縁部はロクロナデ，内面がロクロナデによるもので，いわば従来の技法による坏との折衷型である。021号址の遺物と接合し，約1/2個体を復元実測した。６は従来の技法による坏で，約1/2～1/3個体を復元実測した。７・８は坏底部であるが，８あるいは５に類似するものか。９は約2/3個体を復元実測した。椀と呼んでもよい形態である。内面ヘラミガキを施すが，いぶしによる黒斑は認められない。11は鬼高

期の坏で高坏断片である。12～18は土師器甕または壺であるが，14以降は破片である。13は胴部までの約1/2個体を復元実測した。内面はかなり剝落が認められる。14・15は土師質須恵器である。

床面より若干浮いた状態で，1・2・4・7・9・10・12・13・14・15・16・17が出土した他は全て覆土中からの出土である。

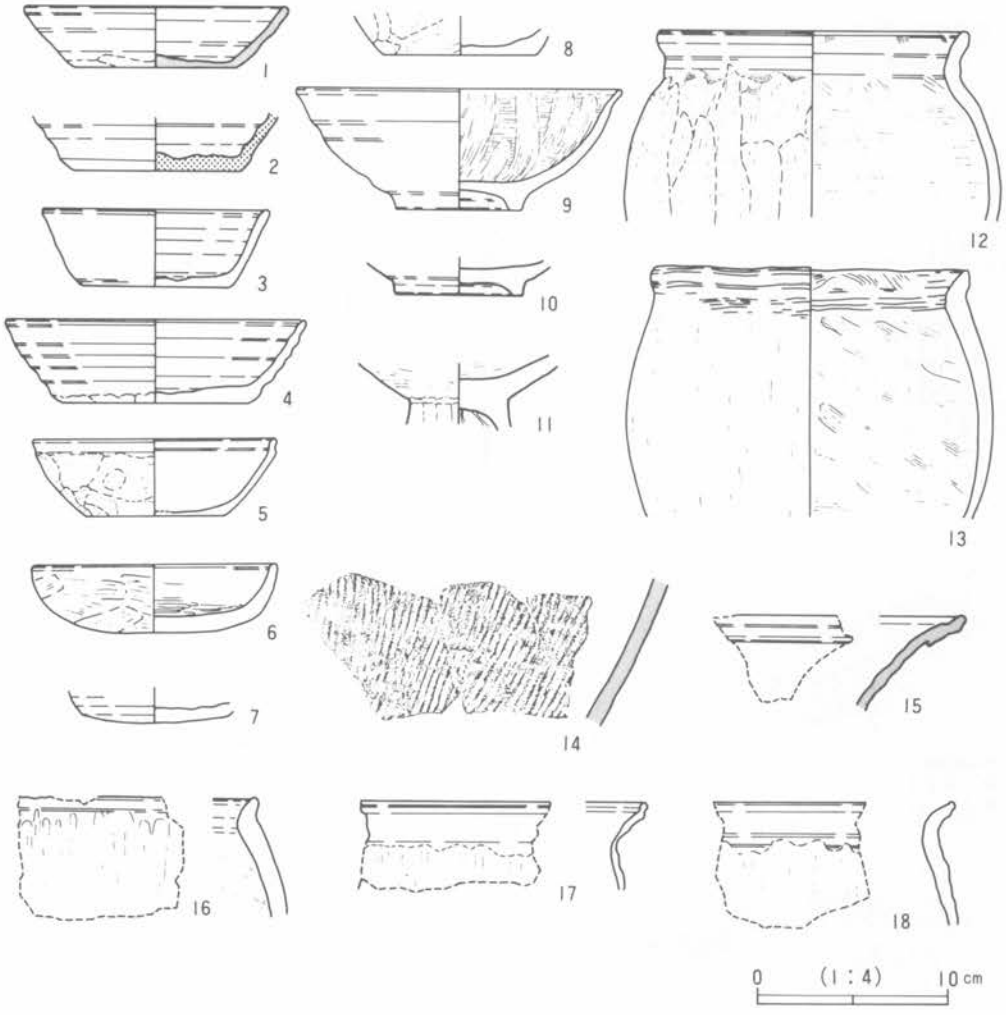


第165図　016号址実測図

016号址　　第45表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師質須恵器 坏	3.2	13.6	8.5	約$\frac{1}{4}$	微砂粒	灰黒褐色	外面　体部ロクロナデ，体部下位手持ちヘラケズリ，底面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面やや浮き
2	須恵器　坏			8.9	底部～体部$\frac{1}{4}$	並	外面　背灰褐色 内面　明灰色	外面　体部ロクロナデ，底面回転ヘラケズリ	床面やや浮き
3	土師器　坏	4.0	11.9	7.6	約$\frac{1}{4}$	砂粒－多	黒褐色	外面　体部ロクロナデ，底面回転糸切り後周辺部手持ちヘラケズリ 内面　体部ロクロナデ	覆土

4	土師器　坏	4.4	15.6	9.7	約$\frac{1}{3}$	微砂粒	黒褐色	外面　体部ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ，体部下位手持ちヘラケズリ 内面　体部ロクロナデ	床面やや浮き
5	土師器　坏	4.0	12.7	7.4	約$\frac{1}{3}$	微砂粒	黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヨコヘラケズリ，底面手持ちヘラケズリ 内面　体部ナデ	覆土
6	土師器　坏	3.5	12.7	6.2	約$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$	微砂粒	明黄褐色	外面　口辺部ヨコナデ，下位ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ(剥落がみられる)	覆土
7	土師器　坏			7.8	底部のみ	砂粒	黄褐色	外面　体部ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面やや浮き
8	土師器　坏			8.1	底部	砂粒	赤褐色	外面　体部下位ロクロナデ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	覆土
9	高台付坏(椀)	6.3	17.1	6.5	約$\frac{2}{3}$	不良	赤褐色	外面　体部ロクロナデ 内面　ヘラミガキ	床面やや浮き
10	高台付坏			6.7	底部	微砂粒－多	明赤褐色	外面　ロクロナデ 内面　ロクロナデ	床面やや浮き
11	土師器　高坏				坏～脚部		黄褐色	外面　坏部ヘラナデ，脚部ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	覆土

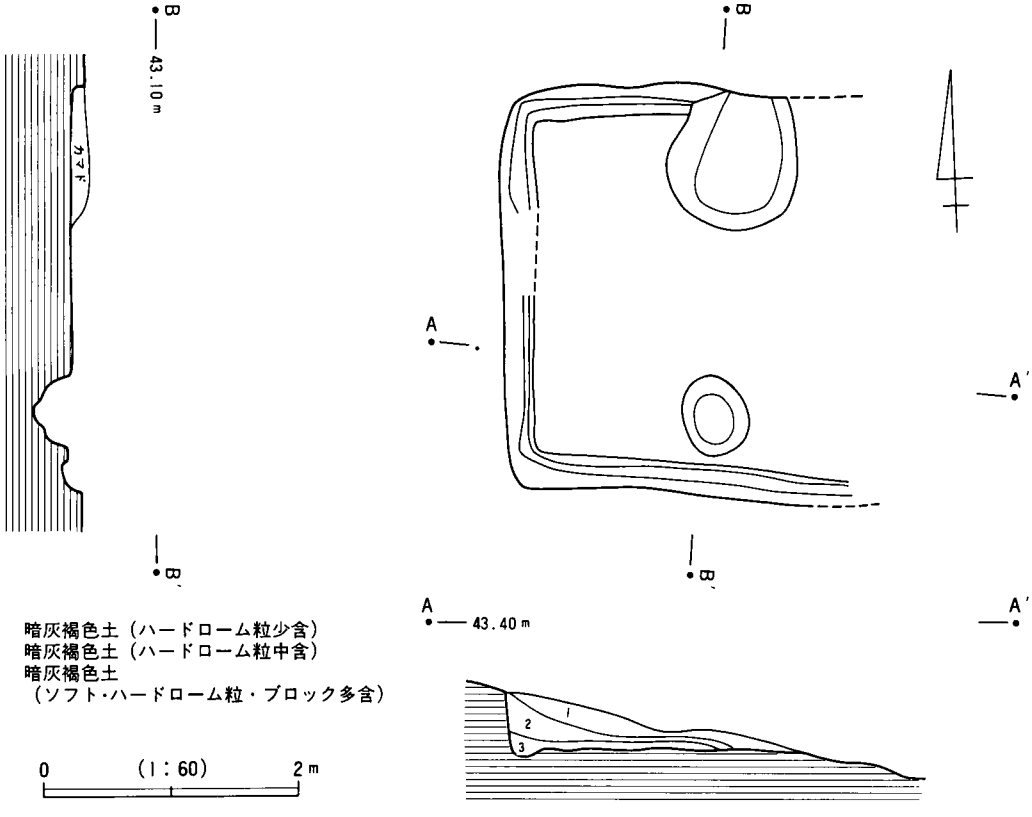


第166図　016号址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
12	土師器 甕		16.2		口縁～胴部	微砂粒－多	明赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部タテヘラケズリに近いヘラナデ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部ナデ	床面やや浮き 床面やや浮き
13	土師器 甕		16.4		口縁～胴部約½	砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ナデ，胴部ヘラ削りに近いヘラナデ 内面 ナデ	
14	土師質須恵器 甑				胴部片		外面 黒褐色 内面 暗褐色	外面 タタキ目 内面 指ナデ	床面やや浮き
15	土師質須恵器 広口壺				口辺部	砂粒	灰黄褐色	内外面 ロクロナデ	床面やや浮き
16	土師器 無頭壺				口縁～胴部片	砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部タテヘラナデ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部指ナデ(ヘラナデ)	床面やや浮き
17	土師器 甕				口縁～胴部約½	微砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位タテヘラケズリ 内面 ロクロナデ	床面やや浮き
18	土師器 甕				口縁～胴部片	砂粒	外面 黒褐色 内面 赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部タテヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデ	覆土

017号址（第167図，図版81）

C 6 －42グリッドを主に台地縁辺部に位置する住居跡である。010号址と重複し，本号址の方が新しい。



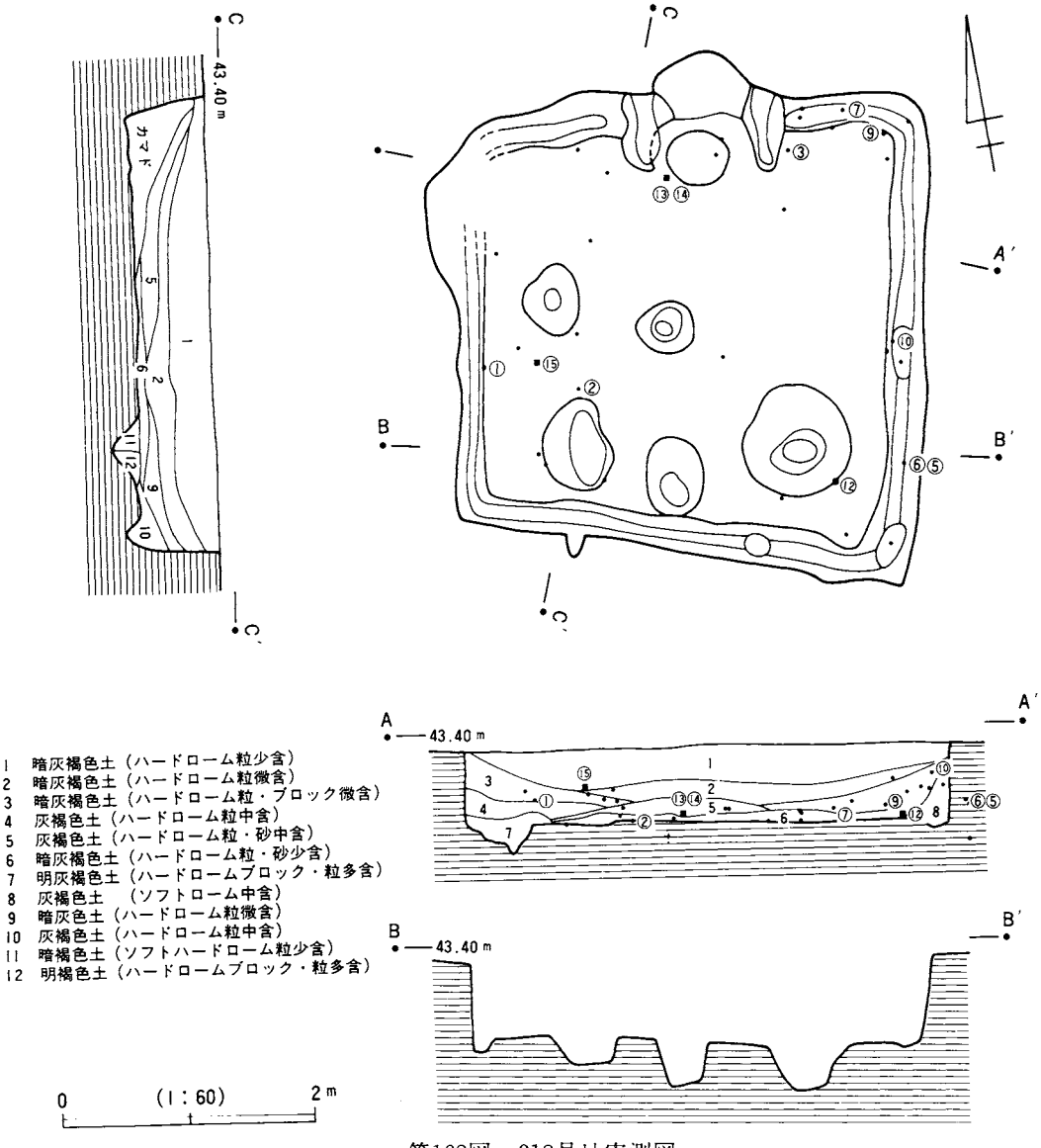
第167図 017号址実測図

遺構　東壁が斜面にかかったため不明瞭であるが，一辺3.1m程の方形プランを呈すると思われる。検出面からの深さ最大45cmを測る。北壁中央に砂質土を主体とする層がみられカマドと思われるが，明確な袖部，火床部は認められなかった。壁溝は北・西・南辺で検出されている。柱穴は南辺中央に深さ30cmのものが1カ所検出されている。床面は全体に踏み固められている。

遺物　図示できる遺物は出土しなかった。

018号址（第168～170図，図版85・86・103）

C 5 －31•41グリッドを主に台地平坦部に位置する住居跡である。019号址と重複し，本号址の方が新しい。

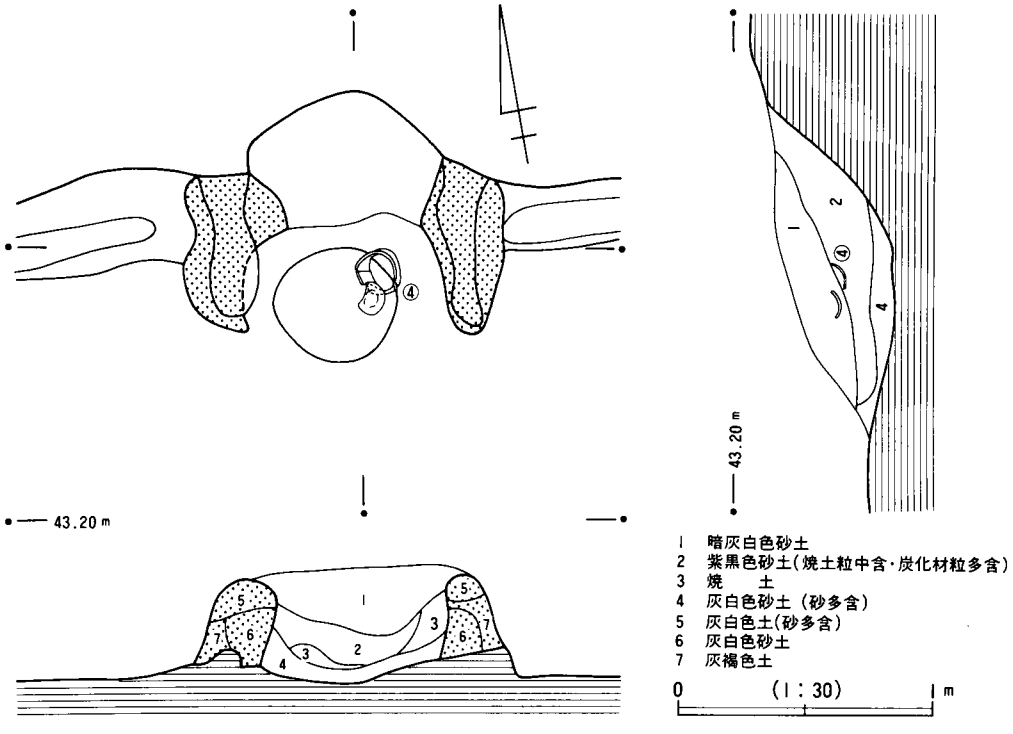


第168図　018号址実測図

遺構　3.7×3.8mのやや不整形の方形プランを呈する。検出面からの深さ60cmを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を30cm掘り込む。壁溝はカマド下を除き全周する。柱穴は南辺に3カ所，中央に1カ所検出された。また南壁に壁溝に達する小ピットが掘り込まれている。床面は全体に踏み固められている。

カマド　袖部は砂質土で構築されている。袖内側及び火床部はほどんど焼けていない。

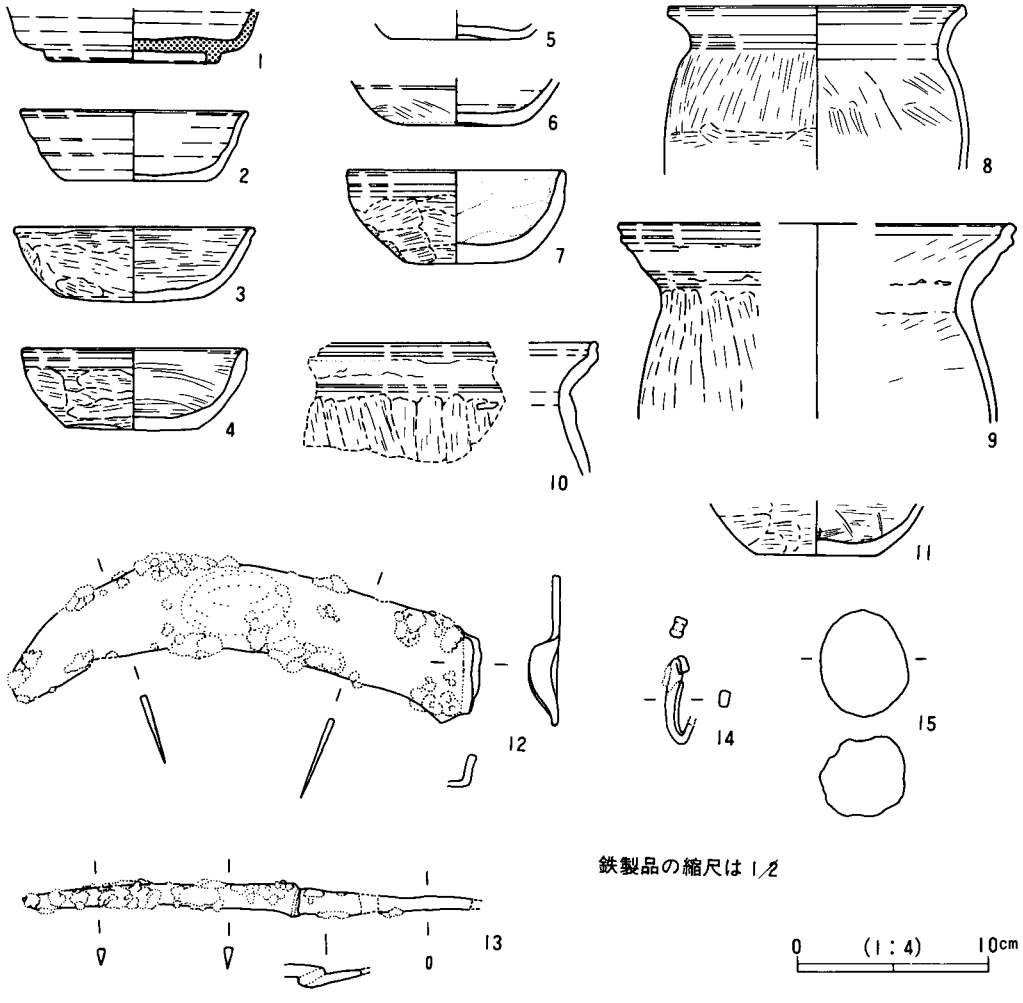
遺物　1は須恵器坏である。約2/3個体を復元実測した。火ダスキが底面，及び，体部外面に2～3条明瞭である。2～6は土師器坏であるが，3・4は従来の技法による坏である。2・4はほぼ完形品，3は約1/3個体を復元実測した。5・6は底部のみである。7は土師器椀である。015号跡の遺物と接合した。8～11は土師器甕であるが，9・10は大破片，11は底部である。9の外面には焼土の付着がみられる。12～14は鉄製品である。12は鉄鎌である。長さ24.8cm，幅4.2cm，厚さ2.4cmを計る。重量は84.1gである。基部に折り返しを有する。13は刀子である。身の長さ14.2cm，同幅1.2cm，厚さ0.4cm，茎の長さ（9.0）cm以上，同厚さ0.4～0.2cmを計る。関部が折れ曲がっており，茎部の末端を欠損する。身部の中央に砥ぎ減りが認められる。重量14.0g。14は鉄釘である。長さ（5.2）cm以上，幅0.4cm×0.8cmを計る。幹部の断面は長方形を呈し，先端部を欠損する。15は円礫であるが，一部に使用痕が認められたので図化した。



第169図　018号址カマド実測図

石質は安山岩である。

2・12が床面，1・5・6が床面より若干浮いた状態で，3・4・7がカマド内，13・14がカマド上，残りは覆土中より出土した。



第170図　018号址出土遺物実測図

018号址　　第46表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器 高台付坏			8.8	底部½		外－灰褐色 内－赤褐色	外面 ロクロナデ，底面回転ヘラナデ	床面やや浮き
2	土師器 坏	3.8	11.8	7.5	ほぼ完形品	砂粒，不良	明赤褐色	外面 底面回転糸切り	床面
3	土師器 坏	3.9	(12.4)	7.8	約½	不良	赤褐色	外面 口辺部ナデ，体部～底面ヘラケズリ 内面 ナデ	カマド内
4	土師器 坏	4.2	11.8	7.0	ほぼ完形品	微砂粒	明赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部～底面手持ちヘラケズリ 内面 口辺ロクロナデ，体部ナデ	カマド内
5	土師器 坏			7.1	底部完形	微砂粒	黄褐色	内面 ロクロナデ，底面手持ちヘラケズリ	床面やや浮き
6	土師器 坏			7.0	底部約¾	砂粒	黄褐色	外面 回転糸切り(R)後周辺部手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ，内面多く剝落	床面やや浮き
7	土師器 坏	4.8	11.4	6.4	ほぼ完形品	砂粒	明黄褐色	外面 口辺部ナデ，体部ヘラケズリ，底面ヘラケズリ 内面 体部ナデ，一部ヘラミガキ	覆土
8	土師器 甕		15.5		胴部上半	微砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ，中位ヨコヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，脚部指ナデ	覆土
9	土師器 甕			6.0	底部	砂粒	黒褐色	外面 体部ヘラナデに近いヘラケズリ 底面ヘラナデに近いヘラケズリ 内面 ヘラナデ	床面やや浮き
10	土師器 甕				口縁～同上位	微砂粒	黄褐色	外面 ロクロナデ 内面 回転ヘラナデ	覆土
11	土師器 甕			6.4	底部完形	微砂粒	外－黒褐色 内－明黄褐色	外面 体部ヨコヘラケズリ 底面手持ちヘラケズリ(ヘラナデ) 内面 ヘラナデ	覆土

019号址（第171～173(a)図，図版85・86・103）

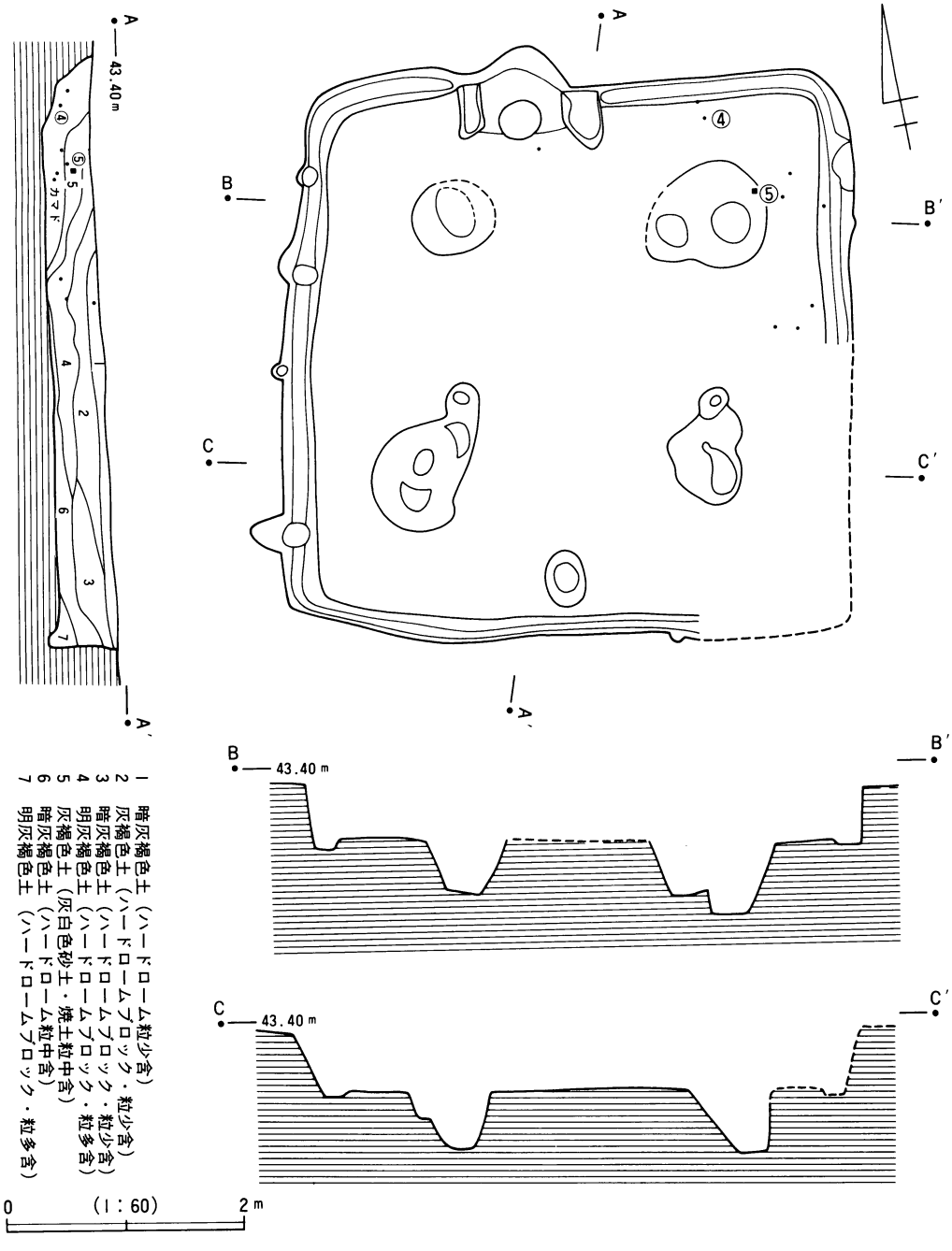
C５－30グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。018号址と重複するが，本号址の方が古い。

遺構　4.8×4.6mの方形プランを呈し，検出面からの深さ46cmを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を28cm掘り込む。柱穴は四隅に各１ケ所ずつと南辺中央に１カ所検出された。また北壁を除く壁面に壁溝に達する小ピットが掘り込まれている。壁溝はカマド下を除いて全周すると思われる。床面は全体に踏み固められている。

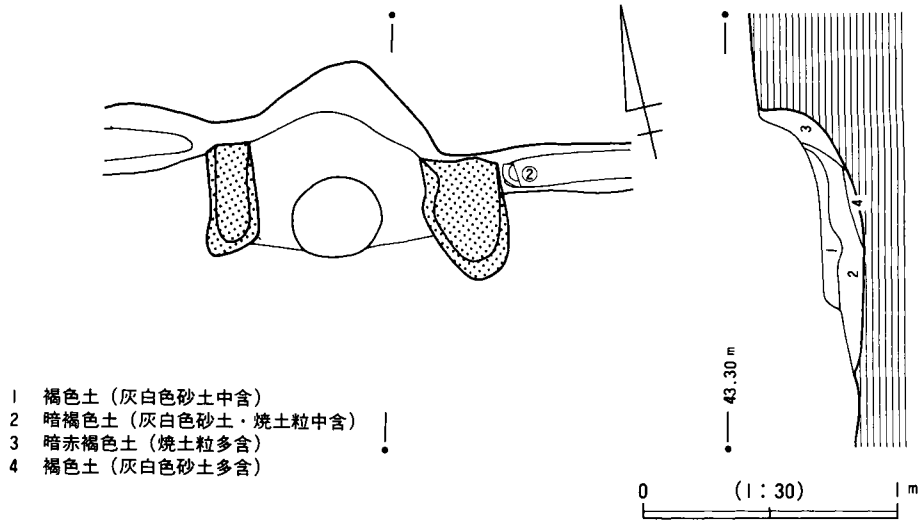
カマド　袖部は壁面中位から砂質土で構築されている。火床部はよく焼けていたが，袖部はそれほどでもない。

遺物　１は，須恵器坏である。２・３は土師器坏である。２はロクロ土師器の器形に従来の技法による整形を施したもので，約1/2個体を復元実測した。４は甕であるが，土師質須恵器ともとれるものである。５・６は鉄製品である。５は刀子であるが，身部中央で直角に折れまがり，茎先端を欠損する。身部長さ10.6cm，幅1.3cm，厚さ0.7cm，茎部長さ3.2cm，幅0.8cm，厚さ0.6cmを計る。重量14.4gである。６は鉄釘である。幹部の断面は多角形を呈し，0.6cmを計る。長さは４cm以上になろう。重量1.9gである。

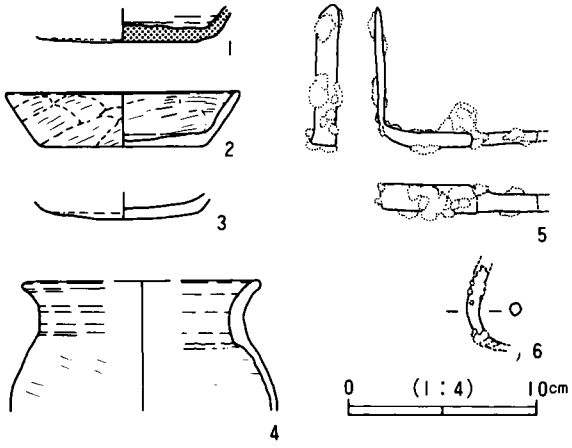
１がカマド上，４が床面より若干浮いた状態で，残りは覆土中からの出土である。



第171図　019号址実測図



第172図　019号址カマド実測図



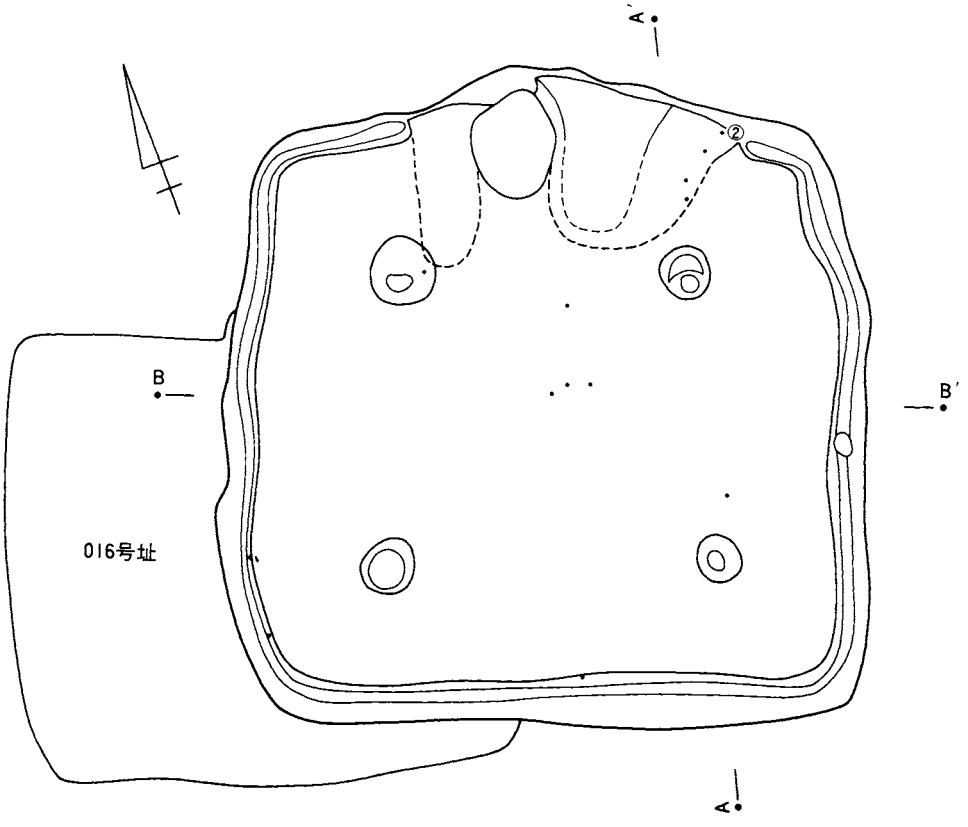
第173図(a)　019号址出土遺物実測図

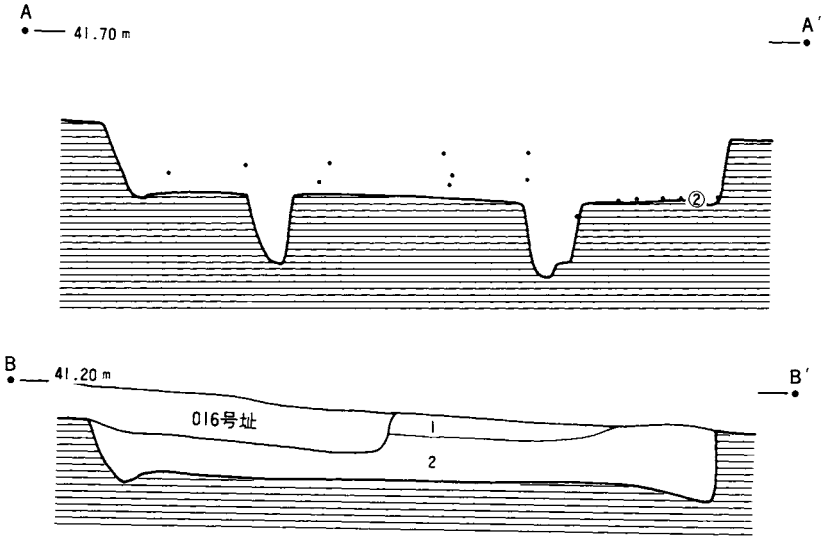
019号址　　第47表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器 坏			(7.8)	底部	砂粒	明青灰色	外面 体部下半手持ちヘラケズリ 底面多方向手持ちヘリケズリ 内面 ロクロナデ	カマド上
2	土師器 坏	2.8	12.3	8.6	1/2	混入物ほとんどなし	明赤褐色	外面 体部ヨコヘラケズリ，底面手持ちヘラケズリ 内面 指ナデ	覆土
3	土師器 坏			8.0	3/4	混入物ほとんどなし	明赤褐色	内外面 摩耗のための整形不明	覆土
4	土師器 甕		(12.3)		口縁～体部破片	微砂粒	外－黒褐色 内－褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部指ナデ 内面 口辺部ロクロナデ，体部指ナデ	床面やや浮き

021号址（第173(b)～175図，図版85・86・104）

Ｄ５－41グリッドを主に第１テラス北に位置する住居跡である。016号址と重複し，本号址の





1　暗灰褐色土（ハードローム粒・砂質粘土ブロック少含）
2　灰褐色土（ハードローム粒・砂質粘土粒少含）

0　(1：60)　2 m

第173図(b)　021号址実測図

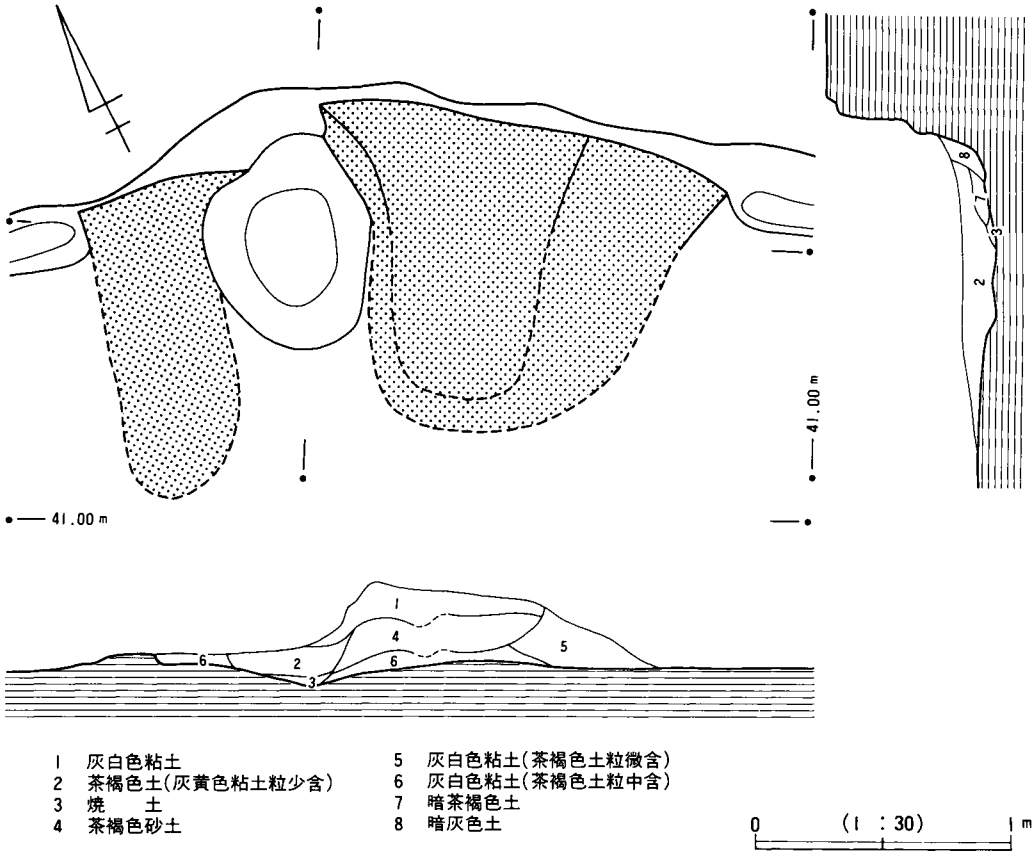
方が古い。

遺構　5.14×4.88mの方形プランを呈し，検出面からの深さ52cmを測る。カマドは北壁中央部にあり壁面を35cm掘り込む。壁溝はカマド下を除き全周する。柱穴は四隅に1カ所ずつ検出された。床面は灰白色粘質土の地山面である。

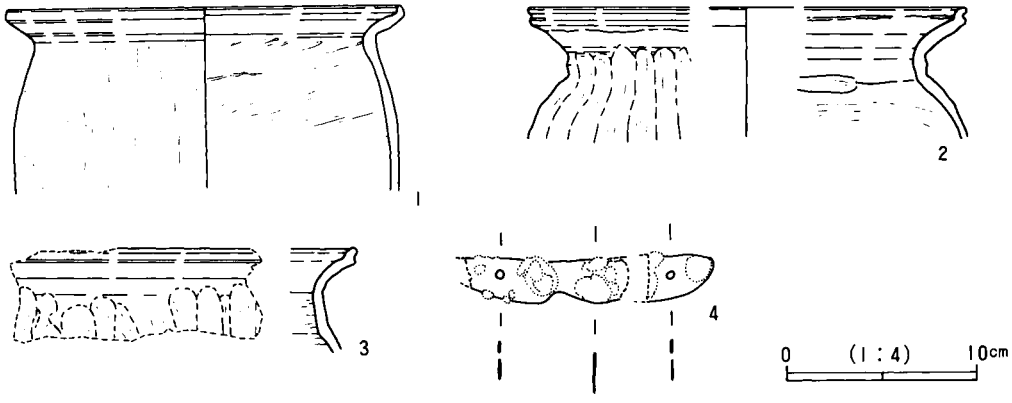
カマド　砂質土で構築された袖部は固くしまっておらず，遺存状況は悪い。火床部はよく焼けていた。

遺物　1～3は土師器甕である。胴部までの1/2個体，ないしは大破片である。4は手鎌である。2孔が明瞭であり，刃部は中央が著しく磨り減っている。長さ11.6cm以上，幅2.4cm，厚さ約0.1cmを計る。重量7.2gである。

1・2・3がカマド内（1は覆土中の遺物とも接合），4が覆土中からの出土である。



第174図　021号址カマド実測図



第175図　021号址出土遺物実測図

021号址　　第48表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 甕		(20.7)	胴部最大径 (20.2)	口辺～胴部 約$\frac{1}{3}$	不良	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ナデ	カマド内，覆土
2	土師器 甕		(23.1)		口辺～胴部 約$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{3}$	微砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，体部ナデ	覆土
3	土師器 甕				口縁部破片	砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部タテヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，体部ヘラケズリ	カマド内

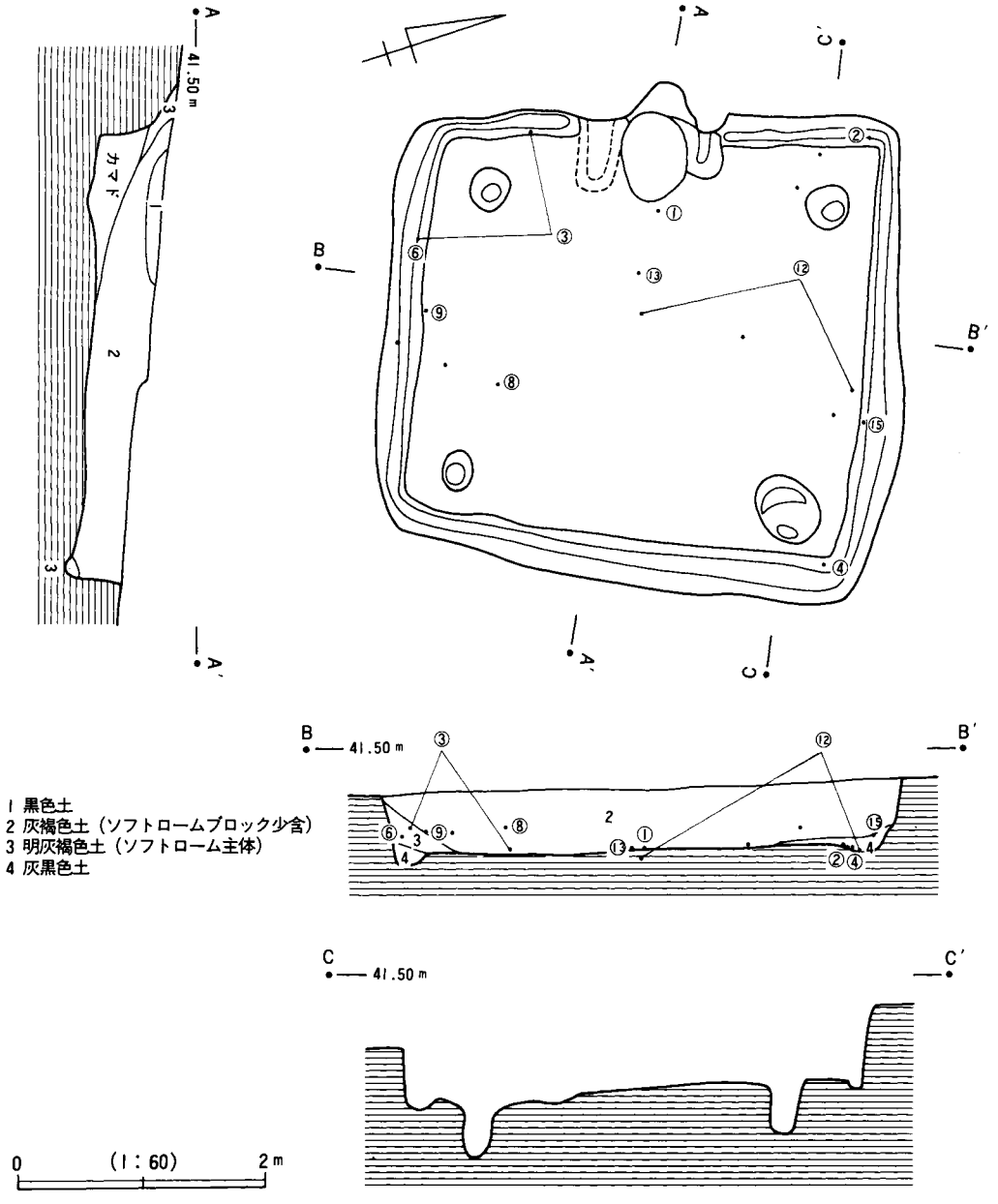
022号址（第176～178図，図版87・88・104）

D6－00グリッドを主体に，第1テラス北に位置する住居跡である。037号址（住居跡）と南辺で重複し，本号址の方が新しい。

遺構　4.5×4.0mの長方形プランを呈し，深さは検出面より50cmを測る。カマドは，西壁中央にあり壁面を30cm程掘り込む。壁溝はカマド下を除いて全周している。柱穴は四隅に1カ所ずつ検出されている。床面は全体に踏み固められている。遺物出土状況は主に覆土上層と床面直上から出土している。

カマド　袖部は砂質土で構築されているが，全体にしまっていない。また内側に焼けた面は認められなかった。火床部も焼けた面は認められない。

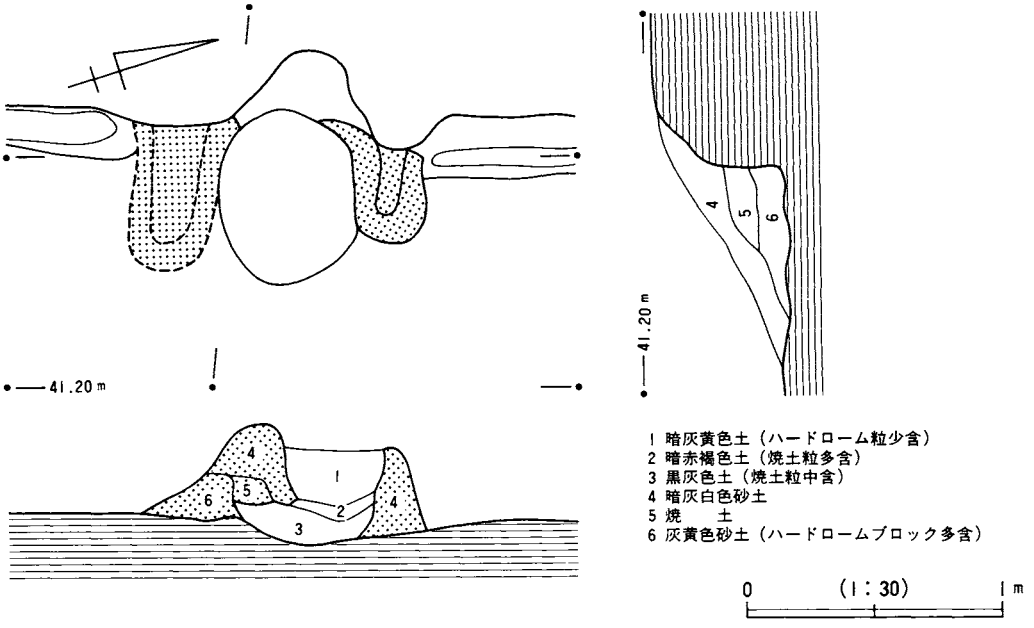
遺物　1～6は土師器坏，7は土師器高台付坏（皿）である。3以外は約1/2個体（ないしは2/3個体）を復元実測，あるいは破片を実測したものである。3は内外面磨耗が認められる。4は従来の技法による坏である。5は墨書土器であるが，肝心の字はわからない。6は内外面に丹を塗った後に外面をヘラケズリする。鬼高期の坏であろう。8は小型の土師器坏としてよいものであろうか。ロクロ整形，回転糸切りによる切離しである。約1/2個体を復元実測した。9



第176図　022号址実測図

は須恵器瓶の胴部大破片である。灰黒色を呈し，肩部に一条の沈線が廻る。10～15は土師器甕である。10は破損がみられるが，形がほぼ窺えるものである。カマド内より出土したためであろうか，焼土が広範囲に付着する。11～14は下半部を欠失するが，13以外は約1/2～1/3個体の破片から復元実測した。

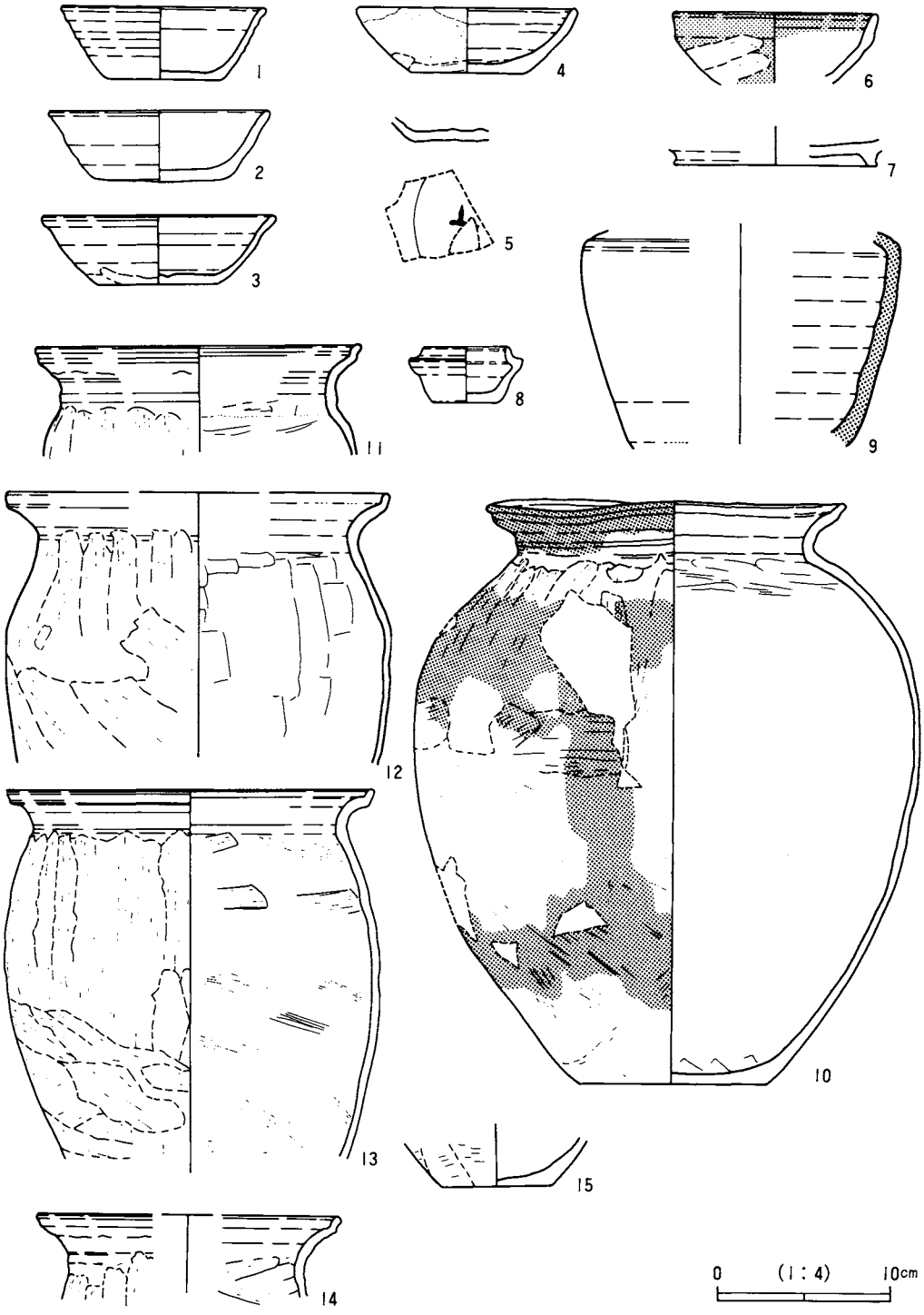
2・4が床面，13が床面より若干浮いた状態，3・12が床面，覆土，10がカマド内，残りは全て覆土中より出土である。



第177図　022号址カマド実測図

022号址　　第49表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　坏	4.2	(11.7)	6.5	3/4	並	暗褐色	外面　ロクロナデ，底面糸切り後周辺部手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面やや浮き
2	土師器　坏	4.0	13.3	7.0	約半個体強	砂粒	赤褐色	外面　体部ロクロナデ，体部下位手持ちヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面
3	土師器　坏	4.1	12.6	6.4	完形	不良	明桃色	外面　ロクロナデ，底面回転ヘラ切り 内面　ロクロナデ	床面，覆土
4	土師器　坏	3.8	12.8	6.8	約1/2	並	暗褐色	外面　口辺部指ナデ，体部多方向ヘラケズリ，体部下位手持ちヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　指ナデ	床面
5	土師器　坏				底部のみ	微砂粒	明黄褐色	外面　底部一方向手持ちヘラケズリ	覆土
6	土師器　坏		11.8		約1/2～1/3	微砂粒	黄褐色	外面　口辺部ナデ，体部ヘラケズリ	覆土
7	土師器高台付坏(皿)			11.6	1/2～1/3	微砂粒	明黄褐色	外面　ロクロナデ 内面　ロクロナデ	覆土
8	土師器小坏		5.0		約1/2～1/3	微砂粒	褐色	外面　上位ロクロナデ又はヨコナデ，下位指ナデ，底面回転糸切り？ 内面　口辺部ロクロナデ，体部指ナデ	覆土
9	須恵器　瓶				約1/3～1/2	砂・小石－少	灰黒色	外面　胴部ロクロナデ，肩部条線あり 内面　ナデ	覆土
10	土師器　甕	33.0	20.8	11.8	ほぼ完形	微砂粒	褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ナデに近いタテヘラケズリ，下半ヘラナデに近いヨコヘラケズリ，底面多方向ヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，頸部ヨコ指ナデ，胴部丁寧な指ナデ(横方向)	カマド内
11	土師器　甕		18.6		口辺部～胴部1/3(1/2)	微砂粒	暗褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ	覆土

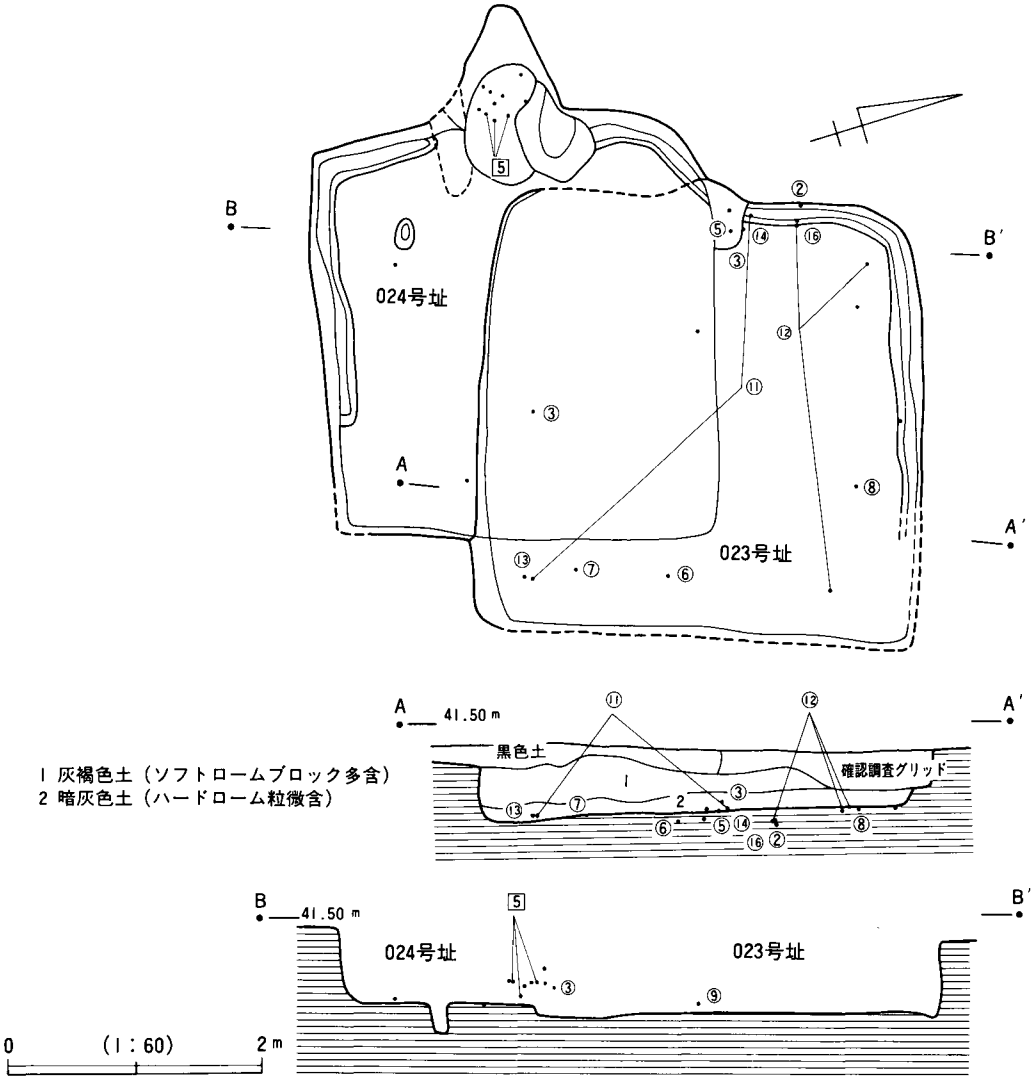


第178図　022号址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
12	土師器 甕		(22.1)	胴部最大径 (22.4)	約$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{3}$	砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデ	床面，覆土
13	土師器 甕		21.4	胴部最大径 21.8	胴部下位～底部欠失	微砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いタテヘラケグリ，下位ヨコヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ後一部ヘラナデ，下位指ナデ	床面やや浮き
14	土師器 甕				口辺～頸部片	砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部タテヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，体部ヘラナデ	覆土
15	土師器 甕			6.6	底部	砂粒－多	外面 黒褐色 内面 黄褐色	外面 胴部下位ヨコヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面 指ナデ	覆土

023号址（第179・180図，図版87・88・105）

C 6 －14グリッドを主体に，第1テラスに位置する住居跡である。024号址（住居跡）と南側



第179図　023・024号址実測図

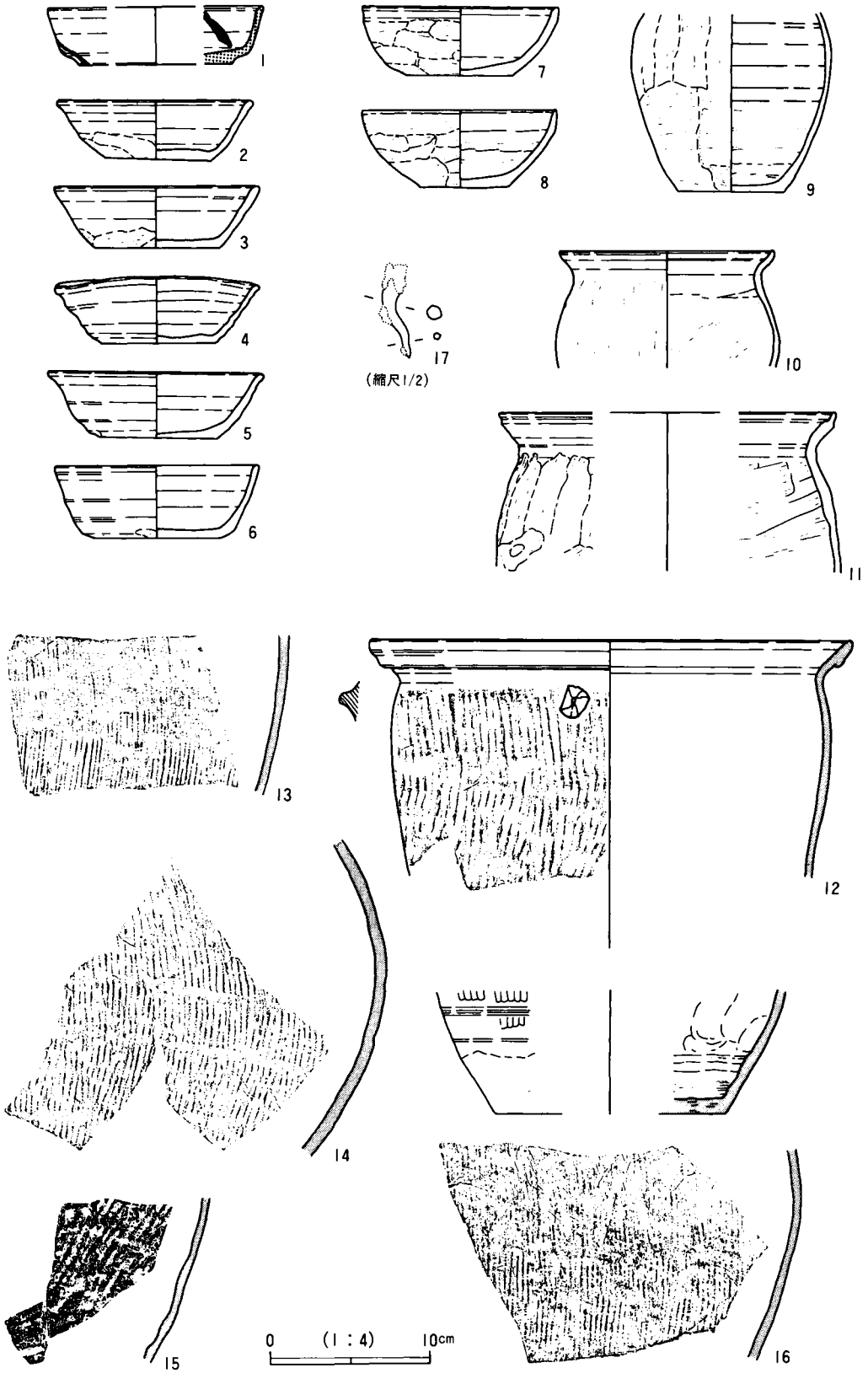
で，東側で037号址（住居跡）と重複する。本号址は，024号址よりも古く，037号址よりも新しい。

遺構　一辺3.5mの正方形プランを呈し，深さは検出面から20～54cmを測る。カマドは西壁中央にあるが024号址に削られ右袖部の一部が僅かに残っていたのみである。柱穴は検出されなかった。床面は若干踏み固められた程度である。遺物は主に床面からやや浮いたレベルから出土している。

カマド　024号址により破壊され右袖の一部が残っていたのみである。

023号址　　第50表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1									
2	土師質須恵器坏	3.8	12.1	6.5	完形	微砂粒	暗褐色	外面　体部ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面
3	土師器　坏	2.9	12.6	7.9	完形	並	赤褐色	外面　体部ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ	覆土
4	土師質須恵器坏	4.1	12.7	7.2	完形	良，微砂粒	黄褐色	外面　体部ロクロナデ，底面回転ヘラ切り 内面　ロクロナデ	覆土
5	土師器　坏	4.0	13.4	7.3	完形	微砂粒	赤褐色	外面　体部ロクロナデ，体部下位回転ヘラケズリ，底面回転糸切り後周辺部回転ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面やや浮き
6	土師器　坏	4.4	(12.7)	7.9	約$\frac{1}{4}$～$\frac{3}{8}$	微砂粒	明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，下位回転ヘラケズリ，底面回転ヘラ切り 内面　ロクロナデ	床面
7	土師器　坏	4.3	12.2	6.7	完形	微砂粒	褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部下位ヨコヘラケズリ，底面一方面手持ちヘラケズリ 内面　ヨコナデ	床面やや浮き
8	土師器　坏	4.9	12.2	5.5	ほぼ完形	砂粒	黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部下位ヨコヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ヨコナデ	床面やや浮き
9	土師器　甕		胴部最大径12.4	6.6	約$\frac{1}{4}$	微砂粒，焼成良好	外　黒褐色 内　黄褐色	外面　胴部上位タテヘラケズリ，下位ヨコヘラケズリ，底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ，下位ナデ	覆土
10	土師器　甕		13.4	胴部最大径13.9	約$\frac{1}{4}$	微砂粒		外面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　口辺部～頸部ロクロナデ，胴部指ナデ	覆土
11	土師器　甕	頸径18.7	21.0	胴部最大径21.4	約$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{3}$	微砂粒	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデ	床面やや浮き
12	土師器　甕		30.4	胴部最大径27.6	胴部下位欠	微砂粒	灰褐色～赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位～中位タタキ，下位ヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位～下位タタキ，下位指ナデ	床面やや浮き 覆土
13	土師器　甕				胴部片	並	外面　黒褐色 内面　黄褐色	外面　タタキ 内面　当て	床面やや浮き
14	土師質須恵器瓶					砂粒－多	赤褐色	外面　タタキ 内面　指ナデ	床面やや浮き
15	土師質須恵器瓶(甑)				胴部片		灰黒褐色	外面　上位タタキ，下位ヘラケズリ 内面　当て	床面やや浮き 覆土
16	土師質須恵器瓶(甑)				胴部片	砂粒，焼成良好	明灰色	外面　タタキ 内面　ヨコ指ナデ	床面



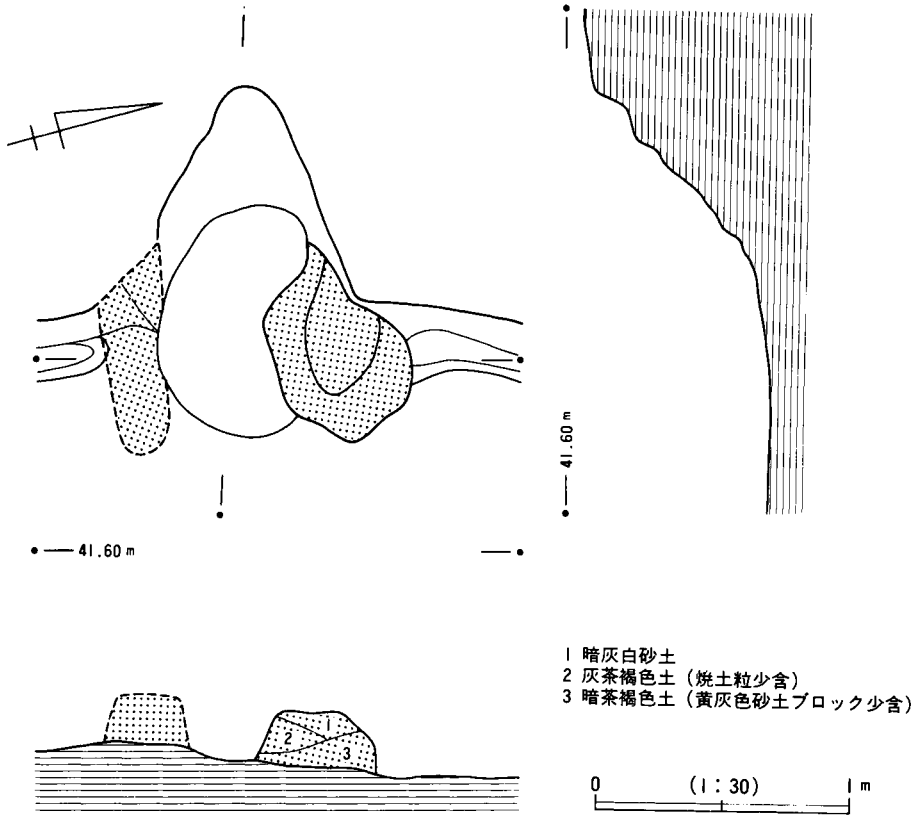
第180図　023号址出土遺物実測図

遺物　1は須恵器坏約1/3～1/4個体を復元実測した。胎土は灰青色を呈し，堅緻である。火ダスキが内外面にみられる。2～8は坏であるが，1以外は全て完形品である。この内2～6はいわゆるロクロ土師器である。また2・4は土師質須恵器の可能性もあろう。7・8は従来の技法によるものであるが，後者は埦に近いものである。9～11は土師器甕である。9は小型の甕で，ロクロ整形後，外面をヘラケズリしたものである。9・10共に遺存部約1/2個体を復元実測した。11は口縁～胴部の大型破片である。外面に焼土の付着がみられる。12は土師質須恵器の甑である。15と同一個体と思われる。13は須恵器瓶の胴部片である。胎土は灰白色を呈し，タタキ板の目は狭い。14～16は土師質須恵器瓶の胴部片である。17は鉄釘である。断面は多角形を呈し，頭部を欠損する。幹部上位の径は約9㎜，長さは(6)cm以上になろう。重量は5gである。

出土状況は2・5・6・7・8・11・13・14・16が床面，または床面より若干浮いた状態で，12・15は覆土下位～上位にかけて散在的に出土した。他は全て覆土中の出土である。

024号址（第179・181・182図，図版87・88・95）

C6－24グリッドを主体に，第1テラスに位置する住居跡である。北側で023号址と，南東隅



第181図　024号址カマド実測図

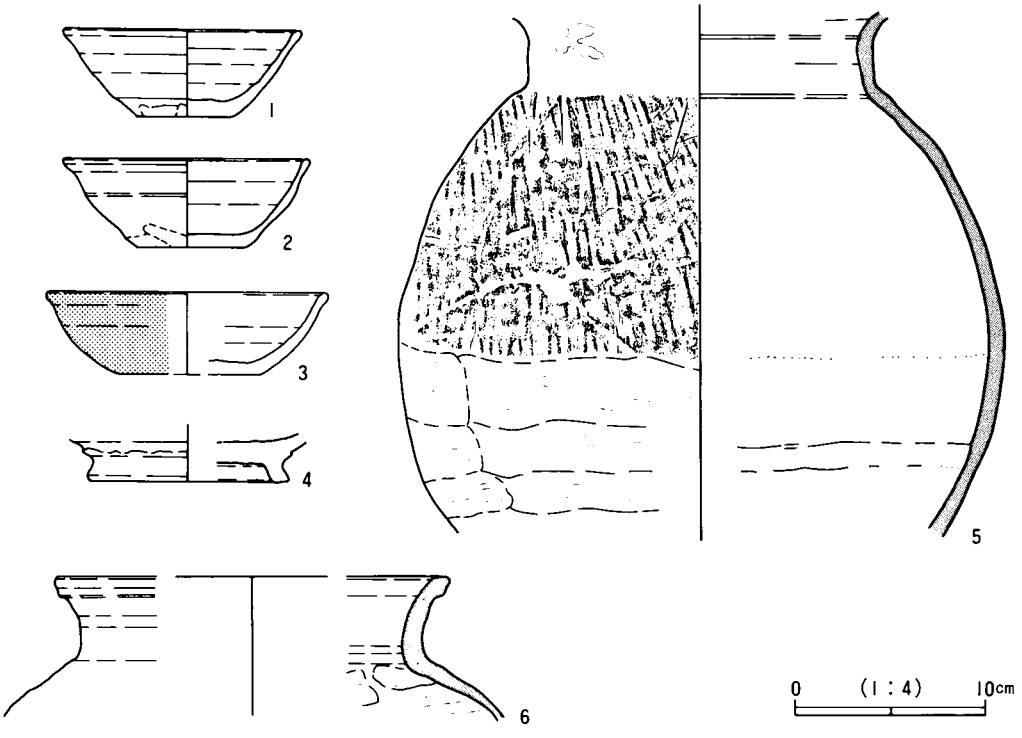
で僅かに026号址と重複する。本号址は023号址よりも新しいが，026号址との新旧関係は不明である。なお，本号址は調査中及び遺物注記の際は026号址としている。

遺構　一辺3.2m程の正方形プランを呈し，検出面から35～46cmの深さを測る。カマドは西壁中央にあり，壁面を70cm程掘り込む。壁溝はカマド下を除く西壁と南壁で検出された。柱穴或いは小ピットが西南部に１カ所検出された。深さは20cm程を測る。床面は若干踏み固められた程度である。遺物は覆土上層～下層，カマド内から出土している。

カマド　左袖は攪乱により不明瞭であるが，右袖は砂質土で固く構築されている。袖内側は全体に焼けている。火床部には灰を主体とする層が10cm程堆積していた。

遺物　１～４は土師器坏である。１は完形品，２は約1/3個体，３は約1/3個体を復元実測した。３点共にいわゆるロクロ土師器であるが，３は外面丹塗である。４は高台付盤底部である。５・６は土師質須恵器である。５は大形の瓶であるが，口縁部と底部を欠く。13は土師器壺の口縁～胴部上位約1/4個体を復元実測した。

出土状況は12がカマド中央火床部より出土しており，本址に伴うものとしてよいだろう。その他は覆土中よりの出土である。



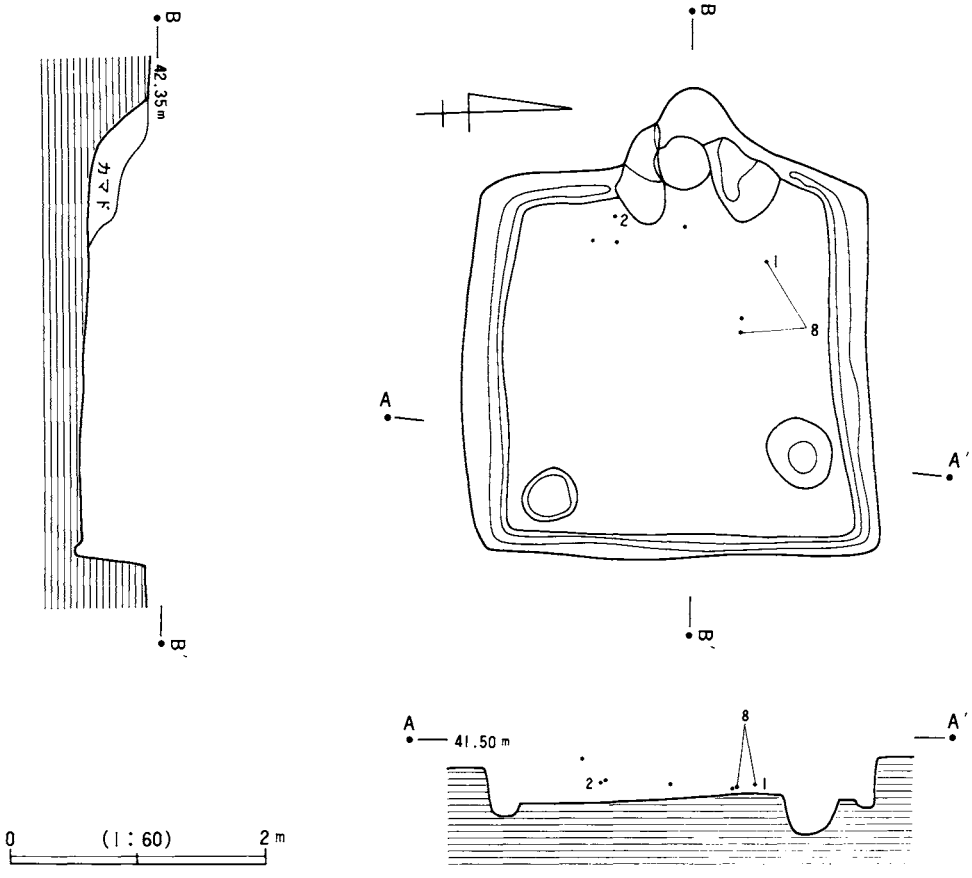
第182図　024号址出土遺物実測図

024号址　　第51表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　坏	4.6	12.3	5.1	完形品	微砂粒－多	明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，下位手持ヘラケズリ，底面回転糸切り 内面　ロクロナデ	覆土
2	土師器　坏	4.0	12.8	5.8	約$\frac{3}{4}$	微砂粒－多	明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，体部下位手持ちヘラケズリ，底面回転糸切り 内面　ロクロナデ	覆土
3	土師器　坏	4.3	14.8	7.7	約$\frac{1}{2}$	砂粒	外面　赤褐色 内面　明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，底面回転糸切り 内面　ロクロナデ	覆土
4	土師器高台付盤(Ⅲ)			(10.4)	約$\frac{1}{2}$	微砂粒－多	暗褐色	外面　ロクロナデ，底面指ナデ 内面　ヘラナデ	覆土
5	土師質須恵器甕		頸径18.3	胴部最大径32.0				外面　頸部ロクロナデ，胴部タタキ目，胴部下位ヨコヘラケズリ 内面　頸部ロクロナデ，胴部丁寧なナデ	カマド内
6	土師質須恵器甕				口縁～胴部上位約$\frac{1}{4}$	微砂粒	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデ	覆土

025号址（第183～185図，図版89・90）

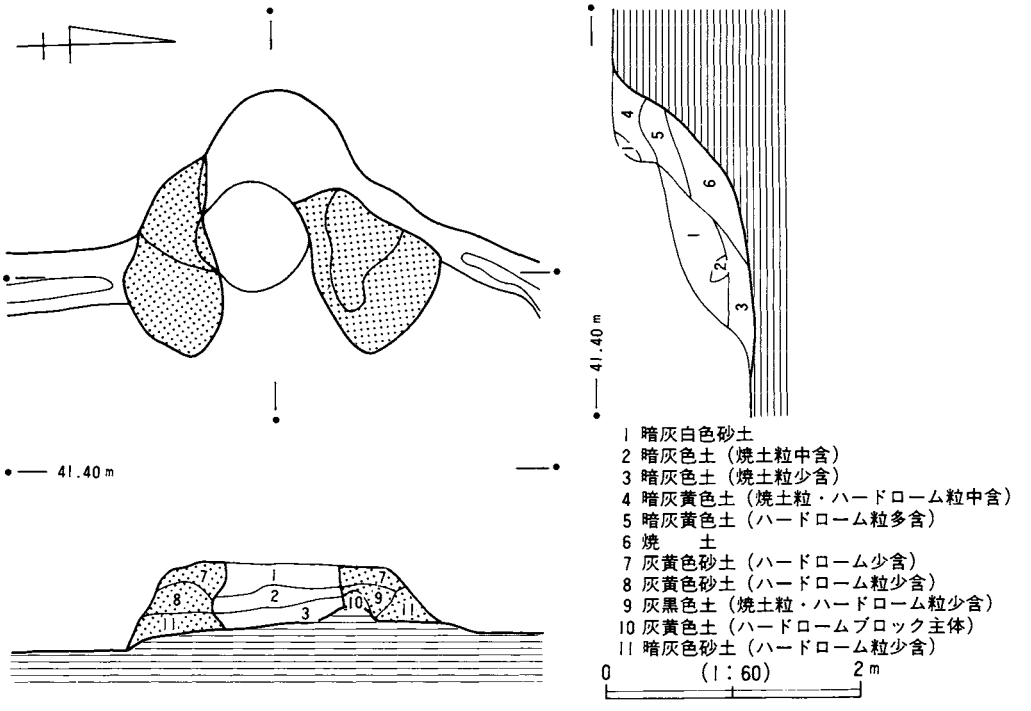
Ｃ６－44グリッドを主体に，第１テラスに位置する住居跡である。東側で031号址（住居跡）と重複する。本号址の方が新しい。



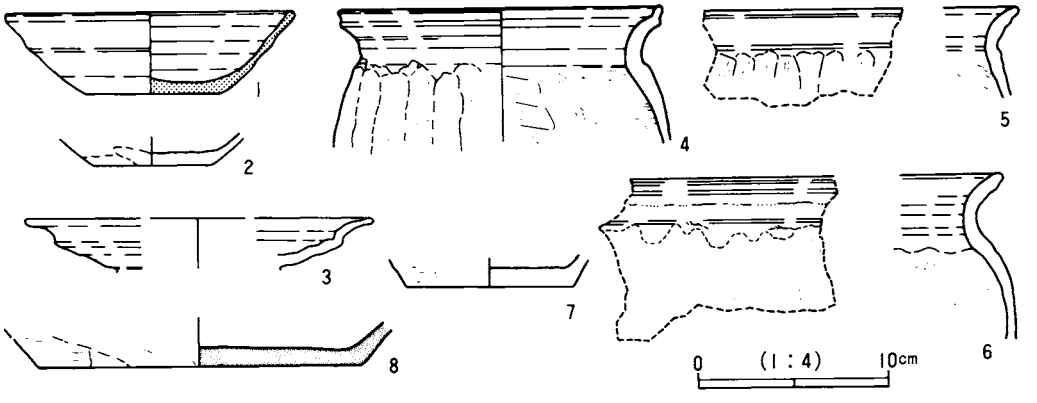
第183図　025号址実測図

遺構　3.2m×3.0mの方形プランを呈し，検出面から深さ30cmを測る。カマドは西壁中央やや北寄りにあり，壁面を55cm程掘り込む。壁溝はカマド下を除いて全周する。柱穴は北東，南東コーナーにそれぞれ１カ所検出された。床面は中央部は踏み固められているが周縁は軟弱である。遺物は主に床直及びカマド内から出土している。

カマド　袖部は砂質土で構築されている。両袖内側はあまり焼けていないが，火床部はよく焼けている。



第184図　025号址カマド実測図



第185図　025号址出土遺物実測図

遺物　1・2は土師器坏である。1はほぼ完形，2は底部である。3は灰釉陶器段皿破片を復元実測した。4～7は土師器甕である。4は口縁～土師器胴部上位約1/2個体，5・6は口縁～胴部の破片である。7は底部である。外面の剝落が著しい。8は土師質須恵器瓶底部である。

出土状況は1・2が床面上，3～8がカマド内の出土である。この内，1は本址に伴うものであろう。

025号址　　第52表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	4.2	15.1	7.1	½	微砂粒	明黄褐色	外面 体部ロクロナデ，体部下半回転ヘラケズリ，底面回転ヘラケズリ	床面
2	土師器 坏			6.3	底部完形	微砂粒	黒褐色	外面 胴部下位ヘラケズリ，底面回転糸切り後一方向ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	床面
3	灰釉陶器段皿		(18.3)		口縁～体部片	灰白色	明灰色	内面 灰釉	カマド内
4	土師器 甕			(16.9)	口縁～胴部約½～⅓	砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位タテヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ，一部ヘラナデ	カマド内
5	土師器 甕				口縁～胴部片	微砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	カマド内
6	土師器 甕				口縁～胴部片	微砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位タテヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ	カマド内
7	土師器 甕(壺)			9.0	約½	砂粒－多	赤褐色	外面 胴部下位ヨコヘラケズリ，底面ヘラケズリ 内面 指ナデ	カマド内
8	土師質須恵器瓶			17.0	底部完形	砂粒	赤褐色	外面 胴部下位ヘラケズリ 内面 指ナデ	カマド内，床面

026号址（第186・187図，図版87・88・105）

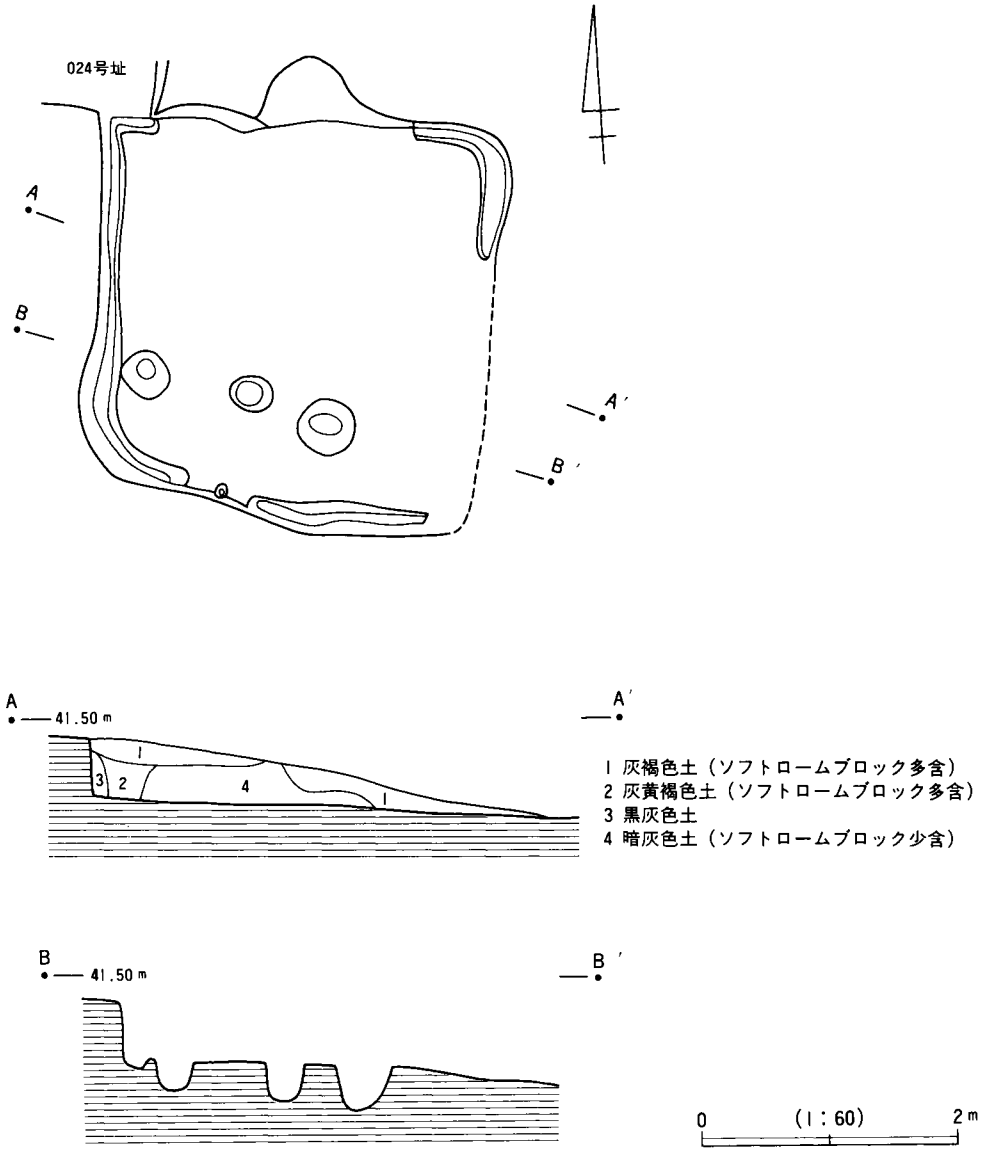
D6－30グリッドを主に第1テラスに位置する住居跡である。024号址と北西部で，027号址と南西隅でそれぞれ重複するが，新旧関係をつかむまでには至っていない。

遺構　3.2×3.3mのほぼ正方形プランを呈し，検出面からの深さ最大45cmを測る。カマドは北壁中央にあり壁面を45cm掘り込む。壁溝は南東が斜面にかかり不明確であるが，カマド付近を除いて全周すると思われる。柱穴は南辺に3カ所検出された。床面は全体に軟らかい。遺物は極めて少量である。

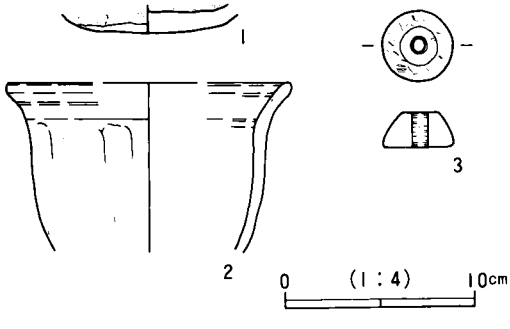
カマド　砂質土で構築されていたが，遺存状況は極めて悪かった。火床部も明確ではない。

遺物　1は土師器坏底部である。2は土師器甑で，口縁～体部約1/4個体を復元実測した。3は石製紡錘車であり，側面は傷のような擦痕が廻る。石質は滑石であり，重量は39.6gである。

3は床面より若干浮いた状態で，2はカマド内，1は覆土中より出土した。



第186図　026号址実測図



第187図　026号址出土遺物実測図

026号址　　第53表

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
1	土師器　坏			8.2	底部のみ	並	赤褐色	外面　体部下半ヨコヘラケズリ，底面ヘラケズリ 内面　ナデ	覆土
2	土師器　甑			(14.7)	口縁～体部¼	砂粒	黄褐色	外面　口辺部ロクロナデ，体部タテヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，体部ヘラナデ	カマド内

027号址（第188～190図，図版89・90・105）

C 6 －34グリッドを主に第1テラス中央に位置する住居跡である。北東隅で026号址と僅に重複する。

遺構　(5.4)×4.7mの方形プランを呈し，検出面より深さ最大70cmを測る。カマドは西壁中央にあり壁面を70cm掘り込む。壁溝は検出されなかった。主柱穴は南辺に3ヵ所，東辺中央に1ヵ所，支柱穴は2ヵ所検出された。床面には中央部を中心に多量の炭化材，焼土塊が認められた。また床面は全体に軟かい。第1テラスを被う黒色土が，本号址では床直上まで認められることから，第1テラス部の住居跡の中では最も新しいと思われる。

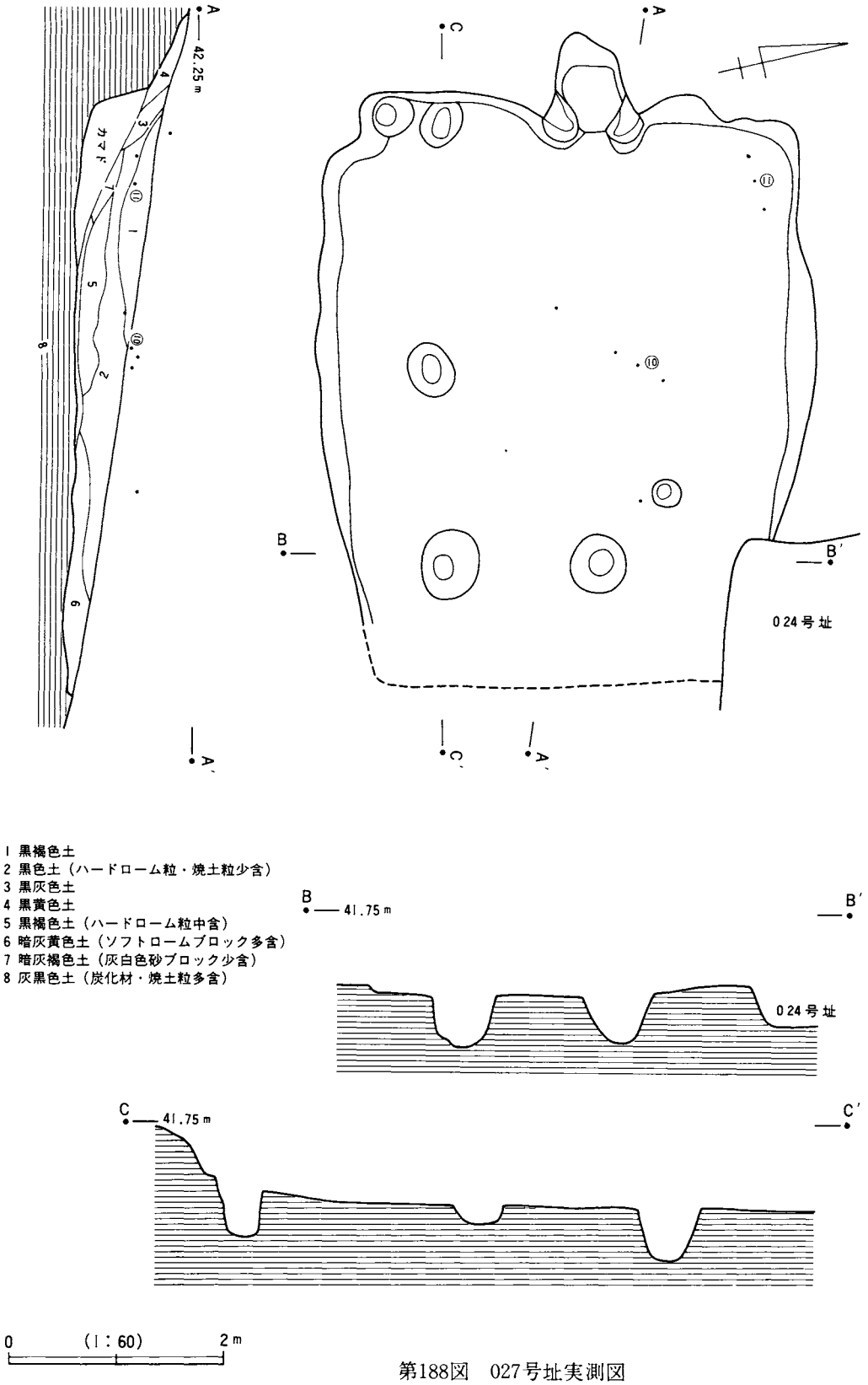
カマド　袖部は砂質土で構築されている。カマド内にスサ入焼土塊，灰，炭化材が残っていた。両袖内側はよく焼けている。

遺物　1は須恵器坏である。体部～底部約1/2個体を復元実測した。2～9は土師器坏であるが，2・4が完形もしくはほぼ完形の他はいずれも破損品である。この内，5には体部外面に墨書が，9には内面丹塗りが認められる。10は土師器高台付坏底部である。11は土師器壺底部である。鬼高期の所産であろうか。12は土師器甕の口縁～体部約1/3個体である。胎土は土師質須恵器に近い。13は瓦である。平瓦の破片で，厚さは1.8cm，表は布目痕，裏はヘラナデ痕がみられる。色調は赤褐色である。

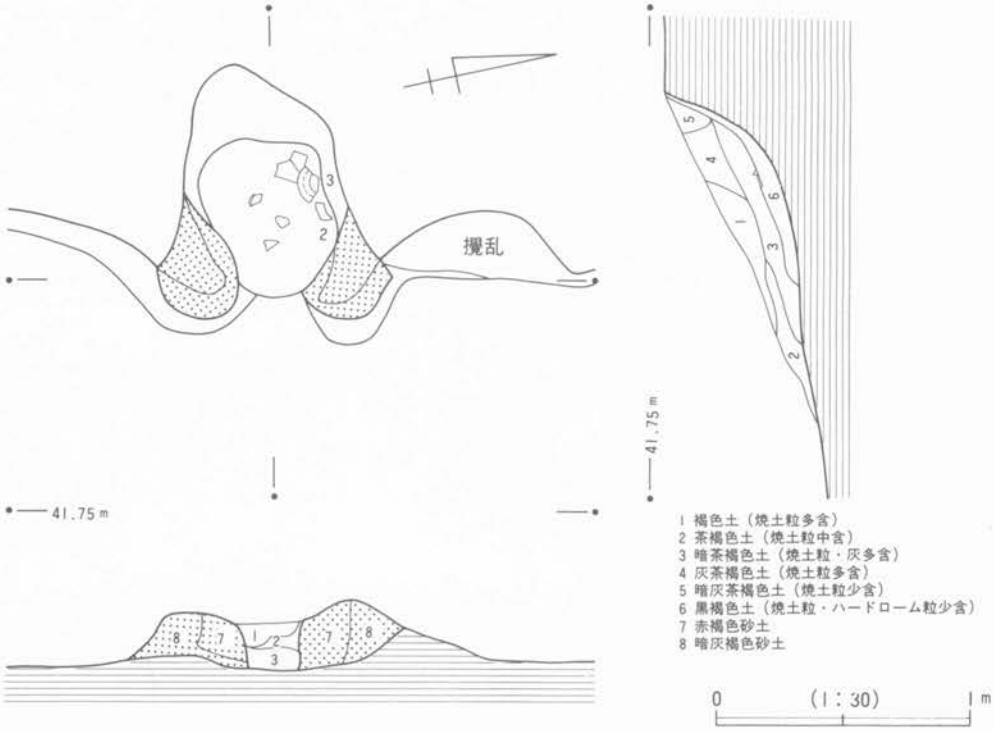
11が床面より若干浮いた状態，2・3・6・7がカマド内，残りは覆土中からの出土である。

027号址　　第54表

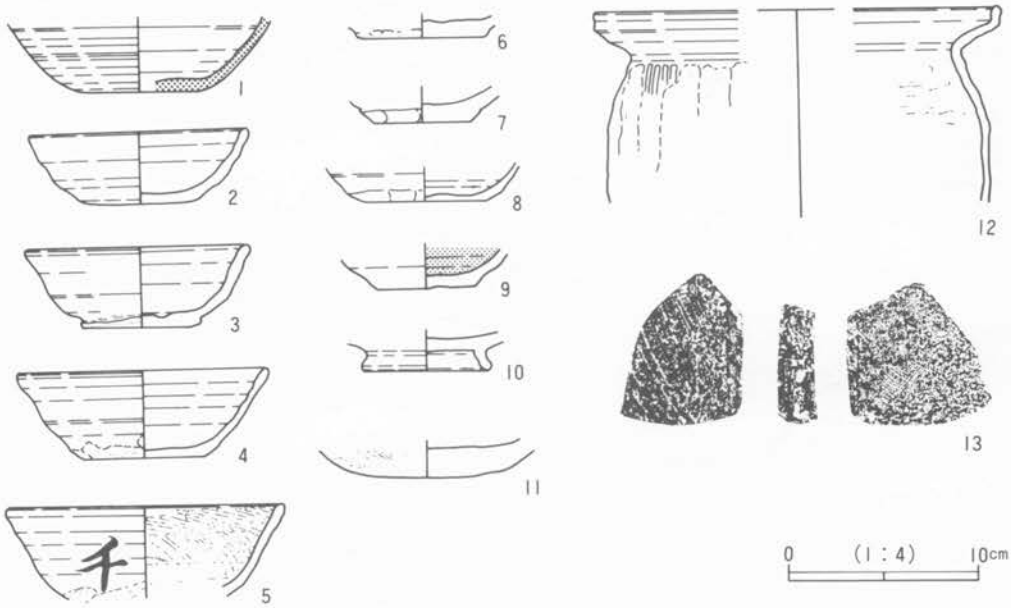
挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
1	須恵器　坏			6.6	底部～体部約¼	黒色砂粒子	明青灰色	内外面　鋭いロクロナデ 底面静止糸切り	覆土
2	土師器　坏	3.7	6.1	(11.5)	約½	微砂粒	明黄褐色	外面　ロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	カマド内
3	土師器　坏	4.2	6.3	11.6	完形	微砂粒	赤褐色，黒色	内・外面ロクロナデ （※灯明皿として利用されたものか）	カマド内
4	土師器　坏	4.5	6.4	13.2	約⅔	砂粒	黄褐色	外面　ロクロナデ 内面　ロクロナデ	覆土
5	土師器　坏 （墨書土器）		14.6		約½～¼	砂粒	明黄褐色	外面　体部上位ロクロナデ，下位ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	覆土
6	土師器　坏			5.2	底部完形	砂粒	明黄褐色	外面　手持ちヘラケズリ 内面　指ナデに近いロクロナデ 底面一方向手持ちヘラケズリ	カマド内



第188図　027号址実測図



第189図　027号址カマド実測図



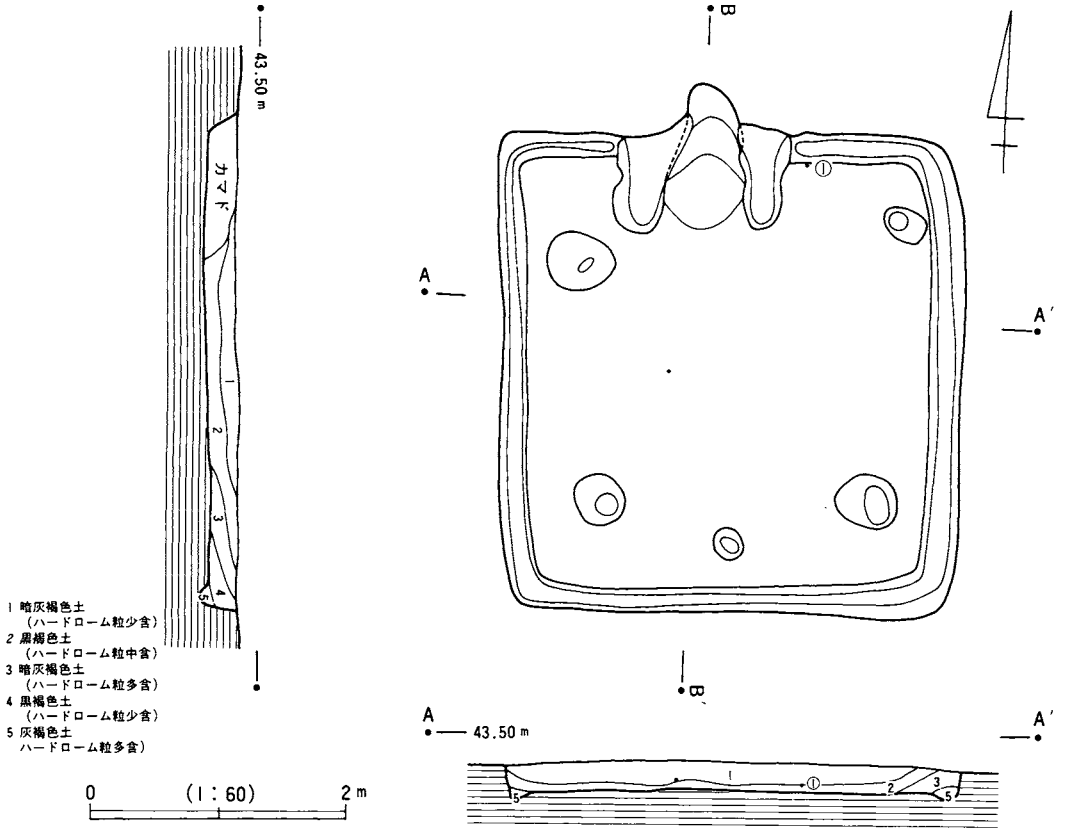
第190図　027号址出土遺物実測図

7	土師器　坏				底部	砂粒－多	赤褐色	外面　底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	カマド内
8	土師器　坏			6.6	底部	微砂粒	明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，一部手持ちヘラケズリ， 底面一方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	覆土
9	土師器　坏			5.3	底部	微砂粒	明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，底面回転糸切り(R) 内面　丹塗り	覆土
10	土師器高台付坏			6.7	底部のみ	砂粒	黄褐色	外面　ロクロナデ 内面　ヘラミガキ	覆土
11	土師器　壺			8.0	約$\frac{1}{2}$	砂粒	外面　黒褐色 内面　黄褐色	外面　体部ヘラケズリ，底部ヘラナデ 内面　指ナデ	床面やや浮き
12	土師器　甕			(21.4)	約$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$	微砂粒	明褐色	外面　口辺部ロクロナデ，体部タテヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，体部指ナデか？	覆土

028号址（第191～193図，図版91・93・106）

Ｃ６－11グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。029号址（住居跡）と重複し，本号址の方が新しい。

遺構　一辺3.6m の方形プランを呈し，検出面より25cmの深さを測る。カマドは北壁中央にあり



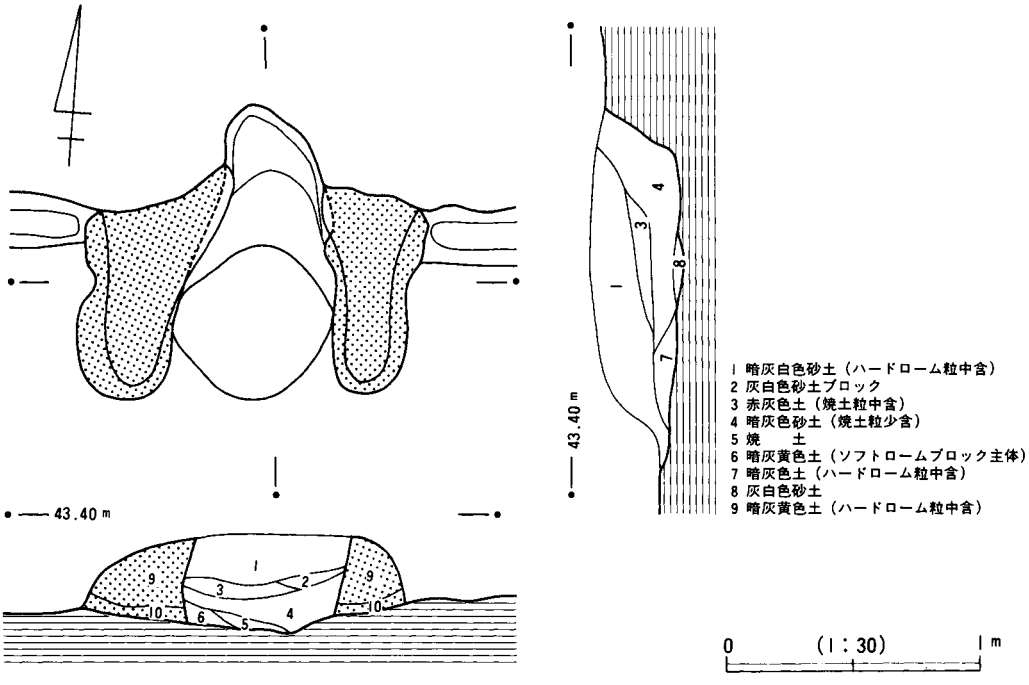
第191図　028号址実測図

壁面を35cm掘り込む。壁溝はカマド下を除き全周する。柱穴は四隅に各1カ所と南辺中央に1カ所検出されている。床面は全体にあまり踏み固められていない。

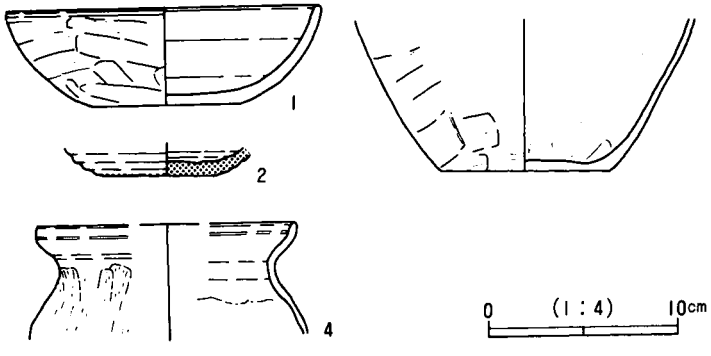
カマド　袖部は砂質土で構築されている。両袖内側は若干焼け，火床部は全く焼けていない。

遺物　1は土師器坏であるが，整形は内面ロクロナデに対し，外面はヘラケズリ整形である。2は須恵器坏底部である。3・4は土師器甕である。共に破損品である。

1はカマド脇の床面，4はカマド内，残りは覆土中からの出土である。



第192図　028号址カマド実測図



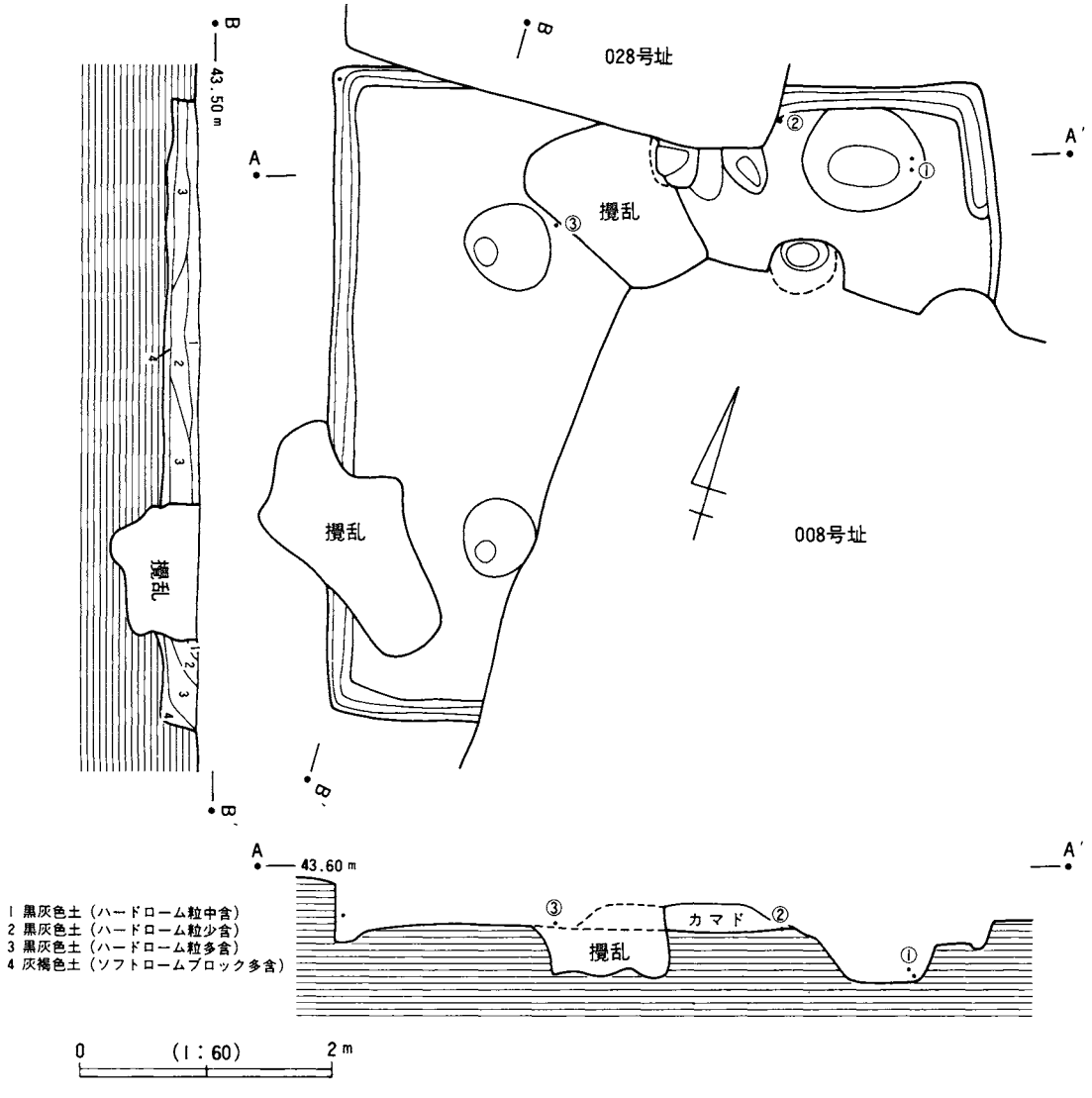
第193図　028号址出土遺物実測図

028号址　　第55表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　坏(埦)	5.0	8.1	16.4	完形	微砂粒，良	黄褐色	外面　口辺部ロクロナデ，体部ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	床面
2	須恵器　坏			6.3	底部完形	微砂粒	明灰白色	外面　ロクロナデ 内面　ロクロナデ	覆土
3	土師器　甕		頸径 (14.4)	(13.7)	約$\frac{1}{2}$～$\frac{1}{3}$	微砂粒	黒褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ	覆土
4	土師器(土師質須恵器)甕			9.0	約$\frac{1}{2}$	微砂粒，良	黄褐色	外面　体部ヘラケズリ 底部多方向手持ちヘラケズリ	カマド内

029号址（第194・195図，図版91・93・106）

C 6 －21グリッドを主に台地縁辺部に位置する住居跡である。008号址・028号址と重複する



第194図　029号址実測図

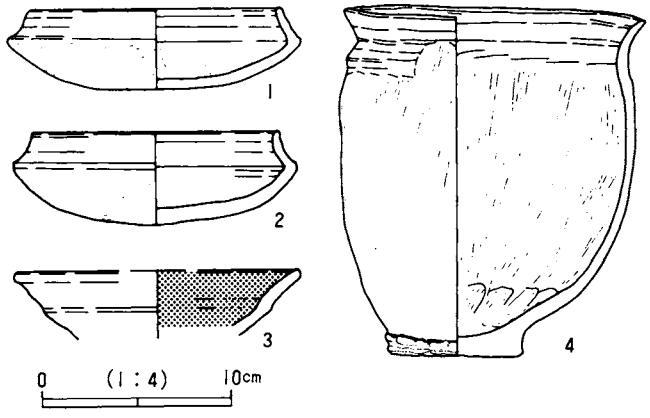
が，両号址よりも古い。

遺構　5.0×5.3mの方形プランを呈し，検出面よりも50cmの深さを測る。カマドは北壁中央にあるが，028号址と攪乱により僅かに右袖部の一部が残っていたのみである。壁溝は北壁中央は不明であるが，他は全周していたと思われる。柱穴は四隅に1カ所ずつ検出されている。残存床面は踏み固められている。

カマド　砂質土で構築された右袖の一部が残っていたのみである。

遺物　1・2は土師器坏である。共に約2/3個体を復元実測した。3は土師器高坏口縁部片であり，内面はいぶしている。4はほぼ完形品に近いもので，全体にゆがみが著しい。

出土状況は，2・3が床面，1がピット内，4が覆土中より出土した。



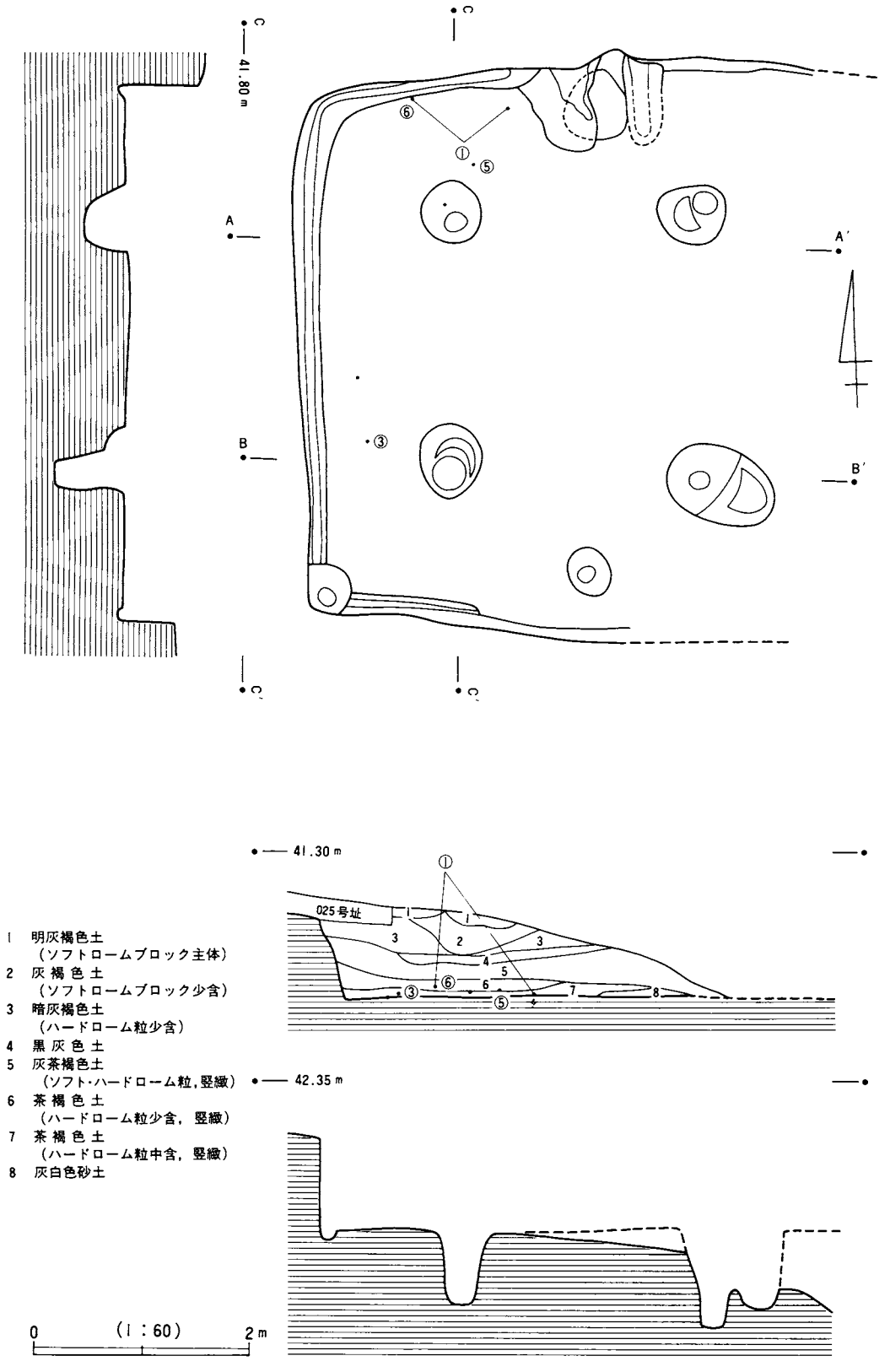
第195図　029号址出土遺物実測図

029号址　　第56表

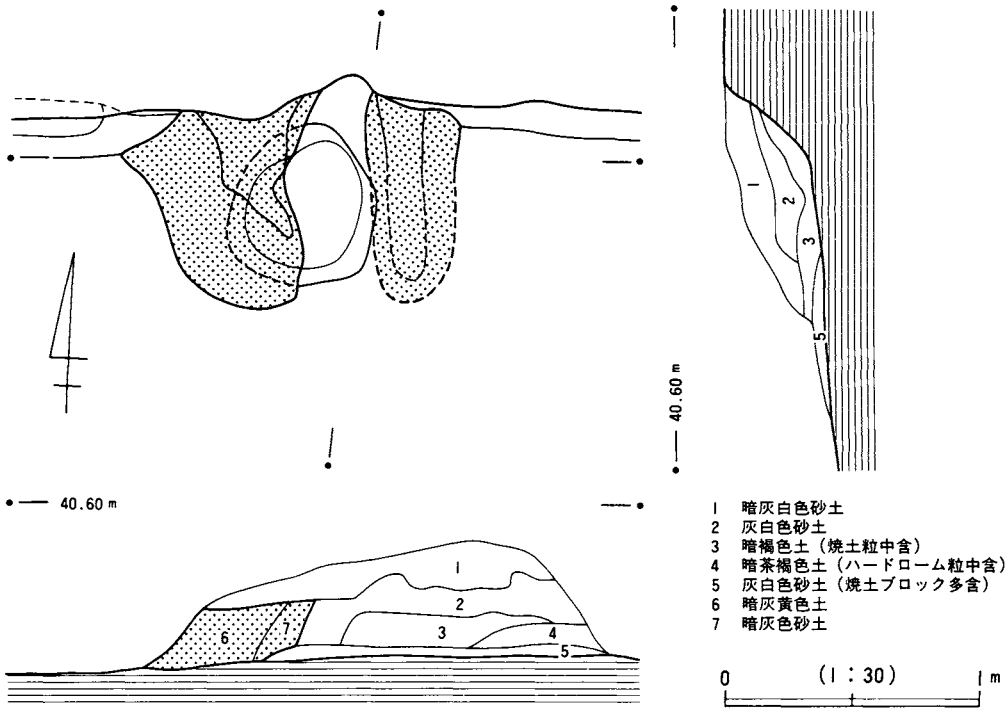
挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器　坏	4.2	13.4	(7.0) 稜径15.4	完形	微砂粒	赤褐色	外面　口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　ナデ	ピット内
2	土師器　坏	4.8	13.1	稜径15.1	約¾	若干砂粒	赤褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部～底面丁寧なヘラナデ 内面　口辺部ヨコナデ，体部～底面指ナデ	床面
3	土師器　高坏		(15.0)		口縁部	砂粒－多	外面　褐色 内面　黒色	外面　口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ 内面　ヘラミガキ後いぶし処理	床面
4	土師器　坏	18.3	15.7	17.1 胴部最大径 15.5	ほぼ完形	微砂粒	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデに近いヘラケズリ，底面ヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部ヘラナデ	覆土

031号址（第196～198図，図版89・90）

D7－00グリッドを主に第1テラスに位置する住居跡である。025号址と重複し，本号址の方が古い。



第196図　031号址実測図



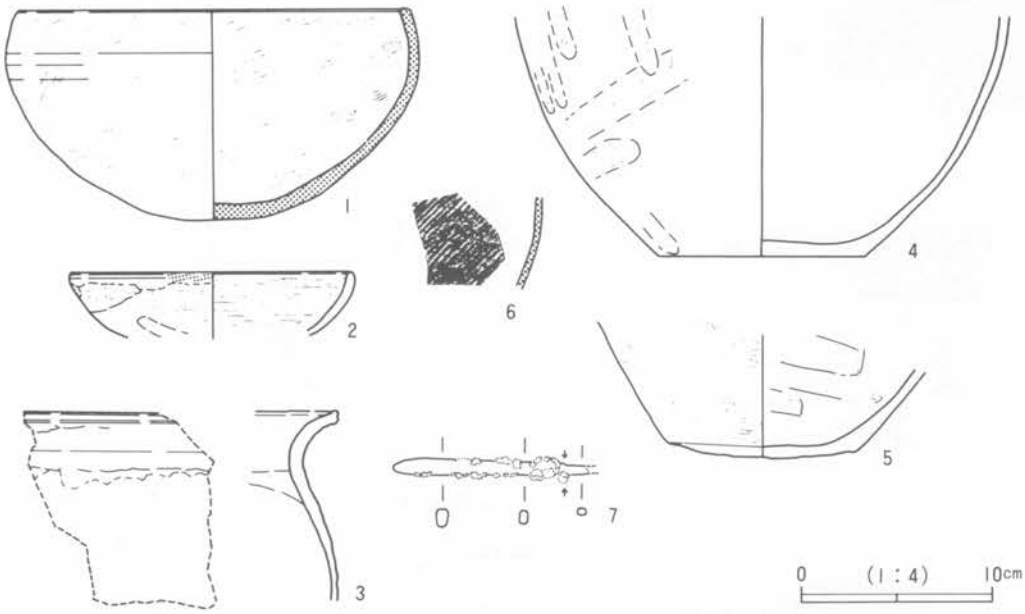
第197図　031号址カマド実測図

遺構　東辺が斜面にかかり明確ではないが，一辺5.2m程の方形プランを呈すると思われる。検出面より最大80cmの深さを測る。壁溝はカマド下を除き全周していたと思われる。柱穴は四隅に1カ所づつ，南辺中央及び南西コーナー壁際に検出された。床面は灰白色粘質土の地山層である。

カマド　北壁中央にあり砂質土で袖部は構築されている。しかし遺存状況は良くない。袖内側は焼けた面はみられないが，火床部はよく焼けている。

遺物　1は口縁の内湾する須恵器椀である。灰白色の軟質なもので，ほぼ完形をなす。033号址覆土中の遺物と接合した。2は土師器坏である。口縁～体部約1/2個体を復元実測した。口唇部外面に油煙と思われる炭化物が認められる。033号址覆土中の遺物と接合した。3は土師器甕口辺～胴部破片である。4は土師器甕胴下部約1/3個体を復元実測した。5は土師器壺の底部～胴部である。6は須恵器壺（甕）の胴部片である。9は鉄鏃である。根と茎を分ける関は明瞭である。断面は丸みを帯びる正方形を呈し，根の長さ9cm，重量は6gである。

出土状況は1（カマド内遺物とも接合）・3・5・6が床面，7が床面より若干浮いた状態で，2・4が覆土中より出土した。この内1は本址に伴うものであろう。



第198図　031号址出土遺物実測図

031号址　　第57表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器 椀	(11.0)	20.4		ほぼ完形	灰白色の粗悪な胎土	明灰白色	外面 ロクロナデ後指ナデ(?) 内面 指ナデ	床面，カマド内
2	土師器 坏		14.8			砂粒	明黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ後ヘラナデ 内面 指ナデ	覆土
3	土師器 甕				口縁～胴部$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{3}$	砂粒－多	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，体部ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ	床面
4	土師器 甕				底部～体部下半$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{3}$	微砂粒	外面 赤褐色 内面 黒褐色	外面 胴部ロクロナデに近いヘラケズリ，底面一方向ヘラケズリ 内面 ていねいな指ナデ	覆土
5	土師器 壺			4.0		不良	赤褐色	外面 体部指ナデ，底面ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	床面
6	須恵器 壺(甕)				胴部片	明灰色，精良	明灰色	外面 タタキ 内面 同心円状当て	床面

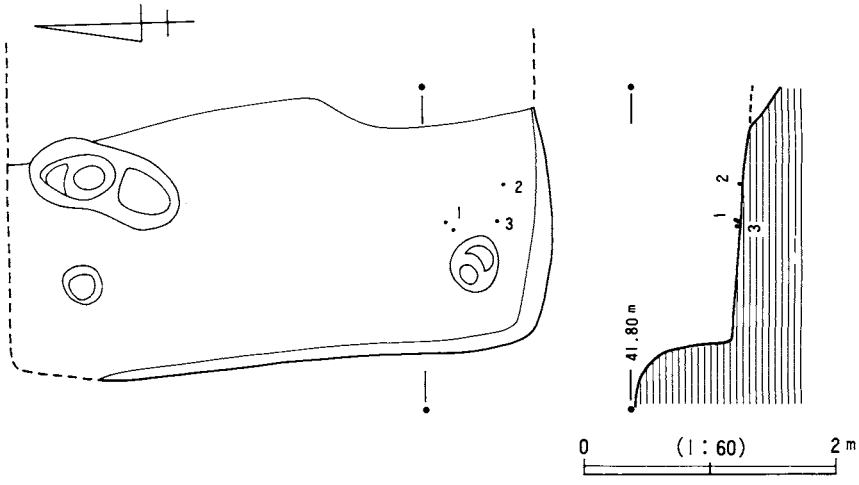
032号址（第199・200図，図版92・93・106）

C7－34グリッドを主に台地縁辺の落ち脇に位置していた住居跡である。

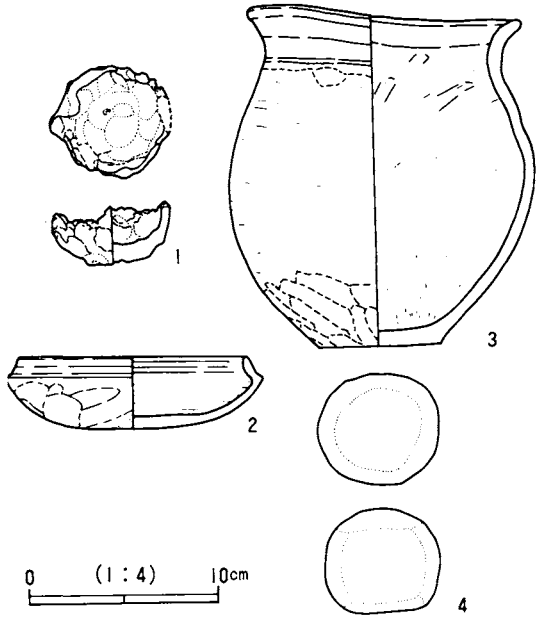
遺構　第1テラス造成により西壁と床面の一部が残っていたのみである。一辺5m程の方形プランを呈していたと思われる。柱穴が西壁際に2カ所検出されたのみでカマドは痕跡すらなかった。

遺物　1はいわゆる手づくね土器である。2は土師器坏である。3は土師器甕である。

1～3共に完形品であり，また床面よりの出土である。4は安山岩製の磨石である。黒褐色を呈し，全面を使用している。床面より出土している。



第199図　032号址実測図



第200図　032号址出土遺物実測図

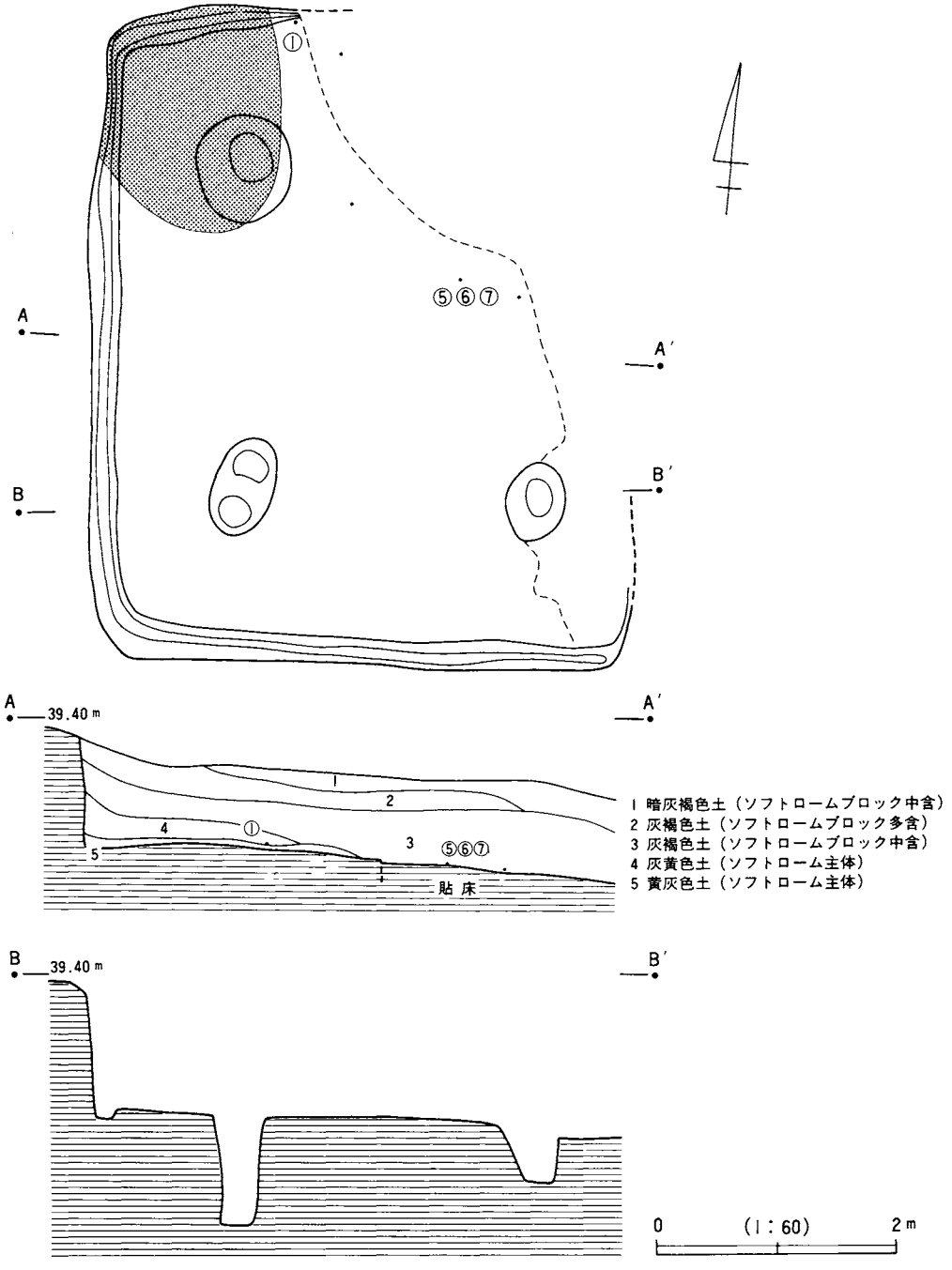
032号址　　第58表

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
1	手づくね土器				完形	砂粒－多	明黄褐色		床面
2	土師器　坏	3.7	12.1	稜径13.6	完形		明黄褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヘラナデ，体部下位ヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，体部ヘラミガキに近いヘラナデ	床面
3	土師器　甕	17.7	14.4	6.5	完形	砂粒	黄褐色～黒褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部上位ヘラナデに近いヘラケズリ，下位タテヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，体部上位ヘラナデ下位指ナデ	床面

033号址（第201・202図，図版94・106）

D７－31グリッドを主に第２テラスに位置する住居跡である。

遺構　東側が斜面にかかり掘り過ぎたためもあり北東部は明確ではないが，5.5×4.6mの方形プランを呈すると思われる。カマドは痕跡もなかったが北壁にあったものと思われる。壁溝は

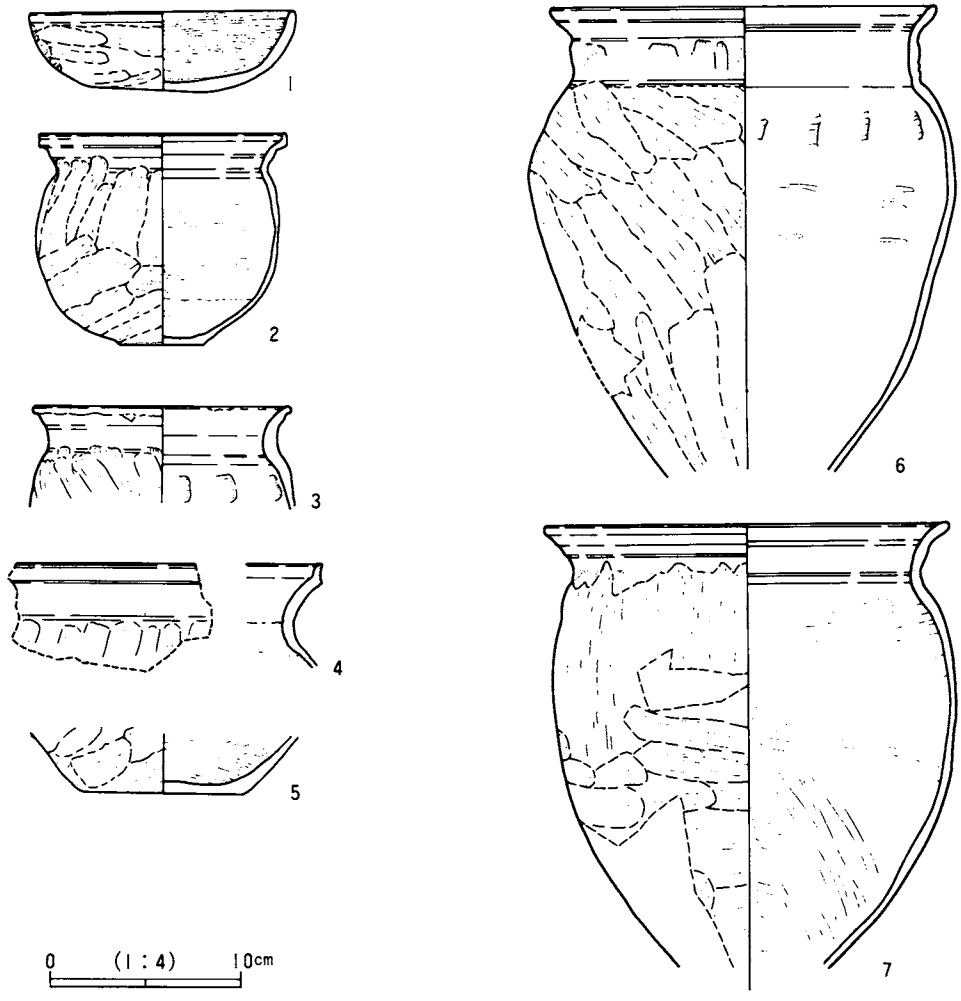


第201図　033号址実測図

北・西・南壁で検出されている。柱穴は北東部を除く3カ所のコーナー近くで検出されている。床面は東半分は貼床で，全体に踏み固められている。

遺物　1は土師器坏である。2・3は小型の土師器甕である。2は約1/2個体を，3は口縁～胴部1/2個体をそれぞれ復元実測した。4～7は土師器甕である。4は口縁～胴部の大型破片，5は底部である。6はコの字状の口縁を有する甕で底部を欠く。7は底部を欠く約1/2個体の甕である。

5・6・7が床面，1・2が床面より若干浮いた状態で，残りは覆土中よりそれぞれ出土した。



第202図　033号址出土遺物実測図

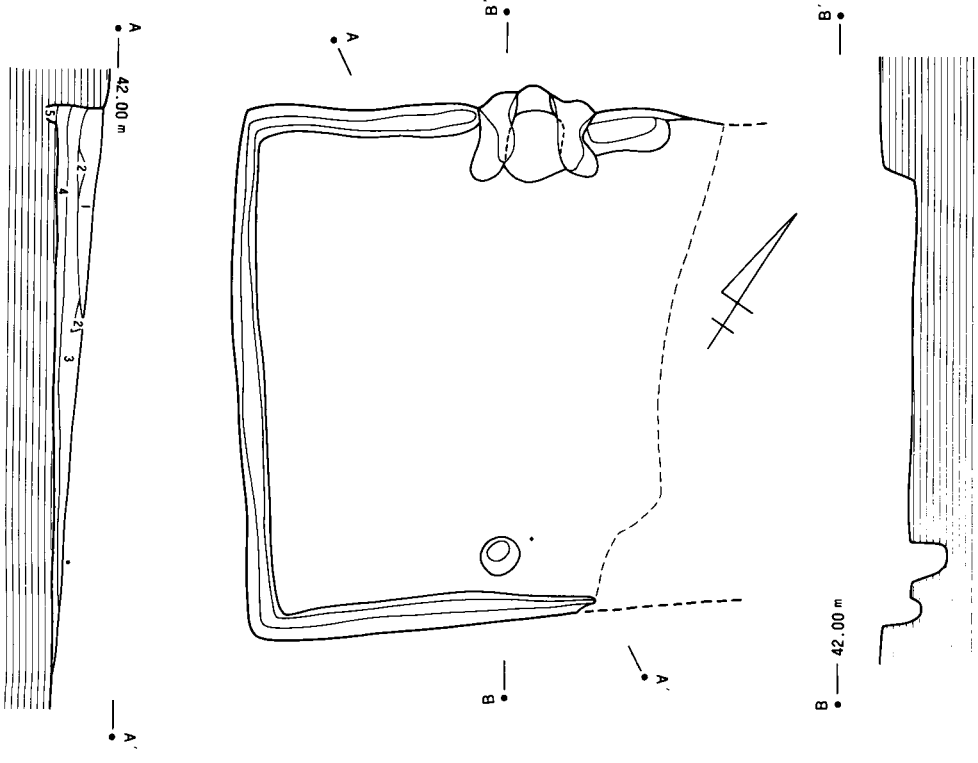
033号址

第59表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	4.2	13.9	7.5	ほぼ完形品	微砂粒	明黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，体部～底面ヘラケズリ後ヘラナデ	床面やや浮き
2	土師器小型甕	10.9	12.9	4.4	約½	微砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部丁寧な指ナデ 底面 一方向手持ちヘラケズリ	床面やや浮き
3	土師器小型甕		13.4		口縁～胴部約½	砂粒－多	黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデ	覆土
4	土師器 甕				口辺部片	微砂粒	黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，頸部タテヘラケズリ 内面 ロクロナデ	覆土
5	土師器 甕			8.4		微砂粒	外面 褐色 内面 明黄褐色	外面 胴部下位ヨコヘラケズリ 底面多方向ヘラケズリ 内面 指ナデ	床面
6	土師器 甕		20.3	胴部最大径22.5	底部欠	微砂粒－多	明赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，頸部ヘラケズリ 胴部不明瞭なヘラケズリ 内面 口辺～頸部ロクロナデ，胴部指ナデ	床面
7	土師器 甕	24	21.3	胴部最大径21.3	約½	微砂粒	赤褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位タテヘラナデに近いヘラケズリ，胴部下位ヨコヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部指ナデ	床面

034号址（第203～205図，図版94・106）

B３－34グリッドを主に調査区北端の台地縁辺部に位置する住居跡である。



1　暗灰褐色土
2　灰白色砂土
3　暗灰褐色土（ハードローム粒・ブロック少含）
4　灰褐色土（ハードローム粒少含）
5　明灰褐色土（ハードローム粒・ブロック中含）

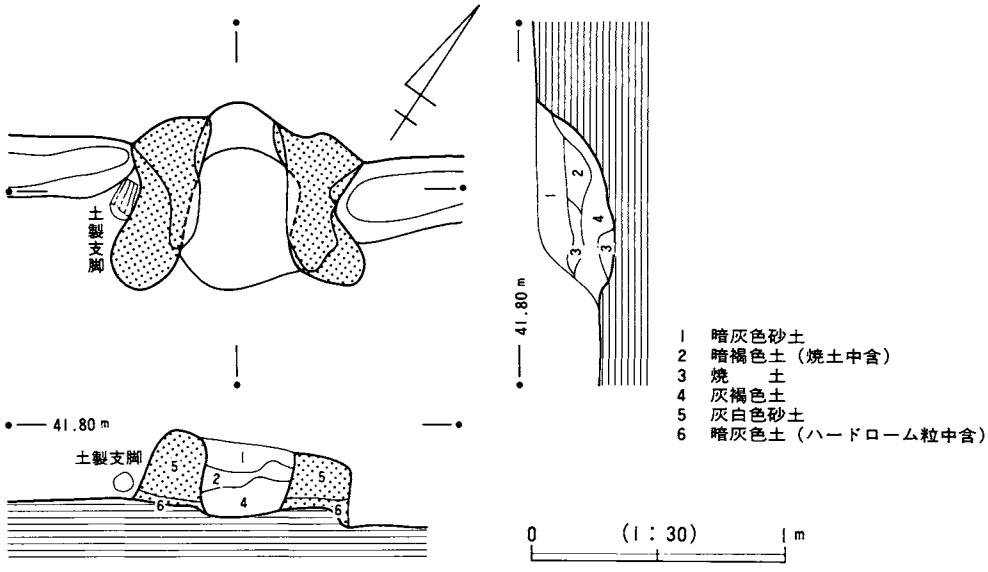
0　(1：60)　2m

第203図　034号址実測図

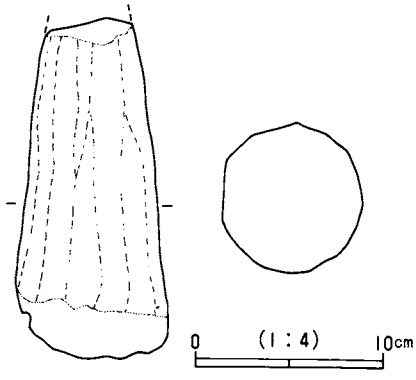
遺構　北東壁が斜面にかかるため明確ではないが，一辺4.0m程の方形プランを呈すると思われる。検出面より35cmの深さを測る。カマドは北面壁中央にあり壁面を16cm掘り込む。壁溝はカマド下を除き全周していたと思われる。柱穴は南辺中央のみに認められた。床面は全体に踏み固められている。出土遺物は僅少である。

カマド　袖部は砂質土で構築されている。袖内側はよく焼けているが，火床部はほとんど焼けていない。

遺物　本址で図示できる遺物は土製支脚のみである。長さ（17）cm以上，径は元で8.5cmを測る。荒い砂まじり粘土を使用し，外面はタテヘラケズリ整形である。



第204図　034号址カマド実測図



第205図　034号址出土遺物実測図

037号址（第206～208図，図版95・96）

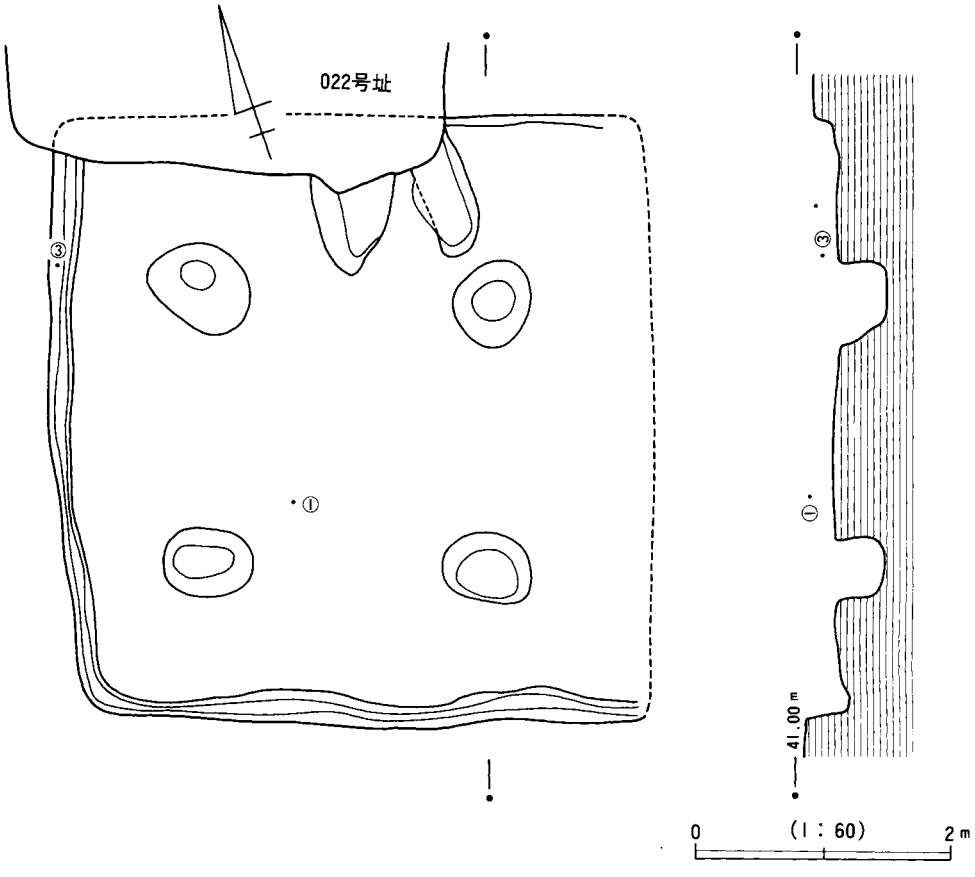
Ｄ６－10グリッドを主に第１テラスに位置する住居跡である。022号址，023号址，024号址と重複するが，本号址が最も古い。

遺構　一辺4.7mの方形プランを呈し，検出面より最も深いところで35cmを測る。カマドは北壁中央にあるが袖部のみ残っている。壁溝は西壁，南壁沿いで検出した。柱穴は四隅近くにそれぞれ１カ所づつある。床面は全体に踏み固められている。出土遺物は僅少で，しかも覆土の厚さがあまりないことから時期決定には注意を要する。

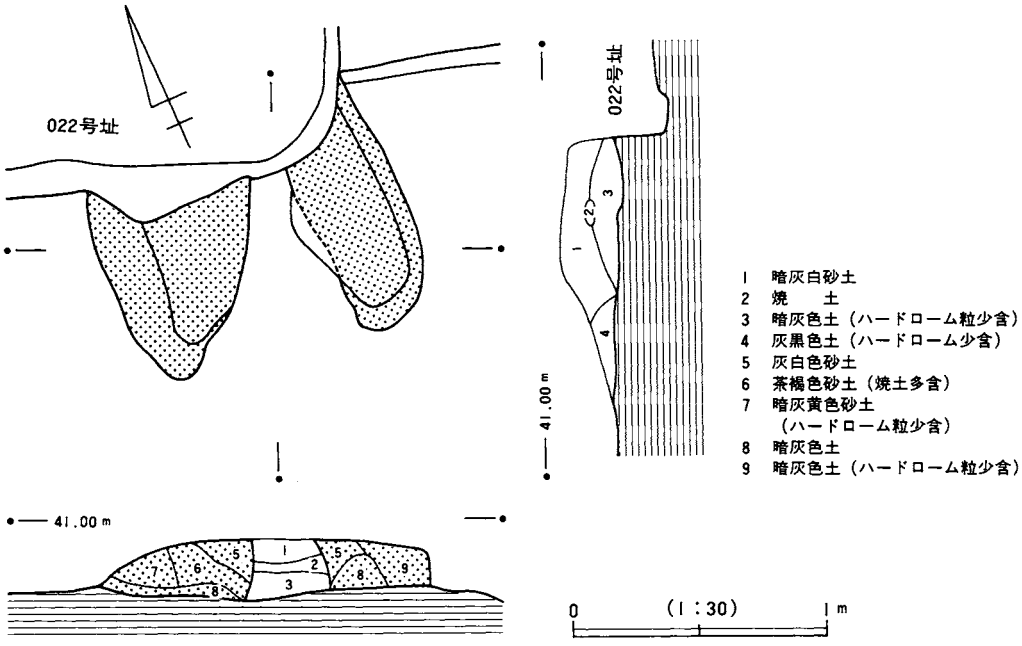
カマド　022号址によって大きく破壊され，袖部と火床部が残っていたのみである。袖部は砂質土で構築され内側はあまり焼けていない。火床部は全く焼けた面はない。

遺物　１は土師器高坏である。坏底部～脚部にかけてのものである。２は土師器壺底部である。３は土師器甕である。外面に焼土が厚く付着する。

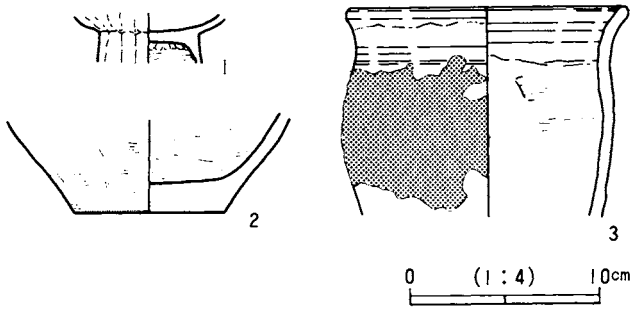
１が床面より若干浮いた状態，２が覆土，３が床面（一部は覆土）よりそれぞれ出土した。



第206図　037号址実測図



第207図　037号址カマド実測図



第208図　037号址出土遺物実測図

037号址　　第60表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 高坏				坏部底部～脚部		明赤褐色	外面 ヘラケズリ 内面 坏部－丁寧なナデ 台部－荒い指ナデ	床面やや浮き
2	土師器 壺			7.9		砂粒	赤褐色	外面，胴部下位，底面ヘラナデ	覆土
3	土師器 甕		14.6	胴部最大径 14.4		並	外面 赤褐色 内面 黒褐色	外面 口辺部ヨコナデ(ロクロ)胴部焼土付着 内面 口辺部ヨコナデ(ロクロ)胴部指ナデ，焼土付着	床面，覆土

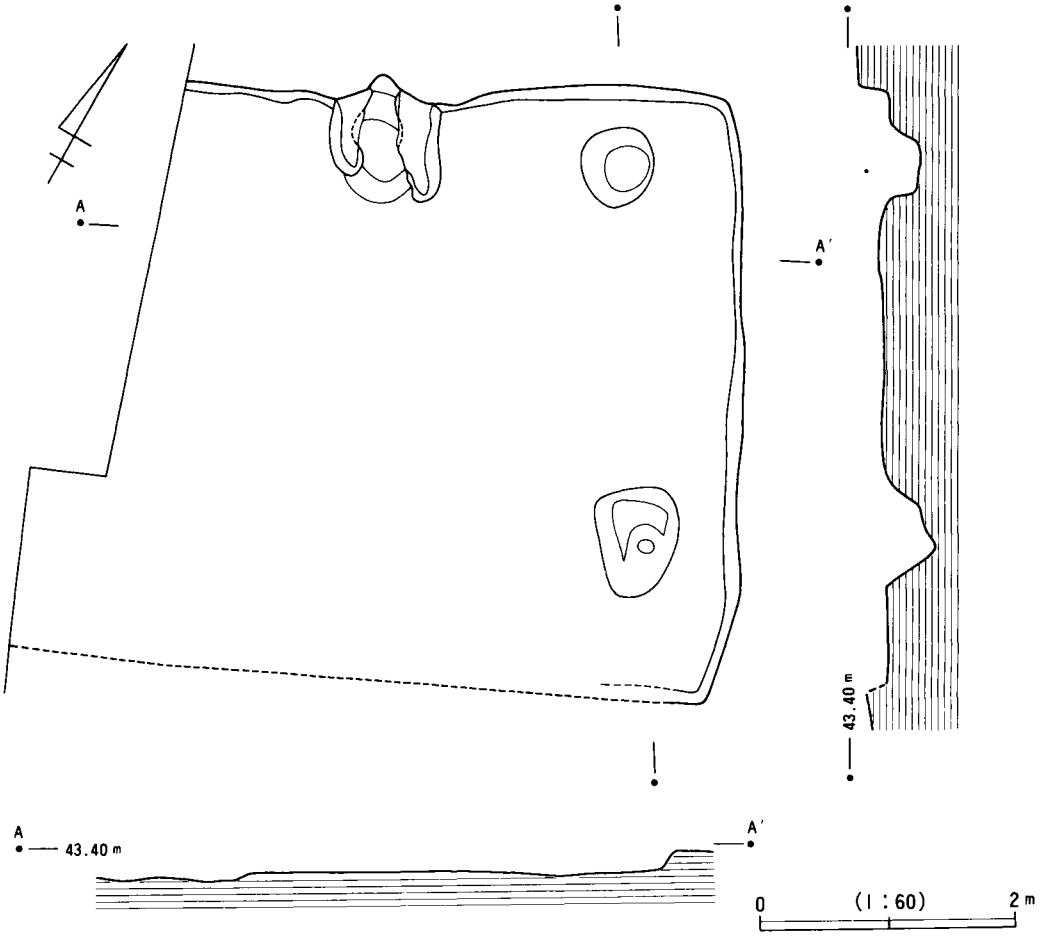
039号址（第209～211図，図版95・96・106）

B５－13グリッドを主に台地平坦面に位置する住居跡である。西壁際が調査区外に拡がるため完掘していない。

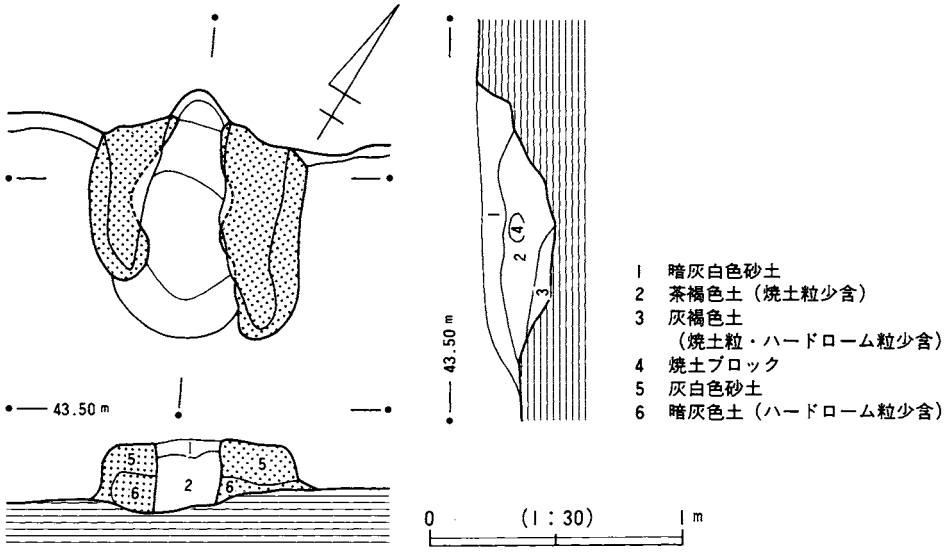
遺構　木ノ根のため南側の破壊が大きく規模は明確ではないが，一辺4.7m程の方形プランを呈すると思われる。カマドは北西壁中央にあり壁面を20cm掘り込む。壁溝は検出されていない。柱穴は北東寄りに２カ所検出されたが，他は攪乱が激しいため明確ではない。床面は凹凸が激しい。出土遺物は僅少である。

カマド　袖部は砂質土で構築されている。左袖部内側はよく焼けているが，右側は焼けた面はみられない。また火床部も焼けていない。カマド内で土製支脚が正位の状態で出土。

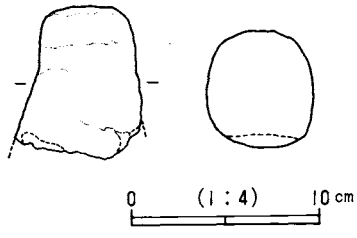
遺物　本址で図示できる遺物は土製支脚のみである。下半部を欠き，胎土に砂粒，小石を多量に含み，赤褐色を呈するものである。床面より出土した。



第209図　039号址実測図



第210図　039号址カマド実測図



第211図　039号址出土遺物実測図

以下は住居跡以外の遺構である。

047号址（第212図，図版97）

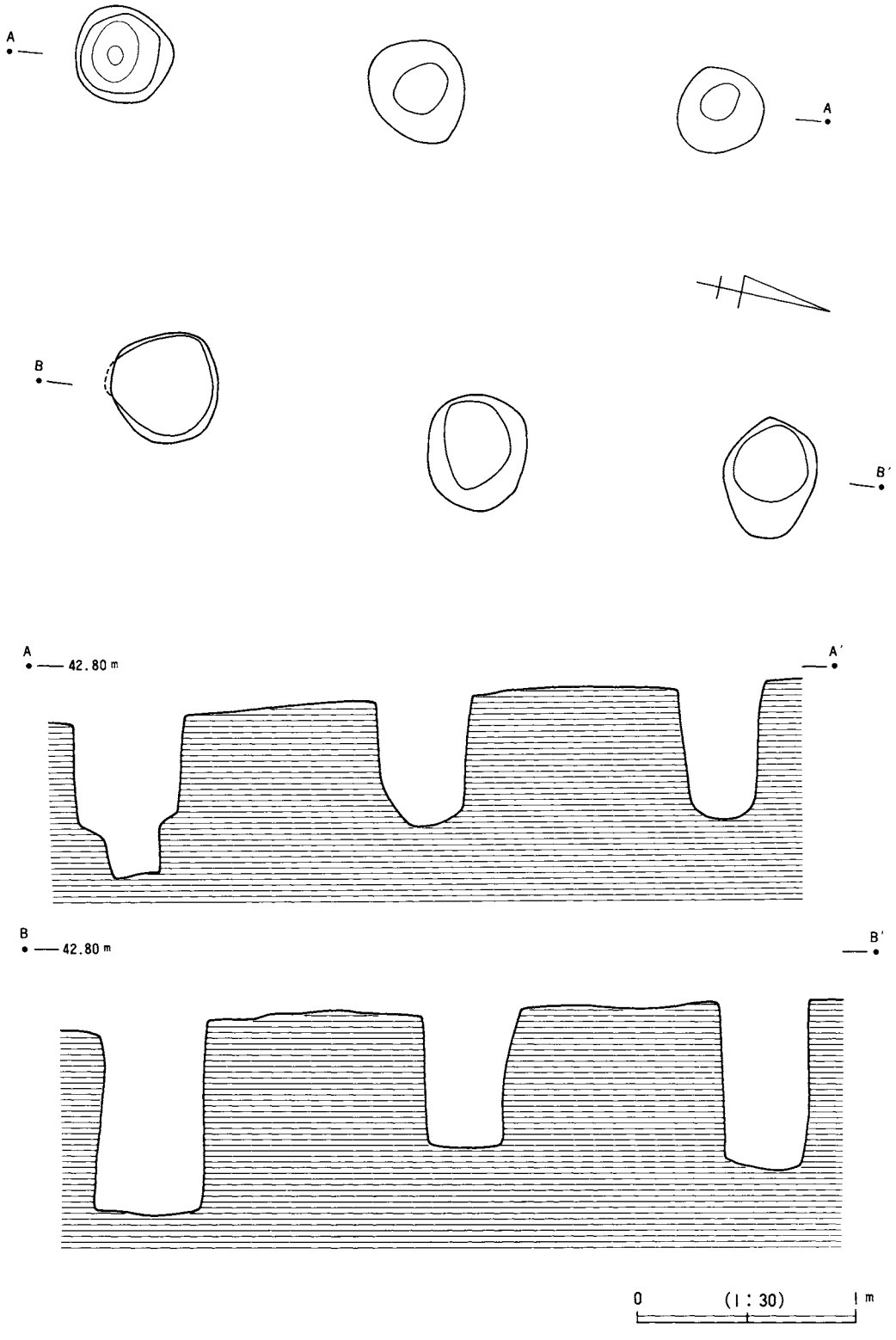
C７－32・33グリッドを主に，調査区南端の台地縁辺部に位置する遺構である。掘立柱建物址としては歪みが大き過ぎると思われるので，並列する柱穴列の可能性もある。覆土はややしまりのない暗灰色土で，出土遺物はないものの，それ程古い時期のものとは思われない。

048号址（第213図，図版97）

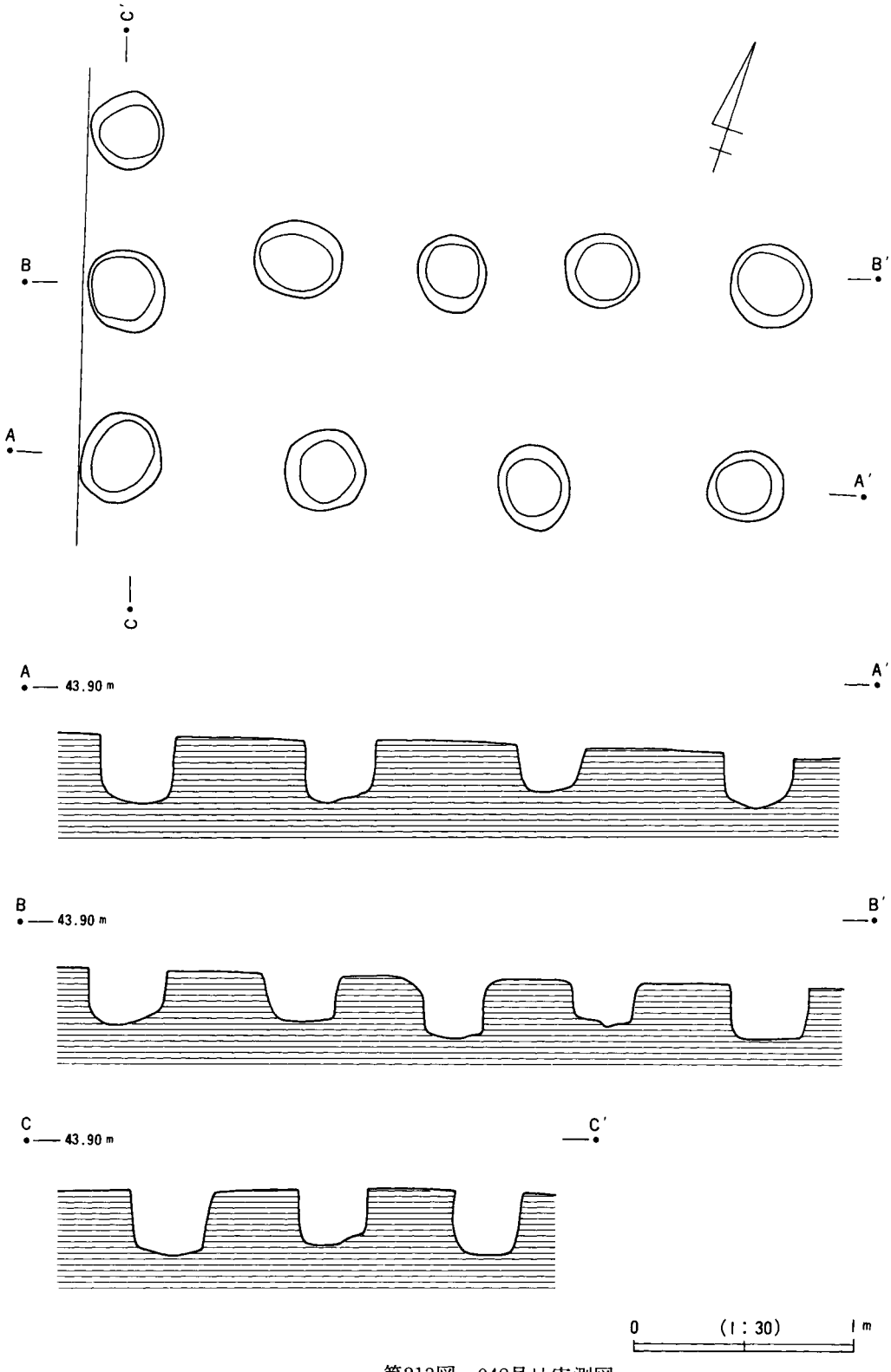
C５－44，C５－40グリッドを主に台地平坦面に位置する遺構である。047号址同様掘立柱建物址としてはピットが対応しないため，柱穴列の可能性が強い。出土遺物はなく時期は不明である。

007号址（第214図，図版98）

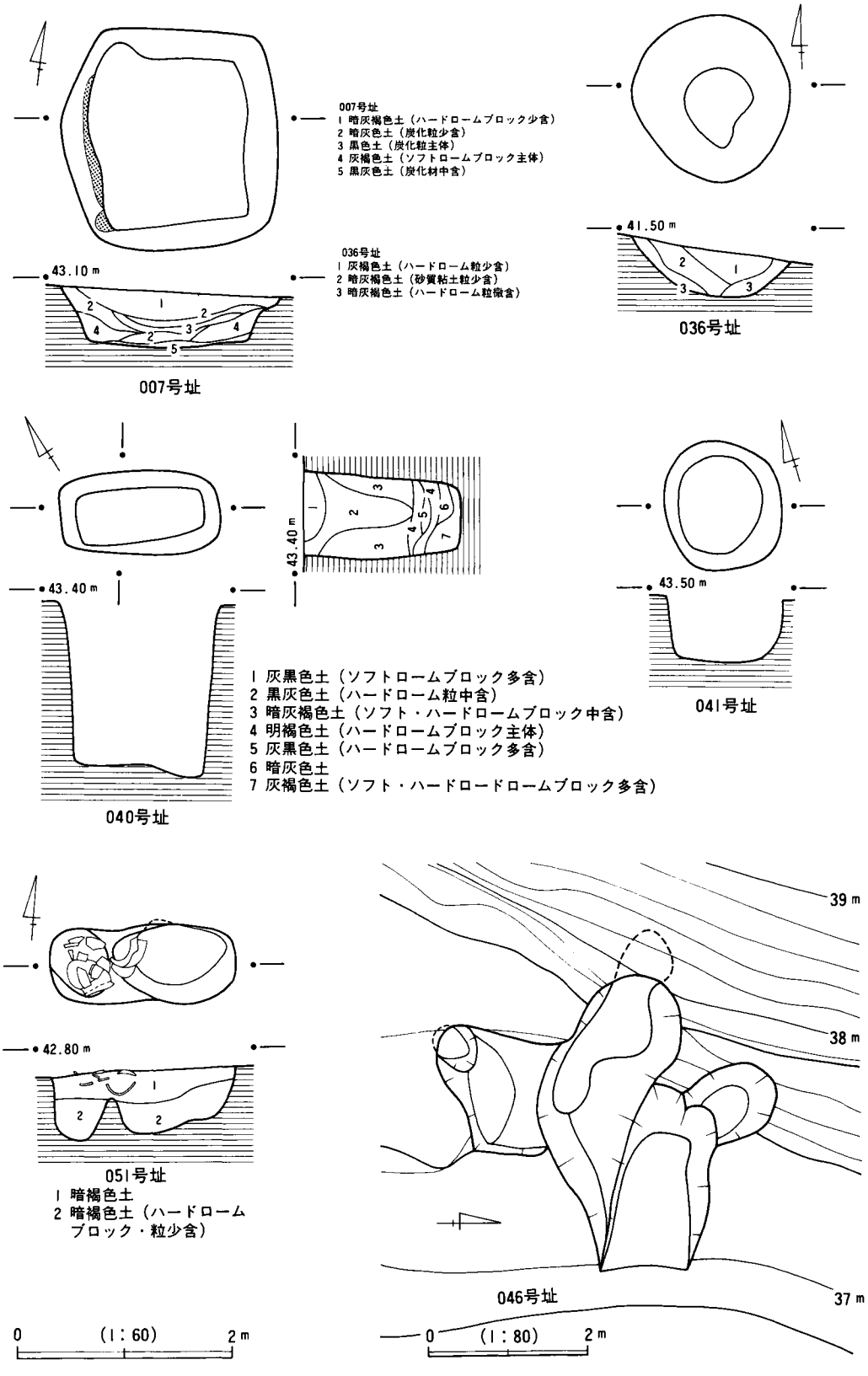
C７－31グリッドを主に位置する炭窯跡と思われる遺構である。一辺２mの方形プランで深



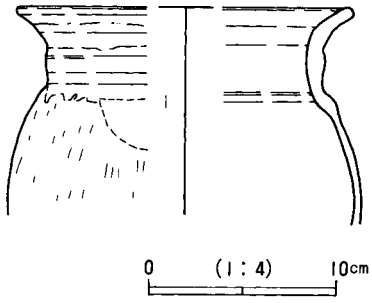
第212図　047号址実測図



第213図　048号址実測図



第214図　007・036・040・041・046・051号址実測図



第215図　051号址出土遺物実測図

さ63cmを測る。西壁下面が焼けており，底面には炭化材が認められた。時期を確定できる遺物は出土していない。

036号址（第214図）

Ｃ４－01グリッド内の斜面部に位置する土抗である。南北1.58m，東西1.50m，深さ40cmを測る。時期を確定できるほどの遺物は出土していない。

040号址（第214図，図版98）

Ｃ５－40グリッドとＣ６－10グリッドにまたがって位置する。長軸1.50m，短軸0.75m，深さ1.50mを測る。形態から陥穴状遺構と思われる。

041号址（第214図，図版98）

Ｃ７－04グリッドを主に第１テラス面に位置する。直径1.1m，深さ58cmの円形プランを呈する土抗である。出土遺物がないため時期を確定は出来ないが，第１テラス造成後の所産である。

046号址（第214図，図版98）

Ｄ６－32グリッドを主に第２テラス斜面脇にある。灰白色砂質土層を不規則に掘り込んだ落ち込みで遺構としては確定できない。しかし，掘り込みが全て灰白色砂質土層で止まっていることから，この土を掘り出すための採掘抗の可能性もある。

051号址（第214・215図，図版98）

Ｂ４－02グリッドに位置する。長軸75cm，短軸33cmの楕円形プランを呈する土抗であるが，底面で掘り込みが分かれることから，２基の土抗が重複しているとも考えられる。覆土上面から土師器甕の口縁～胴部上位の大形破片が出土している。頸部に粘土紐積みあげ痕跡が認められる。

他に第２テラス斜面脇に径1.2m前後，深さ30cm程の円形土抗状の落ち込みが４基（042・043・044・045号址）が検出されている。それぞれは形状，規模，位置等共通する点が多く，遺構と捉えれば４基とも同時期であろう。

2．グリッド出土の遺物

第2テラス（第216～218図，図版108）

1・2は須恵器坏である。2は約1/3個体を復元実測した。3～5は土師質須恵器坏であるが，5は約1/2個体を復元実測した。5の胎土は石英粒の混入が明瞭である。6・7は墨書土器土師坏である。6の墨書は「山矢大荷」と読みとれる。7は坏底部片で，字は読みとれない。8～13は土師器坏であるが，8・9はロクロ土師器，10以降は従来の技法によるものである。9は約1/2個体を復元実測した。10～13は同一の技法によるもので，いずれも約1/2個体を復元実測した。14は口縁が内傾する土師器椀である。内面底部に丹の付着がみられる。約1/2個体を復元実測した。15は土師器高坏の坏底部～脚部である。16～19は土師器甕（壺）であるが，いずれも完形ではない。18はヘラナデしている点に特色がある。20は須恵器長頸瓶肩部～胴部大破片を復元実測した。灰褐色を呈し，自然釉が斑点状に付着する。21は須恵器瓶の胴部片である。くすんだ灰青色を呈し，内面は同心円状の当て痕跡が認められる。22～24は土師質須恵器の甑と思われる各部である。胎土に白色粒子を含む点に特色がある。

1～7は土師器甕（壺）であるが，4がほぼ完形の他はいずれも破損品である。3は外面に粘土を多く付着する。

B 2グリッド（第218図，図版107）

砂岩製の砥石である。両端及び一部に自然面が残る。

B 3グリッド（第218図）

1は土師器高坏であるが，脚部を欠く。2は須恵器壺の胴部片である。胎土は灰白色を呈する。

C 5グリッド（第218図）

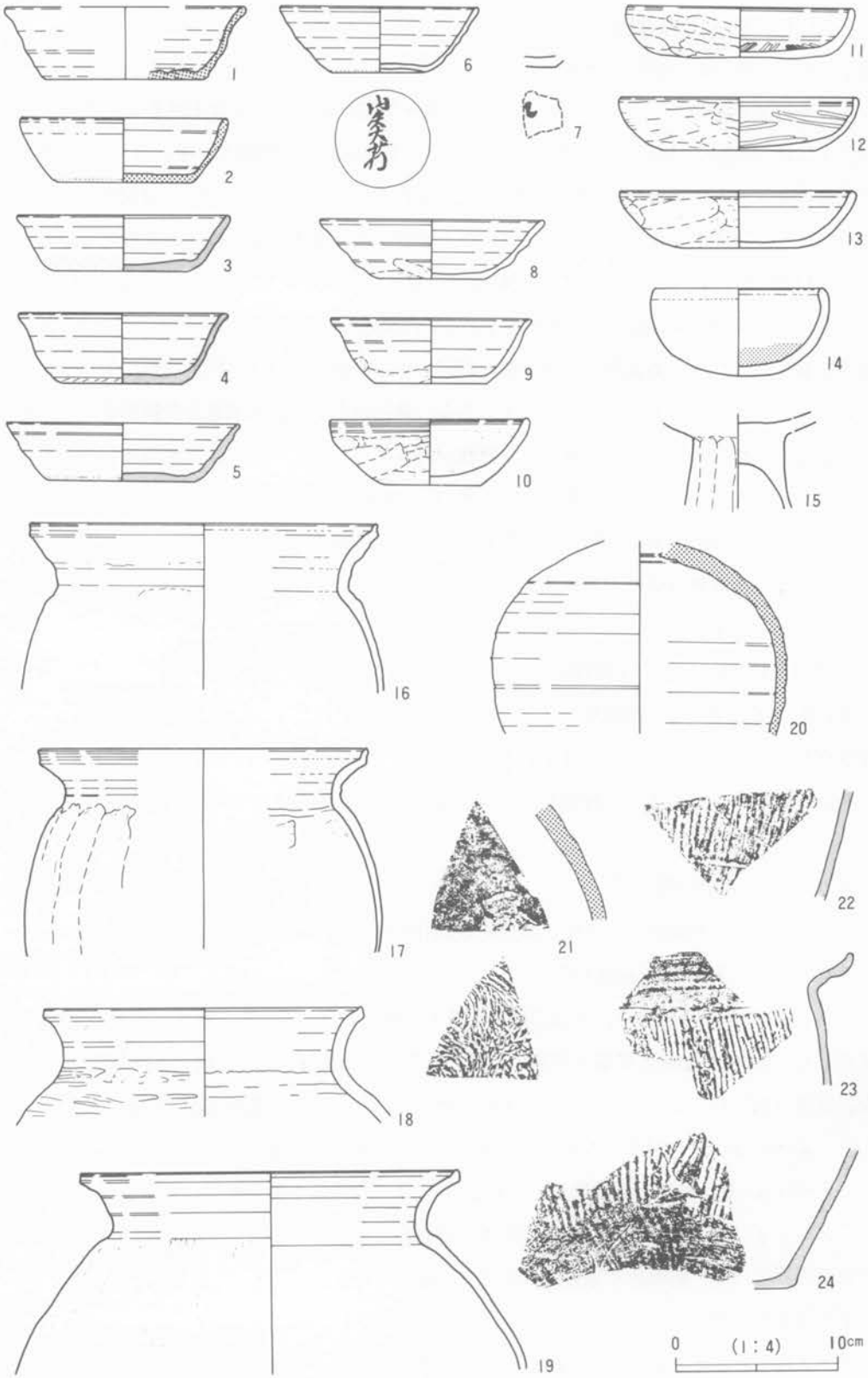
1は須恵器（灰釉陶器）長頸瓶の頸部約1/2個体である。2は須恵器瓶の胴部片である。

C 6グリッド（第218図，図版107）

1～3・9は須恵器である。1は口縁の内湾する椀である。灰白色，軟質で約1/2個体を復元実測した。031号址の椀と同質・同種のものである。2は高台付椀で，約1/2個体を復元実測した。紫黒（褐）色を呈し，混入物はほとんど認められない。3は瓶の底部大形破片を復元実測した。4・5は口縁～胴部の大形破片である。5は胴部上位を指ナデしていることに特色がある。6・7は，それぞれ土師器椀と坏である。6は約1/2個体を復元実測した。8は土師器甕底部である。9は瓶底部である。外面タタキ，内面当て整形である。若干粉質を呈する。10は土師質須恵器甑（甕）胴部片である。外面タタキ整形である。

C 7グリッド（第219）

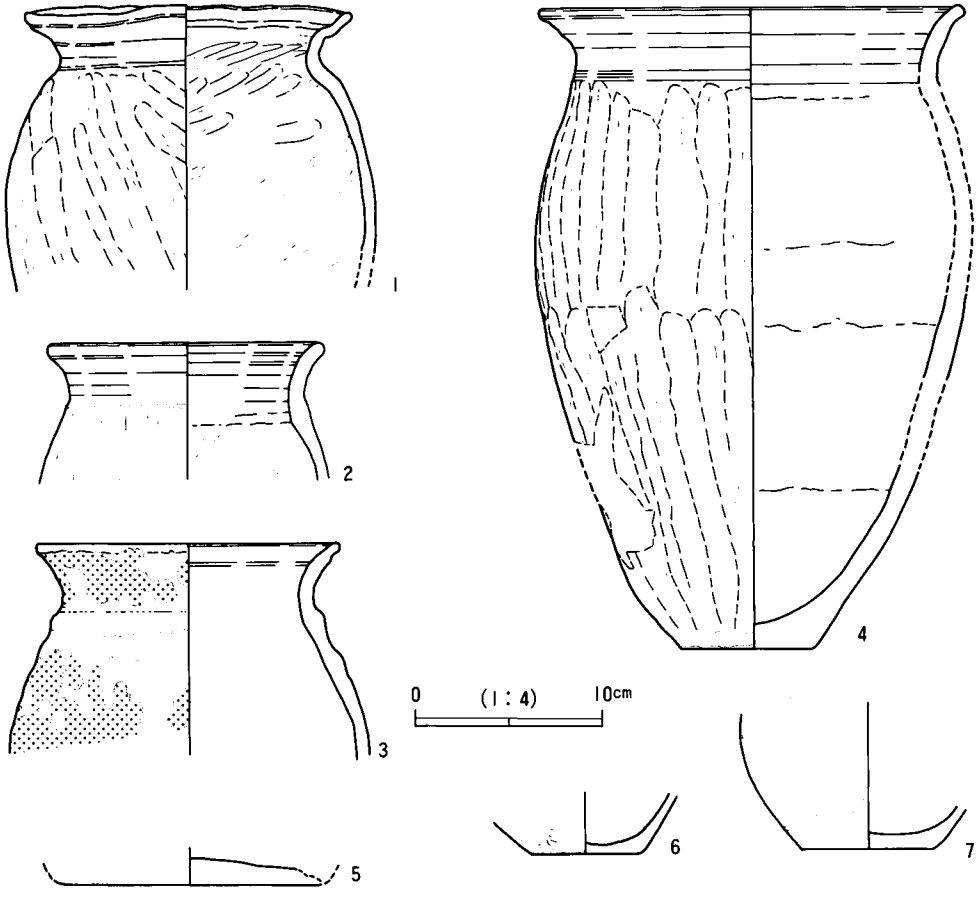
1～3は土師器坏である。1は約2/3，2は完形品である。3は底部片である。4は須恵器坏の底部で，底面に八の字状の擦痕（焼成前）がみられる。5は胴部を欠く土師器甕である。



第216図　第２テラス出土遺物実測図(1)

第2テラス（1）　　第61表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	須恵器　坏	4.0	12.6	8.4	$\frac{1}{3}$	不良	灰黒色	外面　体部ロクロナデ，底面回転ヘラケズリ 内面　ロクロナデ	
2	須恵器　坏	6.3	(14.5)	(8.6)	約$\frac{1}{3}$	石英，雲母	灰青色	外面　ロクロナデ，底面回転糸切り 内面　ロクロナデ	
3	土師器須恵器坏	3.5	13.0	8.1	完形	微砂粒	灰黒色	外面　体部ロクロナデ，下位スレ，底面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	
4	土師質須恵器坏	4.2	12.8	7.4	完形	微砂粒	暗褐色	外面　ロクロナデ，体部下位，底面手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	
5	土師質須恵器坏	3.5	(14.1)	8.7	約$\frac{1}{2}$	砂粒（石英粒）－多	暗灰黄色	外面　体部ロクロナデ，底面回転ヘラ切り 内面　ロクロナデ	
6	土師器　坏（墨書土器）	12.1	5.8	4.0	完形	砂粒	明赤褐色	外面　体部ロクロナデ，底面回転糸切り 内面　ロクロナデ	
7	土師器　坏（墨書土器）				砕片	微砂粒	明黄褐色		
8	土師器　坏	3.9	(12.3)	6.9	約$\frac{2}{3}$	微砂粒	黒褐色	外面　体部ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	
9	土師器　坏	3.7	(13.9)	6.7	約$\frac{1}{2}$	微砂粒	明黄褐色	外面　体部ロクロナデ，下位手持ちヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面　ロクロナデ	
10	土師器　坏	4.1	12.2	11.0	約$\frac{1}{2}$	並	褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ，体部指ナデ	
11	土師器　坏	3.1	13.8	10.5	約$\frac{1}{2}$	微砂粒	赤褐色	外面　体部ヨコナデ，体部ヘラケズリ 内面　体部ナデ，下位ヘラナデ	
12	土師器　坏	3.5	14.3	8.2	約$\frac{1}{2}$～$\frac{1}{3}$	微砂粒	黄褐色	外面　口辺部ヨコナデ，体部ヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，体部指ナデ	
13	土師器　坏	3.3	14.6	9.3	約$\frac{1}{2}$	並	黒褐色	外面　体部ヨコヘラケズリ，底部ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ，体部ナデ	
14	土師器　甕	5.2	(10.2)		約$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{4}$		明黄褐色	外面　口辺部ナデ，体部ヘラケズリ 内面　口辺部ナデ，体部丁寧な指ナデ	
15	土師器　高坏				坏底部～脚部		明黄褐色	外面　坏部ナデ，脚部ヘラケズリ 内面　坏部指ナデ，脚部指ナデ	
16	土師器　甕		19.4		口辺～胴部上位約$\frac{1}{3}$	微砂粒	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，体部上位ヘラミガキに近いヘラナデ 内面　ロクロナデ，ヨコヘラナデ	
17	土師器　甕		21.2		約$\frac{1}{2}$　弱	砂粒	黄褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデに近いヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位丁寧な指ナデ	
18	土師器　壺		23.2		約$\frac{1}{2}$	砂粒	明黄褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ後軽いヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位丁寧な指ナデ	
19	土師器　甕		(20.2)	胴部最大径(22.0)	約$\frac{1}{3}$	砂粒－多	外面　黒褐色 内面　赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラケズリ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部上位指ナデ，一部ヘラケズリ	
20	須恵器　瓶					微砂粒	灰褐色	外面　灰釉が斑状になる	
21	須恵器　瓶				破片	良	灰青色	外面　ロクロナデ 内面　同心円状の当て	
22	土師質須恵器甑				口縁部片	白色粒子　砂粒混入	赤褐色	外面　口辺部ロクロナデ，胴部タタキ 内面　口辺部ロクロナデ，胴部指ナデ	
23	土師質須恵器甑				底部片	白色粒子	外面　黒褐色 内面　赤褐色	外面　胴部上位タタキ，下部ヘラケズリ 内面　剥落のため不明	
24	土師質須恵器甑				胴部片	白色粒子	外面　黒褐色 内面　黄褐色	外面　タタキ 内面　指ナデ	

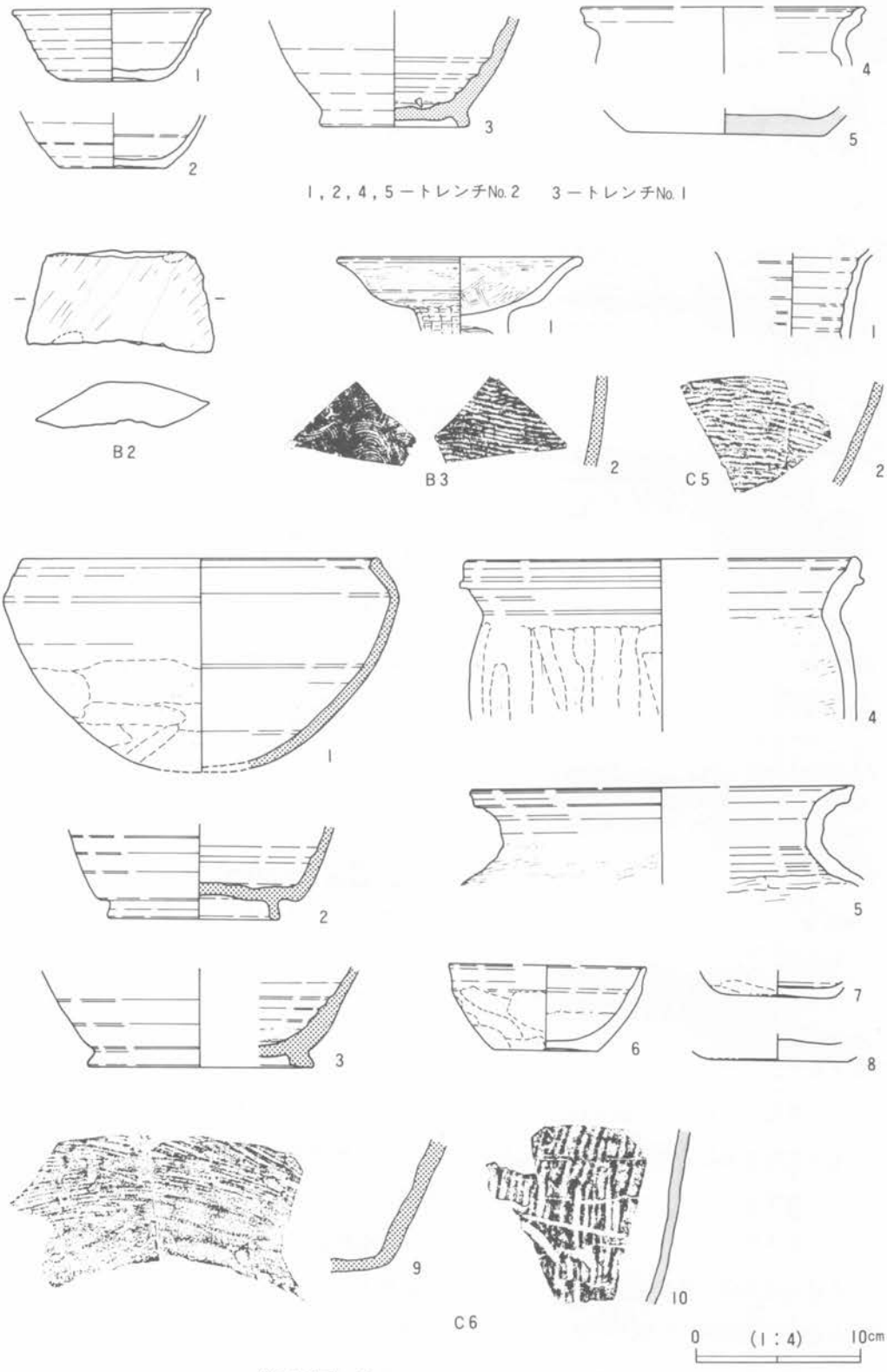


第217図　第２テラス出土遺物実測図(2)

第２テラス（２）

第62表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 甕		16.9	胴部最大径 19.3	口縁～胴部 完形	砂粒	赤褐色～黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部ヘラケズリ後ヘラナデ 内面 口辺部ヘラナデ，胴部ヘラナデ	
2	土師器 甕		14.1	頸部 12.3	胴部中位以下欠	微砂粒－多	外面 赤褐色 内面 褐色	外面 口辺部ナデ，胴部ヘラナデ 内面 口辺部ナデ，胴部ヘラナデ	
3	土師器 甕		(15.8)	胴部最大径 18.9	約$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{2}$	砂粒	赤褐色	外面 口辺部ヨコナデ，胴部上位ヘラナデ 内面 口辺部ヨコナデ，胴部上位剝落のため整形不明	
4	土師器 甕	33.2	22.0	7.0	約$\frac{2}{3}$	砂粒	外面 黒褐色 内面 黄褐色	外面 口辺部ヨコナデ，胴部タテヘラケズリ 内面 口辺部ヨコナデ，粘土紐痕跡	
5	土師器 甕			14.0	底部のみ	砂粒	外面 暗赤褐色 内面 黄褐色		
6	土師器 甕			5.8	胴部下位～底部	砂粒	明黄褐色	外面 底面摩耗著しい 内面 剝落著しい	
7	土師器壺（甕）			7.1	底部～胴部	砂粒－多	黒褐色	外面 胴部ヘラナデに近いヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面 指ナデ	



第218図　第２テラス・グリッド出土遺物実測図

B-3

第63表

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
1	土師器 高坏		14.7		脚部大部分欠		黄褐色	外面 坏部指ナデ，脚部ヘラケズリ後指ナデ 内面 坏部指ナデ	
2	須恵器 壺				胴部片	灰白色	外面 青灰色 内面 明青灰色	外面 タタキ 内面 同心円状の当て	

C-5

第64表

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
1	須恵器長頸瓶				頸部片	灰白色，精良	外面 明灰赤色 内面 明灰色	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	
2	須恵器 瓶				胴部片	青灰色	明灰色	外面 タタキ 内面 同心円状の当て	

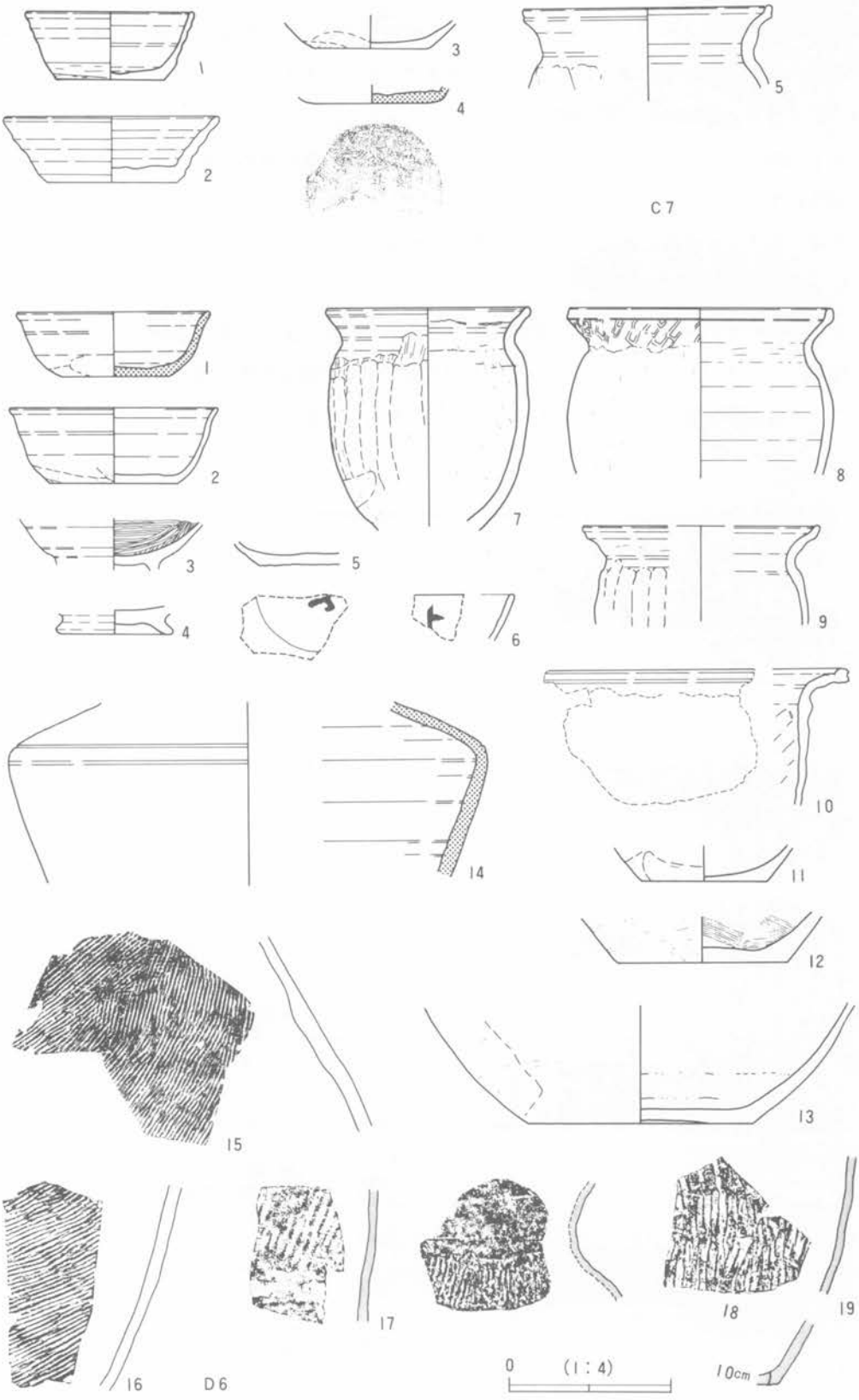
C-6

第65表

挿図番号	器種	法量			遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
		器高	口径	底径					
1	須恵器 椀	12.6	21.4		約½	若干粉質，灰白色	灰白色	外面 口辺部～体部上位ロクロナデ，体部下位ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	
2	須恵器 高台付椀			10.1	約½	砂小石の含有ほとんどみられず	紫黒褐色	外面 下位ロクロナデ，底部回車糸切りロクロナデ	
3	須恵器 瓶			(13.5)	約⅓	灰褐色，小石の混入みられず	外面 黒色 内面 灰褐色	外面 下位ロクロナデ 内面 下位ロクロナデ	
4	土師器 甕			(23.4)	約⅓～¼	微砂粒	黄褐色～黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，上位ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，上位指ナデ	
5	土師器 甕			(22.8)	約⅓～¼	微砂粒	明黄褐色	外面 口辺部ロクロナデ，上位指ナデ 内面 口辺部ロクロナデ，上位ヘラナデ	
6	土師器 椀	5.0	12.1	6.4	約½	砂粒－多	明黄褐色	外面 口辺部ヨコナデか？体部ヘラケズリ 内面 口辺部ヨコナデ又はロクロナデ体部指ナデ，底部一方向手持ちヘラケズリ	
7	土師器 坏			6.8	底部			外面 体部下位ヘラケズリ底面一方面ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	
8	甕			8.6	底部	微砂粒	外面 赤褐色 内面 明黄褐色	外面 底部多方向手ちヘラケズリ	
9	須恵器 瓶				胴部～底部片	白色若干粉質	外面 灰色 内面 灰黒色	外面 タタキ 内面 当て	
10	土師質須恵器甑(甕)				胴部片	白色微粒子	茶褐色	外面 タタキ 内面 指ナデ	

D 6グリッド（第219図，図版107）

1は須恵器坏である。口縁～底部片を復元実測した。胎土に石英粒を含む点に特色がある。2は土師器坏である。約1/2個体を復元実測した。3は土師器高台付椀である。口辺部と底部端を欠く。内面をいぶしをかけている。4は土師器高台付の底部である。5・6は墨書土器であるが，土師器坏の底部片と口辺部片で，共に字の全容を把握できない。7～12は土師器甕である。8は口辺外面に格子状のタタキを施している。焼きのよい土器である。11は坏底部の可能性もある。内面にタール状の物質（油煙か）の付着がみられる。12は土師器壺であろうか。14は須恵器瓶の胴部片である。胎土に小石を含み，外面に降灰がみられる。15・16は須恵器瓶の



第219図　グリッド出土遺物実測図(1)

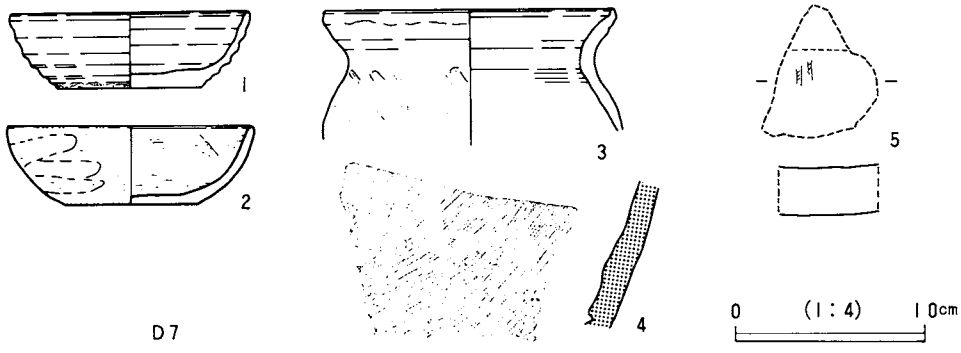
胴部片である。共に外面タタキ，内面ヘラナデ整形であり，同一個体かと思われる。17～19は土師質須恵器甑又は瓶の破片である。同一個体ではないであろう。

Ｄ７グリッド（第220図，図版107）

No.１・No.２は土師器坏である。それぞれ1/2・1/3個体を復元実測した。３は土師器甕で口縁～胴部約半個体である。４は須恵器瓶の胴部片である。５は平瓦の破損品である。胎土は砂粒を多量に混入し，表面は縄のタタキ目が残り，裏面は平滑である。青褐色を呈する。

トレンチ出土遺物（第218図）

１・２トレンチは第２テラスの確認調査時の名称である。１・２は土師器坏である。１は約1/2個体，２は口辺部を欠く。３は灰釉陶器壺底部である。青灰白色を呈し，石英粒を若干混入する。４は土師器甕の口辺部片である。５は土師質須恵器瓶底部である。



第220図　グリッド出土遺物実測図(2)

C-7　　第66表

挿図番号	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	遺存度	胎土	色調	整形・調整	出土層位
1	土師器 坏	4.2	(10.1)	6.8	約$\frac{5}{6}$	砂粒	明黄褐色	外面 ロクロナデ，体部下位回転ヘラケズリ，底面静止糸切り後周辺回転ヘラケズリ 内面 ロクロナデ	
2	土師器 坏	4.0	13.2	8.1	完形品	砂粒	暗灰色	外面 体部ロクロナデ，下位回転ヘラケズリ，底面回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ	
3	土師器 坏			7.0	$\frac{1}{2}$	微砂粒	黄褐色	外面 体部下位ヘラケズリ，底面多方向手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	
4	須恵器 坏			9.0	$\frac{1}{2}$	砂粒	明灰色	外面 底面一方向手持ちヘラケズリ 内面 ロクロナデ	
5	土師器 甕		15.0		約$\frac{3}{4}$		黒褐色	外面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラケズリ 内面 口辺部ロクロナデ，胴部上位ヘラナデ	

第3節　まとめ

第1項　旧石器時代

該期の遺構には第1礫群と第2礫群が検出された。特に第1礫群は多量の礫と共にナイフ形石器2点，削器2点，R－fl 1点，楔形石器1点，石核29点，剝片24点，及び原石13点が出土している。出土レベルは全てソフトローム層上位で，礫群と同レベルである。石器と礫群は同時期の遺物であるが，石器自体がまとまる傾向が強いところから，それ自体が石器製作跡のような性格をもつものであろう。

第1・第2礫群共に，総量は10：1程の差があるものの，チャート，砂岩，流紋岩類（流紋岩・石英斑岩）が94％前後を占めている。流紋岩類は鬼怒川水系に属することから，他の礫の大部分も同水系に属するものと思われる。

第2項　縄文時代

縄文時代の遺物は他の時期に比してわずかであり，遺構も検出されなかった。出土した遺物は土器が主体で，なかでも条痕文系土器の子母口式土器が全体の75％を占めている。それに次ぐものは撚糸文系土器であるが，比率は7％と一段下がる。田戸下層式土器を含めた早期土器は全量のほぼ9割の出土量にのぼった。

早期の大規模な遺跡は，内陸部，利根川水系と九十九里浜に注ぐ木戸川・栗山川両水系との分水界地域に多いことが知られている。これらの下流に目を転じると，利根川沿いの地域には西之城貝塚を始め，著名な遺跡が存在するものの，木戸川・栗山川下流域では早期の遺跡の少ない地域であった。

今回，当遺跡で早期を中心とした遺物が検出されたことは，この分布密度の薄かったこの地域での早期遺跡の再検討をする必要がありそうである。

縄文土器は総数で816点が出土した。遺構に混入して出土したものが大半である。なお包含層としての調査は行っていない。

第Ⅰ群土器としたものは撚糸文系土器である。総数60点と点数は少ないが，ほぼ全域で出土している。主体は6割を占める夏島式で，次いで井草式・花輪台式がほぼ同量でみられる。稲荷台式の明確なものは出土していない[(1)]。注目されるのは，頸部にあたる部位に絡条体圧痕を持ち，胴部に撚糸文と斜縄文が帯状に施文される第117図9・10の例で，11・12も含め花輪台式の一変種として，位置づけが問題となるであろう[(2)]。

第Ⅱ群土器は田戸下層式土器に位置づけられるもので，49点の出土である。第Ⅰ群土器と同様のまばらな分布状況を示している。田戸下層式の内でも，太沈線や細沈線で文様を構成する

類である。

最も出土量の多いものが第III群土器，条痕文系土器である。総数615点と出土総量の2/3を占めている。分布的にはＢ４・Ｃ４グリッド以南，特にＢ５・Ｃ６グリッドに集中的にみられる。口縁部に絡条体圧痕文や刺突文等を有し，器面が浅い擦痕の施されるか無文となる“子母口式土器”が圧倒している。明瞭な貝殻条痕文を有する例は少量である。

当遺跡での子母口式は，刺突文の施されるものの比率が高く，それに絡条体圧痕文，細沈線のものが若干加わっている。文様が口縁部に集中されるため，有文の破片は７％ほどと少なく，無文あるいは擦痕の施される胴部片が多いことが特徴の一つである。

この類で若干注意したいものは，深い連続刺突文を有する第120図６・７の例である。連続円形刺突文の施される一群の土器は，佐倉市タルカ作遺跡で摘出されているが[(4)]，当遺跡の例と関連性が気になるところである。

第IV群土器は前期繊維土器で，関山式と黒浜式が含まれる。計41点と出土量は少ない。分布域はＣ６・Ｄ６グリッドであった。

第Ｖ群土器には前期末浮島式土器３点，中期加曽利ＥＩ式１点が含められる。前者はＣ７グリッド，後者はＣ４グリッドからの出土である。

第VI群土器は後期の土器で47点が出土。Ｂ４・Ｃ４グリッドが主な分布域である。加曽利Ｂ式が大半である。

注

（１） 遺構外の包含層が調査されれば，この出土比率は異なってくるだろう。稲荷台式の確実なものも出土するのではなかろうか。

（２） 富里町金堀遺跡出土品をもとに，篠原　正氏は「金堀式土器」を提唱している。成田市空港№６（木の根）遺跡では，同意匠の例が多数出土した。

篠原　正　「北総台地における縄文時代草創期後半について」『千葉県の歴史』17　1979年

宮　重行他『木の根』　千葉県文化財センター　1981年

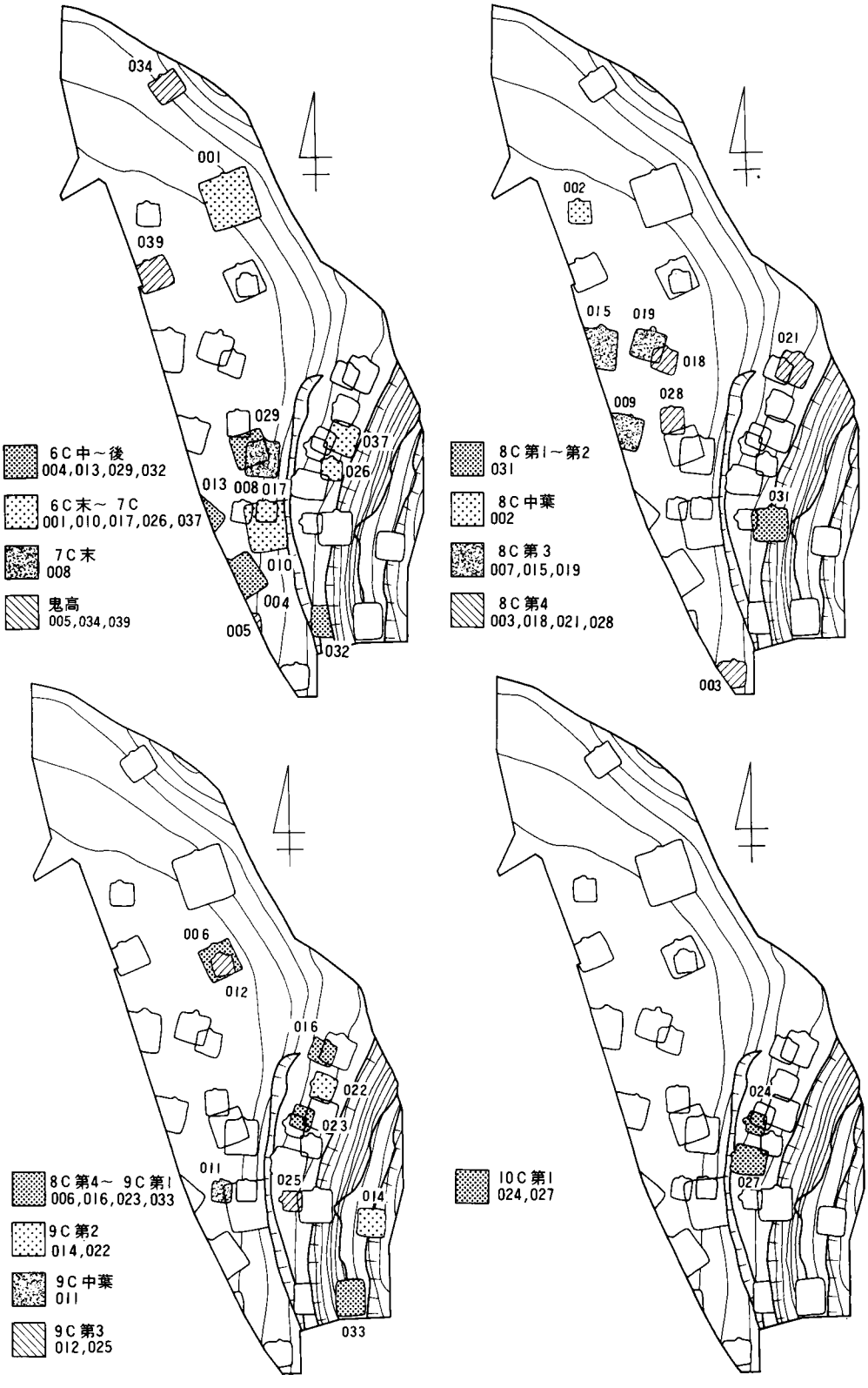
（３） 田村　隆　「タルカ作遺跡第III群第１類土器の諸問題――子母口式土器の成立――」『佐倉市タルカ作遺跡』千葉県文化財センター　1985年

第３項　古墳時代・歴史時代

１．遺構

本遺跡は，三方を支谷で画された台地の平坦面から斜面にかけての範囲を調査対象とし，古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡を33軒検出した。住居跡の位置は台地平坦面と斜面の削平造成面（テラス）とに二分されている。

第221図は，住居跡出土遺物から個々の住居跡の年代を推定し，25～50年単位での住居の変遷



第221図　時期別住居跡分布図（1：1.000）

を表わしたものである。この図をもとにいえば(あくまでも調査区域内での変遷)，まず調査区内で最も古い住居跡の一群は004，013，029，032号址の4軒で6C中葉～後葉の時期である。調査区南端の台地縁辺に集中する傾向がある。032号址は第1テラス造成時に破壊されている。

次に6C末～7C初にかけては001，010，017号址（010号址より新しい），7C代には026，037号址がある。前者のグループは前期同様台地縁辺部に建てられているが，後者は第1テラスに初めて建てられた住居跡となる。しかし026，037号址ともに遺構遺存度がよくなく，しかも出土遺物が僅少なことや，次に住居が建てられるのが8C初となることから，7C代としても新しい時期かもしれない。7C末の008号址，鬼高期の034，039号址も平坦面から縁辺にかけて建てられている。

8C代前半に入ると031号址が第1テラスに建てられる。ただ，中葉(002号址)，第3四半期（009，015，019号址）は前代と同様平坦面に建てられる。再び第1テラスに建てられるのは第4四半期から9C第1四半期（003，006，016，018，021，023，028，033号址）で，033号址は第2テラスに進出する。しかし台地平坦面にも引き続き建てられる。9C第2四半期は第1テラスに022号址，第2テラスに014号址が建つ。平坦面の011号址も併存した可能性はある。9C第3四半期には平坦面（012号址），第1テラス（025号址）と分かれる。

10Cに入ると第1テラスの024，027号址のみとなり，以後調査区内では住居は建てられなくなった。

以上，25～50年単位で調査区内の住居の変遷をみてきたが，台地縁辺の限られた範囲で，台地上（調査区の西方）の集落との関係や，調査区外に拡がる斜面部帯状平坦面（現況で確認可能）との繋がりを無視した記述に問題があるが，調査区内でみる限り25年単位の時間幅では2軒前後の竪穴住居で構成された散居形態の集落遺跡であるようだ。

では，このような形態の集落遺跡で，台地上の平坦面をわざわざ避けて斜面にテラスを造成して，集落の一部を構成する住居に住んだ人々は何を生活基盤としたのであろうか。まず，支谷内の低地との関係は、特に調査区で顕著であるが，第2テラスと低地面との比高差は20m以上あり，斜面も急なことから，この方面との関係は薄いと思われる。どちらかといえば，台地上との関係が強いようである。西山太郎氏は台地上を積極的に畑作耕作するために住居を斜面に移したと提示されている。(1)

また，テラス部の住居跡の形態や出土遺物をみる限り，工房的な性格は感じられない。しかし，後述するように各地（周辺地域が特に多いが）の窯で焼かれた須恵器製品が多く流入していることは，周辺の集落との隔絶性は考えにくく，体制外の集落ではなかったと思われる。

さらに本遺跡の周辺には大規模な後期古墳群が多く，遅くとも古墳時代から開発の盛んな地域であり，本遺跡も古墳時代後期から奈良・平安時代に続く集落遺跡であることからも体制内的な集落であったと思われる。

テラス部に住居が建てられたと同時期の集落遺跡が台地平坦面に存在していたかどうか，現状では不明の段階で，これ以上の事柄について言及出来ないが，少なくとも低地との関係よりも台地上の集落あるいは開発余地との関係が強かったことはいえるであろう。

註

（1） 西山太郎 1984 「台地斜面に立地する住居跡群の意味と三つのパターン」『研究連絡誌』第9号 （財）千葉県文化財センター

2．遺物

出土した遺物は，土師器，須恵器，灰釉陶器，瓦，土製支脚，紡錘車，鉄製品，製錬滓，軽石，磨石状石器等であるが，この内，土師器，須恵器が遺物の中心を占めている。

土師器は，坏，甕を主とし，これに鉢，甑，椀，皿，高坏等が加わる。一方，須恵器は破片が多く，器形も特定できるものが限られており，また，時期によって消長がはっきりしている。すなわち，古墳時代においては，坏，甕が多く，瓶，甕，壺等は少ない。しかし，奈良時代以降は，坏，椀を主に，小形の瓶，壺を伴うようになり，大形の甕（瓶）は次第にみられなくなる。

これら各器形の名称は，もちろん現在の器形概念から与えられたもので，当時における名称ではない。それゆえ，奈良時代以降の文献にみられる土師器，須恵器の器形と単純に対応させることはできない。そのことは，用途の研究を進める上で大きな障害となっている。多くの人にとって，その土器が何に使われたかということが最も知りたいことであろう。それゆえ，各器形を観察し，用途についての手掛かりとなるべき留意点を簡単に記してみよう。

土師器の坏，椀，皿の各器形には，内面にヘラミガキを加えた後，いぶしをかけて黒色に仕上げたものがある。黒色土器，あるいは，内黒土器と呼ばれている土器で，鬼高期における高坏と，国分期における高台付椀（皿）は，この代表的なものである。ヘラミガキのみを施し，いぶしをかけないものは鬼高期の坏には普通にみられるが，逆の場合はない。そのことは，いぶしをかけることがヘラミガキをする。つまり，表面をなめらかにする行為と密接に結びついていることを示すものであろう。いぶしをかけ，炭素を吸着させることは，耐水性を増すためであるという意見がみられる。しかし，水を入れてみてもその吸着の速さはそれ程かわらない。むしろ，なめらかにした表面を補強する意味があったと考えたい。これは水洗いをすることと関連するのであろうか。

甕は甑と一体になり，煮沸容器であると考えられている。確かに，本遺跡においても甕の多くは外面にススの付着がみられ，内面は湯だまりのような白い泡状の物質がよく認められる。また，胴部下位の破損品が多いのも示唆するところがあろう。セットとなる甑が，奈良時代以降に須恵器，あるいは，土師質須恵器に限定されていく傾向は甕の器壁がますます薄く，大量

生産，消費されていった状況と一致するところがある。そこには，目的に見合った土器の生産が一段と進んだことを示しているのではなかろうか。

須恵器は，その出土する器形に一定の傾向がある。数量的に少ない古墳時代はさておき，奈良時代以降，坏－皿－椀－鉢－高台付坏－瓶－壺（甕）というようにひととおり出土はするがこのうち，坏と瓶（長頸瓶）がそのほとんどを占めている。

一方，土師質須恵器は，坏，甕，甑にほぼ限定されるといってよい。須恵器，土師質須恵器両者の違いは，その器種の点からみて，相違がある。須恵器における瓶，壺，土師質須恵器における甕，甑はその端的な例である。土師質須恵器の出現した奈良時代の後半以降，須恵器と土師質須恵器の間には，相互に補完関係が存在したことを示しているのだろう。その土師質須恵器は，一般に須恵器より胎土が軟質であり，坏を除いては器壁も厚い。それでも，瓶や甑の場合は大量に生産，消費されており，両者が普通の集落における日常生活用品として使われたことを物語っている。その用途が明確な甑は問題ないが，瓶は或は水汲み用としてよいであろうか。

一方，須恵器の瓶，壺は，胎土が粗悪では用をなさなかったものとみられ，その絶対量の少なさと相まって，水注や容器，或は，各種の行事用としての性格を有するものであったろう。この点は灰釉陶器において顕著にあらわれている。

以上，気の付いた点を述べてきた。遺物として，土師器甕につぐ坏についてふれえないのが残念である。

灰釉陶器は，(長頸)瓶と，段皿を図示しているが，もちろん，破片では他の器種も出土している。ただ，その器形は，長頸瓶や坏，それに皿，壺がわずかにみられる程度である。

瓦は，平瓦の破片2点のみである。細片ではあるが，いずれも9世紀代の所産とみてよいだろう。

土製支脚や紡錘車については，いずれも鬼高期の所産と思われ，特別に言及することはない。

鉄製品は，鎌，手鎌，刀子，鉄鏃，鉄釘であり，一般の集落址で出土するものといえよう。また，018号址における出土状況は，住居の廃棄時に伴うものといえる。

製錬滓は，集落内における小鍛冶の存在を予想させるものであるか。調査区域においては検出しえなかった。

最後に，須恵器についての観察結果を記しておこう。しかし，その破片の多くが遺構に伴わず，また，重複や覆土中の遺物が多いので厳密にいえば，時期判定等，資料操作に難点がある。それでも，その特徴からいくつかのタイプ別に分類が可能であり，その結果から若干のコメントを述べておきたい。

まず，本遺跡より出土した須恵器と，色調，胎土等からタイプ別に分類し，合わせてその器種を表にしてまとめてみた。それによれば，A～G，計7タイプの存在が認められた。

第67表　須恵器タイプ別分類表

タイプ	胎　　土	色　　調	器　　形
A	混入物がほとんど見られず，胎土は軟質	灰白色。一部は灰青色，明灰赤褐色	坏，高台付坏蓋，鉢
B	混入物はほとんど見られないが，一部に長石粒(礫)も含む	黒色～灰黒（褐）色	（長頸）瓶，（壺，甕）
C	石英，長石粒，または雲母片混入	（暗）灰青色	坏，広口瓶
D	白色微粒子若干混入，まれに長石粒も含む	灰色～黒褐色	坏，蓋 (長頸)瓶，壺
E	白色微粒子，黒色微粒子混入	黒褐色～灰褐色，灰青色	坏，瓶，甑
F	白色微粒子，雲母状微粒子混入	明灰色	坏，(広口）瓶
G	砂粒（石英，長石粒）礫混入	灰青褐色～黒青褐色（一部赤褐色）	坏，瓶，甑

Aタイプは，多く色調が灰白色を呈し，胎土が軟質という特徴を有し，従来から静岡県湖西地方の製品といわれている一群である。本遺跡では，031号址の鉢がその代表的な例であり，図示はしなかったが，034号址でも粗大片が出土している。破片を入れても僅かに10片足らずである。なお，時期的に近い006，008号址では認められなかった。

Bタイプは，胎土に混入物がほとんどみられず，灰色～黒褐色を呈し，比較的焼きのよい製品である。C 6グリッド 3，D 6グリッド14はその代表的なものであるが，出土量は少ない。

Cタイプは胎土に長石の他に石英を含み，また，雲母片を含んでいるものをとりあげた。第2テラス，出土の第216図 2はその代表的なものであるが，D 7グリッド 4もあげることができる。前記A・Bタイプと同様，出土量は少ない。

Dタイプは，灰色～灰青黒色を呈するものが多い。胎土に混入物が少なく，比較的質の良い製品である。市原市永田・不入（あるいは石川窯）窯産と推察される一群である。018号址 1，C 6グリッド 2はその代表的なものである。

Eタイプは，白色，黒色微粒子を含み，若干軟質である。個体差があり，色調も，黒褐色～赤褐色のものまである。003号址 1，015号址 2などがその代表的なものである。

Fタイプは，胎土に雲母状微粒子を含み，明るい色調を呈するものが多いが10片足らずの少量である。

Gタイプは，砂粒を多く含み，くすんだ色調（赤褐色・灰褐色）を呈し，一見して粗悪な感を与える点に他と異なる明確な違いがあり，識別が容易である。また，本遺跡では最も出土量が多いのに比し，出土する器形は単純で偏っている。富里町吉川窯（あるいは同系統の窯）産

と推定される一群である。

さて，以上の観察結果からどのようなことがいえるであろうか。８Ｃの初めに東海東部産の須恵器が認められることは既に指摘されている。その特徴のいくつかは明確に他と識別できるものがあり，この期における特徴的な須恵器である。ただ，永田産の須恵器の一部にも類似の特徴を有するものがあり，古いもの（14号窯）ほどその傾向がみられる。とはいえ，永田産の場合は，スコリアを含み，多少の（赤）褐色を帯びている。本遺跡より出土したＡタイプの内の何点かは或いは永田産の可能性があることを指摘しておこう。

８Ｃの前半は本遺跡の集落が一次途切れる（少くとも調査区域では）時期で，破片でもその頃と思われる須恵器はほとんどみられなかった。

８Ｃの後半に至り，集落が再び展開するに及び，須恵器も多く持ち込まれている。まずＤ～Ｆタイプが，次いでＧタイプが加わるようになる。永田・不入産須恵器は，県内各地において同窯産と推定されるものが出土しており，製品の広がりを知ることができる。その理由はもちろん質の良さにあり，現在のところ８～９Ｃ代において同窯産をこえる在地製品は見当らない。その意味で，本遺跡への搬入は当然といえよう。Ｅ，Ｆタイプははっきり産地が特定できない。強いて言えば，Ｅタイプが永田，不入（あるいは石川）窯の良品，Ｆタイプが中原・宇津志野窯産ということになる。

Ｂ・Ｃタイプは県外からの搬入品であるが，茨城南部産と推定されるＣタイプは，下総各地において，８Ｃ前半から出土例があり，本遺跡の場合もその一例としてよいであろう。ただ，その地理的条件のゆえであろうか，出土量は少ない。

９Ｃの後半，永田，不入産須恵器と一部並行しながら，その終わりから９Ｃの中頃まで，盛んに本遺跡にもちこまれたのはＧタイプ，すなわち富里町吉川窯系統産と推定される一群である。この製品は本遺跡のみならず，周辺の遺跡でもかなりの出土例があり，多量に供給されたことが窺われる。その器形が，需要の多い坏，瓶，甑などの日常生活用品に片寄っていることは，千葉市内における中原・宇津志野窯産須恵器と同様であるが，８Ｃの終わりから９Ｃにかけてこのような製品を供給する窯が県内各地に築かれていたことはもはや明瞭である（八日市場市八辺窯もその一例である）。その一方で，長頸瓶や短頸壺，更に各種の瓶類は猿投産など，西方の優品におきかえられている。つまり，日常生活用品や低品質で事足りる須恵器は地元で，それ以外，たとえば，各種の行事に用いる特殊容器は西方から購入したのである。

９Ｃの後半はこのような傾向が一段と進んだゆえであろうか，011，012，025号址においても須恵器は少ないのであるが，その少ない須恵器のほとんどが吉川窯系統の須恵器である。

以上，少ない資料から推測を述べてきた。上述の予測も肉眼観察による結果であるから，そこには当然誤りもあろう。更に多くの遺跡での検討によって歴史時代における須恵器の生産・流通，消費の実態が明らかになることを望む。

第V章　結語

本書に所収された遺跡は山武郡横芝町中台貝塚，松尾町松尾東雲遺跡，松尾町八田太田台遺跡である。調査範囲が路線内に限られ，遺跡のごく一部のみの調査という制約はあったが，一定の成果を得ることができた。

中台貝塚は九十九里地域でも最も内陸部に位置する貝塚で，中期末から後期にかけての多数の遺構が検出された。遺構の主体は土杭であり，遺物では加曽利B式土器を主体とする。遺構の配置，土器の分布状況は時期により差異があり，占地のしかたが時期により異なることが考えられる。

また土杭から検出された貝・獣・魚骨について分析を行なった結果，貝類では外洋産のものが主であったが，内陸産，及び汽水産の貝も少量ながら認められた。魚骨では淡水産のものが主であった。この結果は当時の環境及び生産活動の結果が反映されたものであろう。

松尾東雲遺跡は成田松尾線バイパスの最終端にあたる遺跡で，調査前に上部が整形をうけ，遺物は僅少で遺構も検出されなかった。

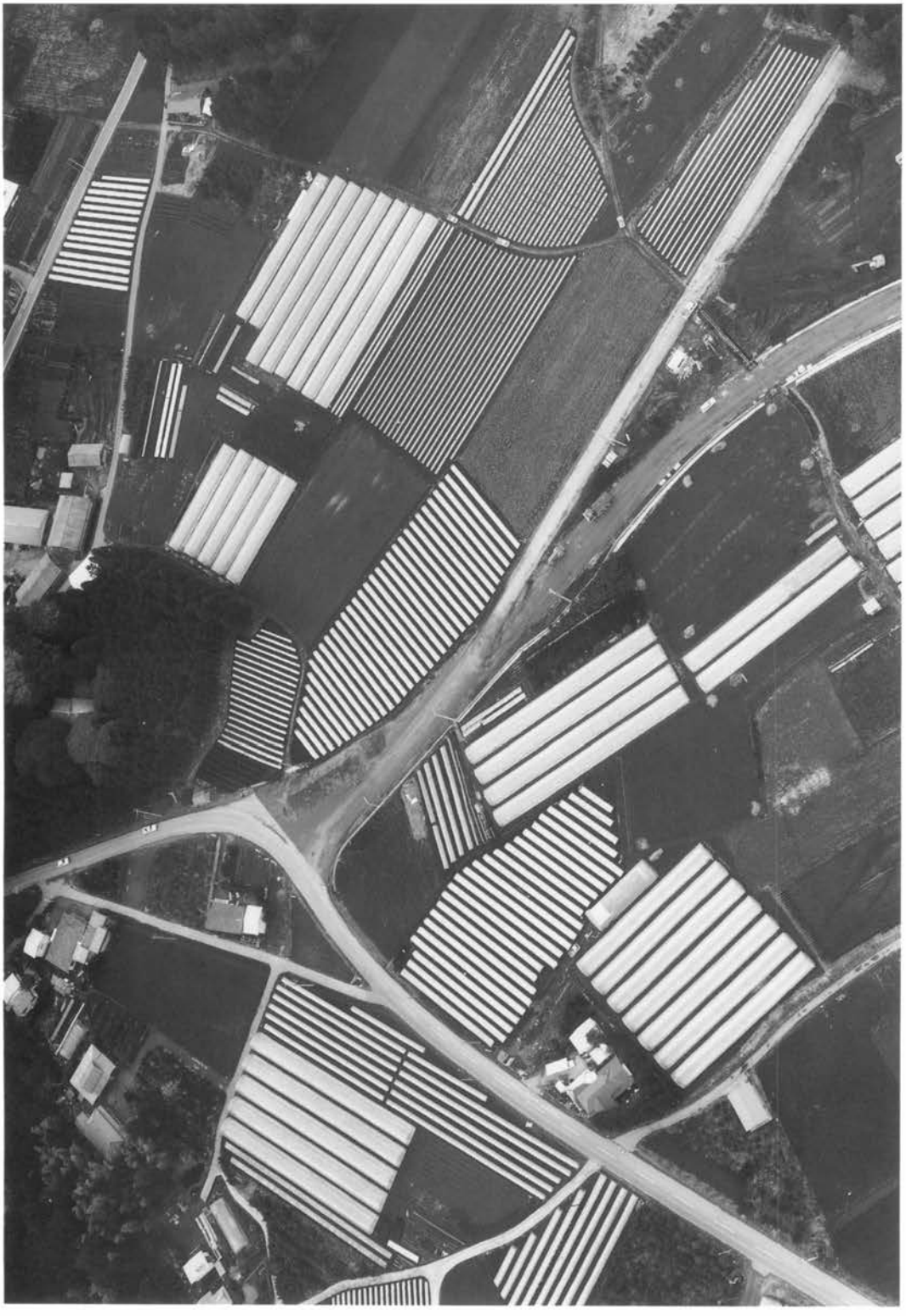
八田太田台遺跡は蕪木台地の東端に位置し，旧石器時代と古墳時代，奈良時代，平安時代の遺構が検出された。

旧石器時代は二カ所の礫群が検出され，その内の一カ所は1,500点余の礫と石器からなり，石器製作跡と思われる。

また古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡は，特に奈良時代に入って斜面を削平造成したテラス部に住居を建て始めている。台地平坦部と斜面上の住居の関係は農業生産との結びつきが強いようである。

以上，簡単に調査の概要を各遺跡ごとに紹介した。近年は山武地域でも多くの遺跡の調査が行われるようになったが，なかなか報文とならないのが実情である。中台貝塚も調査以来8年間を数えたが，今回整理作業の成果が実り，刊行の運びなったわけである。内容的に不十分な点が多々あろうかと思われるが，指摘頂いて今後の報告所作成の参考とさせて頂きたい。また，本書が当地域での研究の進展の一助となることができれば幸いである。

写 真 図 版



遺　跡　全　景

図版 2　中台貝塚

遺跡近景 (1)

遺跡近景 (2)

遺構群（A2区西半部，南から）

遺構群（A1・A2区東半部，南から）

図版 4　中台貝塚

遺構群（A2･A3区東半部，南から）

調査風景（A2･A3区，北から）

1号住居跡全景

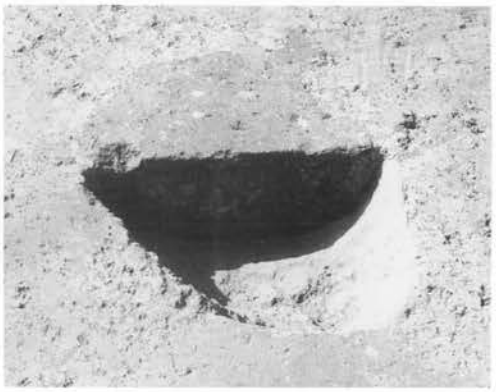
1号住居跡出土状況

図版 6　中台貝塚

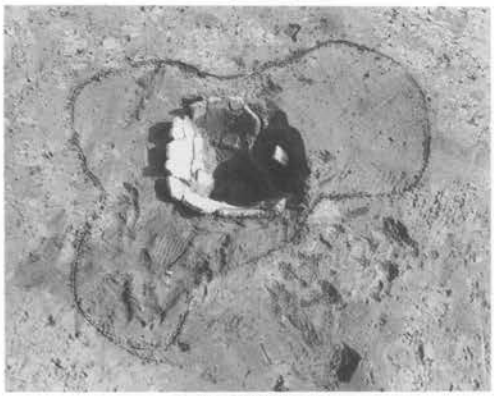
2 号炉跡

3 号炉跡　38号土坑

6 号炉跡



7 号炉跡



1 号埋甕炉跡

2 号埋甕炉跡

3 号埋甕炉跡

4 号埋甕炉跡

5 号埋甕炉跡

6 号埋甕炉跡

7 号埋甕炉跡

2 号土坑

3 号土坑

4 号土坑

5 号土坑

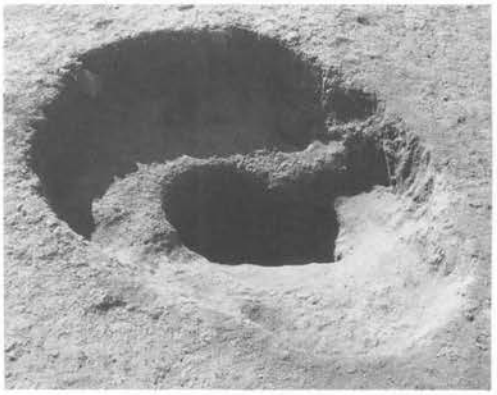
7～11号土坑

図版 8　中台貝塚

12号土坑

13号土坑

15号土坑



18号土坑

19号土坑

20～26号土坑

27号土坑

28号土坑

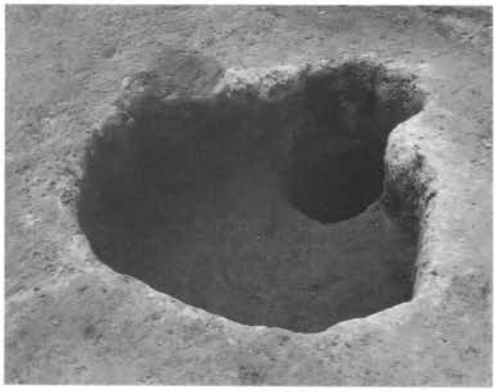
29号土坑

30～31号土坑

32号土坑

33・43号土坑

34～35号土坑


36～37号土坑

39号土坑

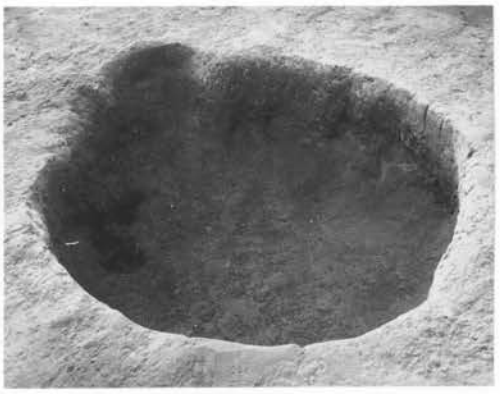
41～42号土坑

図版 10　中台貝塚

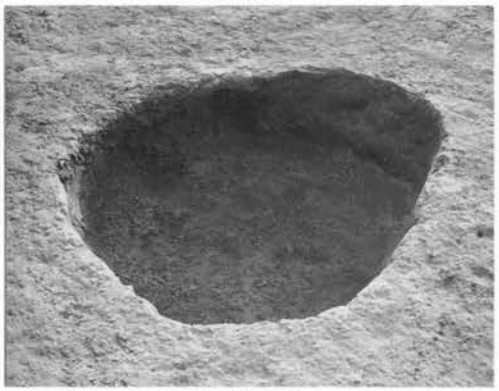
45号土坑

48～49 63号土坑

51～52号土坑



53号土坑



54号土坑

56～58号土坑

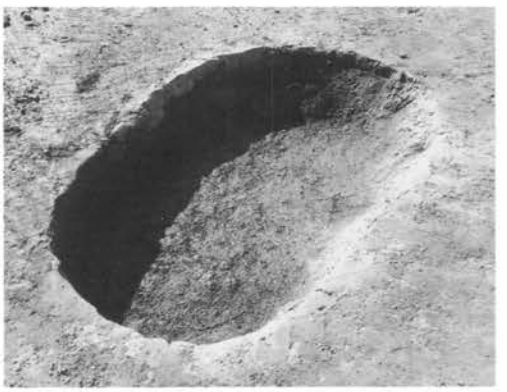
59号土坑

60～62 64号土坑

67号土坑

68～69号土坑

70号土坑



71号土坑

72号土坑

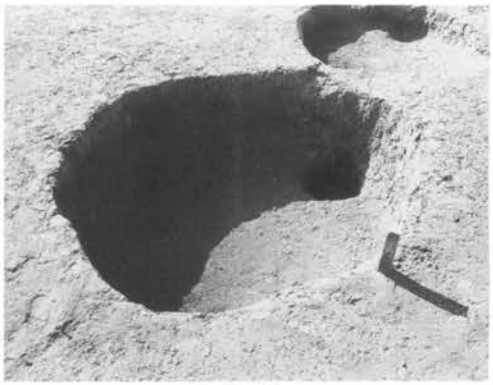
74号土坑

75号土坑

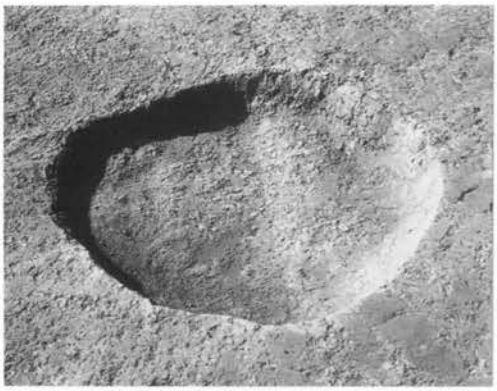
76号土坑

図版 12　中台貝塚

77号土坑



78号土坑



79号土坑

80～81号土坑

4 号埋甕炉跡 83号土坑

84号土坑

85号土坑

86号土坑

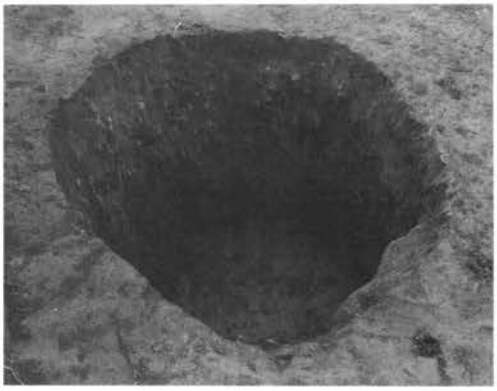
87号土坑

89～91号土坑

92号土坑

95～96号土坑

97号土坑



98号土坑

99～100号土坑

101号土坑

図版 14　中台貝塚

102号土坑

103号土坑

105号土坑

106号土坑

107～108号土坑

108号土坑

109号土坑

95号土坑内貝層

105号土坑内貝層

109号土坑内貝層

95号土坑内獣骨出土状況

1号住居跡出土土器

図版 16　中台貝塚

1

2

3

4

6

5

7

8

埋甕炉跡出土土器

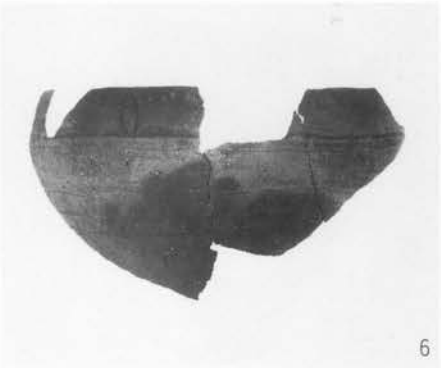
1

2

3

4

5


6

7

8

土坑内出土土器 (1)

土坑内出土土器 (2)

17

18

土坑内出土土器 (3)

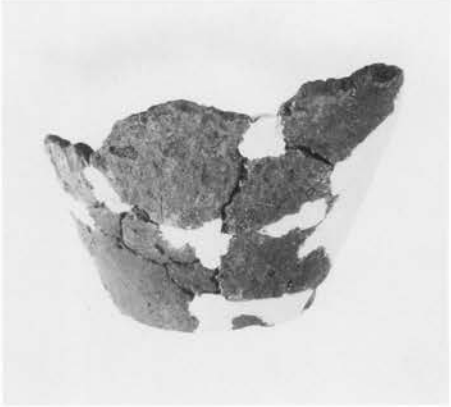
29号土坑

75号土坑

86号土坑

99号土坑

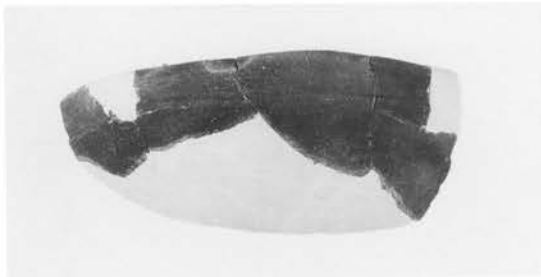
土坑内遺物出土状況

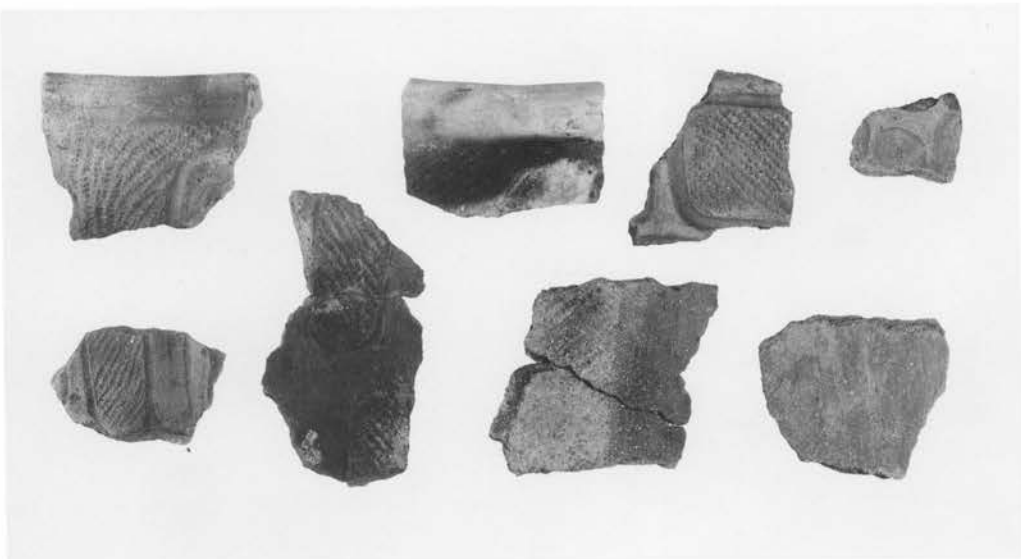


グリッド出土土器 (1)

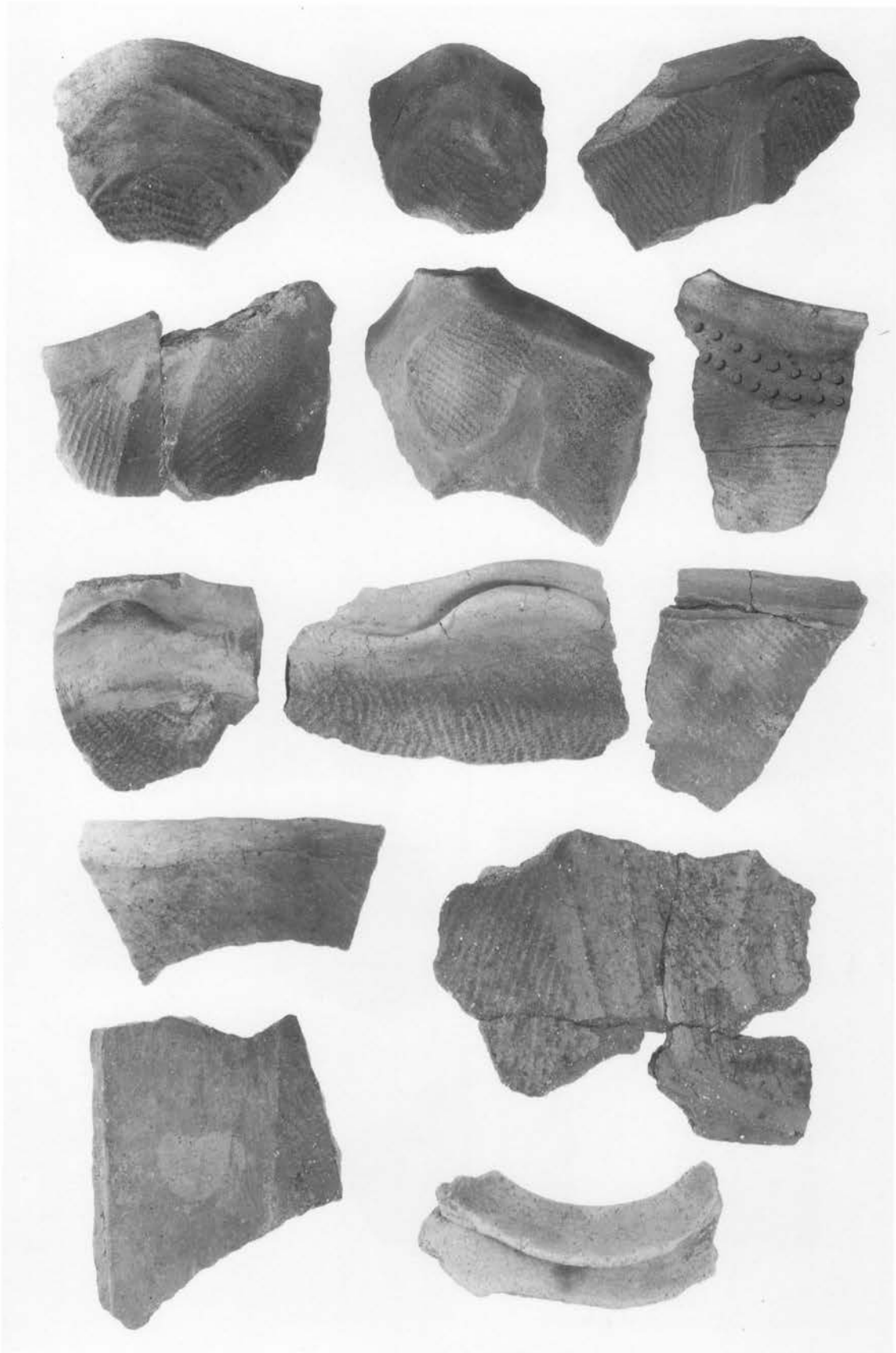
グリッド出土土器 (2)

図版 22　中台貝塚

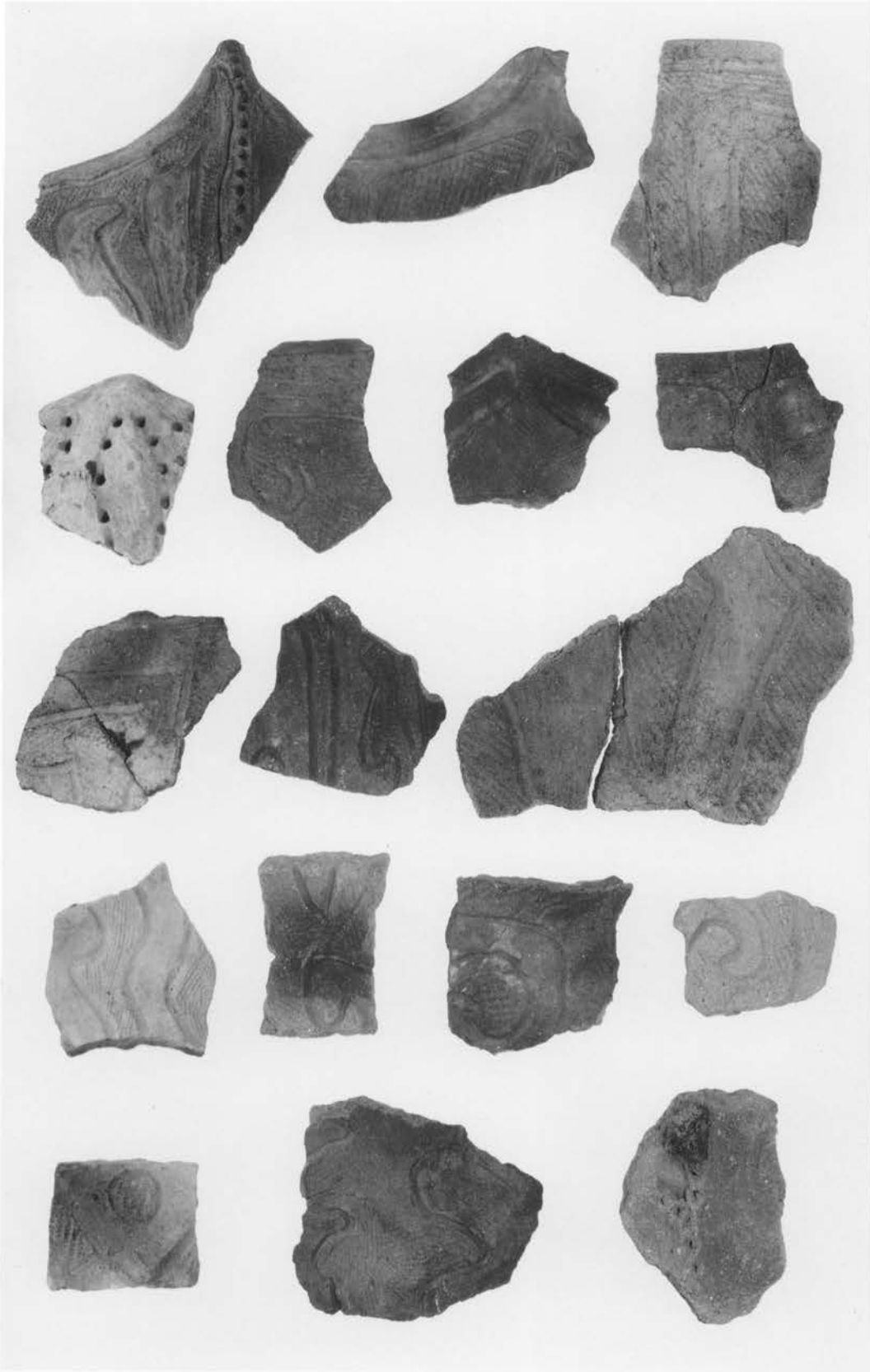




グリッド出土土器 (3)

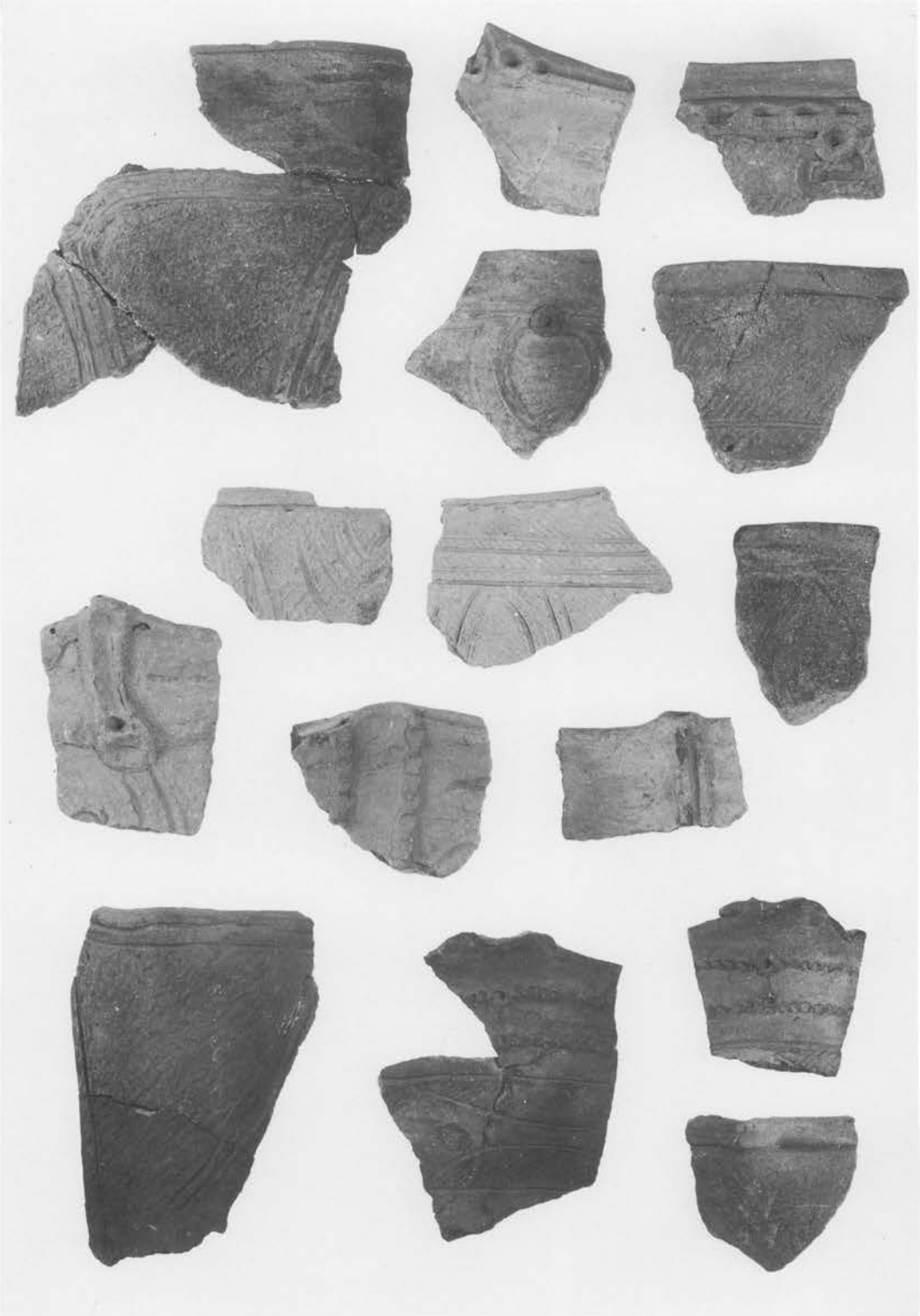


グリッド出土土器 (4)

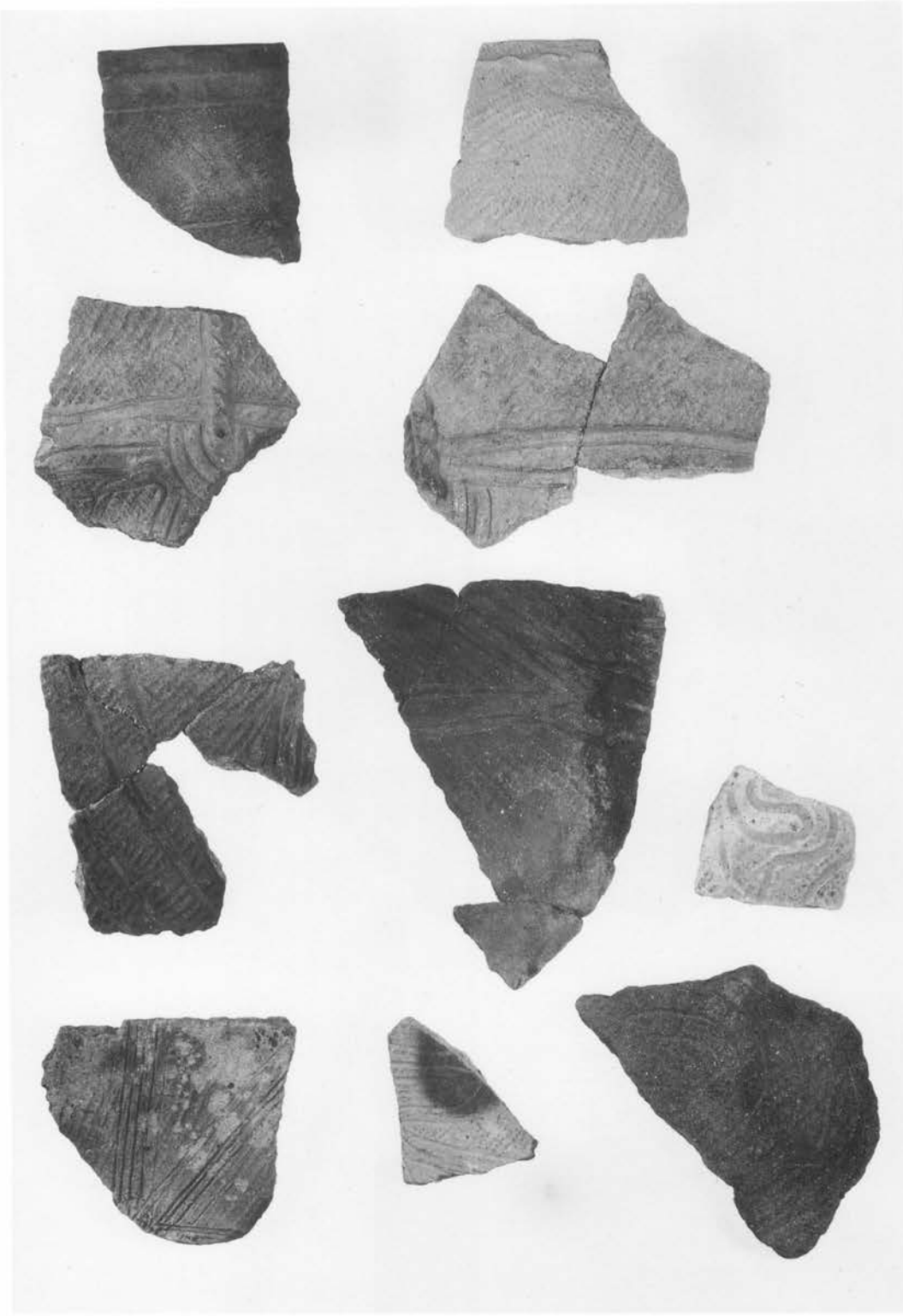


グリッド出土土器 (5)

グリッド出土土器 (6)



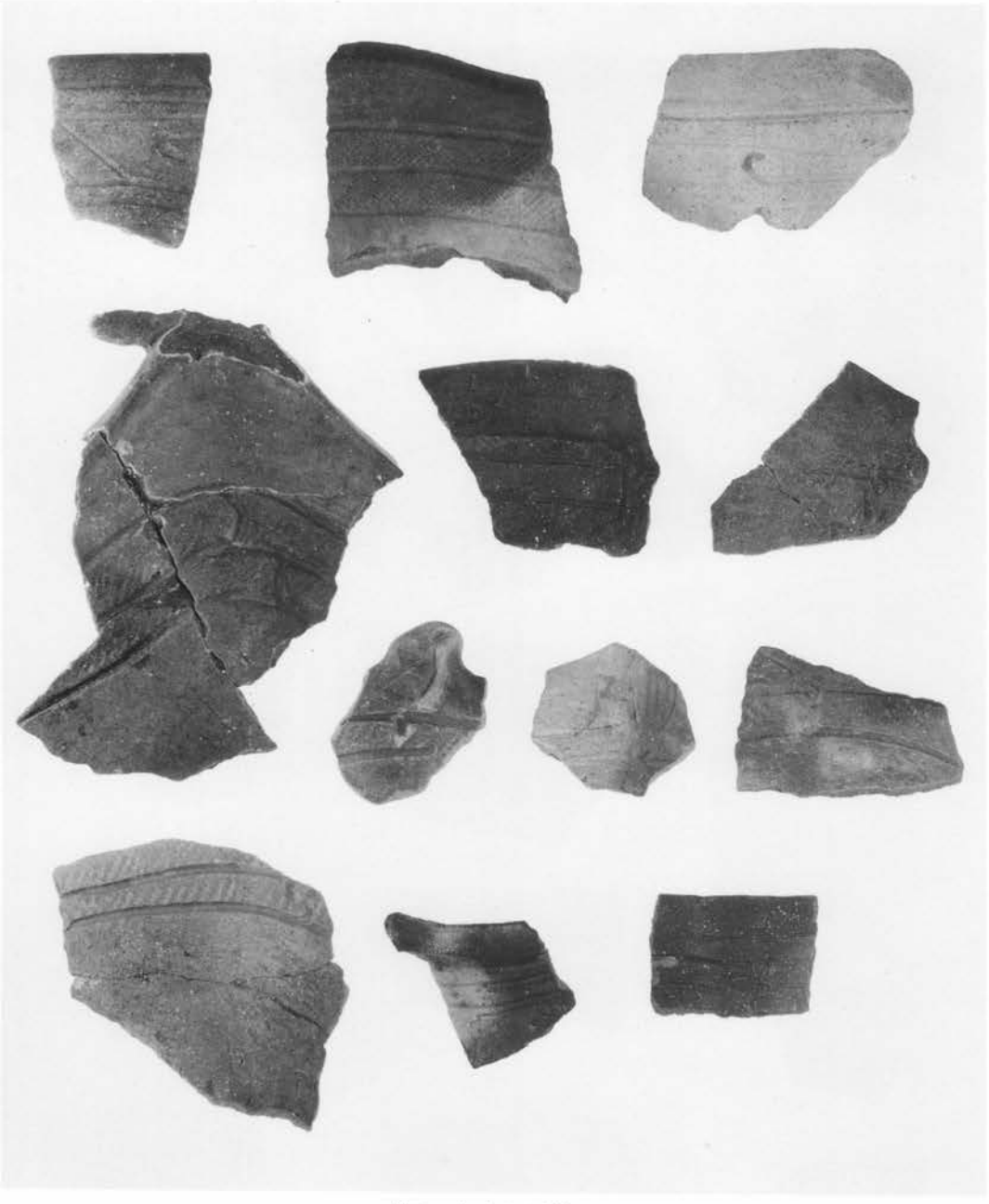
グリッド出土土器 (7)



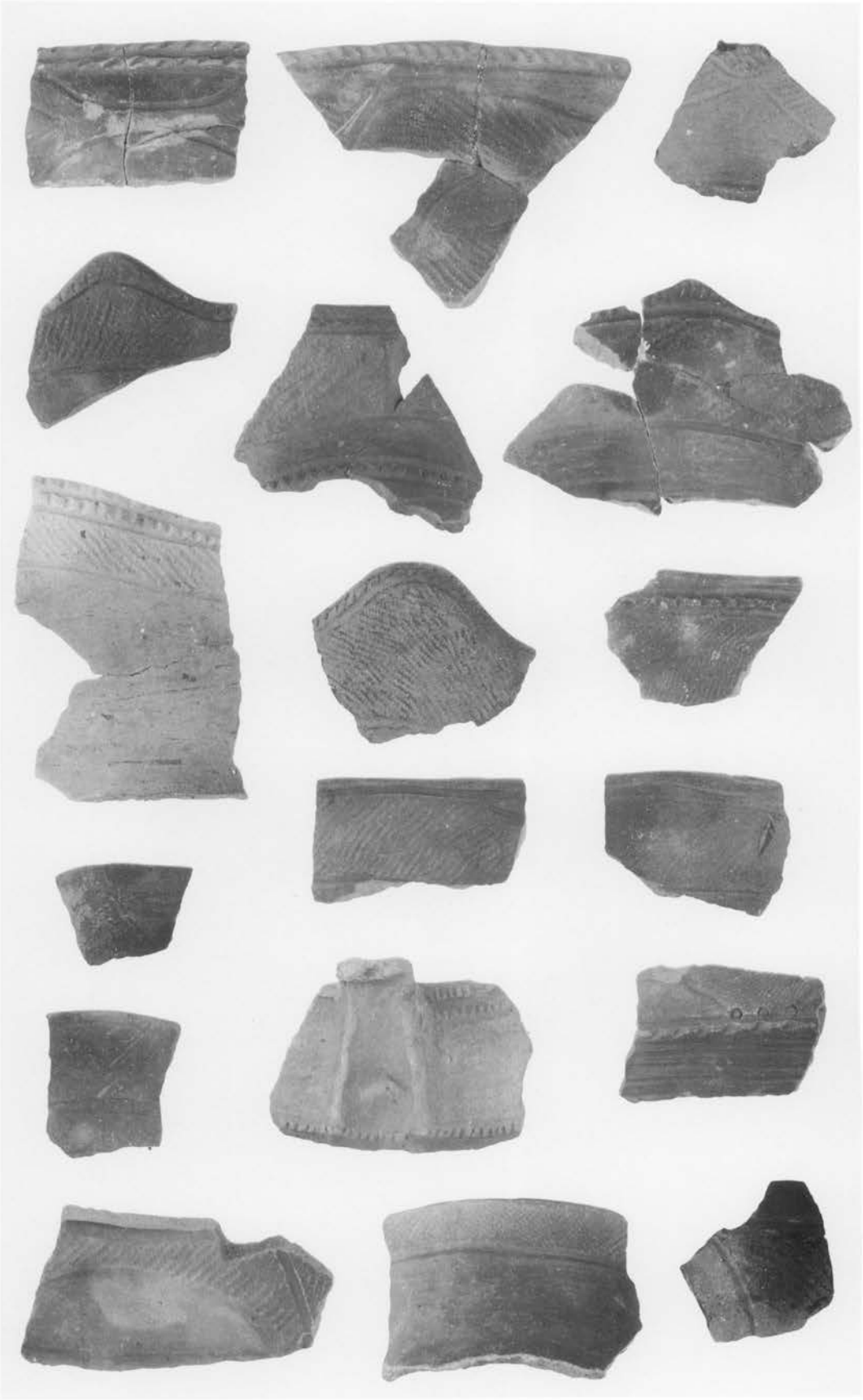
グリッド出土土器 (8)

グリッド出土土器 (9)

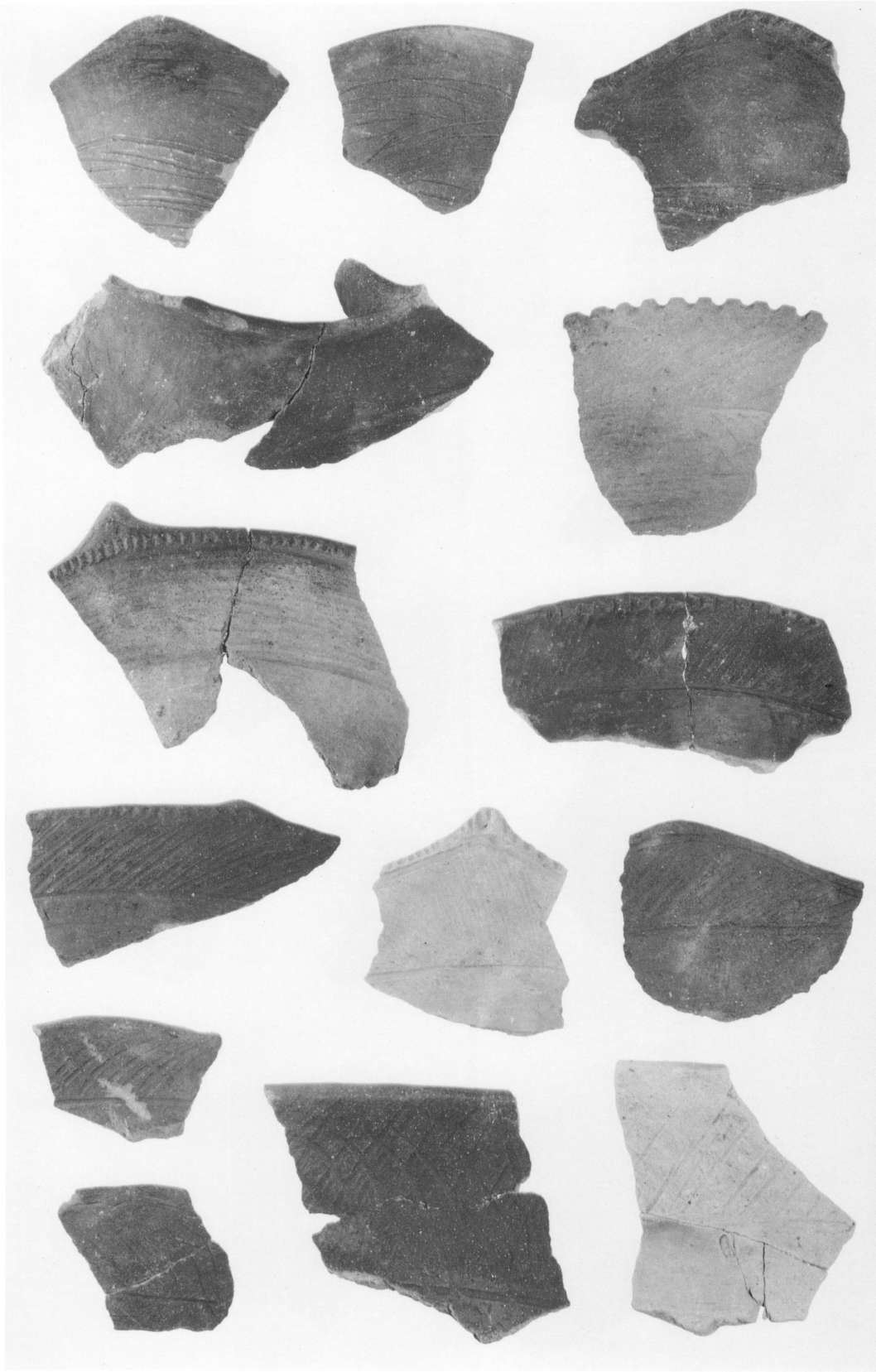
ドングリの圧痕のある土器



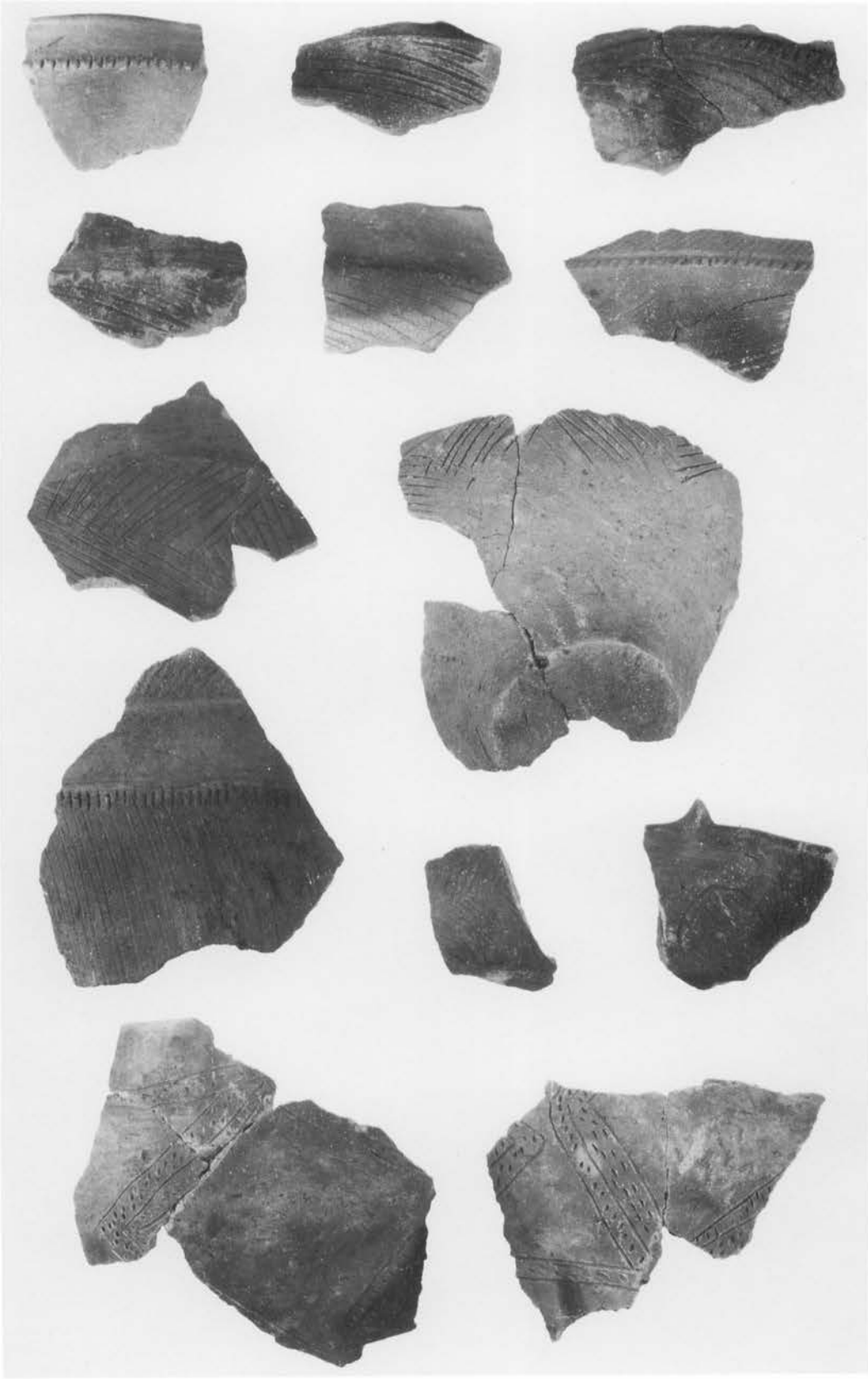
グリッド出土土器 (10)



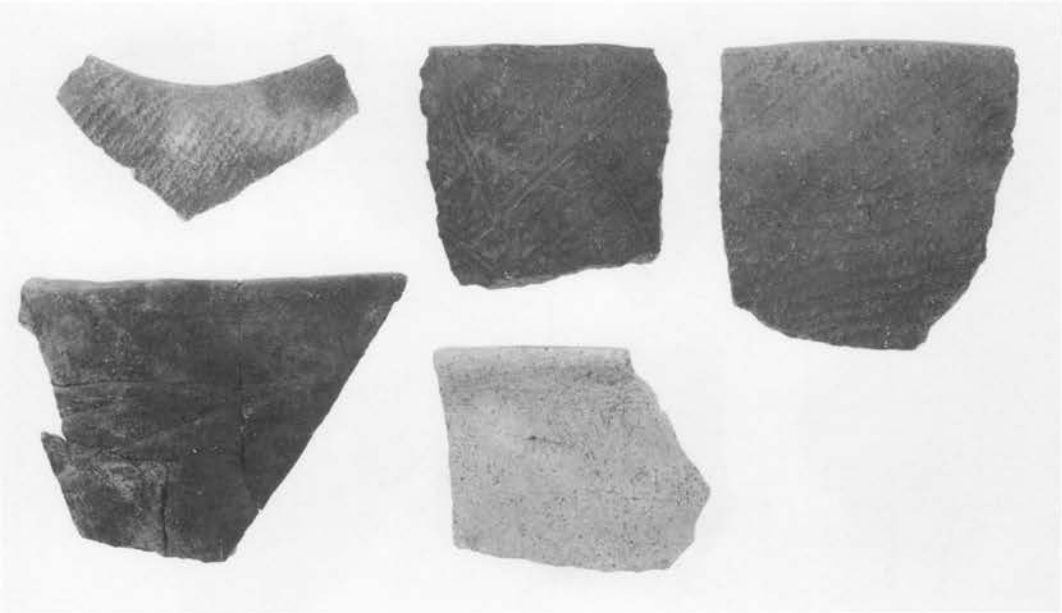
グリッド出土土器 (11)

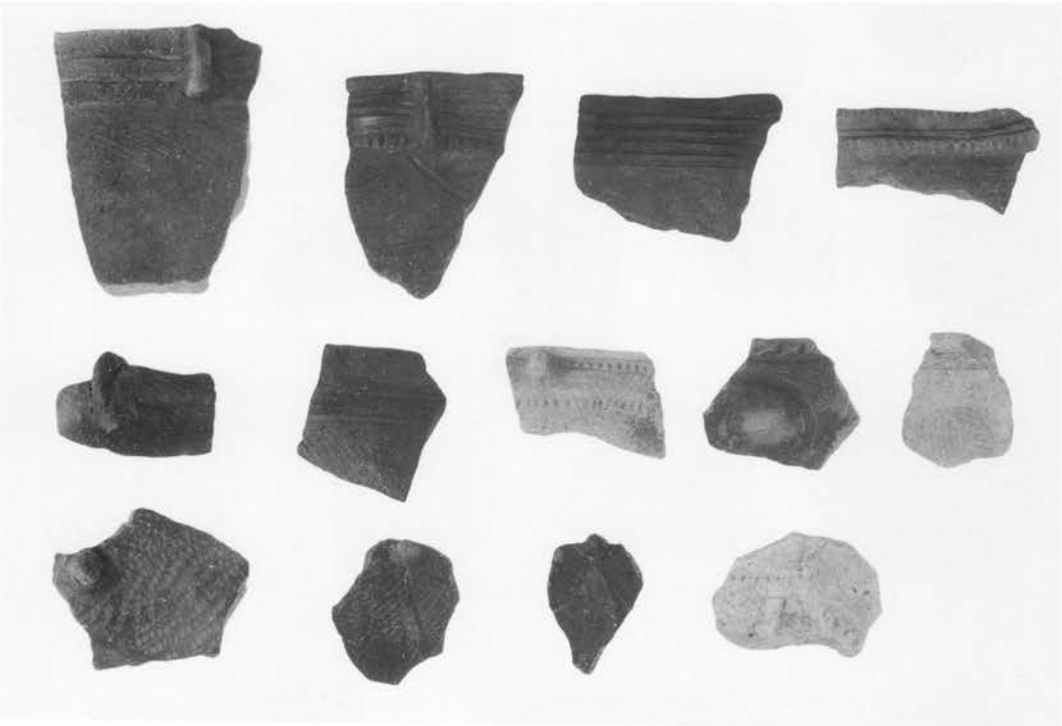


グリッド出土土器 (12)

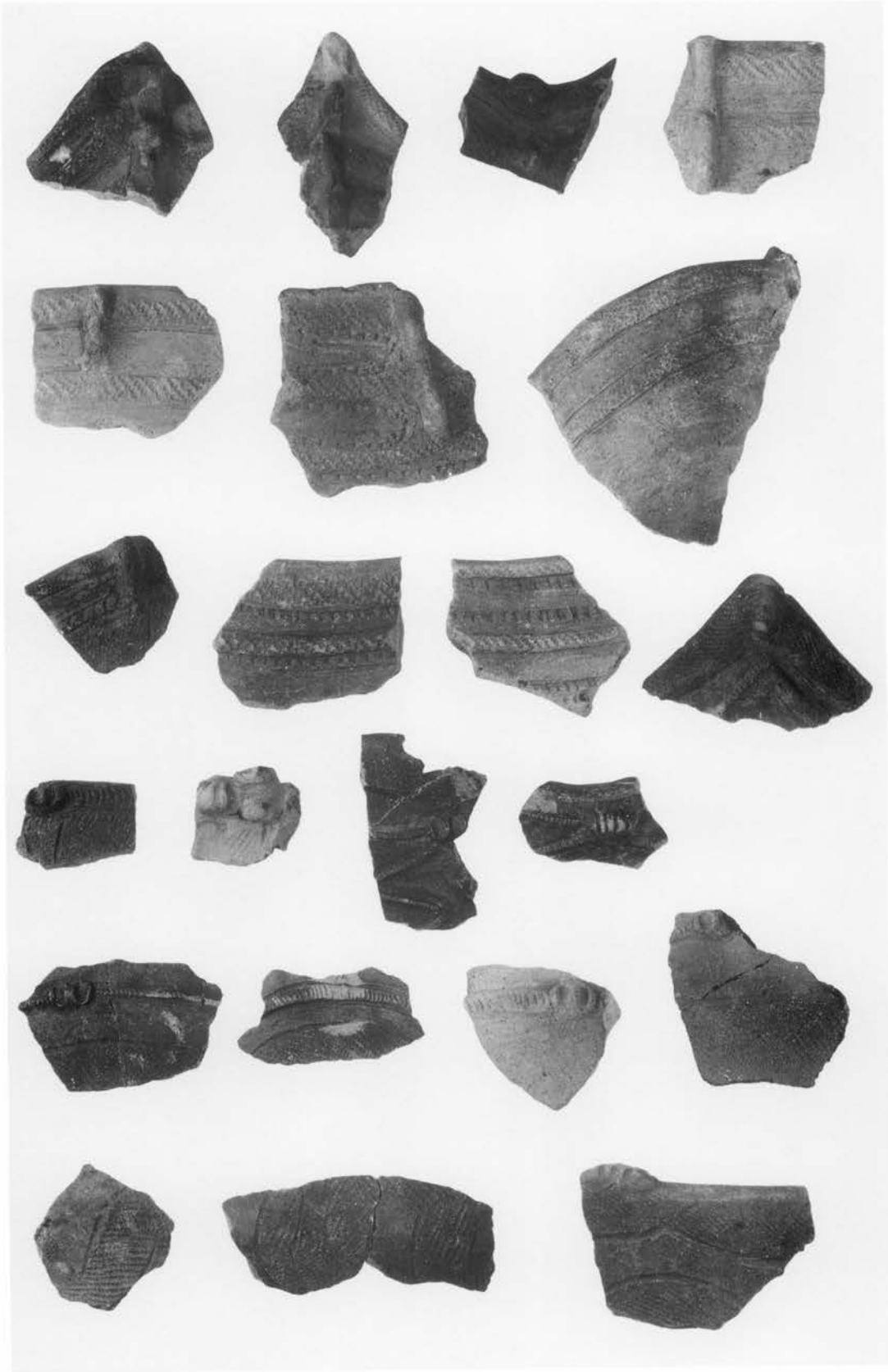


グリッド出土土器 (13)

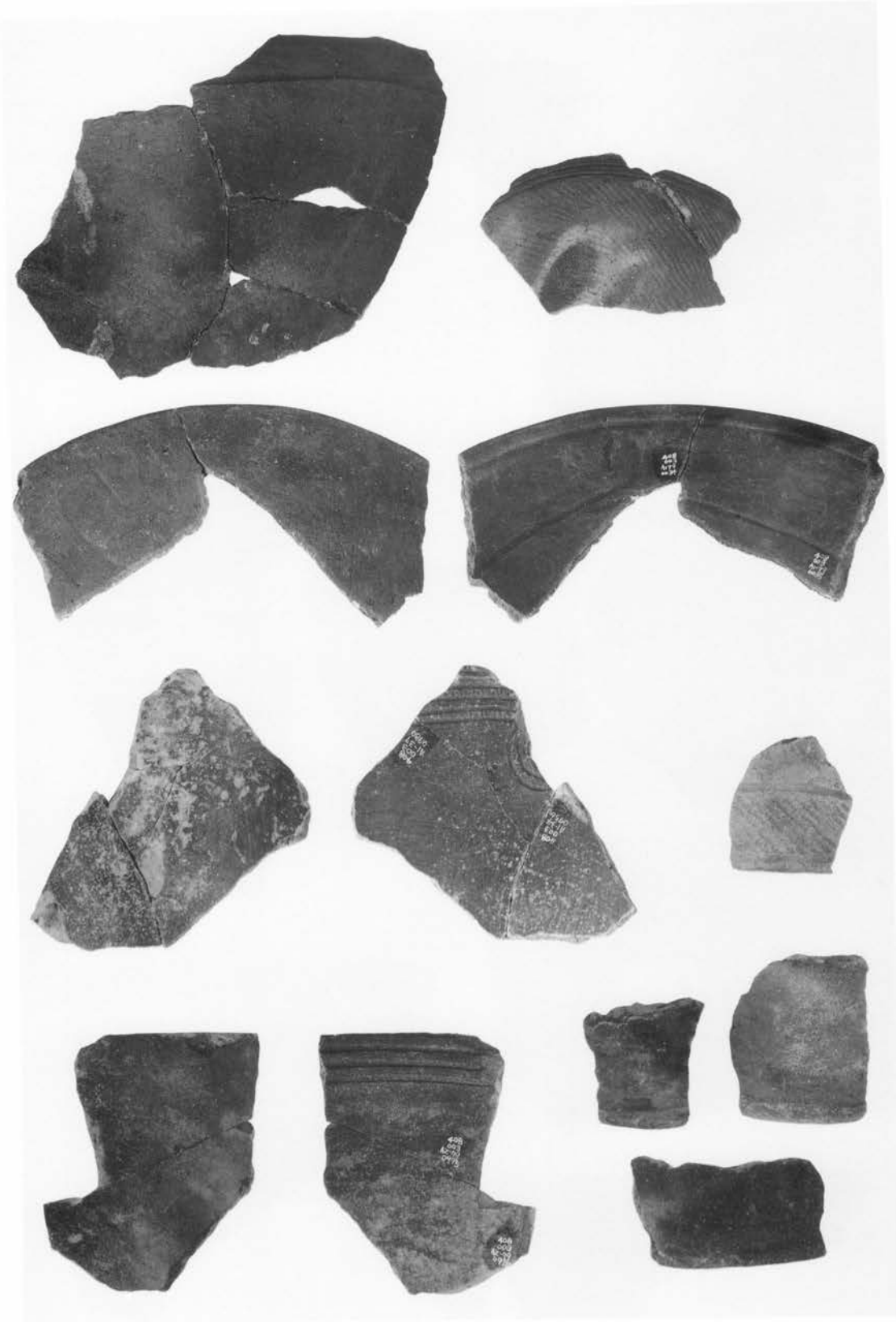




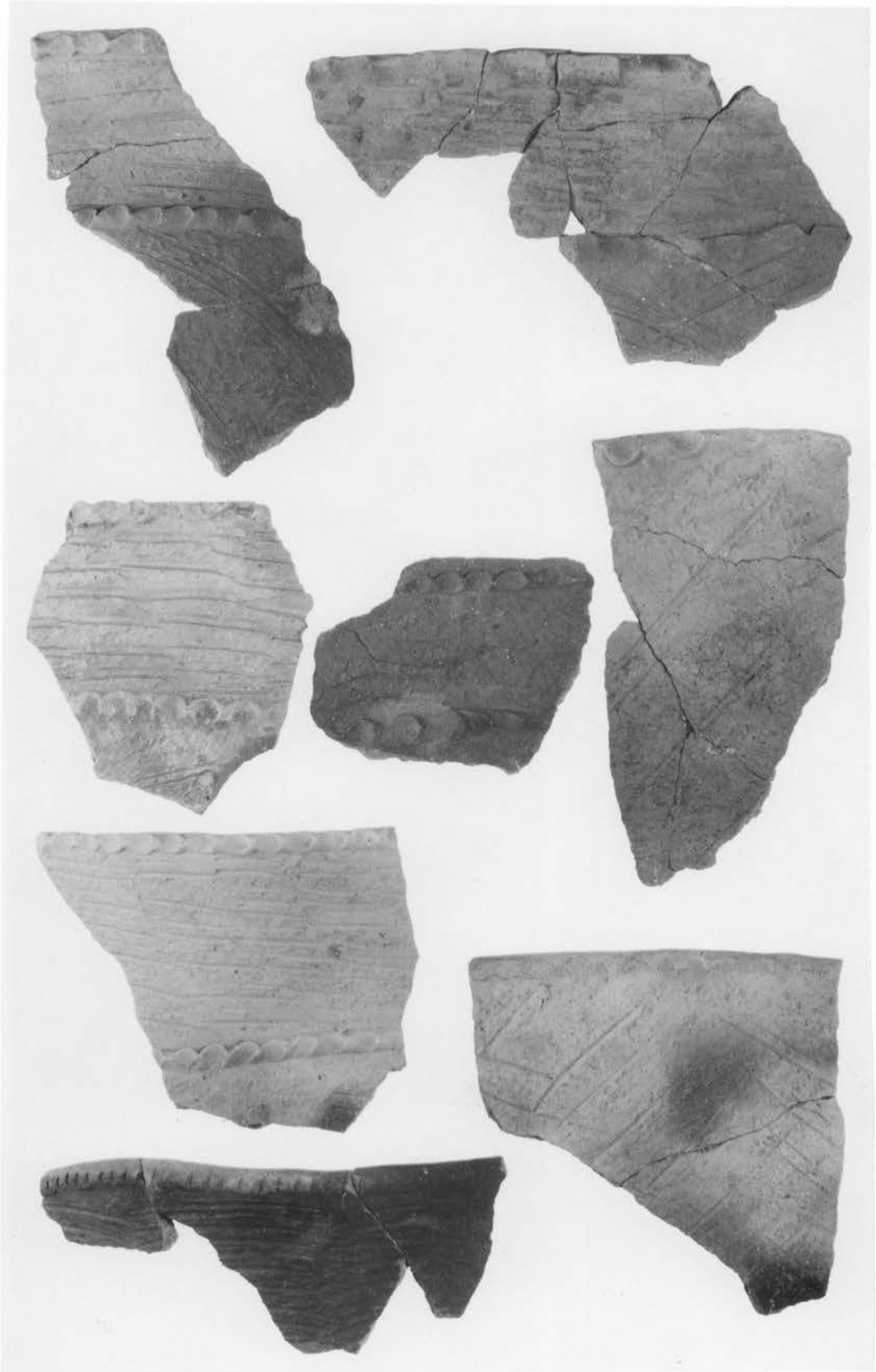
グリッド出土土器 (14)



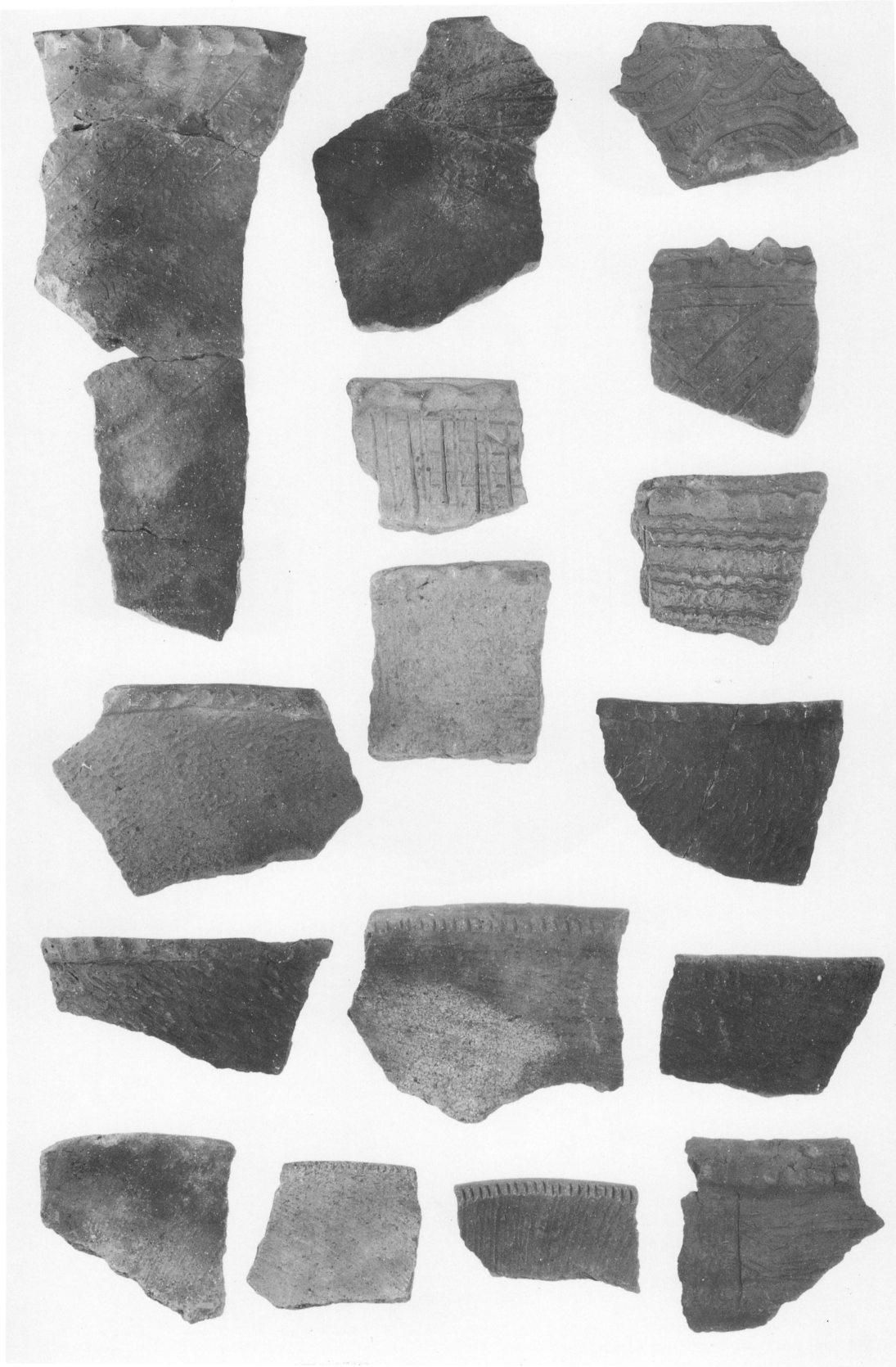
グリッド出土土器 (15)



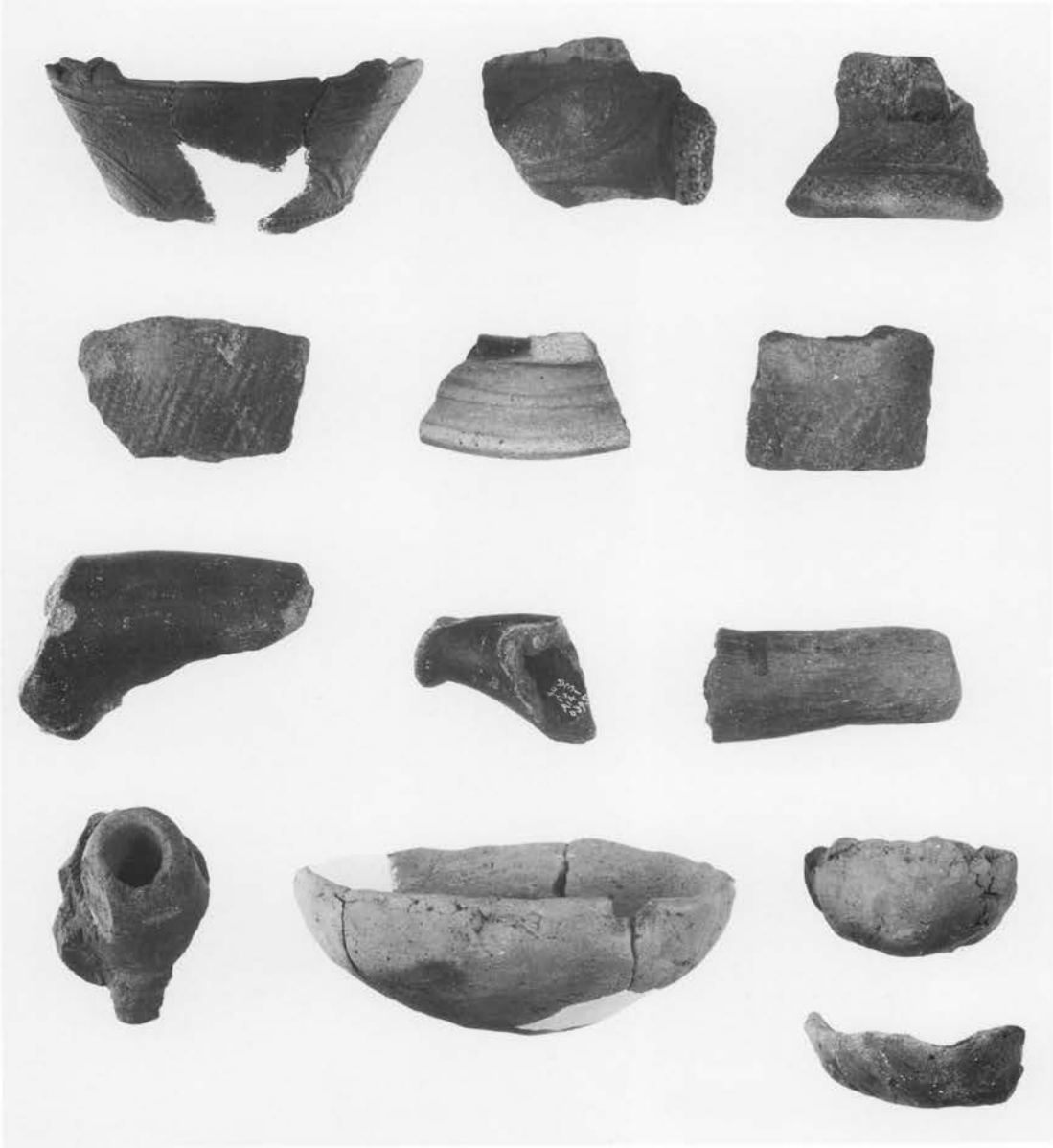
グリッド出土土器 (16)



グリッド出土土器 (17)



グリッド出土土器 (18)



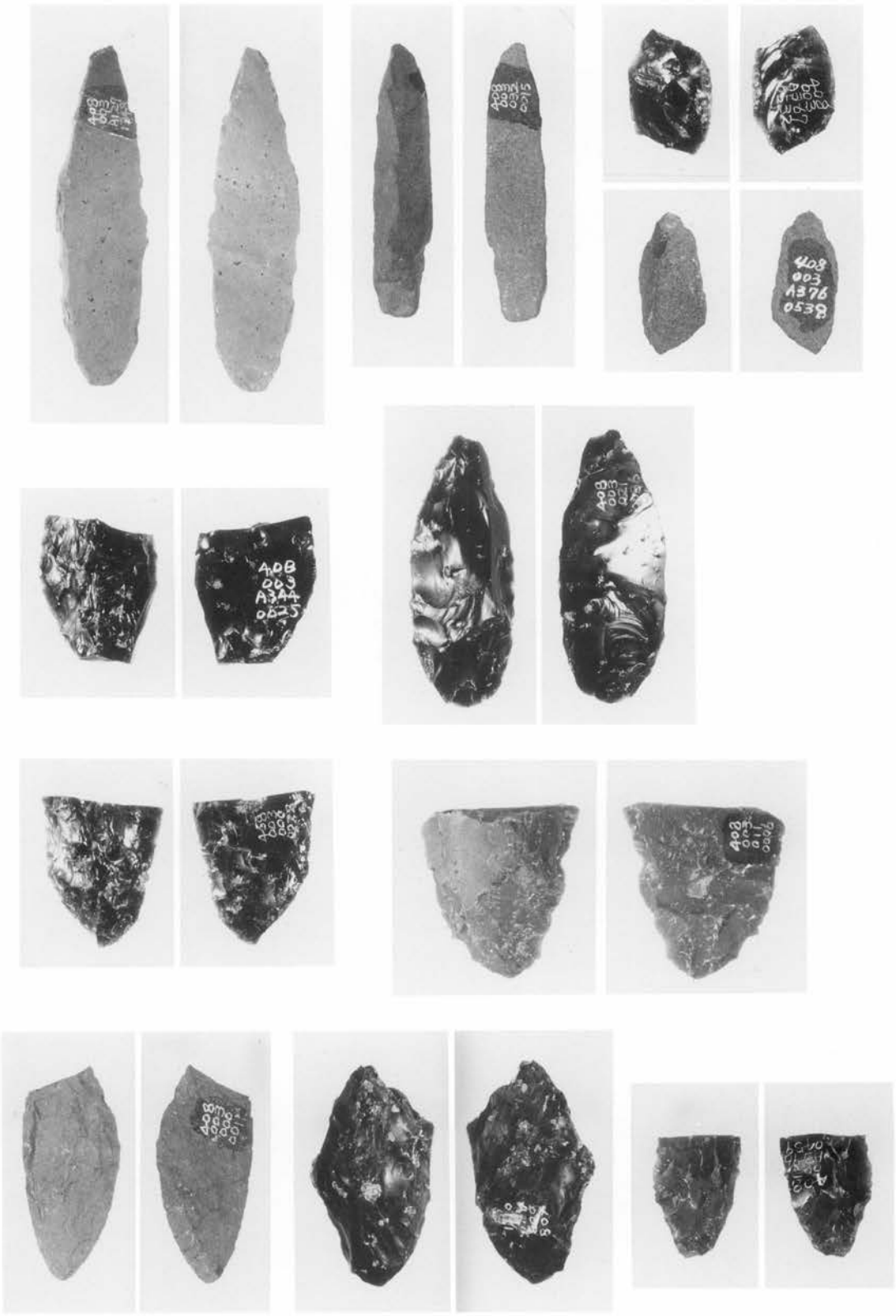
グリッド出土土器 (19)

把手類

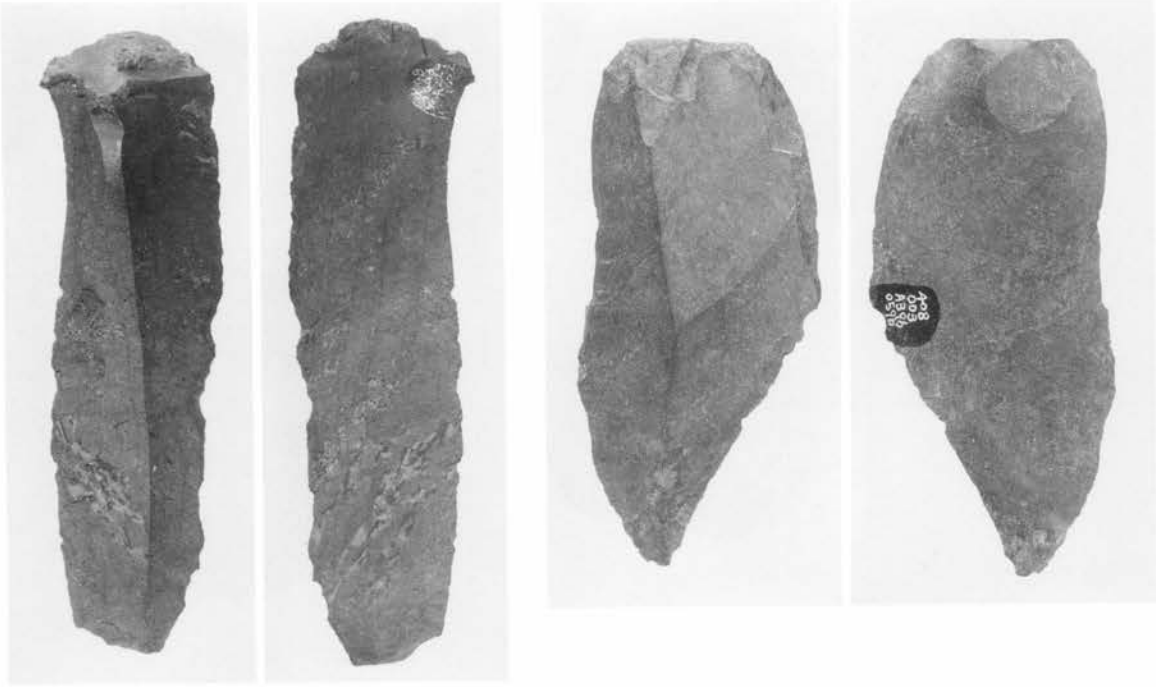
底部

グリッド出土土器 (20)

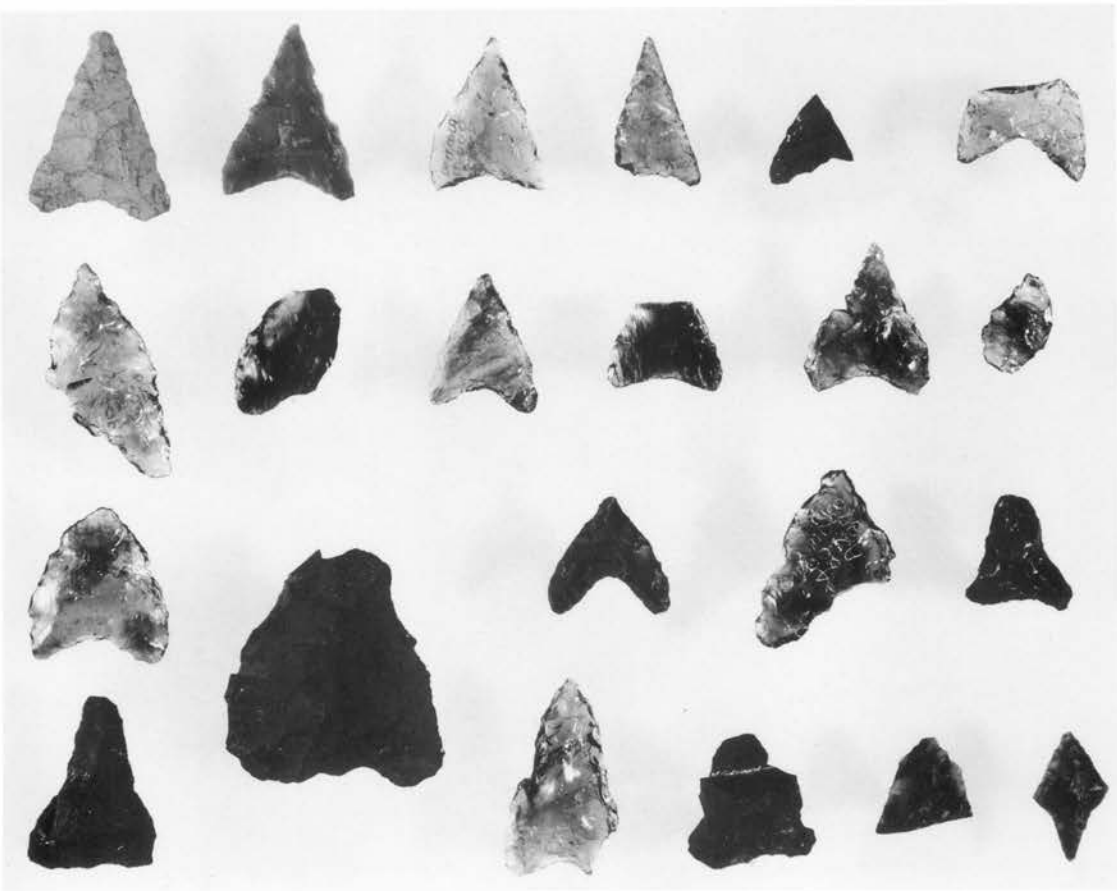
図版 40　中台貝塚



旧石器時代石器 (1)

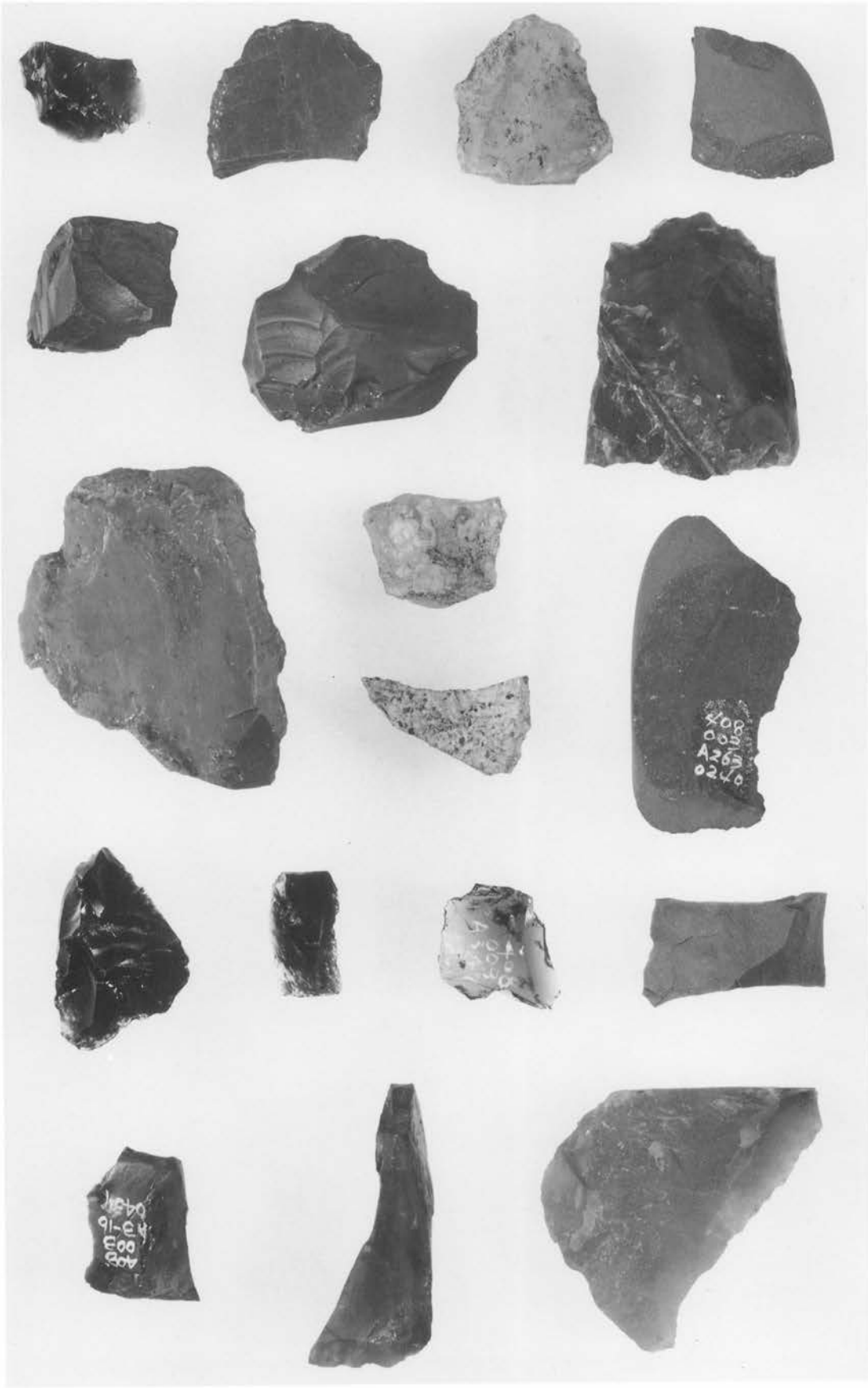


旧石器時代石器 (2)

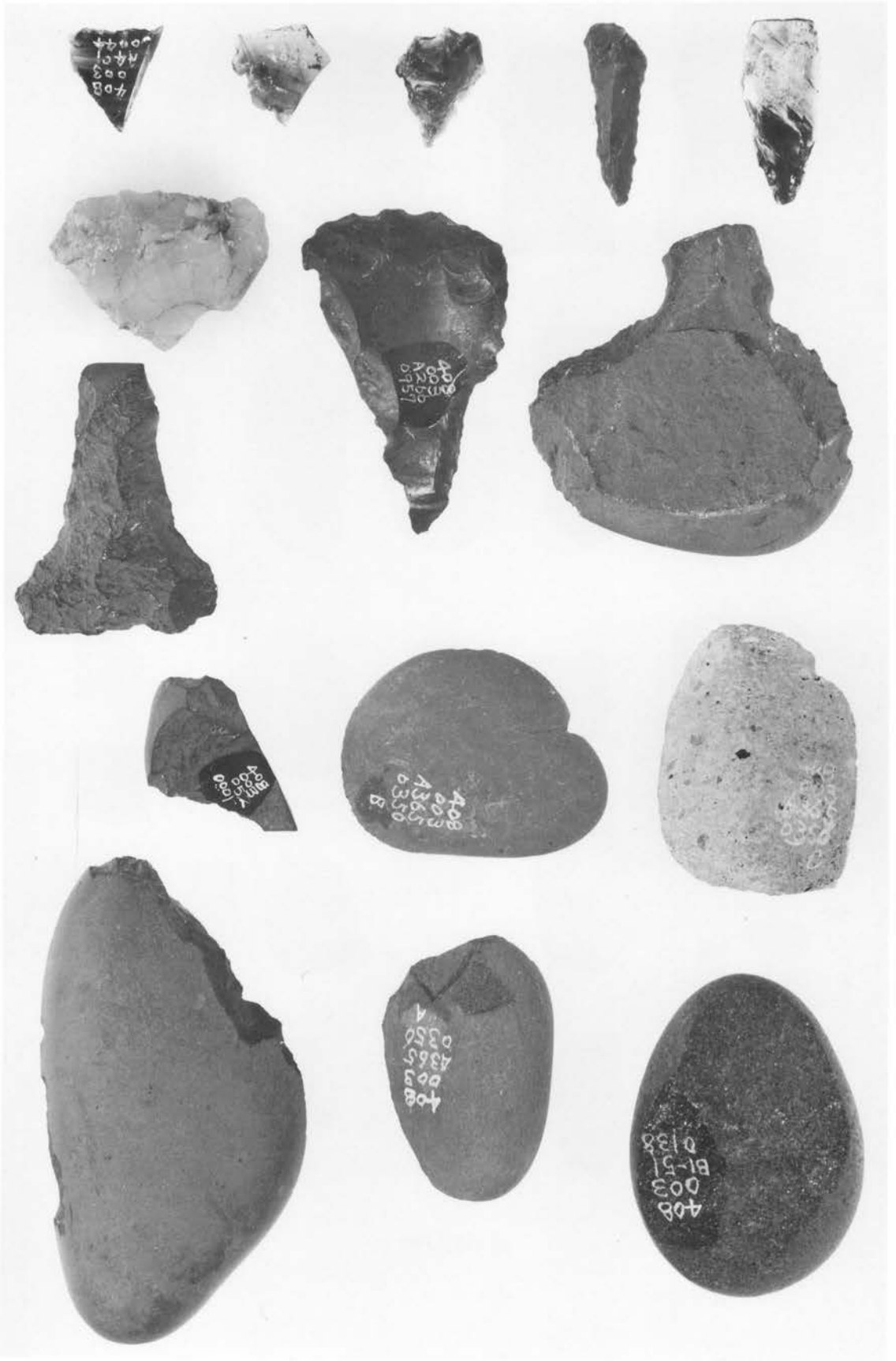


縄文時代石器 (1)

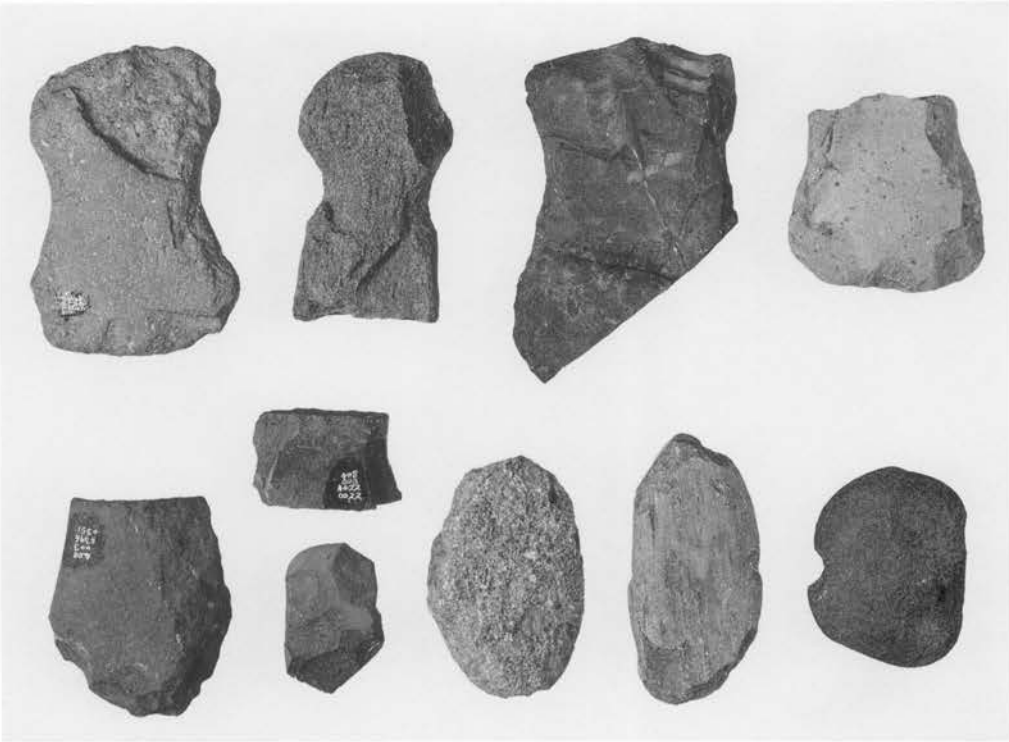
図版 42　中台貝塚



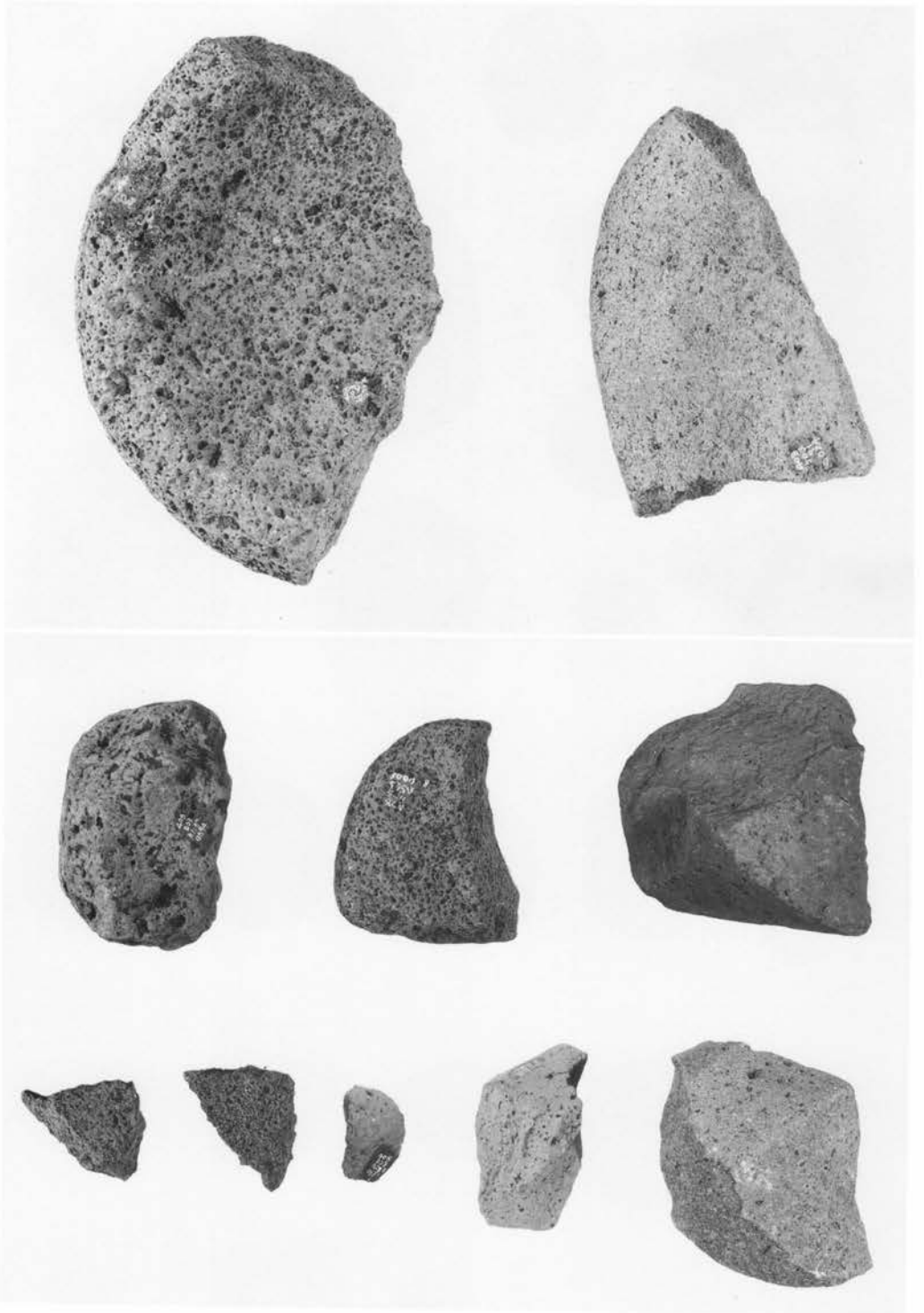
縄文時代石器 (2)



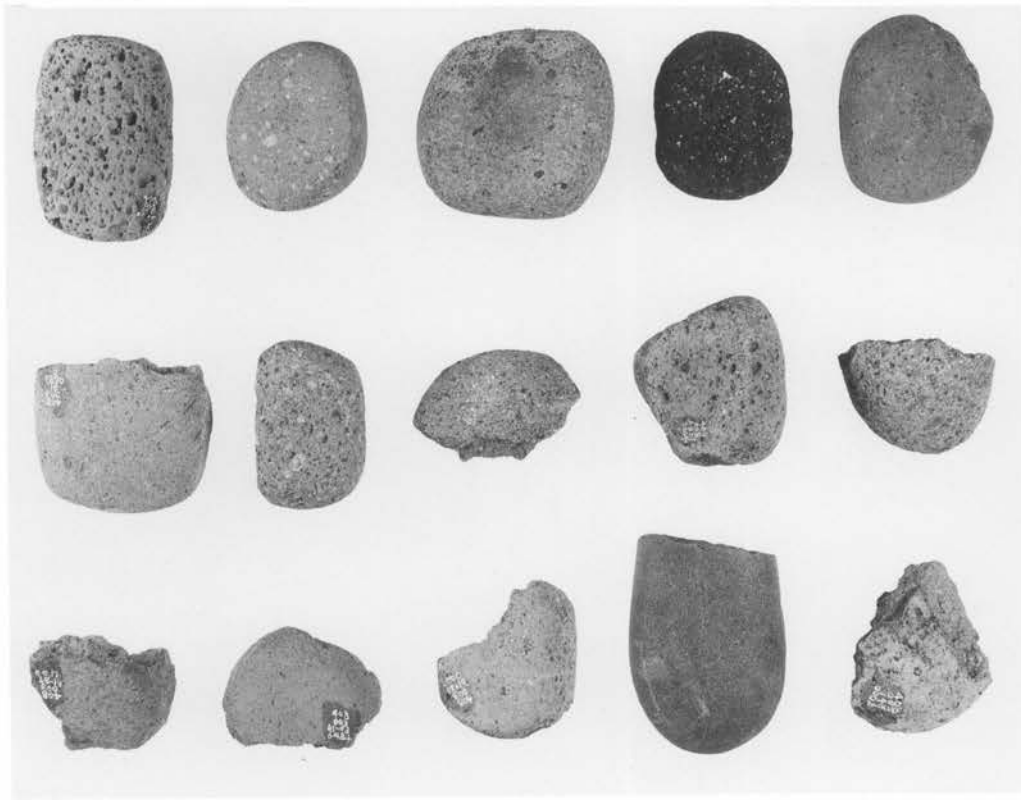
縄文時代石器 (3)



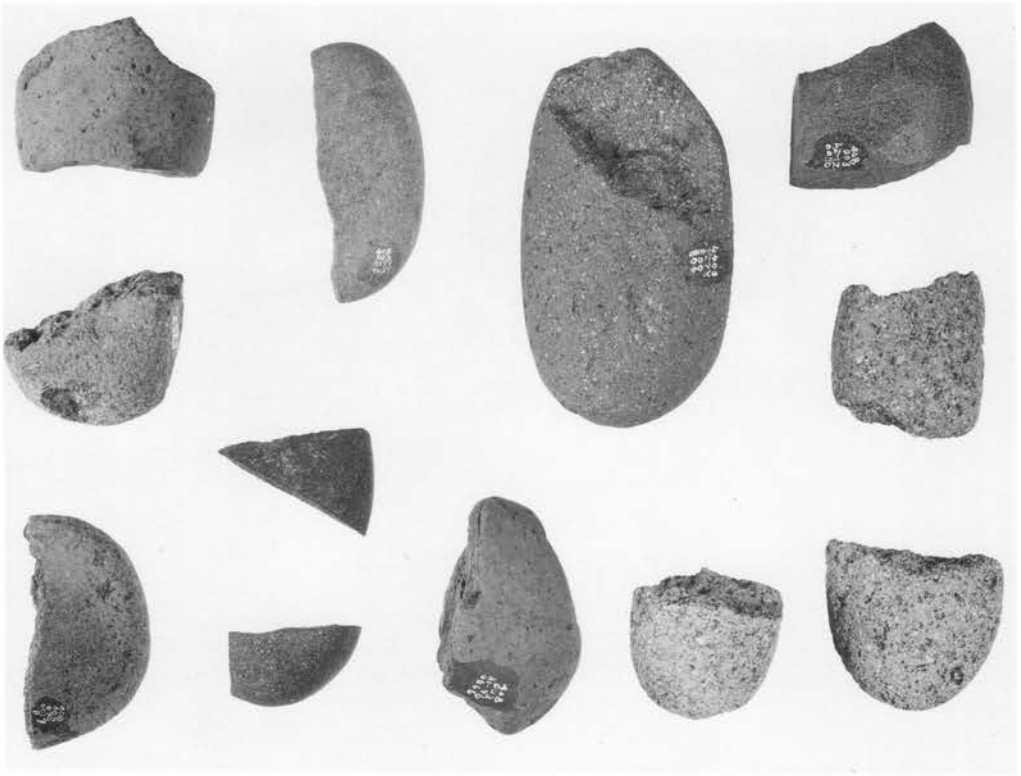
縄文時代石器 (4)

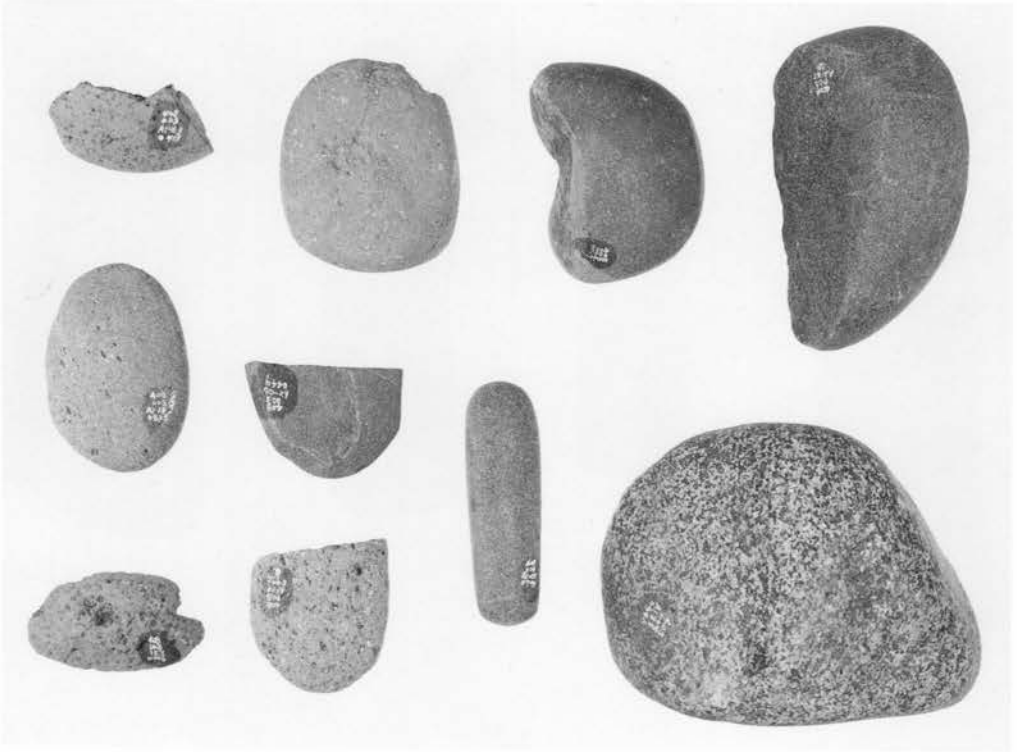


縄文時代石器 (5)



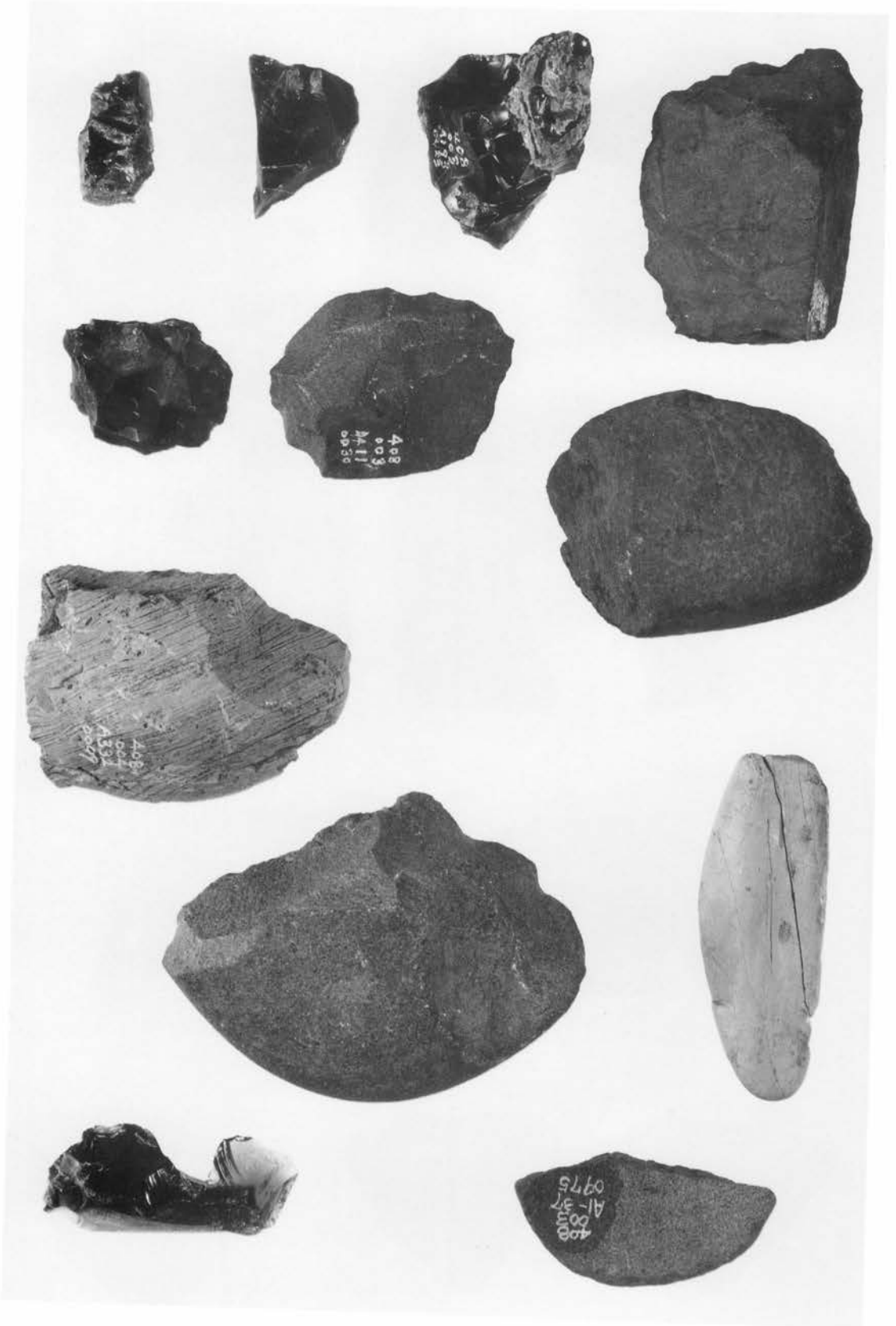
縄文時代石器 (6)





縄文時代石器 (7)

縄文時代石器 (8)



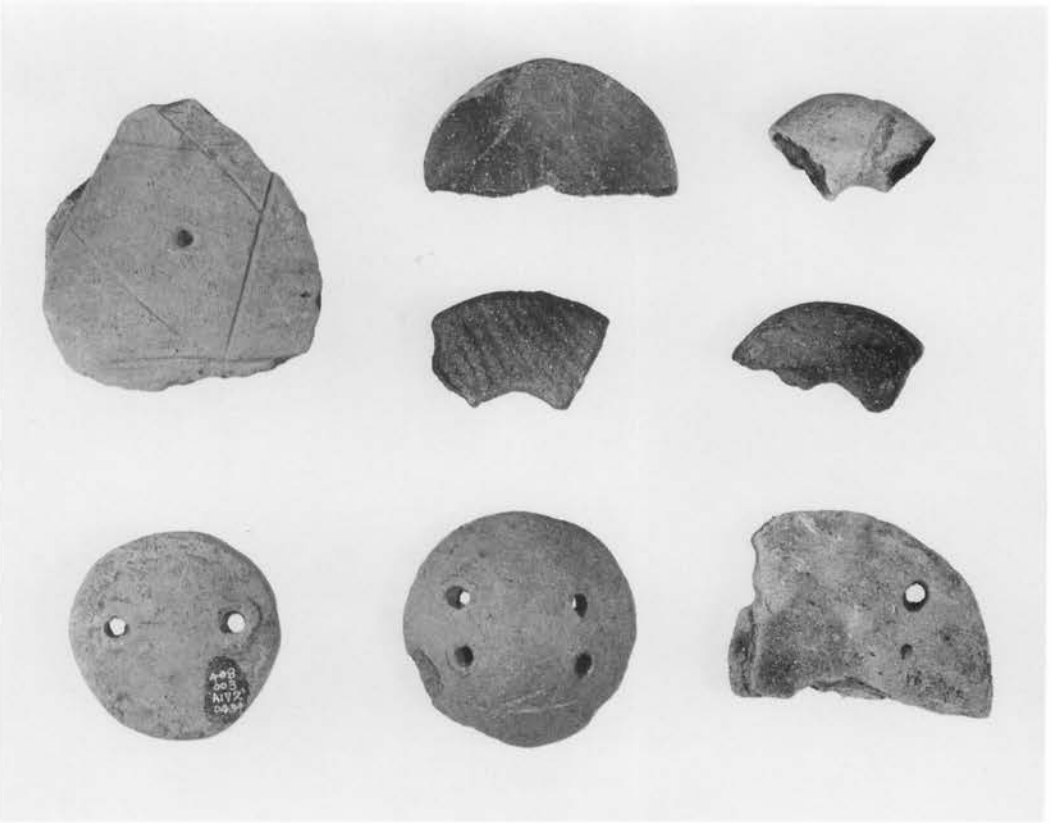
縄文時代石器 (9)

図版 50　中台貝塚

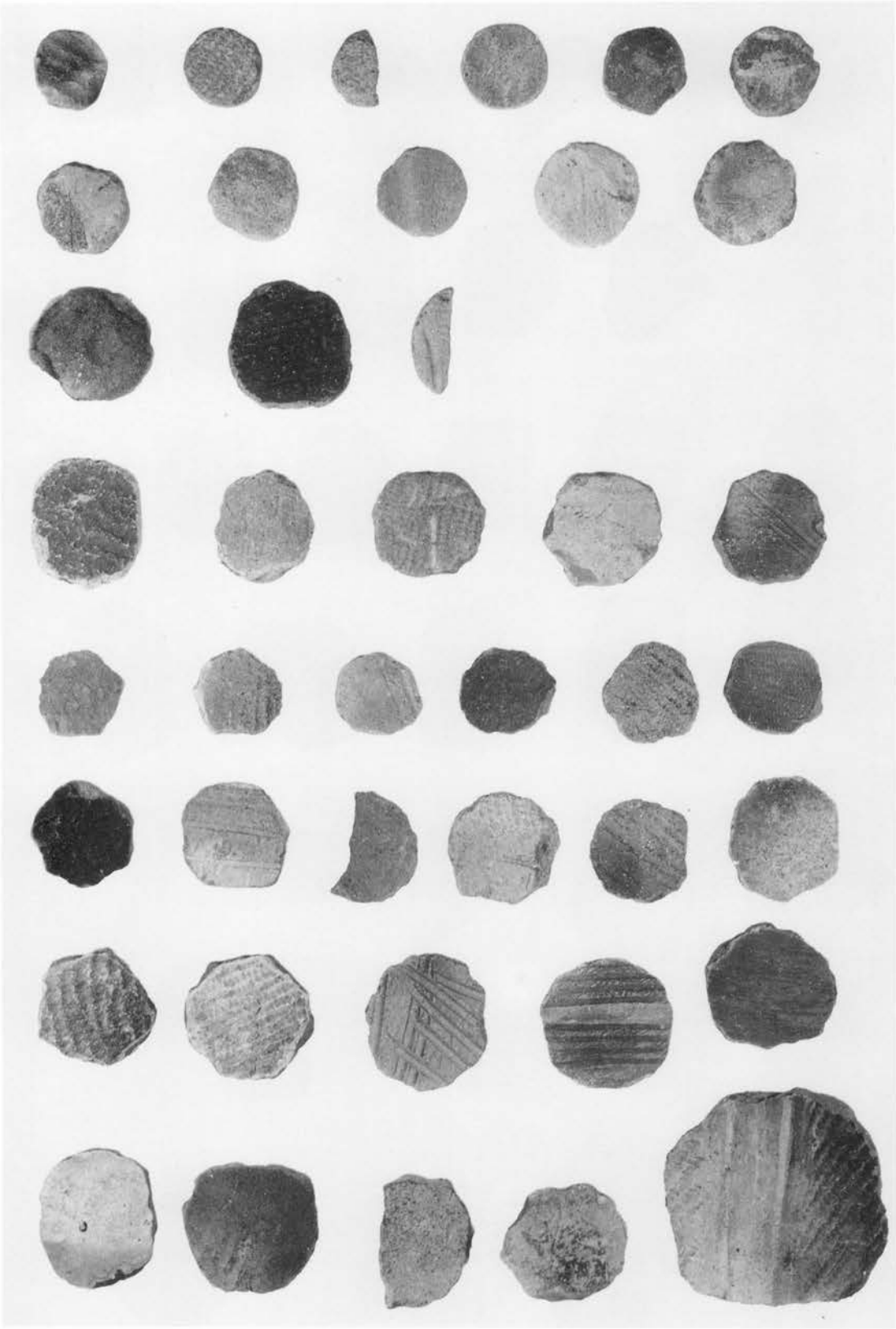
土偶 (1)

土偶 (2)

図版 52　中台貝塚

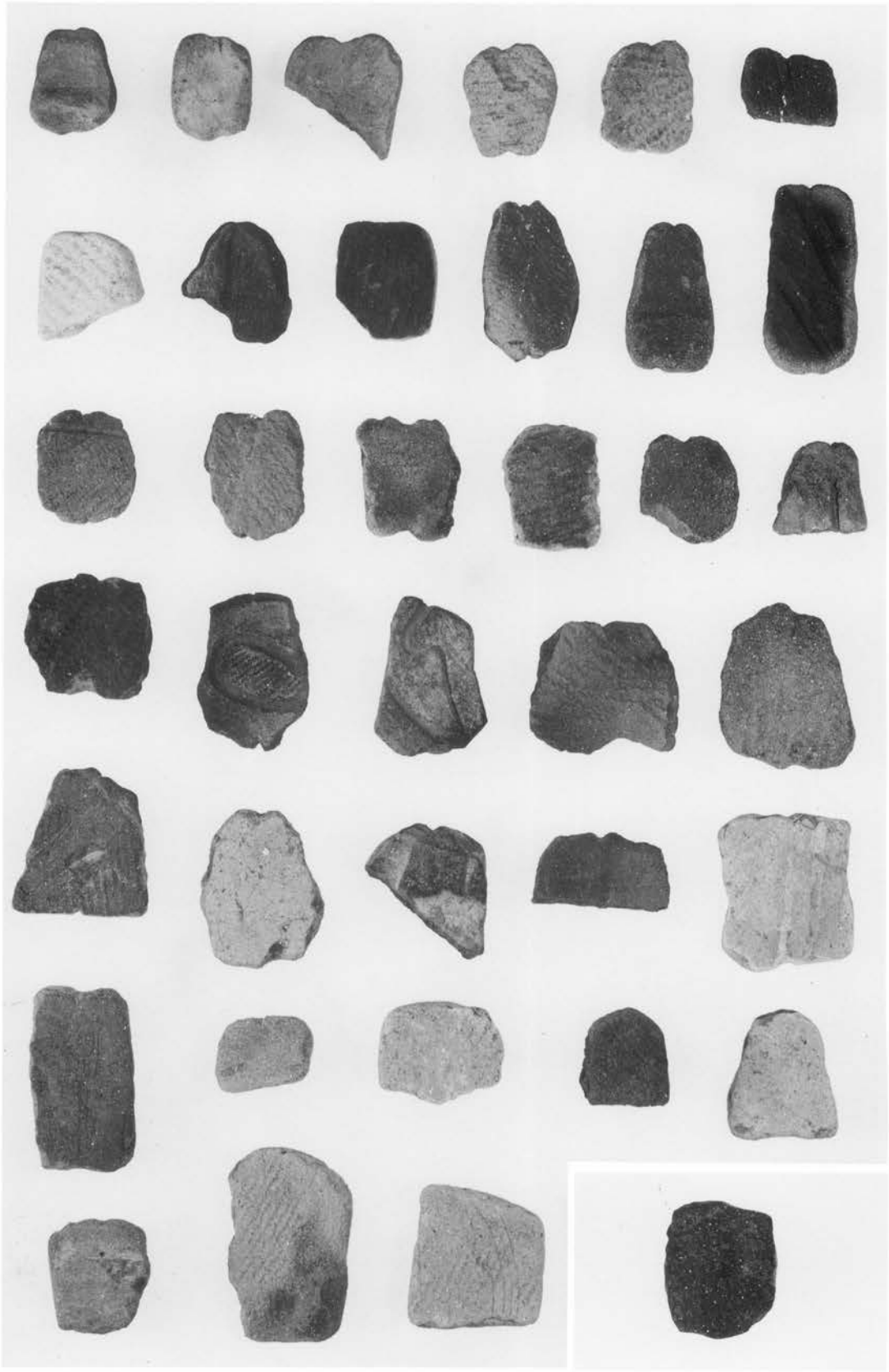


土製品

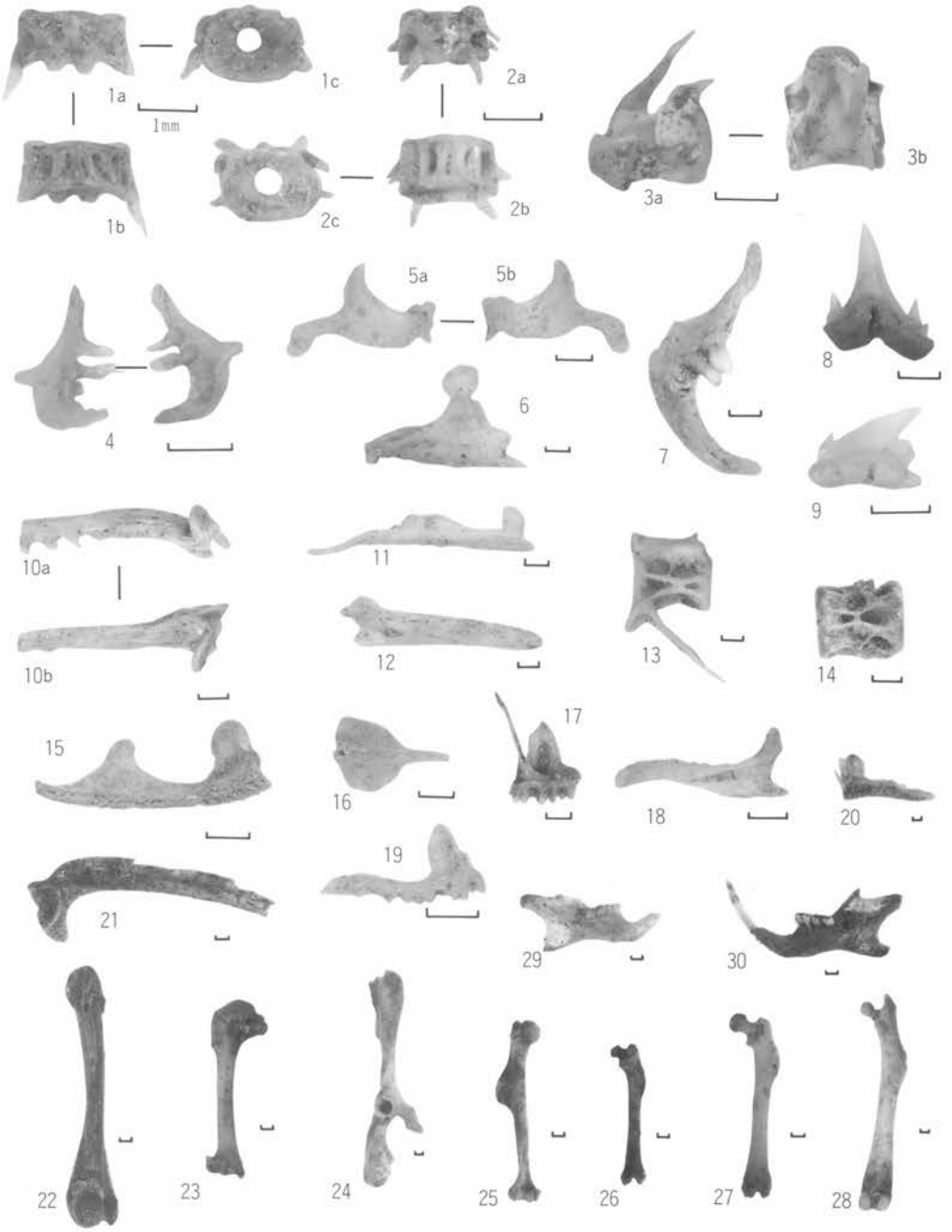


土製円板

図版 54　中台貝塚



土器片錘・板状土製品



1a：マイワシ第1脊椎背面，1b ：同腹面，1c ：同後面，2a ：マイワシ第2脊椎背面，2d：同腹面，2c：同後面，3a：カタクチイワシ第1脊椎側面，3b：同背面，4：タナゴ亜科種不明咽頭骨，5a：ギンブナ左上顎骨内側面，5b：同外側面，6：ギンブナ左歯骨，7：ギンブナ咽頭骨，8,9：サメ目遊離歯，10a：ギバチ左胸鰭棘，10b：同背面，11：ウナギ左上顎骨内側面，12：ウナギ左歯骨，13：ウナギ尾椎側面，14：ウナギ腹椎背面，15：スズキ属左前上顎骨内側面，16：アジ亜科稜鱗，17：マハゼ属左前上顎骨側面，18：マハゼ属右歯骨内側面，19：ハゼ科？右前上顎骨側面，20：真骨類種不明右前上顎骨内側面，21：ヤマアカガエル右寛骨，22：モリアオガエル右上腕骨，23：鳥綱？，24：齧歯目寛骨，25：齧歯目上腕骨，26~28：齧歯目大腿骨，29~30：カヤネズミ属？下顎骨

1	マガキ	*Crassostrea gigas* (Thunberg)	(×0.7)
2	イタボガキ？	*Ostrea denselamellosa* Lischke?	(×1)
3	フジノハナガイ	*Chion Semigranosus* (Dunker)	(×1.5)
4	ハマグリ	*Meretrix lusoria* Röding	(×1)
5	チョウセンハマグリ	*Meretrix lamarcki* Deshayes	(×1)
6	オキシジミ	*Cyclina sinensis* (Gmelin)	(×1)
7	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica* Prime	(×1)
8	ムラサキインコガイ	*Septifer (Mytilisepta) virgatus* (Wiegmann)	(×1)
9	ヒメイガイ	*Septifer (Mytilisepta) keenae* Nomura	(×1.5)
10	ウネナシトマヤガイ	*Trapezium (Neotrapezium) liratum* (Reeve)	(×1.5)
11	イボニシ	*Reishia clavigera* (Kuster)	(×1)
12	ツメタガイ	*Neverita (Glaussaulax) didyma* (Röding)	(×1)
13	ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum* (Lesson)	(×1)
14	クマノコガイ	*Chlorostoma xanthostigma* (A. Adams)	(×1)
15	クボガイ	*Chlorostoma argyrostoma lischkei* (Tapparone-Canefri)	(×1)
16	イシダタミガイ	*Monodonta labio confusa* Tapparone-Canefri	(×1)
17	ウミニナ	*Batillaria multiformis* (Lischke)	(×1)

出土貝類

図版 57　松尾東雲遺跡

松尾東雲・八田太田台遺跡航空写真（京葉測量K・K提供）

遺跡全景 (1)

遺跡全景 (2)

図版 59　八田太田台遺跡

調査前全景（北から）

検出遺構全景（北から）

調査前全景（南から）

検出遺構全景（南から）

図版 61　八田太田台遺跡

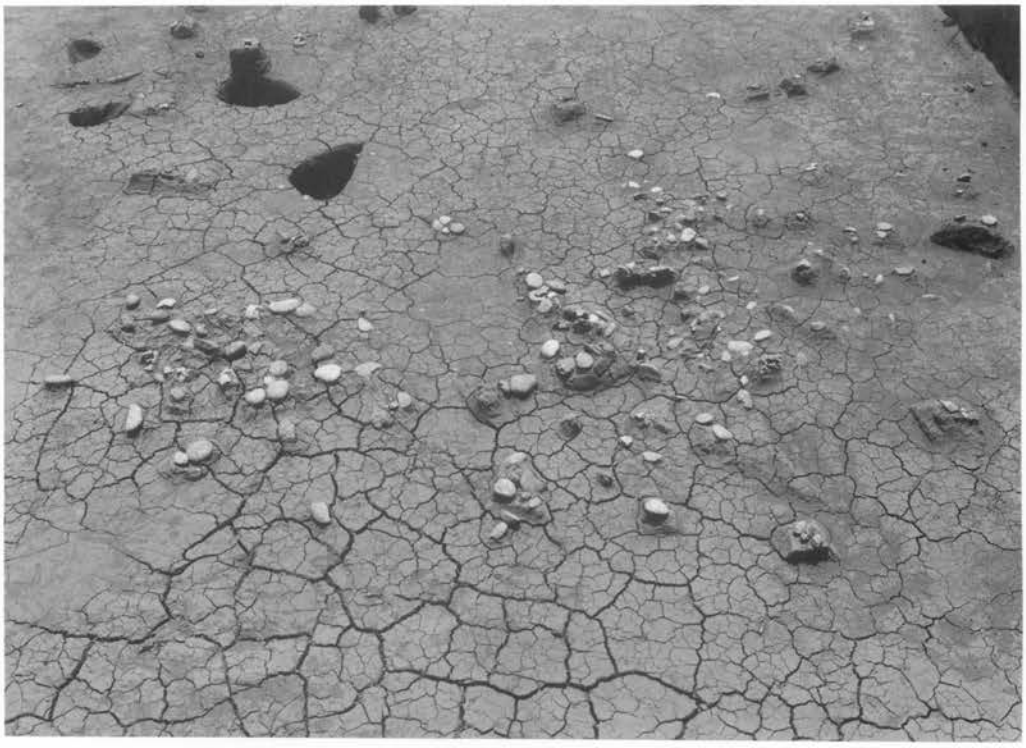
遺跡遠景（道路カット部分，南東から）

遺跡南東部支谷（北西から）

旧石器時代礫群出土状況

旧石器時代礫群出土状況

図版 63　八田太田台遺跡

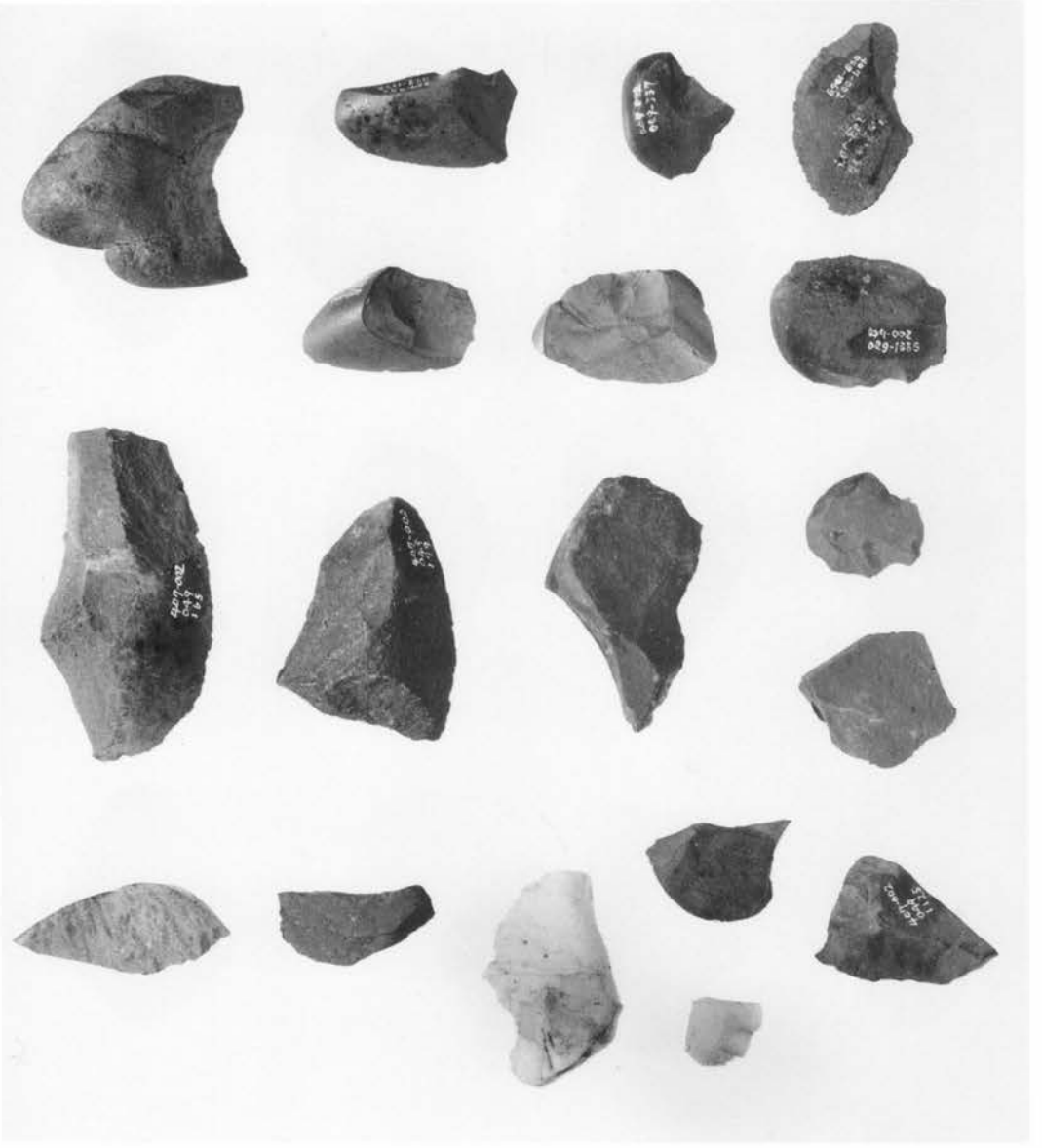


旧石器時代礫群出土状況

旧石器時代礫群出土状況

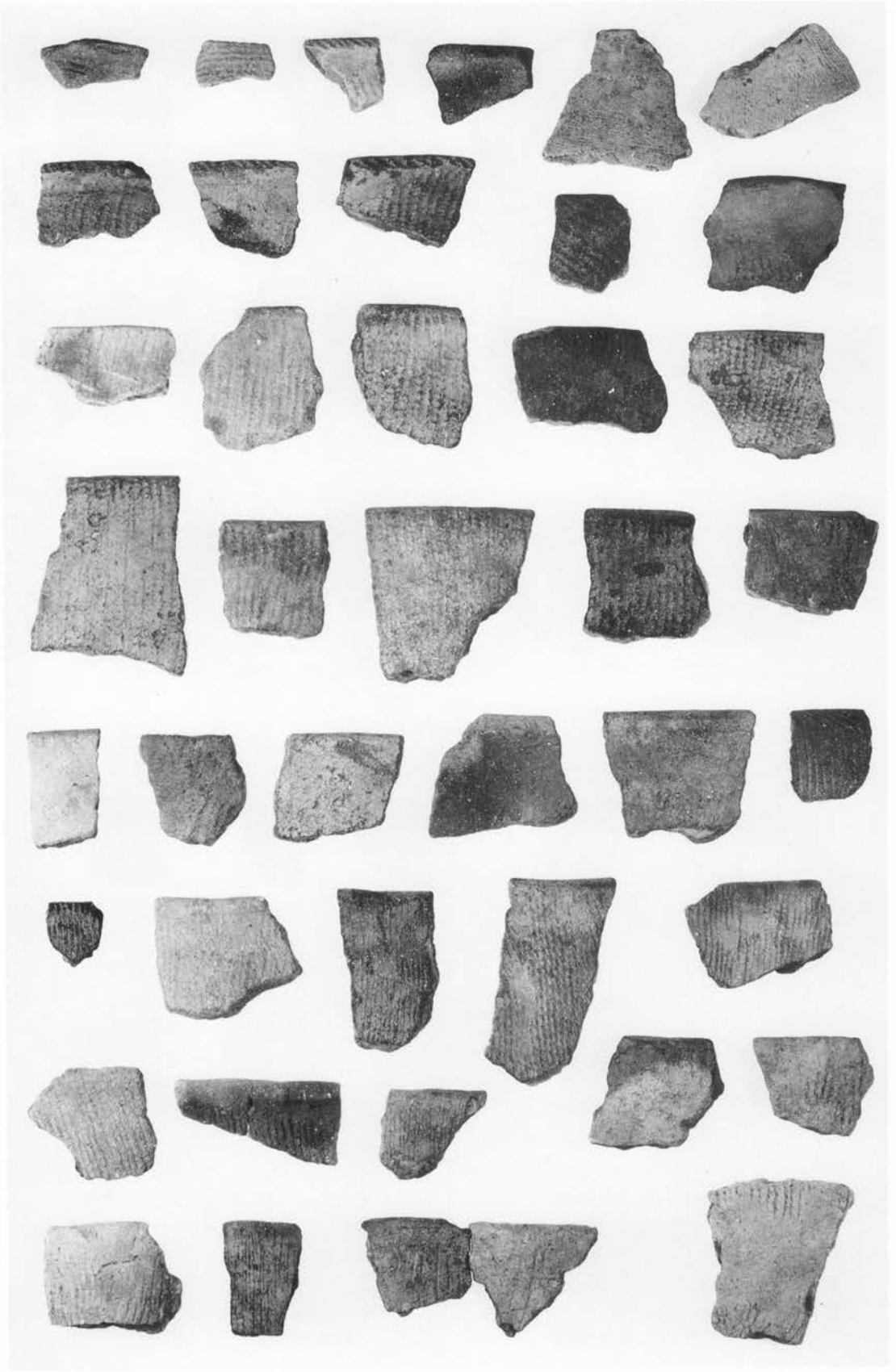
礫群出土石器 (1)

礫群出土石器 (2)

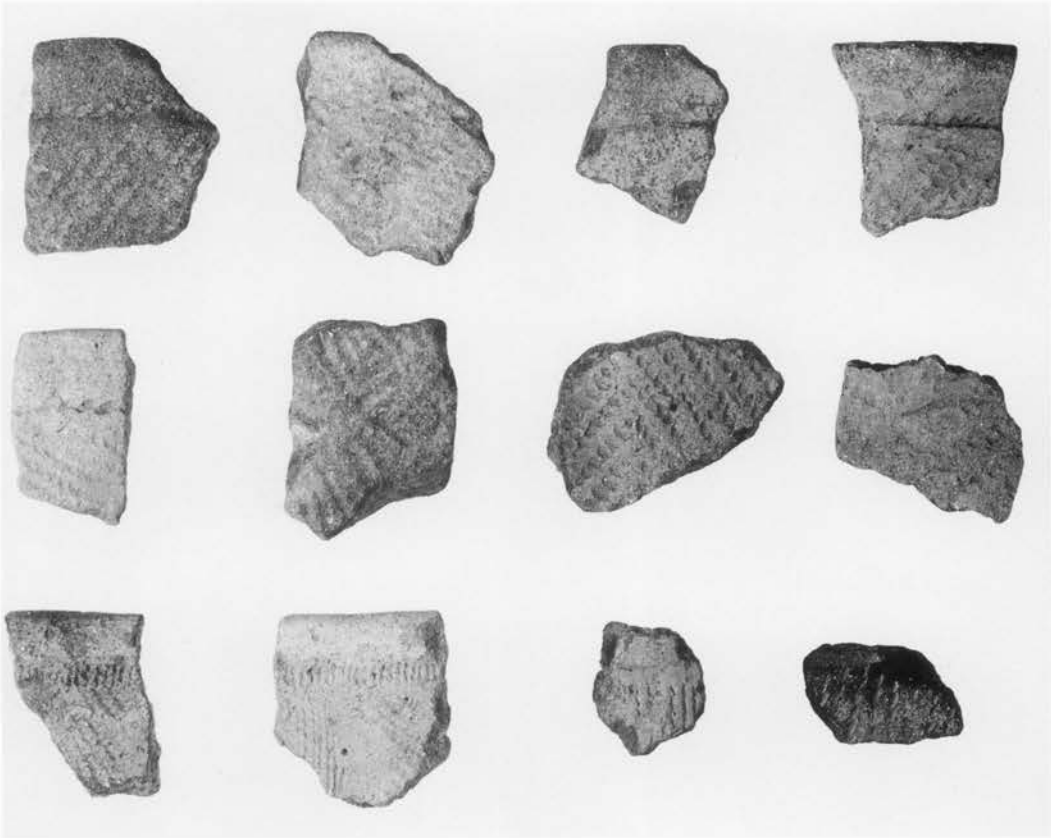


礫群出土石器 (3)

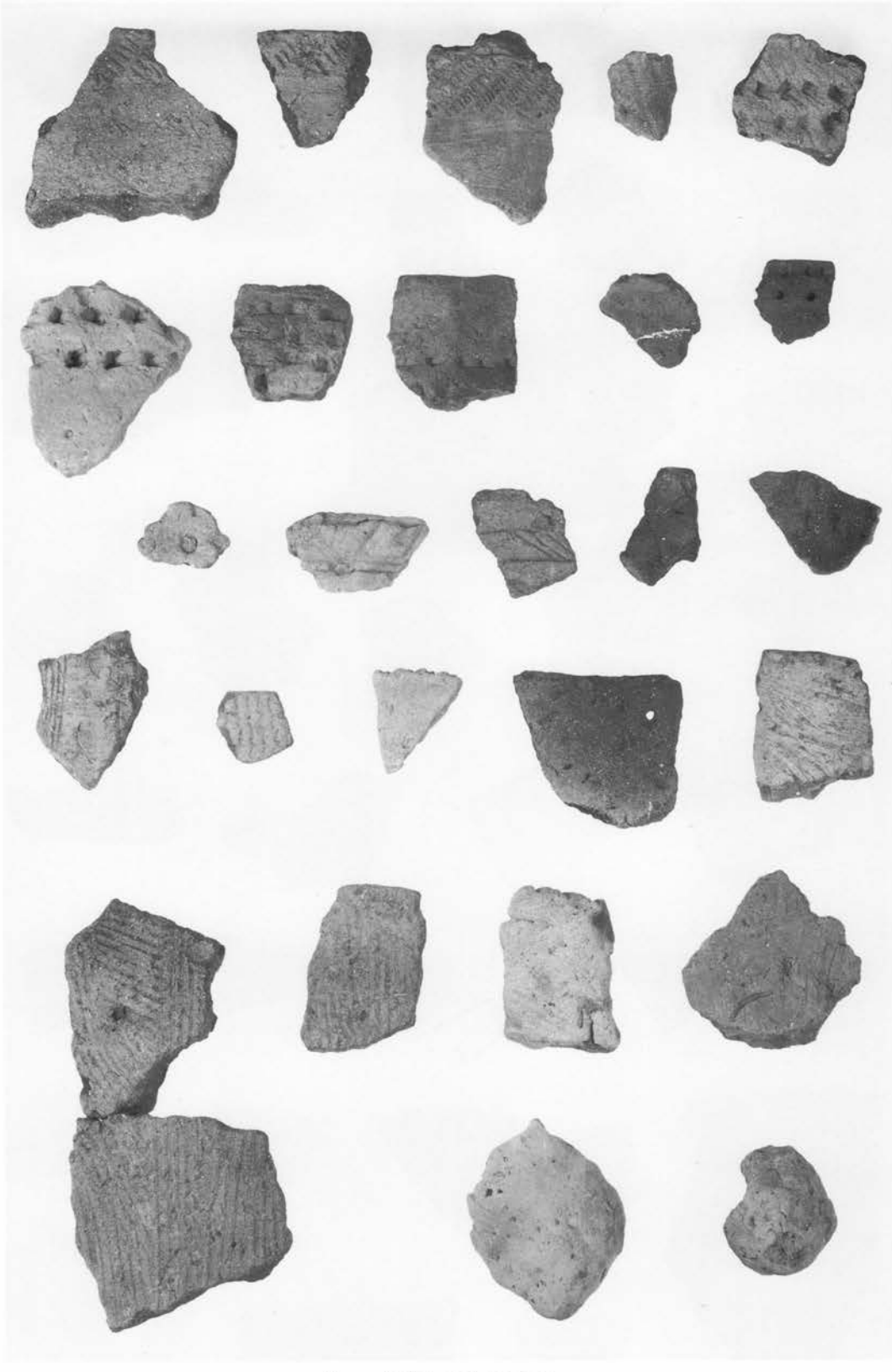
礫群出土石器 (4)，グリッド出土土製品



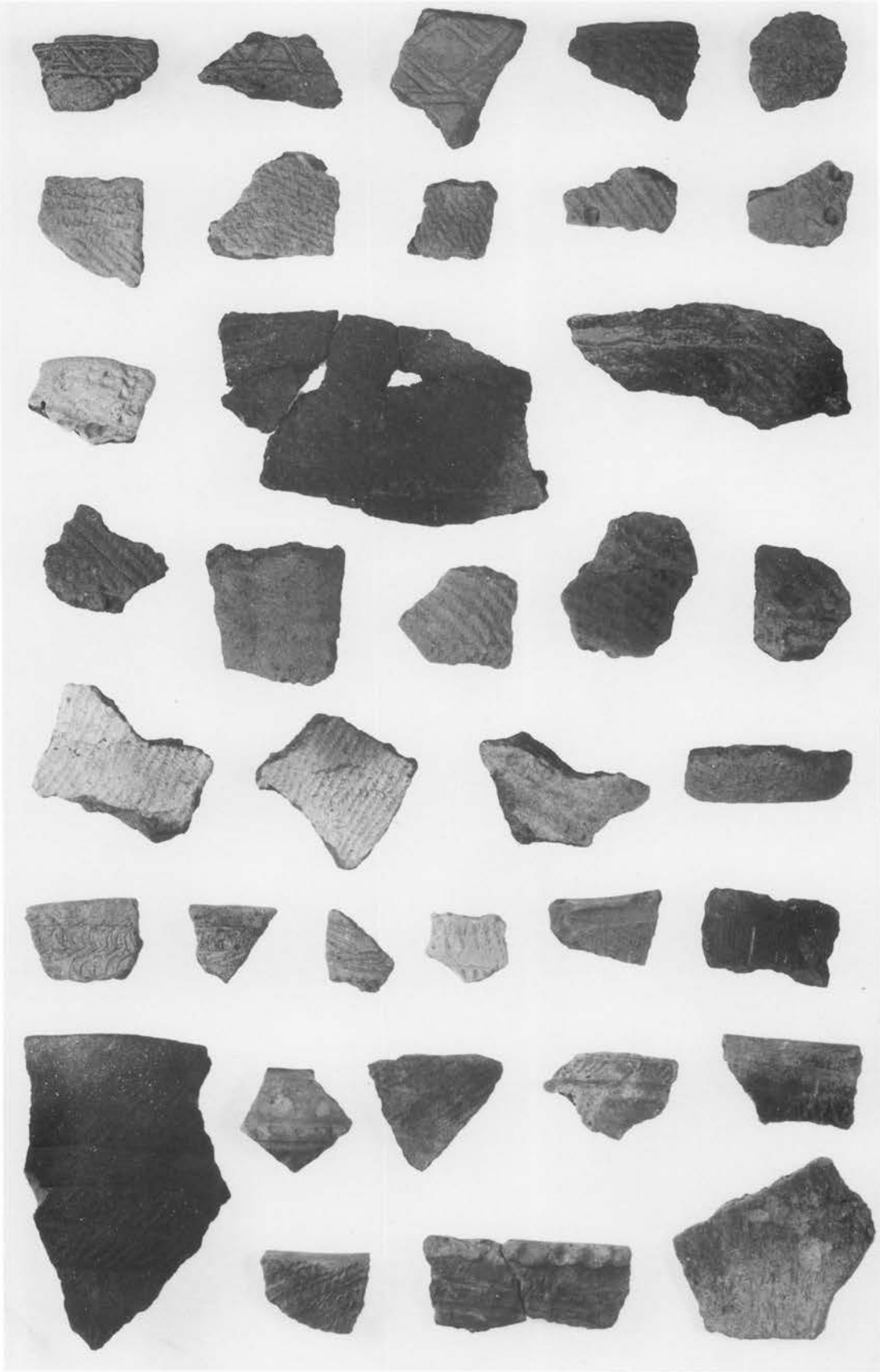
グリッド出土縄文土器 (1)



グリッド出土縄文土器 (2)



グリッド出土縄文土器 (3)



グリッド出土縄文土器 (4)

グリッド出土石器

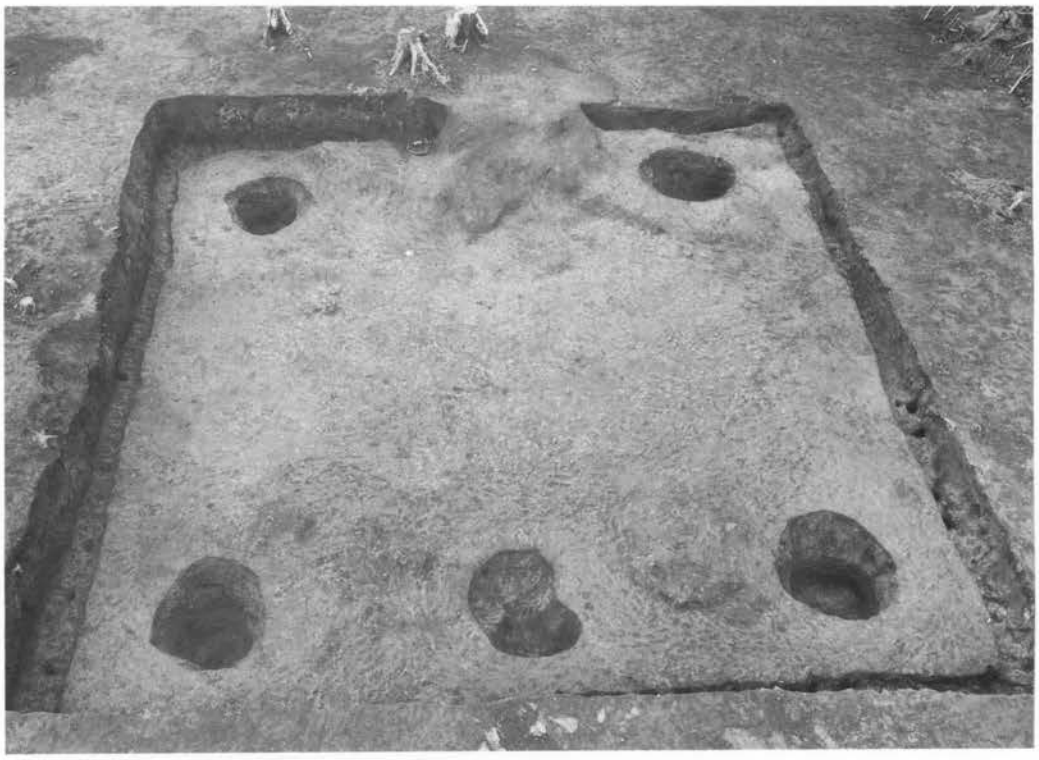
図版 73　八田太田台遺跡

第1テラス全景（北から）

第1テラス南ピット群

第1テラス全景（南から）

図版 75　八田太田台遺跡



001号址

002号址

001号址カマド

001号址

002号址カマド

002号址

図版 77　八田太田台遺跡

003号址

004号址

003号址カマド

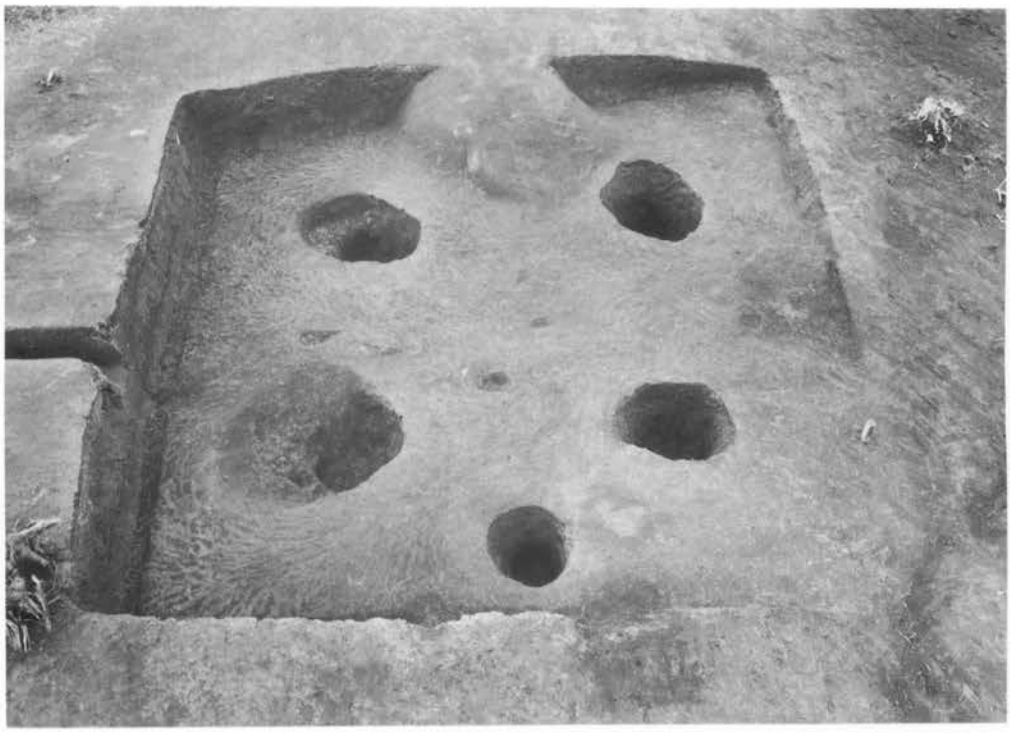
004号址カマド

005号址（左）

005号址カマド（上）

図版 79　八田太田台遺跡

006，012号址



008号址

006号址カマド

008号址カマド

012号址カマド

図版 81　八田太田台遺跡

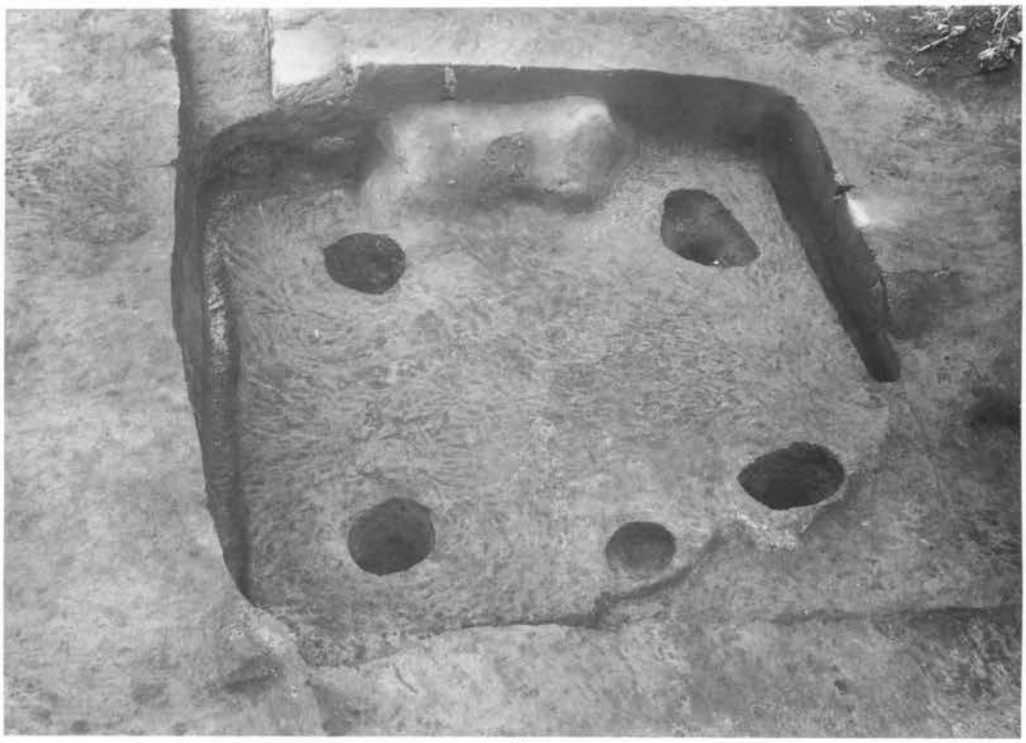
009号址

010, 011, 017号址

010号址カマド

011号址カマド

013号址



014号址

015号址遺物出土状況

014号址遺物出土状況

014号址カマド

015号址カマド

図版 85　八田太田台遺跡

016，021号址

018，019号址

018号址カマド

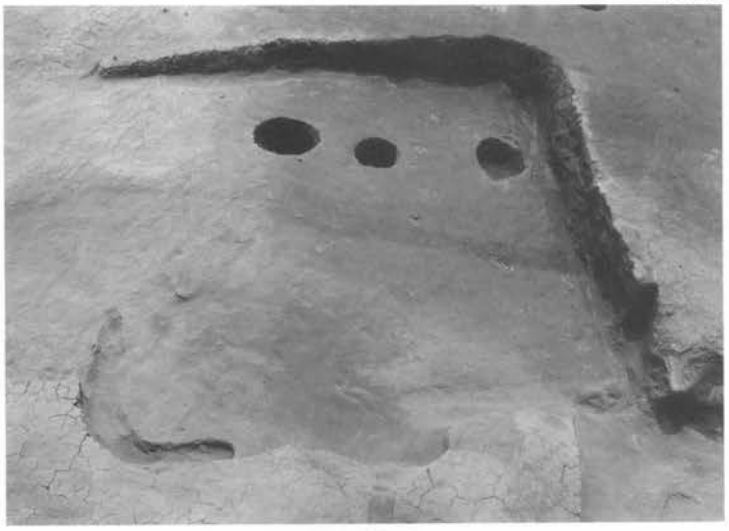
019号址カヤド

021号址カマド

図版 87　八田太田台遺跡

022, 023, 024, 026, 037号址

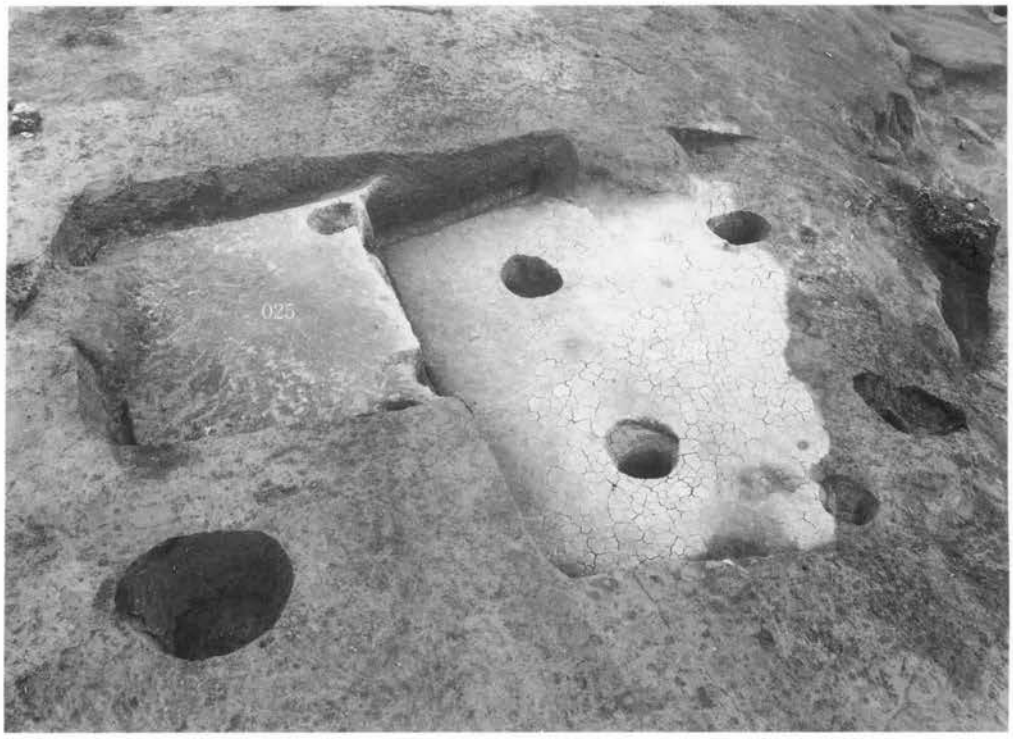
024号址カマド



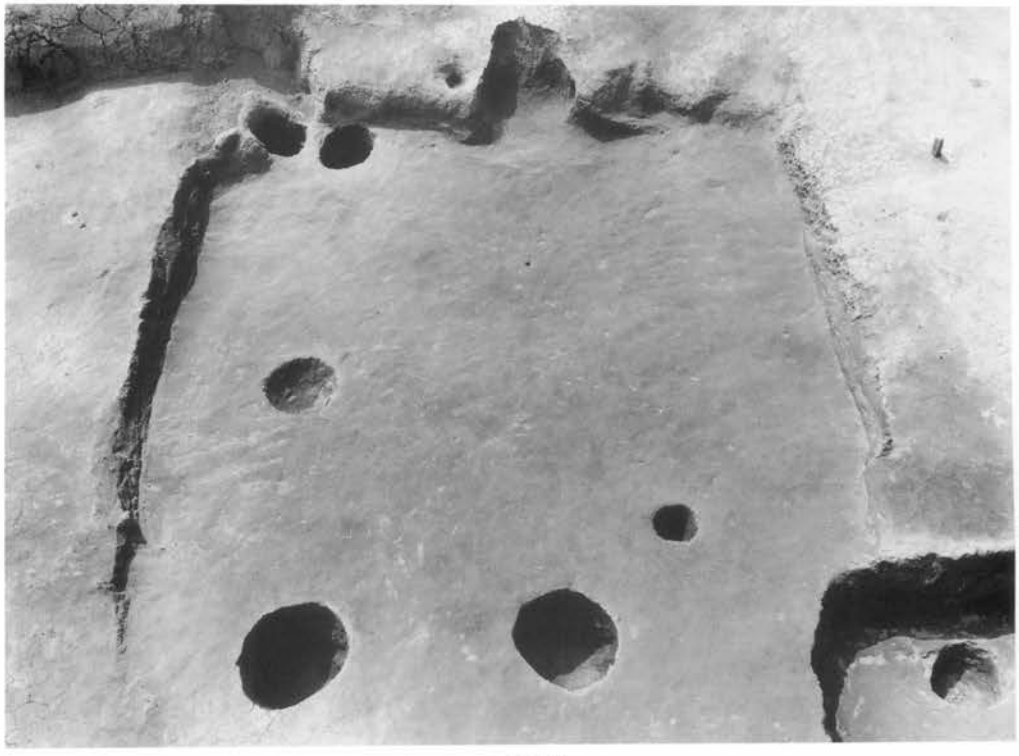
026号址

022, 023, 037号址

023, 024, 026, 037号址



025，031号址



027号址

025号址カマド

027号址カマド

031号址カマド

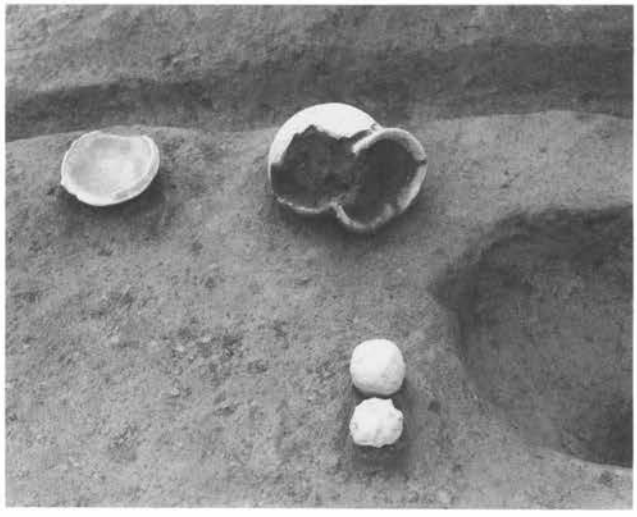
図版 91　八田太田台遺跡

008，028，029号址

032号址

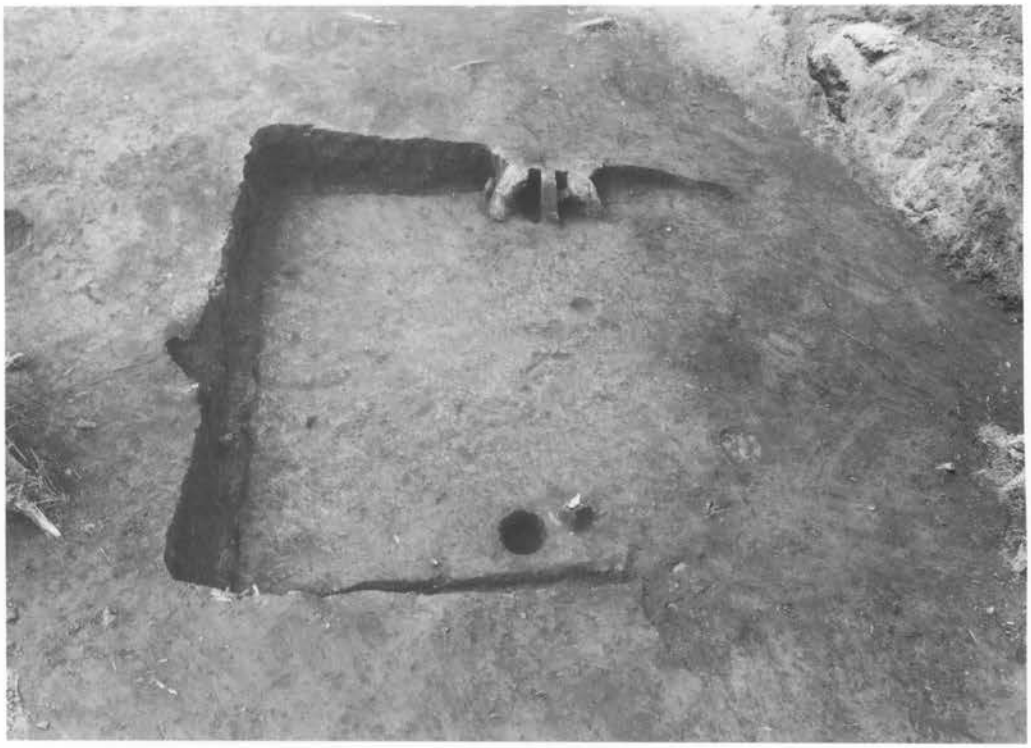
028号址カマド

029号址カマド



032号址遺物出土状況

033号址



034号址

033号址

034号址カマド

035号址遺物出土状況

図版 95　八田太田台遺跡

023，024，037号址

039号址

037号址カマド

039号址カマド

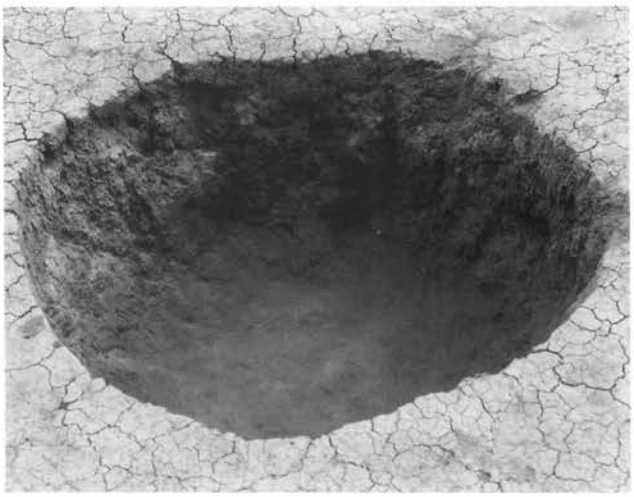
第２テラス調査風景

図版 97　八田太田台遺跡

047号址

048号址

007号址



041号址

040号址

051号址

048号址

1-1

1-4

1-5

1-7

1-10

1-14

1-11

1-9

1-16

遺構出土遺物（001号址）

3-1

3-2

3-5

3-9

3-3

3-4

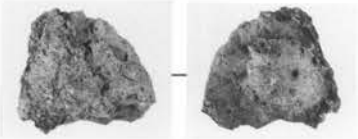
3-10

4-3

6-1

8-1

8-2


5

8-3

遺構出土遺物（003, 004, 006, 008号址）

図版 101　八田太田台遺跡

9-1

9-2

11-4

11-8

11-7

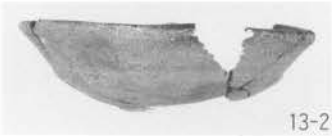
11-9

12-1

12-2

12-3

13-1


13-2

13-3

遺構出土遺物（009, 011, 012, 013号址）

14-1

14-2

14-3

14-4

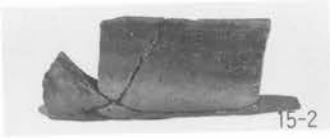
14-6

14-8

14-9

遺構出土遺物（014号址）

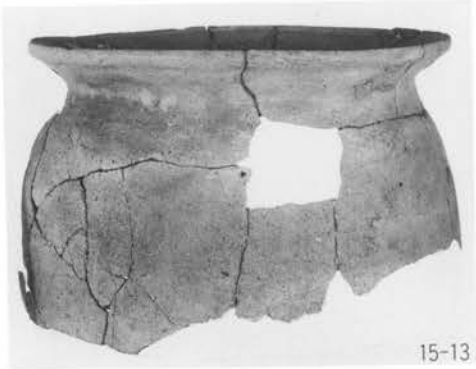
15-1


15-2

15-4

15-9

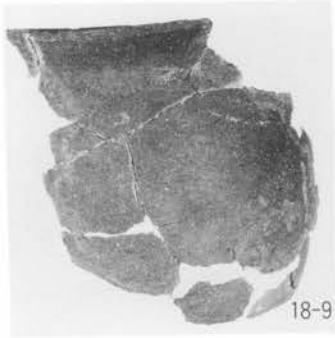
15-12


15-13

15-14

16-13

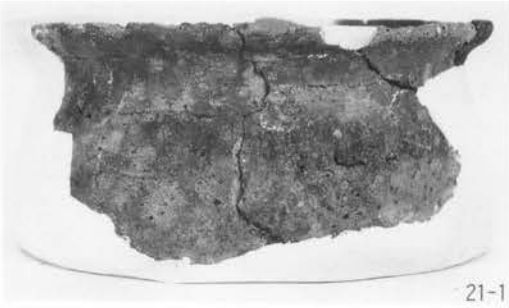
18-4


18-9

18-15

19-2

遺構出土遺物（015, 016, 018, 019号址）


21-1

21-2

22-1

22-3

22-9

22-12

22-11

22-13

22-10

遺構出土遺物（021，022号址）

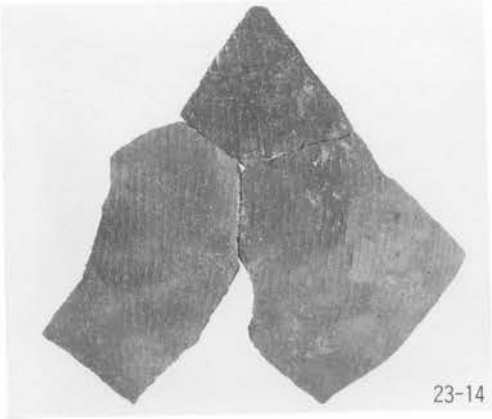
23-3

23-4

23-5

23-8

23-11


23-14

23-12

23-16

26-3

27-3

27-4

27-5

27-13

27-12

遺構出土遺物（023，026，027号址）

28-1

29-1

32-1

32-3

33-1

33-6

33-2

33-7

24-3

39

遺構出土遺物（028, 029, 032, 033, 034, 039号址）

B-2

C6-1

C6-4

C6-2

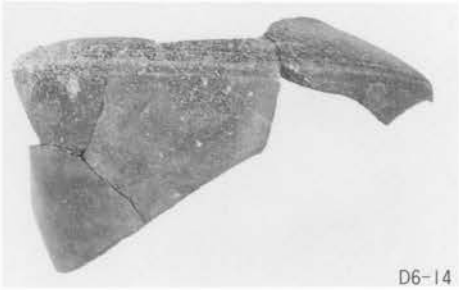
C6-5

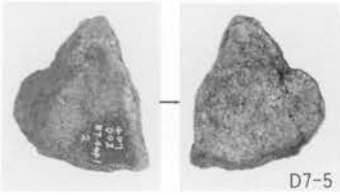
C6-3

C6-9

D6-1

D6-15


D6-14

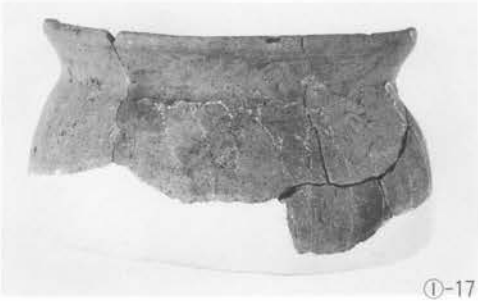

D7-5

グリッド出土遺物（B2，C6，D6，D7グリッド）

③-1

①-1

①-2


①-17

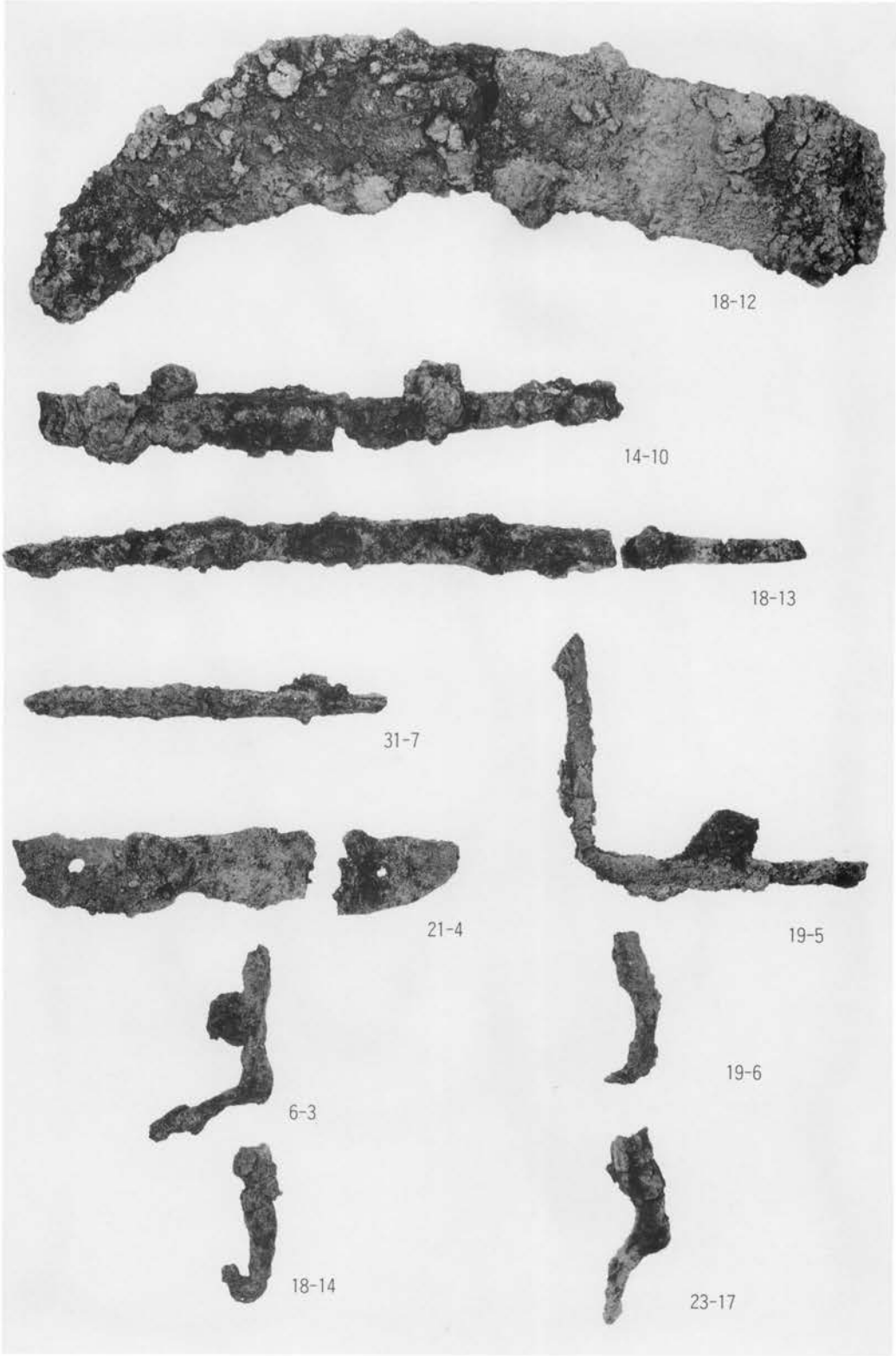
①-13

①-16

②-4

②-1

第２テラス出土遺物



遺構出土鉄器

昭和62年３月20日印刷
昭和62年３月31日発行

主要地方道成田松尾線Ⅴ
中台貝塚
松尾東雲遺跡
八田太田台遺跡

発行　千葉県土木部
千葉県千葉市市場町１－１
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市葛城２－10－１
印刷　有限会社　正文社
千葉県千葉市都町２－５－５

主要地方道成田松尾線Ⅴ　正誤表

頁	行	誤	正
例言	20行目	Ⅱ章2節	Ⅱ章1・2節
〃	20行目	3節2	3節2，Ⅴ章
〃	22行目	Ⅳ章1節，2節1－2	Ⅳ章1節，2節1－1
〃	24行目	Ⅳ章2節1－1・3	Ⅳ章2節1－2・3
27	30行目	(第32図7～8）は	(第32図7～8)の出土状況は，一括で取り上げているので
52	第2表15	時期：加曽利B	(出土土器の項へ)
53	等2表47	時期：称名寺	(出土土器の項へ)
54	第2表108	時期：堀之内Ⅰ 備考：堀之内Ⅰ式期以降	堀之内Ⅰ式期以降 (削除)
117	4行目	A類（第63図1～11・15）	A類(第63図1～11・15・第54図8)
118	15行目		(行頭追加)第54図8は胴下半部で，上位に横位沈線文がみられる。
124	3行目	第54図1・2・7，	第54図1・2・7・9，
〃	13行目	第54図8は	第54図9は
128	2行目	図版22・22・35	図版21・22・35
130	27行目	波線	沈線
137	12行目	第53図6・74・75図，	第53図6，第54図10，第74・75図，
139	13行目	16～19は，底径が小さく，16・17は卵形の	第54図10，第75図16～19は底径が小さく，卵形の
〃	14行目		(1行追加)第54図10は斜行沈線が施されている
182	13行目	20cm	20m
216	第10図	凡例：	(追加)　貝層
229	21行目	第七層まで	第6層まで
250	27行目	27・28 井草Ⅱ式に	27・28は井草Ⅱ式に
261	20行目	16は三角形を	17は三角形を
〃	21行目	17は不整方形を	16は不整方形を
264	第32表9	整形・調整：下位	下位ヘラケズリ
270	第34表1	整形・調整：外底面ロクロナデ， 回転ヘラ切り	外面　ロクロナデ，…… 底面　回転ヘラ切り
290	第42表2	器種：高坏	土師器高坏

<table>
<tr><th>頁</th><th>行</th><th>誤</th><th>正</th></tr>
<tr><td>296</td><td>第44表 5</td><td>出土層位：</td><td>（追加）　覆土</td></tr>
<tr><td>297</td><td>第44表10</td><td>器種：　坏</td><td>土師器坏</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>16行目</td><td>8　あるいは 5 に</td><td>8 はあるいは 5 に</td></tr>
<tr><td>300</td><td>第45表12</td><td>出土層位：床面やや浮き
床面やや浮き</td><td>床面やや浮き</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第45表13</td><td>出土層位：</td><td>（追加）　床面やや浮き</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>葉45表16</td><td>器種：無頭壺</td><td>無頸壺</td></tr>
<tr><td>306</td><td>第47表 3</td><td>整形・調整：摩耗のための</td><td>摩耗のため</td></tr>
<tr><td>314</td><td>第50表 1</td><td></td><td>（追加）
<table>
<tr><th rowspan="2">器種</th><th colspan="3">法　量</th><th rowspan="2">遺存度</th><th rowspan="2">胎土</th><th rowspan="2">色調</th><th rowspan="2">整　形　・　調　整</th><th rowspan="2">出土層位</th></tr>
<tr><th>器高</th><th>口径</th><th>底径</th></tr>
<tr><td>須恵器</td><td>2.0</td><td>(6.7)</td><td>(4.8)</td><td>約¼</td><td>良</td><td>灰青色</td><td>外面 体部ロクロナデ，底面 回転糸切り
内面 ロクロナデ</td><td>覆土</td></tr>
</table></td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第50表 2</td><td>器種：土師質須恵器</td><td>土師器</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第50表 3</td><td>整形・調整：（3 行目）</td><td>（一行追加）　内面　ロクロナデ</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第50表 4</td><td>器種：土師質須恵器</td><td>土師器</td></tr>
<tr><td>317</td><td>13行目</td><td>出土状況は12が</td><td>出土状況は 5 が</td></tr>
<tr><td>320</td><td>第52表 1</td><td>整形・調整：（3 行目）</td><td>（一行追加）　内面　ロクロナデ</td></tr>
<tr><td>331</td><td>第57表 1</td><td>胎土：粗悪な胎土</td><td>軟質な胎土</td></tr>
<tr><td>335</td><td>第59表 1</td><td>整形・調整：（3 行目）</td><td>（一行追加）　内面　ヘラナデ</td></tr>
<tr><td>338</td><td>第60表 2</td><td>遺存度：</td><td>（追加）　底部</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第60表 3</td><td>遺存度：</td><td>（追加）　胴部下位欠</td></tr>
<tr><td>345</td><td>5 行目</td><td>土師　坏</td><td>土師器坏</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>31行目</td><td>（第219　）</td><td>（第219図）</td></tr>
<tr><td>347</td><td>第61表 3</td><td>器種：土師器須恵器</td><td>土師質須恵器</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第61表 7</td><td>遺存度：砕片</td><td>細片</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第61表13</td><td>整形・調整：外面　体部</td><td>外面　口辺部ヨコナデ　体部</td></tr>
<tr><td>350</td><td>第65表 2</td><td>整形・調整：底部回車糸切り</td><td>底面回転糸切り後</td></tr>
<tr><td>〃</td><td>第65表 8</td><td>器種：　甕</td><td>土師器甕</td></tr>
<tr><td>355</td><td>第221図</td><td>凡例：8 C 第 3　007</td><td>8 C 第 3　009</td></tr>
<tr><td>356</td><td>8 行目</td><td>鬼高期の　034</td><td>鬼高期の005，034</td></tr>
<tr><td>図版15</td><td></td><td>105号土坑内貝屑</td><td>105号土坑内貝層</td></tr>
</table>